

糸井宮前遺跡 I

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第8集 —

1985

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

01-320
19
(5)

資料	(財)群馬県埋蔵文化財
	調査事業団保管
NO. 60-1229	昭和60年10月22日

河図と校

糸井宮前遺跡 I 正誤表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

ページ	行	誤	正
P 35	16行目	小量	少量
P 39	15行目	(14)	(13)
P 40	16行目	登(1)	【削 除】
P 53	3行目	10.5cm	10.5m
P 66	20行目	床直より	覆土中より
P 95	71住-1	床下	床上
P 141	43住-4	床直	覆土
P 223	26住-6	ピット内	カマド
P 274	第6 図	4号住	41号住
P 278	32行目	委員会	委員会 1981

糸井宮前遺跡 I

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第8集—

1985

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団



糸井宮前遺跡遠景

序

首都圏と新潟を結ぶ関越自動車道新潟線は、昭和60年度全線開通をめざして急ピッチで工事が進行しております。一方、関越自動車道の建設事業に伴って埋蔵文化財の発掘調査も各地域で行なわれ、地中に残された人々の歴史を記録として残してまいりました。

ここに報告します糸井宮前遺跡は、利根郡昭和村の片品川左岸段丘に立地しております。深い溪谷を示す片品川の対岸には沼田市々街、その背後には三峰山、武尊山など美しい山並みが一望できる、すぐれた景勝の地にあります。

糸井宮前遺跡では、縄文時代から古墳、平安時代にかけての多くの住居址を発掘調査し、この地方の集落研究を進める上で貴重な資料を得ることができました。

これらの資料は、縄文時代編と古墳時代以降編として2分冊とし、整理を進めてまいりました。今回、報告になる古墳時代以降編は利根、沼田地方の地域史を理解する上で注目される遺跡となることでしょう。

本報告書は、昭和58年度より2年計画で整理事業を進め、ここに関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告第8集として発刊する運びとなりました。

本報告書の刊行にあたっては、日本道路公団東京第二建設局沼田工事事務所を始めとして、昭和村教育委員会、発掘調査に直接携わった方々、そして整理作業を進めていただいた方々等から多方面にわたる関係者の御協力をいただきました。ここに厚く感謝の意を表すとともに、本報告書が学界はもちろんのこと、学校教育の場、ならびに一般の方々に広く活用していただくことを念じて序文といたします。

昭和60年3月26日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

- 1 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い事前調査された、利根郡昭和村大字糸井字大貫原・外原に所在する縄文時代前期、古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物を検出した糸井宮前遺跡の埋蔵文化財調査のうち古墳時代以降の出土文化財を中心とした報告書である。
- 2 事業主体 日本道路公団東京第二建設局
- 3 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査期間 試掘調査 昭和56年10月12日～昭和56年12月19日
発掘調査 昭和56年4月1日～昭和58年1月31日
- 5 調査組織
57
(1) 試掘調査 事務担当 小林起久治（常務理事）、沢井良之助（事務局長）、井上唯雄（調査研究部長）、近藤平志（庶務課長）、平野進一（調査研究第一課長）、国定 均（主事）、笠原秀樹（主事）、山本朋子（同左）、吉田有光（同左）、柳岡良宏（同左）、野島のぶ江、吉田恵子、並木綾子、今井もと子
調査担当 真下高幸（主任調査研究員）、小野和之（調査研究員）
(2) 発掘調査 事務担当 小林起久治（常務理事）、白石保三郎（事務局長）、松本浩一（調査研究部長）、近藤平志（庶務課長）、平野進一（調査研究第一課長）、国定 均（主事）、笠原秀樹（主事）、山本朋子（同左）、吉田有光（同左）、柳岡良宏（同左）、野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子
調査担当 石守 晃（調査研究員）、関根慎二（同左）、新倉明彦（同左）
- 6 整理期間 昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
- 7 整理組織 事務担当 小林起久治（常務理事〔昭和58年度〕）、白石保三郎（常務理事〔昭和59年度〕）、事務局長〔昭和58年度〕、梅沢重昭（事務局長）、大沢秋良（管理部長）、松本浩一（調査研究部長）、平野進一（調査研究第一課長）、定方隆史（調査員）、国定 均（主事）、笠原秀樹（主事）、山本朋子（同左）、吉田有光（同左）、柳岡良宏（同左）、野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子
整理担当 石守 晃、山口逸弘（調査研究員）
補助員 鈴木幹子、青木静江、高橋順子、為谷美貴子、木暮真由美、阿部由美子、篠原富子、高梨房江、安藤三枝子、桜井和江
保存処理 関 邦一、宮沢健二
写真撮影 佐藤元彦（遺物）、石守・関根・新倉（遺構）
- 8 本書の作成にあたっては、下記の各氏より御教示・御協力を頂いた。この他当事業団調査研究員諸氏の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）
石井克己、石北直樹、伊藤淳子、小笠原好彦、加部二生、黒岩文夫、黒沢はるみ、恋河地昭彦、坂口 一、坂本和俊、佐藤政則、志村 哲、塚本師也、都丸 肇、富沢敏久、外山政子、中山一司、能登 健、橋本博文、保坂雅美、水田 稔、茂木由行、山口重雄
- 9 本書の執筆者は次のとおりである。文責については文末に姓を記した。ただし第Ⅰ章～第Ⅲ章に関して

は、用語の統一を山口がしたため、最終的な文責は山口にある。土器観察表は、石守・山口が作成した。

第Ⅰ～Ⅲ章 石守・小野・関根・新倉・山口

第Ⅳ章 第3節 大江 正行（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

第4節 神谷 佳明（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

第6節 津金沢吉茂（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

第Ⅴ章 第1節 土器の胎土分析は花岡紘一氏（群馬県工業試験場）

第2節 炭化材の同定は三野紀雄氏（北海道開拓記念館）

両氏に分析を依頼し、玉稿を賜った。

10 第Ⅲ章 第4節の「陸軍糸之瀬廠舎跡」についての執筆にあたっては中山一司氏の御教示を賜った。

11 本遺跡の発掘調査においては、県教育委員会をはじめ日本道路公団、同沼田工事事務所、昭和村役場、昭和村教育委員会、地元関係者、関越自動車道建設工事関係者など、各方面の組織・個人の協力があつた。深く感謝の意を表したい。

12 本遺跡の発掘調査作業員は次のとおりである。（敬称略・五十音順）

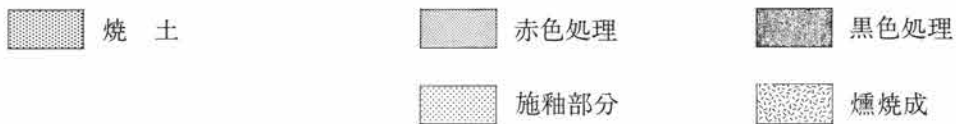
阿部ゆり江、荒井永子、荒井貞子、荒井幸子、荒井セツ子、荒井フミ、井口昌之、石井あつ江、石井なか、石田完治、石田富子、石田初江、稲村 治、入沢十三子、岩渕トシ、内川甲子郎、宇都宮洋一、生方綾子、江口てい、遠藤三枝子、大河原久子、大久保平治、大竹あや子、小田恒子、荻野博己、金井哲夫、金子 旭、金子まさ子、金子ひろ子、金子美代子、河合春子、春日たけ子、桑原秀治、小林 勇、小林とき、小林文英、小林みよ、後藤藤雄、斎藤千香、斎田菊野、佐子昭子、佐竹歌子、佐竹治郎、設楽雪子、島野あい、下城喜八郎、須郷栄子、鈴木源作、関根良子、曾田マサ江、反町あさ子、反町もと子、高塩きよ子、高橋一二子、高橋秀子、高橋フミヨ、高橋朝子、高橋亮子、高橋良助、武 儀八、武井岩夫、田村千代、角田湊平、角田安正、戸丸たけみ、戸丸たけ、都丸トミ子、戸沢みえ、戸部さい子、戸部富子、鳥山永子、鳥山りん子、南雲喜代子、中嶋千種、中嶋初江、中村みつ江、長岡きよの、永井希内、永井ツル、永井みつ子、羽鳥みつ、萩原絹子、端 京子、橋本とみ子、林 初江、林 さだ子、林 秀雄、原沢文江、平方長平、福田清子、藤井英子、星野妙子、牧野ふさ、松井すみ江、丸山けさえ、丸山なお、三浦誠治、三浦実、宮崎とし江、宮沢一太郎、宮下 勉、村田ノブ江、森川すみ江、八木沢温子、山田アサ子、山田ヨシコ、吉沢トシ

13 出土遺物は現在埋蔵文化財調査センターに保管している。

14 第3・6図は国土地理院発行の5万分の1地形図、沼田を転載した。

凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は、住居址 $\frac{1}{80}$ 、炉・カマド $\frac{1}{40}$ を原則とした。
- 2 遺構実測図中、出土遺物に付けられた数字は、遺物実測図の番号と一致する。またP₁・P₂はピットナンパーを表わす。断面基準線は海拔である。
- 3 方位は座標北である。
- 4 土器実測図は $\frac{1}{3}$ に統一した。他の遺物は不統一である。
- 5 出土遺物の観察は表組とした。
- 6 遺構写真図版の縮尺は任意である。遺物写真図版は小型のもの約 $\frac{1}{3}$ 、大型のもの約 $\frac{1}{5}$ ・ $\frac{1}{7}$ である。なお、墨書土器の拡大写真は赤外線写真であり、縮尺は任意である。
- 7 本書の記述は大まかな時期を設定し、その中で調査時に付した番号順で説明を行なった。
- 8 遺構・遺物挿図中のスクリーン・トーンは次のとおりである。



- 9 遺物実測図は例図のようにまとめた。



例 図

糸井宮前遺跡住居址通し番号一覧表

住居址番号	時 期	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図	遺物観察表
第1号住居址	平安時代	P. 151 第111図	P. 194・195 第153・154図	P. 218
第2号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第3号住居址	古墳時代前半	P. 13 第8図	P. 67 第58図	P. 84
第4号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第5号住居址	平安時代	P. 151 第112図	P. 195 第154図	P. 218・219
第6号住居址	不 明			
第7号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第8号住居址	不 明			
第9号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第10号住居址	古墳時代後半	P. 14 第9図		
第11号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第12号住居址	平安時代	P. 152 第113図		
第13号住居址	古墳時代前半	P. 14 第9図		
第14号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第15号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第16号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第17号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第18号住居址	平安時代	P. 153 第114図	P. 196 第155図	P. 219
第19号住居址	平安時代	P. 154 第115図	P. 196 第155図	P. 219
第20号住居址	平安時代	P. 155 第116図	P. 196・197 第155・156図	P. 219・220
第21号住居址	平安時代	P. 156 第117図	P. 198 第157図	P. 220
第22号住居址	平安時代	P. 157 第118図	P. 198 第157図	P. 220
第23号住居址	平安時代	P. 158 第119図	P. 198・199 第157・158図	P. 221
第24号住居址	平安時代	P. 159 第120図	P. 199 第158図	P. 221
第25号住居址	平安時代	P. 160～162 第121～123図	P. 199～201 第158～160図	P. 221・222
第26号住居址	平安時代	P. 163～165 第124～126図	P. 201・202 第160・161図	P. 223
第27号住居址	平安時代	P. 166・167 第127・128図	P. 203～205 第162～164図	P. 223・224
第28A号住居址変更	平安時代			
第28A号竪穴状遺構		P. 235 第182図		
第28B号住居址変更				
第28号住居址	古墳時代後半	P. 105・106 第76・77図	P. 123・124 第94・95図	P. 139
第29号住居址	平安時代	P. 168～170 第129・130図	P. 205 第164図	P. 224
第30号住居址	平安時代	P. 170・171 第131図	P. 205・206 第164・165図	P. 224・225
第31号住居址	平安時代	P. 172・173 第132・133図	P. 206 第165図	P. 225
第32号住居址	平安時代	P. 174～176 第134～136図	P. 206～209 第165～168図	P. 225・226
第33号住居址	平安時代	P. 178 第137図	P. 209・210 第168・169図	P. 227
第34号住居址	平安時代	P. 179 第138図	P. 211 第170図	P. 228
第35号住居址	平安時代	P. 180・181 第139・140図	P. 211・212 第170・171図	P. 228
第36号住居址	平安時代	P. 182・183 第141・142図		
第37号住居址	平安時代	P. 184・185 第143・144図	P. 212 第171図	P. 228
第38号住居址	古墳時代前半	P. 15～17 第10・11図	P. 67 第58図	P. 84
第39号住居址	古墳時代前半	P. 18 第12図	P. 67 第58図	P. 85
第40号住居址	古墳時代前半	P. 19・20 第13・14図	P. 68 第59図	P. 85
第41号住居址	古墳時代前半	P. 21・22 第15・16図	P. 68 第59図	P. 85
第42号住居址	古墳時代後半	P. 107～109 第78～80図	P. 124～127 第95～98図	P. 139～141
第43号住居址	古墳時代後半	P. 110・111 第81・82図	P. 128・129 第99・100図	P. 141・142
第44号住居址	古墳時代前半	P. 23・24 第17・18図	P. 68 第59図	P. 85・86
第45号住居址	古墳時代後半	P. 112～114 第83～85図	P. 129～133 第100～104図	P. 142～144
第46号住居址	古墳時代前半	P. 25・26 第19・20図	P. 69 第60図	P. 86・87
第47号住居址	古墳時代前半	P. 27 第21図	P. 69 第60図	P. 87
第48号住居址	古墳時代前半	P. 28・29 第22・23図	P. 70 第61図	P. 87・88
第49号住居址	古墳時代前半	P. 30～32 第24・25図	P. 71 第62図	P. 88
第50号住居址	古墳時代前半	P. 33 第26図	P. 71 第62図	P. 89
第51号住居址	古墳時代前半	P. 34・35 第27図	P. 72 第63図	P. 89
第52号住居址	古墳時代前半	P. 36・37 第28図・29図	P. 72 第63図	P. 89

住居址番号	時 期	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図	遺物観察表
第53号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第54号住居址	古墳時代前半	P. 38・39	第30・31図	P. 72・73 第63・64図
第55号住居址	古墳時代後半	P. 115・116	第86・87図	P. 133 第104図
第56号住居址	古墳時代前半	P. 40	第32図	P. 74 第65図
第57号住居址	古墳時代前半	P. 41・42	第33・34図	P. 74 第65図
第58号住居址	古墳時代前半	P. 43・44	第35・36図	P. 75 第66図
第59号住居址	古墳時代前半	P. 45・46	第37・38図	P. 75 第66図
第60号住居址	古墳時代後半	P. 117・118	第88・89図	P. 134・135 第105・106図
第61号住居址	古墳時代前半	P. 47	第39図	P. 76 第67図
第62号住居址	古墳時代前半	P. 48・49	第40・41図	P. 76 第67図
第63号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第64号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第65号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第66a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第67号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第68号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第69号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第70号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第71号住居址	古墳時代前半	P. 50	第42図	P. 77 第68図
第72号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第73号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第74号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第75a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第76号住居址	古墳時代前半	P. 51	第43図	P. 77 第68図
第77号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第78a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第79号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第80号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第81号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第82号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第83号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第84号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第85号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第86号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第87号住居址	古墳時代前半	P. 52	第44図	P. 78 第69図
第88号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第89号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第90号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第91号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第92号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第93号住居址	古墳時代前半	P. 53	第45図	
第94号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第95号住居址	平安時代	P. 185～187	第145・146図	P. 212・213 第171・172図
第96号住居址	平安時代	P. 188・189	第147・148図	P. 213 第172図
第97号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第98a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第99a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第100号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第101号住居址	古墳時代前半	P. 54	第46図	P. 78 第69図
第102号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第103号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第104号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第105号住居址	古墳時代前半	P. 55	第47図	P. 78 第69図
第106号住居址	平安時代	P. 190・191	第149・150図	P. 214 第173図
第107号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第108号住居址	古墳時代前半	P. 56・57	第48・49図	P. 79 第70図
第109号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第110a・b号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告
第111号住居址	縄文時代前期		次 回	報 告

住居址番号	時 期	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図	遺物観察表
第112号住居址	古墳時代前半	P. 58 第50図	P. 79 第70図	P. 98
第113号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第114号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第115a・b号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第116号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第117号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第118号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第119号住居址	古墳時代前半	P. 59 第51図	P. 79 第70図	P. 98
第120号住居址	古墳時代後半	P. 119・120 第90・91図	P. 136・137 第107・108図	P. 146・147
第121a・b号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第122号住居址	平安時代	P. 192・193 第151・152図	P. 215・216 第174・175図	P. 230・231
第123号住居址	古墳時代前半	P. 60・61 第52・53図	P. 80 第71図	P. 99
第124号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第125号住居址	古墳時代前半	P. 62・63 第54・55図	P. 80・81 第71・72図	P. 99～101
第126号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第127号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第128号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第129号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第130A・B号住居址	古墳時代後半	P. 121・122 第92・93図	P. 138 第109図	P. 147
第131a・b号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第132a・b号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第133号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第134号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第135号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第136号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第137号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第138号住居址	古墳時代前半	P. 64 第56図	報 告	
第139号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第140号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第141号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第142号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第143号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第144号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第145号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第146号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第147号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第148号住居址	古墳時代前半	P. 65・66 第57図	P. 82 第73図	P. 101
第149a・b号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第150号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第151号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第152号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第153号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	
第154号住居址	縄文時代前期	次 回	報 告	

目 次

序	
例 言	
凡 例	
遺構一覧表	
第I章 調査の経過	1
第1節 試掘調査に至る経過	1
第2節 試掘調査の概要	2
第3節 本調査の経過	3
第4節 調査の方法	4
第II章 遺跡の環境	5
第1節 自然環境	5
第2節 基本土層	6
第3節 周辺の遺跡	7
第III章 検出された遺構と遺物	11
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物	11
第2節 古墳時代後半の遺構と遺物	104
第3節 平安時代の遺構と遺物	149
第4節 その他の遺構	232
第IV章 成果と問題点	259
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物について	259
第2節 古墳時代後半の出土土器について	265
第3節 出土古瓦について	268
第4節 平安時代の土器について	269
第5節 古墳時代前半の竪穴住居址の掘り方について	273
第6節 第32号住居址の礎石について	274
第7節 小型ピットについて	275
第V章 化学分析	279
1 糸井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析	279
2 炭化した木材片の樹種同定	285

いと い みや まえ
糸井宮前遺跡 I

(利根郡昭和村糸井字大貫原・外原)

第I章 調査の経過

第1節 試掘調査に至る経過

糸井宮前遺跡における埋蔵文化財の調査は、関越自動車道建設に伴う事前調査である。関越自動車道は正式名称を「関越自動車道新潟線」（以下「関越道」）と呼び、「関越自動車道建設法」によって建設が企画された高速自動車道である。その後関越道は、「国土開発幹線自動車道建設法」による幹線自動車道として、練馬（東京都）一川越（埼玉県）間が昭和48年8月に供用が始められたのを皮切りに、現在、練馬一前橋（群馬県）間及び新潟一六日町（新潟県）が供用されている。

関越道が本県を通過する路線の中で昭和村通過部分は、昭和45年6月に決定された「国土開発幹線自動車建設法」第5条第1項による「第4次基本計画」に含まれるものである。翌46年6月、「高速自動車国道法」第5条第1項及び同2項に基づき「第5次整備計画」が定められ、これに伴い「道路整備特別措置法」第2条の3による施工命令が、建設大臣より日本道路公団（以下「公団」）に下された。関越道の中でその対象となったのは、本県では渋川一月夜野間である。

群馬県教育委員会（以下「県教委」）では係る基本計画を受け、「文化財保護の上に必要な資料を得る」ため、分布調査を実施することになった。この調査は昭和46年6月から昭和47年3月にかけて実施され、予測される路線及びこれを中心とする幅4kmの周辺地域に455カ所の遺跡を確認している。このうち糸井宮前遺跡はNo.377に登録された縄文時代の埋蔵文化財包蔵地の一部に該当される。尚、No.377に遺跡名は付されていない。

昭和47年6月発表の第6次整備計画によって月夜野一湯沢間の施工命令が公団に下されたが、これによって県教委では、昭和48年4月から7月にかけて関連公共事業調査として、渋川一月夜野間の予定路線部分の幅300mの区域について遺物分布調査を実施している。この調査によって、対象地域に39カ所の遺跡が確認され、本遺跡は調査番号No.19に縄文・弥生及び古墳時代の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。しかし、このNo.19の範囲は、糸井宮前遺跡及び河岸段丘で一段下位にある小高神社前（宮の前）遺跡を含むものである。これはこの時点で、昭和村糸井地区の遺跡が今日の中棚遺跡以南のもの、小高神社前遺跡を中心とする遺跡群の2ブロックとして大別し、検討されていたためである。

続く昭和49年1月に渋川一月夜野間の正式路線が発表された。その後、昭和53年5月に至って県教委と公団東京第二建設局は協議を行ない、関越道建設に伴う事前調査の執行が合意された。この合意により、糸井宮前遺跡における埋蔵文化財の発掘調査が具体化することとなる。県教委はこの合意事項に鑑み、その事業遂行の円滑化を計るため、昭和53年4月から5月にかけて当該路線部分について見直しの分布調査を実施している。この結果、勢多郡北橋村以北の1市2町3村で44遺跡49カ所が調査対象地域として登録されたのである。昭和村糸井地区の上述の2ブロックの遺跡群は、「糸井遺跡」と「糸井宮前遺跡」という事業名称によってこの分布調査が行なわれた。遺跡の範囲は前者が大字糸井字中棚、後者は大字糸井字大貫原・外原の地域に限定され、糸井宮前遺跡は登録番号No.12の縄文時代の埋蔵文化財包蔵地として登録された。また、遺跡名称も「糸井宮前遺跡」が継続して用いられることになった。遺跡の略号は「KK34」が付された。

昭和54年に入って、県教委は勢多郡北橋村以北の関越道地内の埋蔵文化財試掘調査を（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託し、ここに事業団による本遺跡の調査が事業化したのである。（石守）

第I章 調査の経過

第2節 試掘調査の概要

日本道路公団との協議により、本調査範囲確定のための試掘調査を昭和56年10月12日より実施した。

調査方法は、基本的に幅1.5m、長さ7.5mの大きさのトレンチ調査とし、調査区を山寄りから路線進行方向にA～Fの6区域に分け、さらにその中を20m四方のグリッドで分割し、それぞれの交点毎に、縦または横方向にトレンチを調査区のほぼ全域に配した。当初、図面上で設定したトレンチ総数は102本であったが、道路敷、住宅地部分など調査できなかったものもあり、実際の調査本数は76本である。

各トレンチは、第VIII層上面までの掘り下げを基本として調査を行なったが、谷地部分などの堆積土が厚く、崩落の危険がある場合には確認のみの掘り下げにとどまった。

試掘調査は、旧地形の復元(ローム面および榛名山二ツ岳降下軽石面)、各遺構の時期、および種類、遺構の掘り込みの深さ、遺存状況等、そして遺跡の範囲の限界を確認することを主眼として、できる限りデータを得る目的で行なった。

当初から、遺跡の範囲は路線の両側に広がっていることは予想されていたので、対象地域内で段丘の縁辺部への広がりや山寄り部分での範囲確認に重点を置いた。

調査方法としては、旧地形を復元推定する意味で、調査区中央のグリッド線に沿って、トレンチ長辺方向、それらと直交する線で100mごとに土層の観察記録を行なった。

この結果、ローム面での地形は北東から南西方向へ向かって緩やかな傾斜を示し、最も落ち込む場所では、地表から約4mとかなり下がっている状況を認めることができた。

この落ち込んだ谷地は、遺跡の所在する段丘の山際を廻って、東から西へ段丘を斜めに走っており、埋土に砂礫層を含むことが確認され、水の影響による土砂の流出が認められた。いわゆる埋没谷である。この谷地は、現状ではほぼ完全に埋没が終了しており、ゆるやかな凹地としてその痕跡を見せているのみである。

遺跡は、赤城山より延びた裾が、片品川による侵蝕で形成された5段の段丘面の3段目に位置している。

現在の地目は畑であるが、第2次大戦中兵舎用地として使用されており、道路などはかなり区画整理され、部分的にはかなりの削平を受けている所もある。遺構の保存状態は、削平を受けている所を除けば比較的良好と思われる、特に軽石層下については上からの攪乱等が及んでおらず、良好な状況で検出されることが予想された。

各トレンチで確認した基本的層位は、第I層・表土、第II層・黒褐色砂質土、第III層・B軽石純層、第IV層・黒色砂質土、第V層・F・P純層、第VI層・黒褐色粘質土、第VII層・ローム漸移層、第VIII層・ローム層である。この層位も場所によってかなりの変化がみられ、山寄りのトレンチでは表土が厚く段丘縁辺に行く程ロームまでの堆積土は薄くなる傾向が認められた。

検出した遺構は縄文時代前期の住居址・土坑、古墳時代の住居址、平安時代の住居址・土坑であった。縄文時代の遺構は第VII層から、古墳時代の遺構は第VI層、平安時代の遺構は第IV層から掘り込みF・P層を掘り抜いていることが確認された。古墳時代については前期および後期の遺構があることを確認したが、両者の掘り込み面での差異は認めることはできなかった。

以上の結果により、遺跡は段丘上縁辺にまで延びているが、山寄りに関してはかなり急傾斜であり、現在でも土砂の流出が見られる。調査によっても、遺構・遺物は見られなかった。また前述した谷地部分についても遺構の存在は無く、遺跡の限界と見られ、A～C区についてはこの部分に当たるために、本調査範囲から除外した。

(小野)

第3節 本調査の経過

4月1日 糸井宮前遺跡の発掘担当者が決定される。これより、4月24日まで現場下見、現場事務所の設定、作業員の募集説明会、重機等の手配などを行ない発掘に係る準備を終了させた。

4月26日 本日より重機による表土剥ぎを始める。試掘のデータから平安時代の遺構を確認するため、F・P上面まで掘り下げる。

4月27日 作業員が本日より調査に入る。重機による表土剥ぎが終了した所からF・P面の調査を行ない遺構の確認を始め、およそ一週間ほど遺構の確認作業をする。

5月6日 平安時代の住居、中近世のピット群や溝が検出され、ほぼF・P面での遺構確認が終り遺構の発掘調査及び遺構測量を行う。発掘作業が未経験の作業員がほとんどで、遺構の発掘、図面測量と始めは手間取ったがしだいに仕事に慣れて作業のペースも早くなった。F・P面の調査は、7月末日まで行われた。

7月9日 平安時代遺構面の航空写真撮影をラジコン飛行機にて行う。

7月13日 F・P面遺構が図面作成を残してほぼ終了したため重機によるF・Pの掘削を始める。これにより古墳時代前半の遺構確認、調査に入る。10月までかかる。

8月1日 昨夜来の豪雨と突風により現場事務所のテントとブレハブの窓ガラスが破損する。また現場では、発掘中の住居が数軒泥により埋没した。

9月13日 台風による豪雨で、片品川寄りの崖が崩壊し下の段の人家近くまで流れ出す。このため、事業団、道路公団、建設会社の三者で発掘調査、工事等の検討をする。その結果崖に雨水等が流れ出さないために手前に土盛りをする事になる。

9月15日 F・P下面の古墳時代遺構の航空写真撮影をする。

9月21日 高速道路工事の関係で迂回路部分の調査を9月30日まで行う。縄文時代住居、土坑等を他の部分に先がけて調査する。

10月1日 重機による3回目の掘り下げに入る。今回は縄文時代遺構検出のためソフトロームまで下げ、遺構検出された所から漸次遺構の調査にかかった。

10月26日 調査区のうちE区西南すみを工事のため道路公団に明け渡す。

11月5日 D・E区の一部を工事の都合で明け渡す。このころになると現場の切り渡しが多くなる。

12月18・19日 18日午後から現地説明会を行う。事前に新聞等で発表したせいか、交通の不便な所にもかかわらず、2日間で300名の見学者があった。

12月21日 県教育委員会文化財保護課と現場の進行について協議する。本年中に現場終了が困難なため、来年1月まで延期する事になる。

12月26日 本日は朝から雪が降るにもかかわらず、屋外で作業するが降雪が激しくなったため10時に作業を中止する。この頃から雪の降る日が多くなり発掘の進行が遅れがちになる。

12月28日 本年の発掘は今日で終る。調査の残った部分は1月からに期待する。

1月5日 本日より調査再開。

1月24日 昨夜の雪がまだ残る中、ラジコンによる航空写真撮影をする。

1月26日 現場の一部を道路公団に明け渡す。残りあと僅かとなる。

1月31日 現場事務所撤去。作業員解散。あと片付けを残して現場終了。

2月1日～7日 現場のあと片付けを行ない、糸井宮前遺跡発掘調査完了する。 (関根)

第1章 調査の経過

第4節 調査の方法

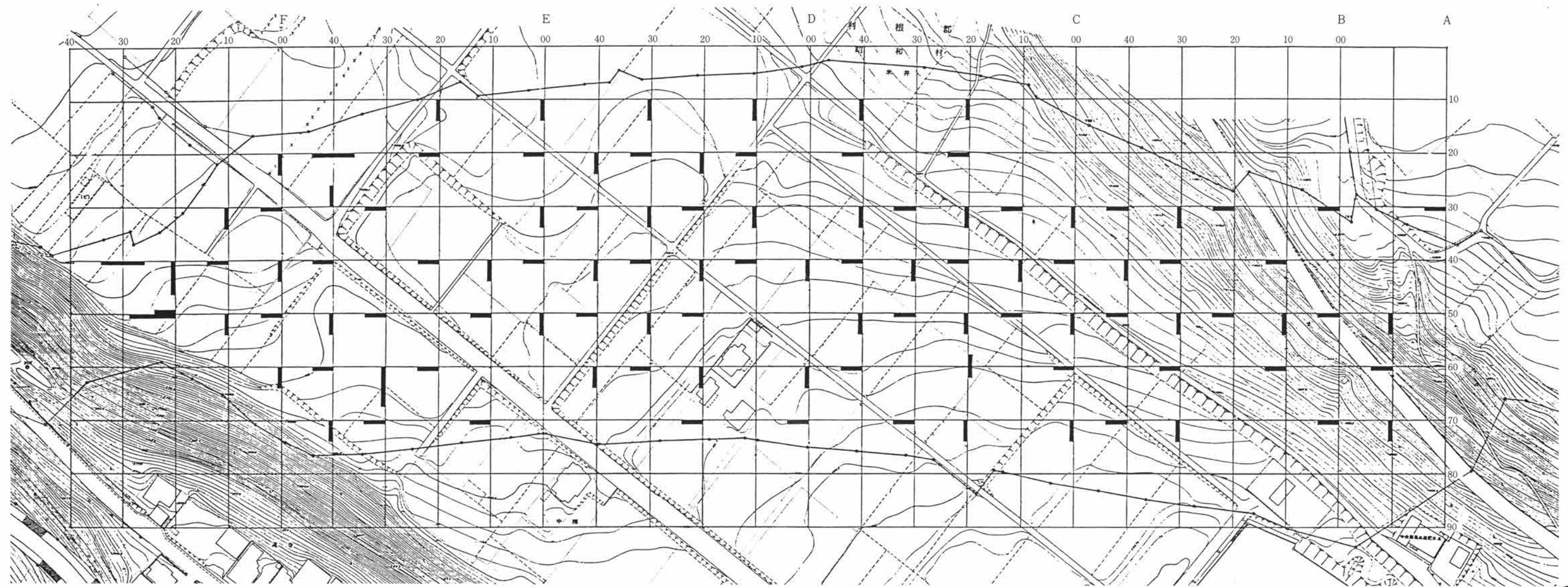
糸井宮前遺跡のグリッド用の基本杭は、試掘調査時に設定したものを利用した。試掘調査時に設定した基本杭は、日本道路公団が高速道路予定地内に打ったセンター杭の二点を利用し、調査対象地域全面に方眼を組み南東隅に基点を置いた。

グリッドの最少単位を2mとし、東西方向は2桁の数字を使い西側へ数字を大きくしていく。南北方向はアルファベットと2桁の数字を使い北側へ大きくしていき、アルファベットは50m毎に変える事とした。この方法により、2m四方のグリッドが設定され呼称方法が確定された。例えば最南端のグリッドは、00A00と呼称される。

実際の調査方法では前年度の試掘の成果によって、遺構は、新しい順に中近世のピット及び耕作列、平安時代、古墳時代、縄文時代と確認されており、これらの遺構は三面の文化層に分かれている。F・P上面で、古墳時代後半以降中近世の遺構、F・P下では、古墳時代前半の遺構、黒色土下のローム漸移層面で縄文時代の遺構とがある。これらの各層を順次重機による剥ぎとりを行い遺構の調査を行った。

遺構の実測は、原則として基本グリッドから1m間隔の方眼を水系で張りそれによって実測を行った。調査の後半では、土坑、住居の一部を平板による測量を行った。また全測図については、測量会社に依頼した。実測の縮尺は、住居・土坑・ピット等は20分の1、カマド・炉・埋甕などは10分の1、全測図は、200分の1を原則とした。また遺構内の遺物は、床面直上のもの覆土中で大型のものは住居平面図作成時に図示しレベルを測って取り上げているが、覆土中の小型の土器や礫、また調査後半では、床直以外の遺物は図示せず発掘時に取り上げた。

(関根)

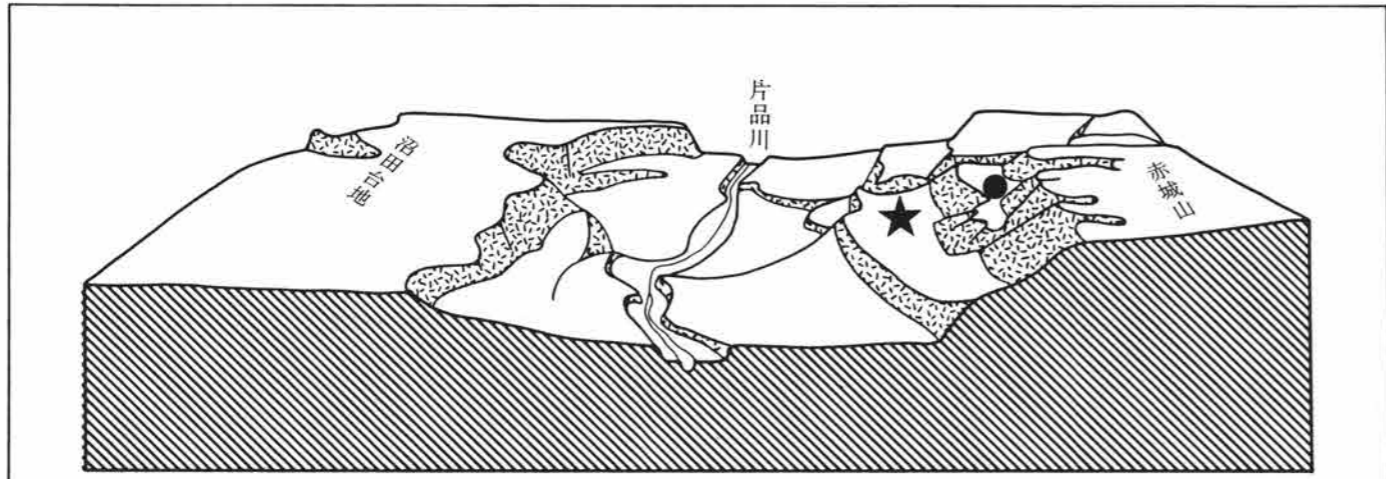
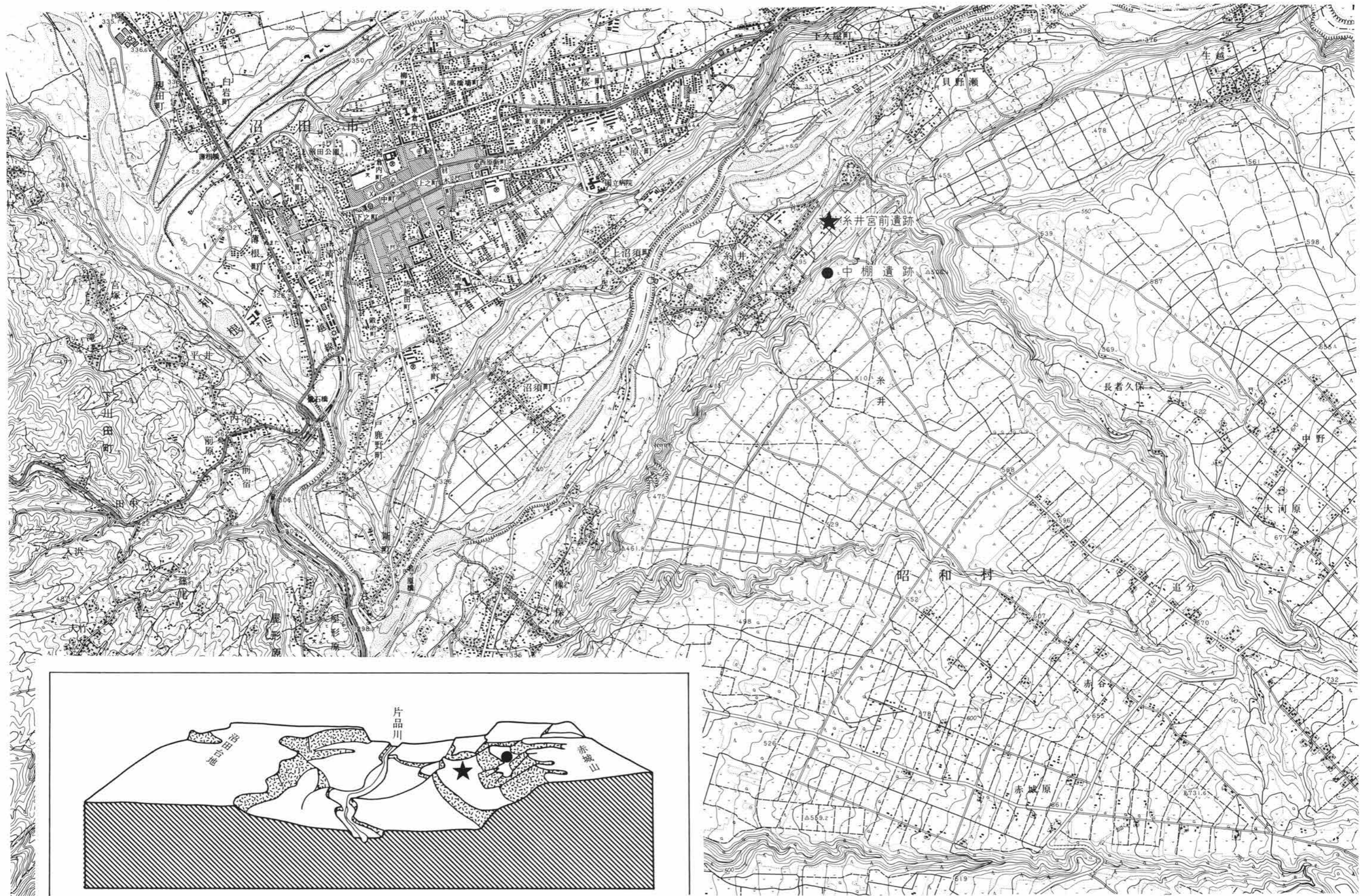


第1図 試掘配置図

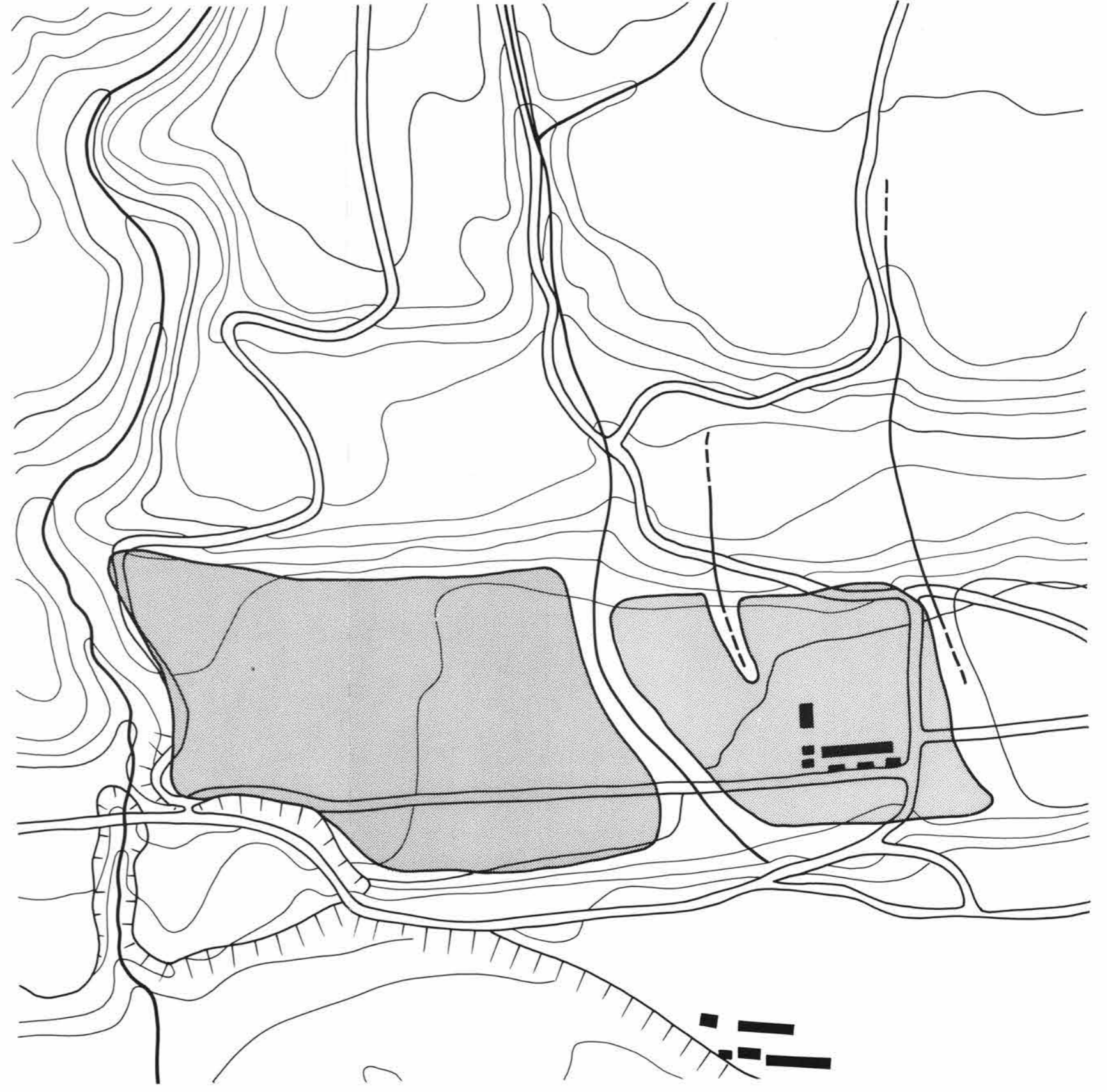


第2図 周辺の地形と住居址配置図

0 50m



第3図 遺跡位置図及び遺跡周辺断面図



第4図 古地形概念図（トーン部分は微高地部分）

第II章 遺跡の環境

第1節 自然環境

糸井宮前遺跡とその周辺地域において現在の地形を考えるのに、その基盤となるものは古沼田湖による湖成層である。古沼田湖は最高水位が海拔約400mに達したといわれ、赤城火山の古期成層火山期にその成長に伴って、現在の沼田市・月夜野町・昭和村附近に出現している¹⁾。古沼田湖の消滅後、赤城火山の造山運動は、成層凝垂角礫層からなる平滑な斜面上に幾つかの軽石流を比較的短期間に流下したため、その北及び西北麓に有名な緩斜面を現出した²⁾。一方、従来沼田湖成層の堆積面であった沼田台地周辺は、利根村砂川から流出した膨大な量の赤城火山新时期噴出物の扇状地的な堆積により沼田台地を形成する³⁾。前述の緩斜面は発達してこの扇状地に達するが、その接辺に西流する片品川は我が国有数の河岸段丘を形成する。片品川はやがて沼田台地・赤城山緩斜面、そして子持火山麓の接する地点で、南流する利根川に流入する。

片品川が形成する前述の河岸段丘は、糸井宮前遺跡の所在する附近では、左岸に第1・第2・第5・第7段丘面、右岸に第3・第4・第6段丘面の合計7面の段丘面を形成する。それぞれの段丘面の形成期については、ローム層土の検討によって推定される。沼田高位段丘に比定する赤城山の緩斜面においては下部ローム層の存在が確認されているのに対し、生越面（中位段丘）に比定される第1段丘面においては中部ローム層以上が確認されているにすぎず、更に本遺跡の乗る貝之瀬面に比定される第2段丘面（下位段丘）においては上部ローム層のみが認められている⁴⁾。また同じ貝之瀬面に比定する下位の第4段丘面にあつてはローム層土の堆積は極めて薄い⁵⁾。

さて、赤城山北西麓の緩斜面には、三室沢・入沢川・室沢沢などの形成する放射谷が深く刻まれている。しかし、これらの沢及び形成された谷地は一様ではなく、多くの谷地が過去において存在し、段丘面の形状をより複雑にしている。例えば糸井宮前遺跡周辺を見ると、その300m北側に、糸井地区と貝之瀬地区を分割する室沢沢が深い谷地形を刻んでいる他、大規模なものはないが、小規模なもの、あるいは谷地の痕跡が数カ所に認められる。（第4図）谷地形は本遺跡の乗る第2段丘面では明瞭ではないが⁶⁾、調査区では最も北側のものが確認され、上部ロームによって覆われた洪積世の所産であると思われる。これらの谷地と谷地との間には微高地が形成され、F・P降下の頃までは明確なものであったと考えられる。このような微高地は字外原及び大貫原にまたがる本遺跡の所在するもの、昭和村立東中学校（字大貫原）を中心とするものなどが確認される。本遺跡の遺構の状況を考えれば、集落の造営はこれら微高地上にほぼ限定されると思われる。従っていわゆる大貫原遺跡はこれらの微高地毎に三分割されて、個々に独立した遺跡として把握しうるものと思われる。

(石守)

註1 新井房夫「関東盆地北西部地域の第四紀編年」（群馬大紀要自然科学編、10巻4号、昭和38（1962）年）
守屋以智雄「赤城火山の地形及び地質」（前橋営林局、昭和43（1968）年）
などによる。

註2 上述の守屋（1968）による。

註3 久保誠二「沼田礫層」（『群馬県百科辞典』上毛新聞社、昭和54（1979）年）

註4 上述の新井論文（1962）を参考とした。

註5 第4段丘面の片品川寄り、昭和村役場南側の工事現場の明り掘削の側面を観察したところでは、ローム層は段丘礫層と思われるものを僅かに覆うように数cmほどが堆積しているに過ぎない。

註6 これらの谷地形は、緩斜面あるいは第1段丘面と、それらに伴う段丘崖においては、現地形にあつても確認が容易である。

第II章 遺跡の環境

第2節 基本土層

本遺跡では地質学的な土層分析を行っておらず多く語ることは不可能である。しかし、調査を通して遺跡内で確認された各土層は本遺跡の性格をとらえる意味で今後の問題点を提起することになろう。以下概略的にではあるが説明を加える。

第I層 表土層 茶褐色～暗褐色を呈す。しまりなくパサパサしている。

第II層 黒褐色砂質土

第III層 浅間B軽石純層¹⁾ 一部の地点で薄く堆積

第IV層 黒色砂質土 平安時代の遺物を含む。

第V層 ニツ岳降下軽石層 (F・P純層²⁾) 灰白色パミスを主体とする。

第VI層 黒褐色粘質土 地点によって茶褐色を呈す (a)。縄文～古墳時代の遺物を含む。

第VII層 ローム漸移層 にぶい黄褐色～暗褐色を呈す。縄文時代の遺構は下位で確認した。

第VIII層 ローム層 黄褐色を呈す。白色パミスを含む。

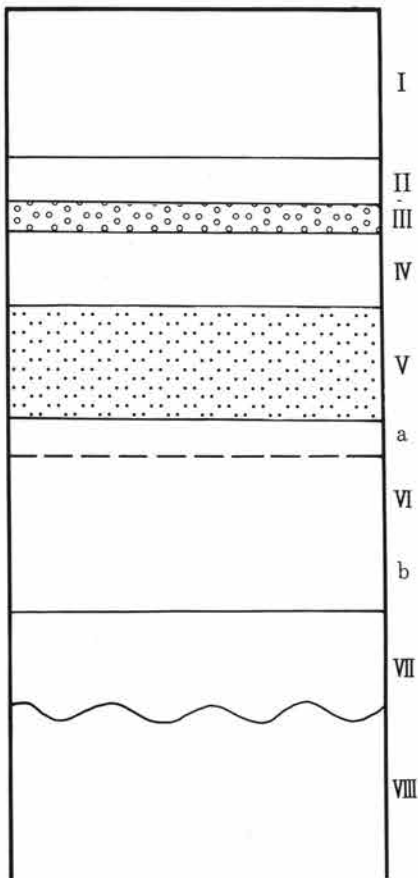
第VIII層より下位の土層としては浅間板鼻褐色パミス (Br P) を確認した。

本遺跡の土層で最も特徴的なものは第V層のF・P層であろう。地点によっては1m近くも堆積する。平安時代の遺構はこの層の上面で確認することができた。おそらく生活面は第IV層中であろう。次に縄文時代前期～古墳時代後期の遺構がこのF・P下の第VII層・第VIII層で検出されたが、後世の攪乱をさほど受けておらず、遺存状態は極めて良好であった。

また、古墳時代後期の竪穴式住居址にはこのF・Pの混入が確認されたものが多く混入の認められない古墳時代前半の住居址との土層を踏まえた大まかな分類を可能にした。このことは調査を進める上で実に有効な指標となった。

註1 1108年降下とされる。

註2 6世紀後半に降下とされる。



第5図 土層模式図 約1/10

第3節 周辺の遺跡

先土器時代～弥生時代

昭和村とその周辺の地域で最古の遺跡を調べると、関越自動車道の建設に伴って発掘された中棚遺跡（No.1）と長井坂城遺跡（No.18）があげられる。これらの遺跡からは、先土器時代の石器が発見されている。現在の所、先土器時代の遺跡はこの2遺跡が赤城山北西麓に分布している。近年、赤城山西麓において先土器時代の遺跡が数多く発掘されている所¹⁾から、この地域でも遺跡数の増加が予想される。

縄文時代になると、当地域では早期から晩期にかけて各時期の遺跡が分布している。早期の調査例としては中棚遺跡があり、撚糸文、無文、押型文、条痕文系の土器・石器が包含層中より層位的に検出された。しかし、遺物の発見のみで住居址等の遺構は発見されていない。前期になると本遺跡の他、中棚遺跡・鎌倉遺跡（No.37）、薄根中学校（No.45）、戸鹿野町八幡平（No.29）等の遺跡から、花積下層・関山・黒浜・諸磯b～cの各期の遺物が検出されている。その他、子持山北東麓においても土器の散布がみられる。中～後期の遺跡はこの地域では調査例はないが、利根川左岸の沼田市川田では、散布地や耕作によって敷石住居が発見される例が多い（No.23）。晩期では本遺跡の下位段丘に位置する宮ノ前遺跡があり、村立小学校プール建設の際に注口土器などの晩期縄文土器が出土している。

弥生時代では、中棚遺跡・鎌倉遺跡・高野原遺跡（No.39）、諏訪平遺跡（No.48）と発掘調査されている。これらの遺跡からは、弥生時代後期の住居址等が検出されているが、中期のものはない。

これら先土器～弥生時代までの遺跡分布をみると、先土器時代～縄文時代早期の遺跡は、赤城山北西麓の標高の高い所に分布している。また、縄文前期のそれは利根川支流の片品川、薄根川流域及び利根川と片品川合流点より下流域に分布する。それに対して中・後期では、これより上流の利根川左岸の川田地区に多く遺跡が分布する傾向がある。晩期は、片品川の下位段丘に見られるのみで、遺跡数は少なくなる。弥生時代後期になると、各河川流域に遺跡が拡大する傾向がある。（関根）

古墳時代

本遺跡の所在地附近を含む利根・沼田地域では大型古墳の存在は認められないが、小型古墳による古墳群が幾つか知られている。利根川流域にあつては、左岸に岩下清水古墳群（No.16）、川額軍原古墳群（No.15）、森下松木古墳群（No.14）、森下御門古墳群（No.13）、稲荷塚と旧利南村第2号古墳附近（No.28）、塚田古墳群（No.27）、真庭・政所古墳群（No.55）。同じく左岸三ツ峰山麓に稗田古墳群（月夜野町後閑）、金山古墳群²⁾（月夜野町師）。利根川右岸では支流の赤谷川右岸に塚原古墳群（月夜野町上津）。利根川の支流薄根川に沿っては左岸に愛宕古墳群（No.38）、生品古墳群（川場村生品）、右岸に峯山古墳群（No.41）、奈良古墳群（No.40）、秋塚古墳群（沼田市秋塚町）、天神古墳群（川場村天神）などがある。本遺跡の下位段丘面には八日市古墳群（No.10）、常木古墳群（No.7）が所在する。こうした古墳の築造は、奈良古墳群のイ号墳等6基、政所京塚古墳、川額軍原古墳群の久呂保中学校裏古墳では7世紀。岩下清水古墳群の南に位置する鏡石古墳（No.17）には6世紀という年代が与えられている。

古墳時代の集落は前期のものとして本遺跡の他に戸神諏訪遺跡³⁾（沼田市岡谷町）、石墨遺跡⁴⁾（沼田市石墨町）に調査例がある。後期のものは後田遺跡⁵⁾（月夜野町師）、石墨遺跡で調査されている。この他、八日市遺跡（No.9）、吹張土師遺跡などがあるが、詳細は不明である。

奈良・平安時代

和名類聚抄によれば利根郡には渭田・男信・笠科・呉科の4郷がある。郡衙は昭和村森下字御門に推定さ

第II章 遺跡の環境

れ、この附近に笠科郷の中心が考えられている。本遺跡も笠科郷に含まれると思われる。大宝令制定期の行政区分は不明だが、前述の古墳を造営した地域の小首長が律令体制に組み込まれる中で、4郷にまとめられたと考えられる。宮原寺院跡（No12）からは瓦塔が出土している。

奈良時代の集落の笠科郷推定域に於ける調査例はないが、涓田郷に比定される大釜遺跡⁶⁾（沼田市大釜町）、呉桃郷に比定される村主遺跡⁷⁾（月夜野町上津）が調査されている。平安時代の集落は、笠科郷に入ると思われるものでは中棚遺跡がある。その他、涓田郷に比定するものでは戸神諏訪遺跡・石墨遺跡・後田遺跡など多くあり、呉桃郷では村主遺跡などが調査されている。月夜野町上組には洞窠跡などの月夜野窠跡群⁸⁾があり利根・沼田地域を中心として供給がなされている。

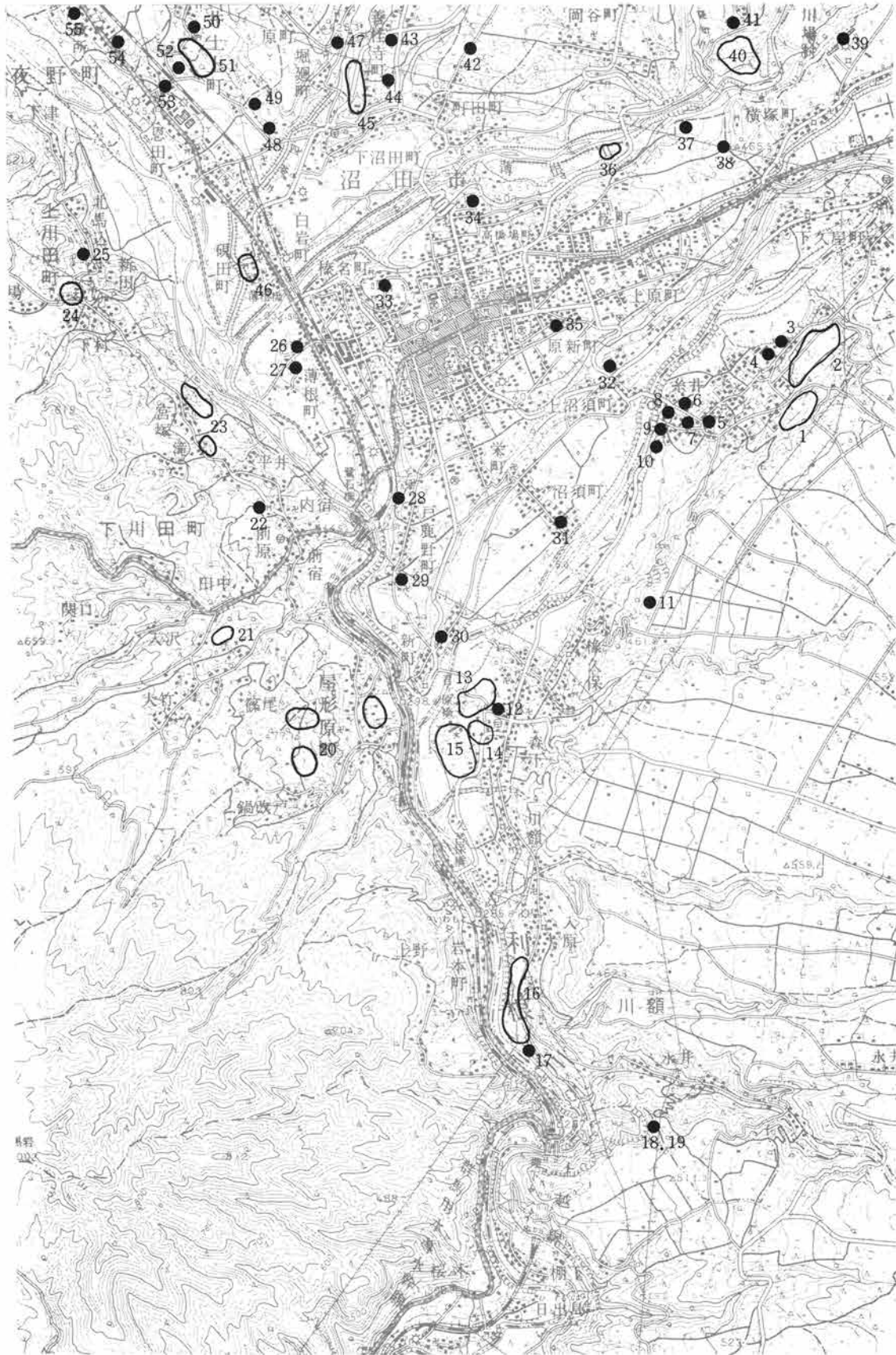
鎌倉時代以降

鎌倉時代以降の遺跡は城館址が多い。荘田城跡（No50）→小沢城（No44）→幕岩城（No34）→倉内城（沼田城 No33）に至る沼田氏本居の変遷、また倉内城を中心として、名胡桃城⁹⁾（月夜野町城平）・上川田城（No25）・沼須城（No35）などの枝城が造られている。特に長井坂城（No19）は利根地方と厩橋（前橋）方面との接点として、戦略上の要である。また阿曾城址は沼須城の出城と考えられている。一方、本遺跡の南、村立東中学校の続きに上内出・南内出、その下位段丘面に中内出の地名が残り、城館址の存在が考えられている¹⁰⁾。この中内出からは、灰釉の瓶子・梅瓶を用いた骨蔵器が出土し、鎌倉時代の数少ない火葬墓の資料となる糸井古墓（No5¹¹⁾）がある。糸井付近の中世の様相をものがたるものとして、長慶寺の記録に残る碑があげられる。当寺には文保元年（1317）・元徳2年（1330）・定治2年（1363）・永仁3年（1395）の銘を持つ4基の弥陀三尊種子の板碑の存在が記されている。また、この長慶寺付近の桑畑より、定和6年（1350）、元徳元年（1329）の銘を持つ板碑が骨蔵器や五輪塔を伴い出土している。これらのことから、中世において当地にはこれらの石碑を造立した土豪階層の人々が居住し、仏教文化を花開かせていたことが窺える。

（石守・新倉）

〈註〉

- 1) 関越自動車道建設に伴い、赤城村 見立溜井遺跡・三原田諏訪西遺跡・三原田中畦遺跡等で先土器時代の遺物を検出している。
- 2) 大西雅広他 『大釜遺跡・金山古墳群』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983年
- 3) 関越自動車道建設に伴い、1982・1983年に群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査。『年報2』1983年 『年報3』1984年
- 4) 関越自動車道建設に伴い、1982・1983年に沼田市教育委員会が調査
- 5) 関越自動車道建設に伴い、1981・1982年に群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査。『年報1』1982年 『年報2』1983年
- 6) (2)に同じ。
- 7) 月夜野バイパス建設に伴い、1983年 群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査。『年報3』1984年
- 8) 須田 茂他 「洞III遺跡」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報—VI—』 群馬県教育委員会
原 雅信他 『藪田東遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年
- 9) 岩崎泰一他 『城平遺跡・諏訪遺跡』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984年
- 10) 山崎 一 「群馬県古城址の研究」 下巻 1972年
- 11) 池田 秀夫 「灰釉瓶子」(群馬県立博物館報14号) 1971年



第6図 周辺の主な遺跡分布図 1:50,000

第II章 遺跡の環境

周辺の主な遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種類・文献等
1	中 棚	先土器縄文 弥生・平安	1983、「中棚遺跡—平安時代の集落」昭和村教委
2	糸井宮前		本遺跡
3	滝 谷	縄 文	かつて土偶・石皿が出土
4	宮ノ前縄文	縄 文	「昭和村の文化財」
5	糸井古墳	鎌倉	出土品は県博が保管
6	宿	弥生	散布地
7	常木古墳群	古墳	墳墓
8	吹張土師	古墳	散布地
9	八日市	弥生・古墳	散布地
10	八日市古墳群	古墳	墳墓
11	阿曾城跡	室町	城館址
12	宮原寺院跡	奈良	1981「古瓦研究資料3」
13	森下御門古墳群	古墳	墳墓
14	森下松木古墳群	古墳	墳墓
15	川額軍原古墳群	古墳	墳墓
16	岩下清水古墳群	古墳	墳墓
17	鏡石古墳	古墳	1974「鏡石古墳発掘調査報告」群馬県教委
18		先土器	1983、昭和村教委調査
19	長井坂城跡	安土・桃山	城館跡
20		縄文・弥生	広範囲な散布地
21		縄文・弥生	散布地
22	下川田城跡	室町	城館跡
23		縄文～古墳	広範囲な散布地
24		縄文～古墳	散布地
25	上川田城跡	室町	城館址
26		弥生～古墳	工事中土器出土
27	塚田古墳群	古墳	墳墓 沼田町史
28	稲荷塚	古墳	墳墓

番号	遺跡名	時代	種類・文献等
29		縄 文	諸磯b式土器（有孔浅鉢）は利南中にて保管
30		縄 文	散布地
31		縄 文	宅造の際敷石住居の一部を発見
32		縄 文	散布地
33	沼田(倉内)城跡	江戸	城館址
34	幕岩城跡	室町	城館址
35	沼須城跡	室町	城館址
36		縄 文	散布地
37	鎌 倉	縄文～弥生	1980 事業団調査
38	愛宕古墳群	古墳	墳墓
39	高野原	弥生・古墳	1974 群馬県教委調査 「日本考古学年報27」
40	奈良古墳群	古墳	1955 群大尾崎氏調査
41	峯山古墳群	古墳	墳墓
42	土塔原	縄文～古墳	散布地
43		弥生～古墳	散布地
44	小沢城跡	室町	城館址
45		縄文～古墳	1984「群馬考古通信10」
46		古墳	散布地
47		弥生	散布地
48	諏訪平	弥生～平安	1984 群馬県教委調査 「日本考古学年報27」
49	関口城跡	室町	城館址
50	荘田城跡	室町	城館址
51		縄文～弥生	散布地
52	井戸上屋敷	古墳・室町	散布地・城館址
53		古墳	散布地
54		縄文～弥生	散布地
55	真庭政所古墳群	古墳	墳墓

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

遺構名	遺構実測図	遺物実測図	遺構図版	遺物図版
3号住居址	第8図	第58図	図版3	図版77
10号住居址	第9図			
13号住居址	第9図			
38号住居址	第10～11図	第58図	図版4	図版77
39号住居址	第12図	第58図	図版5	図版77
40号住居址	第13～14図	第59図	図版6	図版77
41号住居址	第15～16図	第59図	図版7	
44号住居址	第17～18図	第59図	図版8	図版77
46号住居址	第19～20図	第60図	図版9	図版78
47号住居址	第21図	第60図	図版10	図版78
48号住居址	第22～23図	第61図	図版10・11	図版78
49号住居址	第24～25図	第62図	図版12・13	図版79
50号住居址	第26図	第62図	図版14	図版79
51号住居址	第27図	第63図	図版14	図版80
52号住居址	第28～29図	第63図	図版15	図版80
54号住居址	第30～31図	第63～64図	図版16	図版80・81
56号住居址	第32図	第65図	図版17	図版81
57号住居址	第33～34図	第65図	図版17・18	図版81

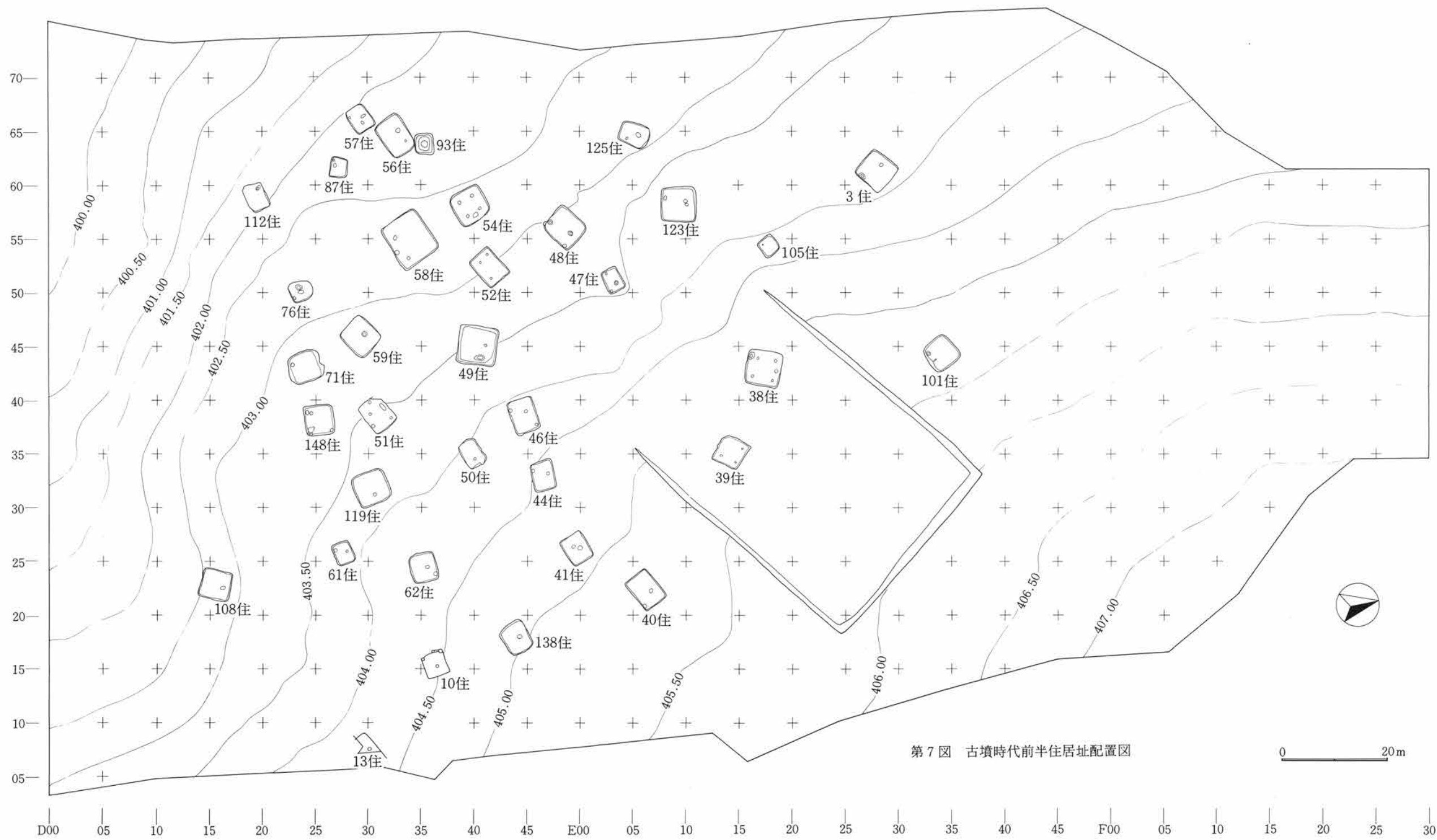
遺構名	遺構実測図	遺物実測図	遺構図版	遺物図版
58号住居址	第35～36図	第66図	図版19	図版82
59号住居址	第37～38図	第66図	図版19・20	図版82
61号住居址	第39図	第67図	図版21・22	図版82
62号住居址	第40～41図	第67図	図版23・24	図版82
71号住居址	第42図	第68図	図版25	図版83
76号住居址	第43図	第68図	図版26	図版83
87号住居址	第44図	第69図	図版27	図版83
93号住居址	第45図		図版28	
101号住居址	第46図	第69図	図版28	図版83
105号住居址	第47図	第69図	図版29	図版83
108号住居址	第48～49図	第70図	図版29	図版84
112号住居址	第50図	第70図	図版30	
119号住居址	第51図	第70図	図版31	図版84
123号住居址	第52～53図	第71図	図版32	図版84
125号住居址	第54～55図	第71～72図	図版33	図版84・85
138号住居址	第56図		図版34	
148号住居址	第57図	第73図	図版34・35	図版85

第三章 検出された遺構と遺物

住居址一覧表

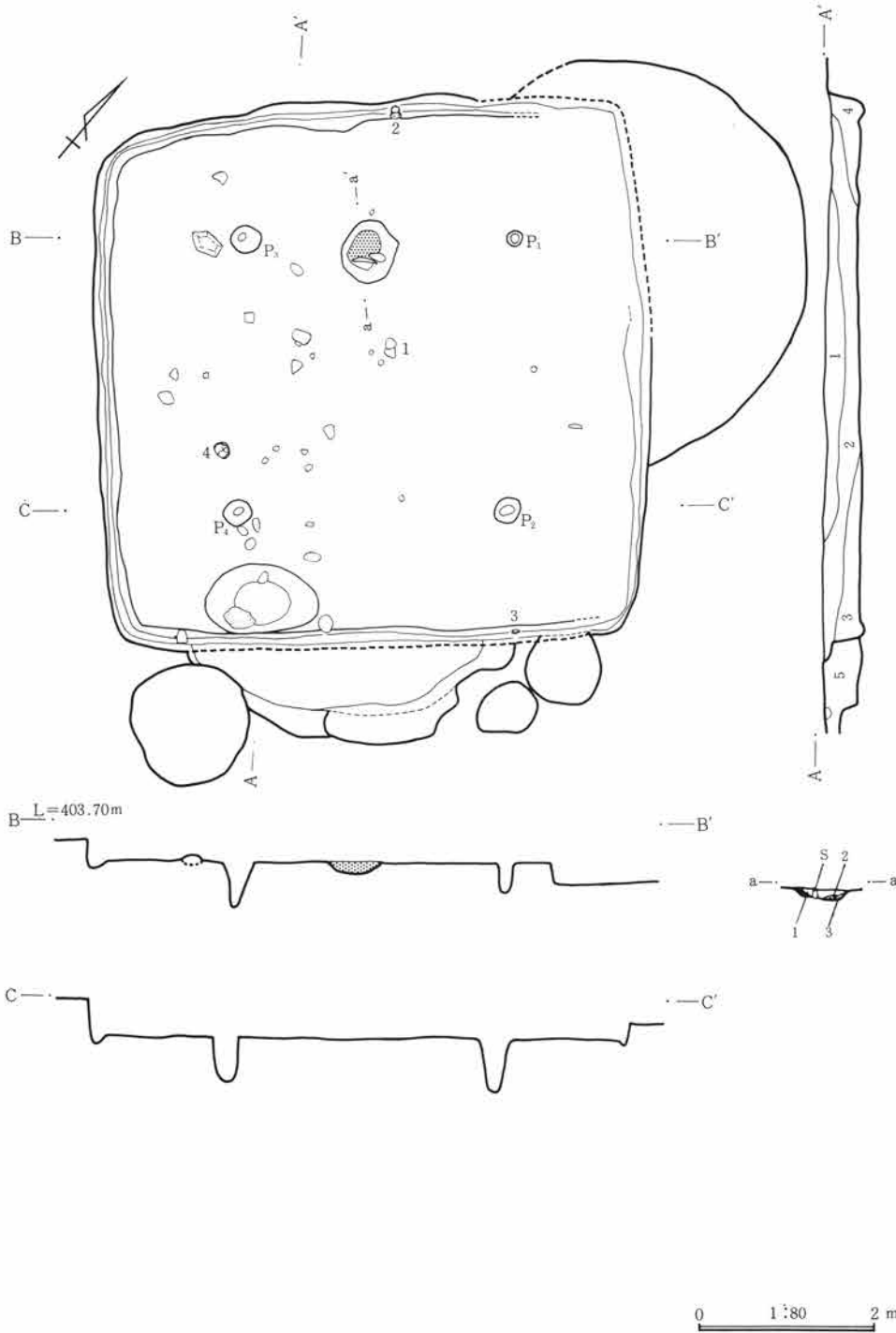
遺構名	方位	形状	施設	その他
3 住	N-42°-W	大型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴4壁溝	
10 住	N-28°-E	不明	炉	攪乱著しい
13 住	N-53°-E	不明	炉	12住と重複
38 住	N-16°-E	大型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴4壁溝	焼失住居
39 住	N-34°-E	正方形	貯蔵穴・柱 穴6・壁溝	攪乱著しい 焼失住居
40 住	N-57°-E	隅丸長方形	炉2貯蔵穴 柱穴3壁溝	焼失住居
41 住	N-97°-E	隅丸長方形	炉2貯蔵穴 柱穴4壁溝	
44 住	N-83°-E	隅丸長方形	炉・柱穴3 壁溝・床下 土坑	
46 住	N-75°-E	隅丸長方形	炉・柱穴・ 壁溝	焼失住居
47 住	N-70°-E	隅丸長方形	炉柱穴壁溝 床下土坑	
48 住	N-47°-E	大型の正方形	炉・柱穴4 貯蔵穴2 壁溝	
49 住	N-13°-E	大型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴4壁溝	
50 住	N-64°-E	隅丸長方形	炉2・柱穴 床下土坑	
51 住	N-52°-E	隅丸長方形	炉2貯蔵穴	
52 住	N-52°-E	長方形	炉・貯蔵穴 柱穴4壁溝	
54 住	N-64°-E	大型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴6壁溝	
56 住	N-59°-E	隅丸長方形	炉・柱穴4 壁溝	
57 住	N-63°-E	やや小型の隅 丸長方形	炉・貯蔵穴 柱穴2壁溝	焼失住居
58 住	N-60°-E	大型の方形	炉2・柱穴 4・壁溝 床下土坑	
59 住	N-47°-E	隅丸方形	炉・柱穴4	焼失住居

遺構名	方位	形状	施設	その他
61 住	N-76°-E	小型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴3周溝	焼失住居
62 住	N-82°-E	正方形	炉・貯蔵穴 柱穴4周溝	焼失住居
71 住	N-12°-W	正方形	貯蔵穴・柱 穴4・周溝	
76 住	N-16°-W	不定形	炉・貯蔵穴 柱穴・床下 土坑	
87 住		小型の正方形	炉・貯蔵穴 柱穴	
93 住	N-90°-E	小型の正方形	炉・床下土 坑	
101 住	N-46°-E	正方形	柱穴3 貯蔵穴	焼失住居
105 住	N-112°-E	小型の正方形		焼失住居
108 住	N-20°-E	大型の正方形	炉・貯蔵穴 周溝	焼失住居
112 住	N-72°-E	不定形の隅丸 方形	柱穴	焼失住居
119 住	N-69°-E	大型の正方形	炉・柱穴4 周溝	
123 住	N-5°-E	大型の正方形	炉2貯蔵穴 柱穴4周溝	焼失住居
125 住	N-25°-E	隅丸長方形	炉・柱穴3 床下土坑	
138 住	N-60°-E	隅丸長方形	炉・柱穴2 壁柱穴	
148 住	N-4°-W	正方形	炉・柱穴7	焼失住居



第7図 古墳時代前半住居址配置図

0 20m



第3号住居址

位置 59~64

E26~30

方位 北西。

形状 610×630cmでほぼ正方形を呈す。現存壁高は、最大で46cmであった。また各辺は中央部で外側へ弓状に僅かに膨らむ。

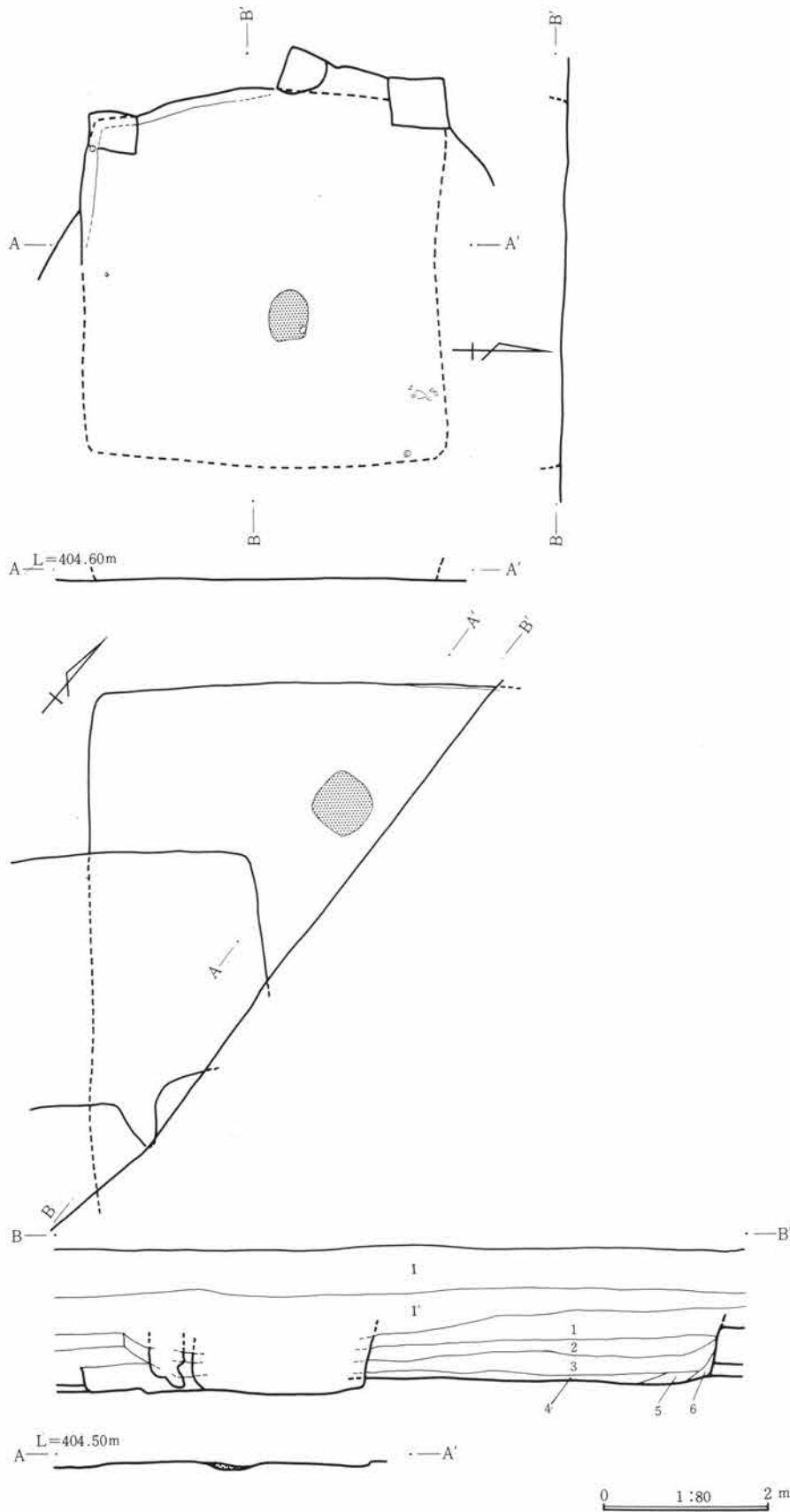
覆土 第八層土粒、炭化物を含むVI層土を主体とするが、床面に近づくにつれて炭化物の含まれる割合が多くなる。

床面 中央部分は平坦で、比較的良好に締まっている。幅約15cm、深さ8cmの周溝がほぼ全周する。柱穴

ほぼ対角線上に4カ所検出された。P₁は径約18cm、深さ36cm。P₂は径約30cm、深さ60cm。P₃は径約35cm、深さ50cm。P₄は径34cm、深さ50cmである。貯蔵穴 南西壁際であり、規模は128×78cmで長円形、深さ30cmを測る。底面は比較的平坦である。炉 床中央の北寄りにあり、長さ27cm程の川原石が若干埋め込まれた状態で置かれていた。炉の掘り込みは10cm程であった。数cmの炭化物層があり、その下は焼土及び焼土化したロームが炉床となっている。遺物 出土状況は散在的で、余り多くはない。甗(4)・埴(1)・内面赤彩された小型壺(2)などが出土している。(小野)

第8図 第3号住居址

ほぼ対角線上に4カ所検出された。P₁は径約18cm、深さ36cm。P₂は径約30cm、深さ60cm。P₃は径約35cm、深さ50cm。P₄は径34cm、深さ50cmである。貯蔵穴 南西壁際であり、規模は128×78cmで長円形、深さ30cmを測る。底面は比較的平坦である。炉 床中央の北寄りにあり、長さ27cm程の川原石が若干埋め込まれた状態で置かれていた。炉の掘り込みは10cm程であった。数cmの炭化物層があり、その下は焼土及び焼土化したロームが炉床となっている。遺物 出土状況は散在的で、余り多くはない。甗(4)・埴(1)・内面赤彩された小型壺(2)などが出土している。(小野)



第10号住居址

位置 14~17D35~38

方位 東北東。

形状 一辺約450cmの
方形を呈す。セクショ
ンで形状が確認された
のみで全容は不明。

覆土 若干炭化物を含
むVI層土。

床面 断面において認
められたが明瞭ではな
い。

柱穴 不明である。

貯蔵穴 不明である。

炉 60×40cm程の範囲
で住居址ほぼ中央部
に炉床面が確認された。

掘り方 不明である。

遺物 無し (小野)

第13号住居址

位置 7~9 D28~31

北東半分は調査区外で
あり、南辺は12号住に
よって切られている。

形状 確認された北辺
および西辺は470×350
cmである。壁もほとん
ど残っていない。

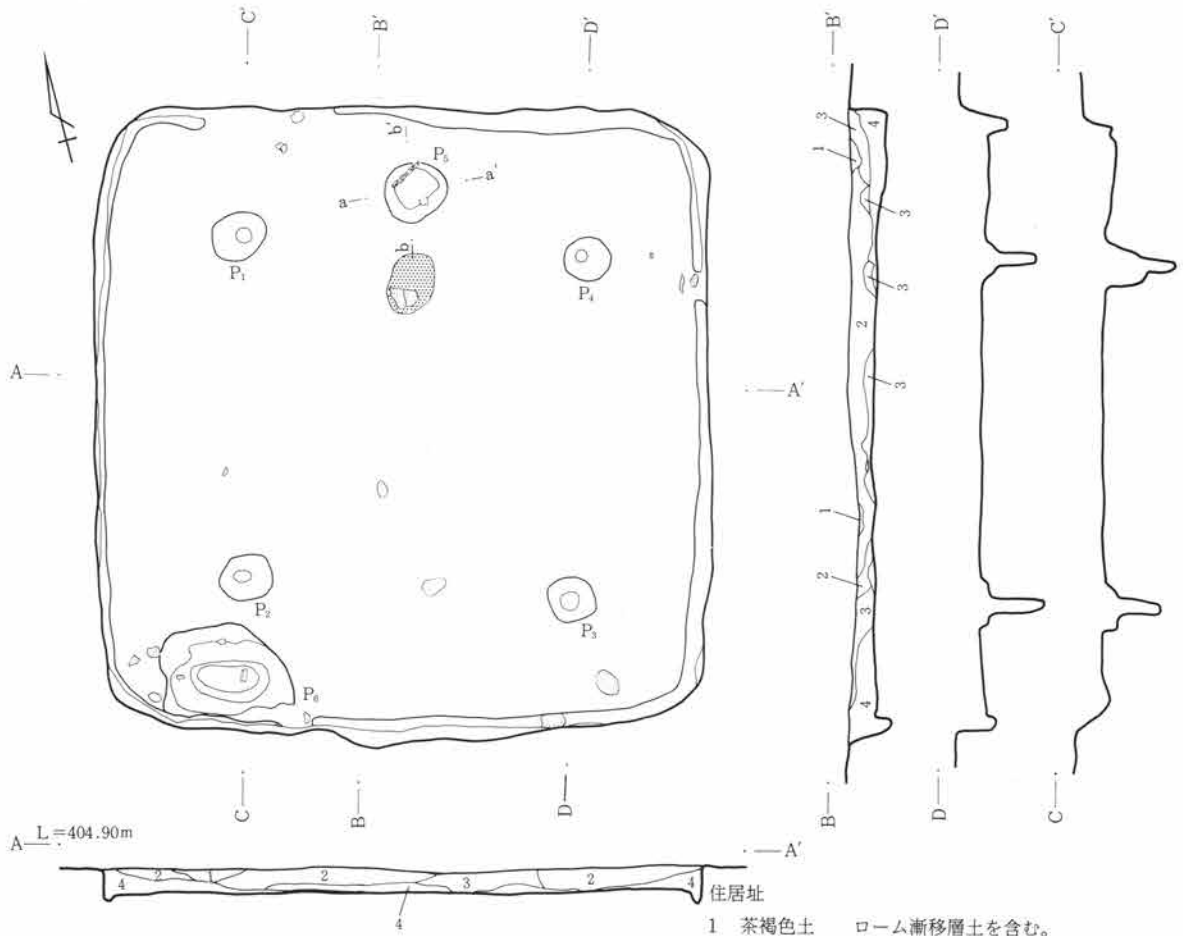
覆土 炭化物を含むVI
層土である。

床面 平坦であるが、
明確な使用面は僅かに
認められたのみである。

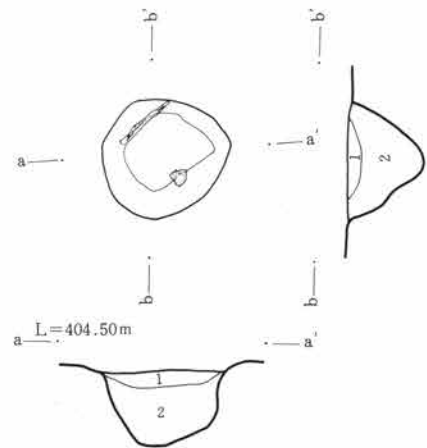
炉 中央やや北寄りに
設けられていた。径40
cmの範囲で焼土が認め
られた。 (小野)

第9図 第10・13号住居址

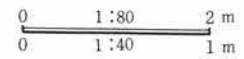
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



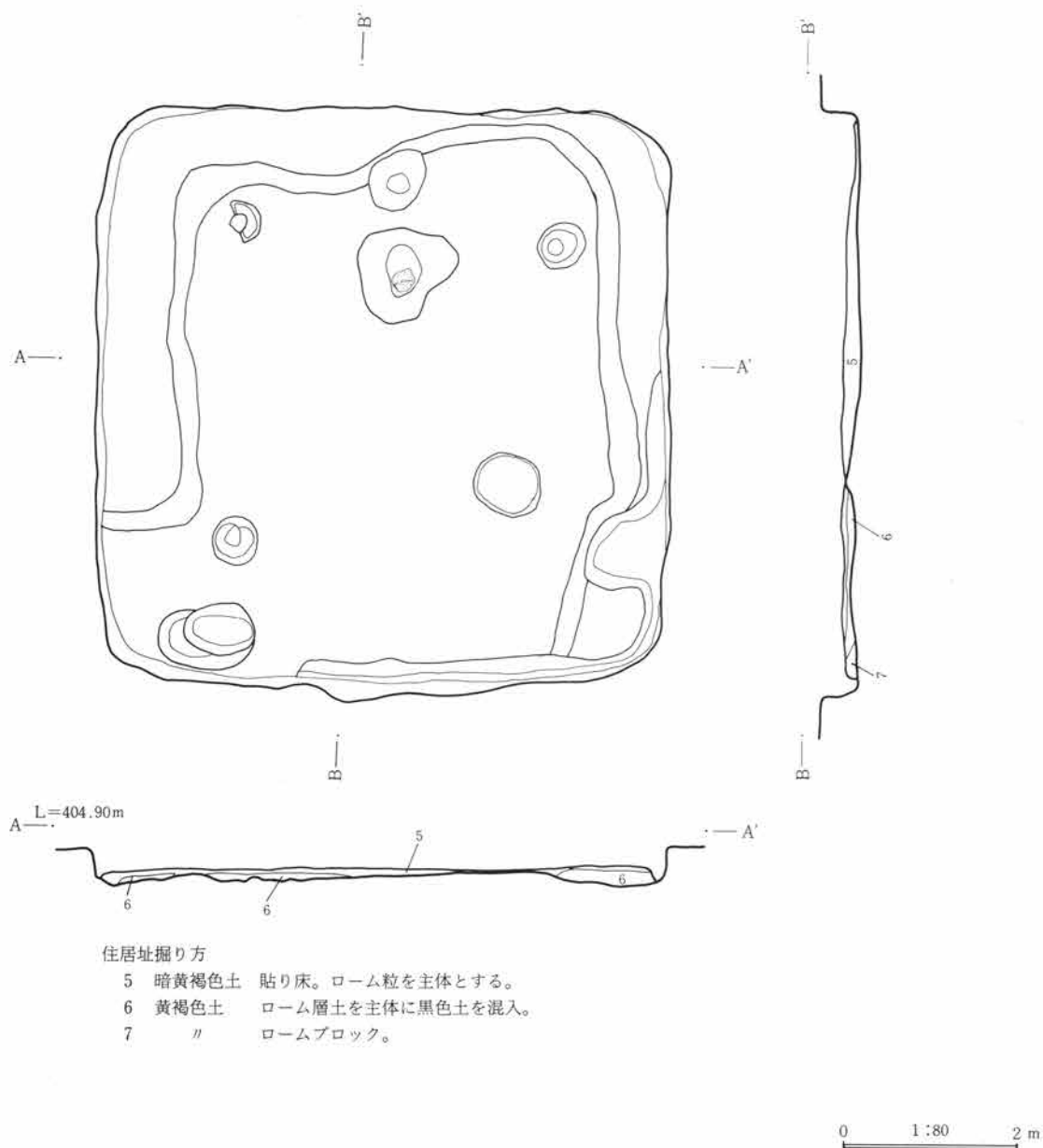
- | | |
|---------|--------------------|
| 1 茶褐色土 | ローム漸移層土を含む。 |
| 2 明茶褐色土 | ローム層土を含む。炭化物を含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム漸移層土を含む。焼土粒を含む。 |
| 4 茶褐色土 | ローム粒を多く含む。 |



- 炉址
- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 焼土層 | 黒褐色土ブロックを含む。 |
| 2 黒色土 | 黒褐色土粘質土を主体に上面に炭化物を含む。 |



第10図 第38号住居址・炭化材出土状態及び炉址



第11図 第38号住居址掘り方

第38号住居址

位置 41～44E 15～19グリッド。東方10mには第39号住居址が、南方27mに第47号住居址、西方17mに第105号住居址がそれぞれ位置する。方位的・形状的に似る第49号住居址が南方48mに位置する。 **方位** 北北東。
形状 長軸665cm短軸645cmを測る方形のプランを呈する。現状で壁高は32cmを測る。しかし、本住居址の位置する部分は、陸軍廠舎建設に伴い第VIII層面まで下げられた区画の一部に当たるため推定はしにくい。廻りの状況から当時の地表と考えられるVI層面を復元すると10mあたり南北に80cmの傾斜を示し、これを考慮すると北壁で115cm、南壁では80cmの壁高が考えられる。 **覆土** 土層は壁端に堆積するものと、住居全体を覆うものとに大別される。前者はVII・VIII層土を中心とした土からなり、後者はVII層土を中心とした土からなっている。なお、前者は周堤の存在を考えさせる。また、前者と後者の境、あるいは後者の土層群中の底面に近い部分に広く焼土面が分布している。また、この焼土面付近からは多量の炭化材が出土した。 **炭**

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

化材 本住居址からは、当遺跡中最も多量の炭化材が出土している。これらの炭化材は垂木材と考えられるものと、梁または桁に相当するもの、及びその他のものに大別されるが、数量的には前者がほとんどを占めている。垂木材と考えられるものは径10cmほどで、壁肩部から住居中央に向って沈み込むような状況で出土している。垂木材は現状では200cm以下の長さを測る。これらの垂木材は、住居の一辺に対し二十数本が遺存している。この量は、本遺跡の同時期の住居における出土例に比べても特に多い数である。梁か桁と思われるものは、柱穴と柱穴を結ぶ線の内側に、基本的にこの線に平行な状態で確認されている。これらの炭化材は十分な遺存状態を示しておらず、一部が出土するに過ぎないが、材の太さは16cm程度を測る。その他としては、東南及び西南部の住居隅付近に、住居主軸45°方向に向く径10cmを測る炭化材、また南壁西部には細い木材を並べたものと思われる炭化材の集合したものが出土している。後者の西部には後述する入口遺構と思われる土坑があることから、入口遺構に伴うものと考えられる。

床面 床はⅦ・Ⅷ層土をたたいた貼り床で、床面の広さは630×630cmを測る。壁溝は幅15cm深さ13cm以内のものが廻っている。

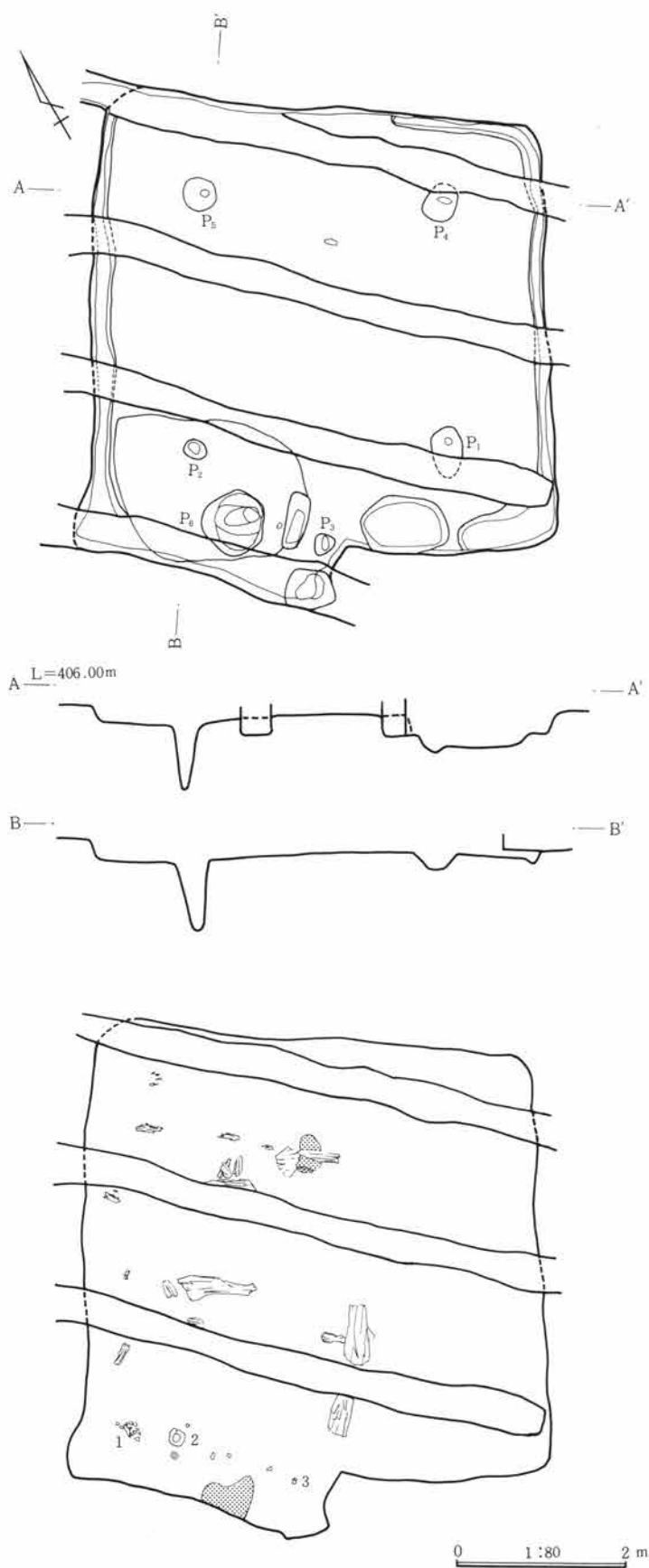
柱穴 ピット、支柱穴と思われるものは4カ所あり、それぞれP₁径59×49cm深さ60cm、P₂径55×47cm深さ77cm、P₃径47×46cm深さ57cm、P₄径50×45cm深さ66cmを測る。これらのピットの土層断面などの観察からは、径15cm以下の柱痕と思われるものが確認されている。また、それぞれの柱間距離は355±5cmであり、柱穴の位置を平面的に見ると弱い菱形を呈している。貯蔵穴と思われるP₅は、住居北壁端中央部にあり、炉のすぐ北側に位置している。P₅は径68×62cm深さ47cmを測り、Ⅵ層土で覆われ、上位部分にはⅥ・Ⅶ層土による焼土が乗り、前者と後者の境部分には薄く炭化材が層をなしている。住居南壁壁端西側には、径80×42cm深さ38cmを測る楕円形を呈するP₆がある。P₆の長軸は住居南壁に並行している。P₆の性格については、南壁にたてかけるための板または梯子状のものを埋めるのに適した、形状、位置であること。また、上述の小型の炭化材の集まりがあることから、入口遺構として用いられたものであることが考えられる。

炉 P₁とP₄を結んだ線の中央やや住居寄りにあり、10cmほどに浅く掘り込んで作られ、南部には自然礫が立てられている。炉床は径65×48cmを測る。

掘り方 確認面より40cm以内に掘り込まれている。幅80cmないし110cmを測る浅い溝が南壁端を除き周っている。

遺物 ほぼ床直より台付甕脚部(2・3)が出土している。(石守)





第12図 第39号住居址及び炭化材出土状態

第39号住居址

位置 34~37E 13~16グリッド。

E区中南部にあり、西方に第38号住居址がある。

方位 住居：北北東。

形状 平面形588×552cmを測るコーナーにやや丸味をおびた方形を呈する。

壁高は、住居上面を削平されているため、現状で22cmを測るにすぎない。

覆土 炭化物、焼土等の混入した土層であった。

床面 第VII・VIII層土を中心とした土で貼られており、幅12cm深さ16cmの溝が北壁の3分の1を除いて周っている。

床面の広さは、500×452cmを測る。耕作による攪乱のため、床の残存状況は良くない。

柱穴 6本確認された。P₁径60×38cm深さ70cm、P₂径26×22cm深さ18cm、P₃径44×38cm深さ18cm、P₄径38×38cm深さ82cm、P₅径24×22cm深さ26cm、P₆径50×50cm深さ33cmを測る。

貯蔵穴 南壁側に段を有する土坑が確認された。貯蔵穴に該当すると思われる。径70×60cm深さ30cmを測る。

炭化物が見られた他に遺物等は検出されなかった。

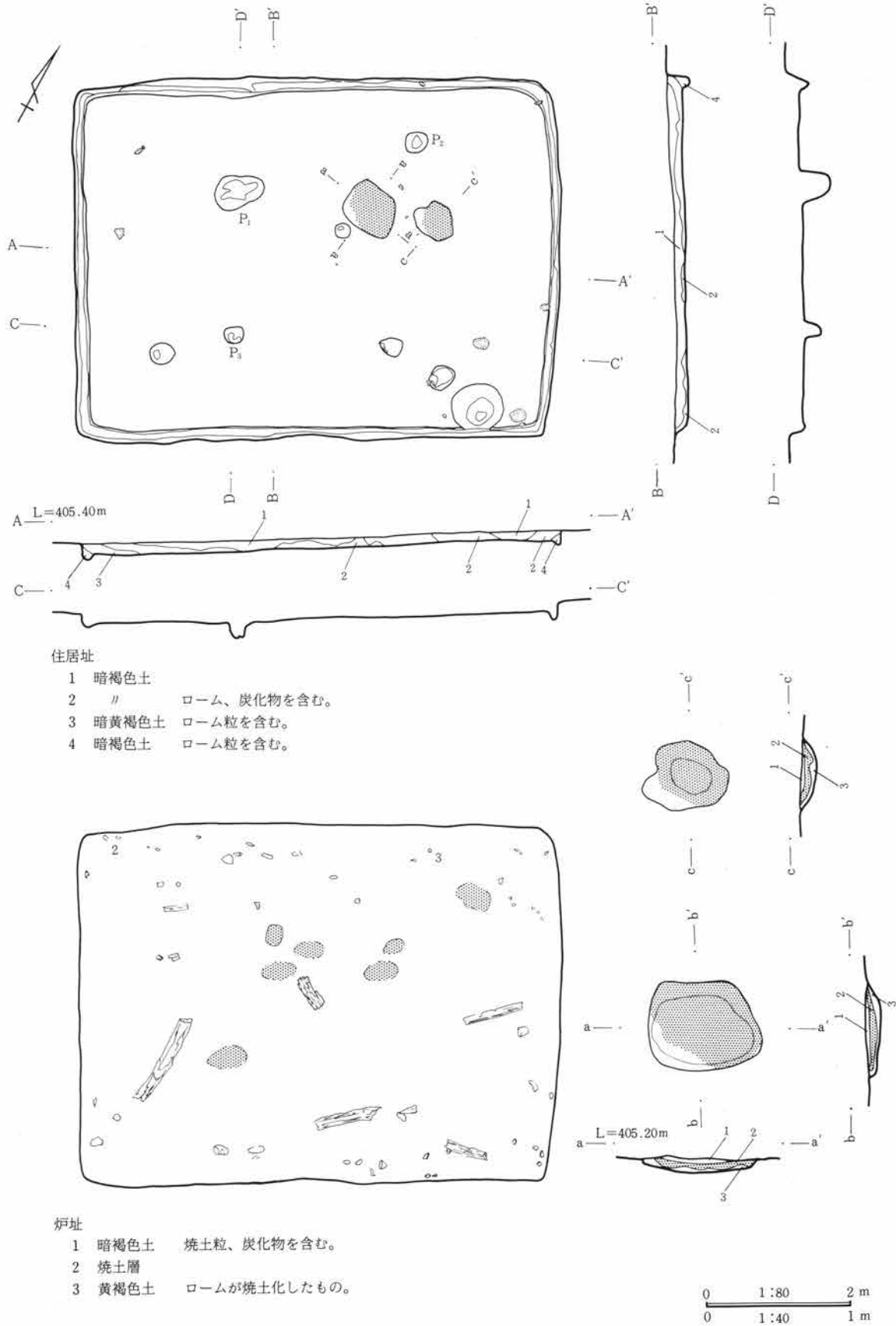
炉 攪乱による破壊のためか検出されなかった。

掘り方 貼り床が10cm前後見られたのみで、床下の遺構は確認できなかった。

遺物 貯蔵穴付近から、壺の口縁(3)が出土しており、床上からは、小型甕(1)磨製の斧(2)が出土した。

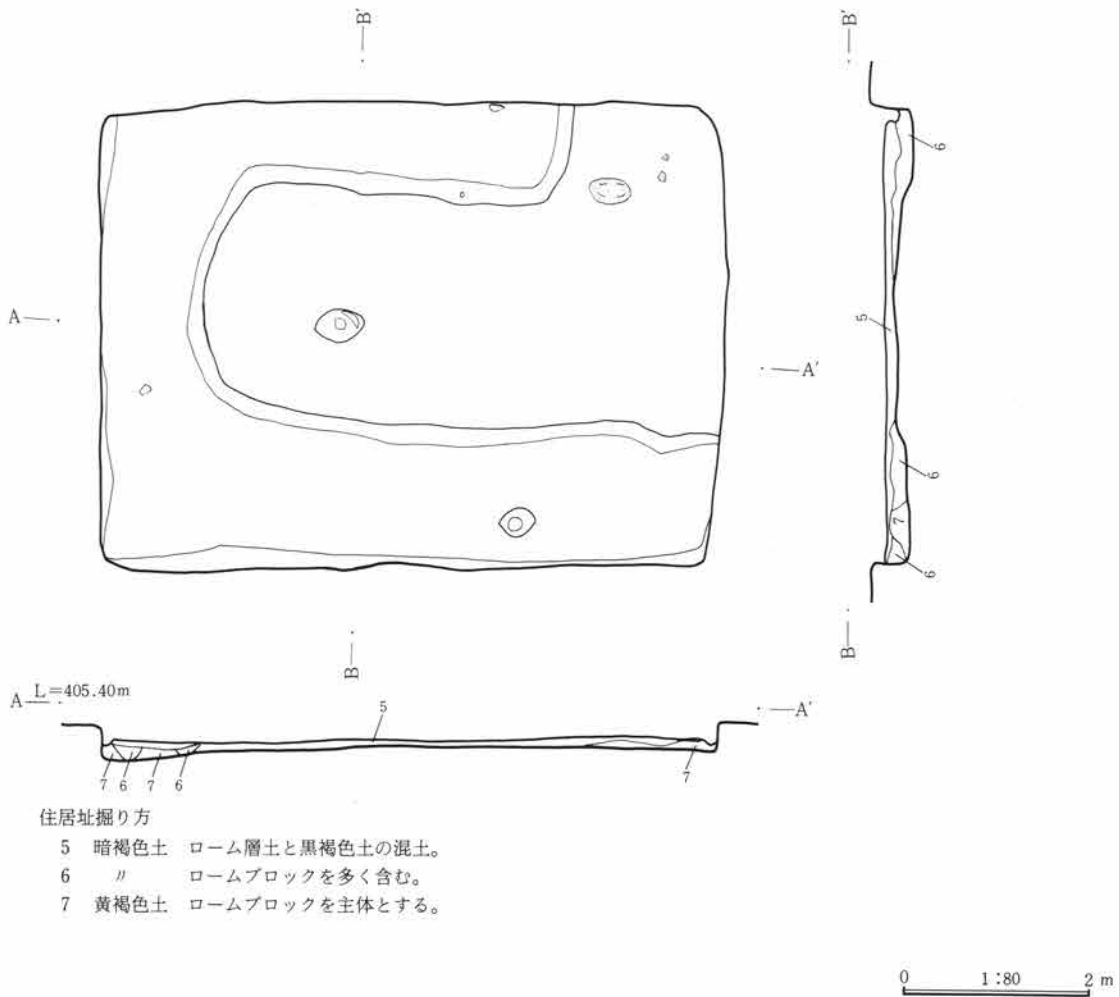
覆土中からは土器の小破片が出土しているが、図示し得る個体はなく、全体に出土量も少ない。

(関根)



第13図 第40号住居址・炭化材出土状態及び炉址

第三章 検出された遺構と遺物



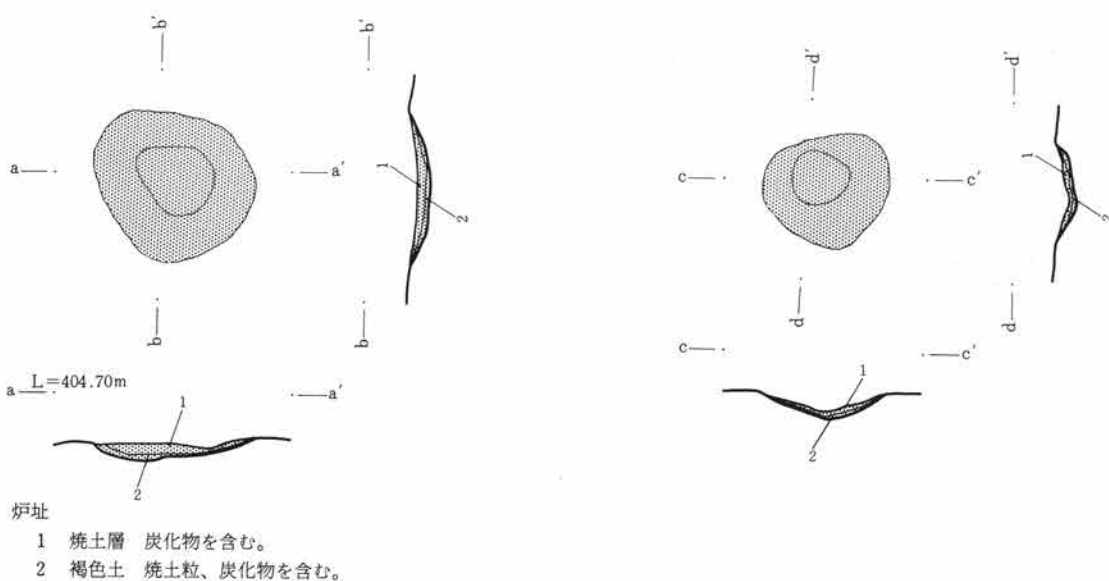
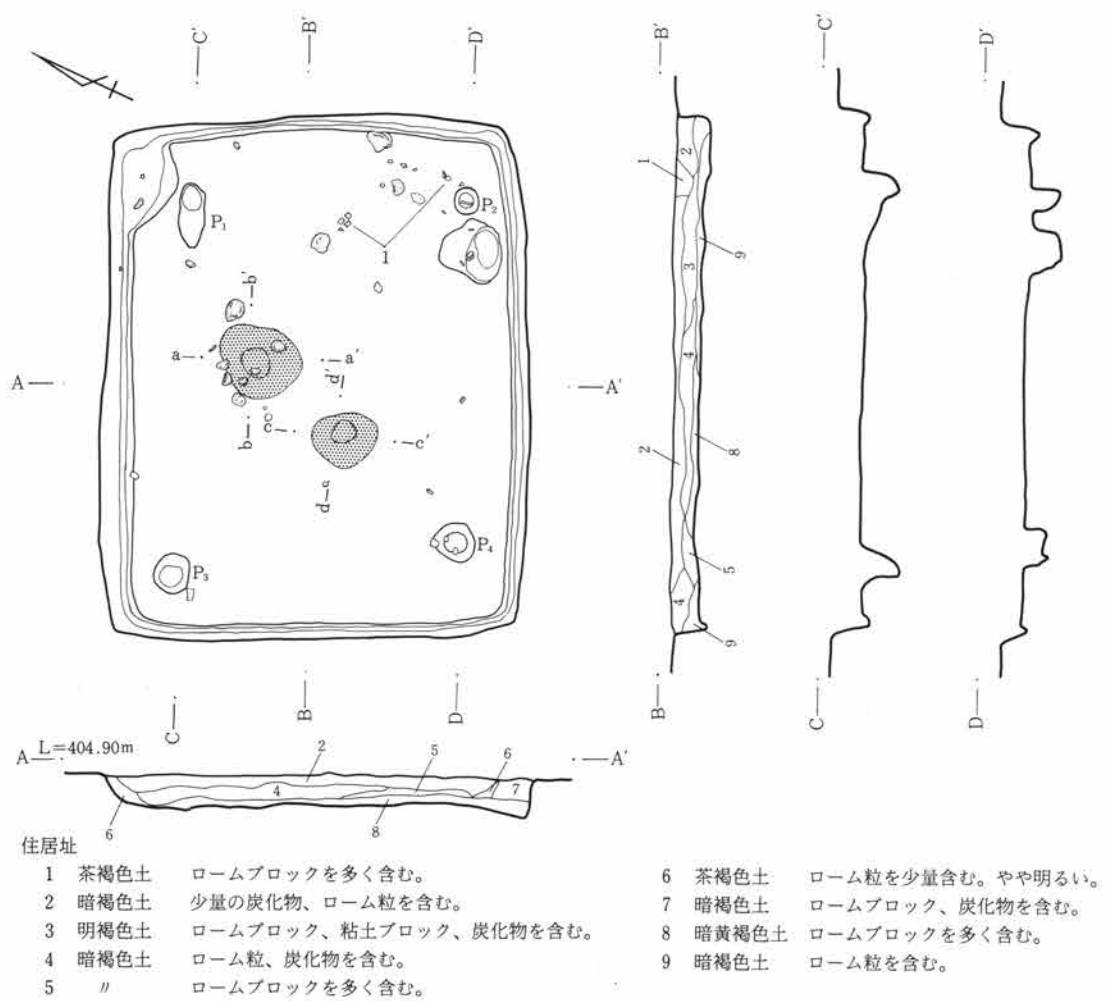
第14図 第40号住居址掘り方

第40号住居址

位置 20～23E 04～08グリッド。E区の北東部に位置し、41住が本住居の南西側に隣接する。 **方位** 住居：東北東。 **形状** 平面径670×490cmの長方形を呈する。壁高は、16cmを測り、比較的低いものであるが、垂直に近い立ち上りをする。 **覆土** 第VIII層が覆土の主体をなすが、床面上で灰層や焼土、炭化材が多くみられた。 **床面** VII層を中心とした土で貼り床が作られている。床面径は650×462cmを測る。床面上に炭化材、焼土が多く見られ焼失家屋の可能性も考えられる。溝は幅12cm深さ10cm程のものが壁にそって全周している。 **柱穴** 3本確認された。P₁径68×50cm深さ42cm、P₂径28×22cm深さ24cm、P₃径34×34cm深さ20cmを測る。 **貯蔵穴** 住居址東南隅に、径70×60cm深さ40cm程の土坑がある。内から遺物などは検出されなかった。 **炉** 床面上に焼土の堆積した所が2カ所確認できた。これらが地床炉になると思われる。それぞれ径50×45cm、80×60cmを測り、焼土が5～10cm程堆積していた。 **掘り方** 住居址北東壁の一部を除き他の三方の壁にそって幅100～200cm深さ30～40cmの掘り込みが見られた。 **遺物** 遺物の検出状況としては、焼土や炭化材の上層から、礫や、小破片の土器が出土したが、図示できたものは、壺の口縁部 (1) と、鉄製の鎌 (2) など、床面上からの出土遺物はなく、全体に遺物量の少ない住居であった。

(関根)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



0 1:80 2 m
0 1:40 1 m

第15図 第41号住居址及び炉址

第41号住居址

位置 23~27D48E01グリッド。D区E区の境界上の東方にあり、第40号住居址の南西部に位置している。

方位 住居：東を向く。

形状 住居の径は540×456cmを測る。コーナーにやや丸味を持ち長方形を呈する。壁高は30cm程で、垂直に立ち上り、しっかりしたものである。

覆土 VIII層土ブロックを含む茶褐色土及びVII層土で覆われている。土層の攪乱もなく、自然堆積の状況を示す。

床面 VIII層土とVI層土の混った土を貼り床にしている。床は、南壁寄りで幅150cm高さ数cmの高まりを持った部分が見られた。床中央部は、堅くたたきしめられている。溝は、幅12cm、深さ10cmのものが壁にそって一周している。

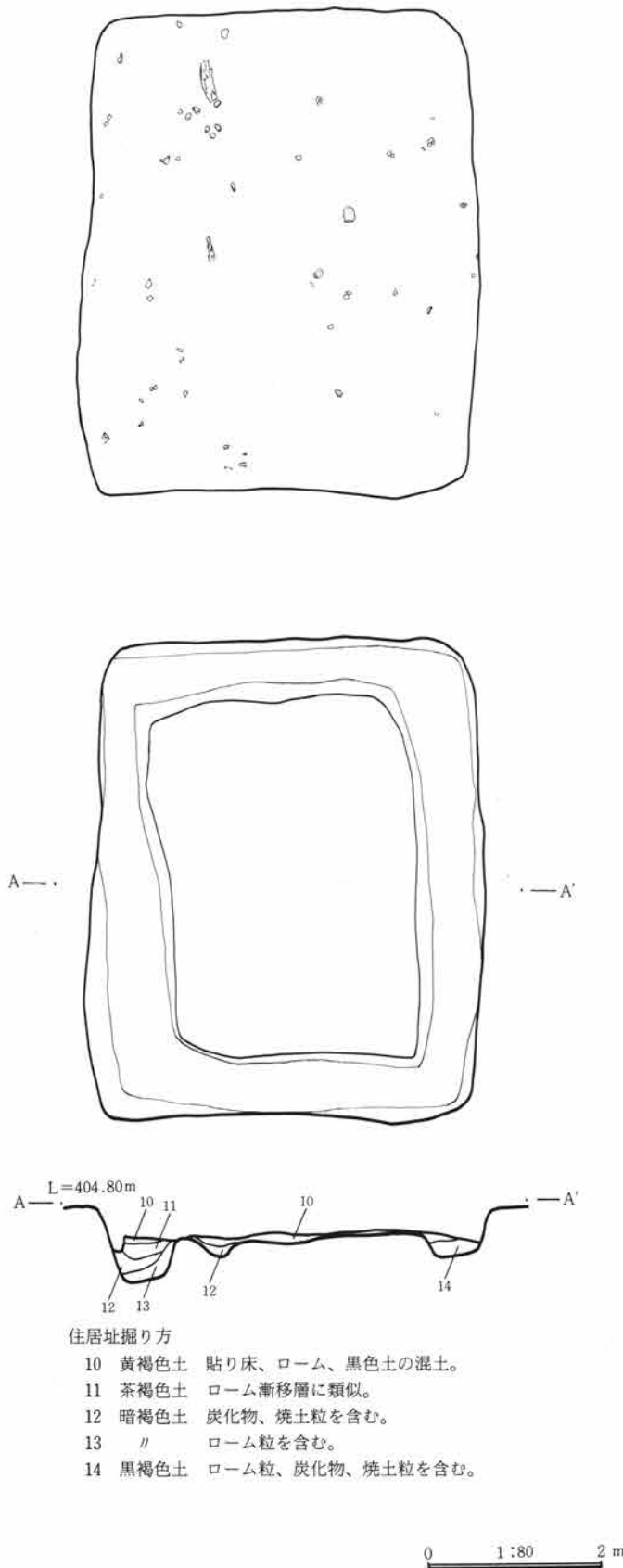
柱穴 4本確認された。P₁径70×36cm深さ40cm、P₂径36×36cm深さ32cm、P₃径43×40cm深さ40cm、P₄径44×40cm深さ28cmを測り4本とも、ほぼコーナーの対角線上に位置する。

貯蔵穴 北東コーナーやや南よりの所に径64×64cm深さ30cmほどの土坑が確認された。内からは炭化物以外の出土物は発見されなかったが、覆土の状況から考えると、住居と同一時期のものと思われる。

炉 焼土が堆積している所が2カ所確認できた。径83×80cm深さ10cmのものと、径70×60cm深さ5cmのものである。直接床面を掘り込んで炉にしたもので、石組等の施設はなかった。

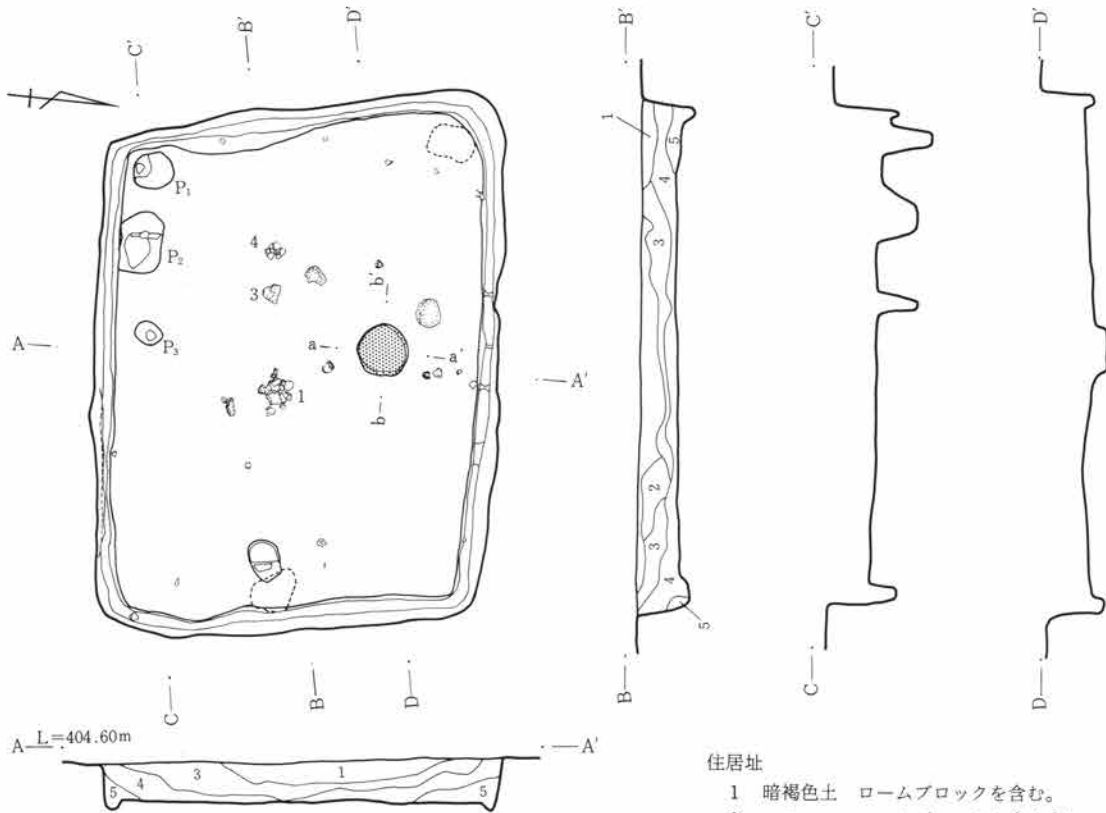
掘り方 10~20cmの貼り床を除くと、幅65cm深さ40cm程の溝が、壁にそって周っているのが確認された他には、床下の遺構は検出されなかった。

遺物 遺物の出土状況は、床面よりやや浮き上がった状態で礫、土器の小破片が出土したのみで図示できたのはわずかに椀(1)の1点のみで遺物の出土量は少ない。(関根)



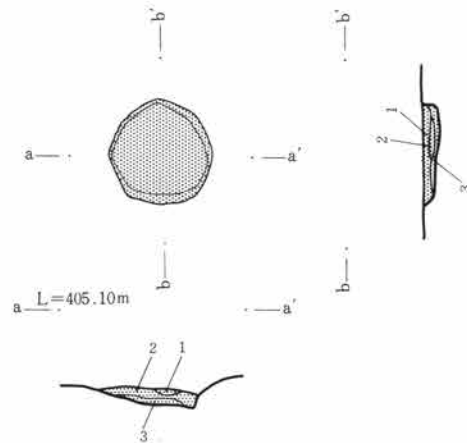
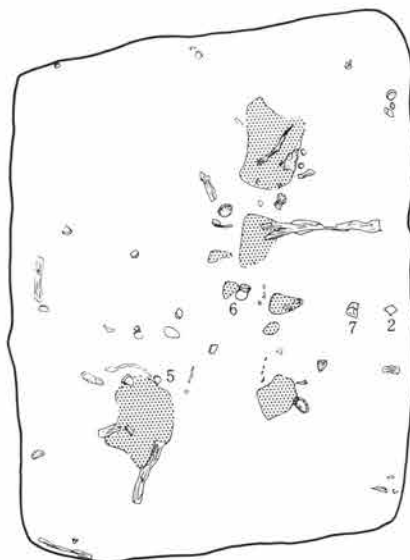
第16図 第41号住居址炭化材出土状態及び掘り方

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



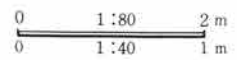
住居址

- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 // ロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 // ローム粒子を少量含む。

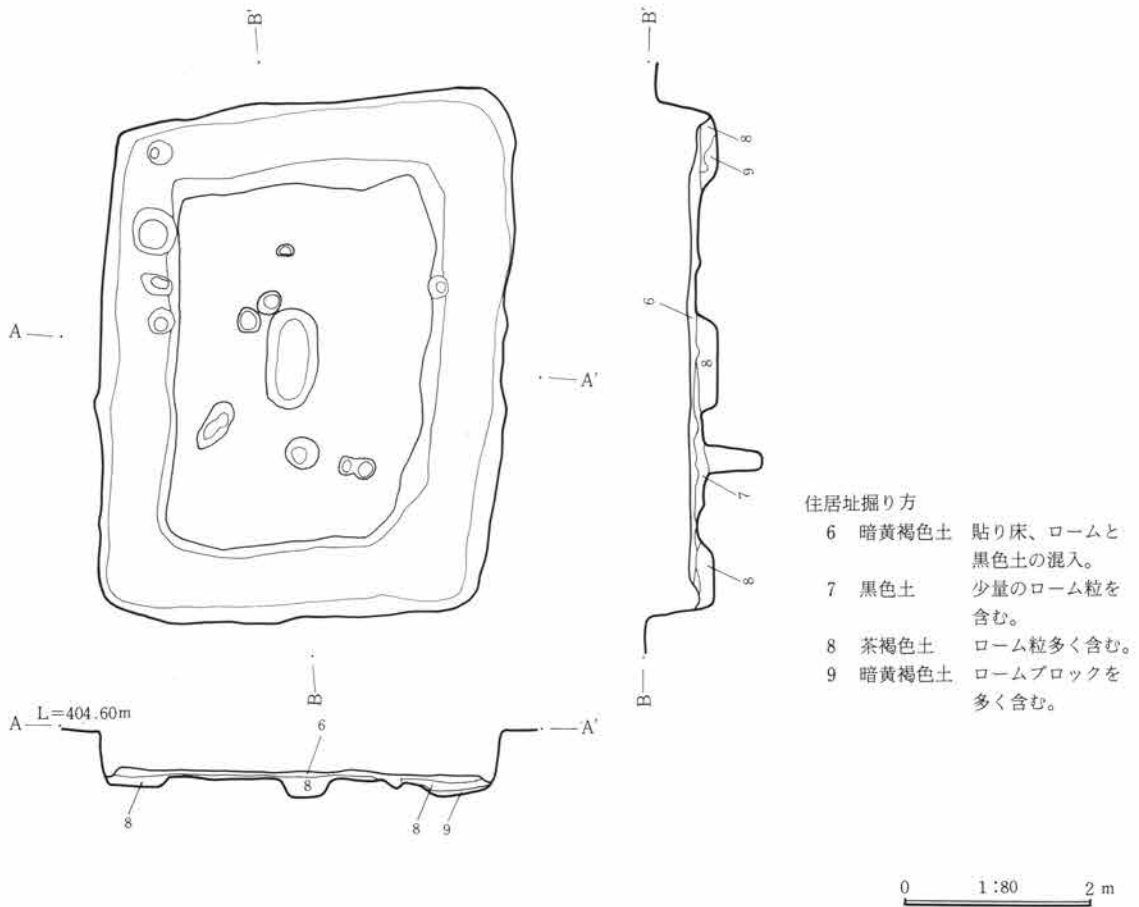


炉址

- 1 黒色土 焼土、炭化物を含む。
- 2 灰層
- 3 焼土層



第17図 第44号住居址・炭化材出土状態及び炉址



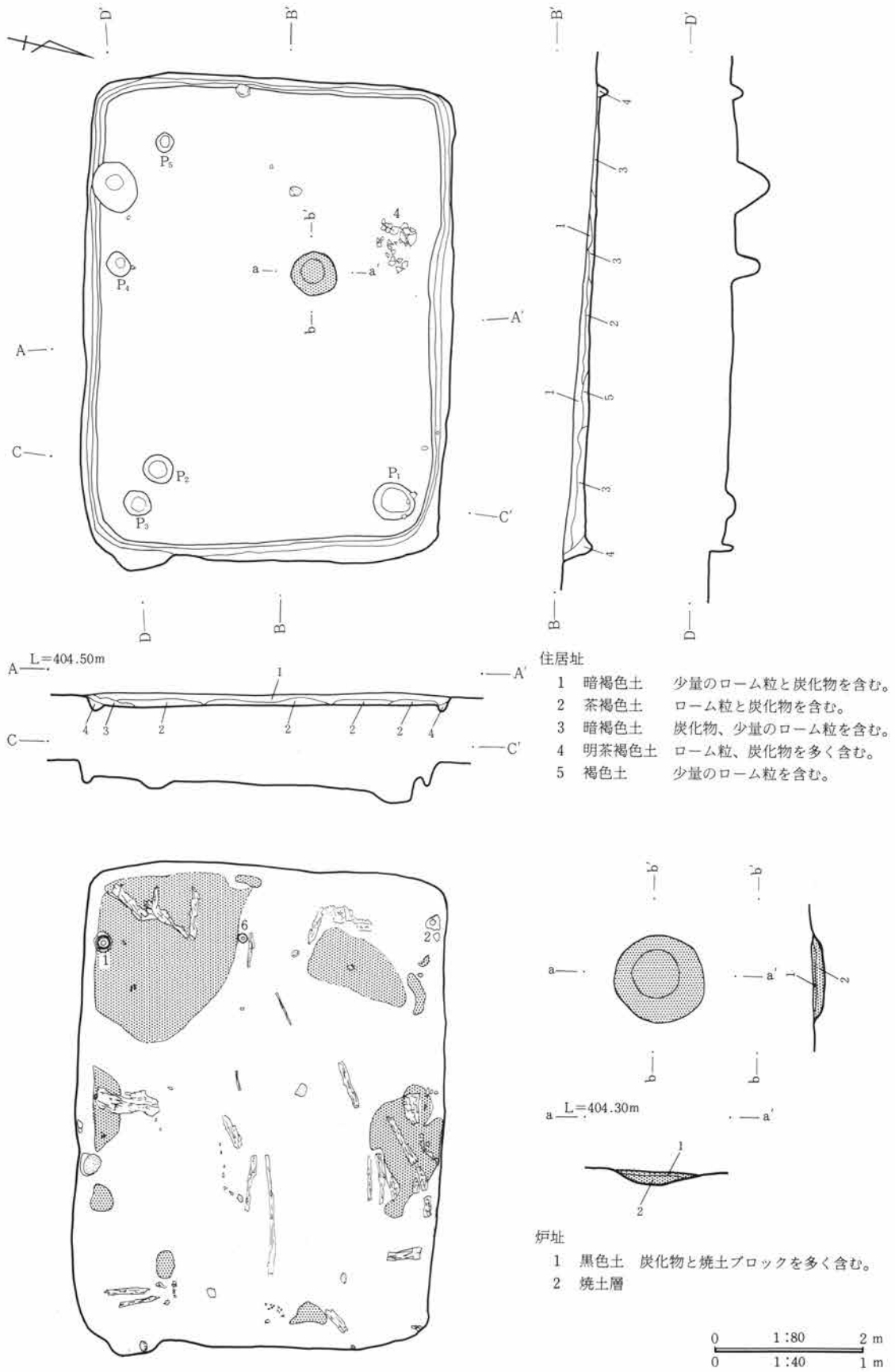
第18図 第44号住居址掘り方

第44号住居址

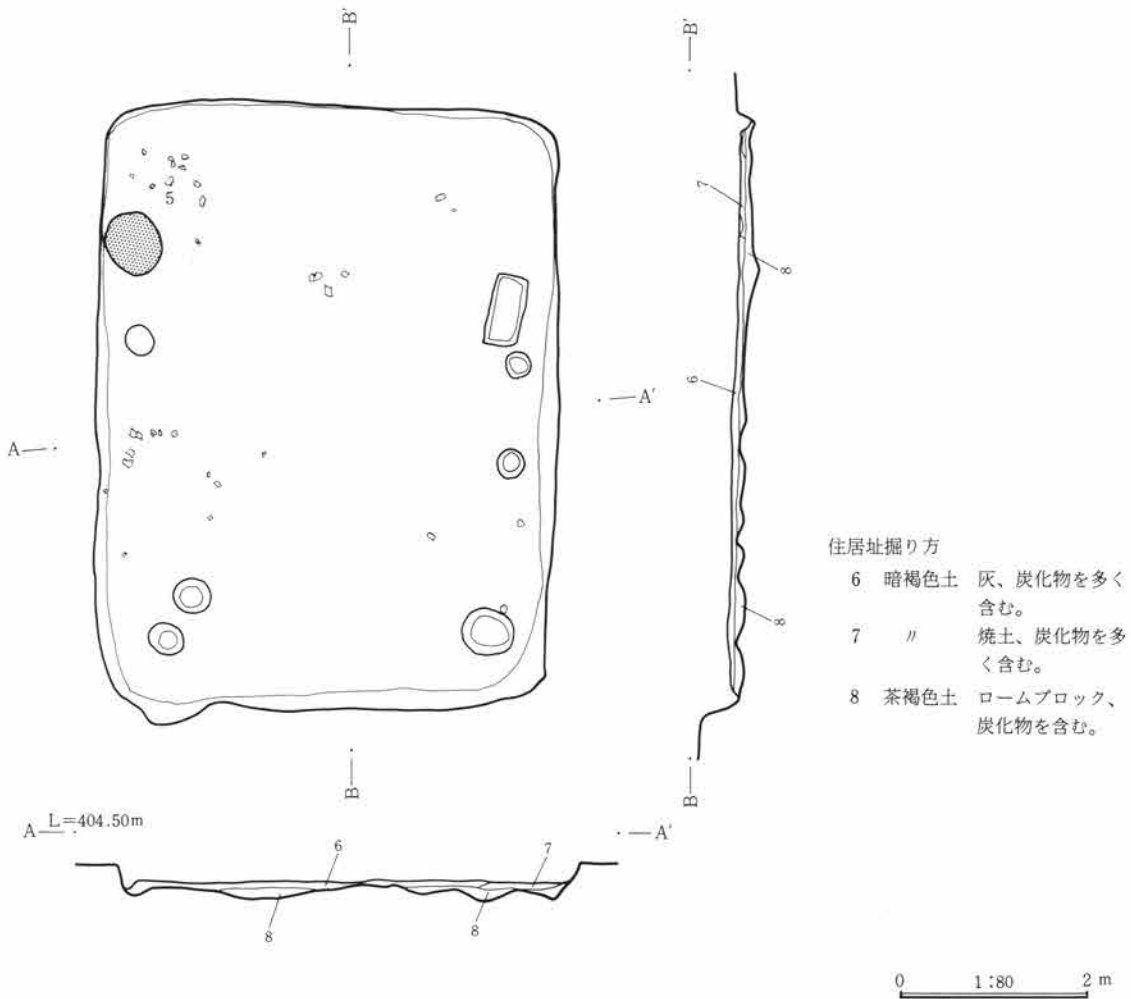
位置 31～34D-45～47グリッド。形態的、方位的に近い関係にある第41号住居址が東北東に、第46号住居址が西南西に近接する。 **方位** 東。 **形状** VI層下面に検出され、長径550cm短径400cmを測るやや菱形に近い隅丸方形を呈す。 **覆土** VI～VIII層土を中心とする土壌で覆われている。住居全体を覆うものがVIII層土ブロックを多く含むのに対し、壁端に堆積するものはこのブロックを含まない傾向がある。 **床面** 床はVI層土による貼り床で、床面付近には焼土化した部分为数カ所認められている。床面の広さは、500×390cmを測り、幅16～48cm深さ6～13cmの壁溝が全周している。 **柱穴** ピットは3カ所あり、P₁径42×38cm深さ54cm、P₂径66×52cm深さ44cm、P₃径30×22cm深さ42cmを測る。これらのうち主柱穴を特定することはできないが、P₂は位置的にその可能性がある。また一方で、このP₂と隣接するP₃は入口の梯子に係わるものと考えられる。 **炉** 炉は北壁寄り中央に位置する。炉床は径54cmを測る。 **掘り方** 確認面より48cmに掘り下げられ、更に幅62～96cm深さ16cm以下のしっかりした溝を掘って全周させている。また住居中央に径104×56cm深さ20cmを測る楕円形の土坑が掘り込まれ、その西に径33×32cm深さ64cmを測るピットが開けられている。 **遺物** 床直より、甕(1・2・3)、鉢(4)、短頸壺(6)、台付甕脚部(7)が出土している。

(石守)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第19図 第46号住居址・炭化材出土状態及び炉址



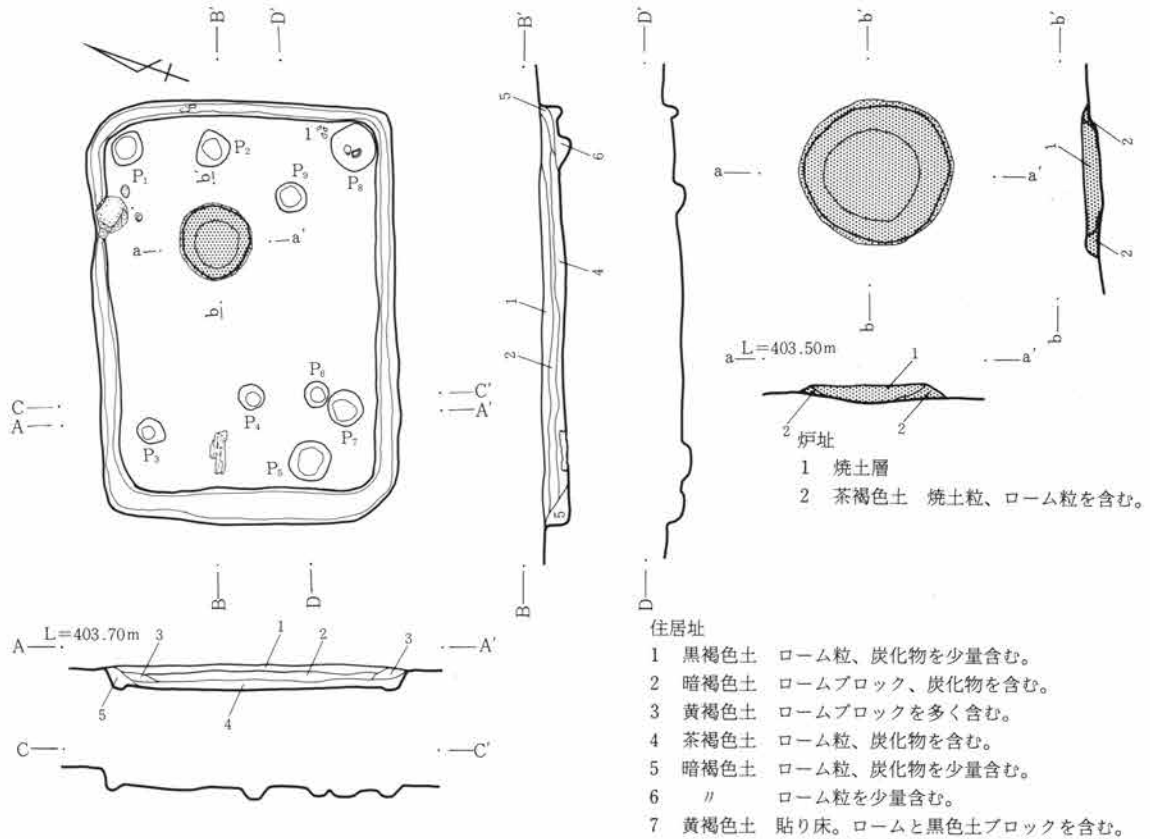
第20図 第46号住居址掘り方

第46号住居址

位置 36～40D43～46グリッド。住居群のほぼ中央に位置し、東に第44号住居址、西に第46号住居址がありその中間に位置する。 **方位** 東北東。 **形状** 643×492cmを測り、ややコーナー部に丸味を持つ長方形を呈す。壁高は18cmを測り、掘り込みは浅い。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。 **覆土** 炭化物・VIII層土粒を含むVII層土を主体に堆積している。床直上では、炭化材、焼土、灰が多く見られた。焼失家屋と考えられる。 **床面** VII層土にVIII層土ブロックを混ぜて貼り床としている。床は中央部で堅くしまっているが、周辺部は軟弱である。床面の広さは584×452cmを測る。周溝は幅18cm深さ12～20cmあり住居址を全周している。 **柱穴** 住居址内にピットは5基確認されたが、その配列が不規則で柱穴と認めがたいものがある。それらの規模はP₁径55×50cm深さ20cm、P₂径67×60cm深さ50cm、P₃径32×32cm深さ38cm、P₄径40×40cm深さ10cm、P₅径35×34cm深さ12cmである。 **貯蔵穴** 北東コーナーの南寄り、西壁に接して径50cm深さ19cmのものがある。貯蔵穴内からは遺物等の出土はなかった。 **炉** 中央やや東寄りに、径62×60cm焼土の厚さ2cm程の地床炉がみられた。 **掘り方** 貼り床の下約20cm程が掘り込まれていた。床下からは若干の土器片と、ピットが検出されたが、これらは本住居址より古い時期のものであった。 **遺物** 本住居址からの出土遺物は、比較的多く、床面直上から、埴 (5)、小型の甔 (6)、壺 (3・4)、甕 (1・2) などが出土している。

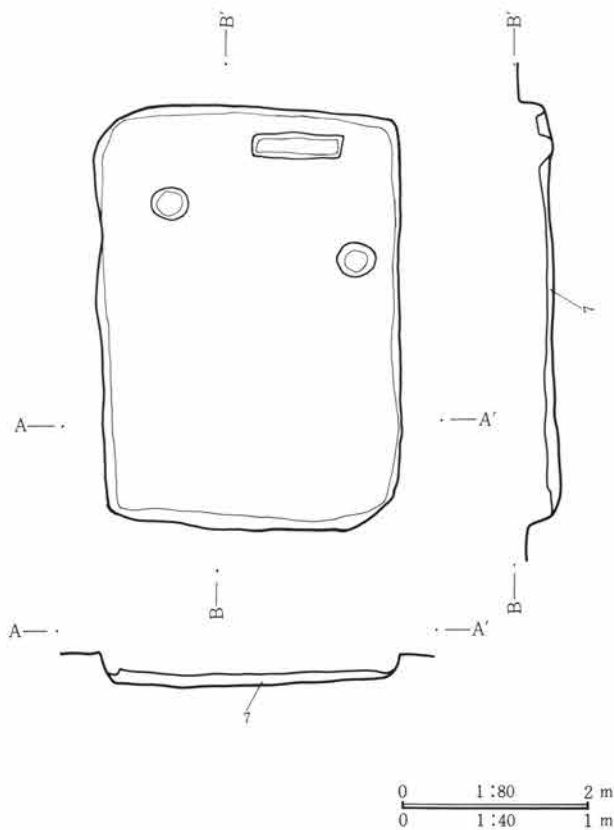
(関根)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

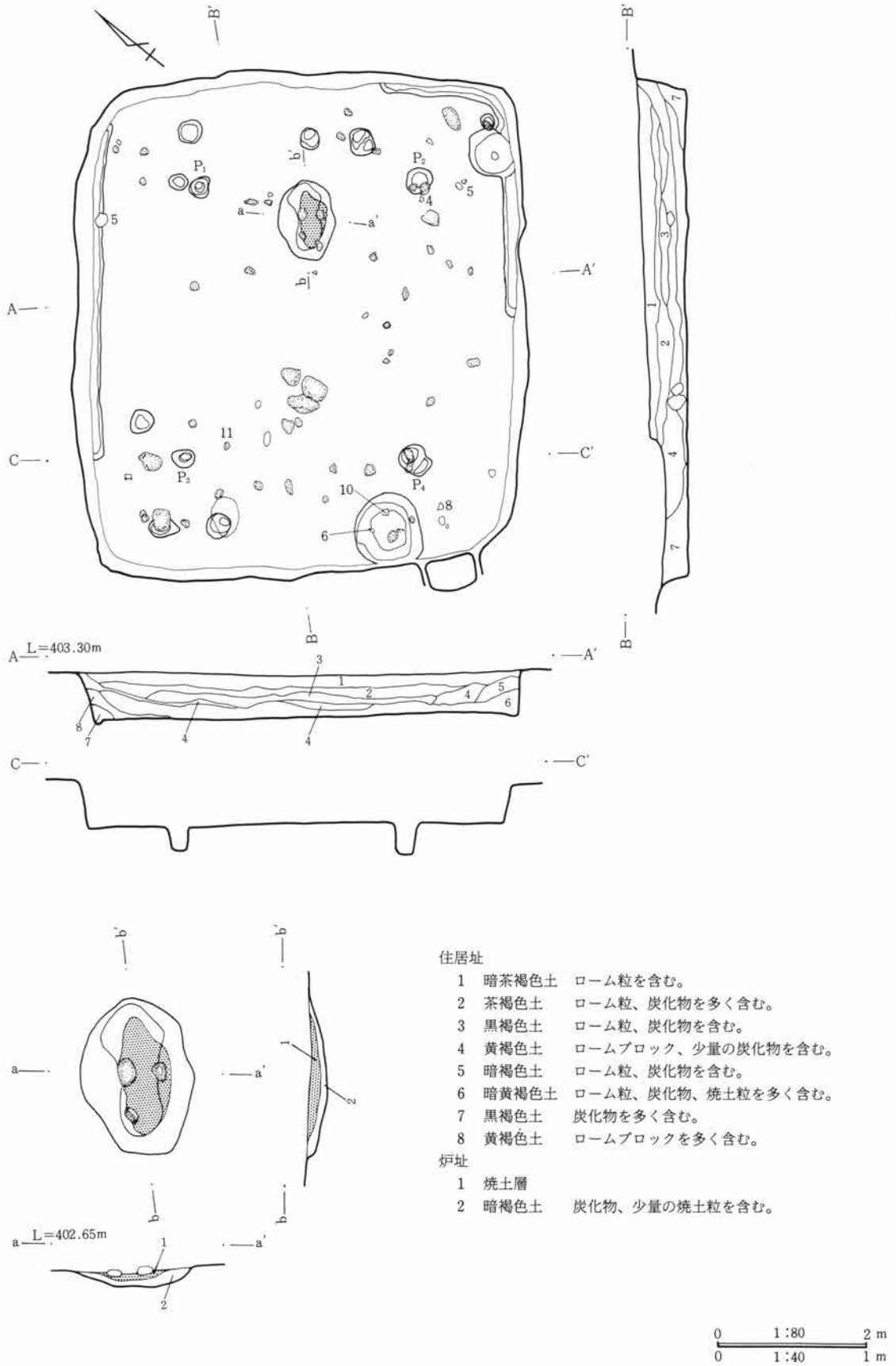


第47号住居址

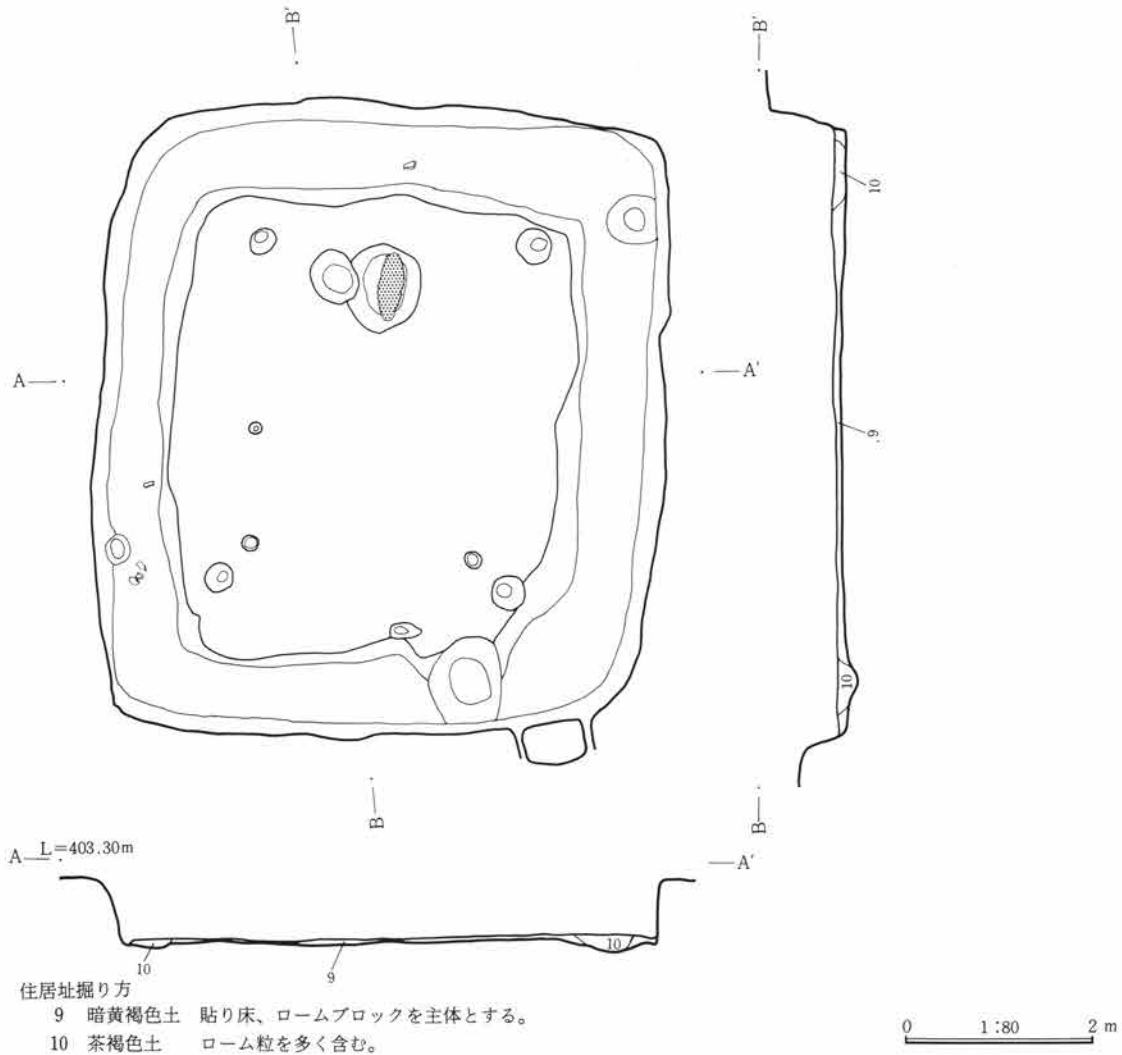
位置 49～52 E 02～04グリッド。南西に第48号住居址が近接する。 **方位** 東北東を向く。
形状 VI層下面で確認され、440×320cmの隅丸方形のプランを呈する。壁高は22cmを測る。
覆土 VII・VIII層土で覆われ、炭化物を含む。
床面 VIII層土をベースとした土による貼り床で390×290cmの広さを持ち、幅12～23cm深さ10cmを測る壁溝が全周している。 **柱穴** ピットは9カ所あり、これらは径26～52cm深さ6～34cmを測る。主柱穴は位置的にP₁・P₃・P₆またはP₇・P₈が考えられる。 **炉** 住居中心より長軸方向北東寄り、短軸方向北寄りに位置する。径76×82cm深さ16cmに浅く掘り込まれた地床炉である。 **掘り方** 確認面より36cm以内に掘り込まれている。径98×14cm深さ8cmを測り、方形の土坑の他、径約20cm深さ5cm以下の浅い掘り込みがある。 **遺物** 床直より小型甕が1点出土している。 (石守)



第21図 第47号住居址・掘り方及び炉址



第22図 第48号住居址及び炉址

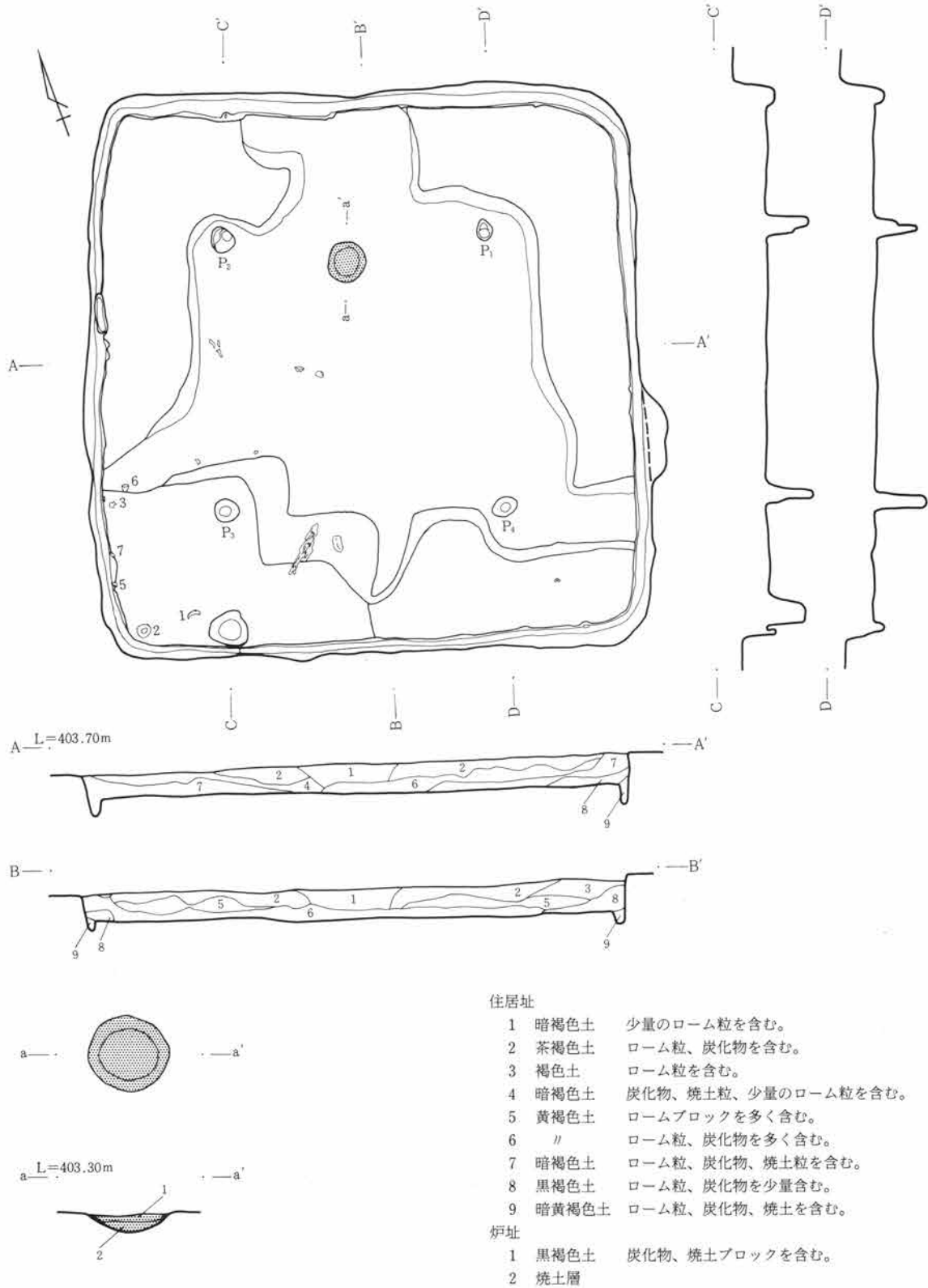


第23図 第48号住居址掘り方

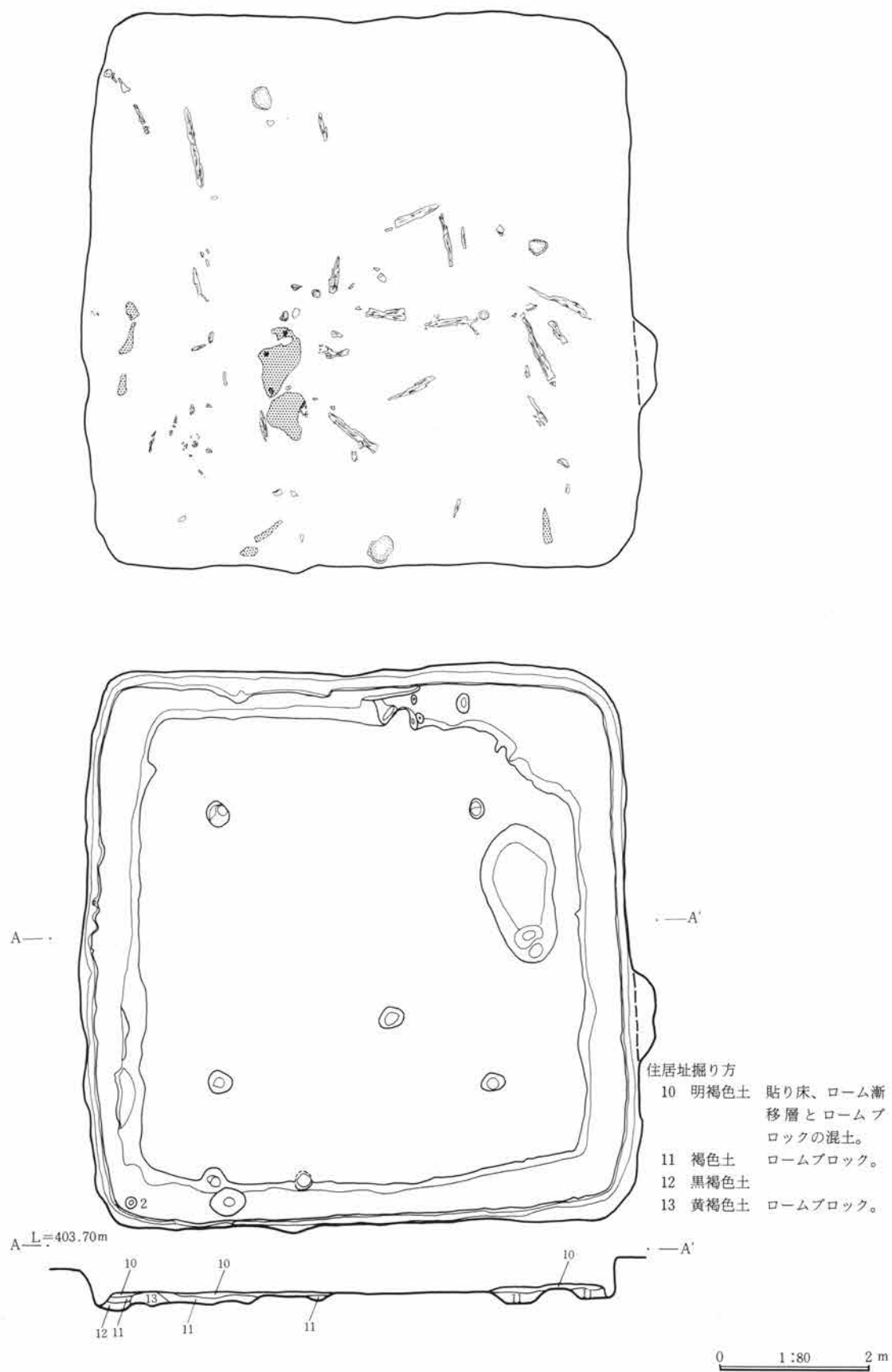
第48号住居址

位置 54~58D47~51グリッド。調査地のほぼ中央西寄りの所にあり、第47号住居址の北西に位置する。
方位 東北東を向く。 **形状** 住居址の径724×600cmを測り、コーナー部に丸味を持つ正方形のプランを呈する。壁高は、52cmと高く、VIII層土を掘り込んでおり、垂直に近い立ち上がりをするしっかりしたものである。 **覆土** VI層土及び暗茶褐色土などにVIII層土粒、炭化物を含む土が堆積している。 **床面** 床面径642×565cmを測る。床は、VIII層土ブロックを主体に中央付近を堅くたたきしめた貼り床で、壁際では、茶褐色土にVIII層土が混入した床で軟弱なものである。溝は、幅20cm深さ15cm程のものが、西壁の半分と、北東コーナーの一部に確認された。 **柱穴** 住居内ピットはいくつか確認されているがそのうち柱穴となるものは4本ある。P₁径28×28cm深さ36cm、P₂径34×34cm深さ44cm、P₃径30×24cm深さ32cm、P₄径46×40cm深さ42cmである。 **貯蔵穴** 東北コーナーと、南東コーナー近くに壁に接して2基確認された。規模は北東側のものが、径70×60cm深さ45cm、南東側のものが径100×90cm深さ35cmであった。南東側貯蔵穴からは台付甕脚部(10)が出土している。 **炉** 地床炉で、径80×70cm燃焼部の掘り込みは15cm程である。 **掘り方** 壁にそって、幅84~58cm深さ30cmの溝が周っている。 **遺物** 前記の脚部(10)の他床下土坑から甕(6)、床直からは埴(11)が出土している。図示したその他の遺物は覆土中のものが多い。(関根)

第三章 検出された遺構と遺物



第24図 第49号住居址及び炉址



第25図 第49号住居址炭化材出土状態及び掘り方

第三章 検出された遺構と遺物

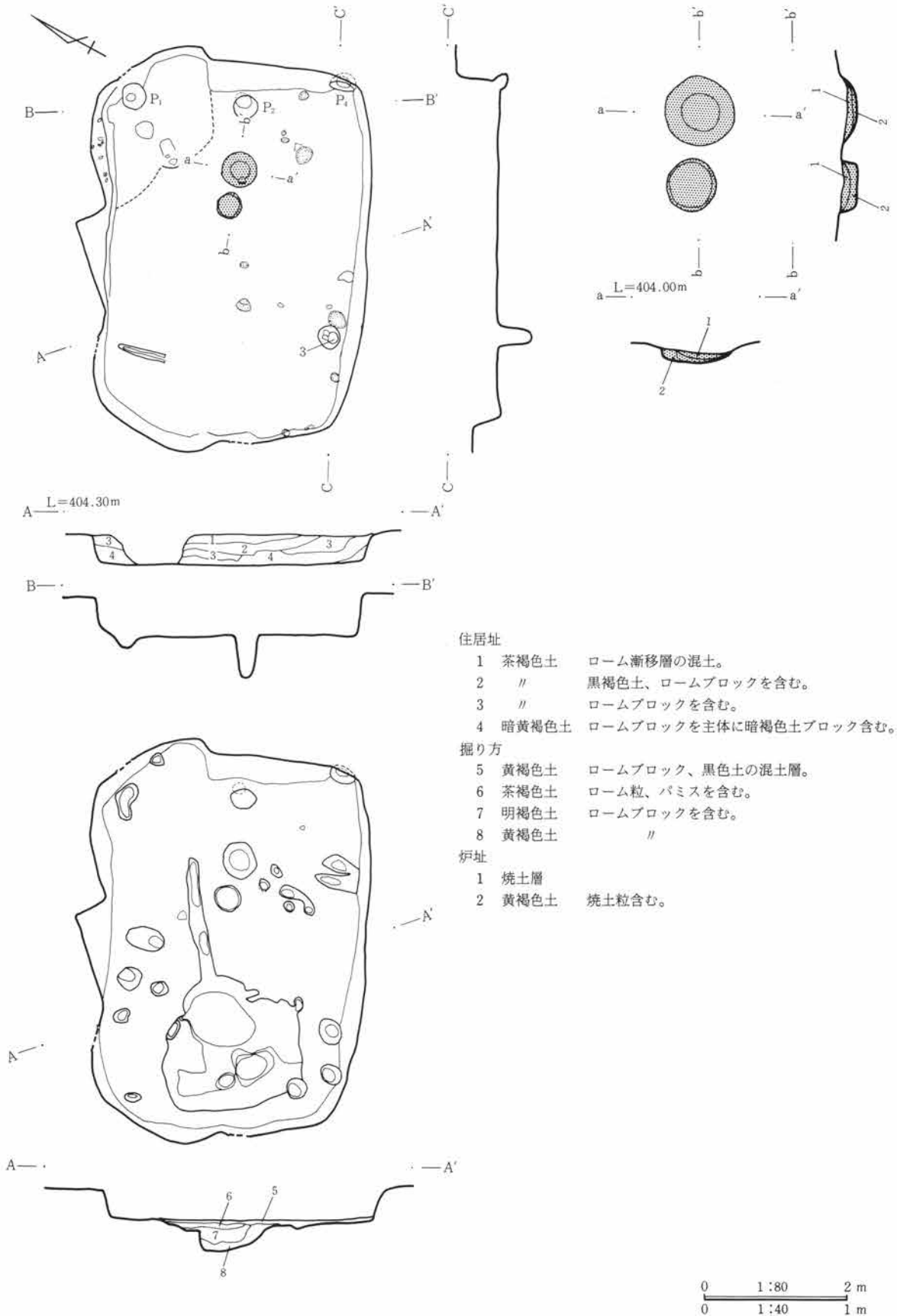
第49号住居址

位置 44～47D38～42グリッド。調査地の中央南寄り、第46号住居址の西方に位置する。 **方位** 北北東向く。 **形状** 平面径732×722cmを測りコーナー部に丸味を持った正方形のプランを呈する。壁高は42cmを測り、Ⅷ層土を掘り込んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。 **覆土** 暗褐色、茶褐色の土に、炭化物焼土、Ⅷ層土粒などを含む土層となっている。床に近い土層ほど、焼土、灰、炭化物が多くなり、床上には炭化材が多く見られた事から、焼失家屋と思われる。 **床** 中央部は、第Ⅷ層をそのまま堅くたたきしめたもので、壁よりの所で明褐色土とⅧ層土ブロックの混入した貼り床で、やや軟弱なものである。また、壁から100cmの幅で中央より5cm程の高まりを持った床が周っている。 **柱穴** 4本確認された。P₁径36×30cm深さ56cm、P₂径28×20cm深さ56cm、P₃径32×32cm深さ62cm、P₄径34×24cm深さ72cmを測り、住居址の対角線上に並ぶものである。 **貯蔵穴** 南壁西側に、壁に接して径48×46cm深さ50cmの貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内からは、炭化物が見られただけで土器等の遺物は検出されなかった。 **炉** 北側の2本の柱穴の中間やや内側に径54×50cm深さ8cmの地床炉があり、炉内には焼土、炭化物が多く見られた。 **掘り方** 住居中央部はそのまま床にしているため掘り方はないが、壁から100～200cmの幅で深さ30～40cmの溝が周っている。 **遺物** 覆土中からは、小破片の土器や、礫が出土している。また炭化材は床に密着して出土しており、本住居のものと推定されるが、住居の構造を復元するには至らなかった。また南西コーナー付近から、台付甕脚部(4・5・6・7)、壺の口縁部(2)、小型埴(3)が並んだ状態で出土している。(関根)

第50号住居址

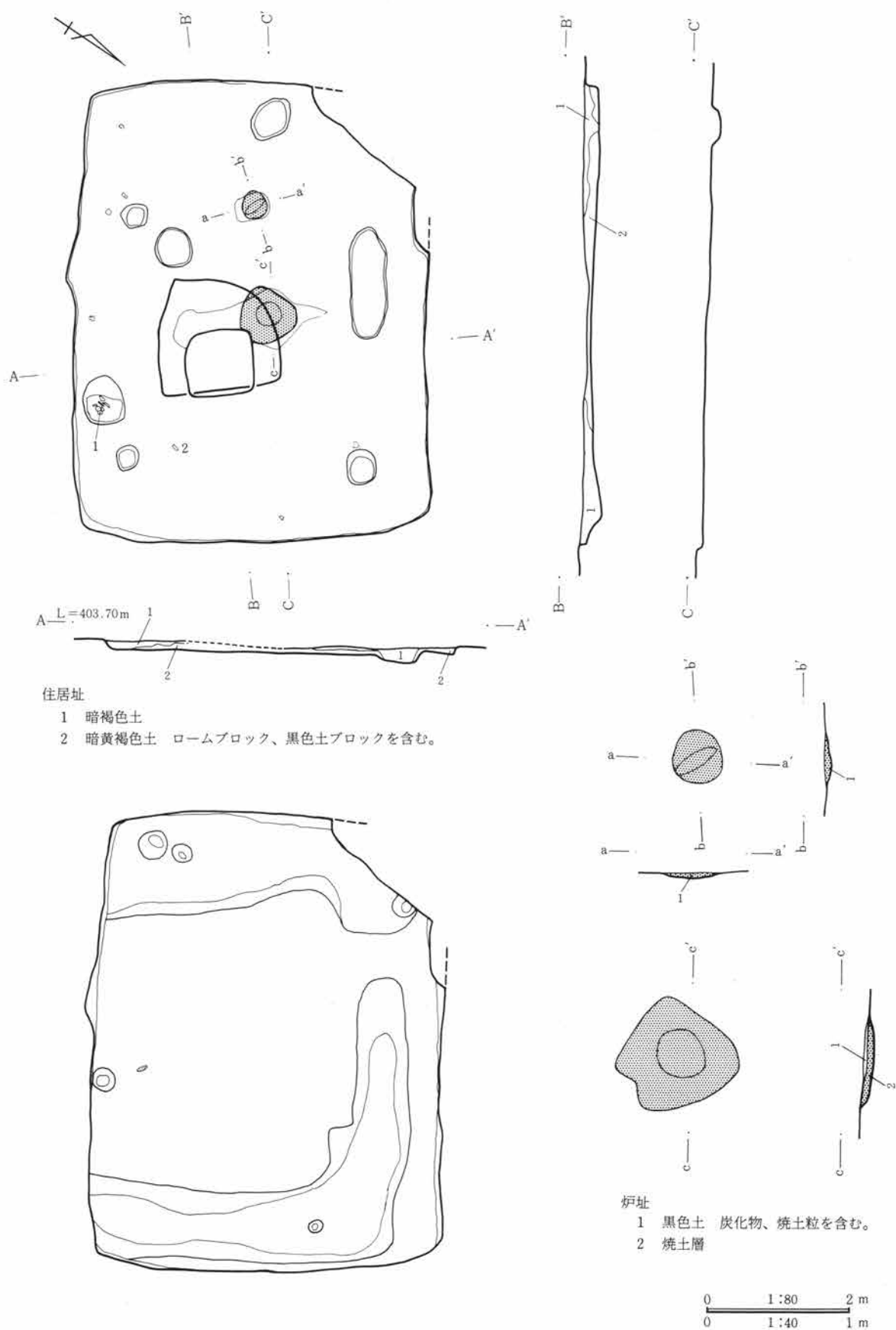
位置 33～36D38～41グリッド。北7mに第46号住居址、北北東8.5mに第44号住居址が、西には第49号住居址が13.5mを隔てて位置している。また、住居内の北壁部分を45号土坑が切り、住居西部には第254号土坑が覆土内に作られている。住居南西部も土坑によって切られており、この切り合いによって住居床面が壊されている。 **方位** 東北東。 **形状** 長径540cm、短径365cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は現状で66cmを測る。 **覆土** 第Ⅵ～Ⅷ層土によって覆われている。特に土層群のグループ分けはできない。 **床面** Ⅵ・Ⅷ層土をたたいて作られた貼り床である。壁溝は認められない。 **柱穴** ピットは4カ所あり、それぞれP₁径36×32cm深さ6cm、P₂径35×32cm深さ57cm、P₃径32×30cm深さ45cm、P₄径50×35cm深さ8cmを測る。P₃は支柱穴の可能性もあるが、総じて支柱穴は特定できなかった。そこで壁外柱穴の遺存の可能性を考えて、住居周囲の確認面にピット等の検出を試みたが、本住居址に関連するピットは確認できなかった。また、P₃の土層観察において、柱痕は径10～15cmを測る。P₂及びP₄は壁に向かって斜めに掘られている。 **炉** 炉は地床炉であり、住居北東よりに確認された。床面を4cm程掘り窪めて作り出し、炉床は径57×55cmを測る。この炉の南西に隣接して床面を4cm程掘り窪めて作り出した径36×33cmの焼土面があり、この焼土面も炉として使用された可能性がある。 **掘り方** 確認面より53cm以内の深さに掘り込んでいる。住居南西部に本住居を切る土坑の北部分に、径95cm深さ45cmを測り楕円形のプランを呈する床下土坑が発見されている。この床下土坑はⅦ・Ⅷ層土によって覆われているが、性格については不明である。また床下土坑から幅20cm長さ85cmの溝状の浅い掘り込みが北に向かって延びている。 **遺物** 遺物は覆土中のものが多く、小型甕(3)が床下土坑より出土している。(石守)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第26図 第50号住居址・掘り方及び炉址

第三章 検出された遺構と遺物



第27図 第51号住居址・掘り方及び炉址

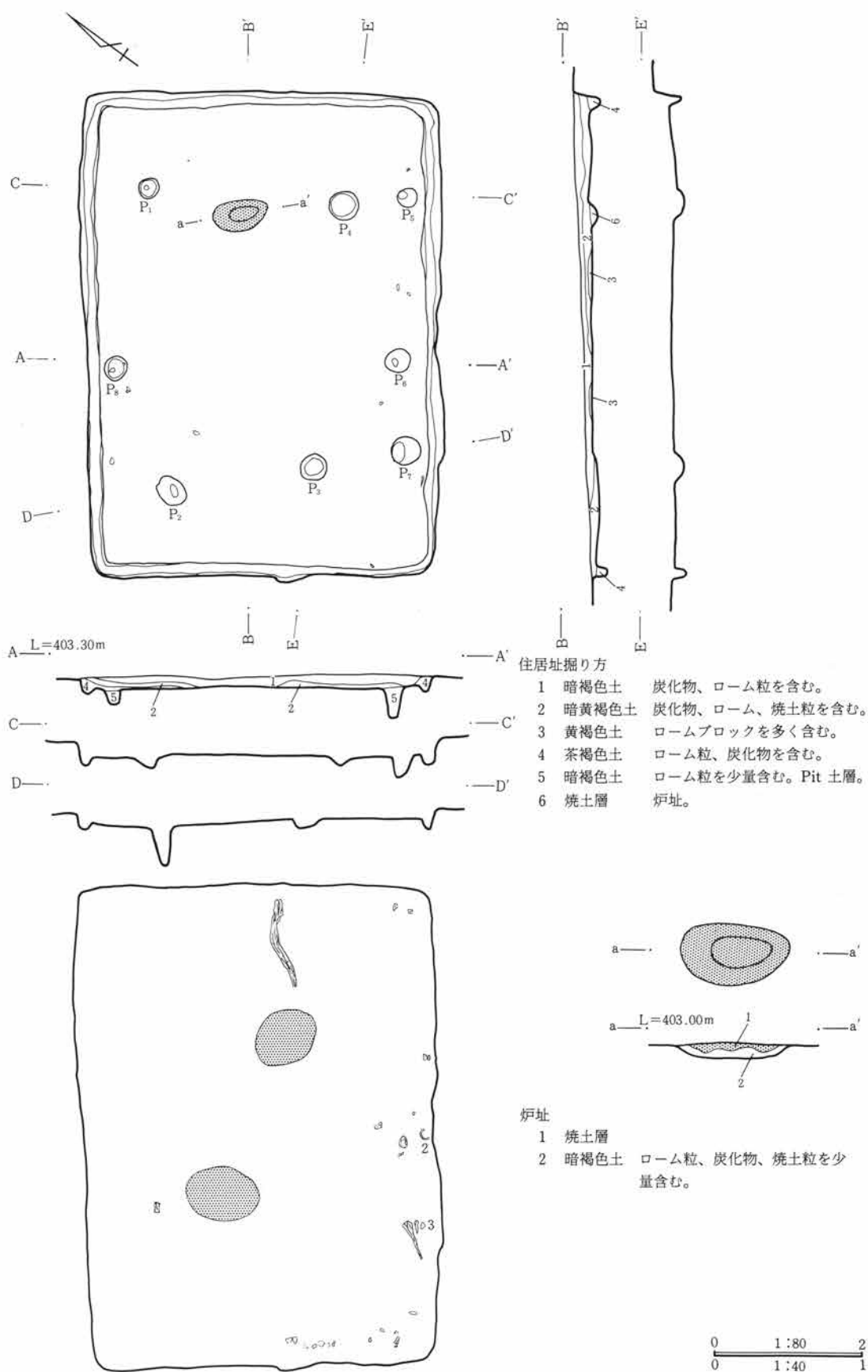
第51号住居址

位置 36～40D29～33グリッド。調査地の南寄りにあり、第148号住居址の北側に隣接している。 **方位** 東北東を向く。 **形状** 平面径634×490cmを測り、コーナー部に丸味を持ち、北壁南壁がややふくらみを持つ長方形のプランを呈する。西コーナーと、住居址中央部が攪乱を受けている。壁高は7cmと低く、プランのはっきりしない部分もあり残存状態の良くない住居であった。 **覆土** 暗黄褐色土にⅧ層土ブロック、炭化物を含む土で覆われている。 **床面** 床は、茶褐色土にⅧ層土ブロックを混ぜた貼り床である。床中央部は比較的堅くしっかりしているが、床周辺は堅くなく軟弱である。周溝は確認できなかった。 **柱穴** 本住居址内からは、ピットが数基検出されたが、掘り込みが浅く、柱穴になるような配置ではないため、柱穴とする確証が得られなかった。 **貯蔵穴** 南壁東寄りに、壁に接して径64×64cm深さ30cmの貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内は、炭化物、Ⅷ層土粒の混じった土が堆積しており、S字状口縁の台付甕の上半部(1)の大型破片が出土している。 **炉** 住居址のほぼ中央と、南西寄りの2カ所に地床炉を検出した。中央部のものは径80×80cm深さ10cmで焼土が8cm程堆積している。南西寄りのものは、やや小さく、径40×35cm掘り込みの深さ10cm程で焼土が堆積している。 **掘り方** 住居中央部は、貼り床の下には遺構は検出されなかったが、壁際で、幅85cm深さ20cm程の溝が、東壁側を除いた三方に周っている。またこの溝の中からピットが数基検出されたが、これらの性格は不明である。 **遺物** 掘り込みが浅いため、遺物の出土量は多くなく覆土中から土器の小破片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。床直上の遺物は確認できなかった。わずかに、貯蔵穴内から出土した遺物から、本住居が古墳時代前期の所産であることを知り得たのみである。

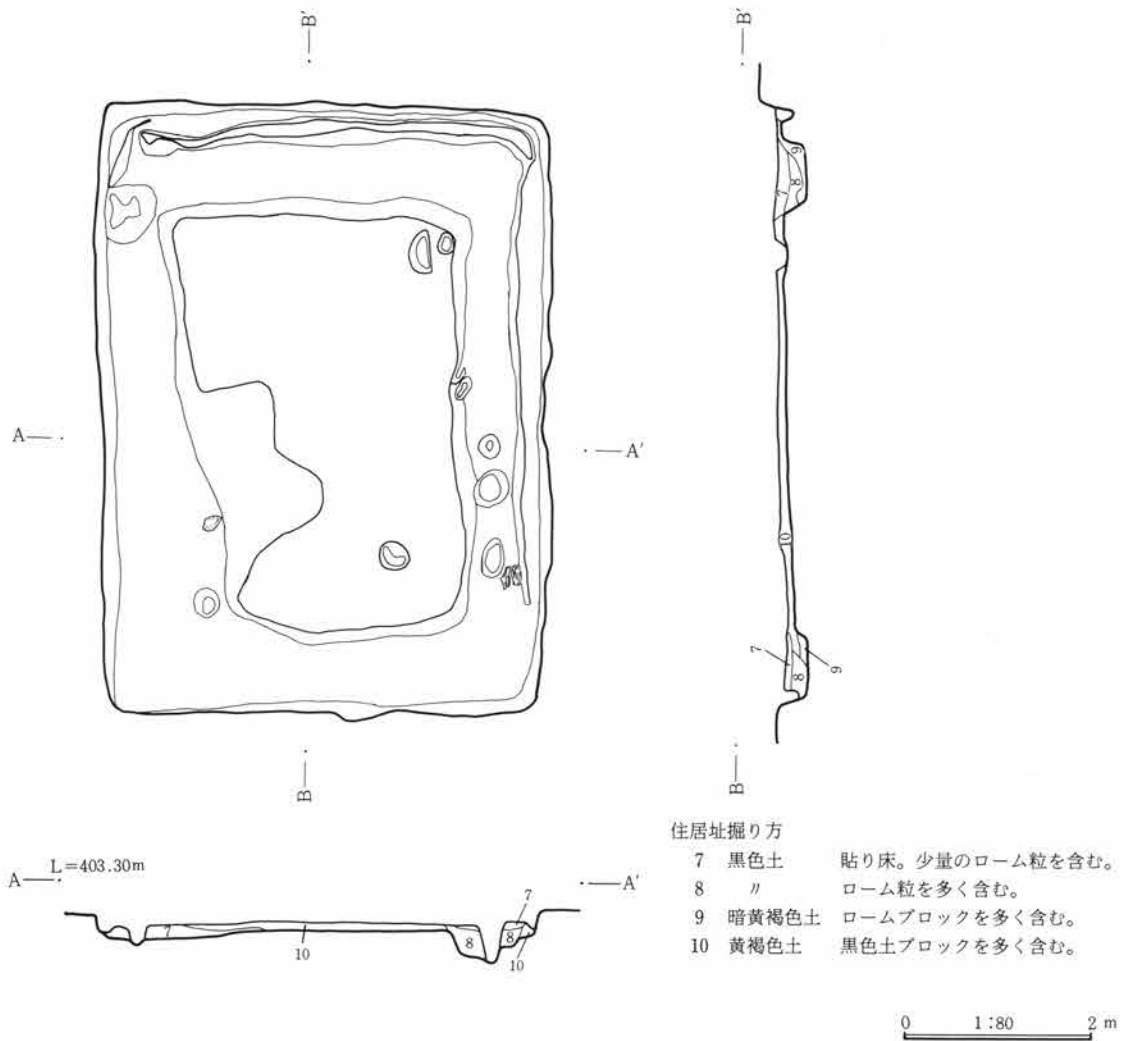
(関根)



第三章 検出された遺構と遺物



第28図 第52号住居址・炭化材出土状態及び炉址

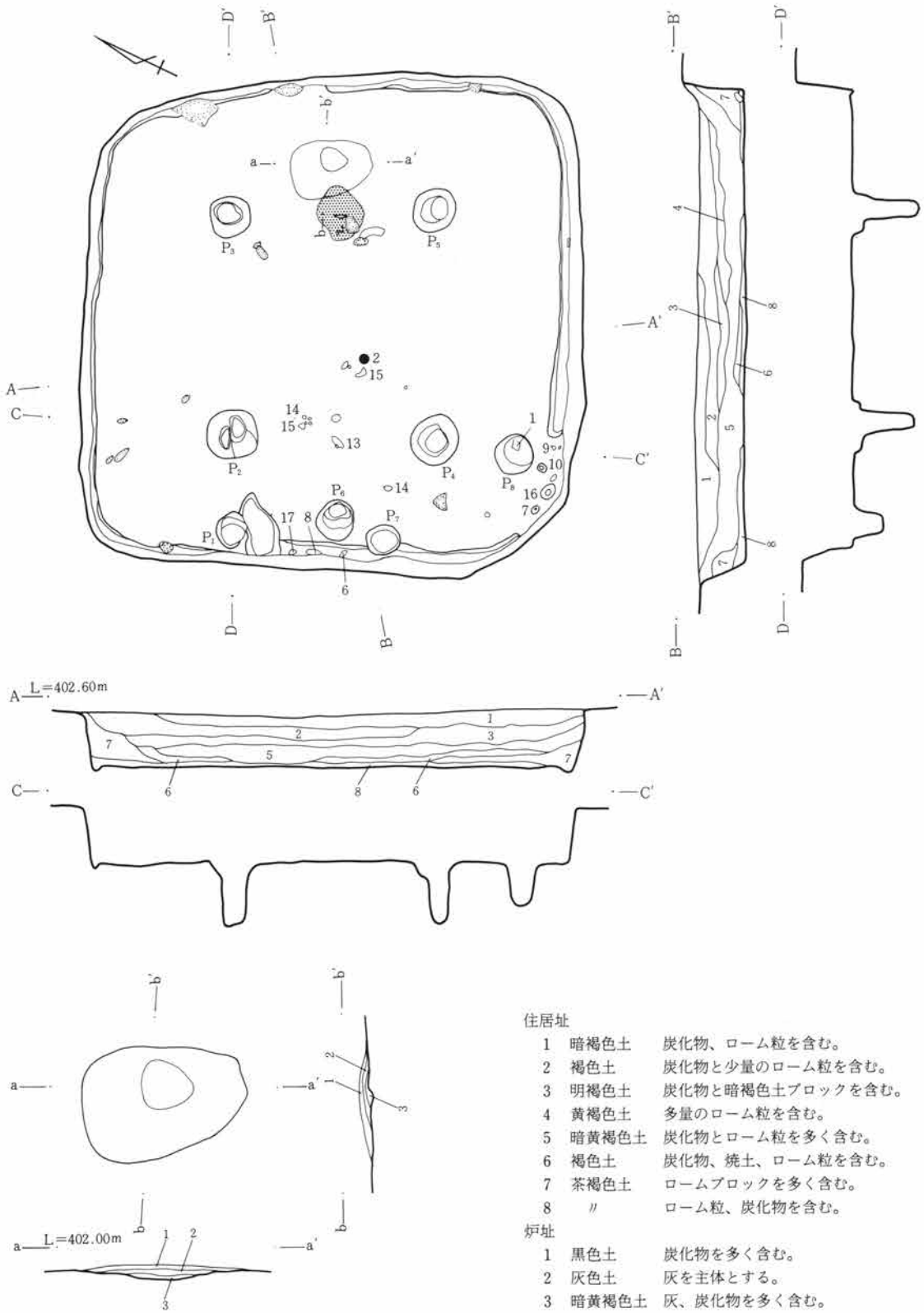


第29図 第52号住居址掘り方

第52号住居址

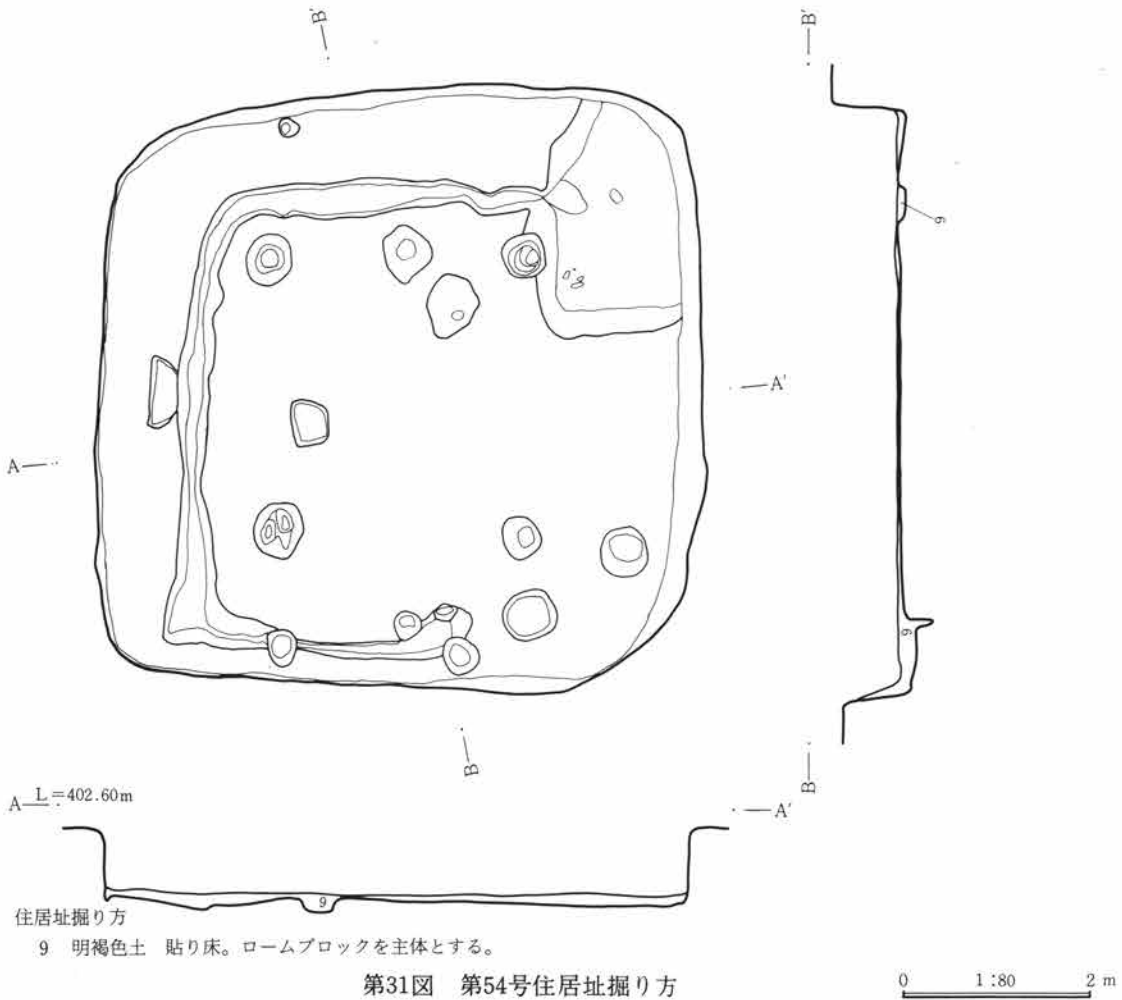
位置 50～54D39～43グリッド。東に第49号住居址、西に第54号住居址が近接する。形態的に近似する第46号住居址は東北東に22m、また形態的・方位的に近似する第56・40号住居址はそれぞれ西に24m、東北東60mに位置する。 **方位** 北東。 **形状** 645×490cmの方形のプランを呈し、壁高は18cmを測る。 **覆土** VI～VIII層土からなり、全体的に炭化物と焼土を含んでいる。若干の炭化材も遺存している。 **床面** 床面はVI層土をたたいた貼り床で、広さは600×435cmを測る。壁高は幅18cm深さ16cmのものが全周している。床面が焼土化した部分もあり、焼失家屋の可能性が考えられる。 **柱穴** ピットは7カ所検出された。主柱穴と思われるものは位置的にP₁～P₄であり、P₁径22×28cm深さ16cm、P₂径38×36cm深さ52cm、P₃径35cm深さ12cm、P₄径40cm深さ15cmを測る。この他に径33×30cm深さ28cmのP₅、径35cm深さ12cmのP₆、径35cm×32cm深さ40cmのP₇がある。P₇は断面の観察から柱痕と思われる層がある。P₅・P₇は一对を成すと考えられる。 **貯蔵穴** P₂・P₃が結ぶ延長線上、西南壁端に径40×37cm深さ25cmを測るP₈があり、貯蔵穴と考えられる。覆土は炭化物・焼土を含んでいる。 **炉** 地床炉で、北東側の柱穴P₁とP₄を結ぶ線の内側にかかり、炉床は80×42cmを測る。 **掘り方** 確認面から22cm以内に掘り込まれ、更に幅60cm深さ10～20cmを測る溝が壁端に全周している。特徴的な掘り方である。その他に顕著な遺構は認められない。 (石守)

第三章 検出された遺構と遺物



0 1:80 2 m
0 1:40 1 m

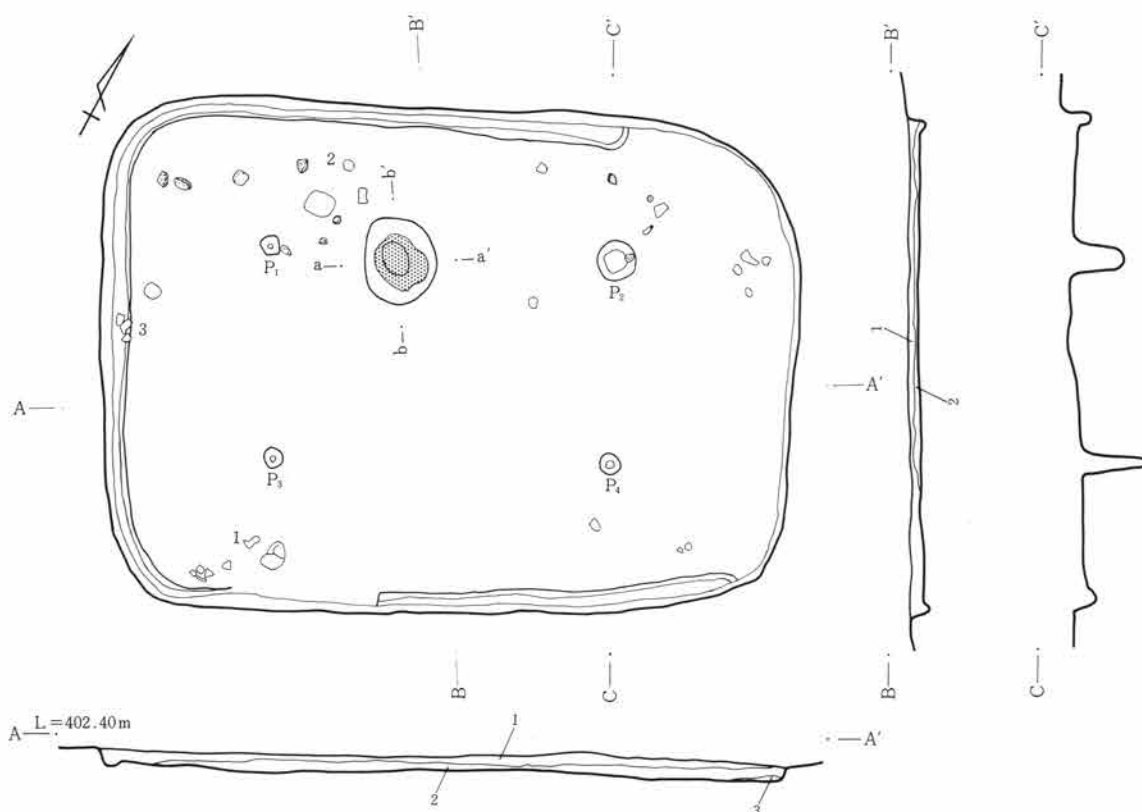
第30図 第54号住居址及び炉址



第54号住居址

位置 56～59D38～41グリッド。 **方位** 東北東。 **形状** 平面径644×644cmを測り、コーナー部に丸味を持つほぼ正方形のプランを呈する。第Ⅷ層まで掘り込まれており、壁の立ち上がりは垂直に近い角度である。 **覆土** 上層ではⅧ層土・褐色土などに炭化物・Ⅷ層土粒を含む土が堆積し、中間にⅧ層土を中心とした土が堆積する。下層はⅧ層土粒・炭化物を含む土が認められる。人為的な堆積が考えられる。 **床面** Ⅷ層土と明褐色土の混ったもので堅くたたきしめて貼り床にしている。全体に平坦である。壁溝は幅8～12cm深さ8cm程で南隅を除いて周っている。 **柱穴** 住居内にピットは8本確認された。そのうち主柱穴になると思われるのはP₂～P₅の4本でP₁とP₇は入口の施設に関係すると思われる。それぞれの規模は、P₁径52cm深さ86cm、P₂径54cm深さ78cm、P₃径66×63cm深さ85cm、P₄径64×62cm深さ80cm、P₅径50cm深さ55cm、P₆径46×38cm深さ38cm、P₇径40cm深さ45cm、P₈径54×48cm深さ42cmを測る。 **貯蔵穴** P₆とP₈が考えられるが確実なものではない。 **炉** P₃とP₅の間の壁よりに径106×74cmの地床炉を設けている。掘り込みは浅く、灰・炭化物が堆積している。西側に焼土の堆積が見られた。 **掘り方** 貼り床は明褐色土とⅧ層土ブロックが混入したもので、約10cm程の厚さがあった。床下には幅60cm深さ10cmの溝が北・東・西壁にそって延びている。この溝から本住居の建て替えがあったことが推察される。 **遺物** 本住居址は掘り込みが深いため覆土中から多く遺物が出土している(4・5・17・18)。床直からは小型埴(9)、器台(14)、鉢(8)などが出土したが、大型の甕や壺の量が少ない点が特記される。(関根)

第三章 検出された遺構と遺物

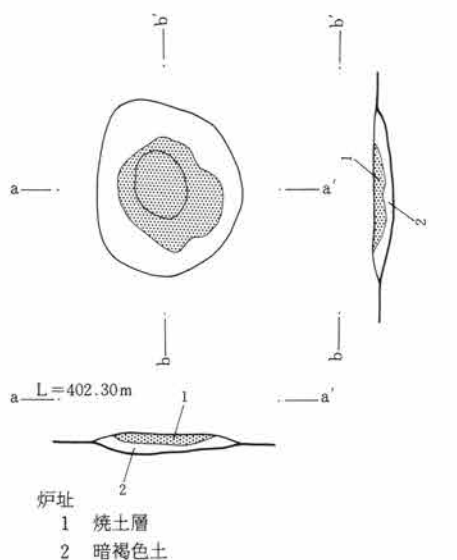


住居址

- 1 黒褐色土
- 2 茶褐色土 ローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを主体とする。硬質。

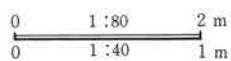
第56号住居址

位置 63~66D31~34グリッド。北側コーナーを一部第97号住居址に接している。 **方位** 東北東。 **形状** 東壁がやや狭くなり隅丸長方形のプランを呈す。 **覆土** VI~VIII層土粒を含む土が主体をなす。ほぼ水平堆積。 **床面** 凹凸が少なく平坦であるが、東南にやや傾斜している。貼り床ではなく、地山を直接堅くたたきしめて床にしている。周溝は東壁を除いて三方に周っている。幅12~18cm深さ12cm。 **柱穴** 4本確認できた。P₁径24×20cm深さ68cm、P₂径50×45cm深さ60cm、P₃径30×24cm深さ70cm、P₄径32×30cm深さ70cmを測る。ほぼ対角線上に並ぶように設けられていた。 **炉** 北壁よりの柱穴の中間にある。径90×80cm掘り込みが6cm程の地床炉である。炉内には焼土・炭化物などが堆積していた。 **掘り方** 本住居址は掘り方が認められなかった数少ない例である。 **遺物** 掘り込みが浅く遺物の出土量も多くなかった。覆土中からは甕(1)、高杯(3)の他、縄文や櫛描の施文された甕の破片(2・4~7)なども出土している。 (関根)

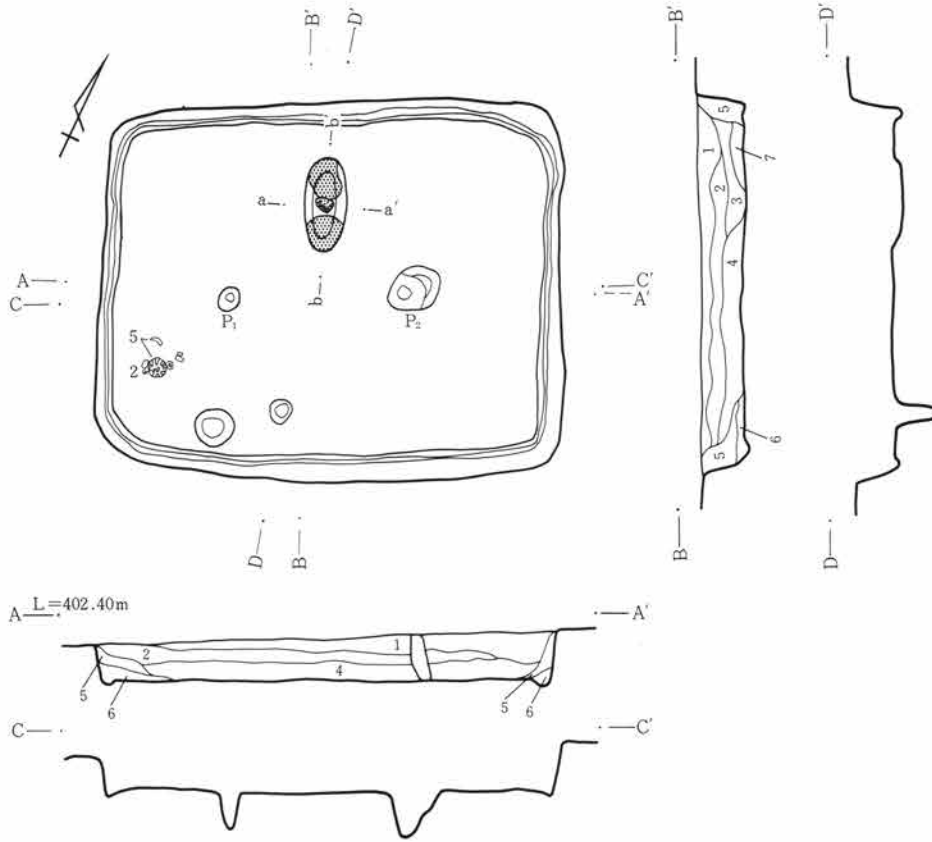


炉址

- 1 焼土層
- 2 暗褐色土

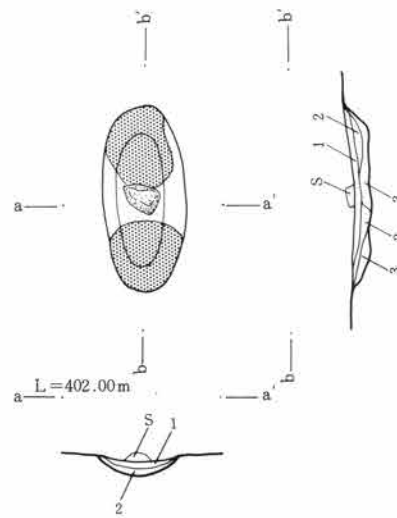
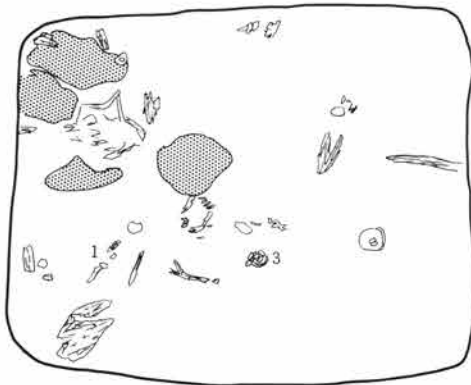


第32図 第56号住居址及び炉址



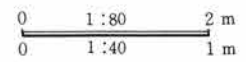
住居址

- 1 黒褐色土 少量のローム粒、焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、炭化物、焼土粒を多く含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 茶褐色土 ローム粒、炭化物、焼土を含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒、炭化物を含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒、炭化物を多く含む。
- 7 褐色土 少量のローム粒を含む。



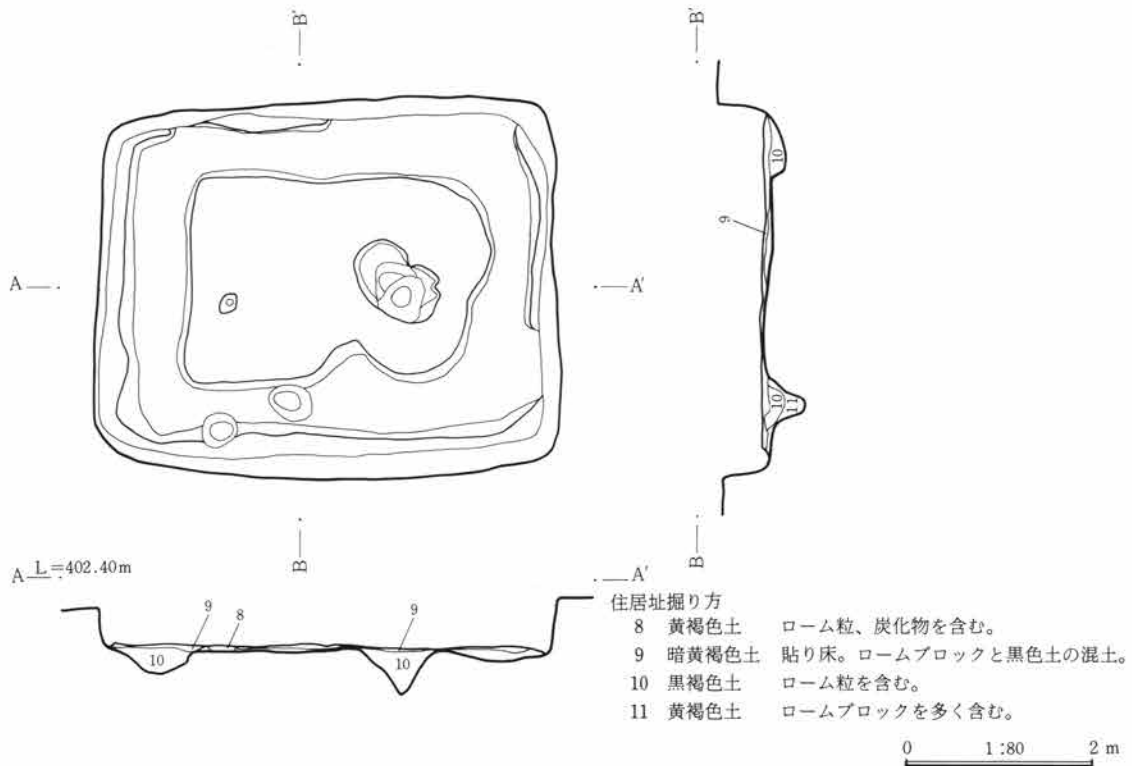
炉址

- 1 黒色土 炭化物、焼土を含む。
- 2 焼土
- 3 黄褐色土 炭化物、ローム粒を含む。



第33図 第57号住居址・炭化材出土状態及び炉址

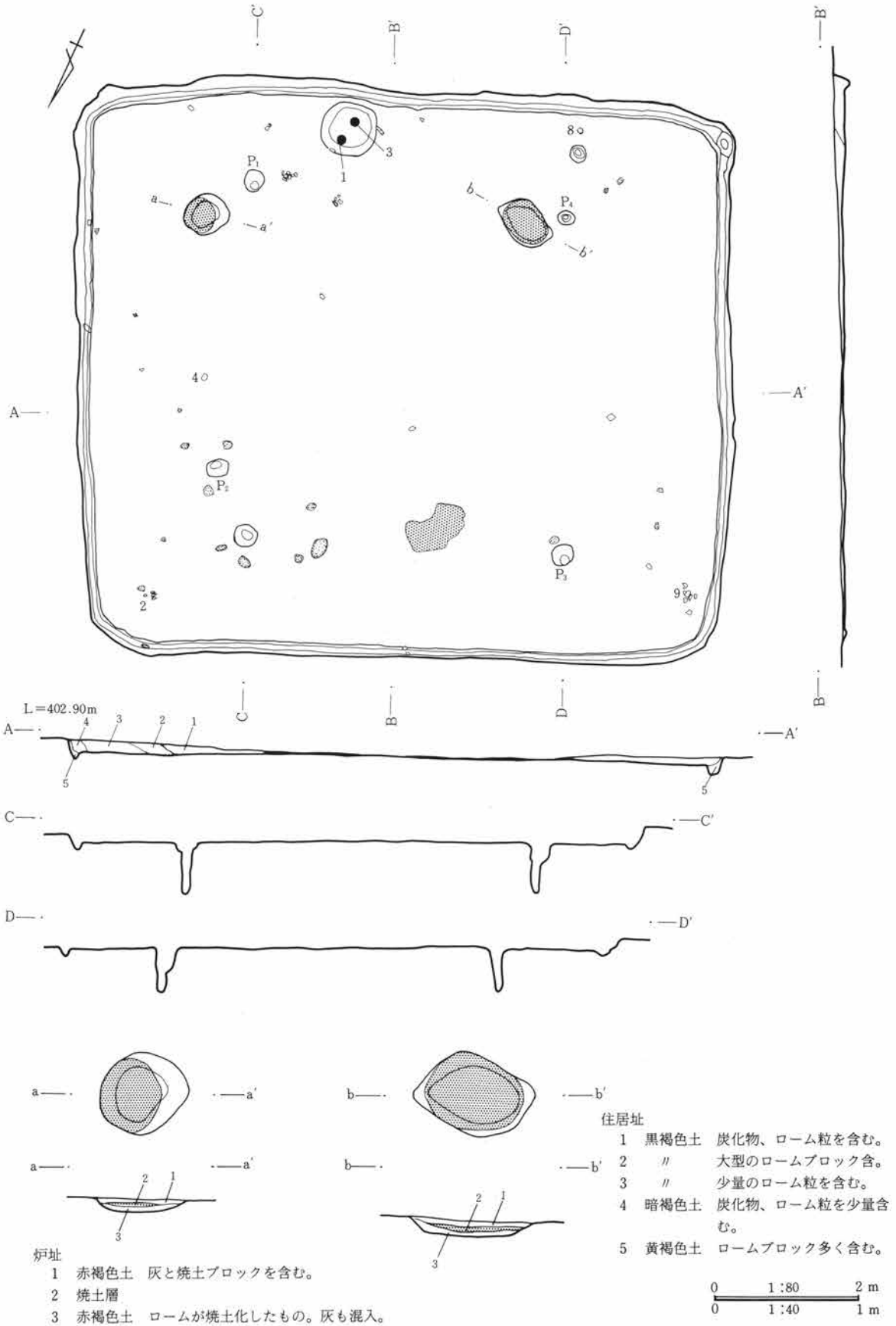
第三章 検出された遺構と遺物



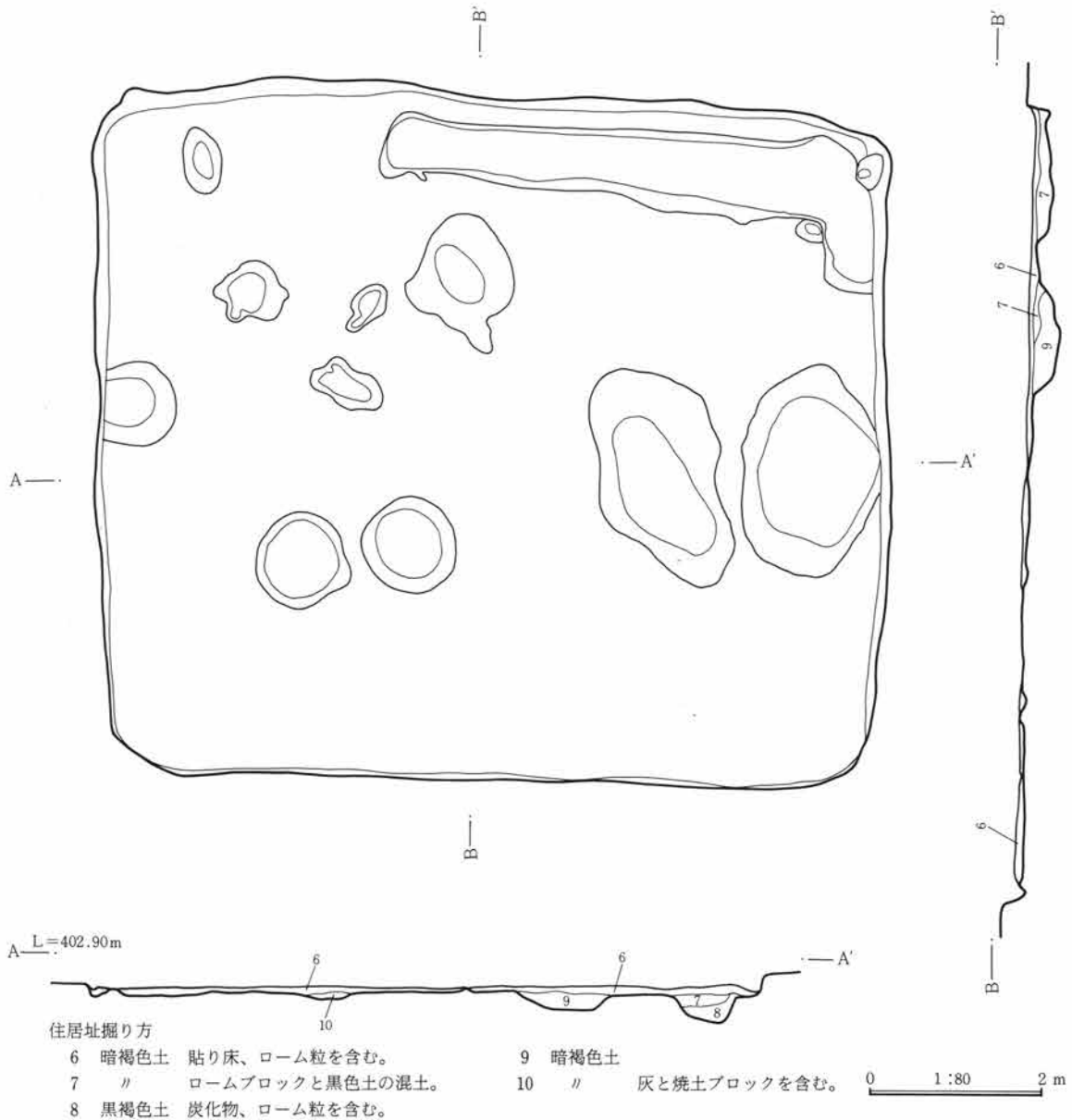
第34図 第57号住居址掘り方

第57号住居址

位置 65～67D28～30グリッド。調査地の西方にあり、第56号住居址の南西に位置する。同時期の住居址の中で最南西にある。**方位** 東北東。**形状** 平面径490×400cmとやや小型の住居である。プランは、コーナー部にやや丸味を持つ長方形を呈する。壁高は38～50cmと深くローム層中に掘り込まれている。壁の立ち上がりは、垂直に近い立ち上がりをする。**覆土** VI層土・VII層土の層に、VIII層土粒・炭化物・焼土を含む土層を主体としている。床面上に焼土・灰・炭化材等が堆積し、本住居址も焼失家屋と考えられる。**床面** 貼り床で、VI層土とVIII層土の混土層を堅くたたきしめている。凹凸は少なく平坦である。床中央部は、ロームの割合が多く光沢があり堅固であるが周辺部は軟弱である。周溝は、幅8～12cm深さ8cmのものが全周している。**柱穴** 住居址中央に長軸方向に並んで一対みられる。P₁径35×30cm深さ36cm、P₂径40×35cm深さ50cmを測る。2本しか柱穴が検出されなかったが、これは、住居址の規模によるものと思われる。**貯蔵穴** 東壁の南コーナー寄りに大小2基のピットがあり、貯蔵穴と考えられる。径45×40cm深さ50cm、径35×30cm深さ45cmを測る。内からは、炭化物が若干見られた程度で遺物は検出されなかった。**炉** 北壁寄りに径100×44cm、掘り込み8cm程の地床炉がある。炉内は焼土、炭化物が堆積していた。炉床のロームは熱によって焼土化していた。**掘り方** 貼り床は約10cm程の厚さを持つ。床下からは、幅48～74cm深さ35cmの溝が周っている。それ以外の床下遺構は確認できなかった。**遺物** 覆土中からは、礫や土器の小破片や甕(3・4)の破片などが出土した。また床面直上からは、壺(1・2)などが、炭化材に混じって出土している。(関根)



第35図 第58号住居址及び炉址

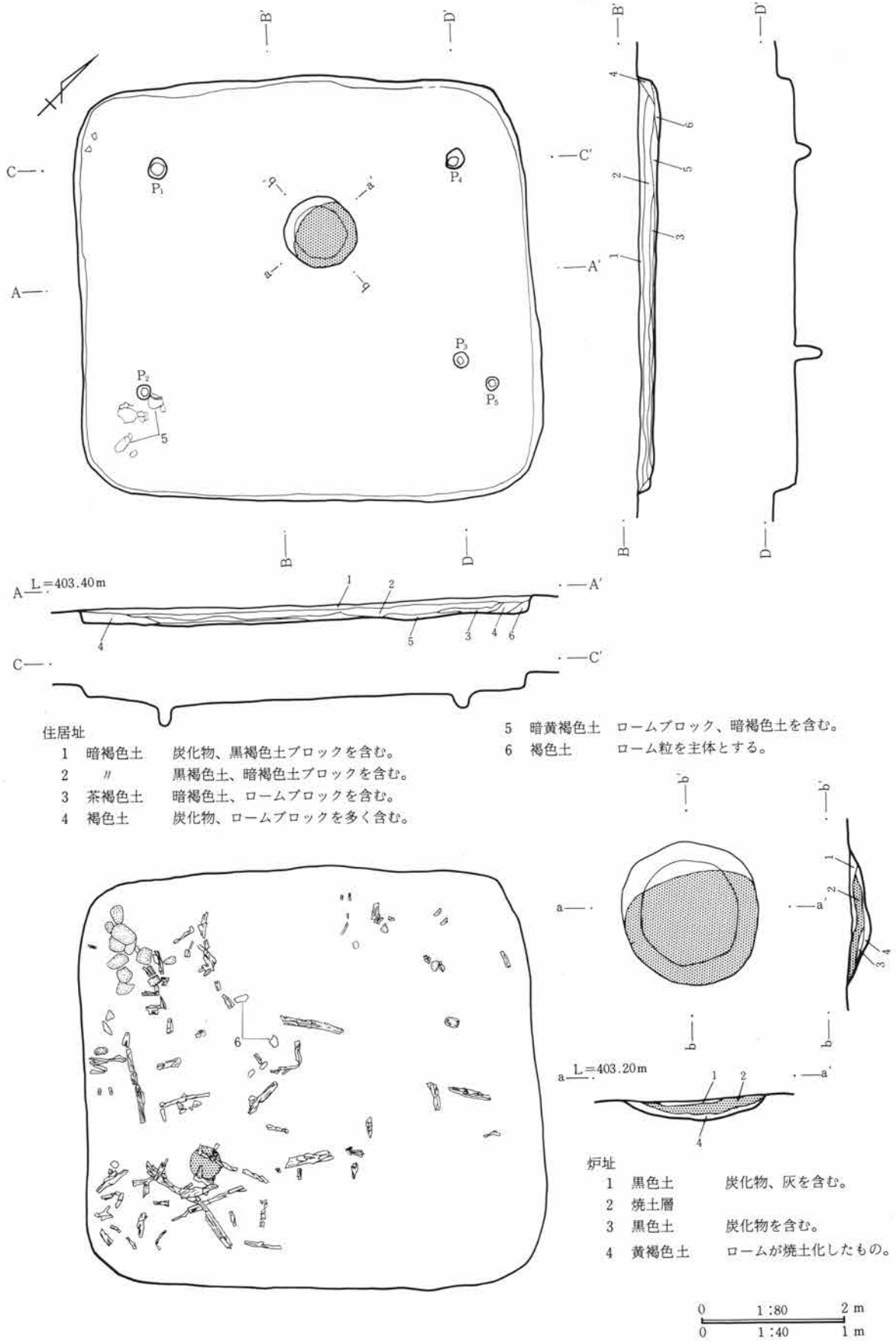


第36図 第58号住居址掘り方

第58号住居址

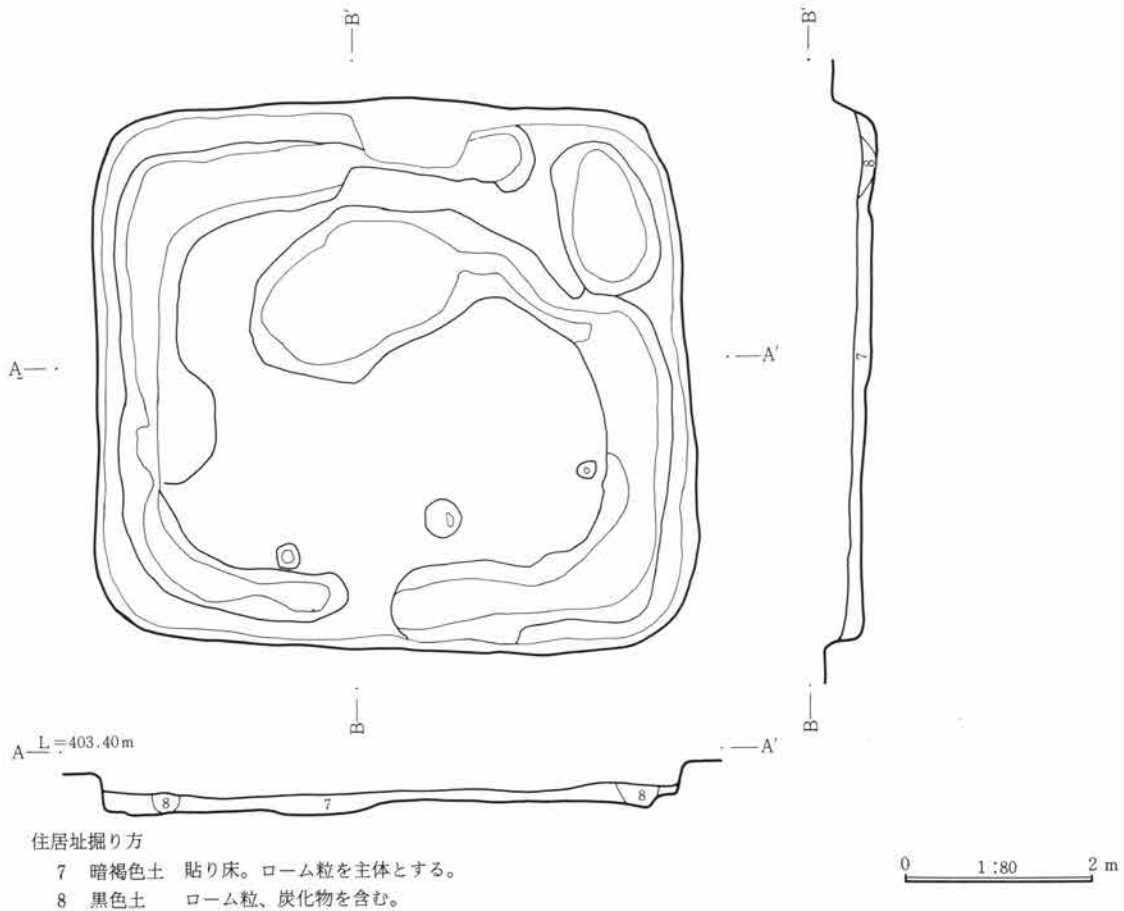
位置 52～58D31～37グリッド。 **方位** 東北東。 **形状** 950×790cmを測る方形のプランを呈する。壁高は16cmを測るが、当時の地表面はVI層中に比定され、この付近のV層下面と本住居の確認面であるVII層上層面の比高差が30cm前後であることから、当初の壁高は30～40cmと推定される。 **覆土** 住居全体はVI層土で覆われ、壁端にはVII層・VIII層土が堆積する。 **床面** 床はVII層土をたたいた貼り床で、床面の広さは872×754cmを測る。幅12～16cm、深さ8～12cmの壁溝が全周している。 **柱穴** 支柱穴と思われるものは4カ所あり、P₁径32×28cm深さ68cm、P₂径34×26cm深さ70cm、P₃径30×28cm深さ60cm、P₄径25×21cm深さ60cmを測る。 **炉** 南壁壁端やや東寄りにあり、炉床は径62×56cmを測る。 **掘り方** 確認面より38cm以内の深さに掘り下げられ、壁側に深くなる傾向がある。南壁西側には壁に沿って564×93cm深さ38cmの箱形の掘り込みがある。 (石守)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第37図 第59号住居址・炭化材出土状態及び炉址

第三章 検出された遺構と遺物



第38図 第59号住居址掘り方

第59号住居址

位置 43～47D27～31グリッド。西に7.5mを隔てて第51号住居址、南に5mを隔てて第71号住居址が近接する。大きさは異なるが、形態的、方位的に近い第59号住居址は、西北西に14m隔てて位置している。

方位 北東。

形状 長径640cm短径580cmを測る方形のプランを呈する。壁高は現状で26cmを測るが、当時の地表はVI層に比定され、本住居址付近のV層下面と確認面であるVII層上面の比高差は20～30cmであるので、当初の壁高は40～50cmあったと推定される。

覆土 住居全体を覆う土層群と、壁端に堆積するものとは大別され、前者はVI層・VII層土が中心となり、後者はVII層土を中心として、いずれもVIII層土が混入している。床面付近には炭化材が西南部を中心に多く遺存するが、これらの炭化材は8～10cmの径を測るもので、住居中央に向って陥没するような状態で出土している。

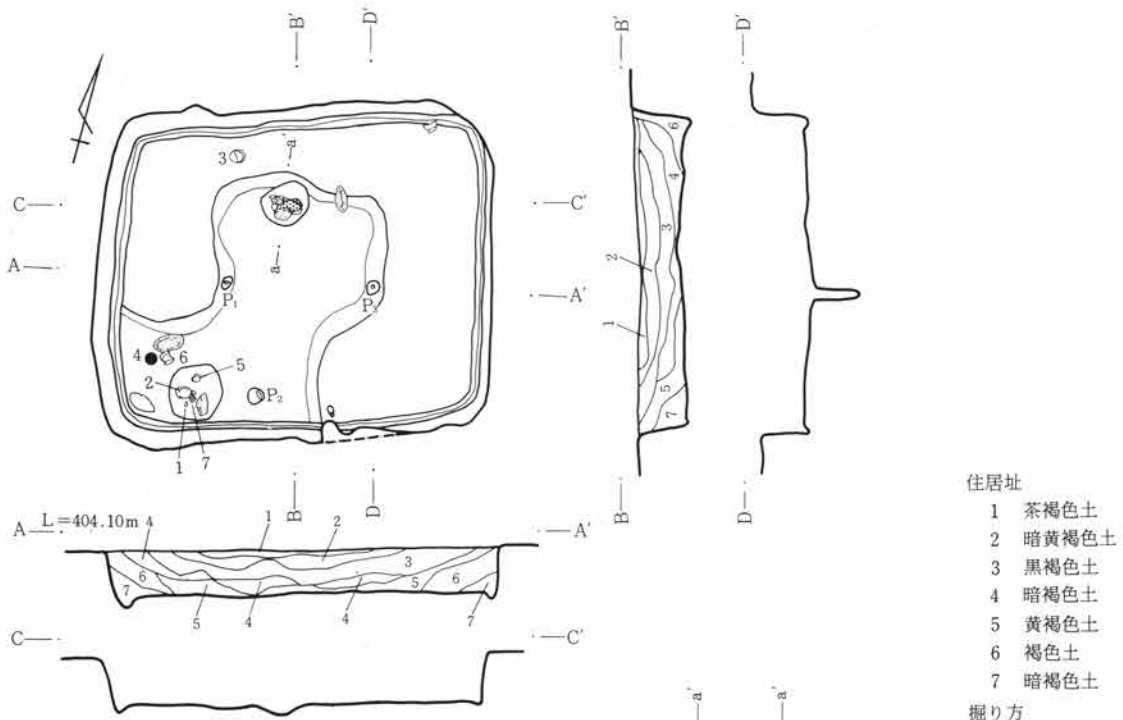
床面 VII層土からなる貼り床で、床の広さは616×570cmを測るが、壁溝は確認されない。

柱穴 ピットは5カ所あり、それぞれP₁径30×26cm深さ28cm、P₂径22×18cm深さ30cm、P₃径22×20cm深さ40cm、P₄径28×24cm深さ22cm、P₅径20×18cm深さ18cmを測る。このうち支柱穴はP₁・P₂・P₃及びP₄が考えられ、P₅は入口に関係する遺構とも考えられる。

炉 炉は深さ6cm程の浅い掘り込みで、炉体は径104×100cmの大きさを測る。

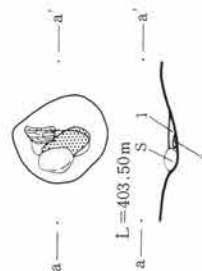
掘り方 確認面から28～32cmの深さに掘り下げられているが、壁側は10～34cmの幅でやや深くなっている。はっきりした床下の遺構は認められない。

遺物 床直上より甕(5)が出土している。(石守)

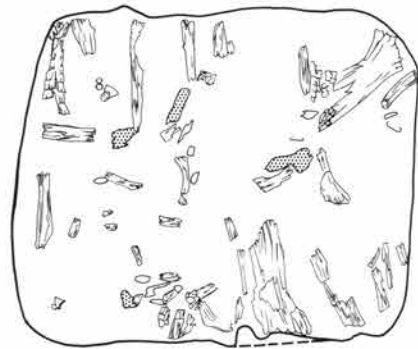
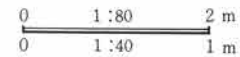


第39図 第61号住居址

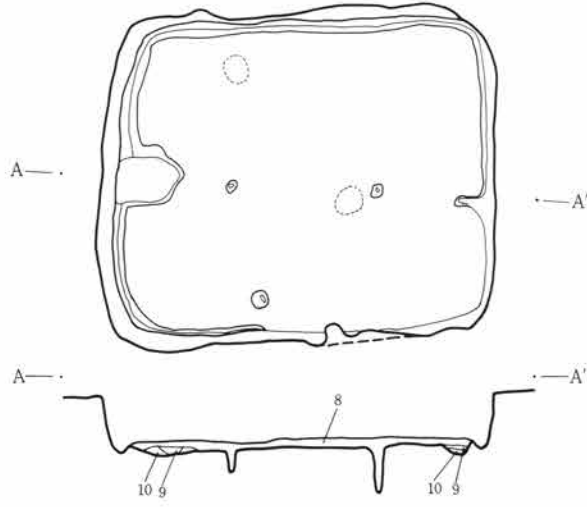
- 住居址
- 1 茶褐色土
 - 2 暗黄褐色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 褐色土
 - 7 暗褐色土
- 掘り方
- 8 暗黄褐色土
 - 9 //
 - 10 黄褐色土
- 炉址
- 1 茶褐色土
 - 2 焼土層



炉址



炭化材出土状態

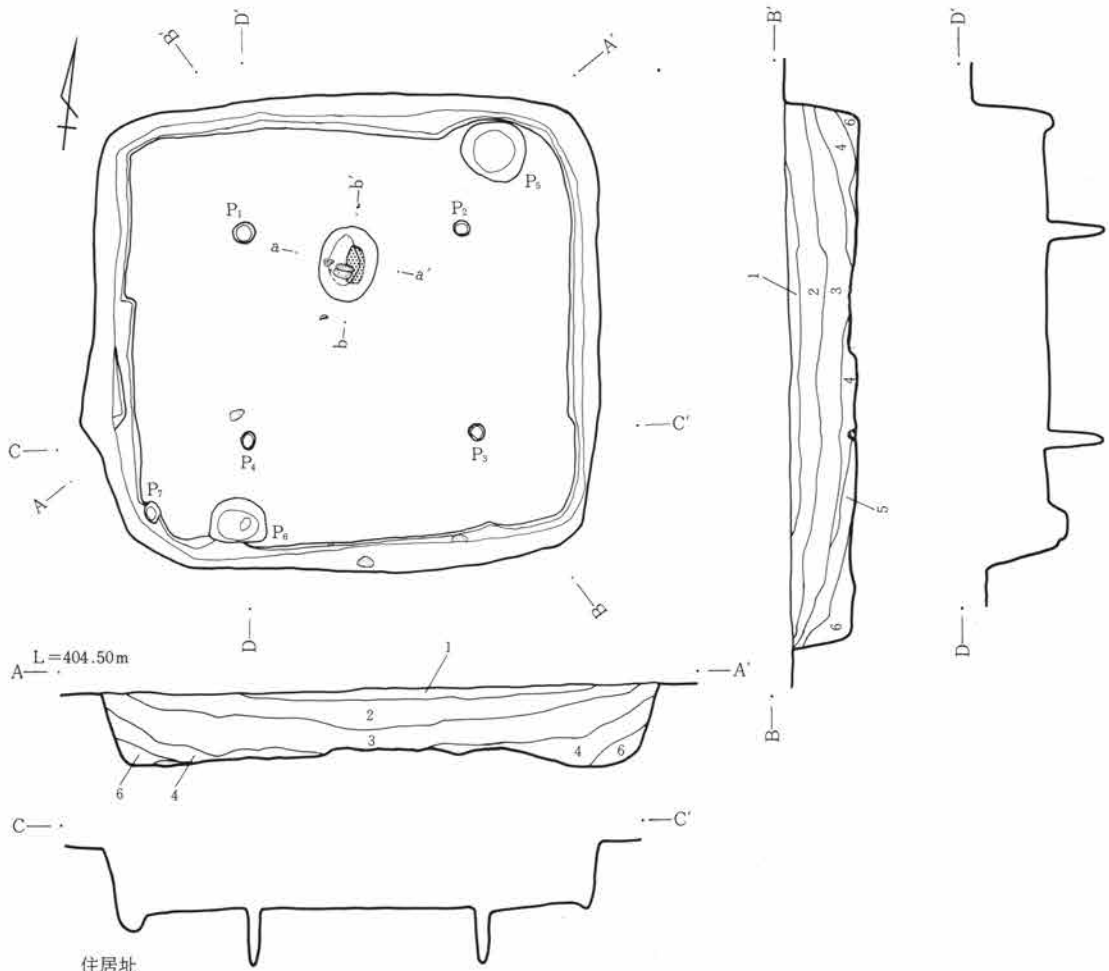


掘り方

第61号住居址 位置 24~26D26~29グリッド。 方位 東北東。 形状 420×345cmを測る方形のプランを呈し、壁高は46cmを測る。 覆土 住居全体を覆うものと、壁端に堆積するものとの大別されるが、いずれもVI~VIII層土からなる。 床面 VI~VIII層土による貼り床で、370×300cmの広さを測る。幅16~32cm深さ16cm以下の壁溝が全周している。 柱穴 P₁径12×10cm深さ32cm、P₂径20×15cm深さ23cm、P₃径13cm深さ50cmを測る3カ所がある。 炉 北寄りにあり、深さ7cmに掘られ、炉床52×42cmを測る。 土坑 南壁端に径112×118cm隅丸方形プランを呈し、深さ58cmを測る貯蔵穴様のものがある。 掘り方 確認面より55cmの深さに掘られ、壁溝の内側に幅14cm以内の浅い溝が東部を除き周っている。

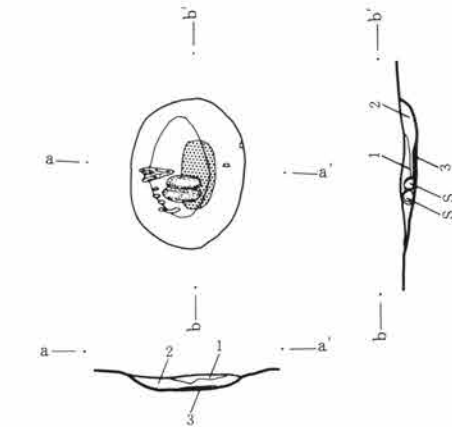
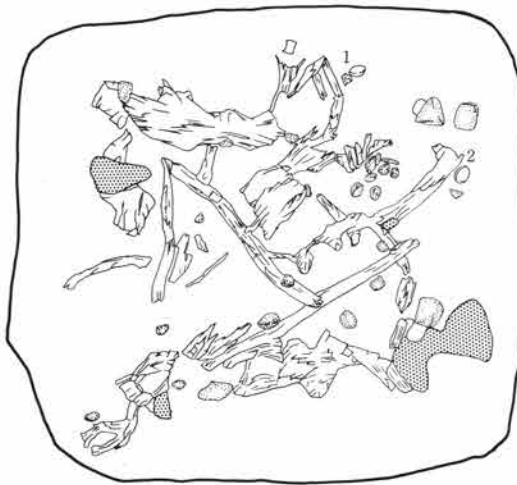
(石守)

第三章 検出された遺構と遺物



住居址

- 1 黒褐色土
- 2 茶褐色土 暗褐色土ブロックを含む。
- 3 // ロームブロックを含む。
- 4 // 暗褐色土ブロック、ローム粒を含む。
- 5 淡褐色土 ロームブロックと暗褐色土ブロックを含む。
- 6 黒褐色土

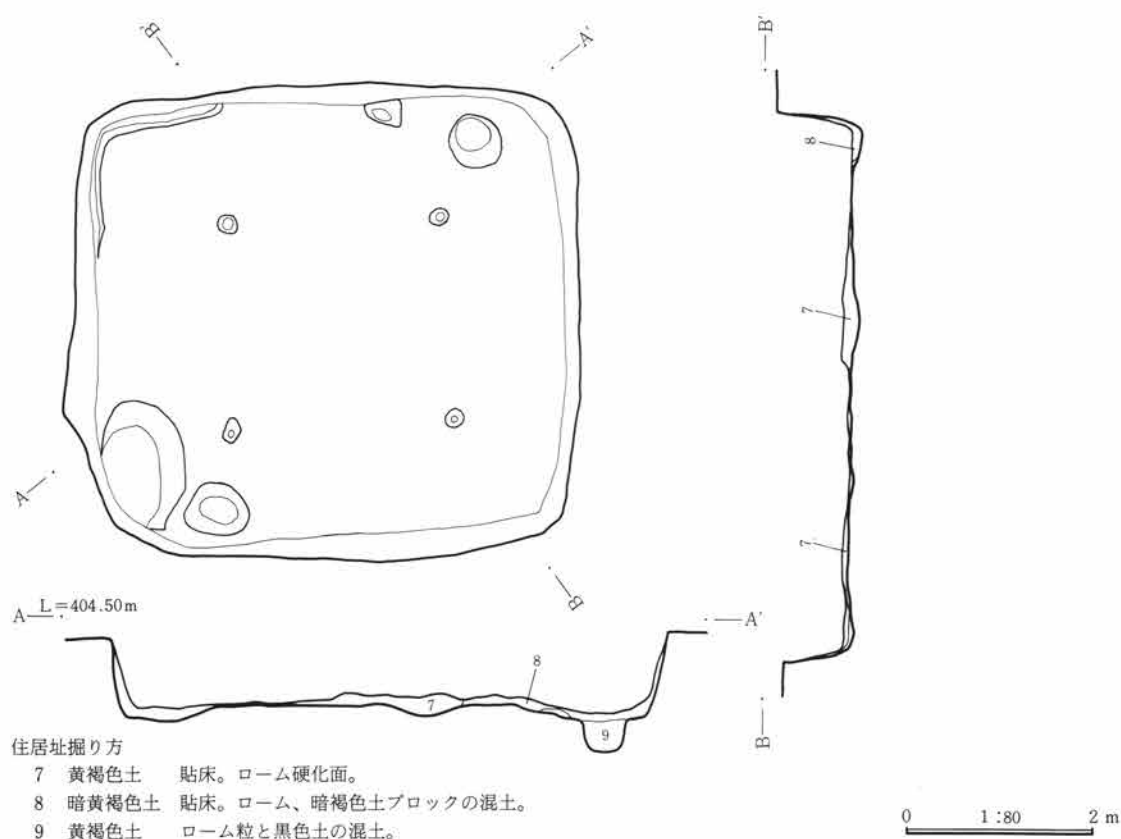


炉址

- 1 淡灰色土 白色灰層。焼土ブロックを含む。
- 2 茶褐色土 暗褐色土ブロック、焼土ブロックを含む。
- 3 焼土層

0 1:80 2 m
0 1:40 1 m

第40図 第62号住居址・炭化材出土状態及び炉址

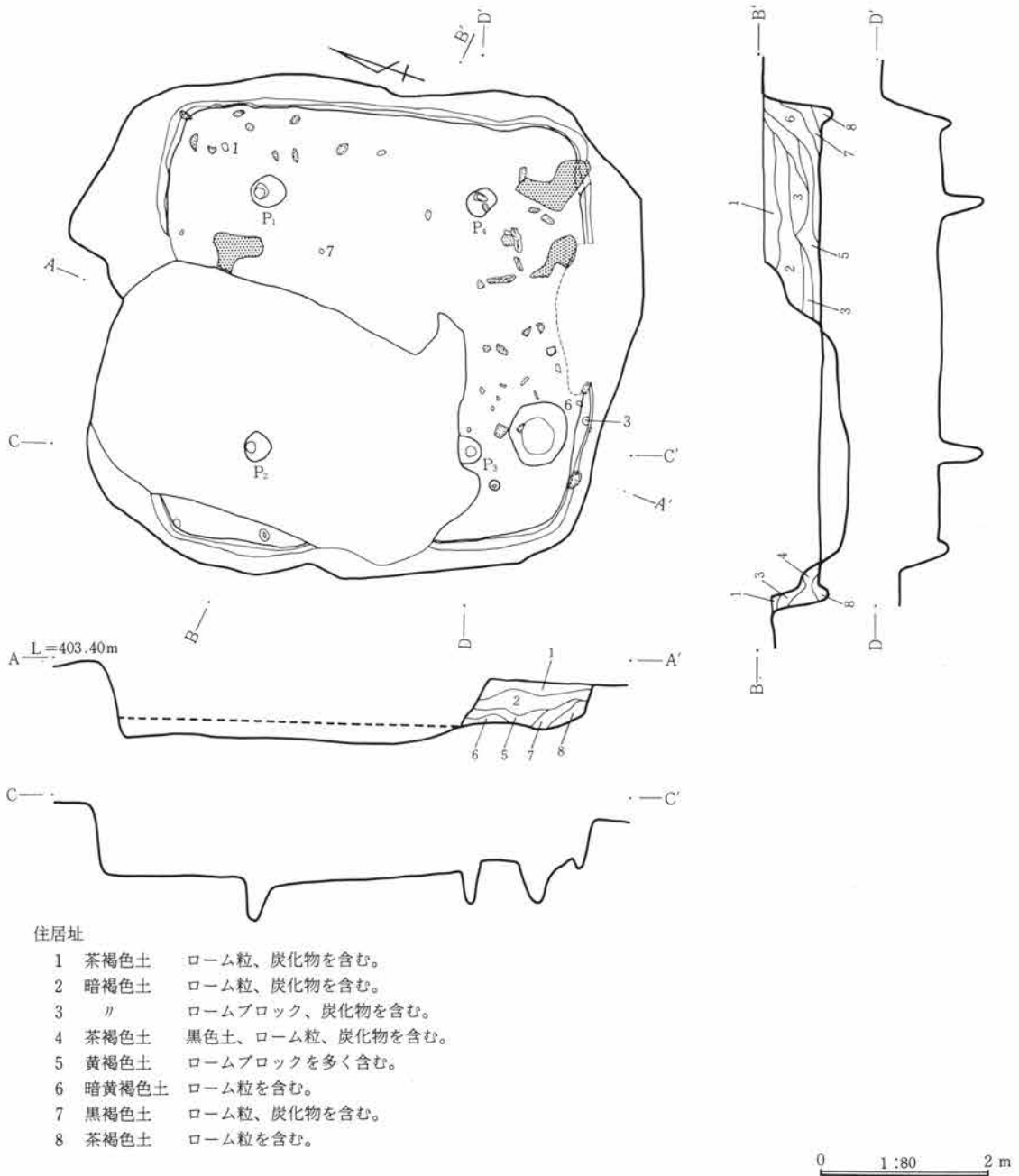


第41図 第62号住居址掘り方

第62号住居址

位置 22～25D33～36グリッド。南方10.5mに第61号住居址、南西11.5mの地点に第119号住居址が位置している。**方位** 東北東。**形状** 540×450cmを測り、隅丸方形のプランを呈する。壁高は現状で70cmを測り、本遺跡の同時期の住居中最も深く掘り込まれたものの一つである。**覆土** 覆土は住居全体を覆うものと、壁端に堆積するものとに大別され、いずれもVI・VII層土の混土である。後者は周堤の存在を考えさせる。また、前者と後者の合わさる面の付近には、土器、炭化材、径30cm以上のものを含む自然礫などが少なからず遺存している。この面と床面に近い部分には多くの炭化材が出土しているが、これらは直径15cmほどのものを中心とし、住居内側寄りに発見された。住居に並行に出土したものは梁や桁と考えられるが、その他の垂木様のものは折り重なるように出土している。**床面** 床はVII・VIII層土をたたいた貼り床であり、床の広さは470×440cmを測る。幅30～40cm深さ6～10cmの壁溝が全周している。**柱穴** ピットは6カ所あるが、このうち支柱穴は4カ所である。P₁径24×22cm深さ60cm、P₂径18×14cm深さ60cm、P₃径18×18cm深さ60cm、P₄径18×16cm深さ55cmである。**炉** 炉は地床炉であり、P₁とP₄を結ぶ線の内側にあり、深さ8cmに掘り下げられて作られている。炉床は径77×62cmを測る楕円形のもので、礫が1個残る。**土坑** ピットのうちの2カ所であり、P₅径70×64cm深さ50cm、P₆径60×48cm深さ24cmを測る。P₅はP₂の壁側北東隅にあり、貯蔵穴の可能性が想定される。P₇は南西隅部やや東寄りにあり、入口の施設との関連が考えられる。**掘り方** 確認面より86cm以内に掘り込まれている。壁側が溝状にやや低くなる傾向があるが、特に顕著な床下遺構は認められない。**遺物** 床上から甕(1)、ピット内より鉢(3)、器台脚部(4)が出土している。

(石守)



第42図 第71号住居址

第71号住居址

位置 41~44D22~25グリッド。南部分を第60号住居址によって壊されている。 **方位** 北北西。 **形状** 685×615cmの方形を呈し、壁高64cmを測る。 **覆土** 住居全体を覆うものと、壁端に堆積するものがあるが、いずれもVII層土を中心としている。 **床面** VII・VIII層土をたたいた貼り床で485×475cmの広さを測る。幅8~17cm深さ12cmの壁溝が周っている。 **柱穴** P₁径42×34cm深さ46cm、P₂径33×32cm深さ推定68cm、P₃径30cm深さ50cm、P₄径34×30cm深さ46cmの4カ所がある。 **土坑** 74×66cm深さ44cmを測るP₅は貯蔵穴と考えられる。 **掘り方** 確認面より74cm以内に掘り下げている。床下遺構は認められない。 **遺物** 床上よりS字甕(1)、床直より紡錘車(7)が出土している。(石守)

第76号住居址

位置 49~51D22~24グリッド。 方位 北北西。

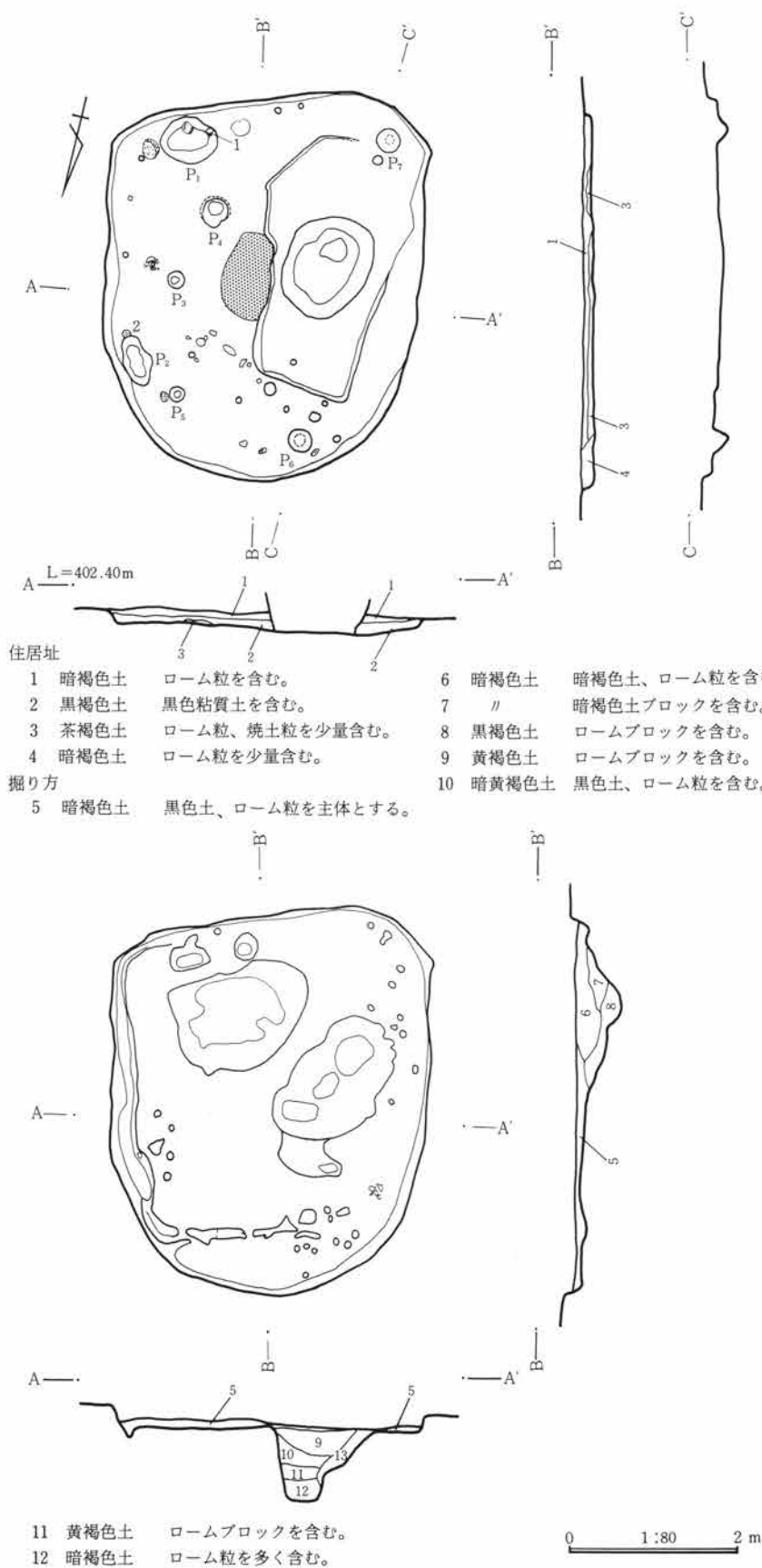
形状 450×364cmを測り、不定形のプランを呈する。壁高は12cmを測る。 覆土 VI・VII層土を中心とする。

床面 VI~VIII層土ブロックをたたいた貼り床で、広さ434×364cmを測る。 柱穴 6カ所あり、P₄径21cm深さ20cm、P₅径34×30cm深さ55cm、P₆径21cm深さ10cm、P₇径18cm深さ7cm、P₈径27cm深さ16cm、P₉径29cm深さ10cmを測る。主柱穴は特定できない。この他径15cm以下のピット3カ所、径8cm以下の小ピット12カ所がある。後者は東側と南側で壁端に並び、北側でも住居内側に壁の線にそって並んでおり、壁溝と同様の性格が考えられる。

炉 住居中央の径100×57cmの焼土面が考えられる。 土坑 P₁径112×100cm深さ50cm、P₂径67×55cm深さ42cm、P₃径60×34cm深さ12cmの3カ所があり、P₁・P₂は貯蔵穴、P₂・P₃は入口に係わる遺構の用途が考えられる。

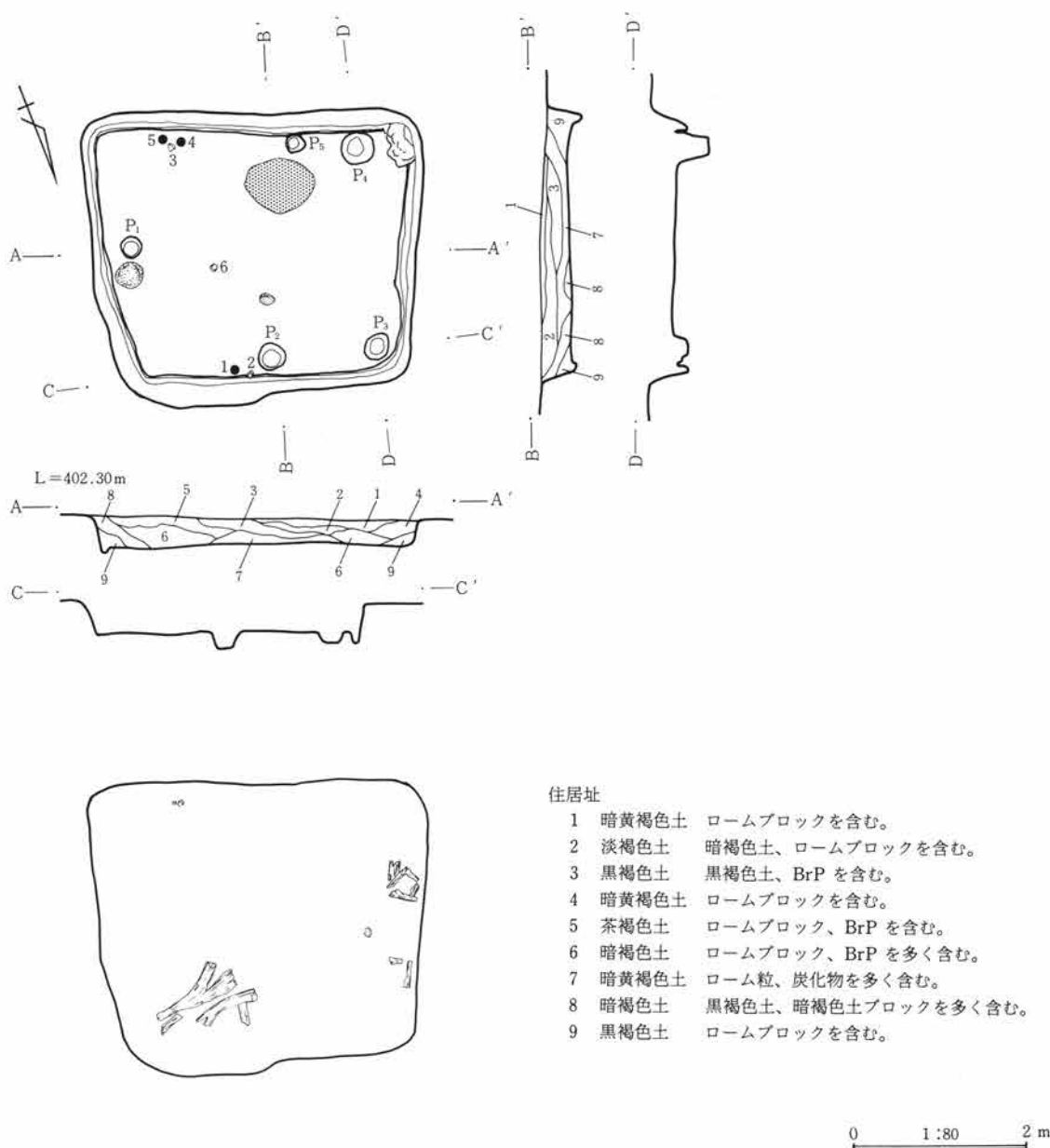
掘り方 住居南部の西寄りに径160×115cm深さ40cmの床下土坑があり、北側には幅10cm深さ8cmの溝が住居を画するように東西に走っている。

遺物 床直から台付甕脚部(2)、床下から小型甕(1)が出土している。(石守)



第43図 第76号住居址及び掘り方

第III章 検出された遺構と遺物



第44図 第87号住居址及び炭化材出土状態

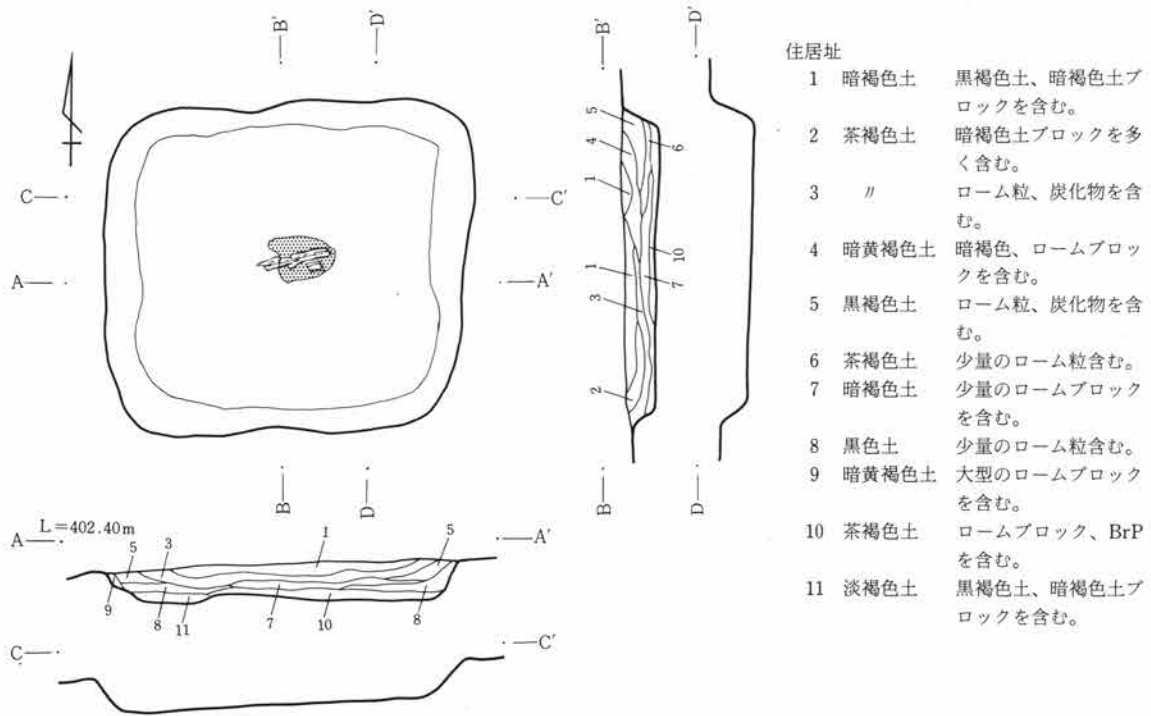
第87号住居址

位置 60～62D26～28グリッド。方位的に似る第97号住居址は北方13mに位置する。 **形状** 390×336cmを測り、方形プランを呈する。壁高は34cmを測る。本遺跡の同時期の住居のうち、小型の部類の一つである。

覆土 住居全体を覆う土層群と壁端に堆積するものに大別され、いずれもVI・VII層土ブロックを中心とする。床面近くに炭化物が遺存する。 **床面** VI～VIII層土ブロックをたたいた貼り床で、床面の広さは354×280cmを測る。幅6～10cm深さ14cmの壁溝が全周する。 **柱穴** ピットは4カ所あり、P₁径24cm深さ15cm、P₂径32cm深さ18cm、P₃径28cm深さ14cm、P₄径38×36cm深さ46cm、P₅径22cm深さ28cmを測る。主柱穴は特定できない。 **炉** 住居南部中央、P₅の北に隣接する。炉床の大きさは径80×64cmを測る。 **掘り方** 確認面より45cm程掘り下げている。顕著な床下の遺構は認められない。 **遺物** 壁端にミニチュア土器等が出土している。

(石守)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



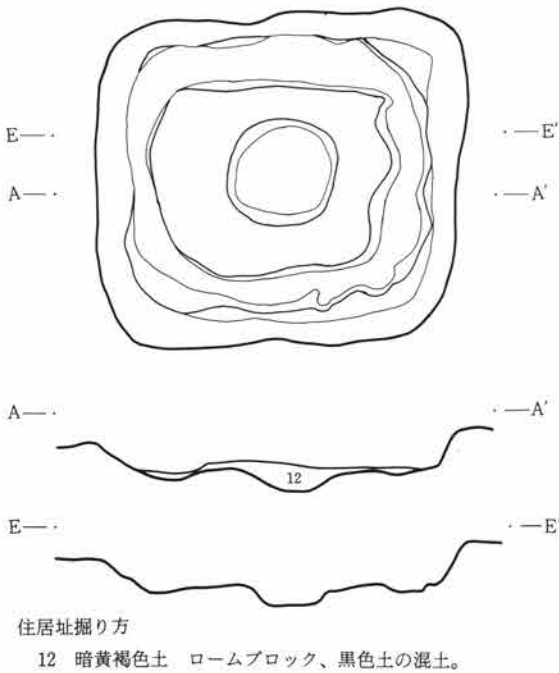
第93号住居址

位置 62~64D34~36グリッドに位置する。第56号住居址が南に接し、東に10.5cm隔てて第58号住居址、北東8.5mに第54号住居址が位置する。

方位 東。 **形状** 495×348cmを測る。隅丸方形のプランを呈する。壁高40cmを測る小型の住居址である。 **覆土** VI~VIII層土からなり、水平堆積する土層群と、それ以外のものに大別される。床面近くには炭化材が、長軸方向に出土している。

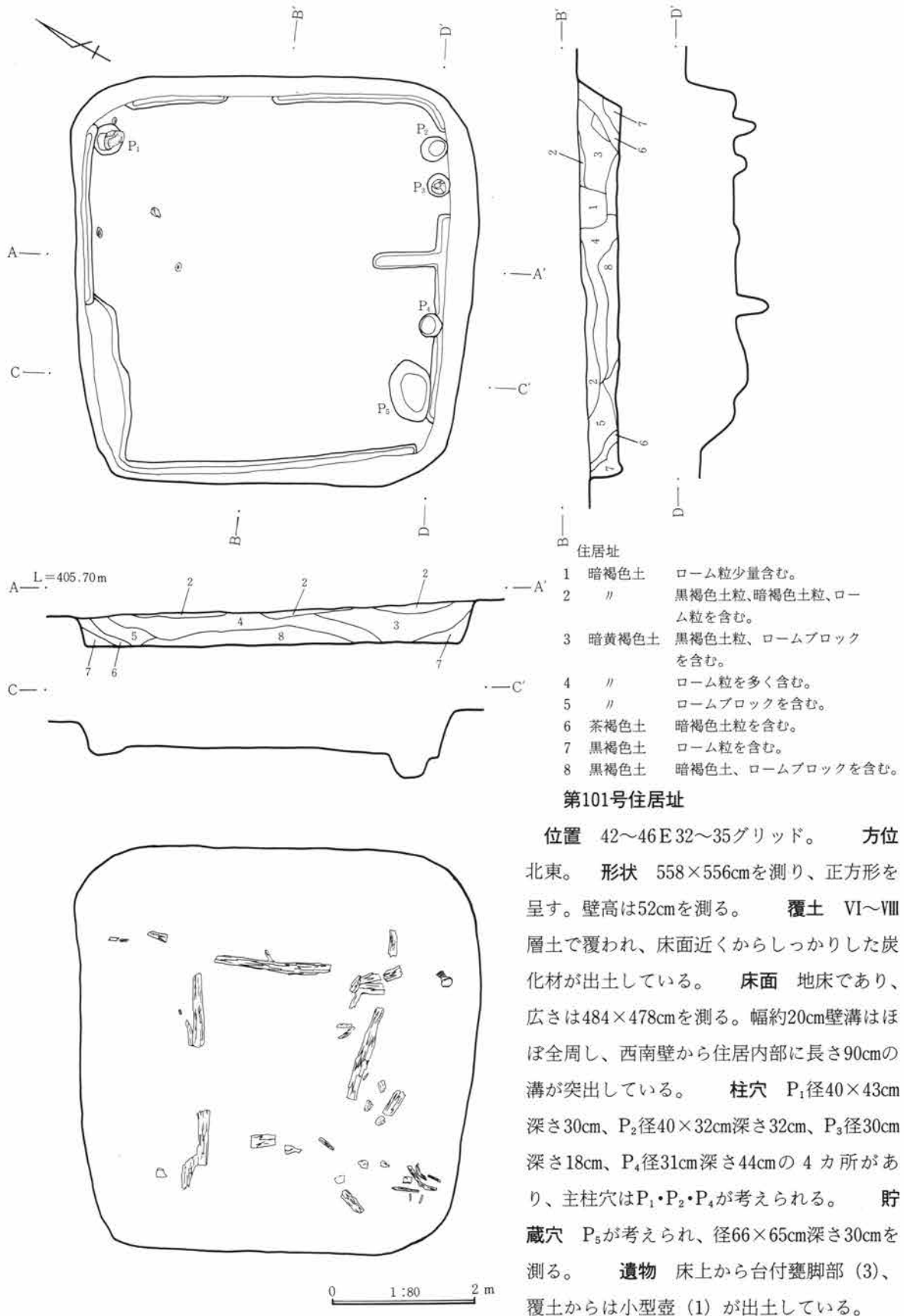
床面 VII層土を中心とする土をたたいている貼り床で、床面の広さは360×300cmを測る。壁溝は認められなかった。尚、覆土のうち水平堆積をする土層群は、床面を盛り上げたものと考えられる。

柱穴 確認されなかった。 **炉** 住居中央にあり、炉床は72×44cmを測る。 **掘り方** 確認面より55cm以内に掘り込まれている。壁端に、幅38~58cm深さ6~22cmを測る溝が周っている。また、住居中央には径114×112cm深さ26cmを測り、楕円形に近いプランを呈する床下土坑が発見されている。この床下土坑の所在する位置は、炉のそれと一致することから、炉との関連を想起させる。



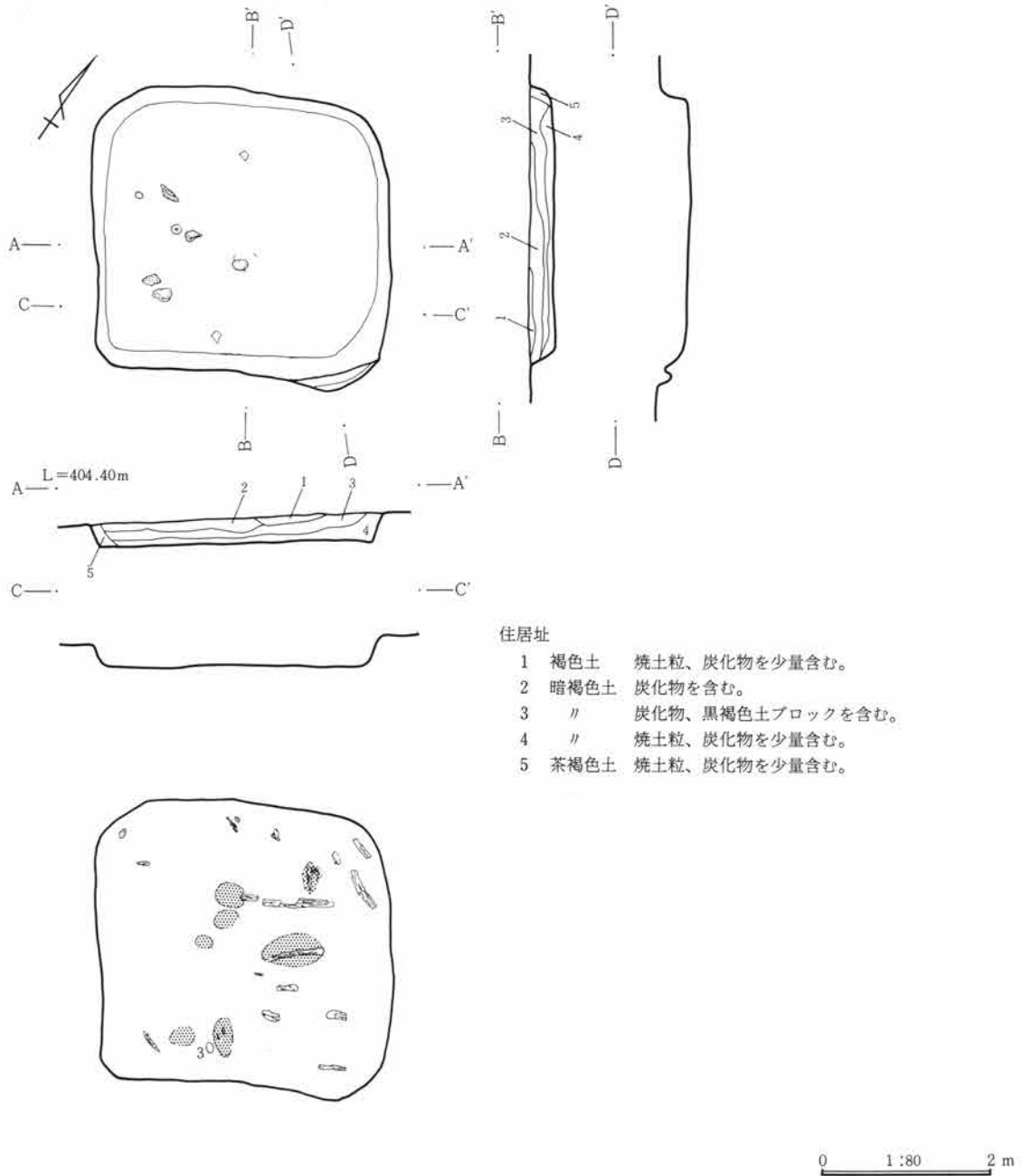
第45図 第93号住居址及び掘り方

(石守)



第46図 第101号住居址及び炭化材出土状態

(石守)

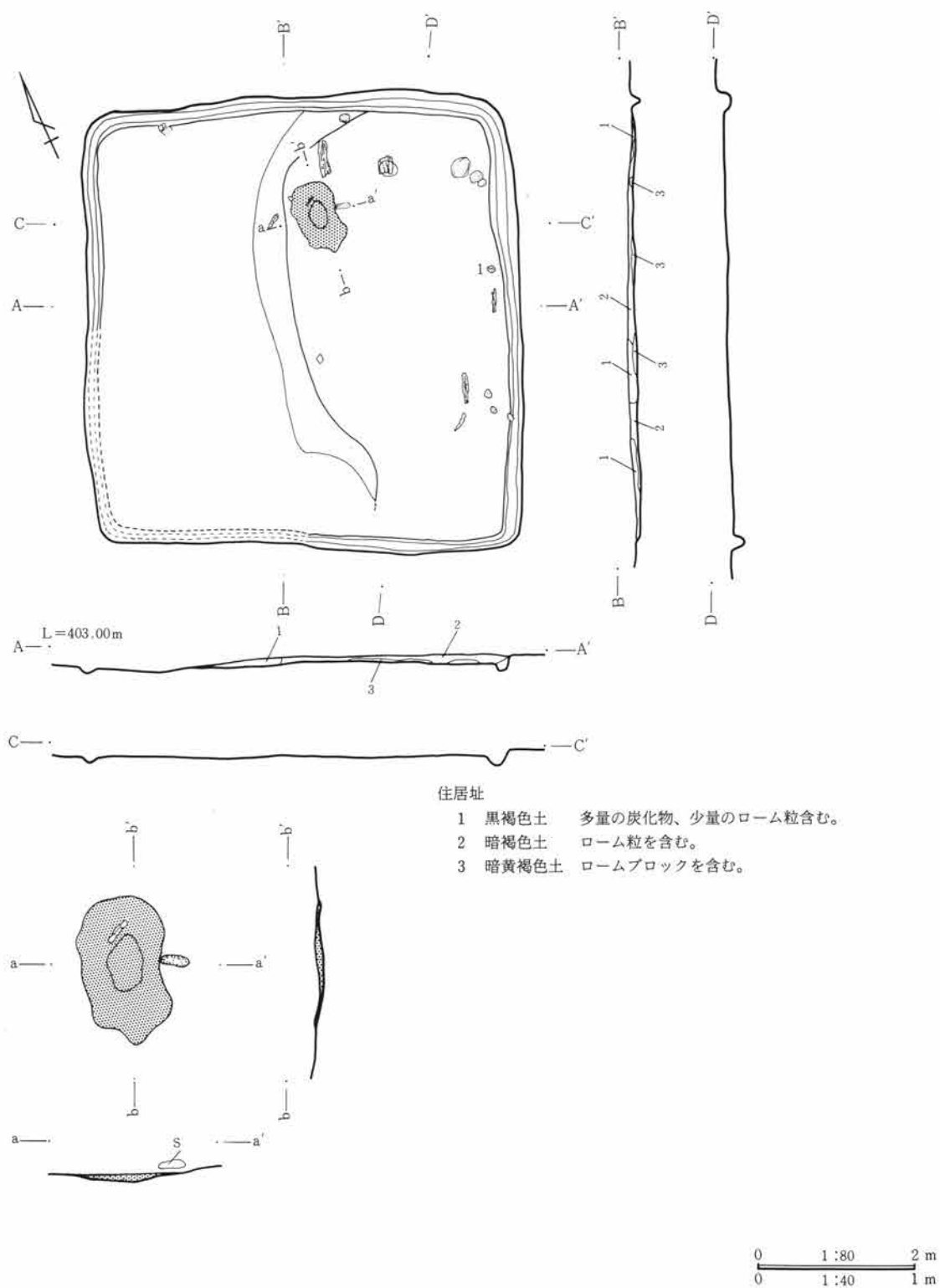


第47図 第105号住居址及び炭化材出土状態

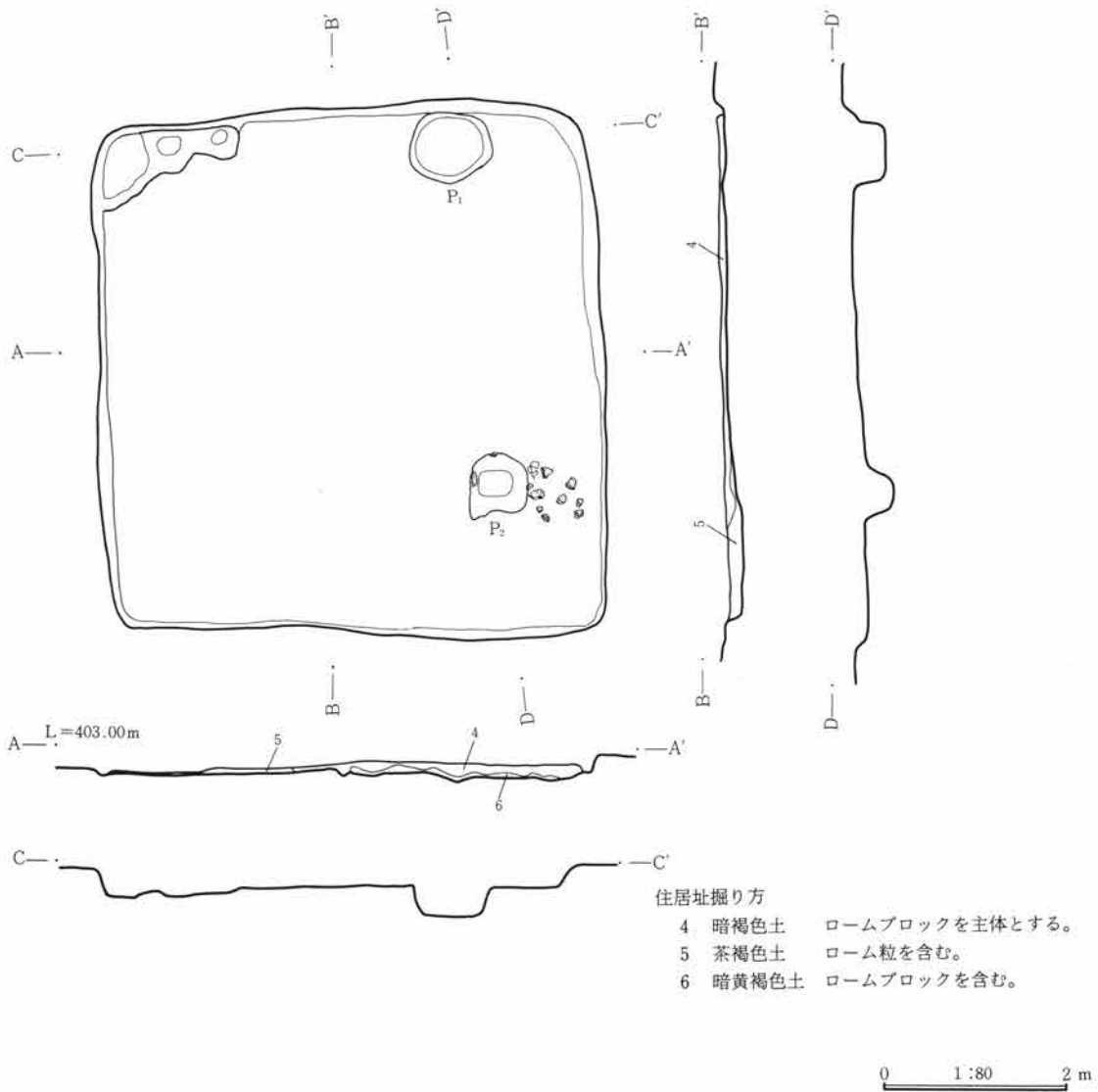
第105号住居址

位置 53～55E 16～18グリッド。 **方位** 南南東。 **形状** 径346×328cmを測る正方形のプランを呈し、壁高30cmを測る。本遺跡の同時期の住居址中最も小型のものの一つである。 **覆土** VI層土を主体とした土で覆われ、おおむねその土層中には焼土・炭化物を含んでいる。また、床面付近には幾つかの炭化材が遺存している。 **床面** 地床であり、広さは322×292cmを測る。壁溝は認められない。 **柱穴・貯蔵穴** ピット等の掘り込みは確認できない。 **炉** 地床炉で、住居址中央やや西南寄りにある。炉床は30×24cmを測り、焼石を伴う。 **遺物** 床直からは片口(1)・磨石(3)が出土した。覆土中より甗(2)が出土している。

(石守)



第48図 第108号住居址及び炉址

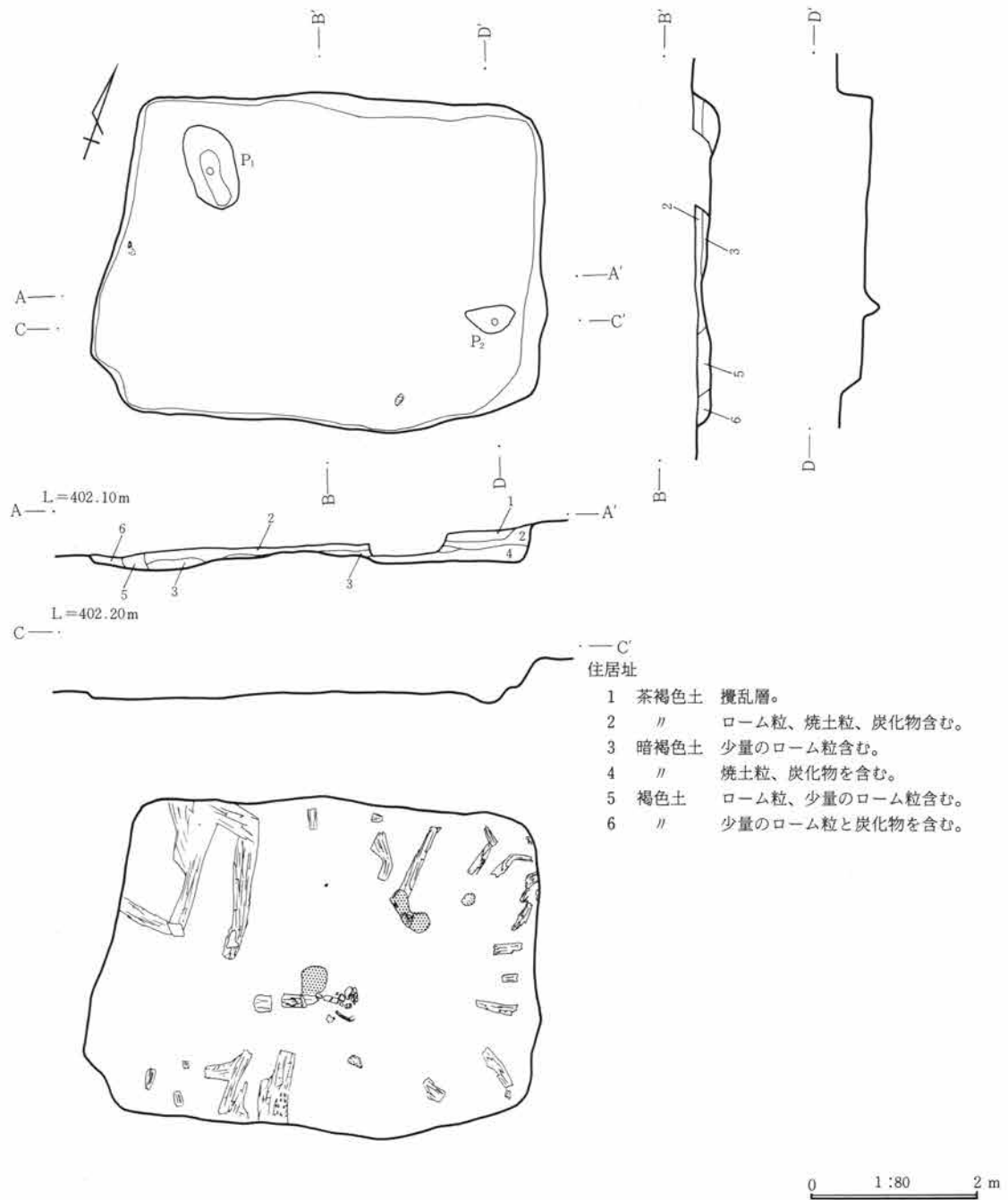


第49図 第108号住居址掘り方

第108号住居址

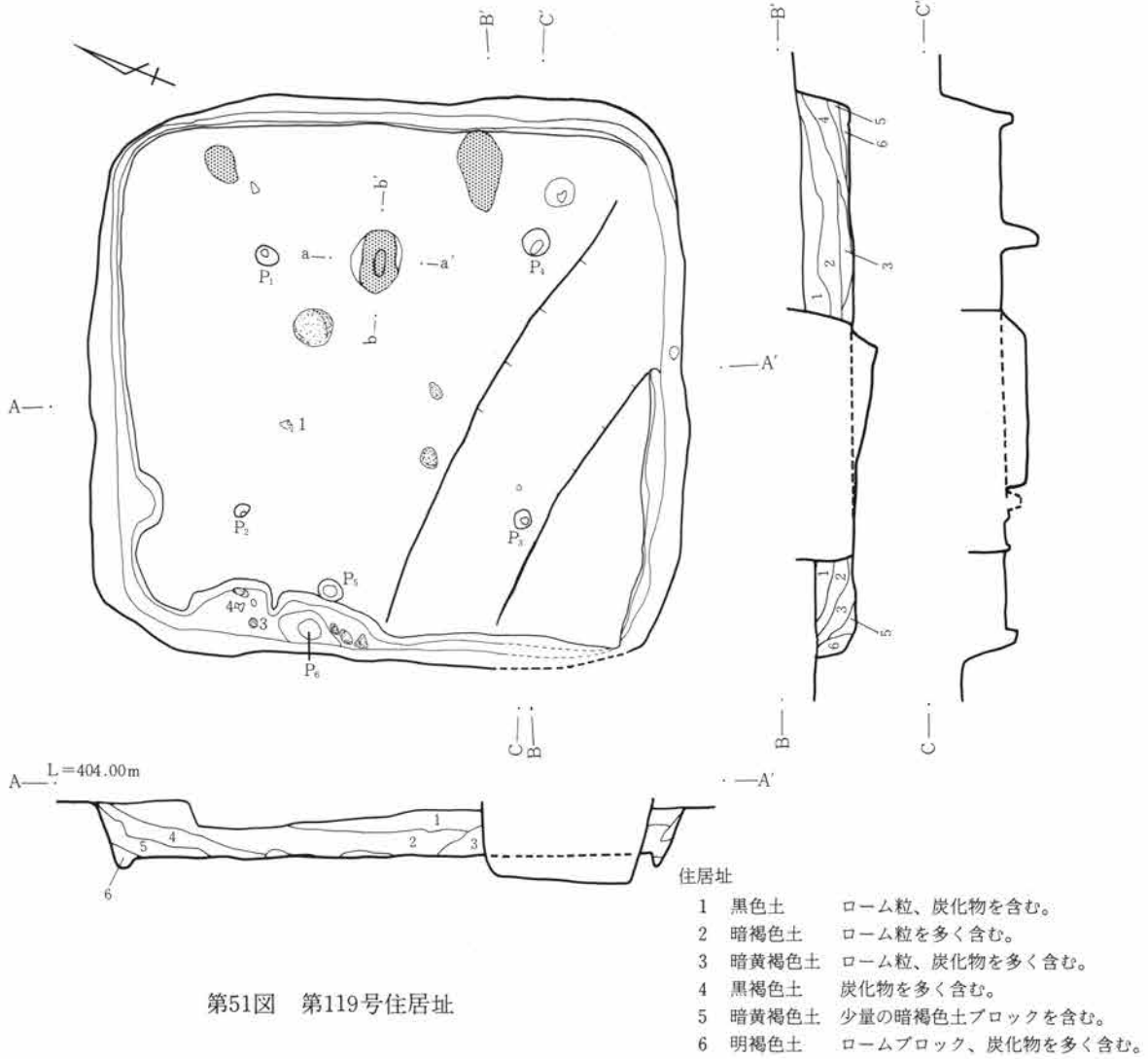
位置 21～24D13～17グリッド。微高地縁辺に近い位置に所在し、西に第39号住居址が18m、北に第61号住居址が20m隔てて位置する。 **方位** 北北東。 **形状** 584×540cmを測り、正方形を呈する。壁高は10cmを測る。VI層面では確認されず、VII層の上層面で検出された。 **覆土** VI・VII層土の粘質土で覆われ、炭化物を多く含む。炭化材の出土は少ないが、特に住居址東部の床面に灰が少量堆積しており、このことから本住居址は焼失家屋と考えられる。 **床面** VI～VIII層土によってたたかれた貼り床である。536×494cmの広さを測り、南西部では確認されなかったが幅14～24cm深さ7cmの壁溝が全周するものと思われる。 **柱穴・貯蔵穴** 床面では確認できなかった。 **炉** 中央やや北寄りに径93×50cmを測る炉床を持つ地床炉が認められる。 **掘り方** 北壁沿い東寄りに径90×70cm深さ32cmを測るP₁と南東部に径80×60cm深さ32cmのP₂の2カ所の土坑を検出した。床面では確認されなかったものの貯蔵穴の可能性もある。 (石守)

第III章 検出された遺構と遺物



第50図 第112号住居址及び炭化材出土状態

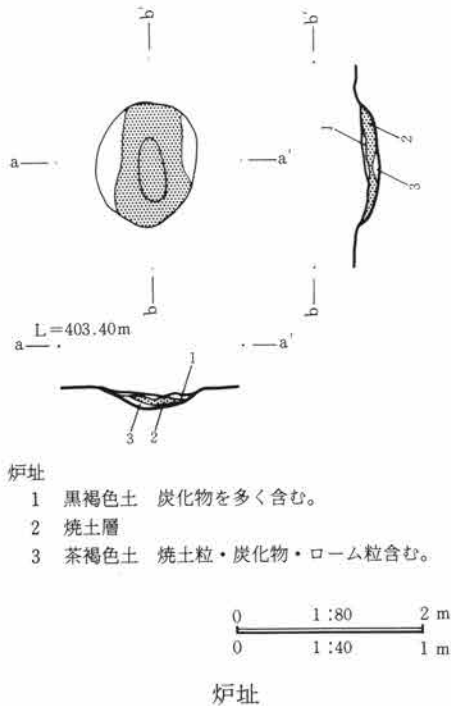
第112号住居址 位置 57~60D18~20グリッド。 方位 東北東。 形状 540×400cmを測り、方形のプランを呈する。壁高44cmを測る。 覆土 VII層土を中心とする土で覆われている。床面近くには、壁側より住居中央に向けて炭化材が10数本検出された。この中には住居に平行なものが1本遺存している。 床面 地床であり、壁溝は認められない。 柱穴 東壁やや南寄りに1カ所あり主柱穴として特定できないが、P₂径60×32cm深さ18cmを測る。 炉 確認されない。 土坑 住居北西部に径108×58cm深さ44cmを測る土坑P₁があるが、性格が不明である。 遺物 床上より甕の胴部破片が出土したが図示し得なかった。(石守)



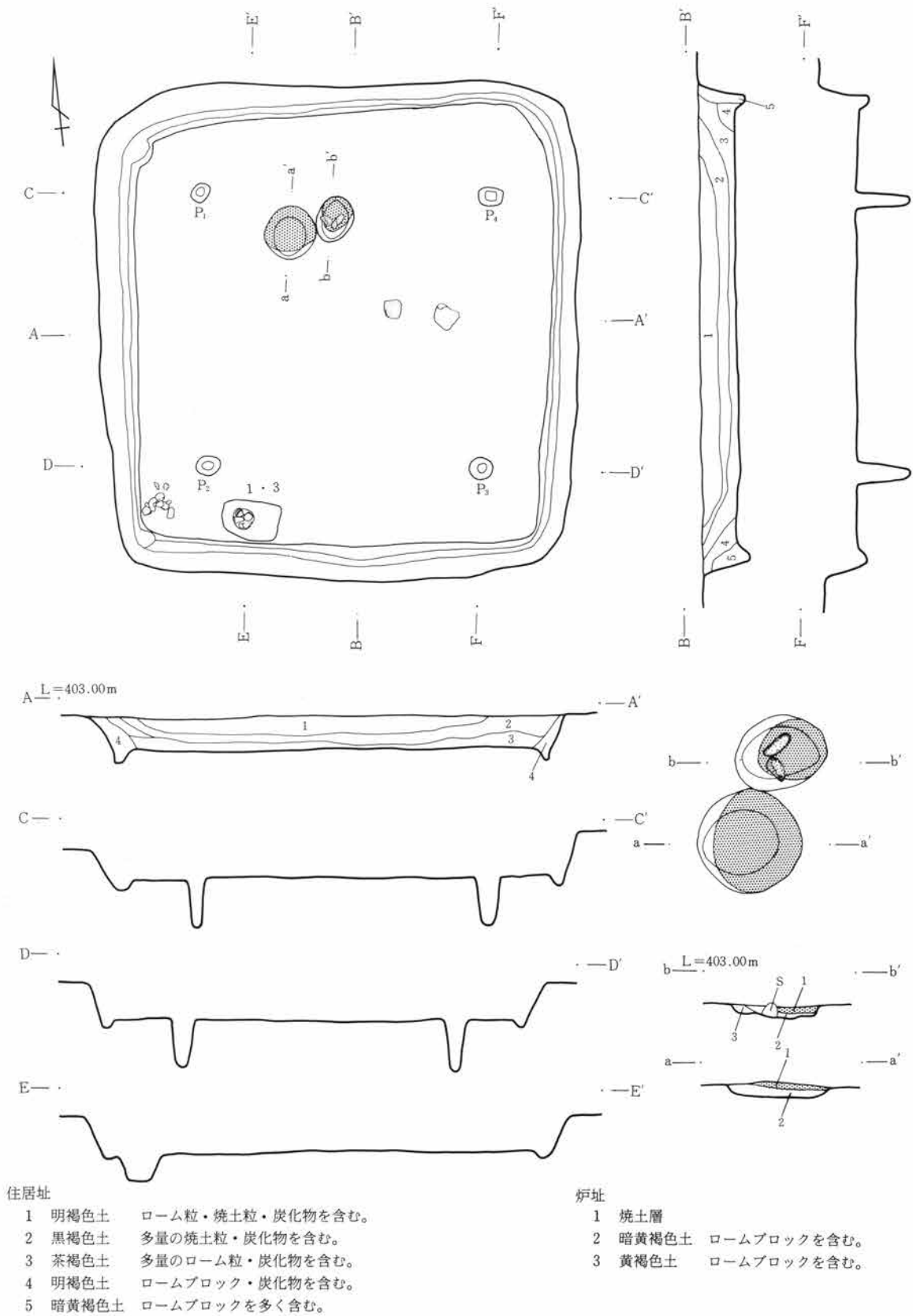
第51図 第119号住居址

第119号住居址

位置 29～35D28～32グリッド。 方位 東北東。 形状 650×600cmを測る正方形を呈し、壁高は80cmを測る。試掘の際のトレンチが東西を走っている。 覆土 VI・VII層を中心とし壁寄りに堆積する3～6層土には炭化物の含有が多く、床面近くでは焼土と灰の堆積が認められる。 床面 地床であり、広さは590×515cmを測る。幅8～66cm深さ12cmの壁溝が西南部分を除き周っている。 柱穴 ピットは6カ所あり、径14～70cm深さ20～60cmを測る。主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄と思われる。P₅またはP₆は入口の梯子にかかるピットとも考えられよう。 貯蔵穴 検出されなかった。 炉 炉は径58×68cmを測る地床炉で主柱穴P₁とP₄を結ぶ線のやや北寄り、住居址の内部にやや寄る位置にある。 遺物 床直に破片ではあるが甕(1)が出土している。高杯(3・4)は住居址西壁下の落ち込みより出土した。(石守)

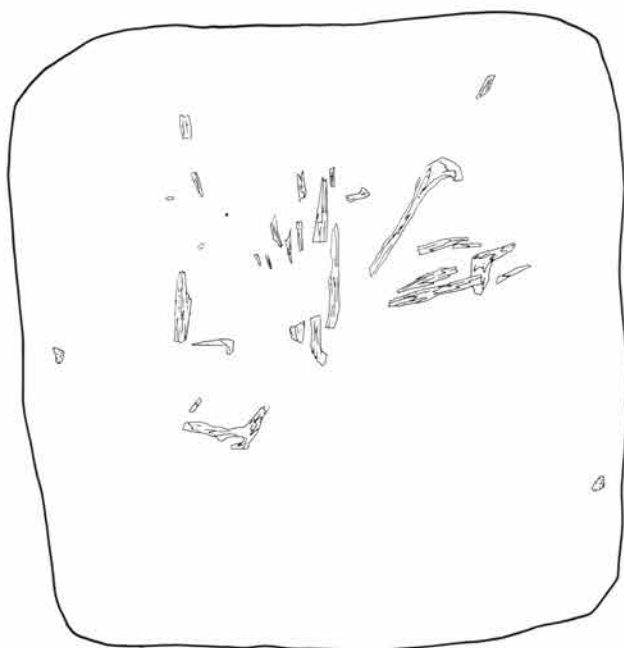


第三章 検出された遺構と遺物



第52図 第123号住居址及び炉址

0 1:80 2 m
0 1:40 1 m



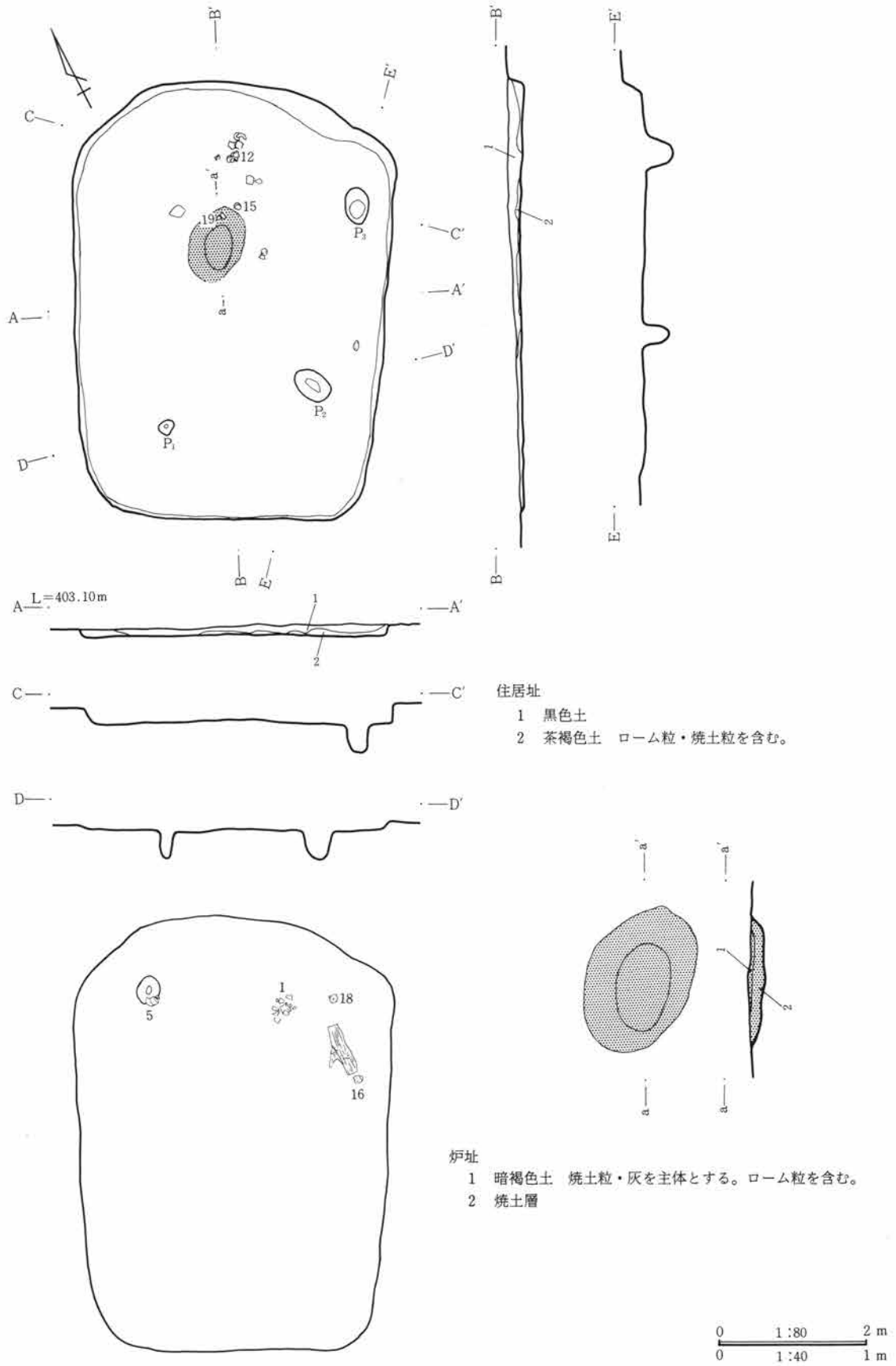
0 1:80 2 m

第53図 第123号住居址炭化材出土状態

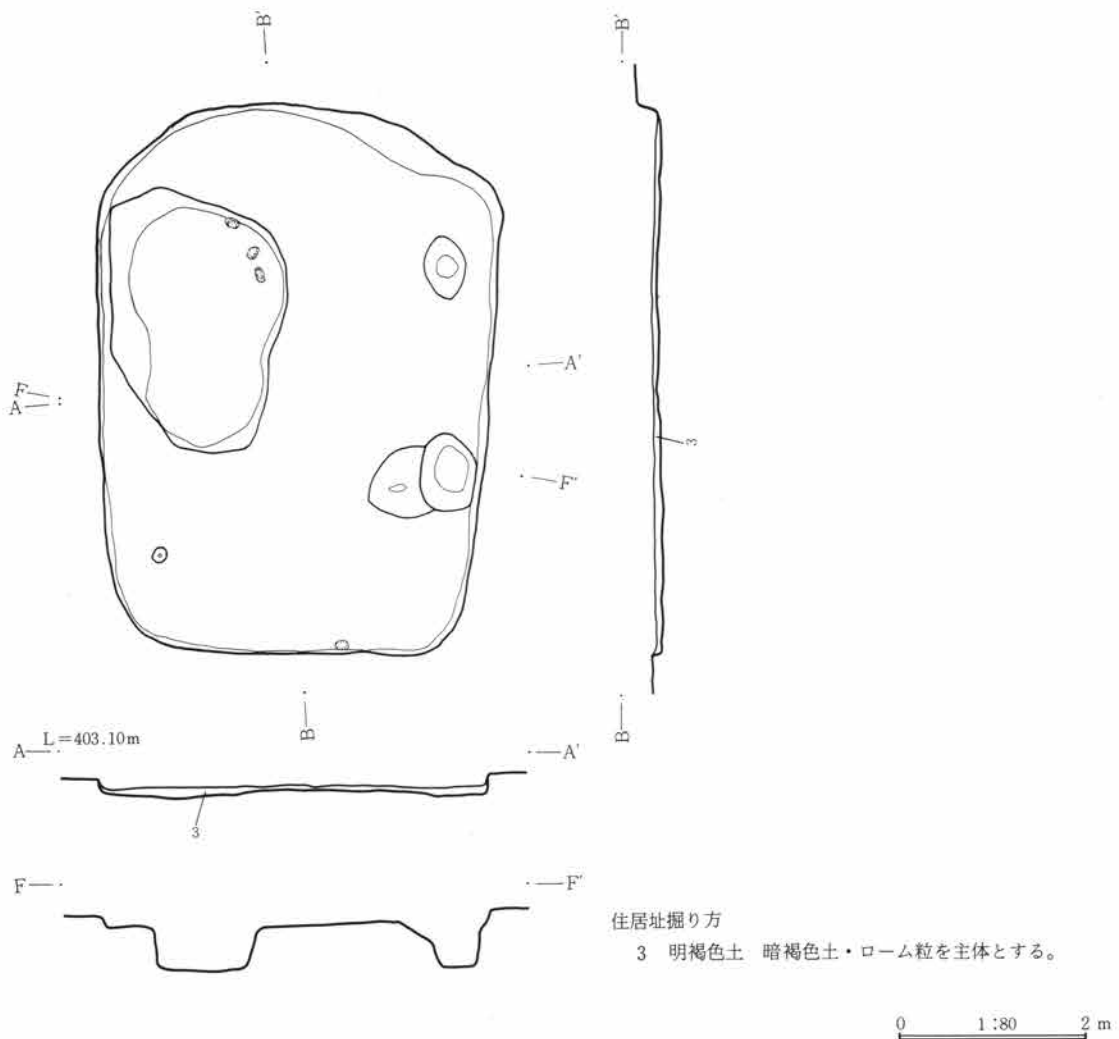
第123号住居址

位置 56～59E 07～11グリッド。東北13mに第105号住居址、東南12.5mに第47号住居址、西13.5mに第125号住居址がそれぞれ位置する。方位的、平面形態的に似る第38号住居址は東北東に35mを隔て、同じく第49号住居址は南南西に38mを隔てて位置している。 **方位** 北。 **形状** 長軸660cm短軸650cmを測る、正方形に近いプランを呈し、壁高は46cmを測る。 **覆土** 住居全体を覆うものと、壁端に堆積する土層群に分けられ、後者は周堤の存在を想定させている。しかし、双方の土層群は、いずれもVI・VII層土にVIII層土の混入する土で構成されている。3層中の床面付近、及び3層と4層または5層の境の面からは、炭化材が出土している。これらは住居中央部を中心として遺存し、放射状に並ぶ径12cm程の垂木状のものと、梁あるいは桁に相当すると考えられる住居の軸に平行に並ぶ径16cm程度のものがあり、量的には多くないが、良好な遺存状態で出土している。 **床面** VII層下層部まで掘り下げて作られた地床であり、床面の広さは586×566cmを測る。幅18cm深さ8～12cmを測るしっかりした壁溝が全周している。住居中央部やや東寄りには、一辺24～32cmを測る自然礫2個が置かれている。 **柱穴** 4カ所あり、それぞれP₁径30×22cm深さ66cm、P₂径34×28cm深さ68cm、P₃径32cm深さ74cm、P₄径34×26cm深さ64cmを測る。これらのピットは主柱穴と認められ柱穴間距離の平均は37.55cmを測り、この柱穴間距離は第38号住居址のそれに近似する。尚、柱痕は認められない。 **炉** 炉と思われるものは2カ所あり、いずれも地床炉で、P₁とP₄を結ぶ線の住居内部寄りにある。P₁とP₄の中間に位置するものは、径126×100cmを測り4cmの深さに掘り込んで作っており、炉の南部には自然礫2個が置かれている。その西寄りに隣接して深さ6cmを掘り込み、炉床を径140×142cmに測るものがある。 **土坑** 住居南部の壁端やや西寄りに、径76×50cm深さ38cmを測る箱形に近い掘り込みを持つ土坑がある。この土坑の用途としては貯蔵穴が考えられる。 **遺物** 土坑内より埴 (1・3) が出土している。(石守)

第III章 検出された遺構と遺物



第54図 第125号住居址・炭化材出土状態及び炉址

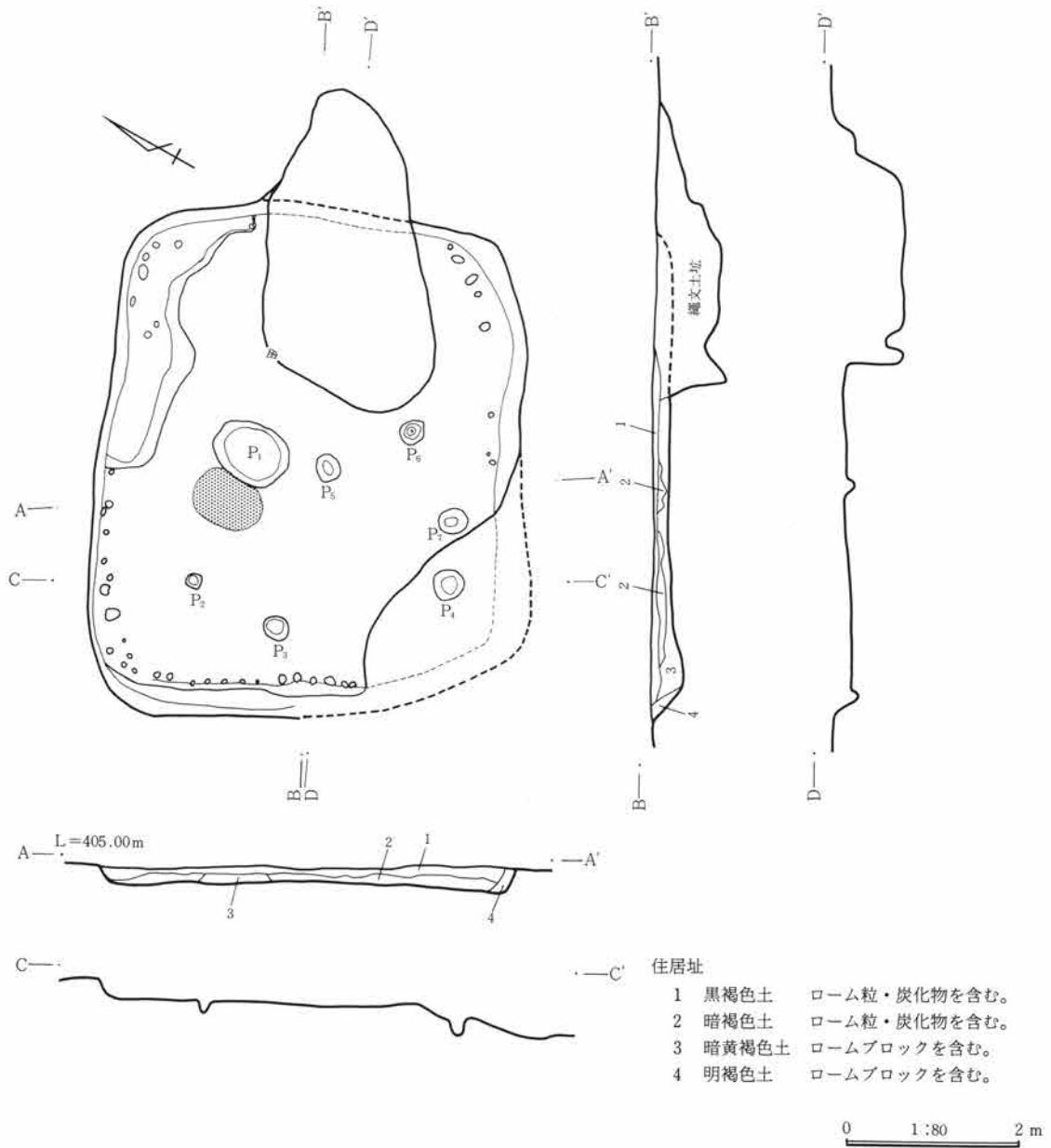


住居址掘り方
3 明褐色土・暗褐色土・ローム粒を主体とする。

第55図 第125号住居址掘り方

第125号住居址

位置 63~65 E03~07グリッド。東北に13.5m隔てて、第123号住居址、東方24mに第47号住居址、東南17mに第48号住居址がそれぞれ位置する。方位 北北東。形状 580×420cmを測る隅丸方形を呈するが、北側に膨らんでいる。壁高は確認面であるVII層上面からで、16cmを測る。覆土 本住居は、その上位で確認できなかったこともあり、覆土は量的に多くないが、床面直上はVII層土、その上層はVI層土を中心とする土で覆われている。住居北部の床面付近には、炭化材が出土している。床面 VII・VIII層土のブロックをたたいて作られた貼り床であり、床面の広さは570×405cmを測る。壁溝は認められない。炉の北側には土器が出土している。柱穴 3カ所あり、それぞれP₁径20cm深さ36cm、P₂径54×34cm深さ40cm、P₃径48×32cm深さ38cmを測る。柱穴は支柱穴としてはやや規則性に欠け、支柱穴を特定することはできない。また、予想される北西部の柱穴については確認できなかった。なお、いずれの柱穴にも柱痕は認められない。炉 住居中央北寄りに位置し、3cm程掘り下げられた地床炉である。炉床は102×70cmの大きさを測る。掘り方 確認面より26cm以内に掘り込まれている。東壁端中央よりやや南よりに径84×58cm深さ48cmを測るものと、西北部に径280×188cm深さ48cmを測る、しっかりした掘り方の床下土坑2カ所がある。その性格については不明である。遺物 甕類を中心に良好な出土状況である。(石守)

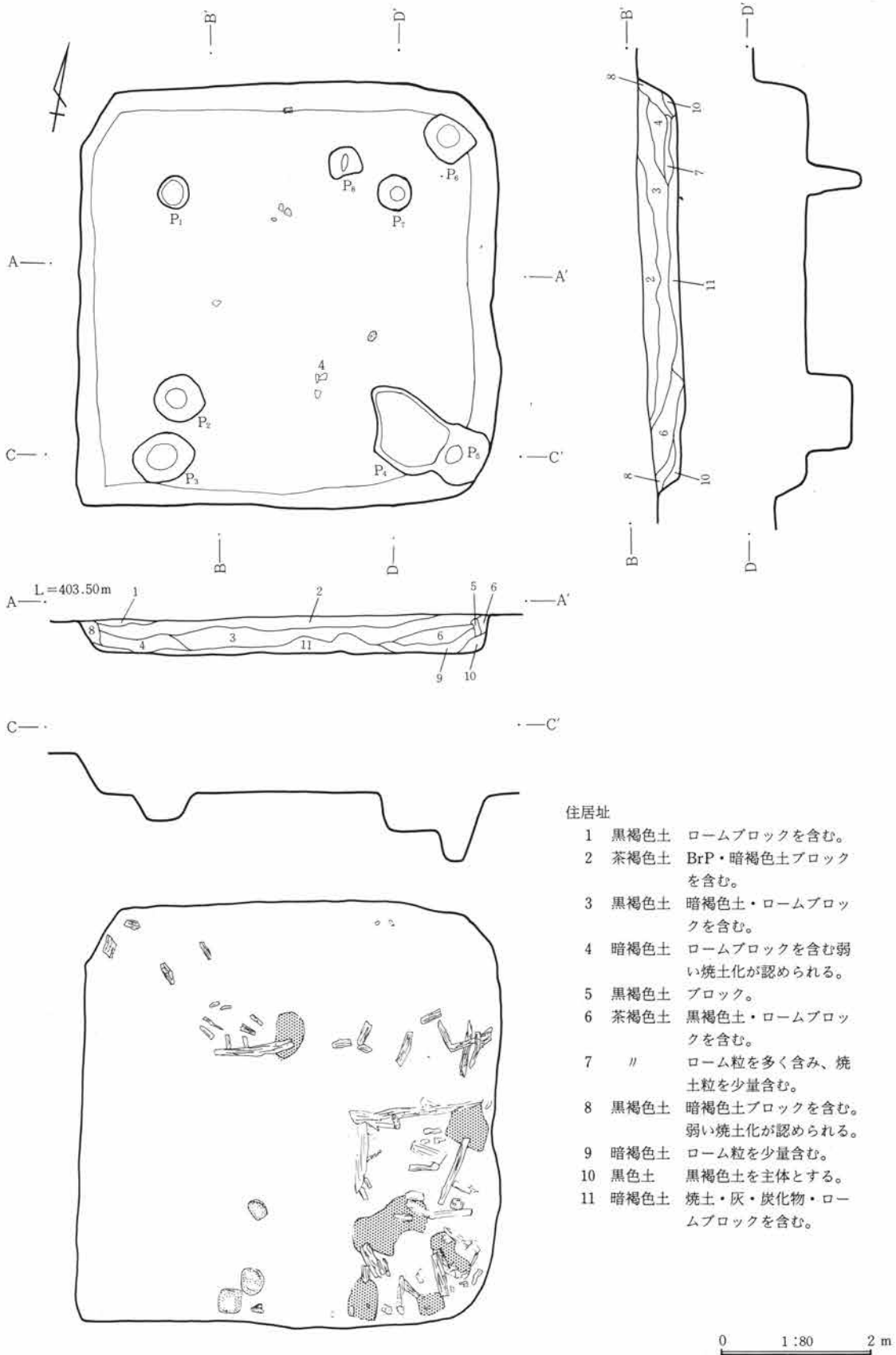


第56図 第138号住居址

第138号住居址

位置 16～19D42～45グリッド。 **方位** 東北東。 **形状** 578×478cmを測る方形のプランを呈し、壁高は44cmを測る。 **覆土** VII層土を中心としている。 **床面** 地床であり、床面の広さは510×324cmを測る。幅28～60cm深さ14cmを測る壁溝が、北及び西部に認められるが、これらは基本的に径4～8cmを中心とする小ピットの線的な集まりである。尚、小ピットは断続的に住居を全周していると考えられる。 **柱穴** 5カ所あり、P₂径20cm深さ14cm、P₃径30cm深さ8cm、P₄径35cm深さ18cm、P₅径28cm深さ18cm、P₆径30cm深さ12cmを測る。この他、住居中央南寄りと、北隅部にピット様の浅い落ち込みがある。主柱穴は、位置的にP₂とP₄が考えられ、北側は前述の落ち込み、東側のそれは壁溝内の遺存が想定される。 **炉** 住居中央西寄りの径80×55cmの焼土面が考えられるが、特定できない。 **土坑** 前述の焼土面の北に接して、径82×72cm深さ20cmのP₁がある。その用途は貯蔵穴が考えられる。 (石守)

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第57図 第148号住居址及び炭化材出土状態

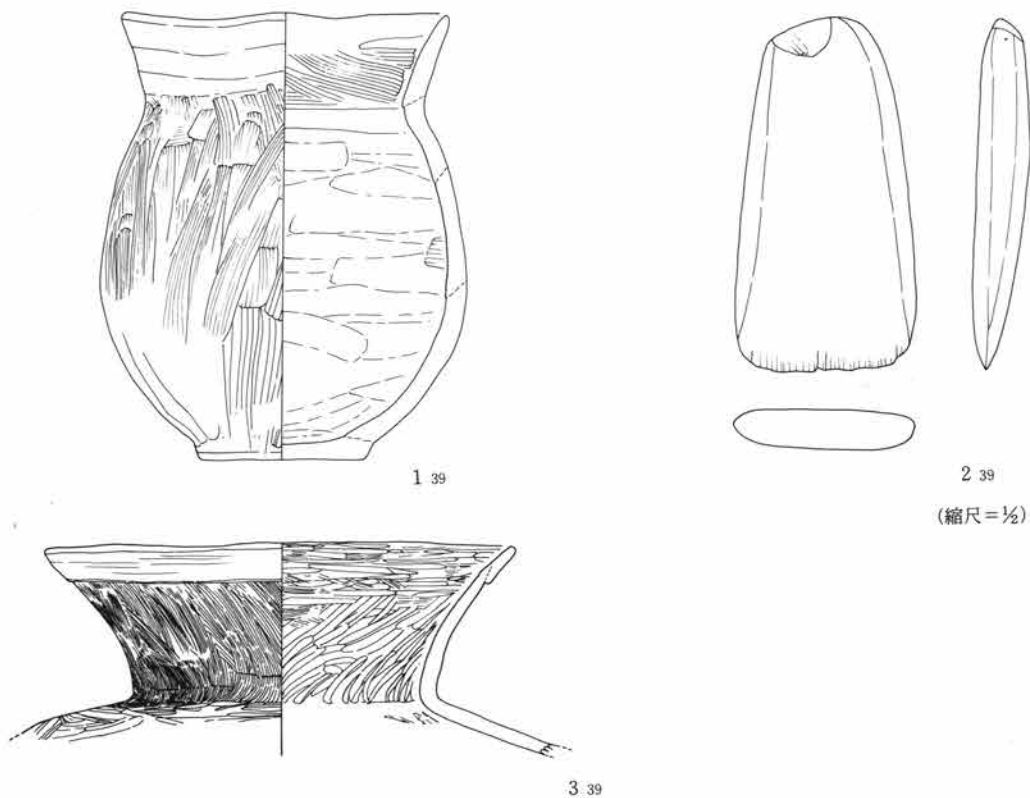
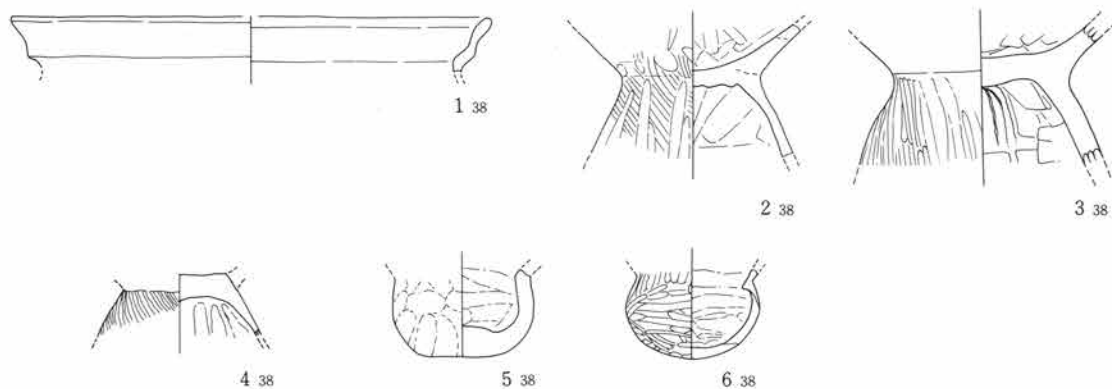
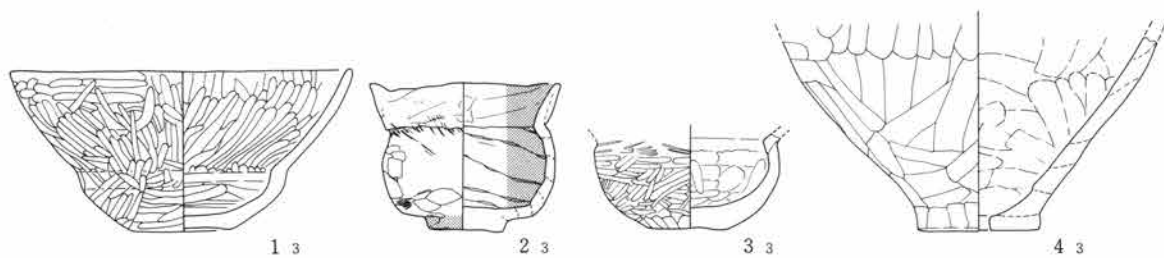
第三章 検出された遺構と遺物

第148号住居址

位置 36～39D23～26グリッド。南東部上位を第43号住居址に切られ、北東9mに第119号住居址、北5mに第51号住居址、西に4.5m隔てて第71号住居址が位置している。 **方位** 北。 **形状** 560×555cmを測る。正方形に近いプランを呈する。壁高は確認面であるVII層上層面から48cmを測るが、確認面と当時の地表に比定されるVI層との比高差から、当初の壁高は60～70cm程あったと推定される。 **覆土** 住居全体を覆うものと、壁端に堆積するものとおおよそ大別されるが、いずれもVI～VIII層土の混土により覆われている。本遺跡中、典型的な焼失家屋の一つであり、床面付近には炭化材が遺存し、数カ所に焼土面が認められる。炭化材は住居東部を中心に遺存し、その出土状態は比較的良好な状況にある。また、炭化材は出土状態及び木材の太さから、以下の3種類に大別される。第1は住居中央部を囲むようにP₁・P₇・P₄を結ぶ線の付近にこの線に沿って、住居のプランに平行して並ぶ径12cm以上を測るものであり、梁あるいは桁になると思われる。第2は壁肩部から住居中央部に向かって陥没するように遺存する。径8cm程の垂木材で、60～80cmの間隔で遺存している。第3はこの垂木材の下に、これに直交するように遺存する、径5～6cmの材であり、それぞれの材の間隔は60cmほどである。 **床面** 500×495cmの大きさを測る地床であり、あまり良好な遺存状態にはない。なお、壁溝などは認められない。 **床面・土坑** 柱穴及び土坑は合計8カ所あり、それぞれP₁径46×42cm深さ64cm、P₂径66×62cm深さ62cm、P₃径82×62cm深さ34cm、P₄径108×104cm深さ50cm、P₅径80×76cm深さ90cm、P₆径64×60cm深さ48cm、P₇径46×44cm深さ72cm、P₈径44×38cm深さ40cmを測る。支柱穴は位置的にP₁・P₂・P₇及びP₄の北西隅の部分が考えられる。また、P₃・P₅・P₆は位置的に規則性があり、北西のものは検出されていないが、支柱穴の建て替え、あるいは側柱の可能性が考えられる。 **炉** 特定できないが、P₁とP₇を結ぶ線の中間の炭化材下面の径60×36cmを測る楕円形の焼土面が、炉となる可能性が考えられる。 **遺物** 床直より三角窓を持つ器台(4)が出土している。 (石守)



第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

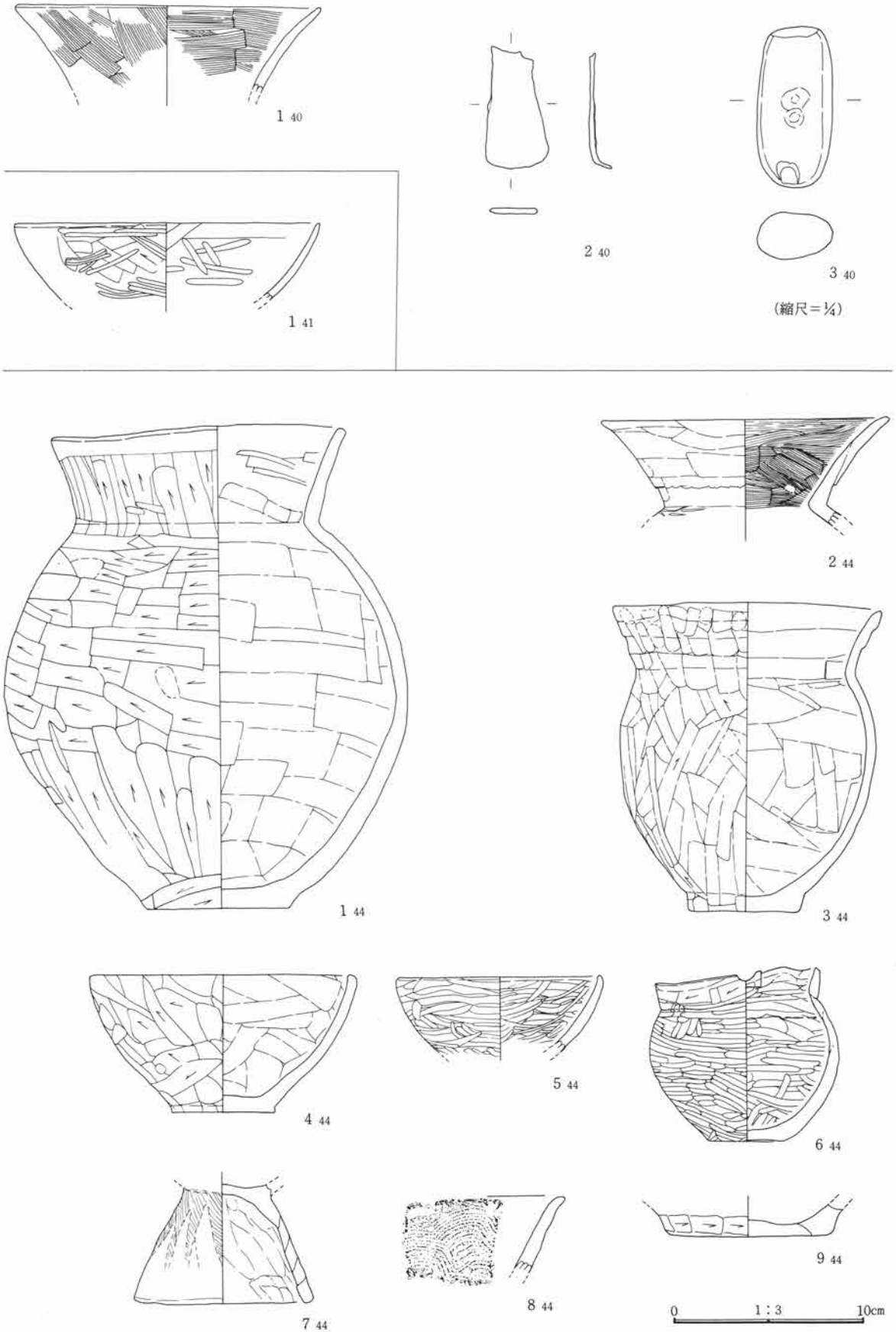


(縮尺=1/2)

0 1:3 10cm

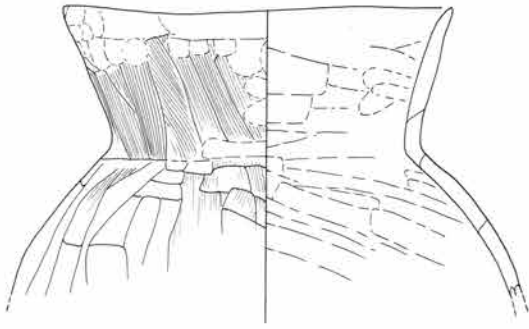
第58図 第3・38・39号住居址出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

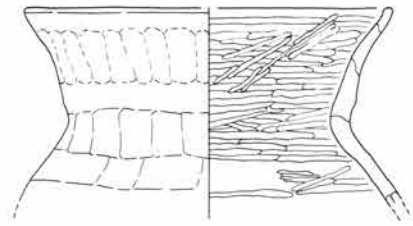


第59図 第40・41・44号住居址出土遺物

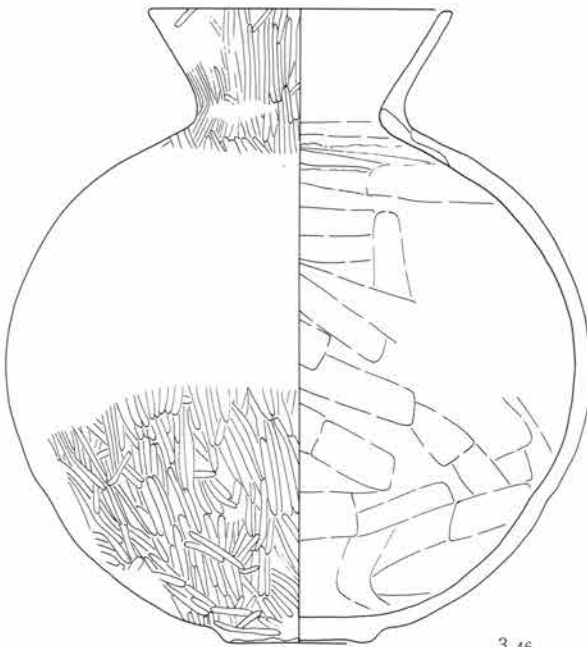
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



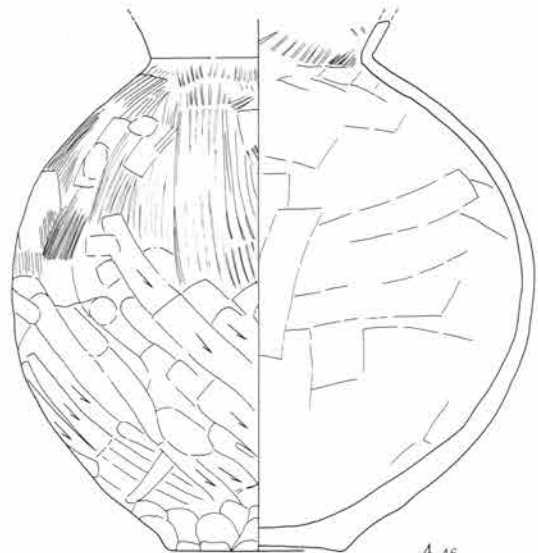
1 46



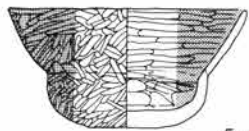
2 46



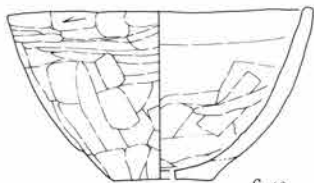
3 46



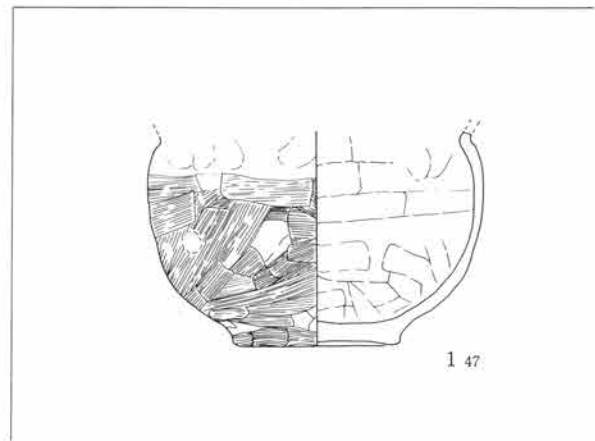
4 46



5 46



6 46

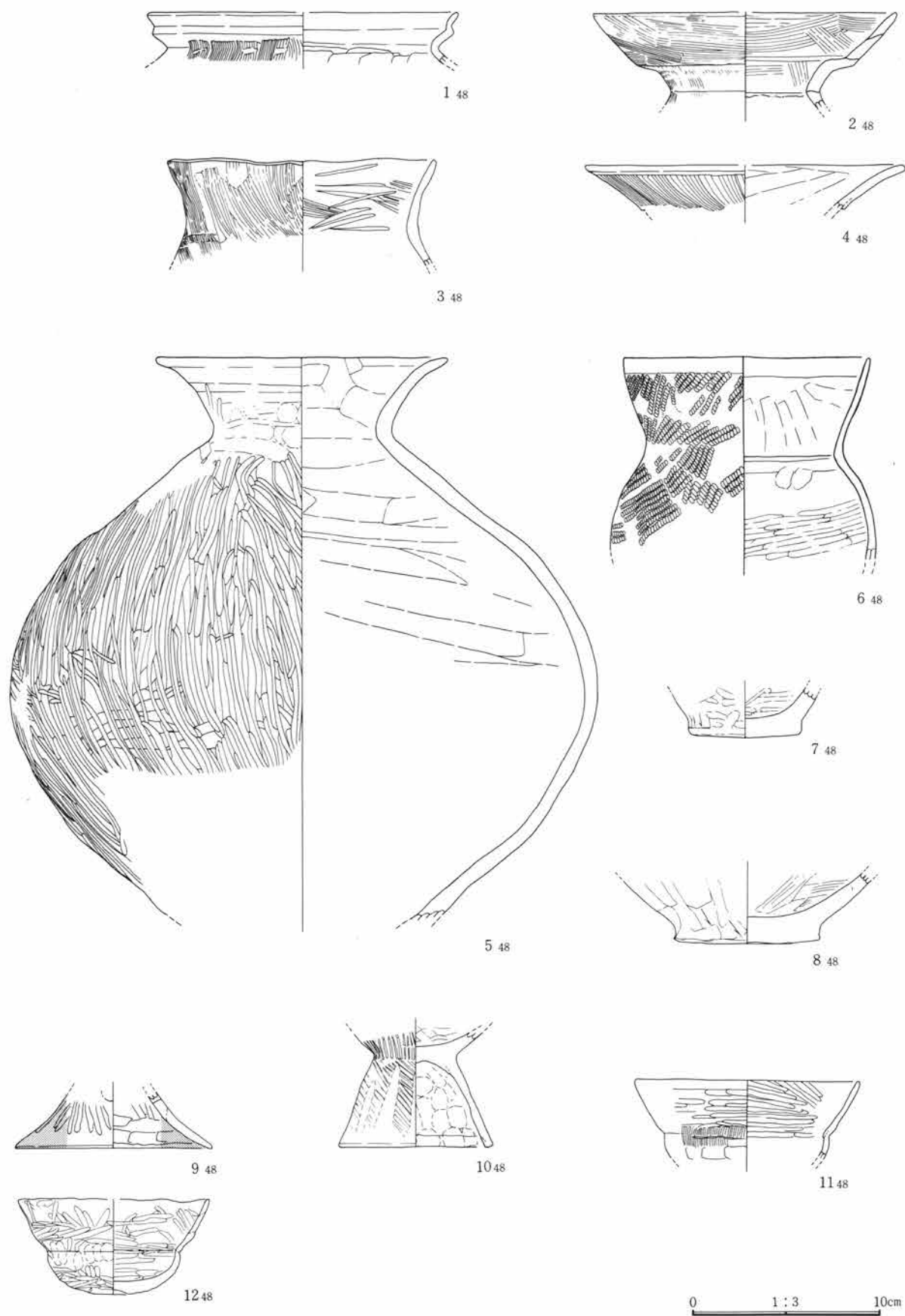


1 47

0 1:3 10cm

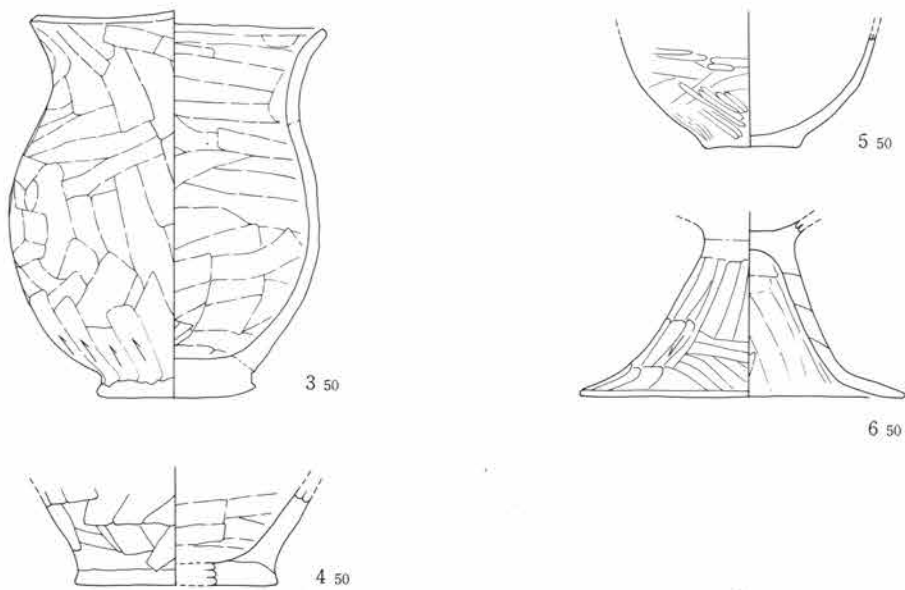
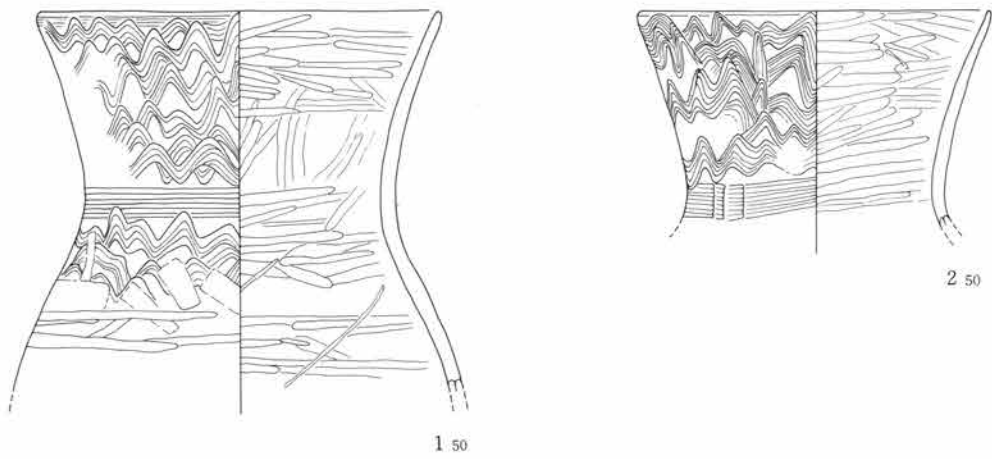
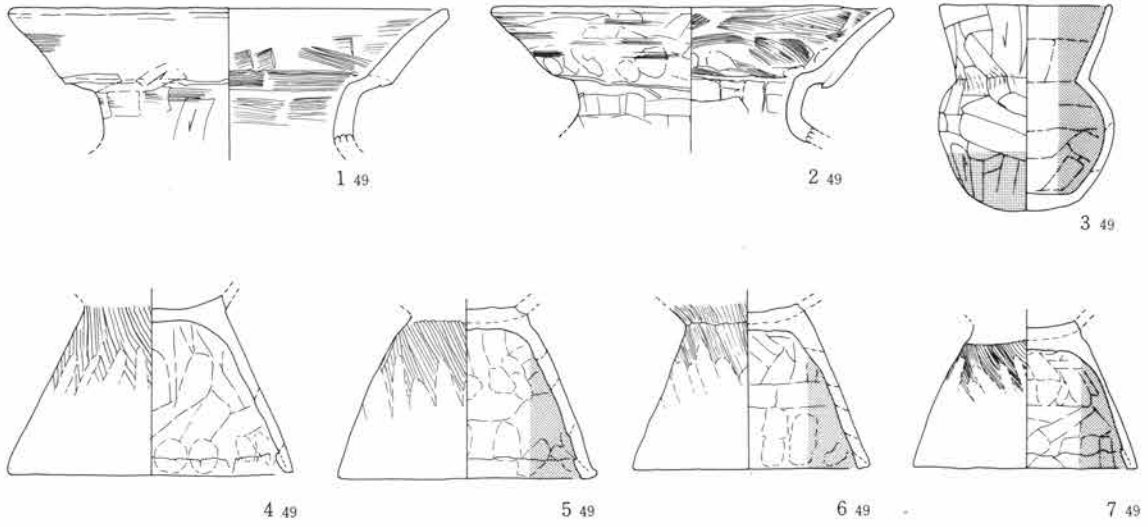
第60図 第46・47号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第61図 第48号住居址出土遺物

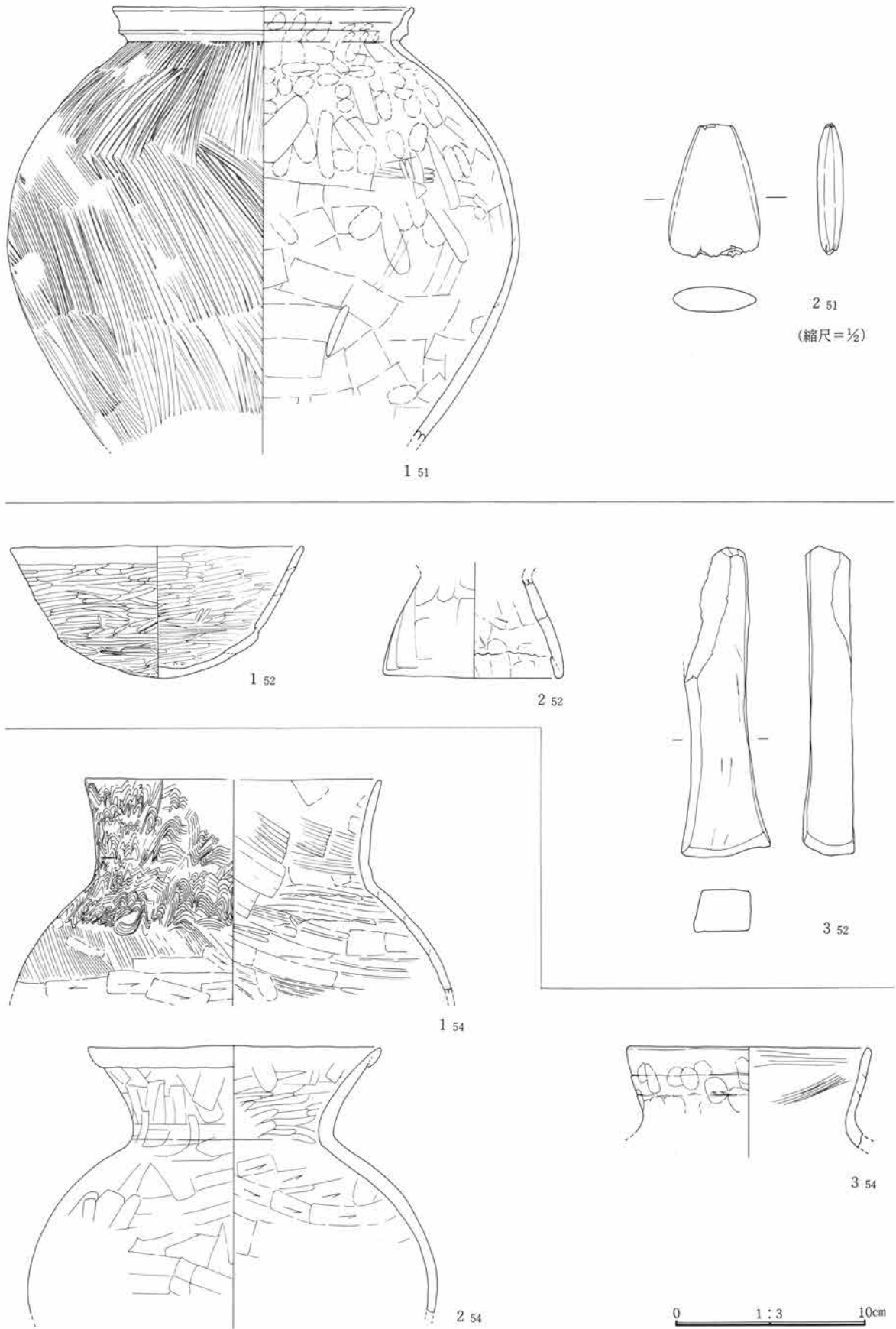
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



0 1 : 3 10cm

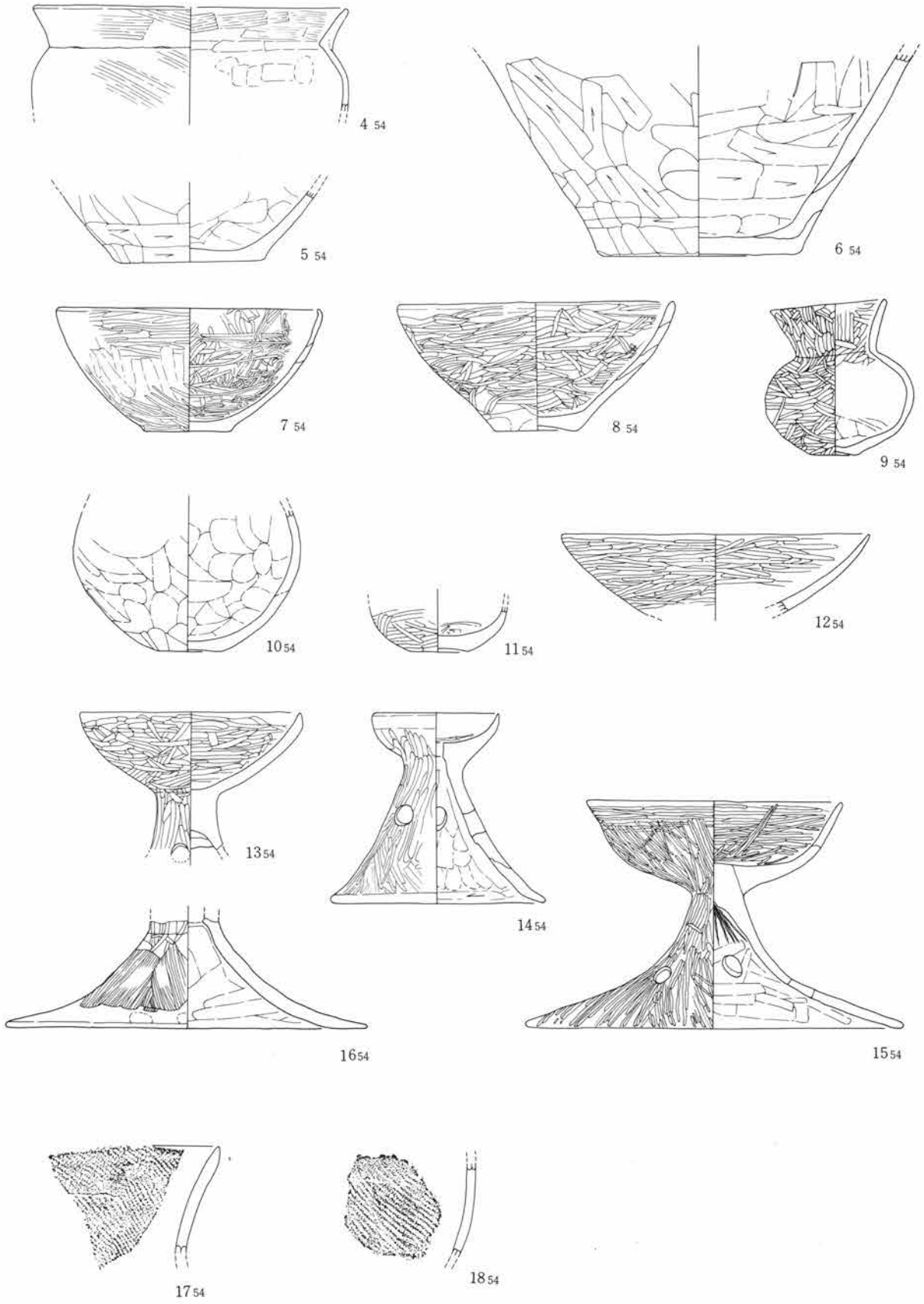
第62図 第49・50号住居址出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



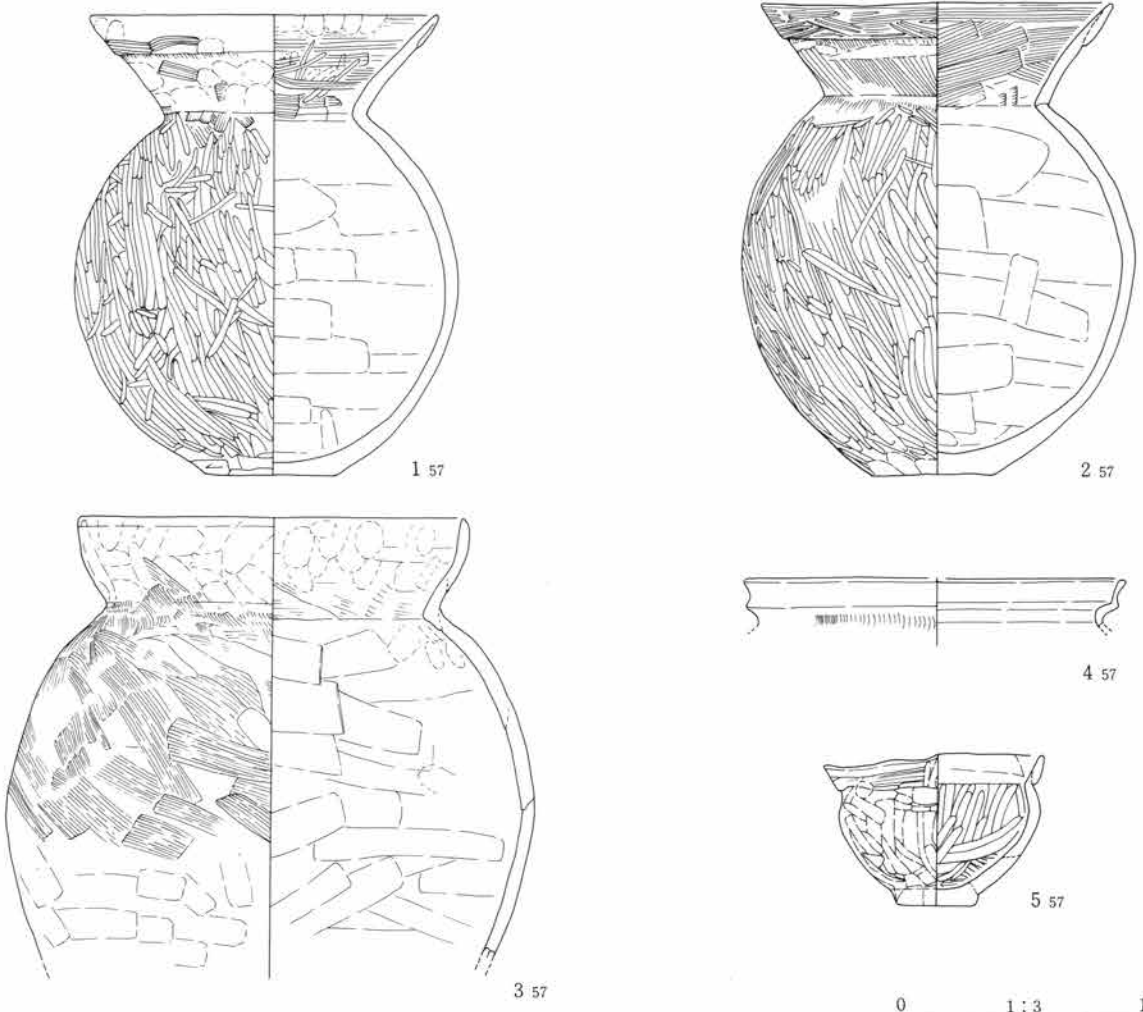
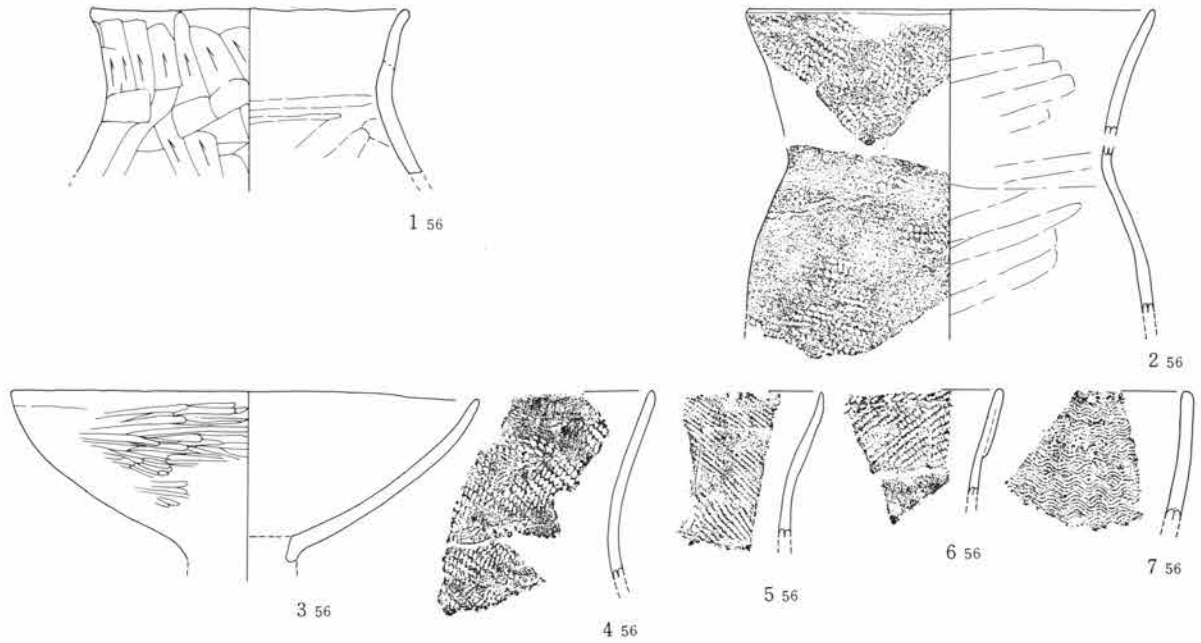
第63図 第51・52・54号住居址出土遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第64図 第54号住居址出土遺物

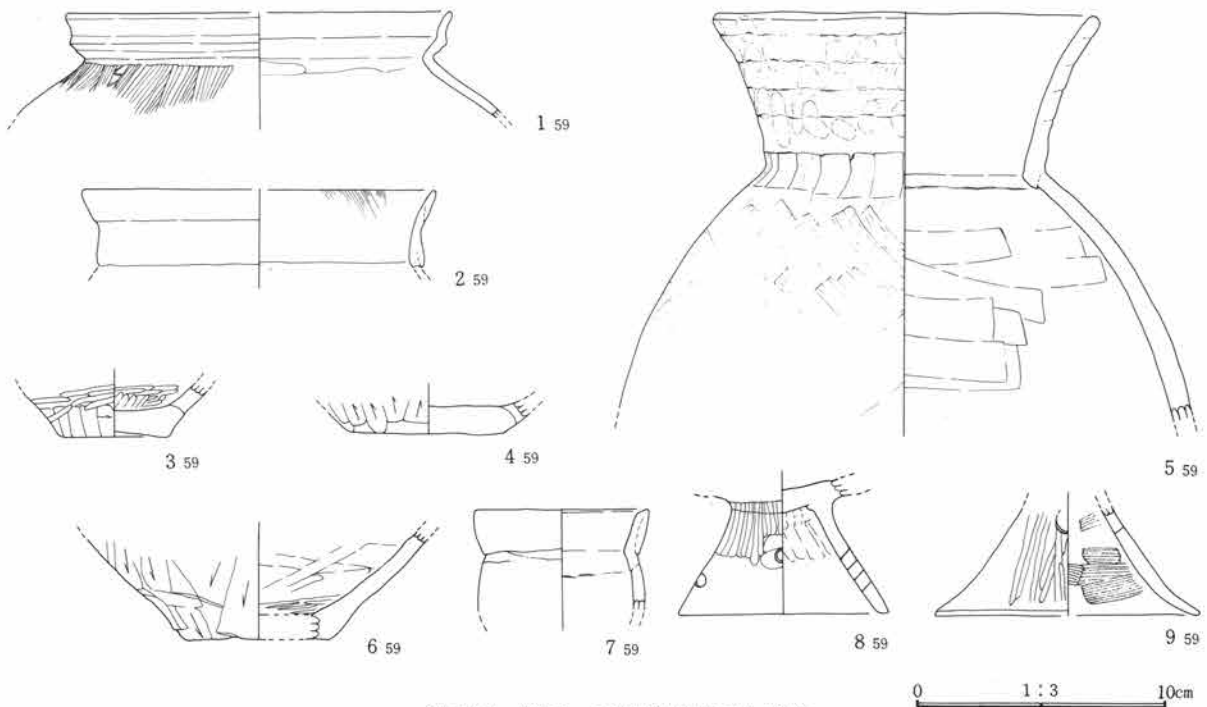
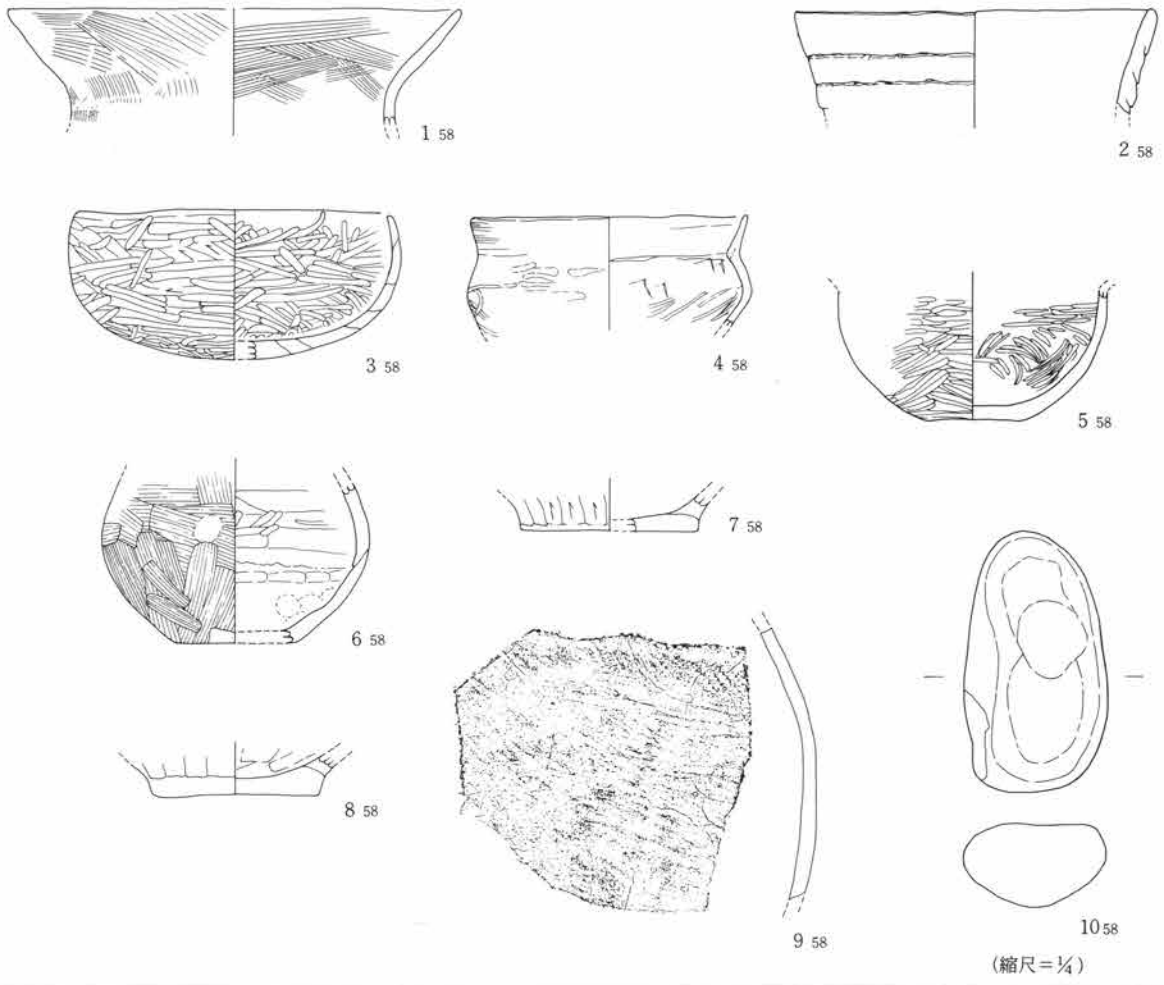
第III章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

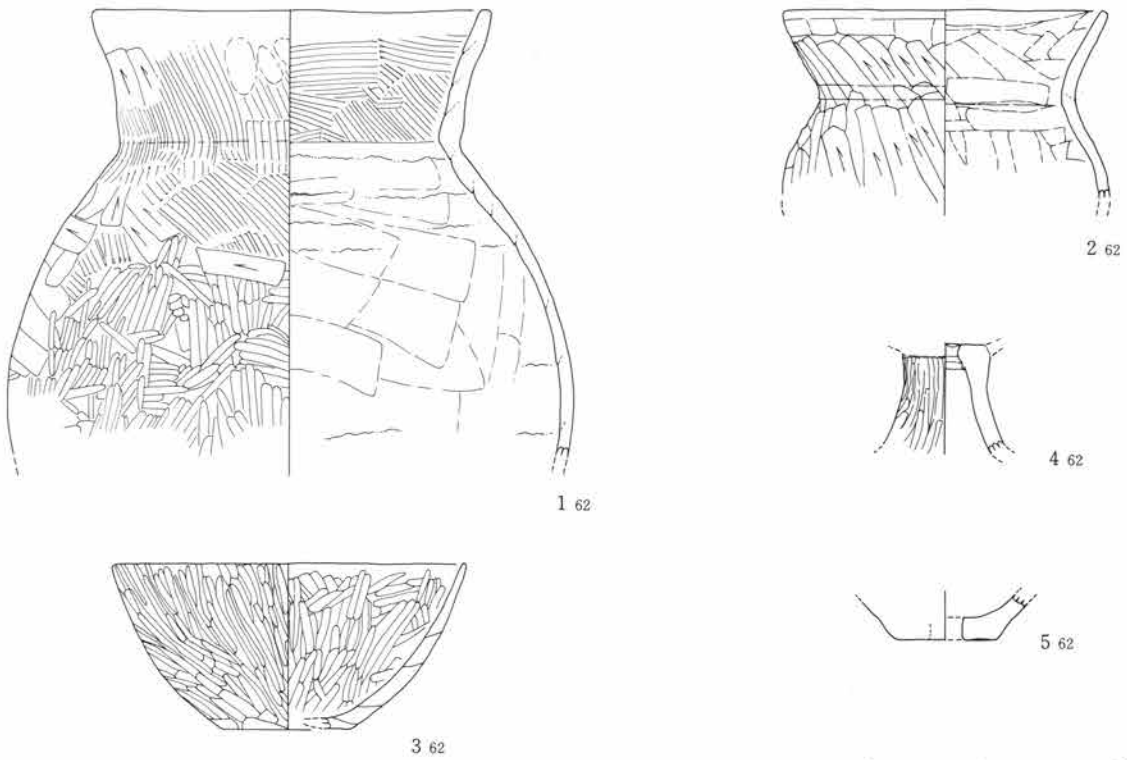
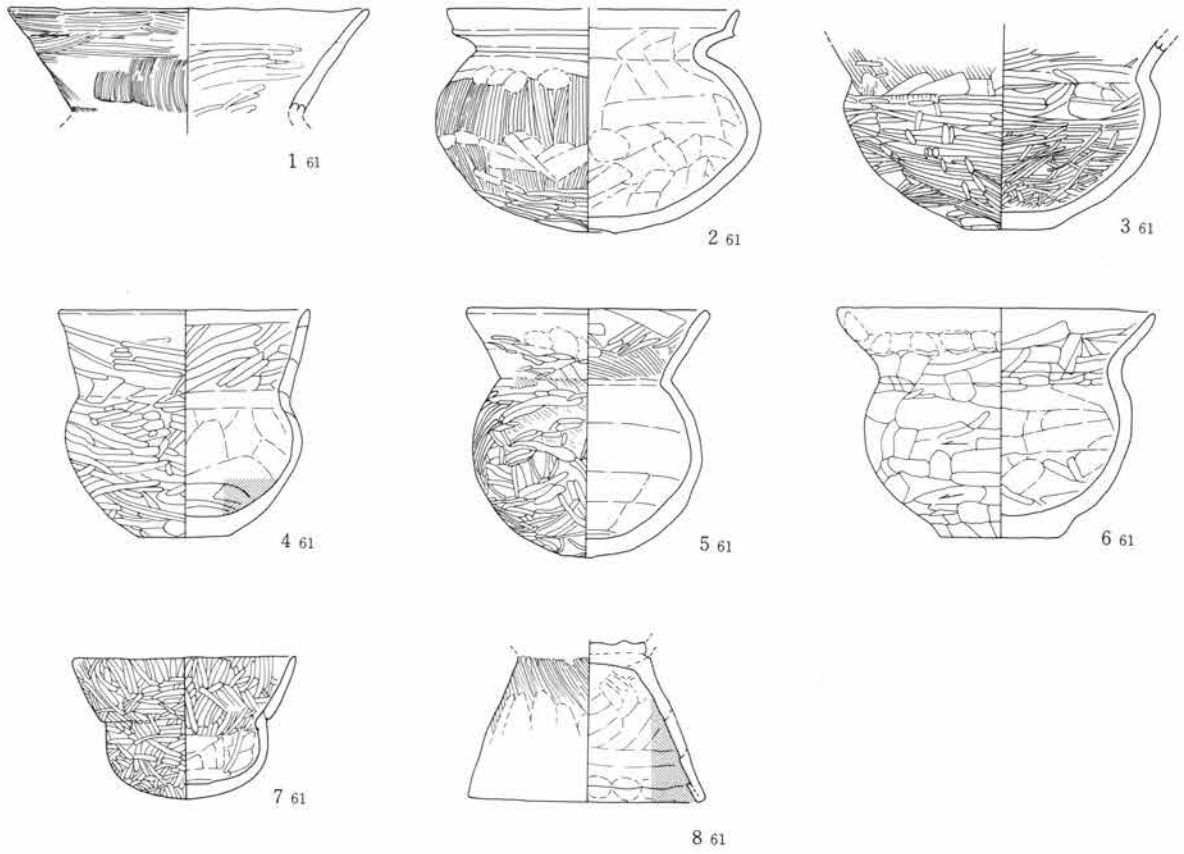
第65図 第56・57号住居址出土遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第66図 第58・59号住居址出土遺物

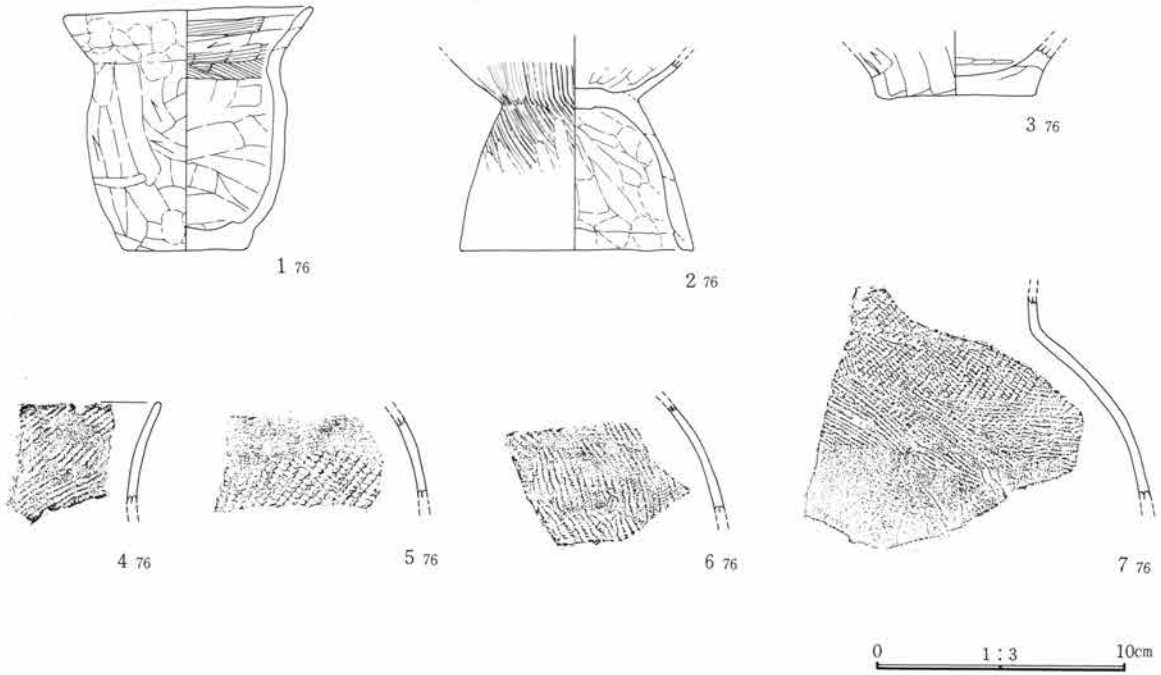
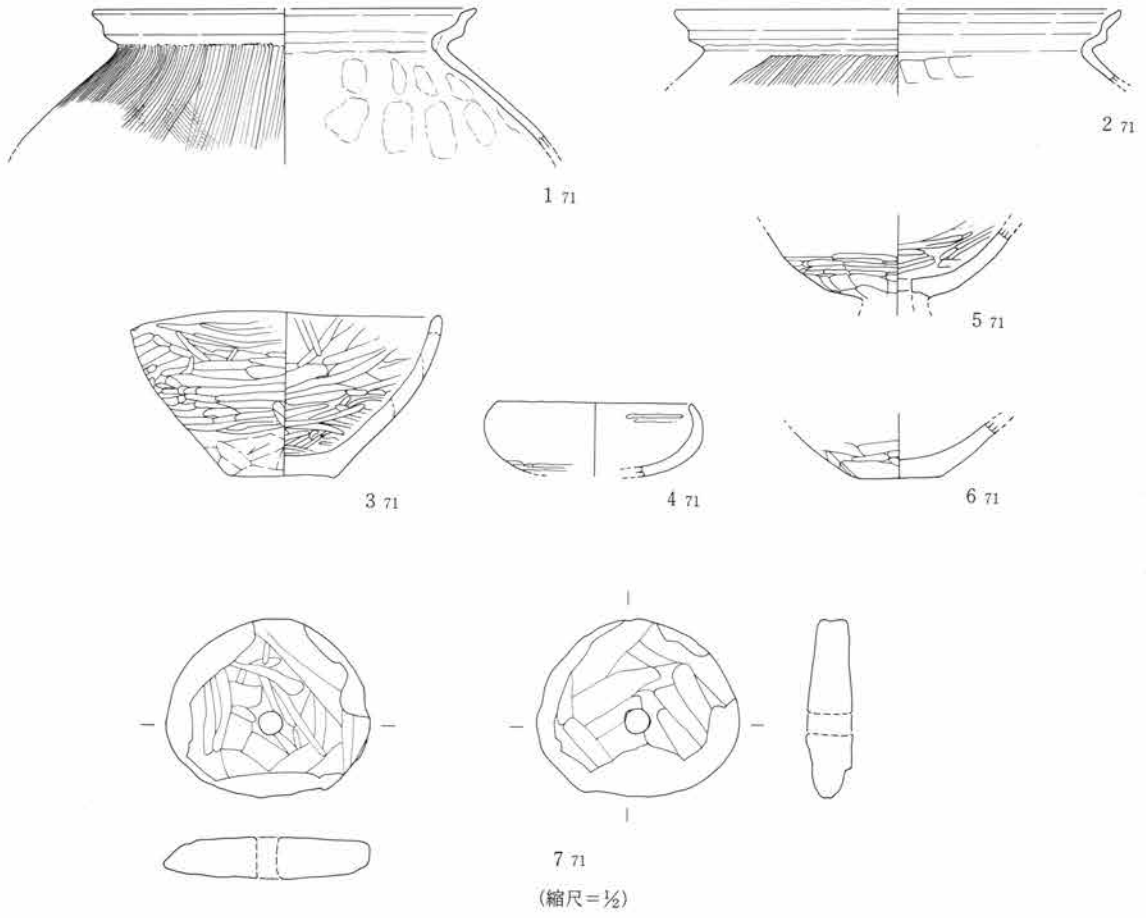
第三章 検出された遺構と遺物



0 1 : 3 10cm

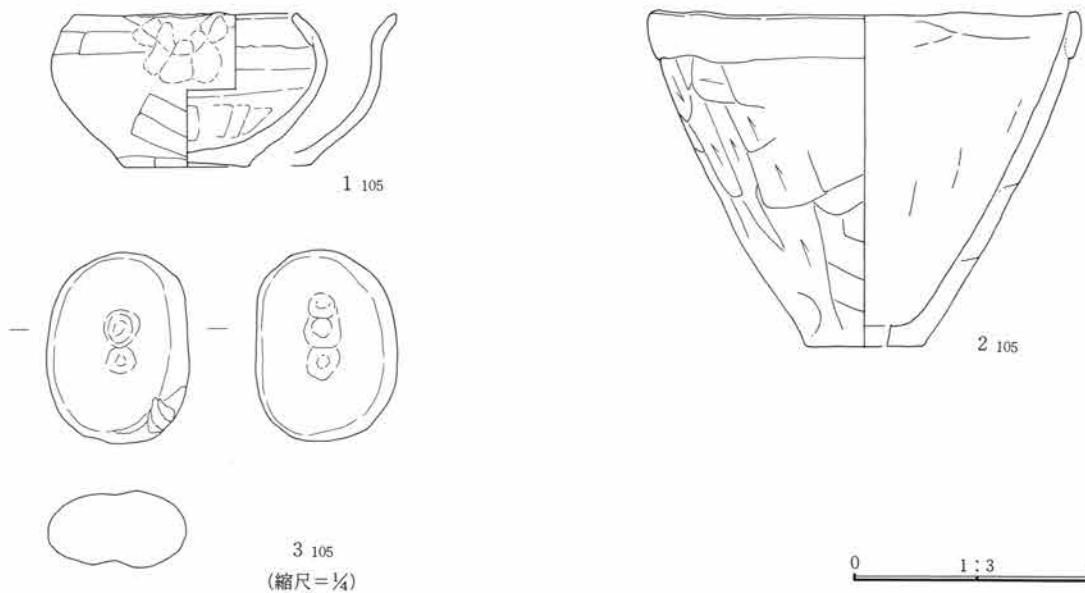
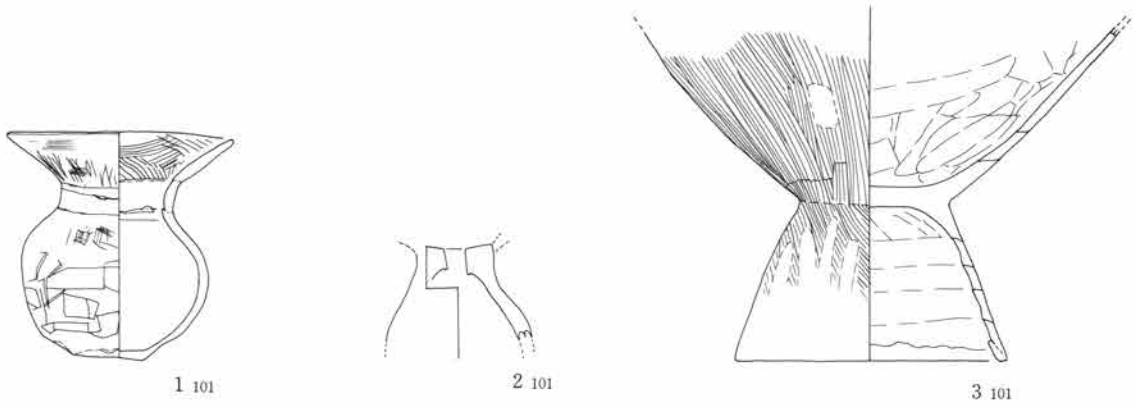
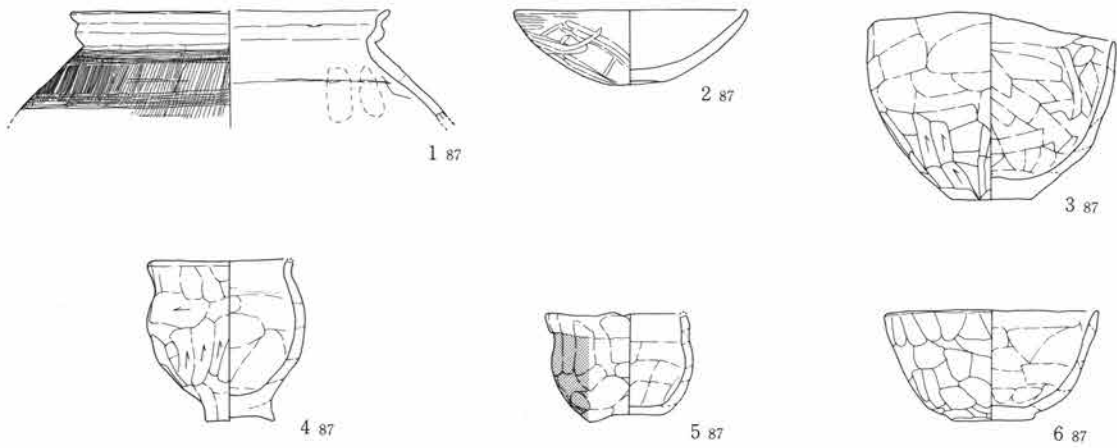
第67図 第61・62号住居址出土遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



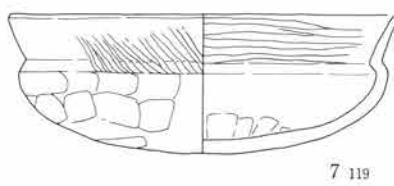
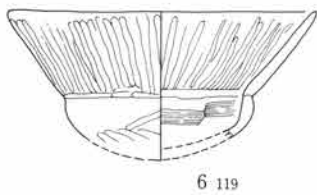
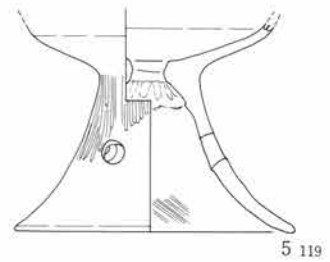
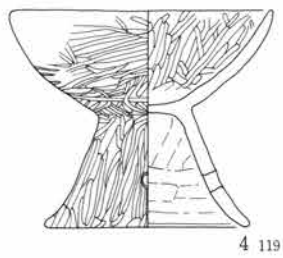
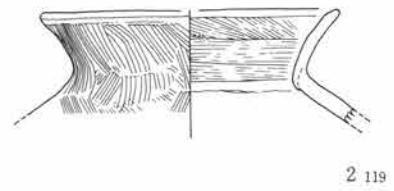
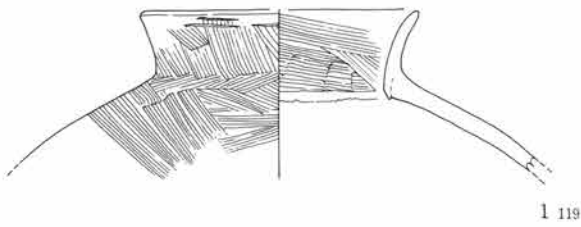
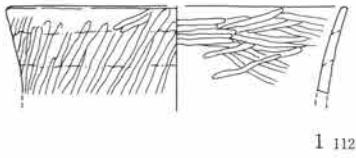
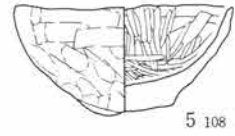
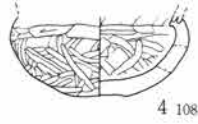
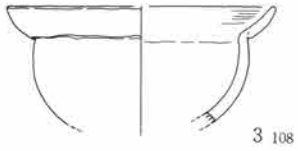
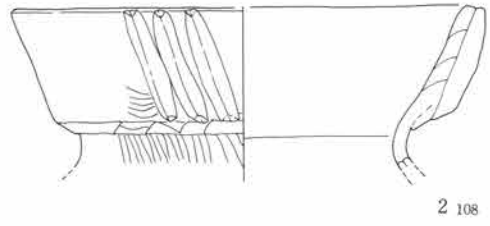
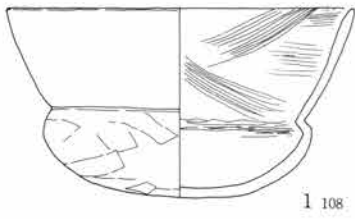
第68図 第71・76号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第69図 第87・101・105号住居址出土遺物

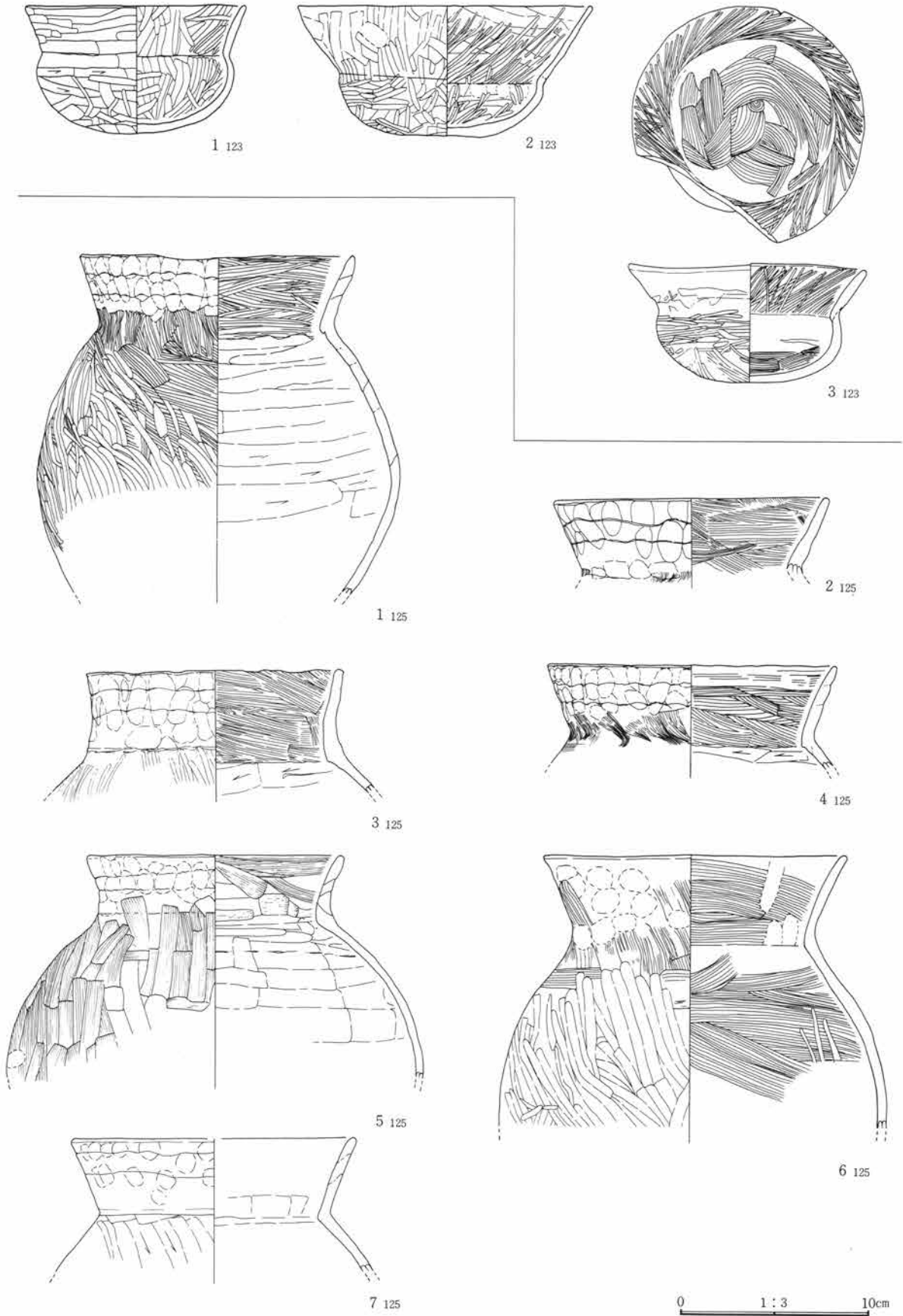
第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



0 1:3 10cm

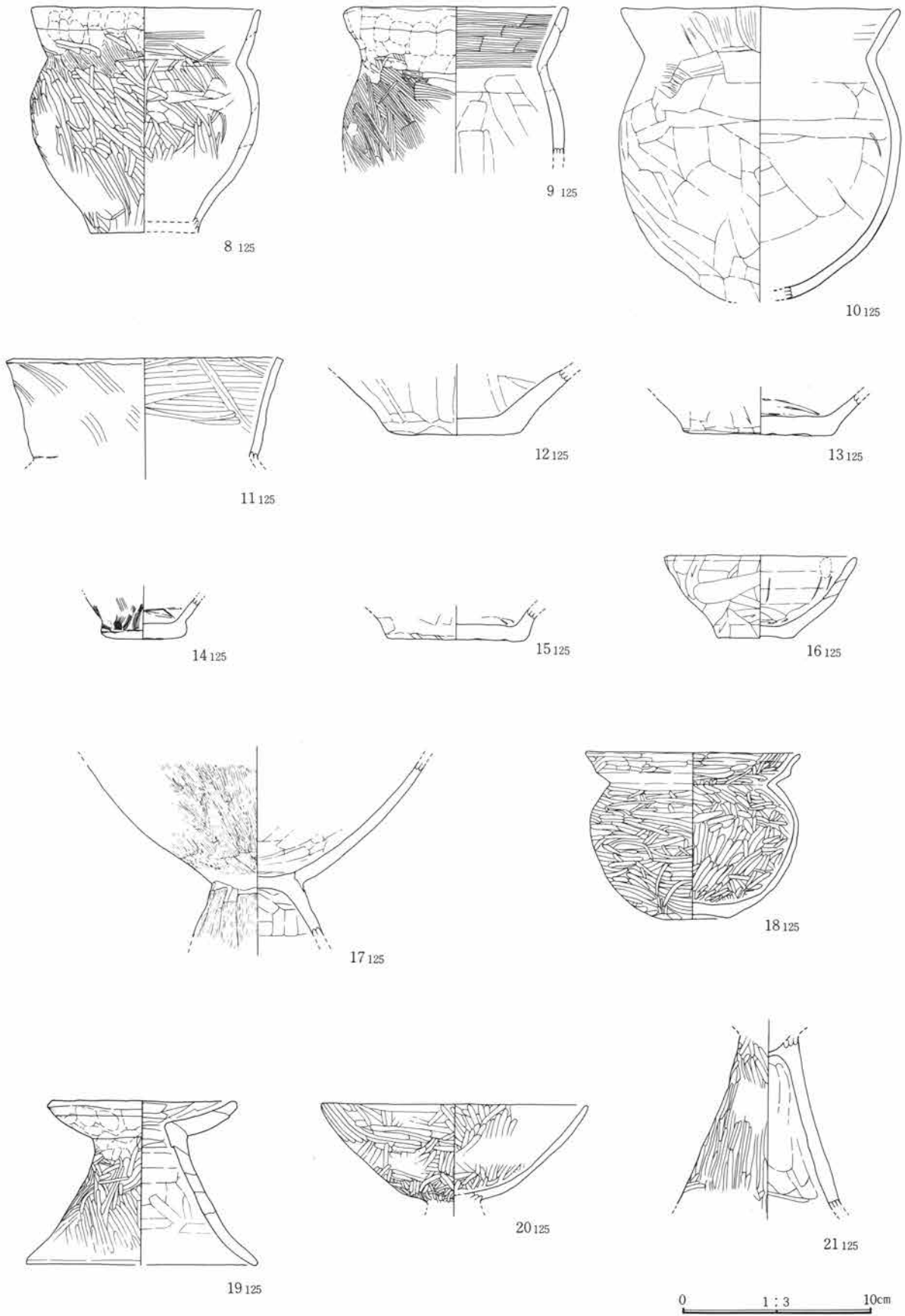
第70図 第108・112・119号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



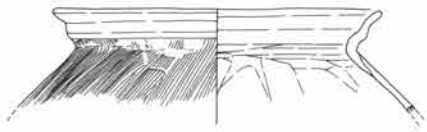
第71図 第123・125号住居址出土遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

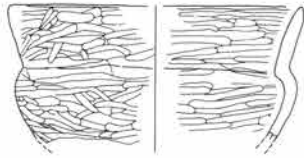


第72図 第125号住居址出土遺物

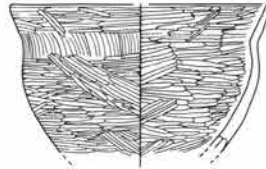
第三章 検出された遺構と遺物



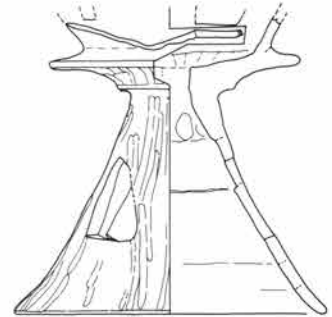
1 148



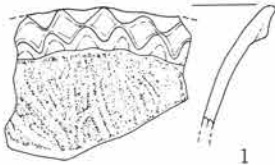
2 148



3 148



4 148



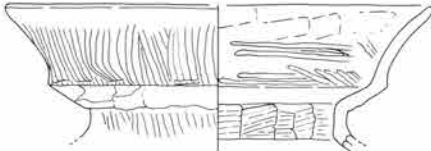
1



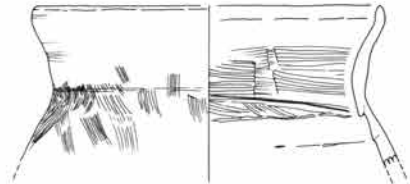
2



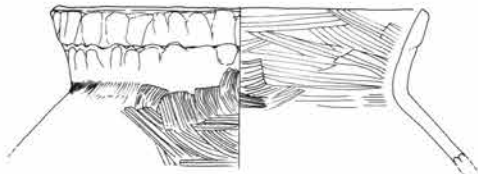
3



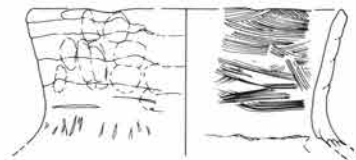
4 表



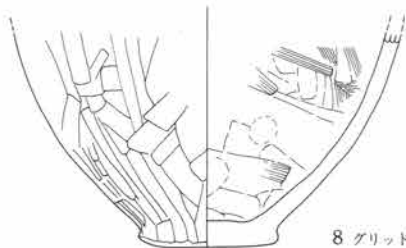
5



6 グリッド



7 グリッド

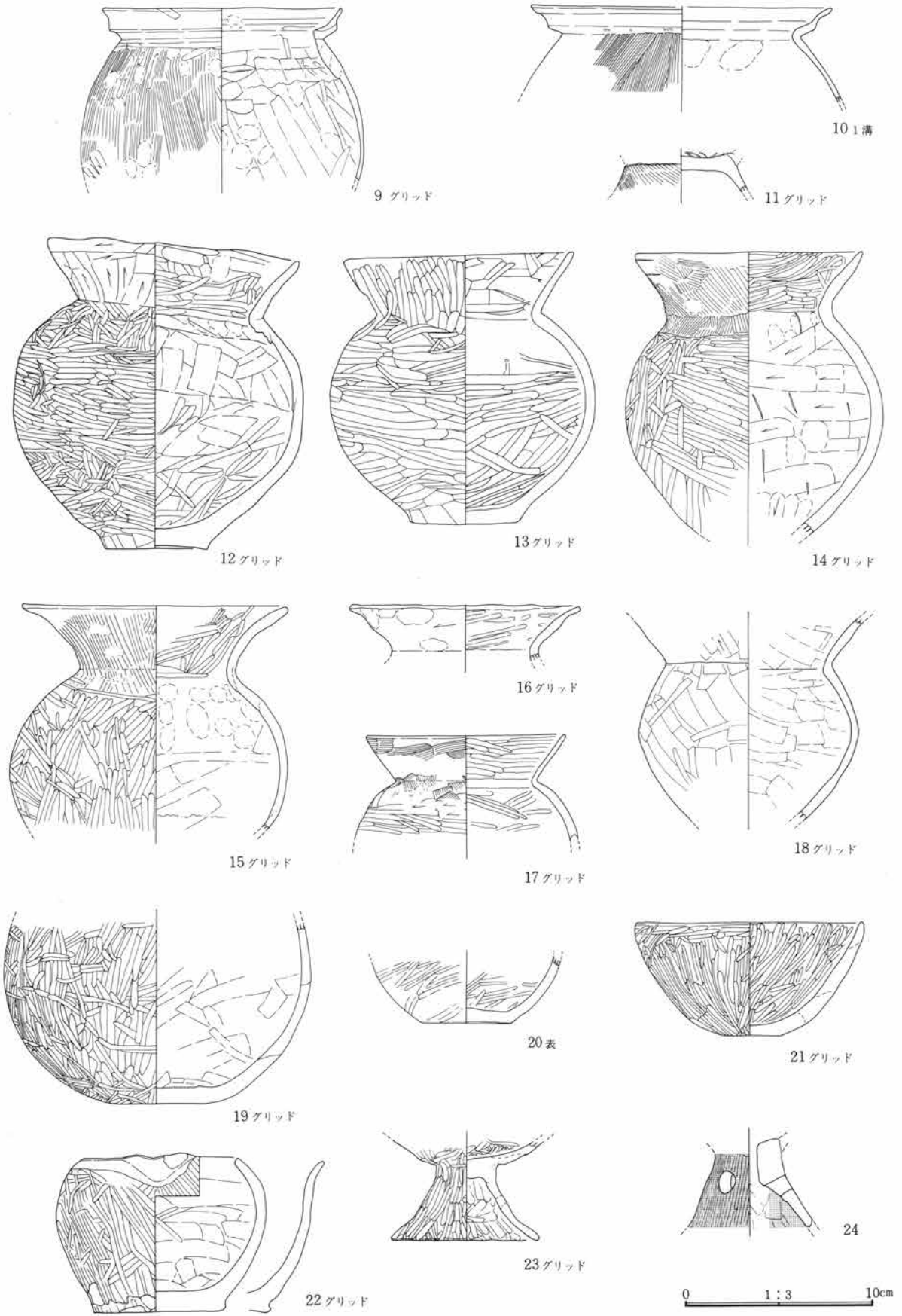


8 グリッド

0 1:3 10cm

第73図 第148号住居址・遺構外・グリッド出土遺物

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物



第74図 遺構外・グリッド出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

古墳時代前半の出土遺物観察表

口径＝口； 数字の単位はすべて
 底径＝底； cmで表した。
 器高＝高； ()内は推定値であ
 裾径＝裾； る。

第3号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型 埴	口：(13.8) 底： 4.0 高： 6.3	床上	口縁部は丸味を持って開く。体部は直線的に落ち底部に至る。底部は僅かに上げ底。	外；器面はやや荒れている。口縁部ナナメのミガキを主体。体部ケズリ後ミガキ。内；口縁部ナナメの規則的なミガキ。体部指ナデ。底部不定方向のナデとミガキ ①砂粒多し ②明橙色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{3}$ 残存
2	ミニチュア 土器	口： 7.7 底： 3.0 高： 5.9	壁際	手握ね、折り返し口縁。口縁部外傾。体部ふくらみを持って落ち、底部突出する。	外；底部上に赤彩残る。口縁～頸部ハケ目後ナデ。体部ナデ。底面ケズリ。内；全面赤彩。口縁部ヨコナデ。体部輪積み痕明瞭。ナデ。底部ナデ。①石英 ②黄橙色 ③やや軟	完形
3	小型 埴	底： 3.2	壁上	頸部屈曲。体部丸味を帯びる。底部平坦。	外；頸部ヨコ方向のハケ目。体部ヨコ、ナナメのミガキ。底面ヘラケズリ。内；頸部ナデ。体部ヘラナデ後指ナデ。底部ミガキ。①長石・石英・雲母 ②にぶい黄褐色 ③良好	口縁部欠損
4	甌	底： 6.8	床直	胴部直線的に開く、底部立ち上がり部を持つ。底面は平坦で、径0.9mmの小孔が1つ穿たれる。	外；胴部下半ナナメのヘラケズリ。下位はヨコのケズリ。底部上タテのケズリ。底面はナデ。内；胴部ヘラナデ。底部指ナデ。①長石・石英②暗褐色③やや軟	胴部下半～底部のみ残存

第38号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S 字 甕 口縁部	口：(19.0)	覆土	口縁部外反。ややだれた稜線。	内外面ともヨコナデ。①少量の長石 ②暗褐色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{4}$ のみ残存
2	台付 甕 台部		床直	甕部底面平底。脚部「ハ」字状に開く。器肉厚い。	外；脚部は屈曲部よりナナメのハケ目。内；甕部底面ヘラナデ。脚部、絞り目残る。ヨコ方向のナデ。 ①少量の長石 ②にぶい黄褐色 ③良好	甕部下端～脚部上半残存
3	台付 甕 台部		床上	甕部底面平底。脚部「ハ」字状に開く。	外；甕部底面ナナメのハケ目。脚部ナナメのハケ目後間隔をあけてナデをタテに施す。内；甕部底面ナデ。脚部ナデ。①細砂 ②明黄褐色 ③良好	甕部下端～脚部上半残存
4	台付 甕 台部		覆土	脚部「ハ」字状に開く。	外；甕部との接合部剥落。脚部ナナメのハケ目。内；タテ方向の指ナデ。 ①砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	脚部上半残存
5	ミニチュア 土器	底： 3.8	覆土	体部やや丸味を持つ。平底底部内面肥厚。	外；体部指ナデ。底部ナデ。内；ヨコナデ。①黒色粒 ②淡黄褐色 ③やや軟	口縁部欠損
6	ミニチュア 土器		覆土	体部ふくらみを持ち球形。丸底。	外；頸部タテ方向のミガキ。体部ナナメヨコのミガキ。内；口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向の指ナデ。底部指ナデ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部上半欠損

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

第39号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型甕	口：(13.2) 底： 6.6 高： 17.7	床上	口縁部外傾。胴部上半にやや丸味を帯び下半でふくらむ。腰～底部球形に近い。底部は平坦で立ち上がり部を持つ。	外：口縁部に輪積み痕を残すヨコナデ。胴部ハケ目状のナデを下半にまで施す。底面ハケ目状のナデ。内：口縁部ヨコハケ後上部でヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。①長石 ②黒褐色 ③良好	1/2残存
3	壺	口： 19.0	床上	折り返し口縁。口縁部外反。頸部屈曲は著しく、肩部は大きく広がる。	外：口唇部ヨコナデ。口縁部タテ方向のハケ目。頸部タテのハケ目。肩部ヨコ方向のミガキ。内：口縁部ヨコ・ナナメのハケ目後ヨコ・ナナメのミガキ。肩部ヘラナデ。①雲母 ②橙色 ③良好	口縁～肩部残存
2	磨製石斧	長：9.0cm 刃幅4.3cm 基幅2.8cm 厚さ1.4cm 重量110g			刃部に擦痕あり。蛇紋岩製	

第40号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕 口縁部	口：(16.0)	覆土	口縁部外傾しやや直線的。	外：口縁部ナナメのハケ目状のナデ後上位で弱いヨコナデ。内：ヨコのハケ目状のナデ。①長石 ②暗褐色 ③良好	口縁部1/2残存
2	鉄製鎌	耳部が長軸に対しほぼ直角に曲げられる。研減りにより刃区が生じ、そこから耳元まで28cmを測る。				
3	磨石	両端部に叩きによる使用痕。裏面にも不明瞭な凹み有り。重量290g。砂岩製。縄文時代の所産か。				

第41号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	高杯 杯部	口：(16.0)	床下	口唇部はやや鋭く丸味を帯びて体部に続く。	外：口唇部ヨコナデ。体部ナナメのヘラケズリ後一部にミガキ。内：口縁部ヨコナデ後一部にナナメのナデ。体部ナデ後ミガキ。①細砂 ②淡黄褐色 ③良好	杯部1/2残存

第44号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口： 15.4 底： 7.0 高： 25.1	床直	口縁部外傾。胴部中央にふくらみを持ち、底部は立ち上がり部を持つ。	外：口縁部タテ方向のヘラケズリ後口唇部ヨコナデ。胴部上半ヨコ方向のヘラケズリ、下半タテのヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内：口縁部ヨコ方向のヘラナデ。口唇部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英 ②にぶい褐色 ③良好	完形。胴部の一部欠損
2	壺	口： 15.1	床直	口縁部外傾。下位に折り返しによる段を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。下位より頸にかけてナナメのハケ目後ナデ。肩部ヨコ方向のミガキ。内：口縁部ヨコナデ、下位ヨコのハケ目後ナデ。肩部はナデ。①長石・石英多い ②橙色 ③良好	口縁～肩部1/2残存
3	小型甕	口： 14.1 底： 6.0 高： 16.0	床直	口縁部外傾。輪積み痕を2条残す。胴部上半にふくらみを持つ。底部は平底で立ち上がり部を持つ。	外：口縁部の輪積み痕を指押え後ヨコナデ。頸部タテ方向のヘラケズリ。胴部タテ・ナナメのヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向を主体のヘラナデ。底部ヘラナデ。①長石・石英多い。②黄褐色 ③良好	ほぼ完形 胴部上半の一部に煤付着

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
44住 4	鉢	口：14.0 底：5.4 高：7.1	床直	口唇部平坦面を持つ。口縁～体部は丸味を持ち、立ち上がり部を持つ平底。	外：口唇部ヘラケズリ。口縁～体部不定方向のヘラナデ。立ち上がり部はタテのヘラケズリ。底面はナデ。内：全体的にヨコ方向のヘラナデ。 ①石英 ②暗褐色 ③良好	1/4欠損 外面2次焼成。内面底部に煤付着
5	椀	口：(10.8) 底：(5.0) 高：(4.4)	床上	口縁部やや内湾。口縁～体部丸味を持つ。	外：口縁～体部ヨコ方向主体のミガキ。下半ではナナメのミガキ。内：全体的にヨコ方向のミガキ。一部にタテミガキ加わる。①細砂 ②橙色 ③良好	口縁～体部1/2残存
6	小型壺	口：8.4 底：4.0 高：9.0	床直	口縁部垂直気味に立つ。口唇部に片口状の凹みを持つ。体部上半にふくらみを持ち底部は僅かに上げ底。	外：口縁部ヨコのヘラナデ。頸部に輪積み痕残す。体部ヨコ方向を中心としたていねいなミガキ。底面ヘラケズリ後ミガキ。内：口縁部ヨコミガキ。頸部ヨコ方向のヘラケズリ。体部ヨコミガキ。腰部ミガキ。①長石・雲母 ②橙色 ③良好	完形
7	台付甕 脚部	裾：9.4	床直	脚部「ハ」字状に開く。裾端部平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持つ。	外：脚部ナナメのハケ目の後一定間隔のタテの指ナデ。内：甕底面ヘラナデ。脚部タテの指ナデ。裾部折り返しを中心に指押え。①砂粒②にぶい黄褐色③良好	脚部のみ残存
8	壺 口縁部		覆土	口縁部外傾し、口唇部やや外反。	外：波状文。内：ナデ後ヨコミガキ。 ①少量の石英 ②褐色 ③やや軟	口縁部破片
9	甕 底部	底：8.6	ピット内	平底。立ちあがり部を持つやや大型の底部。内面中央やや肥厚。	外：底部上ヨコのヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内：底部上ナデ。底面ヘラケズリ。①砂粒 ②橙色 ③良好	底部のみ残存

第46号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：15.5	床直	口縁部外傾。肩部丸味を帯びる。	外：口縁部タテのハケ目後口唇部ヨコナデ。肩部タテ方向のヘラケズリ後ナデ。内：口縁～肩部ヨコ方向のヘラナデ。 ①石英 ②にぶい橙色 ③やや軟	口縁～肩部残存
2	壺	口：(15.0)	周溝内	口縁部外傾。肩部丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。下位でタテの指押え。頸部タテのヘラナデ。肩部ヨコのヘラナデ。内：口縁部ヨコ・ナナメのミガキ。肩部ナデ後ミガキ。 ①少量の長石・石英 ②黄褐色 ③良好	口縁～肩部1/4残存
3	壺	口：(12.0) 底：6.0 高：25.0		口縁部外傾。胴部中央にふくらみを持ち、球形を呈す。底部僅かに上げ底。	外：口縁部タテ方向のミガキ。胴部タテ主体のミガキ。底面はケズリ後ミガキ。内：口縁部ナデ。胴部ヨコのヘラナデ。 ①長石・雲母 ②褐色 ③良好	1/4残存
4	壺	底：7.0	床直	口縁部外傾。胴部中央にふくらみを持ち、球形を呈す。底部僅かに上げ底で立ち上がり部を持つ。	外：胴部タテ方向の強いヘラナデ。下半はタテのヘラケズリ。内：頸部ヘラナデ後ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。 ①細砂 ②明褐色 ③良好	口縁部欠損
5	小型埴	口：6.0 底：3.0 高：4.7	床直	口縁部僅かに内湾しながら外傾。体部やや直線的に落ち全体的に扁平。底部平坦面を持つ。	内外面とも赤彩。外：口縁部ナナメのミガキ。体部ナナメのミガキ。底面ナデ。内：口縁部ていねいなミガキ。体部～底部指ナデ後一部ミガキ。 ①石英 ②赤褐色 ③良好	完形

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
46住6	甌	口：12.6 底：4.0 高：6.8	床直	口縁～体部やや直線的に開く。下半丸味を帯びる。底部は平坦で中央に径1.0cm程の孔を穿つ。	外；口縁～体部上半ヨコ方向のヘラケズリ後ナデ。下半タテのヘラナデ。底面ナデ。内；口縁部ヨコナデ。体部は不定方向のヘラナデ。 ①やや粗。石英 ②褐灰色 ③やや不良	完形

第47号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型甕	底：6.4	床直	胴部中央にふくらみを持ち全体的に扁平。底部僅かに上げ底。	外；肩部指押え。胴部ヨコ・ナナメのハケ目状のナデ。底面ケズリ後ナデ。内；全体的にヨコのヘラナデ主体。 ①長石 ②淡黄褐色 ③良好	口縁部欠損

第48号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S字甕	口：(16.6)	覆土	口縁部外反。稜線はナデによって丸味を帯びる。器肉は薄い。	外；口縁部ヨコナデ。頸部～肩部タテ方向の5～6本単位のハケ目。内；口縁部ヨコナデ。肩部タテのヘラナデ。 ①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	2重口縁壺	口：(15.3)	覆土	複合口縁。上段外傾、下段強く外反し短い。肩部屈曲し強く張る。	外；口縁部上段ナナメのハケ目。下段タテのハケ目後ヨコナデ。肩部タテのハケ目。内；口縁部上段ナナメのハケ目。下段ナナメのハケ目後強いナデ。肩部ナデ。 ①長石・石英 ②褐灰色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	甕	口：(14.3)	覆土	口縁部やや外反。口唇端部にナデによる面を持つ。	外；口縁部タテ方向のハケ目。内；口縁部ヨコのハケ目後雑なミガキ。 ①長石 ②暗褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	壺	口：(17.1)	覆土	口縁部大きく外傾。折り返しによる複合口縁か？	外；口唇部ナデ。口縁部ナナメのハケ目。内；口縁部ナナメのヘラナデ。 ①長石 ②褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	壺	口：15.4	覆土	口縁部外反。胴部中央にふくらみを持つ。	外；口縁部ヨコナデ。頸部指頭痕。胴部ヘラケズリ後タテ方向のミガキ。内；口縁部ヨコのヘラナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。 ①長石・石英 ②黄褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	甕	口：13.1	床下土坑	口縁部外傾。胴部にふくらみを持つ。	外；口唇部ヨコナデ。口縁～胴部上半にL・Rの縄文を施す。下半はナデ。内；口唇部ヨコナデ。口縁部ナナメのヘラナデ。肩部指頭痕。胴下半ヨコミガキ。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	口縁～胴上半部 $\frac{1}{2}$ 残存 54住覆土の破片と接合
7	(壺?) 底部	底：5.8	覆土	平底。立ち上がり部を持つ。	外；腰部不定方向のミガキ。底面上タテのヘラケズリ後ナデ。底面ナデ。内；腰部ミガキ。底面ナデ。 ①細砂 ②黄褐色 ③良好	底部のみ残存
8	(甕?) 底部	底：7.2	覆土	平底。腰部大きく開く。立ち上がり部を持つ。	外；腰部タテのヘラナデ。底面ナデ。内；不定方向の強いヘラナデ。 ①石英 ②にぶい橙色 ③良好	腰部～底部残存

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
48 9	住器 脚部	裾：10.5	覆土	小型の脚部。裾部はゆるく外反。透し孔は2つ現存。おそらく3つか。	内外面とも赤彩。外：タテのミガキ。裾縁辺部はヨコナデ。内：上位はタテのヘラナデ。下位はヨコのヘラナデ。 ①石英 ②赤褐色 ③良好	脚部 $\frac{1}{2}$ 残存
10	台付甕 台部	裾：8.2	覆土	甕底部は丸味を持つ。脚部「ハ」字状に開く。裾端部は平坦面を持ち、内面折り返しの段がある。	外：甕底部タテハケ目。脚部ナナメのハケ目後指頭によるタテの磨消し。内：甕底部ヘラナデ。脚部指頭痕残る。 ①細砂 ②浅黄褐色 ③良好	甕底部～脚部 残存
11	小型 埴	口：(10.2) 底：2.0 高：5.0	覆土	口縁部丸味を帯びて外傾。体部はやや扁平。底面中央に凹みを持つ。	外：口縁部ヨコナデ後ミガキ。頸部指ナデ後ミガキ。体部ヘラケズリ後ミガキ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部～底部ヨコ方向のミガキ。 ①長石・石英 ②明黄褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
12	小型 埴	口：(12.0) 高：(5.4)	覆土	口縁部丸味を帯びて外傾。	外：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。頸部タテのハケ目。体部ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコ・ナナメのミガキ。体部ナデ。①石英 ②明黄褐色 ③良好	口縁～体部上 半 $\frac{1}{2}$ 残存

第49号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	壺 複合口縁	口：17.2	床直	折り返しの複合口縁。上段中位でややくびれて外反。下段は大きく外反し、頸部は直立気味に外傾。	外：口縁部上段ヨコナデ。下段との境はヘラナデ。頸部タテのヘラケズリ後ヨコナデ。内：口縁部上段ヨコナデ。下段～頸部ヨコ方向の強いヘラナデ。 ①石英多い。②浅黄褐色 ③良好	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	壺 複合口縁	口：16.2	床直	折り返しの複合口縁。上段外反。下段強く外反。頸部直立気味に外傾。	外：口縁部ヨコナデ。下位に指頭痕。頸部タテのヘラケズリ後ヨコナデ。内：口縁部ヨコ方向のヘラナデ。下段もヨコナデ。頸部ヨコナデ後タテのヘラナデ。 ①石英・雲母 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～頸部 残存
3	小型 埴	口：6.9 高：8.2	床上	口縁部外傾。肩部にふくらみを持ち、やや直線的に底部へ至る。底部僅かに丸味を持つ。	外：口縁部タテのヘラケズリ後ヨコナデ。頸部ハケ目後ヨコナデ。体部赤彩残存。上半ヨコのヘラケズリ後ナデ。下半タテのヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコのヘラナデ。体部全面赤彩。ヨコのヘラナデ。①長石②浅黄褐色③良好	完形
4～7	台付甕 台部	裾径 4：11.4 5：10.4 6：9.5 7：9.0	4一床直 5一床直 6一床直 7一床直	脚部「ハ」字状に開く。裾端部に平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持たせる。 4・6の甕底部は丸味を帯びる。	外：脚部ナナメのハケ目後タテの指ナデを施す。裾部はナデであろう。 内：脚部上位に絞り目を残し、タテ方向の指ナデ。折り返し部は指頭による押えが顕著。 5・6・7 内面全面赤彩。 7 外面赤彩。 4・6 甕底部内面ヘラナデ。 7 甕底部内面ヘラの当て目。 4 ①長石 ②にぶい橙色 ③良好 5 ①砂粒 ②明橙色 ③やや軟 6 ①石英・長石 ②明橙色 ③良好 7 ①石英 ②赤褐色 ③良好	脚部残存 6腰部一部 残存

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

第50号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(16.0)	覆土	口縁部長く外傾する。肩部なだらかに落ちる。	外：口縁部ヨコナデ後クシ描波状文が重走する。頸部一帯の簾状文。肩部クシ描波状文後ナナメのヘラナデ。胴上半ヨコミガキ。内：口縁部ナデ後ヨコミガキ。頸部タテミガキ。胴上半ヨコミガキ。 ①少量の長石・雲母②にぶい褐色③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	甕	口：(14.0)	覆土	口縁部長く外傾。	外：器面は荒れている。口縁部クシ描波状文が重走。頸部8本単位の簾状文。内：ヨコ・ナナメ主体のミガキ。 ①長石・雲母 ②にぶい橙色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	小型甕	口：11.9 底：6.4 高：15.3	土坑内底面	口縁部外反。頸部はなだらかに肩部に至り、胴部中央にふくらみを持つ。底部平底で立ちあがり部を持つ。全体的に歪みがある。	外：口唇部ヨコナデ。口縁部～肩部ナナメのヘラナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。下半タテのヘラケズリ。底面ヘラナデ。内：口唇部ヘラナデ。口縁～底部ヨコのヘラナデ。 ①長石・雲母 ②橙色 ③良好	完形
4	甕 底部	底：(7.5)	覆土	平底。張り出すように立ち上がり部を持つ。	外：腰部タテ方向のヘラナデ。底面ナデ 内：ヨコ方向のヘラナデ。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	腰～底部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	小型罎	底：3.6	覆土	平底。立ち上がり部を持つ。腰部丸味を帯びる。	外：腰～底部ヨコのヘラナデ後ナナメの雑なミガキ。底面はナデ後ミガキ。 内：腰部ていねいなミガキ。底面ナデ。 ①長石 ②橙色 ③良好	腰～底部残存
6	高杯	裾：(13.5)	覆土	杯底部丸味を持つ。脚部は「ハ」字状に開く。裾部大きく広がる。	外：脚部上位ヨコナデ。脚部ヘラ調整後タテ方向のミガキ。裾部ヨコミガキ。 内：杯底部ミガキ。脚部上位は指ナデ。下位はタテ・ナナメのヘラナデ。裾部ヨコナデ。①石英 ②浅黄橙色 ③良好	杯底部～裾部 $\frac{1}{2}$ 残存。

第51号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S字甕	口：15.8	貯蔵穴内	口縁部外傾。稜線はやや丸味を帯びる。胴部上半にふくらみを持つ。器内は薄い。	外：口縁部ヨコナデ。肩部左下のハケ目。胴部右下のハケ目。 内：口縁部指押え後ヨコナデ。胴部指頭痕。ヨコのヘラナデ。 ①長石 ②褐色 ③良好	脚部欠損
2	磨製石斧	長：4.6。刃幅：3.0。基幅1.1。厚さ1.0。重量20g。				刃部の一部欠損 蛇紋岩製

第52号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	罎	口：(14.8) 高：6.9	覆土	口縁部外傾。頸部内外面とも稜を持つ。体部やや直線的。丸底。底部内面肥厚。	外：口唇部ヨコナデ。口縁～体部ヨコミガキ。内：口縁～体部ヨコミガキ。 ①石英 ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
2	台付甕 台部	裾：(9.5)	床上	脚部「ハ」字状に開く。裾端部に平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持つ。	外：不定方向のヘラナデ。内：脚部ヨコのヘラナデ。裾部指押えの調整。 ①長石 ②褐色 ③やや不良	脚部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	砥石	長：15.2。幅：4.0。重量180g。		凝灰岩製 4面とも使用している。		

第III章 検出された遺構と遺物

第54号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(15.6)	土坑内	口縁部長く外傾する。肩部丸味を帯びる。	外；口縁部～肩部櫛描波状文が細く重走。胴部上半ナナメのハケ目状のナデ、下にヨコのヘラケズリも認められる。内；口縁部上位はヨコナデ。下位～胴部ナナメのハケ目状のナデ。 ①石英 ③黒褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
2	壺	口：(15.0)	覆土	口唇部外面折り返し。口縁部外反。肩部～胴部ややふくらみを持つ。	外；口唇部ヨコナデ。口縁部～頸部タテのヘラナデ。胴部ヨコのヘラナデ後にミガキを施す。内；口縁部上位ヨコナデ。下位ヨコミガキ。胴部ヨコのヘラナデ。①長石・砂粒②にぶい橙色③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	甕 口縁部	口：(12.7)	覆土	口縁部外傾。輪積み痕を外面に残す。	外；口縁部輪積み痕を指頭押圧し、ヨコナデ。内；ヨコ・ナナメのヘラナデ。 ①長石 ②黒褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{3}$ 残存
4	壺	口：(16.5)	覆土	口縁部短く外傾。肩部丸味を帯びる。口縁部折り返しか？	外；口縁部ヨコの強いヘラナデ。体部ナナメのヘラナデ。内；口縁部ヨコのヘラナデ。体部ヨコの弱いヘラナデ。 ①長石 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 残存
5	(甕?) 底部	底：7.6 高：6.0	覆土	腰部は直線的に開く。底部平底で立ち上がり部を持つ。	外；腰部ナデ。底部上ヨコのヘラケズリ底面ナデ。内；ヘラナデ。①長石・黒色粒 ②にぶい橙色 ③良好	腰～底部残存
6	(甕?) 底部	底：(10.0)	壁	腰部は直線的に開く。底部平底で不明瞭な立ちあがり部を持つ。	外；腰部タテのヘラケズリ後ナデ。底面はナデ。内；ヨコのヘラナデ。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	
7	鉢	口：3.5 底：4.6 高：6.4	覆上	口唇部若干内湾する。口縁～体部丸味を帯びて落ちる。底部僅かに上げ底で立ちあがり部を持つ。	外；口縁～体部上半ヨコミガキ。下半ヨコ・ナナメのミガキ後一部タテのヘラナデ。腰部ナナメミガキ。底面ミガキ。内；口縁～体部ナデ後不定方向のミガキ。底部ヨコミガキ。 ①長石・石英 ②にぶい褐色。③良好	$\frac{1}{5}$ 欠損
8	鉢	口：14.6 底：4.4 高：6.7	壁面	口唇部若干内湾する。口縁～体部丸味を帯びて落ちる。底部僅かに上げ底で立ちあがり部を持つ。	外；口縁～体部ヨコ方向主体のミガキ。腰部ヨコのヘラケズリ後雑なミガキ。底面ヘラケズリ後ミガキ。内；口縁～体部ナデ後ヨコミガキ。腰～底部ヨコのヘラケズリ後ミガキ。 ①少量の石英 ②明黄褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 欠損
9	小型 埴	口：6.0 底：2.5 高：8.0	床直	口縁部外傾。体部やや上下に圧平された球形。底部上げ底。	外；口縁部ヨコのヘラケズリ後タテミガキ。頸部タテミガキ。体部ヨコのケズリ後ヨコミガキ。内；口縁部ナデ後不定方向のミガキ。体部上半ヘラナデ。下半ヨコの指ナデ。①石英 ②黄橙色 ③良好	完形
10	壺	底：3.6	ピット内	腰部ふくらみを持つ。底部僅かに上げ底。	外；体部タテ・ナナメのヘラナデ。底部ヘラナデ。内；腰～底部不定方向のヘラナデ。①細砂 ②橙色 ③良好	体～底部残存
11	小型 埴	底：3.2	覆土	腰部ふくらみを持つ。底部上げ底。	外；体部ヨコ・ナナメのミガキ。底面ナデ後ミガキ。内；体部ヘラナデ。底部ミガキ。①石英多い。 ②暗褐色 ③良好	体～底部 $\frac{1}{2}$ 残存。

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
54住 12	高杯, 杯部	口:(16.0)	覆土	口縁部～体部丸味を帯びて開く。	外:ナデ後ヨコミガキ。内:ナデ後ヨコミガキ。①石英 ②橙色 ③良好	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存
13	高杯	口:11.6	床上	杯口唇部直立気味に立ち端部は鋭い。杯体部は直線的に開く。脚部やや外反し3方と思われる透し孔が2カ所ある。	外:口唇部ヨコのヘラナデ。体部ヨコ・ナナメのていねいなミガキ。脚部タテのミガキ。内:口縁～体部ヨコミガキを主体とする。脚部指ナデ。①石英 ②浅黄橙色 ③良好	脚部下半欠損
14	器台	口:6.6 裾:19.0 高:10.8	覆土	受部口唇部直立気味に立ち端部は鋭い。口縁～体部丸味を帯びる。受部底面中央に径8mm程の孔を穿つ。脚部ゆるやかに外反。径1cm程の孔を3方に穿つ。	外:口縁部ヨコナデ。体部タテのミガキ。脚部は体部下位からのタテミガキ。内:口縁～体部ていねいなミガキ。脚部タテのヘラナデ。裾部は内外面ともヨコナデ。①長石・石英 ②黄橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
15	高杯	口:13.4 裾:19.7 高:11.7	覆土	杯口縁～体部外傾。体部丸味を帯びて脚部に至り、脚部は短く「ハ」字状に開く。裾部は大きく開く。裾部上位に2段で6カ所に9～13mm程の孔を穿つ。	外:口縁部ヨコミガキ。体部タテ・ナナメのミガキ。脚部は体部からのタテミガキを施す。裾部はやや粗のミガキとヨコナデ。内:口縁部ヨコミガキ。体～底部不定方向のミガキ。脚部上位に絞り目残る。下位はヨコのヘラナデ。裾部はヨコナデ。①石英・黒色粒②橙色③良好	杯部 $\frac{1}{2}$ 欠損
16	(器台?) 脚部	裾:19.0	覆土	脚部上位は直立気味に短く下位は広く開く。裾部大きく開く。受部との接合部に径1cm程の孔を穿つ。	外:脚部上位タテミガキ。脚部タテのハケ目状のナデ。裾部ヨコナデ。内:脚部不定方向のナデ。裾部ヨコナデ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	脚部のみ残存
17・ 18	(甕?)		17一壁面 18一覆土	17 口唇部鋭い。	外:RLの縄文を施す。 内:17はナデ。18はミガキ。 17 ①石英・雲母 ②暗褐色 ③良好 18 ①雲母 ②にぶい褐色 ③良好	17 口縁部破片 18 胴部破片

第56号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口:12.8	床直	口縁部やや外傾する。	外:磨滅している。口縁～胴部ヘラケズリか。内:口縁部ヨコナデ。肩部ナナメのヘラナデ。①石英②にぶい褐色③軟質	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	甕	口:(16.3)	床直	口縁部外傾。肩部なだらかに丸味を帯びて落ちる。	外:やや磨滅。肩部に結節がくるRLの縄文を施す。内:口唇部ナデ。口縁～胴部ヨコのヘラナデ①石英②暗褐色③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	高杯	口:18.8	壁の上部	口縁～体部丸味を帯びる。杯部はやや深い。底部は脚部と共に欠損。	外:やや磨滅。口唇部ヨコナデ。体部ヨコミガキ。内:ていねいなミガキ。①石英 ②橙色 ③やや軟	脚部欠損
4 5 6	(甕?)		覆土	4 口縁部外傾。 5 口唇部内湾。 6 折り返し口縁。	外:4口唇部ヨコナデ。4・5口縁部RLの縄文。6折り返し部にLRの縄文。内:4ヨコのヘラナデ。5・6ヨコナデ。4～6①長石 ②暗褐色 ③良好	口縁部破片
7	壺		覆土	口縁部内傾。	外:櫛描波状文を重走する。内:ヨコのヘラ?ナデ。①石英 ②にぶい褐色 ③やや軟	口縁部破片

第III章 検出された遺構と遺物

第57号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型壺	口：14.0 底：5.0 高：18.2	床直	口縁部は外傾し折り返しによる段を持つ。頸部は屈曲し体部は球形を呈する。底部は僅かに上げ底し、薄い立ち上がり部を持つ。	外：折り返し部ヨコナデ。口縁部ナナメのハケ目状ナデが頸部で屈曲する。体部ナナメのハケ目後タテ方向のミガキ。底部上ヨコのヘラケズリ、底面ヘラナデ。内：口縁部ヨコのハケ目後ミガキ。体部ヨコのヘラナデ。①石英②橙色③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損
2	小型壺	口：14.1 底：5.4 高：18.6	床直	口縁部外傾し折り返しによる段を持つ。頸部は屈曲し体部は球形を呈する。底部は僅かに上げ底し、薄い立ち上がり部を持つ。	外：折り返し部ヨコナデ。口縁部ナナメのハケ目状のナデが頸部で屈曲する。体部ナナメのハケ目後タテ方向のミガキ。底部ヨコのヘラケズリ。底面ヘラナデ。内：口縁部ヨコのハケ目後ミガキ。体部ヨコのヘラナデ。①石英②橙色③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損
3	甕	口：15.5	床上	口縁部外傾。上位でやや内湾。輪積み痕あり。肩部～胴部ふくらみを持たせる。	外：口縁部ヘラナデにより輪積り痕を消す。頸部はタテに強いヘラナデ。胴部は不定方向の強いヘラナデ。下半ヘラナデ。内：口縁部ヨコの強いヘラナデ。指頭痕残る。胴部ヨコの強いヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{3}{4}$ 残存
4	S字甕	口：(19.3)	覆土	口縁部外反。稜線はやや丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。頸部タテのハケ目。内：口縁部ヨコナデ。①黒色粒 ②暗褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残存
5	小型壺	口：8.8 底：3.2 高：6.0	床直	折り返し口縁。外傾。体部上半にふくらみを持ち直線的に底部に至る。底部は平底で立ち上がり部を持つ。	外：口縁部ヨコの強いヘラナデ。体部ナナメのヘラナデ。底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコの強いヘラナデ。体部タテ・ナナメのミガキ。①長石 ②赤灰色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 欠損

第58号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(18.3)	貯蔵穴内覆土	口縁部外傾。	外：口縁部ヨコ・ナナメのハケ目状のナデ。頸部タテのハケ目状のナデ。内：口縁部ヨコ・ナナメのハケ目状のナデ。頸部ヨコナデ。①石英 ②黒褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残存
2	甕	口：14.3	床直	口縁部外傾。輪積み痕を明瞭に残す。	外：口縁部ヨコナデ。内：口縁部ヨコナデ。①長石・石英 ②にぶい褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残存
3	椀	口：(12.6) 高：6.0	貯蔵穴内	口唇部内湾。体部丸味を帯びる。	外：口唇部ナデ。体部上半ナナメのヘラナデ後ミガキ。下半ヨコのヘラケズリ後ヨコミガキ。底部ヘラケズリ。内：口縁～体部でいねいなミガキ。①石英 ②にぶい黄褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存
4	小型罎	口：(11.2)	覆土	口縁部外傾。やや短い。体部上半にふくらみを持つ。	外：口縁部ヨコナデ。体部ナデ後ミガキ。内：口縁部ヨコナデ。体部ヨコのヘラナデ後ミガキ。①長石 ②暗褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 残存
5	小型罎	底：3.7	覆土	体部ふくらみを持つ。底部平底。	外：体部でいねいなミガキ。底部ミガキ。内：体部でいねいなミガキ。①石英 ②橙色 ③良好	腰～底部 $\frac{1}{4}$ 残存

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考	
58住6	小型埴		覆土	体部ふくらみを持つ。底部は平底と思われる。	外：体部上半ヨコの強いヘラナデ。下半タテの強いヘラナデ。内：ヨコのヘラナデ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	体部 $\frac{1}{2}$ 残存	
7	(甕?) 底部	底：(7.0)	覆土	平底。立ちあがり部を持つ。	外：タテのヘラケズリ。底面はナデ。内：ヘラケズリ後ナデ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存	
8	(甕?) 底部	底：6.6	床直	平底。立ちあがり部を持つ。	外：タテのヘラケズリ。底面ヘラナデ。内：ヘラナデ。ヘラの当て目残る。①石英 ②にぶい黄褐色 ③良好	底部のみ残存	
9	甕		床直	肩部ふくらみを持って張ると思われる。	外：上半はRLの縄文を施す。下半はヨコミガキ。内：ヨコのヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい褐色 ③良好	胴部破片	
10	磨石	片面に凹部を持つ。凹部は磨かれる。重量600g 安山岩製 縄文時代の所産か。					

第59号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S字甕	口：(15.5)	覆土	口縁部外反。稜線は丸味を帯びる。肩部はなだらかに落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。肩部左下のハケ目。上位ではハケ目はヨコにナデ消している。内：口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	甕	口：(14.1)	覆土	口縁部中位より外反。輪積み痕を残す。	外：口縁部ヨコナデ。内：ナデ。①雲母 ②にぶい黄褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	(甕?) 底部	底：4.2	覆土	平底。立ち上がり部を持ち僅かに上げ底。	外：腰部ミガキ。底部ヘラケズリ。内：ヘラケズリ後ミガキ。①石英 ②橙色 ③良好	底部のみ残存
4	(甕?) 底部	底：6.0	覆土	平底。腰部へ大きく開くと思われる。	外：タテの強いヘラナデ。底面ヘラケズリ。内：ヘラナデ。①長石②橙色③良好	底部のみ残存
5	甕	口：15.6	床上	口縁部外傾。上位でやや外反。輪積み痕を残す。肩部丸味を帯びなだらかに落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。肩部タテ・ナメのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。肩部ヨコのヘラナデ。①石英 ②黄褐色 ③やや軟	口縁～胴上半残存
6	(甕?) 底部	底：6.0	床上	腰部直線的に開く。平底で薄い立ち上がり部を持つ。平底。	外：腰部タテのヘラケズリ後ナデ。底部端部をヨコのヘラケズリで調整。底面はミガキ。内：腰部ヘラナデ。底部でいねいなミガキ。①石英 ②橙色 ③良好	腰～底部のみ残存
7	ミニチュア土器	口：(7.2)	覆土	全体的に雑な作り。口縁部は折り返す。	外：ナデ。内：ナデ。①石英多い。②浅黄褐色 ③やや軟	
8	高杯脚部	裾：8.5		杯底面丸味を帯びる。脚部「ハ」字状に開き、中位に径7mm程の小孔を穿つ。小孔は4ヶ確認できる。	外：胴部上位でいねいなミガキ。裾部ヨコナデ。内：杯底面でいねいなミガキ。脚部上位指頭押圧。タテのヘラナデ。裾部ヨコナデ。①石英②浅黄褐色③良好	脚部 $\frac{1}{2}$ 残存
9	(高杯?) 脚部	裾：(10.5)	覆土	裾部なだらかに開く。上位に透し孔を穿つ。	外：裾部タテのミガキ。裾端部ナデ。内：裾部ヨコの強いヘラナデ。①石英 ②にぶい褐色 ③良好	裾部 $\frac{1}{2}$ 残存

第III章 検出された遺構と遺物

第61号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	(甕?)	口：(14.5)	床下土坑内	口縁部外傾。	外：口縁部上位ヨコのヘラナデ。下位はタテの強いヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	S字口縁椀	口：(11.7) 底： 1.7 高： 8.8	床下土坑内	口縁部はS字状に外傾し、段を持つ。頸部は著しく屈曲する。体部中央にふくらみを持ち、圧平された球形を呈す。底部は凹む。	外：口縁部～肩部ヨコナデ。体部上半タテのハケ目状のナデ。下半ヘラナデ後ヨコミガキ。内：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ・ナメのヘラナデ。①石英 ②橙色 ③良好	口唇部 $\frac{1}{4}$ 欠損
3	椀	底： 3.8	床下	口縁部外傾。体部上半にふくらみを持つ。底部は平底。	外：口縁部～肩部ヨコ・ナメの強いヘラナデ。体部上半ヨコのヘラナデ後ヨコミガキ。下半ヨコのヘラケズリ後ヨコミガキ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。肩部ヨコの指ナデ。体部ていねいなミガキ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	口縁部上半を欠損
4	小型 罎	口：10.1 底： 3.7 高： 9.0	床上	口縁部やや外傾。体部上半にふくらみを持つ。底部は平底。	外：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。頸部ナメのハケ目状のナデ。体部ナメのミガキ。底部ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコ・ナメのミガキ。体部ナメのナデ。底部ヘラナデ。赤彩残存。①長石・雲母 ②橙色 ③良好	完形
5	小型 罎	口： 9.8 高：10.0	床下土坑内	口縁部外傾。頸部屈曲し、体部球形を呈す。底部は丸底。	外：口縁部ヨコのヘラナデ。頸部ナメのハケ目状のナデ。体部上半ナメのハケ目状ナデ後ミガキ。下半ナメのヘラケズリ後ミガキ。内：口縁部ヨコ・ナメのハケ目状のナデ後上位はヨコミガキ一部に雑なミガキ。体部ヨコのハケ目状のナデ。①石英・長石 ②黄褐色 ③良好	完形
6	小型 罎	口：12.8 底： 4.8 高： 9.0	床上	口縁部大きく外傾し口唇部やや内湾する。体部中央にふくらみを持つ。底部平底で立ちあがり部を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。頸部タテ方向の指ナデ。体部ヨコの細いヘラケズリ。底部ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部上半不定方向のヘラナデ後雑なミガキ。下半ヨコのヘラナデ。①雲母 ②橙色 ③良好	完形
7	小型 罎	口： 9.0 高： 5.6	床下土坑内	口縁部外傾。頸部内面に稜を持つ。体部丸味を帯び、垂直気味に落ち、底部は丸底を呈す。	外：口縁部ヨコナデ後不定方向のミガキ頸部タテのヘラナデ。体部ヘラケズリ後不定方向のミガキ。内：口縁部タテ方向中心のミガキ。体部ヘラナデ。①石英・黒色粒 ②黄褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
8	台付 甕 台部	裾： 9.2	床直	甕部底面丸味を帯びる。脚部は「ハ」字状に開く。裾端部に平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持たせる。	外：脚部ナメ右下のハケ目後タテの指ナデ。裾部はナデか。内：甕部底面ヘラナデ。脚部は赤彩。上位はナメのナデ下位はヨコナデ。①砂粒多い。②にぶい橙色 ③やや軟	脚部のみ残存

第62号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：16.0	床上	口縁部外傾。口唇端部に狭い平坦面を持つ。胴部ふくらみを持って落ちる。	外：口縁～頸部タテのハケ目状ナデ後上位ヨコナデ。胴部ナメのハケ目状ナデ内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ。胴部ヨコナデ。①砂粒 ②灰褐色 ③良好	胴部下半欠損

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
62	住 2	口：12.5	覆土	口縁部外傾。口唇部僅かに内湾。肩部丸味を帯びる。	外：口縁部ナナメのヘラケズリ後口唇部ヨコナデ。肩部ナナメのヘラケズリ。 内：口縁部ナナメのヘラナデ。口唇部ヨコナデ。肩部タテのヘラナデ後ヨコのヘラナデ。①石英 ②明褐色 ③良好	胴部下半を欠損
3	鉢	口：14.2 底：5.0 高：6.5	ピット2内	口縁～底部、丸味を帯びて開く。底部僅かに上げ底。	外：口縁～底部ナデ後タテのミガキ。底面ナデ。内：口縁～底部タテのミガキ。①細砂 ②明褐色 ③良好	1/2残存
4	器台 脚部		ピット2内	脚部なだらかに開く。器部中央に1cm程の孔を1ヶ穿つ。	外：脚部タテのミガキ。内：受部底面ていねいなミガキ。脚部ナデ。①石英 ②橙色 ③良好	脚部1/2残存
5	瓶 底部	底：(4.5)	覆土	底面中央に径1.5cm程の孔を1ヶ穿つ。	外：底部ていねいなナデ。内：ナデ。①石英 ②浅黄褐色 ③良好	底部1/2残存

第71号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考	
1	S字甕	口：15.3	床下	口縁部大きく外傾。稜線は丸味を帯びる。肩部なだらかにふくらみを持ち落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。肩部左下ナナメのハケ目後頸部ヨコナデ。下位に右下のハケ目。内：口縁部ヨコナデ。肩部指頭痕。①少量の長石 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部1/2残存	
2	S字甕	口：17.8	覆土	口縁部大きく外傾。稜線は比較的鋭い。	外：口縁部ヨコナデ。肩部左下のナナメのハケ目後頸部ヨコナデ。内：口縁部ヨコナデ。肩部ヨコのヘラナデ。①細砂 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部1/2残存	
3	鉢	口：12.6 底：4.4 高：6.5	壁面	口縁～体部丸味を帯びて落ちる。底部僅かに上げ底。	外：若干磨滅。口縁～体部上半ヨコミガキ。下半ヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内：口縁～底部不定方向のミガキ。①砂粒 ②橙色 ③良好	1/2残存	
4	ミニチュア 土器	口：(8.0)	覆土	口唇部内湾。体部ふくらみを持って落ちる。	外：ナデ後一部ミガキ。内：ナデ。①石英 ②浅黄褐色 ③良好	1/2残存	
5	器台 器受部		覆土	体部下位に不明瞭な稜を持つ。底面中央に径1cm程の孔を穿つ。	外：受部上位ヨコミガキ。下位2段の指ナデ。内：受部不定方向のミガキ。①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部欠損 脚部欠損	
6	(甕?) 底部	底：3.7	壁面	腰部丸味を帯びて開く。平底。	外：ヨコ方向のヘラナデ。底面ナデ。内：ていねいなナデ。①石英多い。 ②浅黄褐色 ③良好	底部のみ残存	
7	土製紡錘車	径：約5.0。厚さ：1.0。中央に径0.6cm程の孔。全面にていねいなナデを施す。					

第76号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型甕	口：10.0 底：5.0 高：9.5	床下	口縁部外傾。胴部やや丸味を帯びるが直線的に落ちる。平底で立ちあがり部を持つ。	外：口縁部輪積痕を残しヨコの指ナデ。胴部ナナメのハケ目後タテのヘラケズリ。底部はタテのヘラケズリ。底面ナデ。内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ後上位ヨコナデ。頸部ナナメのハケ目状ナデ。胴部ヨコのヘラナデ。底部指ナデ。①石英・雲母 ②にぶい褐色 ③良好	口唇部1/2欠損

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
76 2	住 台付甕 台部	裾：9.8	床直	甕部は丸味を帯びて開く。脚部「ハ」字状に開き、裾端部平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持つ。	外：甕底部タテのハケ目。脚部右下のナナメのハケ目。下位はナデ。内：甕底部ヘラナデ。脚部上位に絞り目残存。ナナメの指ナデ。下位は指押え。 ①長石 ②黄橙色 ③良好	甕底部～脚部残存
3	(甕?) 底部	底：6.5	覆土	立ち上がり部を持つ平底。	外：タテ・ナナメのヘラケズリ。底面ナデ。内：ヘラケズリ後ナデ。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	底部のみ残存
4	(甕?)		覆土	口縁部外反。	外：RLの複節縄文を施す。 内：ナデ。 ①石英 ②褐灰色 ③良好	口縁部破片
5	(甕?)		覆土	肩部丸味を帯びる。	外：LRの縄文を施す。内：ヨコのヘラナデ。①長石・石英 ②橙色 ③良好	肩部破片
6	甕		覆土	肩部丸味を帯びる。	外：肩部位ヨコミガキ。下位RL縄文。 内：ていねいなナデ。 ①石英 ②黒褐色 ③良好	肩部破片
7	甕		覆土	頸部外反。肩部丸味を帯びて落ちる。	外：頸部～肩部RLの縄文。胴部ナナメヨコのハケ目、下半はミガキ。 内：頸部ナナメのハケ目。胴部はナデ。	頸部～胴部破片

第87号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S字甕	口：(12.7)	床直	口縁部外傾。肩部丸味をおびる。	外：口縁部ヨコナデ。肩部左下ナナメのハケ目後頸部と肩部下位にヨコのハケ目。 内：口縁部ヨコナデ。肩部指ナデ。	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	小型鉢	口：9.3 高：3.0	床直	口縁～体部。丸味を帯びて開く。平底。	外：口縁部ヨコナデ。体部ナデ後不定方向の雑なミガキ。底面ナデ。内：全体的にていねいなナデ。 ①長石・黒色粒 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
3	鉢	口：10.0 底：3.2 高：7.4	床直	口縁部直立気味。体部丸味を帯びる。平底で不明瞭な立ち上がり部を持つ。全体に雑な作り。	外：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコのヘラナデ。下半タテのヘラケズリ。内：全体的にヨコのヘラナデ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 欠損
4	ミニチュア 土器 台付甕	口：6.6 裾：2.3 高：6.4	床直	口縁部短く外傾。体部上半にふくらみを持つ。脚部短く直立し裾端部で外反。	外：口縁部ヨコナデ。肩部ヨコの指ナデ。体部タテのヘラケズリ。脚部ヘラケズリ後指押え。内：口縁部ヨコナデ。体部指ナデ。脚部ナデ。 ①長石 ②黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
5	ミニチュア 土器 甕	口：6.8 底：2.8 高：4.2	床直	折り返し口縁。短く外傾する。頸部僅かに内傾。体部ふくらみを持つ。底部上げ底。	外：口縁部～肩部タテの指ナデ後弱いヨコナデ。体部一部に赤彩残存。ヘラナデ。底面指押え。内：口縁部輪積み痕残存。タテの指ナデ。体部ヨコのヘラナデ。 ①長石・雲母 ②褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
6	鉢	口：8.6 底：3.4 高：4.5	床直	口縁～体部丸味をおびて落ちる。平底で薄い立ち上がり部を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコのヘラケズリ後ナデ。下半タテのハケ目状ナデ後ヘラナデ。底部ナデ。内：口縁部ヨコナデ。体部ヨコのていねいなナデ。底部ナデ。①長石 ②黒褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 欠損

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

第101号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型壺	口：9.0 底：3.0 高：9.0	覆土	体部の歪み著しい。口縁部強く外傾。頸部垂直気味に落ち、体部はふくらみを持つ。平底で薄い立ち上がり部を持つ。	外：口縁部タテのハケ目状のナデ後口唇部ヨコナデ。頸部輪積み痕残存。ナデ。体部上半ナナメのハケ目状ナデ後ヨコナデ。下半ヨコのヘラケズリ。底面ナデ。 内：口縁部ナナメのハケ目状ナデ後口唇部ヘラナデ。体部はナデ。 ①砂粒・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口唇部 $\frac{1}{4}$ 欠損
2	器台脚部		覆土	受部中央に径0.9cm程の孔を穿つ。脚部「ハ」字状に開く。	外：磨滅が著しい。おそらくミガキか。 内：ヨコナデ。①砂粒②橙色③やや軟	裾部を欠く 脚部のみ残存
3	台付甕	裾：10.9	床直	腰部直線的に開く。脚部は「ハ」字状に開く。裾端部は平坦面を持ち、内面に折り返しによる段を持つ。	外：腰部タテのハケ目。脚部右下ナメのハケ目後タテの指ナデ。裾部はナデ。 内：腰部やや磨滅。タテ・ナメのヘラナデ。脚部上位タテの指ナデ。下位ヨコナデ。①長石・石英 ②褐色 ③良好	腰～脚部残存

第105号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	片口	口：9.0 底：5.0 高：6.0	床直	口縁部内湾。口唇部と水平に片口部突出。体部上半にふくらみを持ち、底部は平底。口縁部内面に折り返し。	外：口縁部ヨコのヘラケズリ、片口部指押え。体部はヨコ・ナメのヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部上半指ナデ。下半ヨコ・ナメのヘラナデ。①砂粒 ②褐色 ③やや軟	完形
2	甕	口：17.3 底：4.7 高：13.0	覆土	折り返し口縁。口縁～底部直線的に開く、底面中央に径1.5cm程の孔を1ヶ穿つ。	外：口縁部ヨコナデ。体部上位ヨコのヘラナデ。下半タテのヘラナデ。底面ナデ。 内：全体的にヨコ方向のヘラナデ。 ①石英 ②浅黄橙色 ③やや軟	$\frac{1}{4}$ 残存 108住覆土出土の底部と接合
3	磨石	両面に凹みを持つ。両端部に使用痕あり。石英安山岩製。重量360g			縄文時代の所産か。	

第108号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	埴	口：14.0 高：7.5	床直	口縁部長く外傾。体部扁平で、丸底である。内面頸部に稜を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。体部不定方向のヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコのヘラナデ。下半ヨコナデ。 ①砂粒・石英 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 欠損
2	壺	口：(18.5)	覆土	折り返しによる複合口縁で外傾する口縁に3ヶの突帯を付す。	内外面とも磨滅が著しい。外：口縁部ヨコナデ。内折する頸部ヨコ方向のヘラケズリ。頸部以下はハケ目状ナデか。 内：ナデ。①石英 ②浅黄橙色 ③軟質	口縁部 $\frac{1}{4}$ 残存
3	小型埴	口：(10.7)	覆土	折り返し口縁。外傾。体部ふくらみを持つ。	内外面とも磨滅が著しい。ヨコナデか。 ①砂粒・石英 ②橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 残存
4	小型埴	底：2.1	覆土	頸部外傾。体部扁平で丸味を帯びる。僅かに上げ底。	外：体部不定方向のミガキ。底部ミガキ。 内：ヨコナデ後雑なミガキ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部欠損
5	小型鉢	口：8.8 高：4.2	覆土	口縁～体部丸味を帯びて落ちる。底部立ちあがり部を持つが不安定な作り。	外：口縁部ヨコナデ。体部不定方向の指ナデ。内：ヨコナデ後タテのミガキ。 ①長石 ②黄橙色 ③良好	完形

第III章 検出された遺構と遺物

第112号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(13.6)	覆土	口縁部外傾。口唇端部に平坦面を持つ。	外；口縁部輪積み痕を残す。ナナメのミガキ。内；ヨコ・ナナメのミガキ。 ①少量の石英 ②にぶい褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	S字口縁椀	口：(16.8)	覆土	口縁部大きく外傾。稜線は丸味を帯びる。体部上半にふくらみを持つ。	外；口縁部ヨコナデ。体部ていねいなナデ。内；口縁部ハケ目状ナデ後ヨコナデ。体部ナデ後雑なミガキ。 ①細砂 ②橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 残存

第119号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(11.5)	床直	口縁部外傾。肩部強く張る。内面頸部に稜を持つ。	外；口縁部右下ナナメのハケ目状ナデ。頸部左下のハケ目状ナデ。肩部右下ナナメ・ヨコのハケ目状のナデ。内；口縁部ヨコ・ナナメのハケ目状のナデ。肩部ナデ。 ①少量の砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	甕	口：(12.0)	覆土	口縁部外傾。肩部強く張る。内面頸部に稜を持つ。	外；口唇部ヨコナデ。口縁部右下のハケ目状ナデ。頸部左下ナナメ・タテのハケ目状ナデ。内；口縁部ヨコ・ナナメのハケ目状のナデ。肩部ナデ。 ①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存 1と同一個体か？
3	高杯	口：(9.0) 裾：6.3 高：8.0	貯蔵穴内	口縁～体部ふくらみを持ち半球形を呈す。脚部は短く「ハ」字状に開き、裾部に径0.6cm程の小孔を4ヶ穿つ。	外；口縁～体部タテミガキを中心に下位では不定方向のミガキ。脚部ナナメのヘラズリ後タテのミガキ。内；口縁～体部ヨコ・ナナメのていねいなミガキ。脚部上位指押え後ヨコナデ。裾部ヨコナデ。 ①石英多い。②橙色 ③良好	口唇部・脚部 $\frac{1}{2}$ 欠損
4	高杯	口：10.6 裾：8.3 高：8.5	床直	口縁～体部丸味をおびて開く。脚部「ハ」字状に開き中位に径0.6cm程の小孔を高低の差で2孔1単位で4ヶ穿つ。	外；口縁～体部ヨコ・ナナメのミガキ。下位では不定方向のミガキ。脚部タテミガキ。内；口縁～体部ていねいなミガキ。底面磨滅。脚部ヨコのヘラナデ。裾部ヨコナデ。 ①砂粒・石英 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
5	器台	裾：11.2	覆土	受部下位で僅かに屈曲し、直線的に脚部に至る。受部底面丸味をおび径1.2cm程の孔を1ヶ穿つ。脚部「ハ」字状に開き裾部で更に広がる。中位に径1.2cm程の孔を3方に穿つ。	外；受部やや磨滅。ミガキか。脚部上位タテのていねいなミガキ。裾部ナデ。内；受部ていねいなミガキを施す。脚部上位指押え。輪積み痕残存。裾部ヘラナデ後ヨコナデ。 ①長石・石英 ②浅黄橙色 ③良好	口縁部と杯部上位を欠損
6	小型罎	口：(12.5) 高：(6.0)	覆土	口縁部長く外傾。体部上半にふくらみを持つ。	外；口縁部タテのヘラズリ後タテのミガキ。頸部ヨコミガキ。体部ナデ後ナナメのミガキ。内；口縁部タテのミガキ。体部ヨコのヘラナデ。 ①砂粒・石英 ②橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 残存
7	杯	口：(15.5) 底：(6.0)	覆土	口縁部短く外傾。体部扁平で丸味を帯びる。頸部内面に稜を持つ。	外；口縁部ヨコナデ。下位～頸部ナナメのヘラナデ。体部ヨコのヘラナデと指ナデ。底部ヘラズリ。内；口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラズリ。 ①砂粒・石英 ②橙色 ③良好	口縁～底部 $\frac{1}{2}$ 残存

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

第123号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	小型 埴	口：(11.7) 高： 6.5	土坑内	口縁部外傾。体部丸味をおび、やや扁平。底部丸底。	外：口縁～頸部ヨコの細かいヘラナデ。体～底部ヨコのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ後ミガキ。体～底部ナデ後放射状のミガキ。①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	小型 埴	口：15.4 高： 6.8	覆土	口縁部外傾。体部丸味を帯び扁平。底部は平坦。頸部内面に不明瞭な稜を持つ。	外：口縁部タテのヘラナデ。体部ヨコのヘラケズリ後ヨコミガキ。底部ヘラケズリ。内：ヨコのハケ目状ナデ後放射状のミガキ。体～底部ヨコナデ後放射状のミガキ。①石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
3	小型 埴	口：12.5 高： 6.2	土坑内	口縁部外傾。体部丸味を帯びやや扁平。底部丸底。頸部内面に不明瞭な稜を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。一部ヨコミガキ。体部ヨコミガキ。底部不定方向のミガキ。内：口縁部ナナメの放射状のミガキ。体部ヨコのヘラナデ。底部回転に合わせたヘラナデ。①細砂 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損

第125号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：14.4	床上	口縁部外傾。胸部中央にふくらみを持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。頸部タテのハケ目状ナデ。肩部ナナメのハケ目状ナデ後ミガキ。胴下半部ミガキ。内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ。胸部ヨコのヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁～胸部ほぼ完形
2	甕	口：14.5	覆土	口縁部外傾。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。頸部タテのハケ目状のナデ。内：口縁部ヨコのハケ目状のナデ。①少量の石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	甕	口：13.5	覆土	口縁部直立気味に外傾。肩部なだらかに落ちる。頸部内面に明瞭な稜を持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。肩部タテのミガキ。内：口縁部ヨコのハケ目状のナデ。肩部ヨコのヘラケズリ。①少量の石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	甕	口：15.3	覆土	口縁部外傾。肩部はなだらかに落ちる。頸部内面に明瞭な稜を持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。頸部～肩部タテのハケ目状ナデ。内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ。肩部ヨコのヘラケズリ。①長石・石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	甕	口：13.6	床直	口縁部やや短く外傾。肩部～胸部ふくらみを持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。肩部～胸部タテの弱いハケ目状のナデ。内：口縁部ヨコの弱いハケ目状のナデ。肩部～胸部のヘラナデ。①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 、胸部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	甕	口：16.0	覆土	口縁部外傾。胸部中央にふくらみを持たせる。	外：口縁部ナナメのハケ目状ナデ後口唇部ヨコナデ。胴部ナナメ・ヨコのハケ目状ナデ。内：口縁～胸部上半ヨコのハケ目状ナデ。下半ヘラナデ。①長石・石英 ②淡橙色 ③良好	腰部以下を欠損
7	甕	口：(15.0)	覆土	口縁部外傾。肩部なだらかに落ちる。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。肩部タテのヘラケズリ。内：口縁～肩部ヨコのヘラナデ。①石英②橙色③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
125住 8	小型甕	口：11.0 底：(4.5) 高：12.3	覆土	口縁部やや短く外傾。胴部上半にふくらみを持ち、なだらかに落ちる。底部は立ち上がり部を持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。頸部タテのハケ目状のナデ。肩部ヨコのハケ目状ナデ後ナナメのミガキ。胴部ナナメのていねいなミガキ。内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ。胴部ヨコのヘラナデ後ナナメのミガキ。①長石②橙色③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 、 底部 $\frac{1}{2}$ 欠損
9	小型甕	口：12.0	覆土	口縁部外傾。胴部上半にふくらみを持つ。	外：口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。肩部ナナメのハケ目状のナデ。内：口縁部ヨコのハケ目状のナデ。肩部ヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 、 残存
10	小型甕	口：15.0	覆土	口縁部やや短く外傾。胴中央にふくらみを持つ。	外：口縁部タテの弱いハケ目状ナデ。肩部ヨコの弱いハケ目状ナデ。胴部ナナメの弱いハケ目状ナデ。内：口縁部ヨコの弱いハケ目状ナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英 ②明橙色 ③良好	底部欠損 口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 、 欠損
11	甕	口：14.5	覆土	口縁部外傾。口唇部「コ」字状を呈す。	外：口縁部ナナメのハケ目状ナデ。内：口縁部ヨコのハケ目状ナデ。①砂粒・石英 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{3}{4}$ 残存
12	(甕?) 底部	底：7.0	床直	腰部直線的に落ちる。平底で立ち上がり部を持つ。	外：腰部タテのヘラナデ。底面ヘラナデ。内：ナナメのヘラナデ。①長石 ②橙色 ③良好	腰～底部のみ 残存
13	(甕?) 底部	底：8.0	覆土	立ち上がり部を持つ平底。	外：端部ヘラナデ。底面ヘラケズリ。内：ヘラナデ。①石英 ②橙色 ③良好	底部のみ残存
14	甕 底部	底：4.2	覆土	小型の底部。平底で立ち上がり部を持つ。器肉薄い。	外：腰部タテのハケ目状ナデ。底面ナデ内：ヨコのヘラナデ。①長石 ②橙色 ③良好	腰～底部のみ 残存
15	甕 底部	底：7.4	床直	平底で立ち上がり部を持つ。	外：腰部ヨコのヘラナデ。底面ヘラケズリ。内：ヘラナデ。①石英②橙色③良好	腰～底部のみ 残存
16	小型鉢	口：10.2 底：4.0 高：4.3	床直	口縁～体部やや丸味を帯び外傾する。底部は僅かに上げ底で立ち上がり部を持つ。	外：口縁～体部ヨコ・ナナメのヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内：口縁～体部ヨコのヘラナデ。底面ヘラナデ。ヘラの当て目残存。①石英 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{3}$ 欠損
17	台付甕		床直	腰部丸味を帯びて開く。甕底面丸味を帯びる。脚部は「ハ」字状に開く。	外：腰部タテのヘラナデ。脚部タテのヘラナデ。内：腰部ヨコ・ナナメのヘラナデ。脚部上位は指ナデ。中位はヨコのヘラナデ。①石英 ②橙色 ③良好	腰部～脚部残 存。裾部を欠 損
18	S字口縁埴	口：11.3 底：3.3 高：8.7	床直	口縁部外傾。稜線は鋭い。頸部著しく屈曲し体部上半にふくらみを持ち球形を呈す。底部は上げ底。	外：口縁部ヨコナデ後上位ヨコミガキ。体部ヨコミガキ。底面ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部ナナメのミガキ。①長石・石英 ②橙色 ③良好	ほぼ完形
19	器台	口：10.0 裾：(12.3) 高：8.5	床直	受部大きく開く。口唇部は「コ」字状を呈す。脚部は「ハ」字状に開き裾部でやや広がる。	外：受部指頭押圧を多用。やや雑。脚部上位ナデ。下位はミガキ。内：受部ヨコのヘラナデ。脚部ヘラナデ。①石英 ②浅黄橙色 ③良好	裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損
20	高杯	口：(14.2)	覆土	口縁～体部丸味を帯びて開く。	外：口縁～体部不定方向のミガキ。内：口縁～体部タテを中心のミガキ。①長石・石英 ②浅黄橙色 ③良好	杯部 $\frac{1}{2}$ 残存

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
125住 21	高杯 脚部		覆土	脚部は直線的に小さく開く。裾部は更に広がると思われる。	外；脚部タテのていねいなミガキ。 内；脚部上位タテのナデ。下位はヨコのヘラナデ。①砂粒 ②橙色 ③良好	裾部を欠く

第148号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	S字甕	口：13.6	覆土	口縁部外傾。稜線は比較的鋭い。肩部は丸味を帯びて張る。	外；口縁部ヨコナデ。頸部～肩部左下のナナメのハケ目。内；口縁部ヨコナデ。肩部ヘラナデ。 ①細砂 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	小型罎	口：(12.0)	覆土	口縁部外傾。肩部にふくらみを持ちなだらかに落ちる。	外；口縁部ヨコミガキ。頸部ヘラナデ。体部ヨコ・ナナメのミガキ。 内；口縁部ヨコミガキ。体部ヨコミガキ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	小型罎	口：(10.5)	覆土	口縁部やや短く外傾。体部丸味を帯びなだらかに落ちる。	内外面とも赤彩。外；口縁部ヨコナデ後ヨコ・ナナメのミガキ。頸部タテのハケ目状ナデ。体部ヨコ・ナナメのていねいなミガキ。内；口縁～体部ヨコ・ナナメのていねいなミガキ。 ①長石・石英 ②赤橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	器台	裾：12.2	覆土	受け部外傾し、三方に孔を穿つ。立ち上がり部は鐙状に突出し先端は丸味を帯びる。脚部との接合面に段を持つ。受け部底面中央に径1.2cm程の丸孔を穿つ。脚部「ハ」字状に開き、中位に三角形の透し孔を3方に穿つ。	外；受け部ナデ。突出部ヨコナデ。下位はタテのヘラケズリ。脚部ナデ後タテのミガキ。内；受け部ヨコのヘラケズリ。底面放射状のヘラケズリ後ナデ。脚部上位指ナデを施す。中位輪積み痕残存。ヨコのヘラナデ。裾部ヨコのヘラケズリ後ヨコナデ。 ①長石・石英 ②にぶい褐色 ③良好	口縁部欠損

遺構外及びグリッド出土遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	壺		58～61E00 ～04	口縁部外傾。口唇部折り返しによる突帯。	外；口唇部突帯指押えによる波状文。以下はタテ・ナナメのハケ目。内；ナデ。 ①砂粒 ②褐灰色 ③良好	口縁部破片 弥生後期か
2	(甕?)		42～44D23 ～25	口縁部外傾。	外；口縁部ヨコナデ後まばらなRLの縄文。内；ナナメのハケ目状のナデ。 ①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁部破片
3	(甕?)		42～44D23 ～25	口縁部やや外反。	外；RLの縄文が口唇部まで達す。内；ナデ。①細砂 ②黒褐色 ③良好	口縁部破片
4	壺	口：(17.4)	表採	複合口縁。上位は外反し下位は短く外傾。頸部短く直立し、肩部は張る。	外；口唇部ヨコナデ。口縁部上位ハケ目状ナデ。下位はヨコの指押圧。頸部タテのハケ目状ナデ。内；口唇部ヨコのヘラナデ。以下ヨコミガキ。頸部ヨコのヘラナデ。①砂粒 ②浅黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	甕	口：(14.4)	30～35E05 ～10	口縁部外傾。肩部なだらかに落ちる。頸部内面に稜を持つ。	外；口縁部輪積みを残し指押えを施す。肩部タテのヘラナデ。 内；口縁部ヨコのハケ目状のナデ。 ①長石 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 残存

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
6	甕	口：15.0	42E05	口縁部外傾。肩部やや張る。	外；口縁部輪積み痕を残し指押えを施す。頸部タテのハケ目状ナデ。肩部ヨコ・ナメのハケ目状ナデ。内；口縁部ヨコのハケ目状ナデ。肩部ナデ。 ①長石・石英 ②黒褐色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{3}$ 残存
7	甕	口：12.9	30～35E05 ～10 VI・VII層	口縁部外傾。口唇部やや内湾。肩部丸味を帯びる。頸部内面に稜を持つ。	外；口縁部ヨコナデ。頸部～肩部タテのハケ目状ナデ。内；口縁部上位ヨコナデ。下位ヨコのハケ目状ナデ。肩部ナデ。 ①長石 ②黒褐色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{3}$ 残存
8	甕	底：5.5	E区VI・VII層 22～23E 18～19	腰部丸味を帯び落ちる。平底で立ちあがり部を持つ。底端部やや外反。	外；腰部～底部タテのヘラナデ。底面ナデ。内；腰部～底部ヨコ・ナメのハケ目状のナデ。底面指ナデ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	腰～底部残存 57住3と同一 個体
9	S字甕	口：12.0	22～23E18 ～19	口縁部外傾。稜線は鋭い。胴部上半にふくらみを持つ。	外；口縁部ヨコナデ。頸部～胴部タテのハケ目後頸部ヨコナデ。内；口縁部ヨコナデ。頸部～肩部ヨコのヘラナデ。胴部タテ・ナメのヘラナデ。 ①少量の砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{3}$ 残存
10	S字甕	口：15.9	1号溝 23～24E18 ～19	口縁部外傾。稜線は丸味を帯びる。肩部張る。	外；口縁部ヨコナデ。肩部左下ナメのハケ目。内；口縁部ヨコナデ。肩部指頭痕。①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁～肩部 $\frac{1}{3}$ 残存
11	台付甕 台部		43E06	甕部底面中央やや肥厚。脚部「ハ」字状に開く。	外；脚部右下ナメのハケ目。内；甕底面ヘラナデ。脚部指ナデ。 ①細砂 ②黒褐色 ③良好	裾部欠損の脚部 $\frac{1}{2}$ 残存
12	柑	口：13.5 底：5.6 高：16.4	23～24E18 ～19	口縁部外傾。体部ふくらみを持ち球形を呈す。底部は平底で立ち上がり部を持つ。	外；口縁部ヘラケズリ後口唇部ヨコナデ。体部ていねいなヨコミガキ。立ちあがり部はヘラナデ。底面はナデ。内；口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。頸部指押え。体部タテ・ナメのヘラナデ。下位にミガキ。 ①少量の砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
13	柑	口：12.4 底：5.6 高：14.2	23～24E18 ～19	12よりやや小型。口縁部外傾。体部ふくらみを持ち球形を呈す。底部は平底で立ちあがり部を持つ。	外；口縁部タテのヘラケズリ後タテのミガキ。体部ていねいなヨコミガキ。立ち上がり部ヘラナデ。底面ミガキ。内；口縁部ヨコのヘラナデ後ヨコミガキ。体部上位ナデ。中位～下位ヨコのミガキ。底部ナデ。①少量の砂粒 ②橙色 ③良好	完形
14	柑	口：12.0	22～23E18 ～19	口縁部外傾。口唇部鋭い。体部ふくらみを持ち球形を呈す。	外；口縁部ナメ右下のハケ目状ナデ後口唇部ヨコナデ。頸部左下のハケ目状ナデ。肩部右下・ヨコのハケ目状ナデ後ヨコ・タテミガキ。体部ヨコ・ナメのミガキ。内；口縁部ナメのナデ後ヨコミガキ。体部ヨコのヘラナデ。 ①少量の砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～腰部 $\frac{1}{3}$ 残存
15	柑	口：(14.4)	23～24E18 ～19	口縁部長く外反。体部ふくらみを持ち球形を呈す。	外；口縁部左下のハケ目状ナデ後右下のハケ目状ナデ。口唇部ヨコナデ。頸部右下のハケ目状ナデ後左下のハケ目状ナデ。体部右下のハケ目状ナデ後タテ・ナメのミガキ。内；口縁部ヨコのハケ目状ナデ後ヨコミガキ。体部ヨコのヘラナデ。 ①長石・雲母 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～体部下 半残存

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
16	埴	口：(12.0)	22～23 E 18 ～19	口縁部中位に僅かなふくらみを持ち外傾。	外：指ナデ。内：ヨコナデ後ヨコミガキ。 ①少量の砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
17	埴	口：10.5	20～35 E 00 ～05	やや小型の埴。口縁部外傾。体部ふくらみを持つ。	外：口縁部ヨコのハケ目状ナデ後指ナデ。頸部～肩部タテのハケ目状ナデ。体部ヘラケズリ後ヨコミガキ。内：口縁部ヨコミガキ。肩部雑なヨコミガキ。 ①石英 ②にぶい橙色 ③良好	口縁～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
18	埴		23～24 E 18 ～19	口縁部外傾。体部ふくらみを持つ。	外：口縁部タテのヘラナデ後上位ヨコナデ。体部タテ・ナナメのヘラケズリ。内：口縁部ヨコ・ナナメのヘラナデ。体部ヨコのヘラナデ。 ①石英 ②浅黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 。体部 $\frac{1}{2}$ 残存
19	(壺?)	底：6.2	23～24 E 18 ～19	体部下半～底部ふくらみを持つ。おそらく球形を呈するのであろう。底部は平坦。	外：体部タテ・ナナメのミガキ。底面はヘラナデ。内：ヨコのヘラナデ。底面は指ナデ。①長石・石英 ②橙色 ③良好	体部下半残存
20	埴	底：5.0	表採	体部丸味を帯びる。平底で内面中央に肥厚する。	外：体部ヨコ・ナナメのミガキ。底面ナデ。内：ヨコミガキを主体。 ①石英多い。②にぶい黄橙色 ③良好	腰～底部のみ残存
21	鉢	口：12.0 底：3.6 高：6.0	42 E 05	口縁～底部丸味を帯びて開く。底部は平坦。器肉厚い。	外：口唇部ヨコミガキ。体部タテのていねいなミガキ。底面ナデ。内：口縁～底部ていねいな放射状のミガキ。 ①石英 ②橙色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
22	片口	口：9.0 底：6.9 高：8.4	42 E 05	口唇部内湾。片口部は口唇よりやや上より水平に突出。体部上半にふくらみを持ち腰部直線的に底部に至る。底部は平底で立ちあがり部を持つ。	外：やや磨滅。口唇部ヨコナデ。片口部ナデ。体部タテ・ナナメのハケ目状ナデ。底面ナデ。内：口縁～体部ヨコのヘラナデ。片口部タテの指ナデ。 ①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	完形
23	小型高杯	裾：8.1	26～31 D 48 26～31 E 02	杯体部丸味を帯びる。脚部短く「ハ」字状に開く。中位に径0.4cm程の小孔を穿つ。裾部やや広がる。	外：杯体部ヨコミガキ。脚部タテミガキ。裾部ヨコナデ後タテミガキ。内：杯体部ヨコ・ナナメのミガキ。脚部上位僅かに絞り目残存。指ナデ。裾部ヨコナデ。①砂粒 ②浅黄橙色 ③良好	杯部口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
24	器台		36～38 D 21 ～24	受部底面丸味を帯び、底面中央に径1.4cm程の孔を穿つ。脚部「ハ」字状に開く上位に径1.2cm程の孔を3方に穿つ。下位にも孔の痕跡が認められる。	外：赤彩。タテのていねいなミガキ。内：受部底面赤彩。ていねいなミガキ。脚部指ナデ。 ①細砂 ②赤褐色 ③良好	脚部上位のみ残存

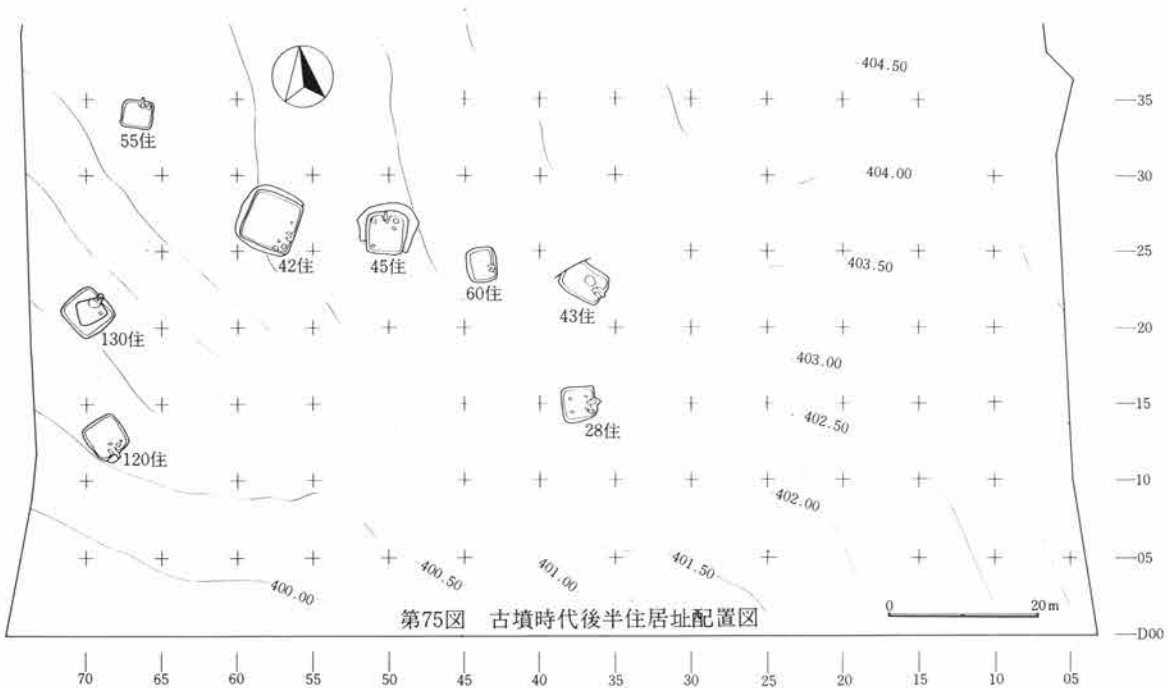
第III章 検出された遺構と遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

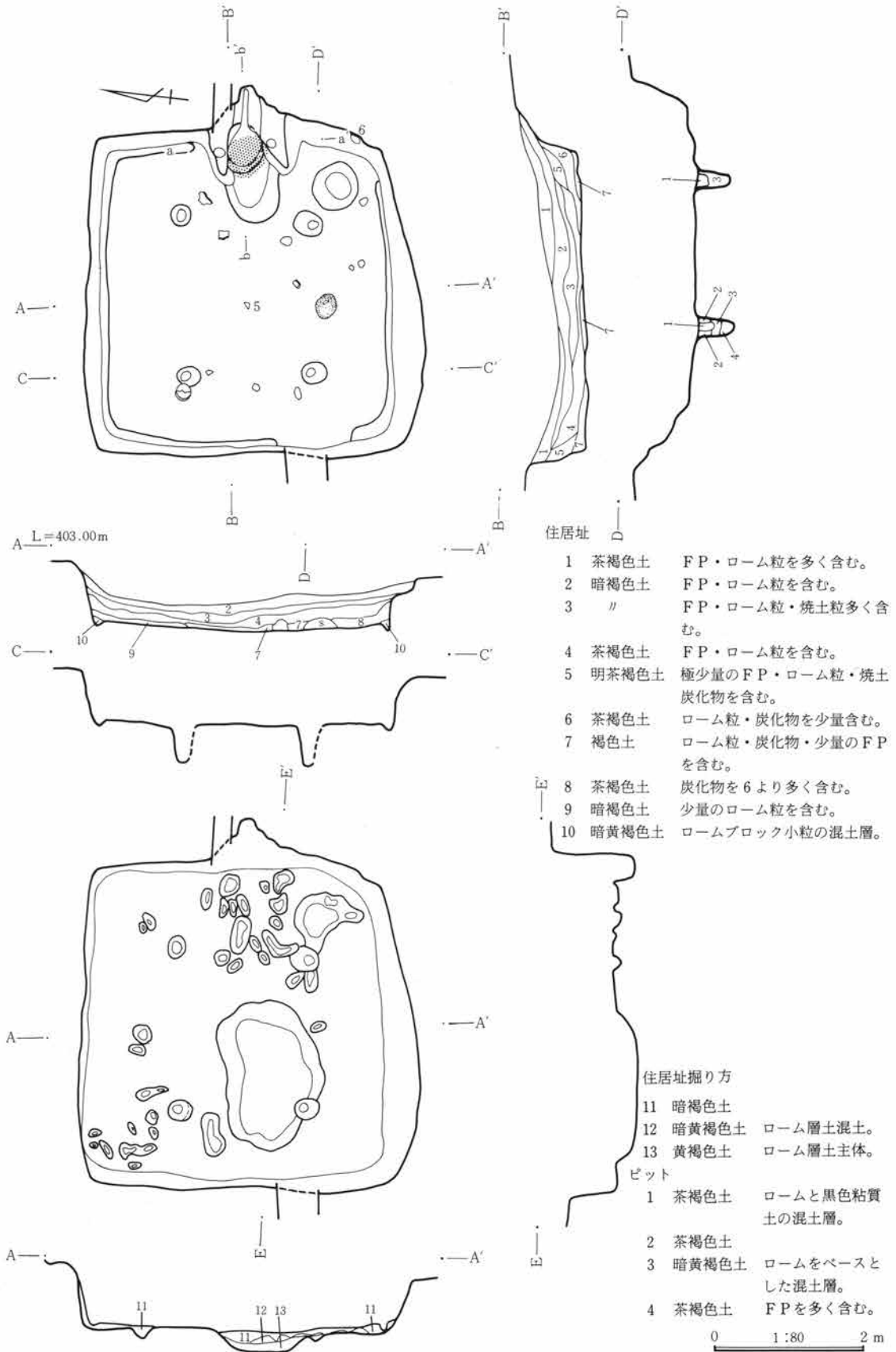
遺構名	遺構実測図	遺物実測図	遺構図版	遺物図版
28号住居址	第76・77図	第94・95図	図版36	図版87
42号住居址	第78～80図	第95～98図	図版37・38	図版87～89
43号住居址	第81・82図	第99・100図	図版39	図版89
45号住居址	第83～85図	第100～104図	図版40・41	図版90～92
55号住居址	第86・87図	第104図	図版42	図版93
60号住居址	第88・89図	第105・106図	図版43	図版93
120号住居址	第90・91図	第107・108図	図版44	図版94
130号住居址	第92・93図	第109図	図版45	図版95

住居址一覧表

遺構名	方 位	形 状	施 設	その他
28住	住 居：N85°E カマド：N90°E	隅 丸 方 形	カマド 壁溝 柱穴 4 貯蔵穴 床下土坑	
42住	住 居：N118°E	大型の正方形	カマド 壁溝 柱穴 4 貯蔵穴 床下土坑	
43住	住 居：N127°E カマド：N136°E	隅 丸 長 方 形	カマド 壁溝 貯蔵穴	
45住	住 居：N12°E カマド：N10°E	大型の正方形	カマド 壁溝 柱穴 貯蔵穴	拡張住居
55住	住 居：N5°E カマド：N8°E	小型の長方形	カマド 壁溝 貯蔵穴	
60住	住 居：N87°E カマド：N89°E	隅 丸 方 形	カマド 壁溝 貯蔵穴 床下土坑	
120住	住 居：N144°E カマド：N141°E	隅 丸 方 形	カマド 壁溝 柱穴 4	
130住 A・B	住居A：N52°E B：N75°E カマド：N36°E	隅 丸 方 形	カマド 貯蔵穴 柱穴 4	重複住居

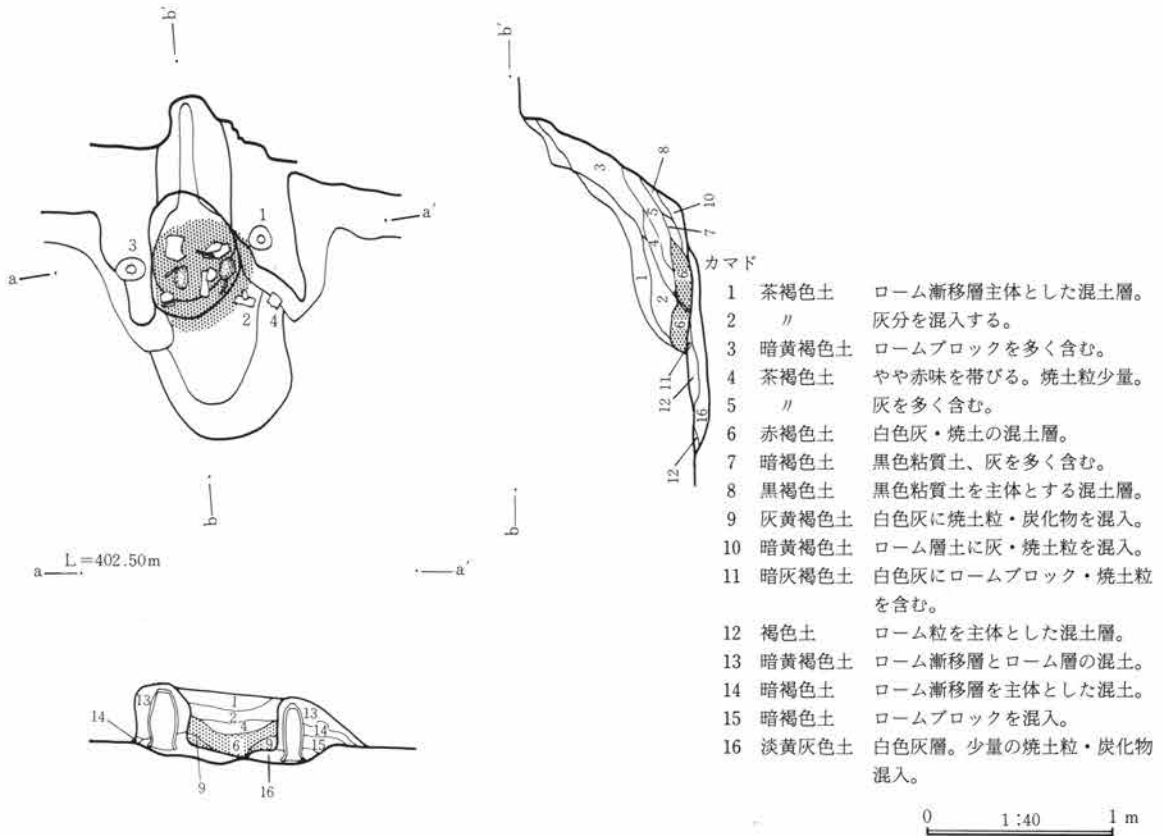


第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第76図 第28号住居址及び掘り方

第三章 検出された遺構と遺物

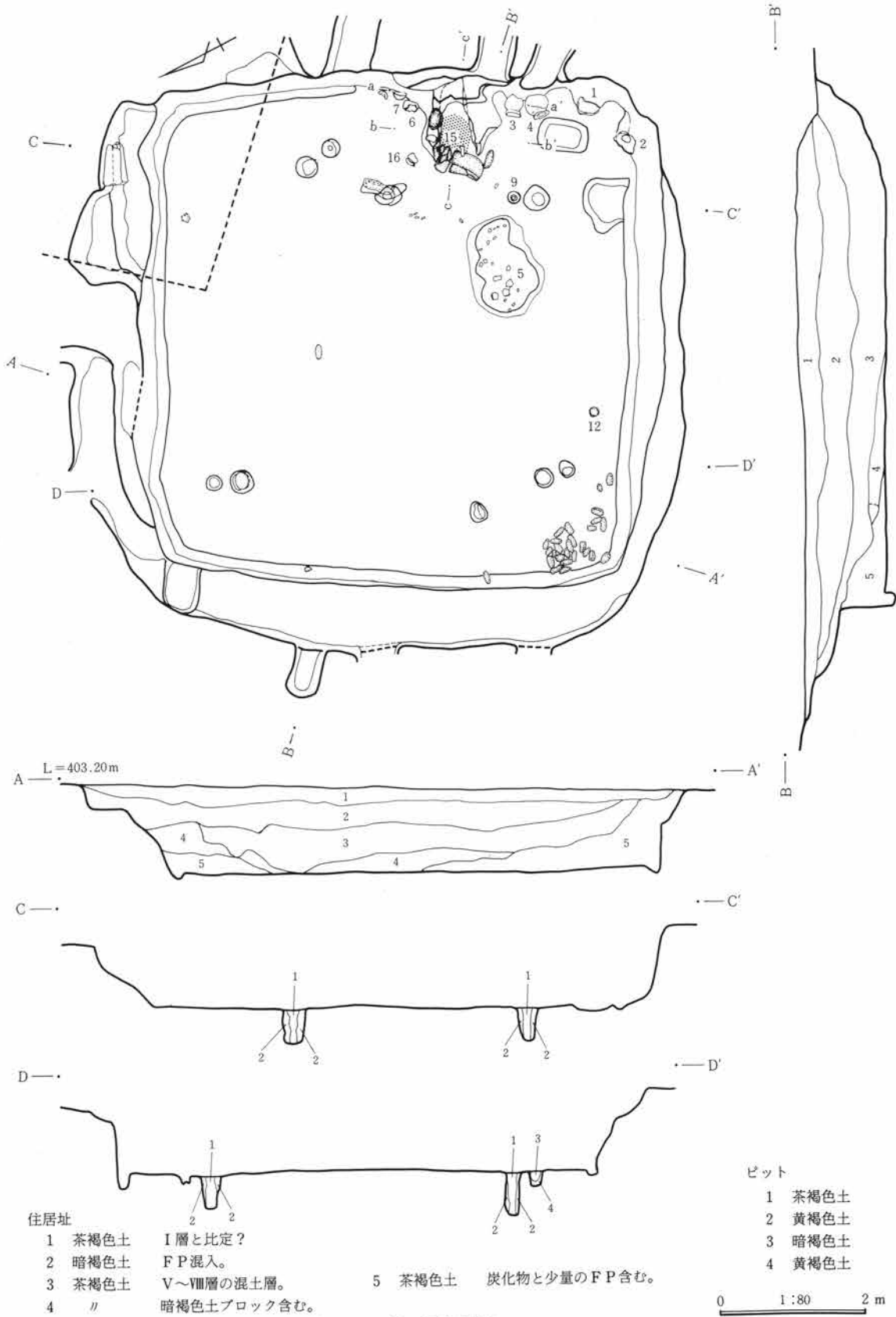


第77図 第28号住居址カマド

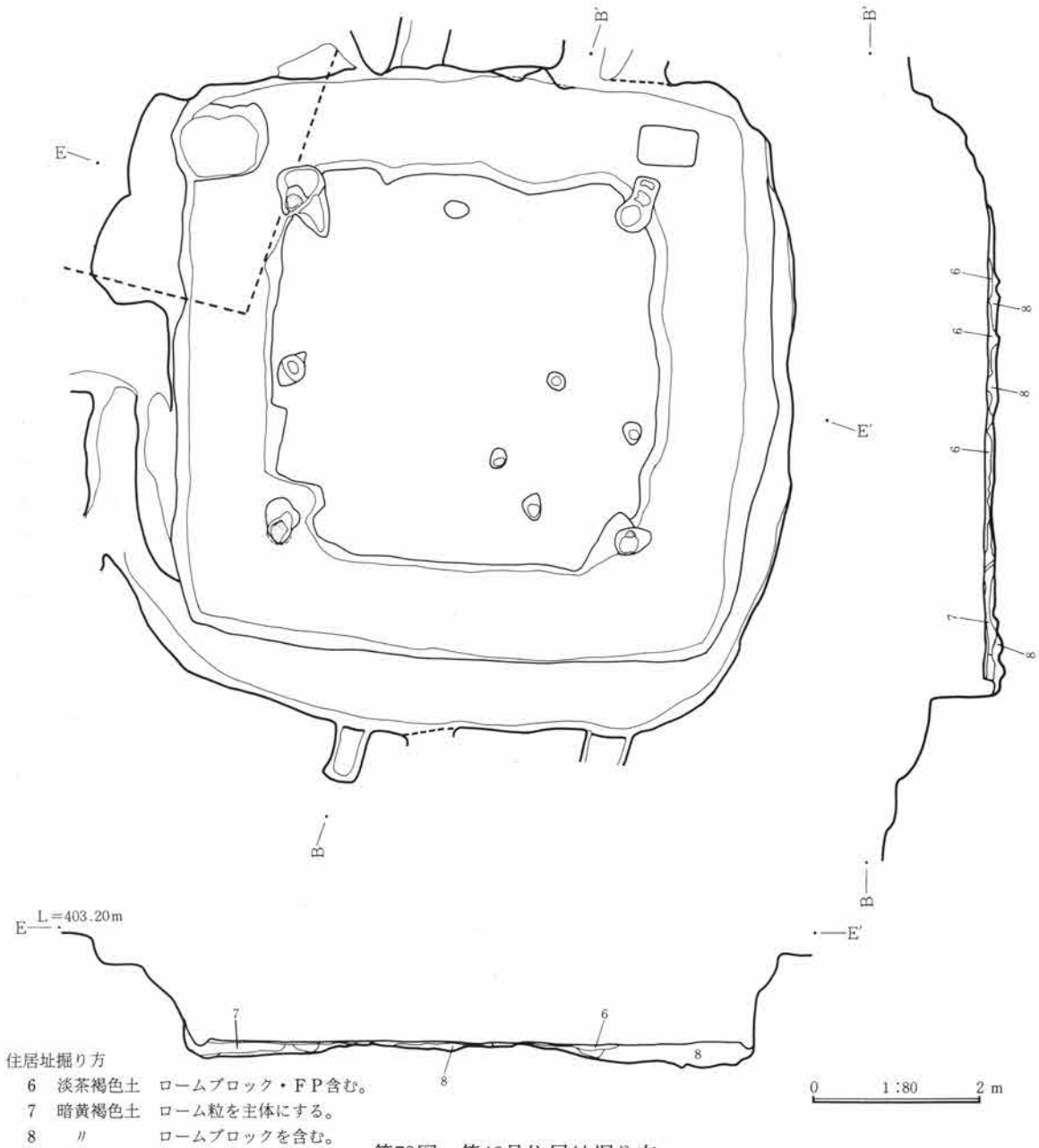
第28号住居址

位置 36～38D13～15グリッド。D区南西部にあり、微高地から低地に向う傾斜地にある。平安時代に比定される28A号住（竪穴状遺構）に上面を削られている。
方位 住居：東。カマド：東。
形状 平面的に456×438cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は63cmを測る。
覆土 若干のF・Pは混入するが、基本的には第VI～VIII層土で覆われ、F・P降下前に放棄された住居址として把握できよう。
床面 VII・VIII層土を中心とした土で貼られており、幅8cm深さ6cmの壁溝が東壁のカマド南側を除き周っている。床面径は393×373cmを測る。
柱穴 4本あり、P₁径30×22cm深さ47cm、P₂径32×30cm深さ45cm、P₃径34×28cm深さ50cm、P₄径40×35cm深さ15cmを測る。径12～25cmの柱痕が断面に認められる。
貯蔵穴 カマド南側にあり、径64cm深さ15cmを測る。
カマド 住居東壁を幅80cm、奥行き33cmを掘り出し、床面に径109×107cmの浅い掘り込みをもち、これを埋め戻して作っている。ソデは平面的に北側で幅46cm長さ56cm、南側で幅54cm長さ80cmを残存し、VI～VIII層土の混土により作られている。両ソデとも長胴甕（1・3）が置かれ、ソデ材としている。天井部は陥没しているが燃燒部は100×74cmを、また煙道は長さを72cmを測る。
掘り方 壁肩より深さ87cm以内に掘り込まれている。一部が地床となり、床下遺構は径200×136cm深さ24cm以下の不整形な土坑がある他には顕著なものは認められない。
遺物 カマドのソデ材としての長胴甕の他、カマド燃燒部を中心として長胴甕（2）・甕（4）、また覆土中の遺物としては東南壁コーナーに杯（6）・住居中央部に甕（5）が出土した。床面上の遺物は、甕の胴部破片等が数点出土したが、図示し得る個体はなかった。

（石守）



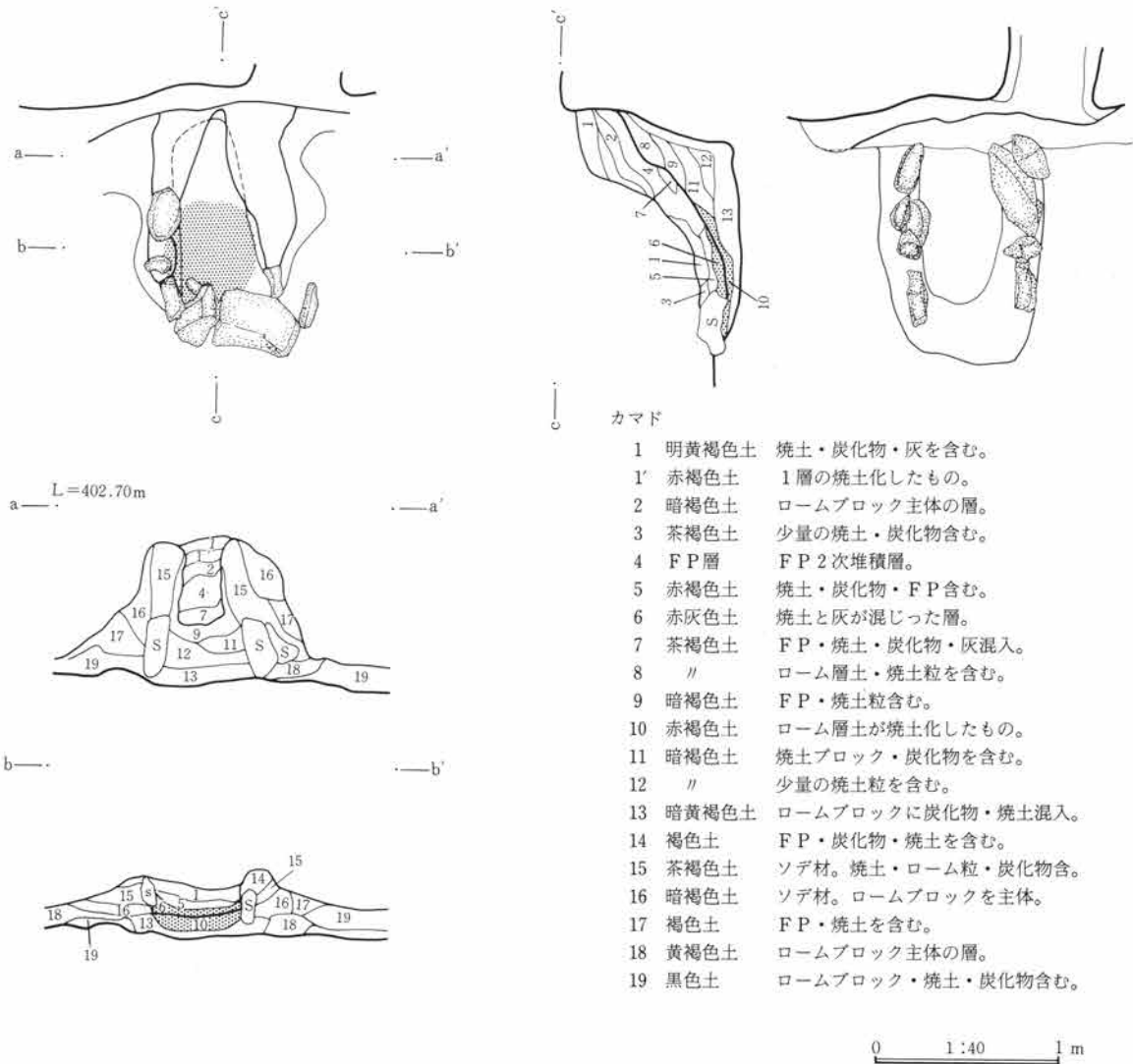
第78図 第42号住居址



第42号住居址

位置 55～60D24～29グリッド。第45号住居址が近接する。 **方位** 住居：東南東。カマド：東南東。

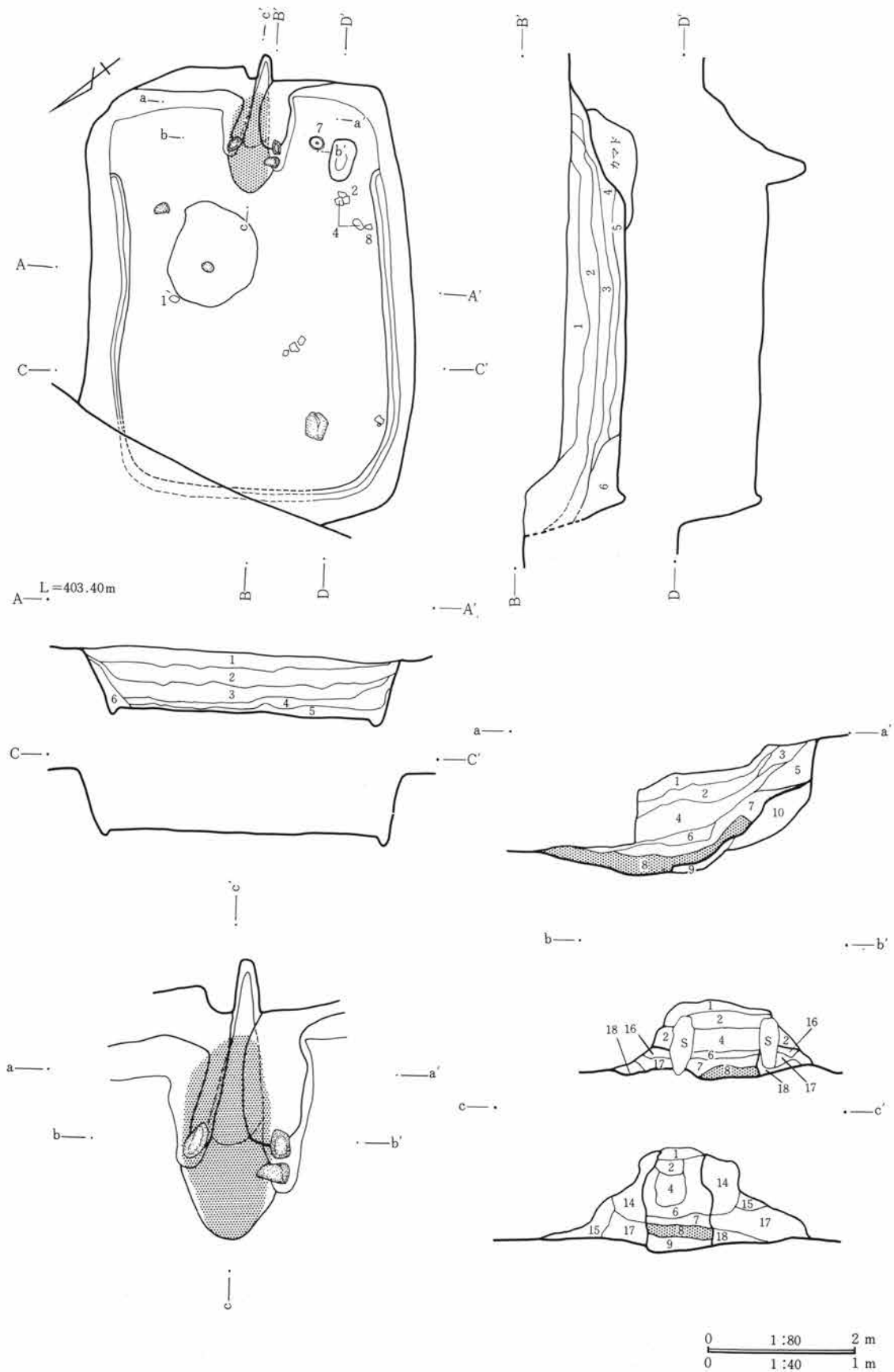
形状 698×664cmの隅丸方形で、壁高70cmを測る。東南及び西壁の一部ではF・P層が抜けてテラス状になっている。住居址の北東部分は近代の攪乱によって床上20cm以上が壊されている。 **覆土** 住居址はF・Pを多く混入する土層によって覆われている。壁近くには2次堆積のF・P層が堆積し、カマド内でも天井部付近で崩落土層下にF・P層が認められる。F・Pのこのような堆積は他の住居址には認められず、本住居址はF・P降下時の所産と考え得ることもできよう。 **床面** 第VI～VIII層土を埋め戻して床を作り出している。床面径は634×630cmあり、幅17cm深さ10cmの壁溝が東南部を除き周っている。 **柱穴** 4カ所確認された。P₁



第80図 第42号住居址カマド

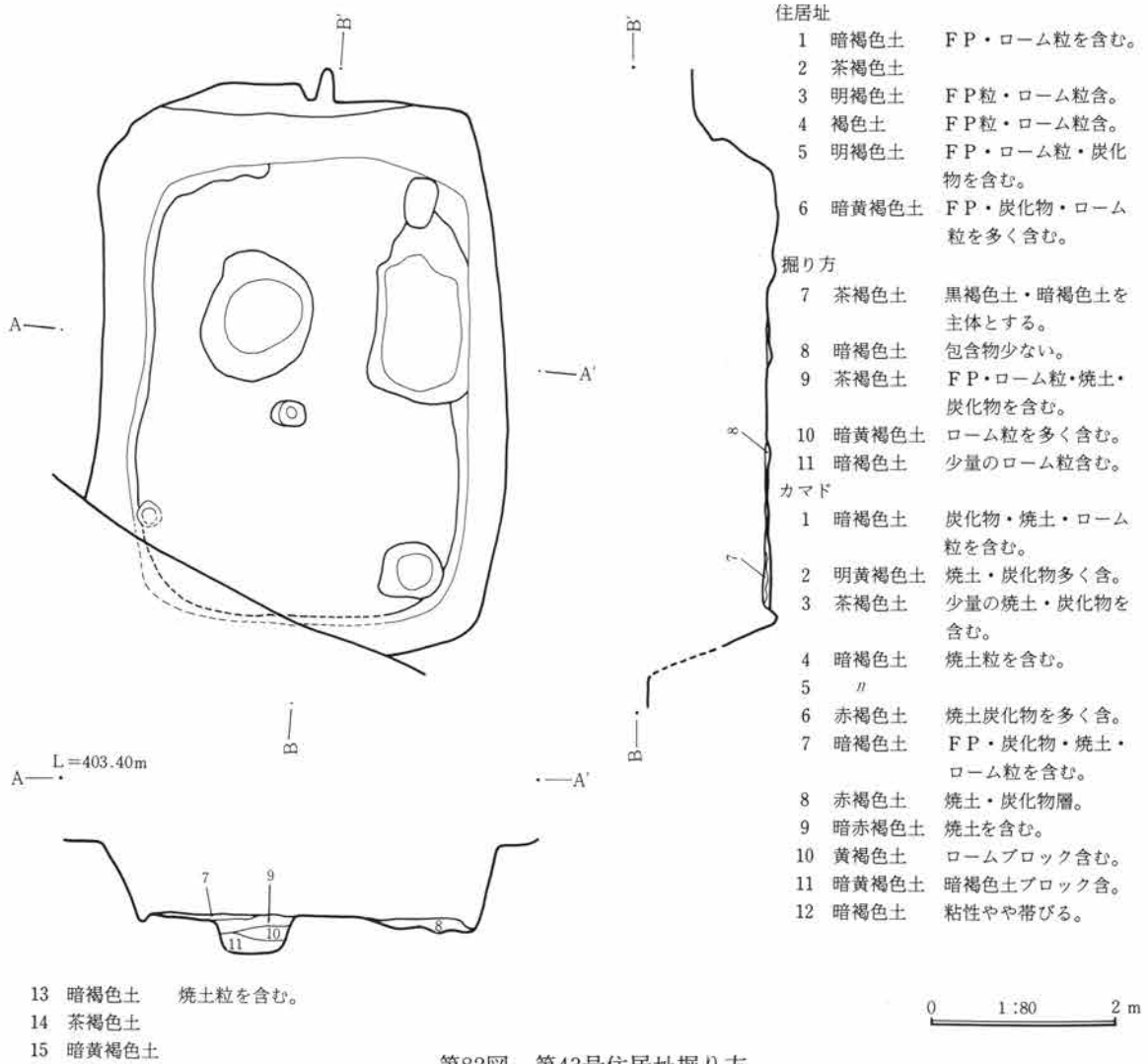
径29cm深さ47cm、P₂径35cm深さ47cm、P₃径30×32cm深さ40cm、P₄径27×25cm深さ62cmで柱痕は約12cmの径を測る。またP₁~P₃の底部には青灰色の粘質土が付着するように遺存する。 **貯蔵穴** カマドの南側にあり、径68×42cm深さ76cmを測り、方形を呈するしっかりしたものである。F・Pがつまっている。 **カマド** 住居址の東壁を幅40cm奥行き20cmを掘り出し、径96×85cmの浅い掘り込みを埋め戻して作っている。ソデは北側に5個の石を直線的に渡って並べ、南側に4個の自然石を並べてソデ材として使用している。これらの石材を焼土粒を含むVI~VIII層土の粘質土でかためてソデを作っている。天井部は陥没しているが、燃焼部前方に天井に渡されたと思われる石材が落ちている。燃焼部は40×40cmを測り、煙道は長さ32cmの長さを持つ。 **掘り方** 幅110cm深さ20cm前後の溝状の掘り込みが全周している。この掘り込みは北・西の壁下でしっかりしている。また、北東隅には90×107cm深さ20cmの床下土坑がある。 **遺物** カマド南側に丸胴の甕(1~4)、北側に、甕(6)・甗(7)・杯(15)、床直に小型甕(8)、床上数センチ程浮いた状態で長胴甕(5)・杯(13)が出土している。また住居址南西コーナー部ではこも石が集中して確認された。 (石守)

第三章 検出された遺構と遺物



第81図 第43号住居址及びカマド

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



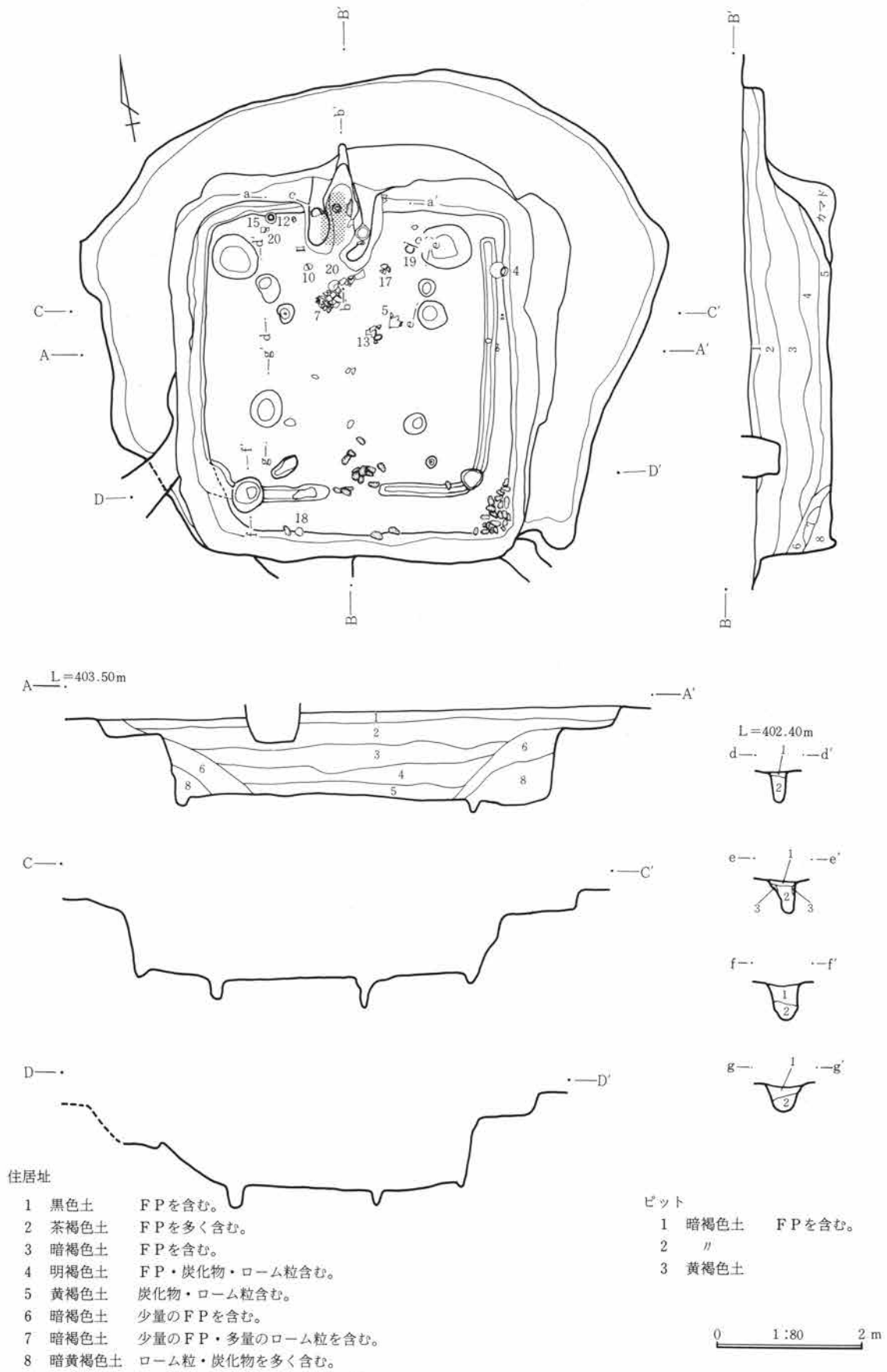
第82図 第43号住居址掘り方

第43号住居址

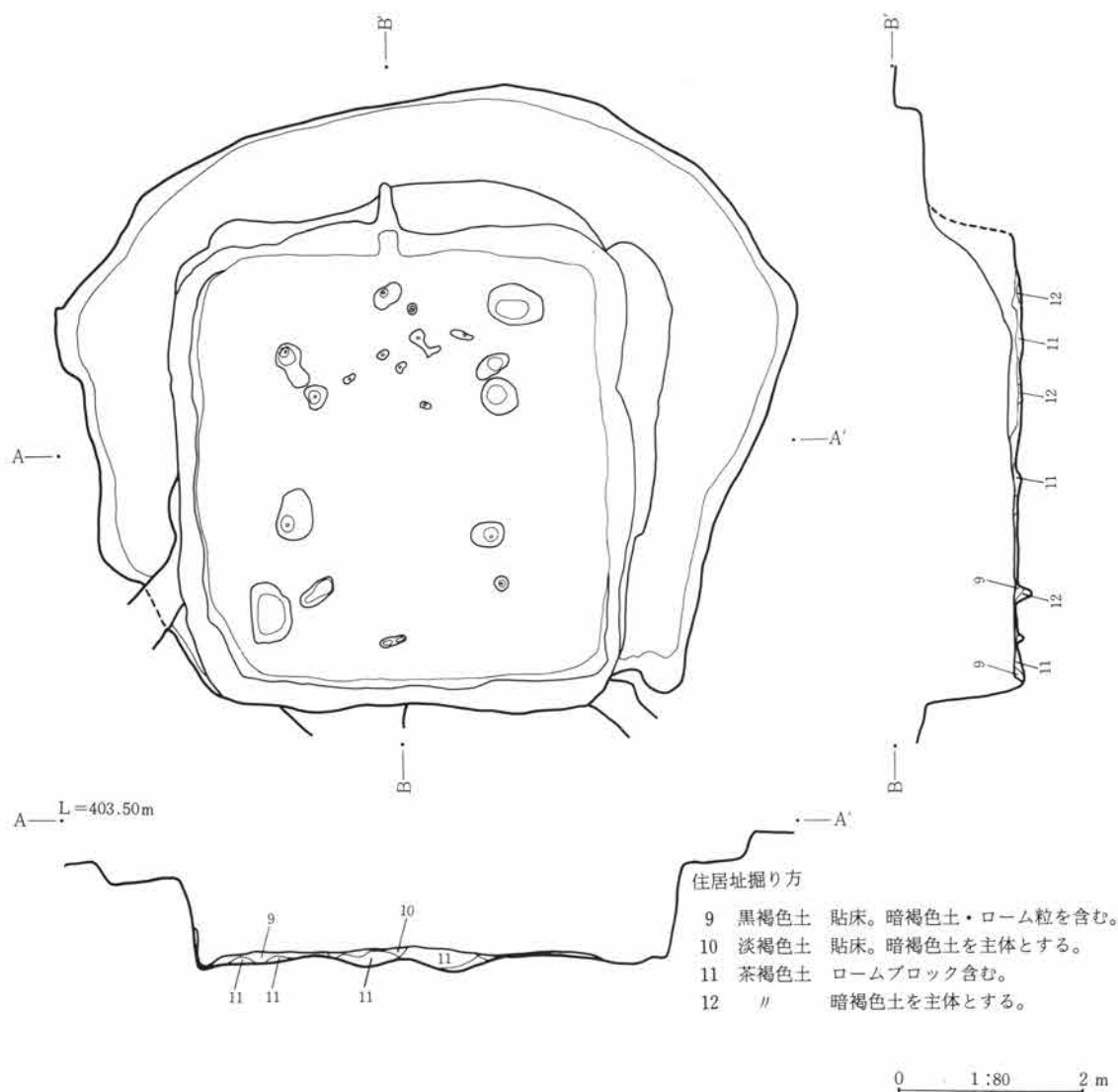
位置 36~38D21~24グリッド。D区中央部微高地縁部のやや内側に位置する。北西部は簡易水道により壊されている。
方位 住居；東南東。カマド；南東。
形状 580×430cmの主軸に長軸を持つ隅丸方形で、壁高は80cmを測る。
覆土 6層に分層され、僅かにF・Pを混入するが、F・P降下以前に廃棄されたと把握されよう。覆土は壁寄りに堆積するものと、住居全体を覆うものとに区分できるが、特に西壁寄りに堆積している土層6は、その土量から周堤の存在を考えさせる。
床面 地床と貼り床で、貼り床は第VI~VIII層土をたたいて作られている。床面の広さは515×340cmを測る。壁溝は幅20cm深さ10cmを測り、北西、南西部を除き周っている。
柱穴・土坑 床面上では認められなかった。
貯蔵穴 カマド南側にあり、径56×32cm深さ56cmを測る。覆土には炭化物・灰・焼土を含む。
カマド 住居の東壁を幅33cm奥行き65cmに掘り込んで作られ、ソデは第VII層土を中心とした粘質土で固められている。燃焼部は92×22cmの大きさで、煙道は80cmの長さを測る。
掘り方 僅かな掘り込みであったが、径56×32cm深さ56cmの床下土坑を3基確認した。また、幅50cm深さ10cm程度の浅い掘り込みがほぼ周囲を周っている。
遺物 床直からは甕(2) 覆土中より、台付甕(4)・甑(7)・杯(9)等が出土している。カマドからは、甕(3・6)を検出した。

(石守)

第III章 検出された遺構と遺物



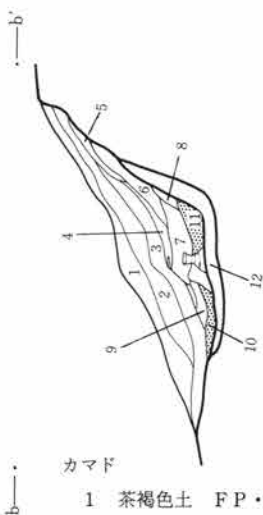
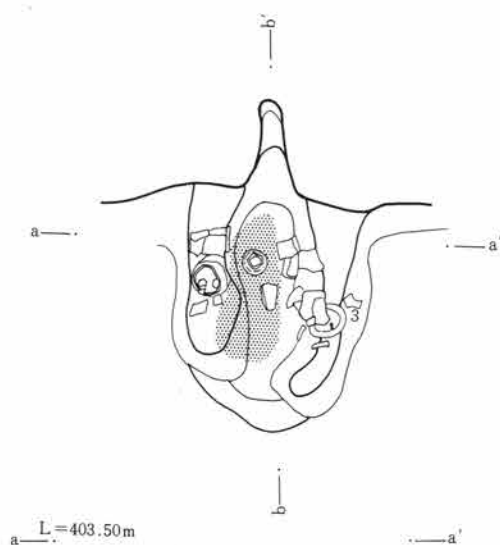
第83図 第45号住居址



第84図 第45号住居址掘り方

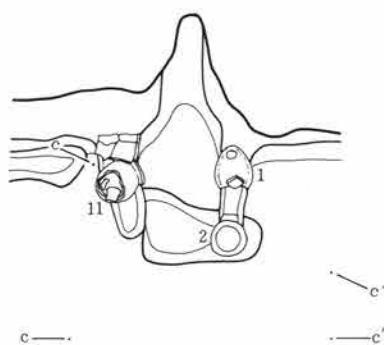
第45号住居址

本住居址は拡張が行なわれており、拡張前のものを45A、拡張後のものを45Bとする。 **位置** 48～52 D24～28グリッド。D区中央部やや西寄りにある。第42・60号住居址が近接する。 **方位** 住居；北。カマド；北。 **形状** 45Aは床面で400×420cm、拡張後の45Bは560×520cmを測る隅丸方形で、壁高は88cmを測る。また、住居の東、北、西壁の外面ではF・Pが幅80cm程に抜かれ、この部分がテラス状になっている。 **覆土** 9層に分層され、壁下に堆積するものと、住居全体を覆うものとに大別され、前者が第VI～VIII層土からなりF・Pをあまり含まないのに対し後者はF・Pを多く含む。前者は周堤に用いられたと考えられる。 **床面** 45Bは第VII層土を用いた貼り床である。床面の広さは430×428cmであって、周溝は幅約35cm深さ約8cmを測りほぼ全周している。45Aは床面を45Bに削られているが、広さは380×360cmを測る。周溝は幅約15cm深さ6～15cmで北東部分を除き全周している。 **柱穴** 柱穴は45Aでは4穴あり、それぞれP₁径41×30cm深さ44cm、P₂径25×22cm深さ42cm、P₃径50×43cm深さ38cm、P₄径29cm深さ42cmを測る。45Bのそれは対応する4穴と南壁両隅に2穴がある。P₅径26×23cm深さ42cm、P₆径40×38cm深さ40cm、P₇径43×20cm深さ32cm、P₈径17×15cm深さ20cmを測り、南壁隅P₉・P₁₀は径23×24cm深さ24cm、径41×43cm深さ52cmを測る。全てにつ



カマド

- 1 茶褐色土 F P・焼土粒を含む。
- 2 明褐色土 焼土粒・炭化物を含む。
- 3 茶褐色土 F P・焼土粒・炭化物含む。
- 4 // 焼土粒を含む。
- 5 // ローム粒を含む。
- 6 暗褐色土 少量の焼土粒を含む。
- 7 灰層 灰および煤の層。
- 8 暗褐色土 焼土粒・炭化物・F P微粒を含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒を含む。
- 10 赤褐色土 焼土ブロックを含む。
- 11 焼土層
- 12 茶褐色土 F P・焼土粒含む。
- 13 黒褐色土 炭化物を含む。
- 14 明褐色土 ローム粒を含む。
- 15 // 14の焼土化した層。
- 16 // ロームブロック含む。
- 17 赤褐色土 焼土ブロック。

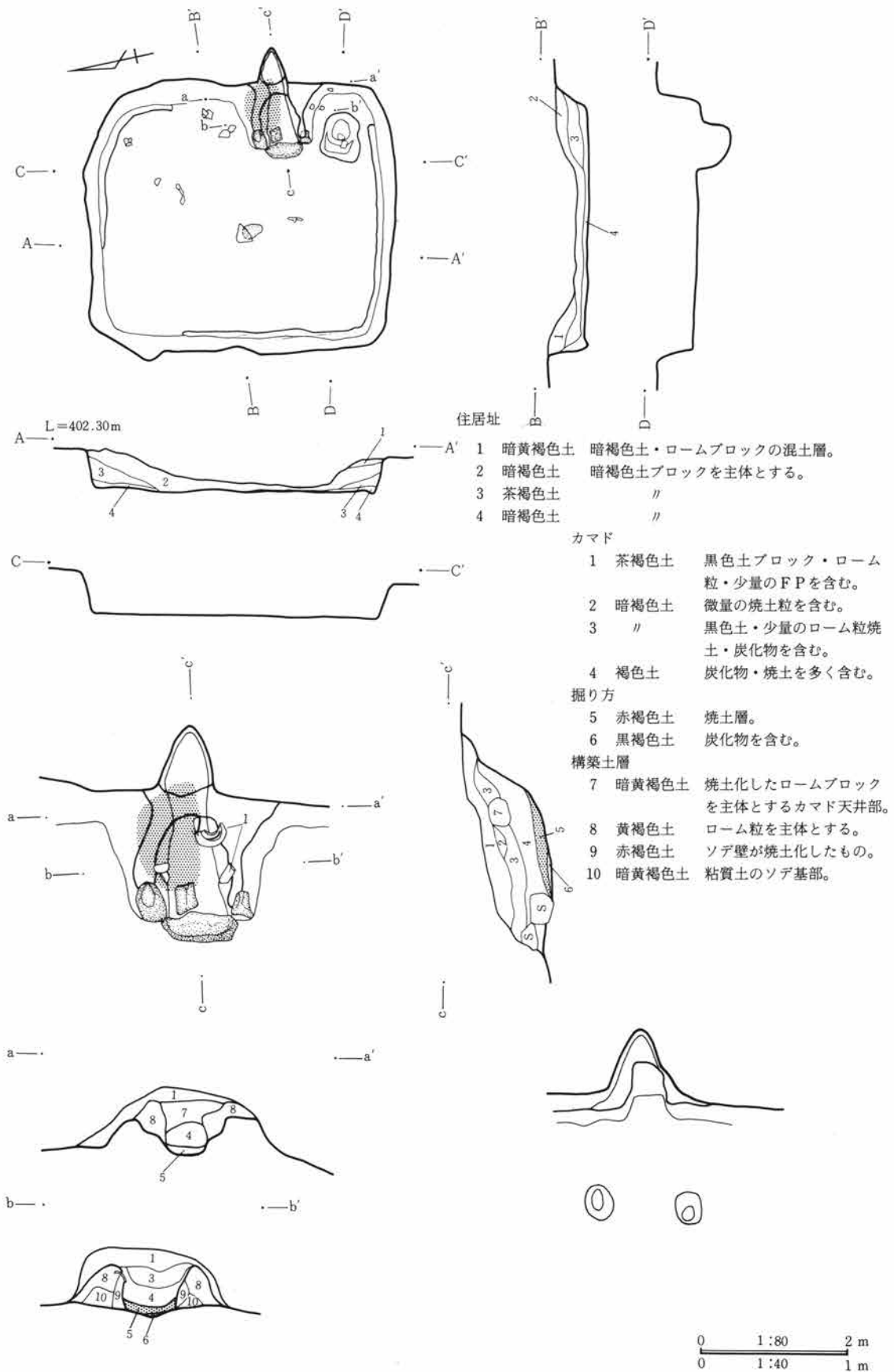


0 1:40 1 m

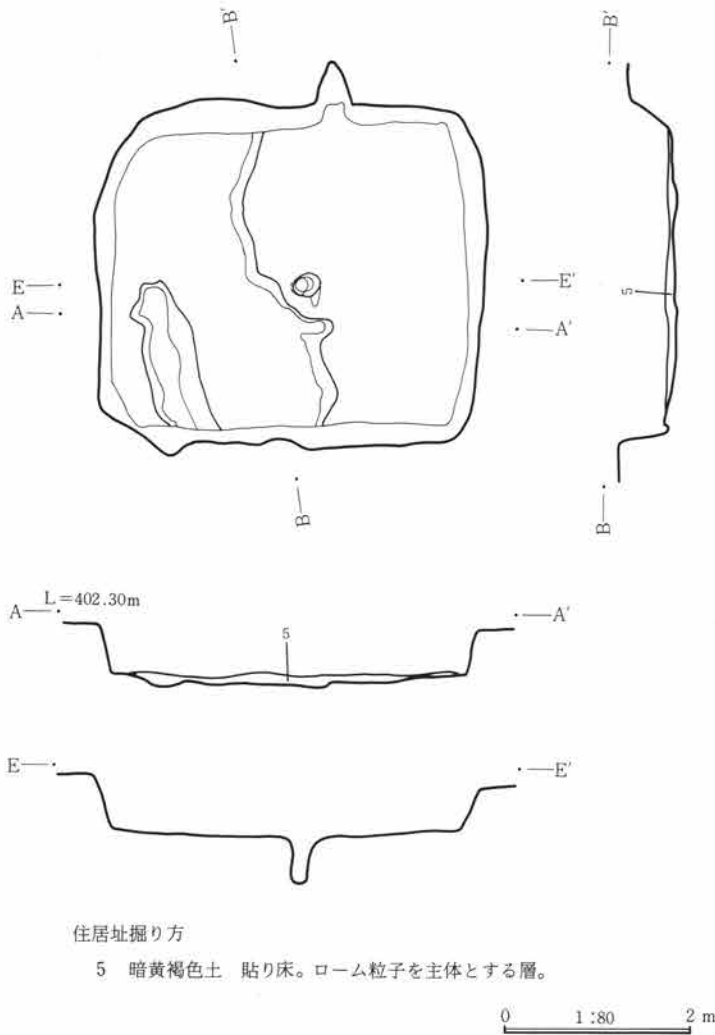
第85図 第45号住居址カマド

いて柱痕は認められなかった。 **貯蔵穴** カマド東側にあり、68×59cmを測る隅丸方形を呈し、深さ34cmを測る。 **カマド** 住居址の南壁を幅77cm奥行き100cmに掘り込み、燃焼部の下に径84×38cmの浅い掘り込みを埋め戻して作られる。天井部は陥没している。ソデは東側で幅36cm長さ84cm、西側で幅32cm長さ68cmが残る。ソデ材として西側に土器片と逆位の長胴甕、東側では壁寄りに逆位の手前には正位の長胴甕が設置され、これを焼土粒を含む第VI～VIII層土の粘質土で固めて作っている。燃焼部は70×40cmで、煙道は90cmを測る。 **掘り方** 著しい遺構は認められない。45Bでは第VII層土を中心に粘質土を埋め戻して作っている。 **遺物** カマド西ソデの長胴甕(11)、東ソデの長胴甕 (1・2)、カマド内からは (3・6) が出土している。また支脚として高杯 (11) の脚部のみがカマド中央やや東より出土している。床直からは長胴甕 (7)・丸胴甕 (4) 鉢 (17)・杯 (18～20) 等が出土している。また45B東南コーナーにはこも石が集中して検出された。 (石守)

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第86図 第55号住居址及びカマド



住居址掘り方

5 暗黄褐色土 貼り床。ローム粒子を主体とする層。

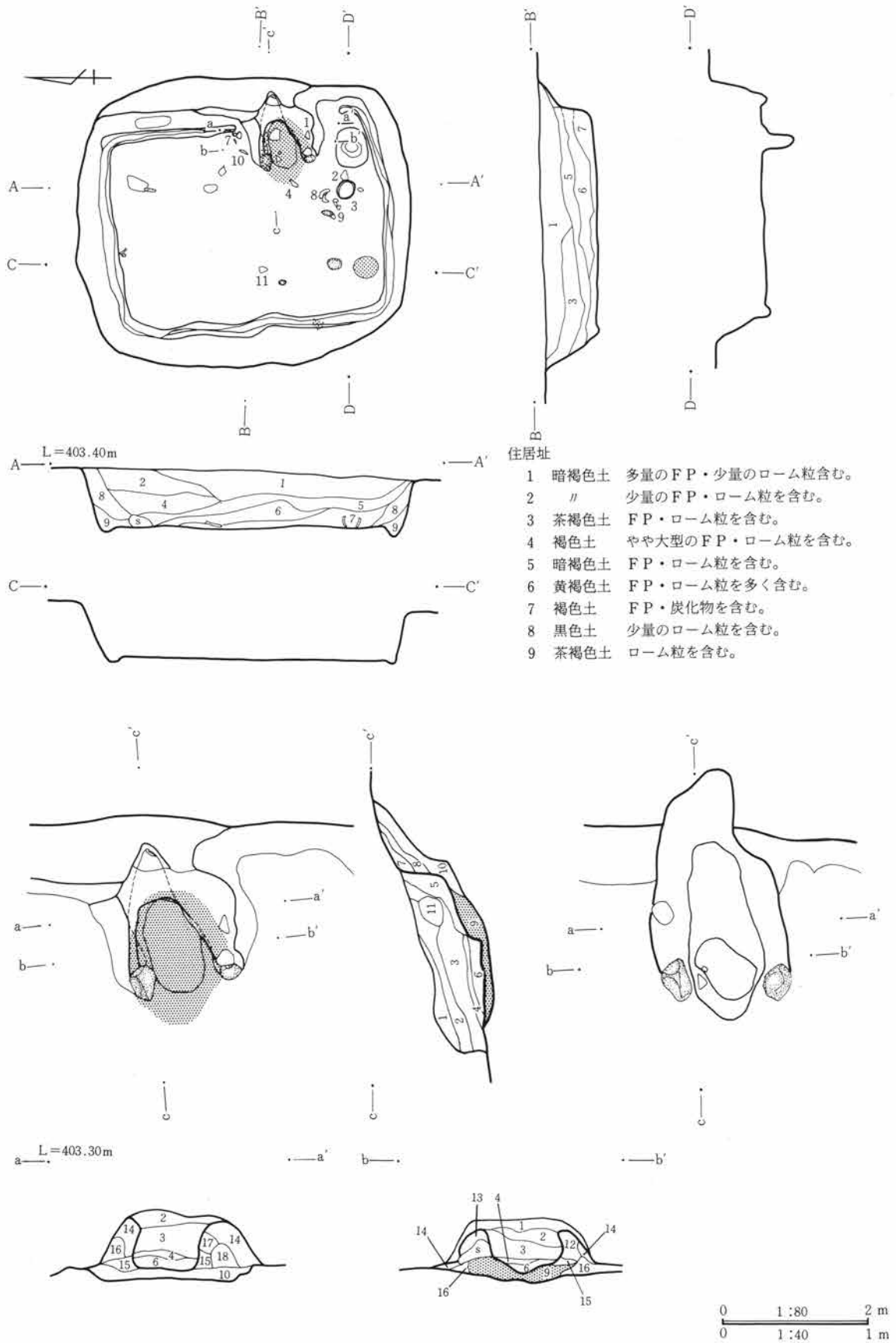
第87図 第55号住居址掘り方

第55号住居址

位置 65～67D33～35グリッド。D区西部にあり、南に第130号住居址、南西に第42号住居址が所在する。縄文時代の土坑を切って構築されている。**方位** 住居；東南東。カマド；東。**形状** 414×353cmの大きさを測るやや小型の方形の住居址で、壁高は53cmを測る。**覆土** VI・VII層土で覆われ、確認はVI層面で行なった。覆土中にF・Pは含まない。F・P降下前に廃棄された住居址である。**床面** VII・VIII層土で作られた貼り床で、370×305cmの広さを測る。幅9cm深さ4cmの壁溝が住居址北東及び西南部を除いて周っている。**柱穴** 認められなかった。**貯蔵穴** カマドの南側に径62×50cmの隅丸方形の平面プランで深さ46cmを測る。覆土は炭化物等を多く含んでいる。**カマド** カマドは北壁のやや東寄りに平面的に幅40cm奥行き43cmを掘って作られている。ソデはその先端部分に左右1対の自然石

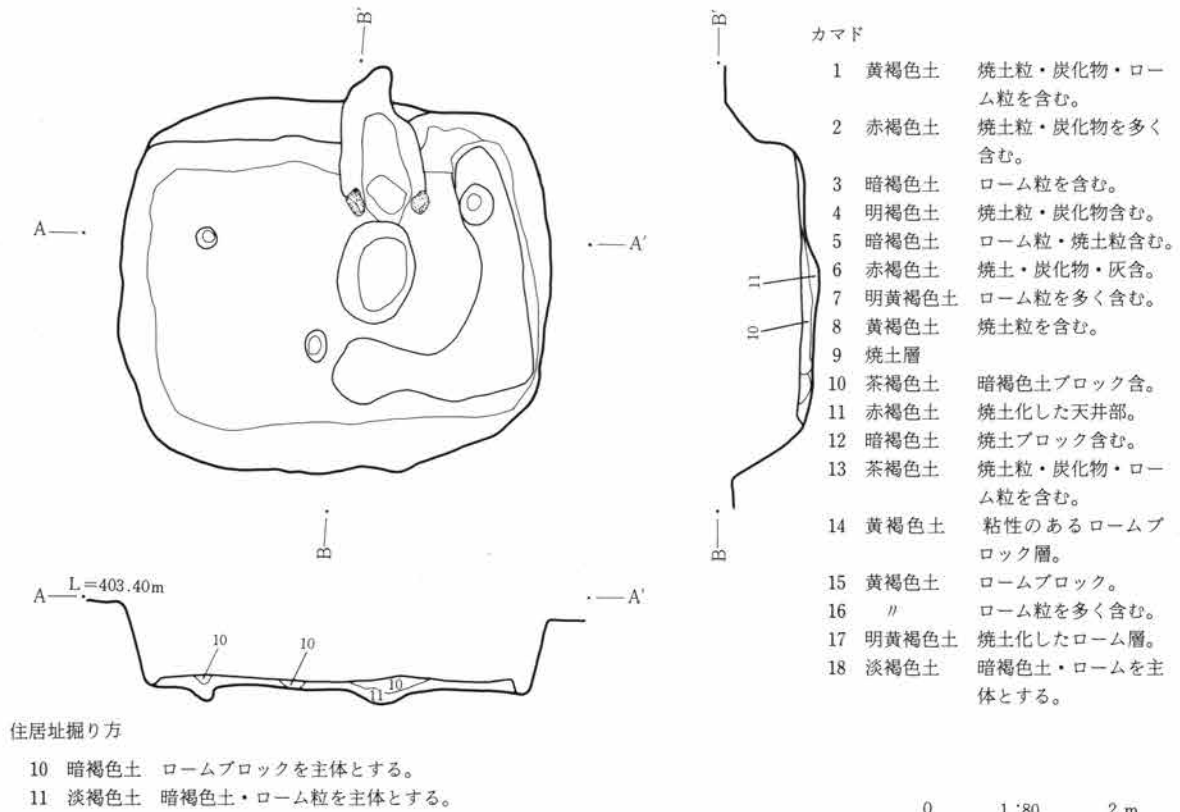
を床面に刺し込み、VII・VIII層土を中心とした粘質土を固めて作られている。ソデは平面的に、北側で幅34cm長さ62cm、南側幅28cm長さ64cmが残る。天井部は一部を除き（土層7）崩落しているが、天井石と思われる自然石がカマドの前から出土している。燃烧部は幅32cm奥行き82cmを測る。煙道の長さは平面的に62cmを測ることができる。**掘り方** 確認面より65cm以内の深さに掘り込まれ、更に住居中央から径29×24cm深さ50cmのピットが検出されている。カマドは前述したソデ材の自然石を刺し込んだ小ピットが検出された。他に顕著な遺構はないが、住居の西半分は東半分に比べ約10cm程掘り下げられている。**遺物** 遺物は覆土中・床直からの出土量は非常に少なく、図示し得るものはなかった。僅かにカマド南ソデにかけられていた長胴甕（1）が残存状態も良好であった。（石守）

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第88図 第60号住居址及びカマド

第三章 検出された遺構と遺物

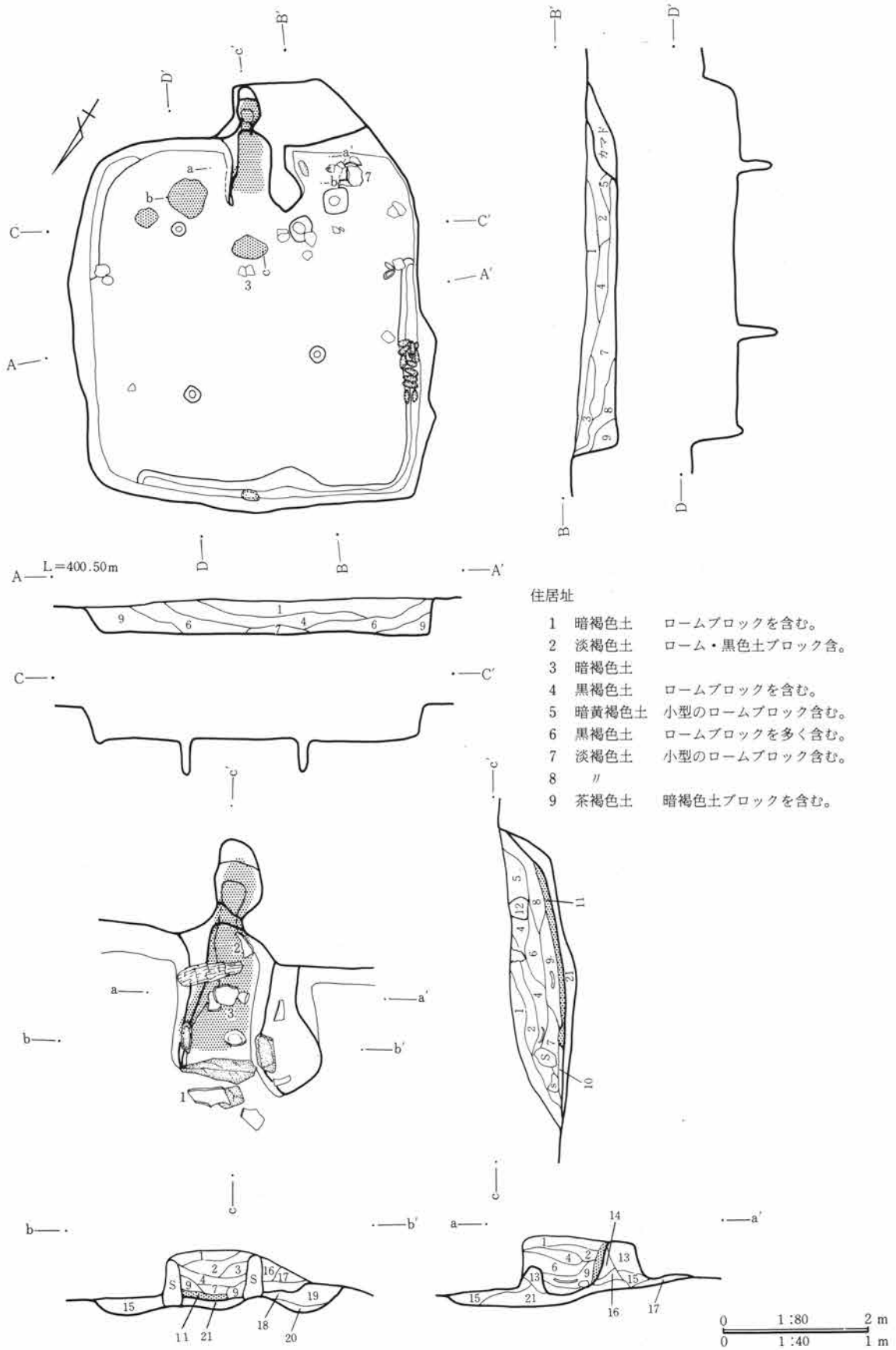


第89図 第60号住居址掘り方

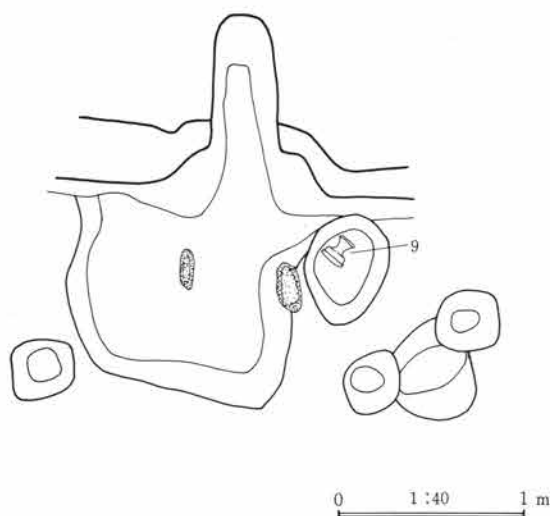
第60号住居址

位置 42~44D23~25グリッド。D区中央部にあり、東に第43号住居址、西に第45号住居址が近接する。第51号住居址(古墳時代前半)を切って作られる。 **方位** 住居；東。カマド；東を向く。 **形状** 452×390cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は68cmを測る。第V層(F・P)面で確認されたF・P降下後の住居址である。 **覆土** 覆土は壁端に堆積するものと、それ以外のものに大別される。後者がF・Pを多く含むのに対し、前者はVI・VII層土を主体としたF・Pを含まない土である。 **床面** 床は地床と貼り床が併用されている。貼り床はVI~VIII層土の粘質土をたたいたものである。床面の広さは360×255cmを測る。壁溝は幅10cm深さ6cm程度のものが全周している。 **柱穴** 認められなかった。 **貯蔵穴** カマド右側にあり、径53cm深さ42cmを測る。 **カマド** 住居址西壁のやや南よりを幅48cm奥行き39cm程に掘り出し、45~40cmの大きさの浅い掘り込みを埋め戻して作られている。ソデは西側で幅30cm長さ66cm、東側で幅32cm長さ84cmが残存し、その両方とも先端部に自然石を置いてソデ材としている。天井部は住居の壁付近に僅かに残る(カマド土層11)。燃焼部と天井部下面との間は34cmを測る。燃焼部は径60×37cmで、煙道は平面的に長さ40cmを測る。 **掘り方** 確認面より80cm以内に掘り込まれ、住居中央付近には径80×104cmの浅い掘り込みがある。 **遺物** カマド覆土中より甕(1)・杯(12)、床直より甕底部(3・7)、甑(8)、高杯脚部(9)がある。尚、9は磨滅が著しく、あるいはカマド内で支脚として使用されていた可能性もある。覆土中からの主な遺物は小型甕(4)、須恵器高杯裾部(10)、杯(13・14)である。(石守)

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第90図 第120号住居址及びカマド



第91図 第120号住居 址カマド

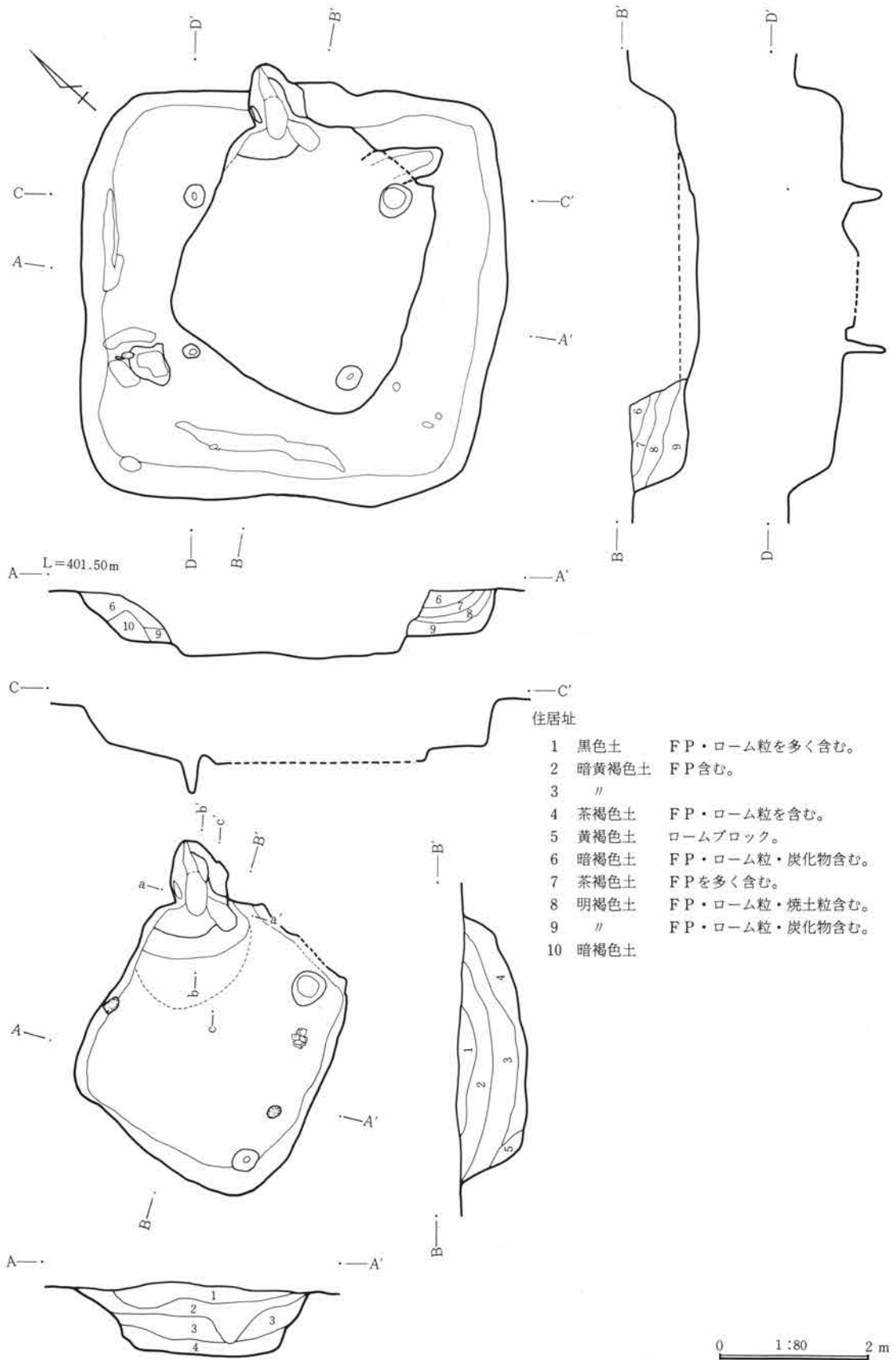
カマド

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 1 | 暗黄褐色土 | 焼土粒・ロームブロックを含む。 |
| 2 | 淡褐色土 | 炭化物・ロームブロックを含む。 |
| 3 | 茶褐色土 | |
| 4 | 〃 | 焼土粒を含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 6 | 淡赤褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 7 | 赤褐色土 | 〃 |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土粒・ロームブロックを含む。 |
| 9 | 茶褐色土 | やや暗い。 |
| 10 | 暗褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 11 | 焼土層 | 黒色土ブロックを含む。 |
| 12 | 黄褐色土 | 天井材。ロームを主体とする。 |
| 13 | 淡褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 14 | 〃 | ロームブロックを含む。 |
| 15 | 淡黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 16 | 茶褐色土 | やや焼土化する。 |
| 17 | 暗黄褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 18 | 茶褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 19 | 暗褐色土 | 灰を含む。 |
| 20 | 〃 | 焼土粒を含む。 |
| 21 | 黒色土 | ロームブロックを含む。 |

第120号住居址

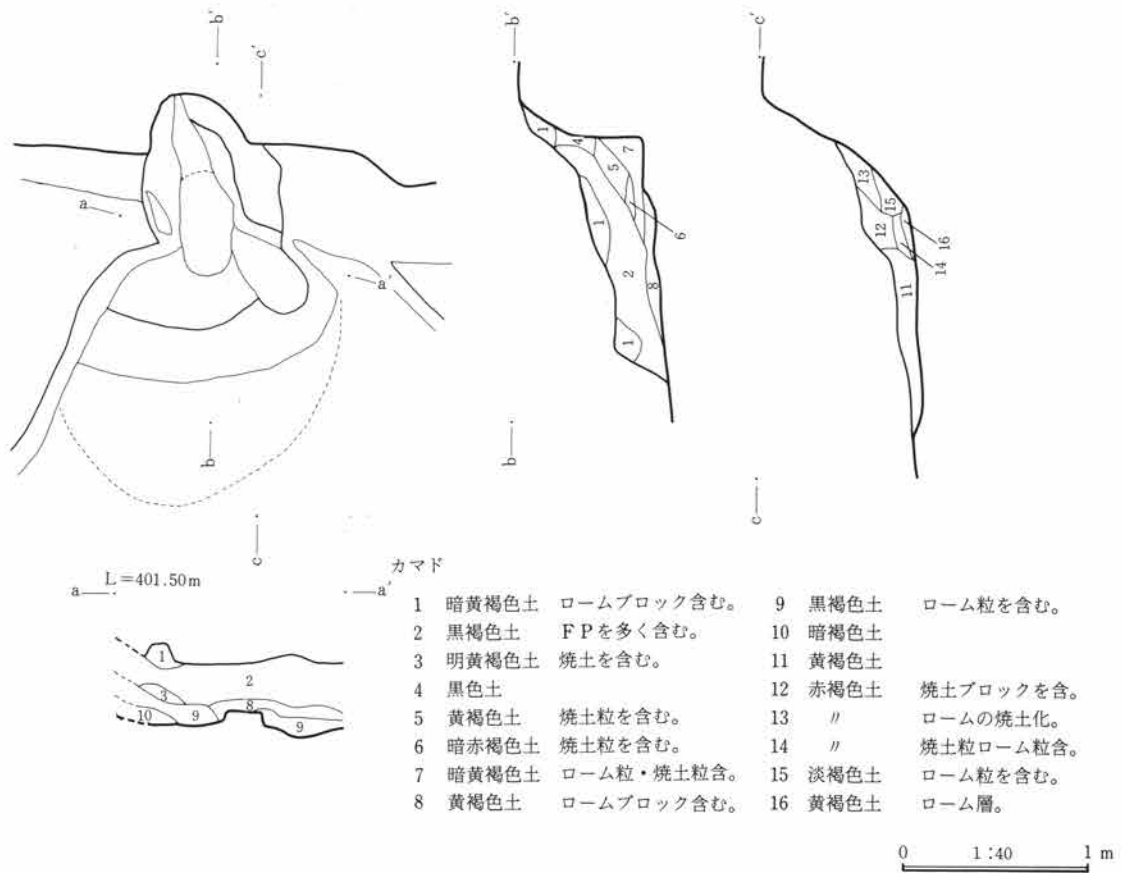
位置 67～70D11～14グリッド。D区南西部にあり、微高地と谷地の斜面の下位にあり、下方に第130号住居址が近接する。 **方位** 住居：南南東。カマド：南南東。 **形状** 516×480cmを測る隅丸方形プランの住居址で、壁高は42cmを測る。 **覆土** F・P下の第VI層面で確認された。覆土は壁端の土層群と他のものに大別でき、前者がF・Pを含まないのに対し、後者はF・Pを混入する土層群である。 **床面** 地床であり、床面は440×420cmの広さを持つ。壁溝は北壁から西壁にかけて幅8～12cm深さ14cmで周っており、南壁東半に僅かにその痕跡が認められる。 **柱穴** 4カ所確認された。P₁径20cm深さ46cm、P₂径22×18cm深さ46cm、P₃径22cm深さ58cm、P₄径22×23cm深さ54cmを測る。P₃の位置はやや東に寄っていて不自然である。また、P₄の南には径35cm深さ60cmの方形プランを呈するP₅がある。 **カマド** 住居址南壁中央付近を幅90cm奥行き70cm程掘り込み、床面に径100×80cmの方形の掘り込みを埋め戻して作っている。ソデは平面的に東側が幅10cm長さ72cm、西側で幅72cm長さ92cmが残存する。東側では壁から15cm、西側では同じく30cmの位置に自然石を立ててソデ材とし、VII層またはVIII層土を中心とした粘質土で固めてソデを作り出している。天井は煙道部に残り(カマド土層12)、燃烧面と天井部下面との間隔は30～35cmである。 **掘り方** 床面下には明瞭な遺構はなかった。しかし、カマドの西ソデ基部に径120×93cm深さ10cmの楕円形のプランを呈する浅い掘り込みがあり、高杯(9)が出土している。 **遺物** カマド内より、長胴甕(1・2・3)、高杯脚部(11)が(3)の破片の下より横位で出土している。床直では丸胴甕(7)・高杯杯部(10)、西壁下ではこも石が集中して検出された。床下では前述した高杯(9)が横位で出土している。(石守)

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第92図 第130 A・B号住居址

第三章 検出された遺構と遺物



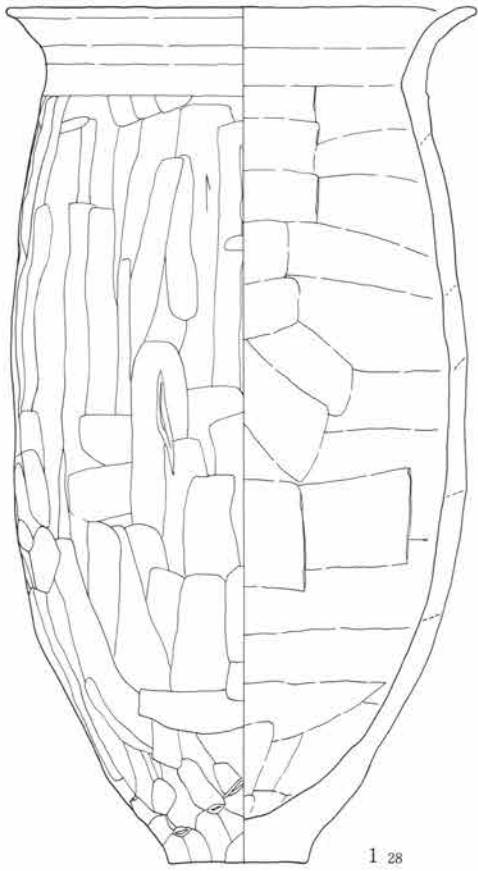
第93図 第130A・B号住居址カマド

第130A・B号住居址

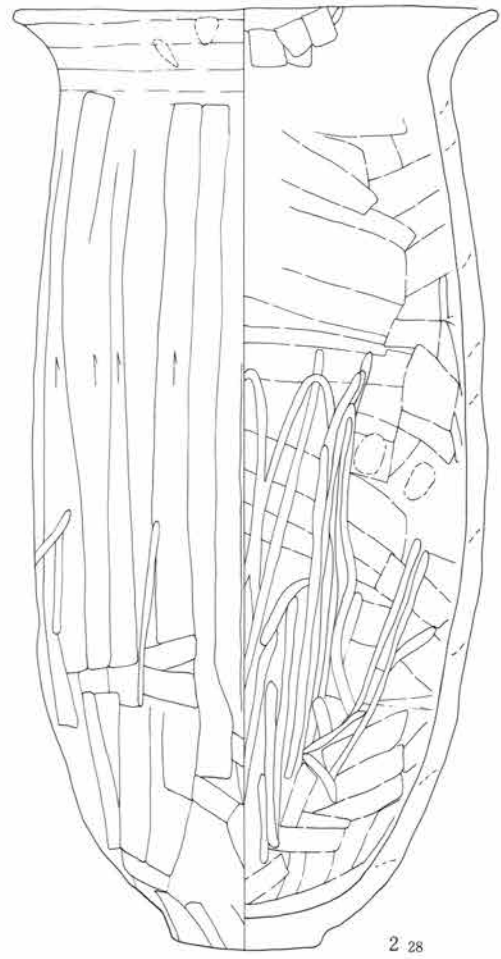
本住居址は重複住居であり、時期的に古い住居址を130A住、これを切る内側の住居址を130B住とした。
位置 68～71D17～20グリッド。南に第120号住居址が近接する。 **方位** 130A住；東北東。130B住；東北東。カマド：北北東。 **形状** 130A住は径590×575cm、壁高64cm、130B住は径323×285cm、壁高96cmを測り、両者とも隅丸方形を呈すが主軸方位に約20°の相違があり、別時期の住居址と考えられる。 **覆土** 130A・130B住はともにF・Pを多く含む土層で覆われ、F・P降下後の住居址である。130A住の壁端床面近くに焼土面が認められる。 **床面** 地床である。 **柱穴** 130A住のものと思われる柱穴が4カ所あり、それぞれP₁径30×28cm深さ54cm、P₂径22×17cm深さ52cm、P₃径28×35cm、P₄径47×40cmを測る。P₃とP₄は130B住内にあり、深さは現状でP₃50cm、P₄40cmを測るが130A住床面レベルよりの推定値はP₃75cm、P₄60cmである。P₂の西には径50cm深さ20cmを測る不整形の土坑がある。130B住の柱穴は認められない。 **貯蔵穴** カマド南側にある。北側が130B住に切られて不明であるが幅40cm長さ60cm以上深さ27cmを測る。楕円形のプランを呈すると思われる。 **カマド** 130A住東壁に幅72cm奥行き82cmに掘り込んで作り出している。遺存状態が悪いため130A・B住のどちらに帰属するかは不明であるが、130B住の床面に焼土が散っていたことから、130B住の可能性が高い。ソデは北側で幅35cm長さ40cm、南側で幅45cm長さ65cmで僅かに基部が残存する。煙道は平面的に長さ40cmを測る。 **遺物** 出土量は少なく、覆土中の遺物を図示し得たのみである。

(石守)

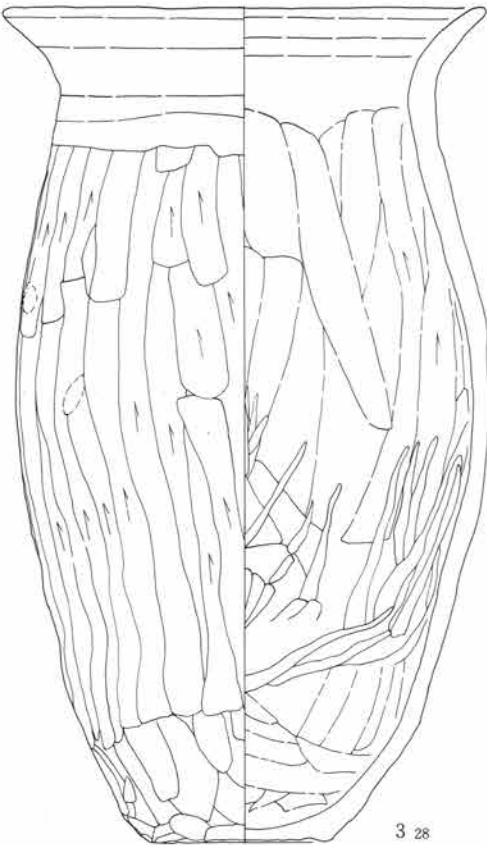
第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



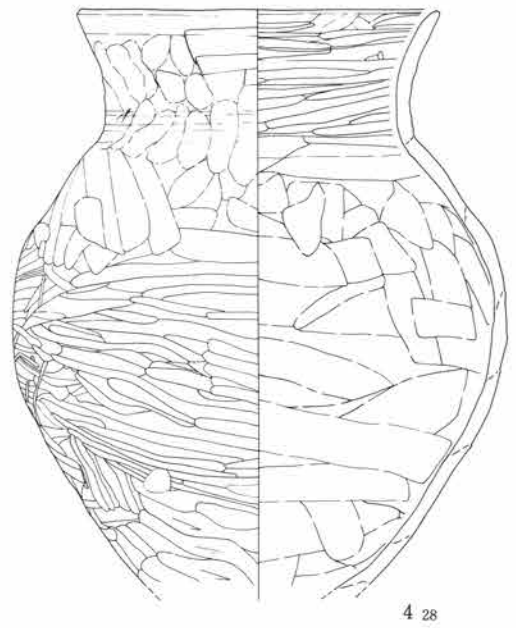
1 28



2 28



3 28

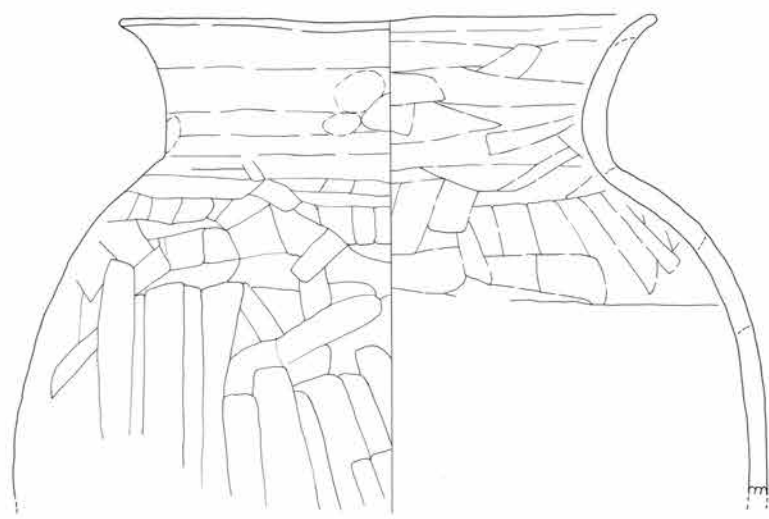
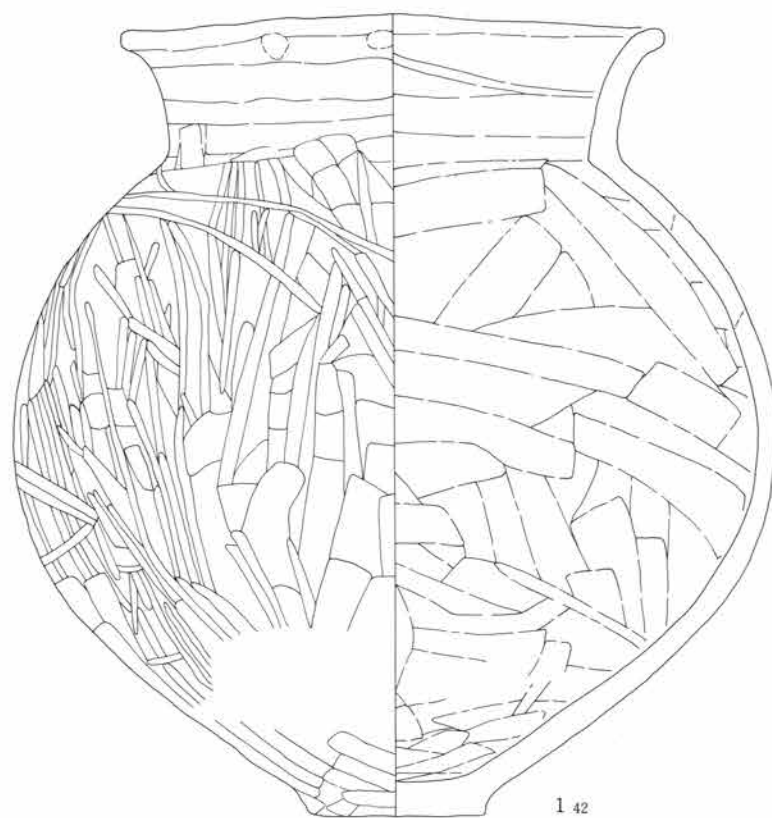
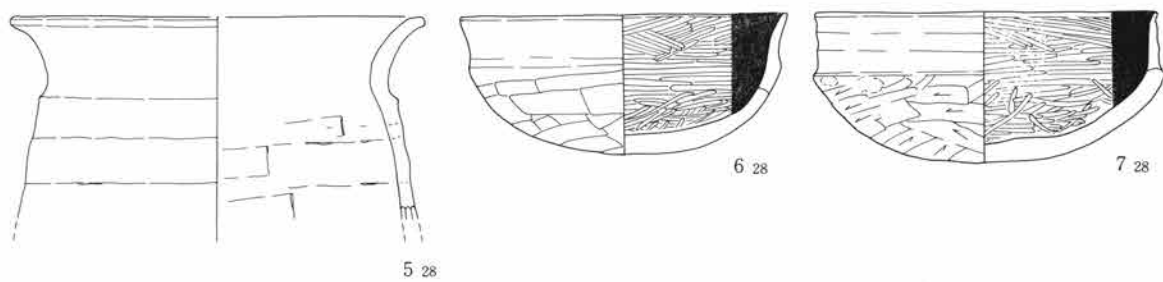


4 28

0 1:3 10cm

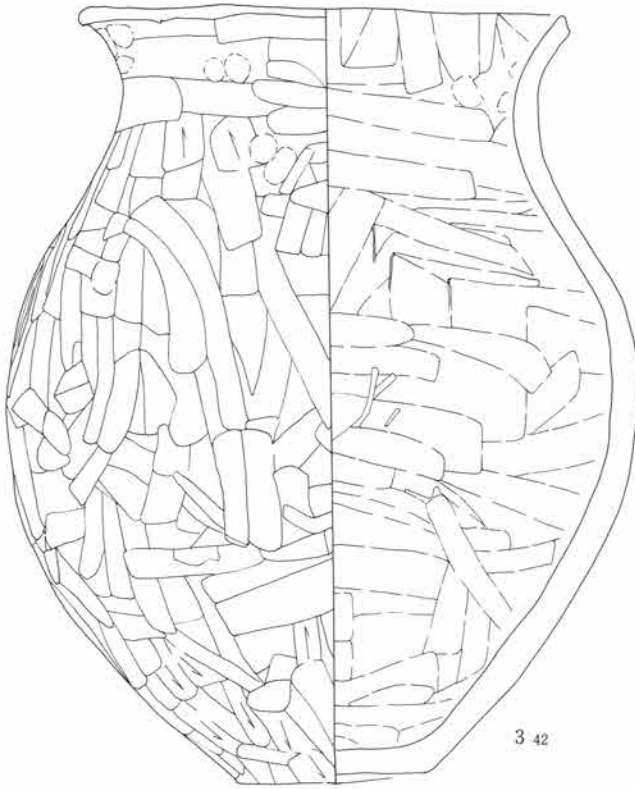
第94図 第28号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

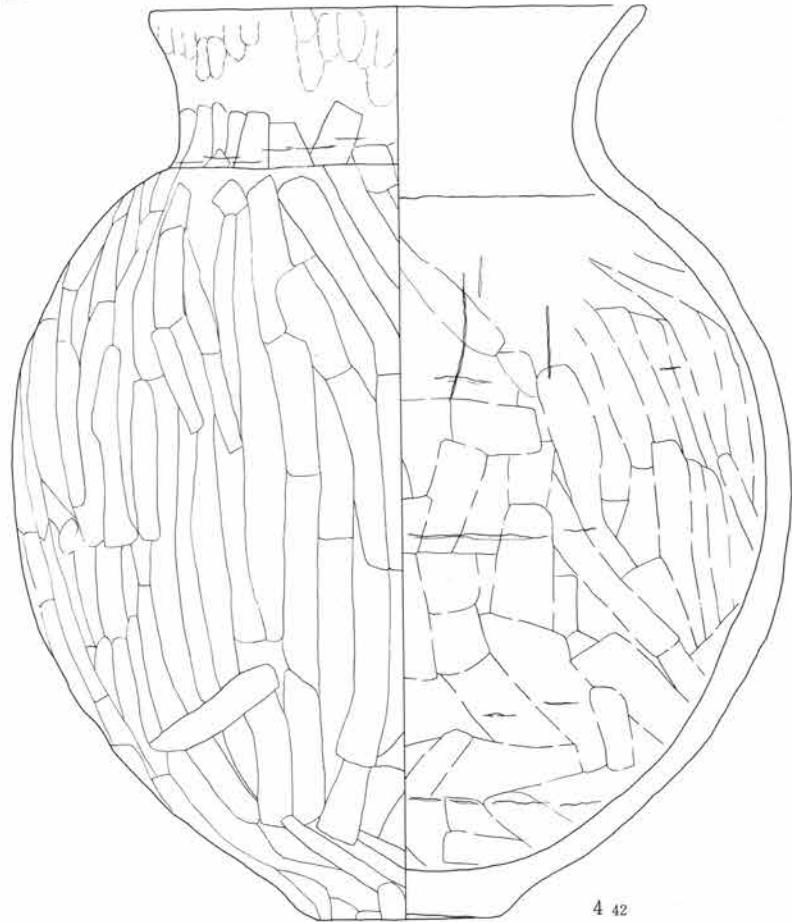


0 1:3 10cm

第95図 第28・42号住居址出土遺物



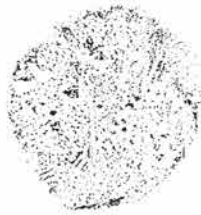
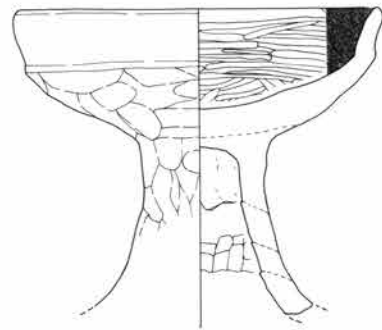
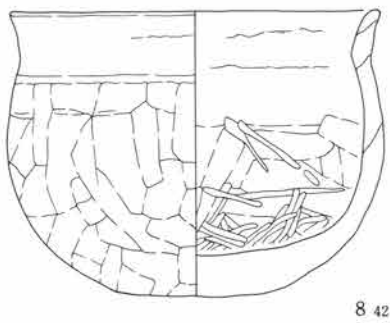
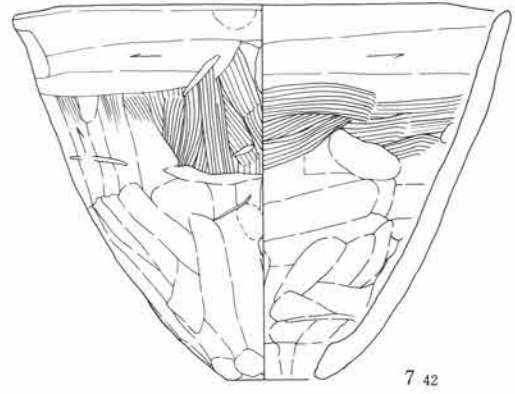
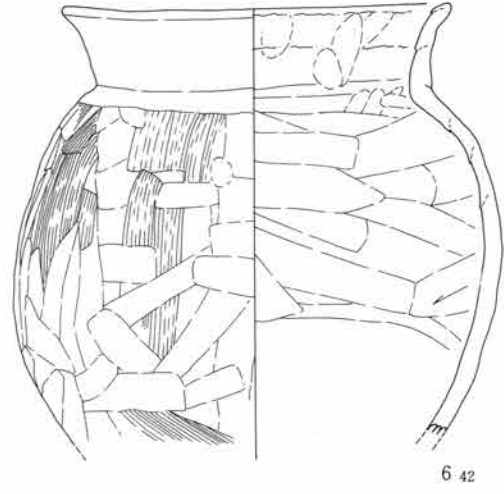
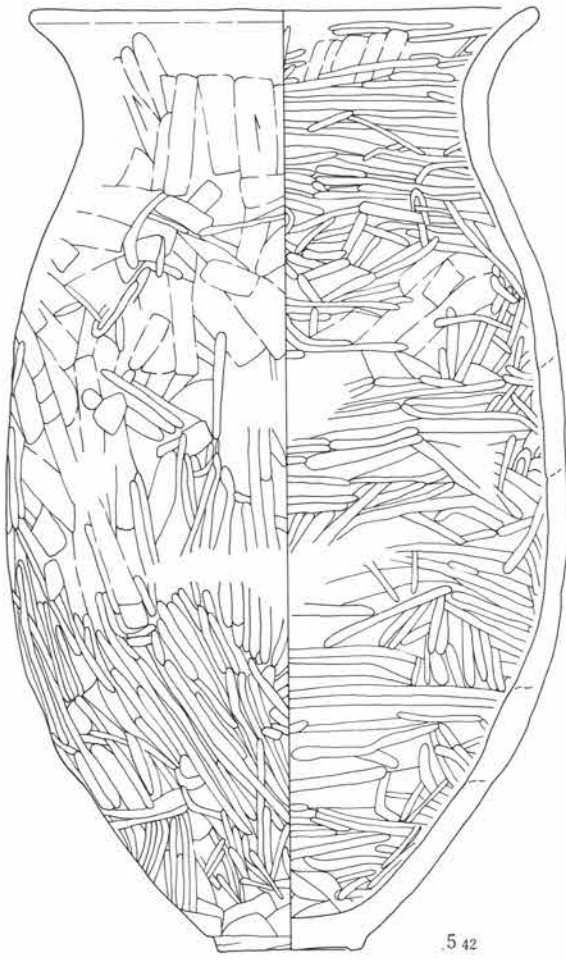
3 42



4 42

0 1:3 10cm

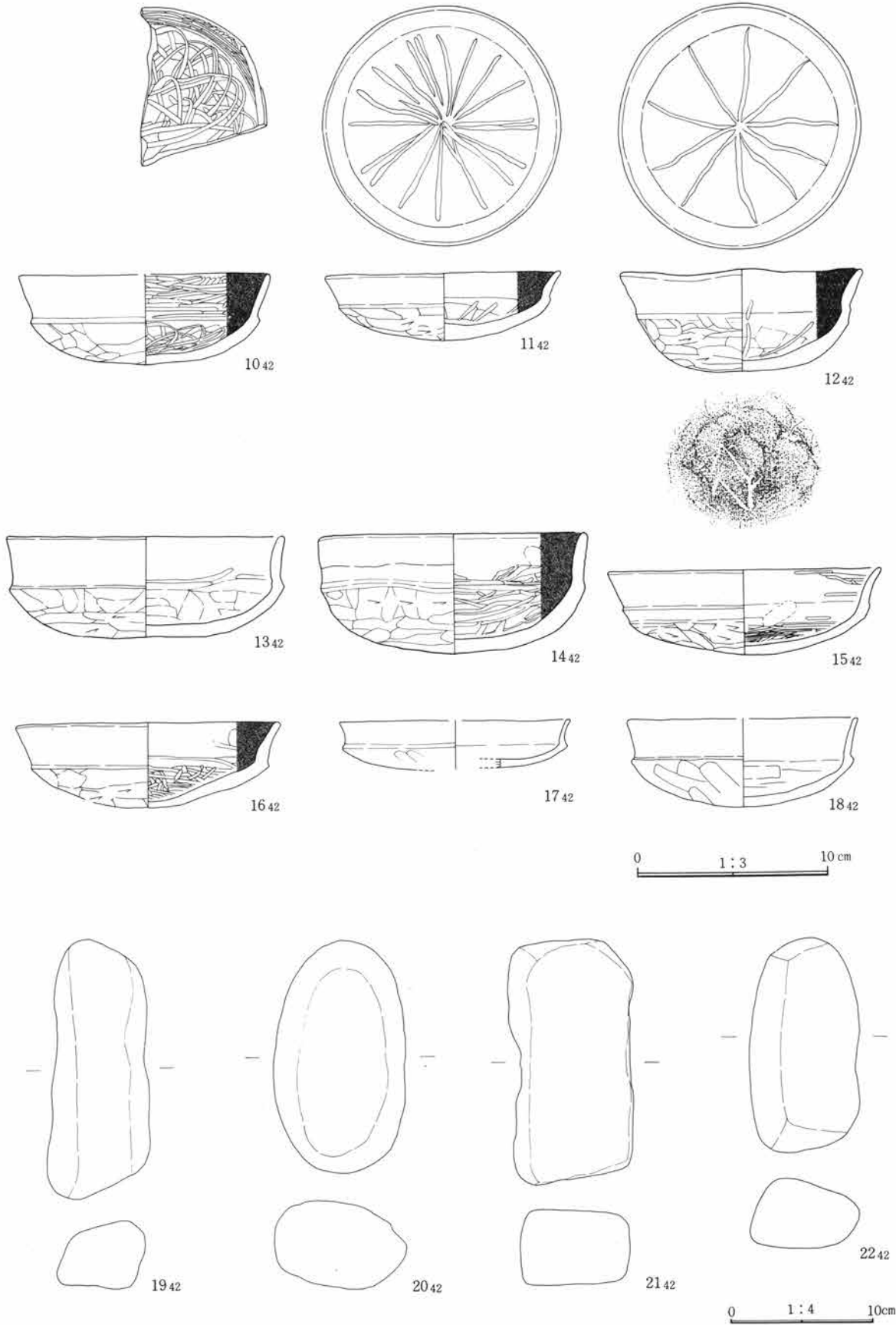
第96図 第42号住居址出土遺物



0 1:3 10cm

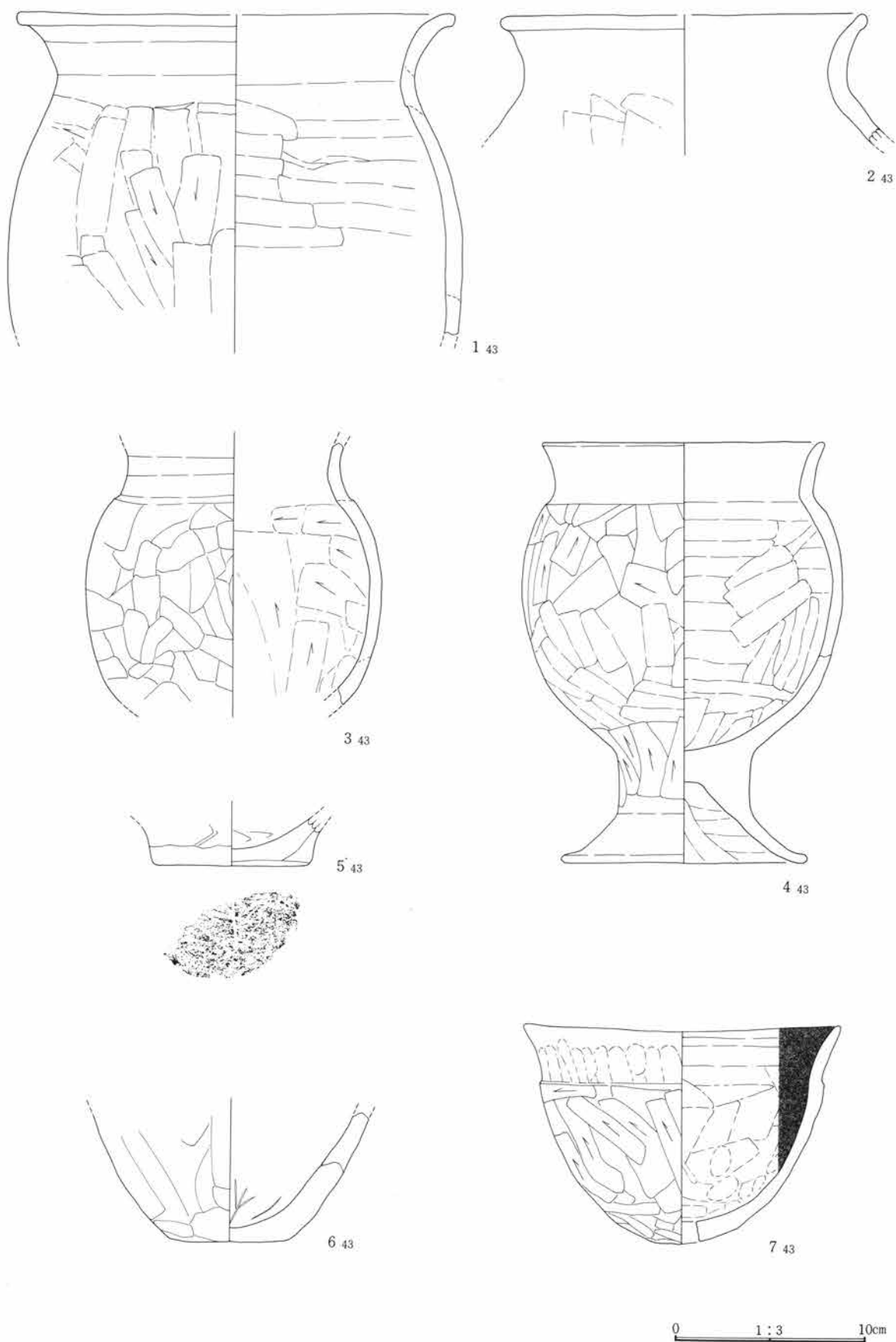
第97図 第42号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



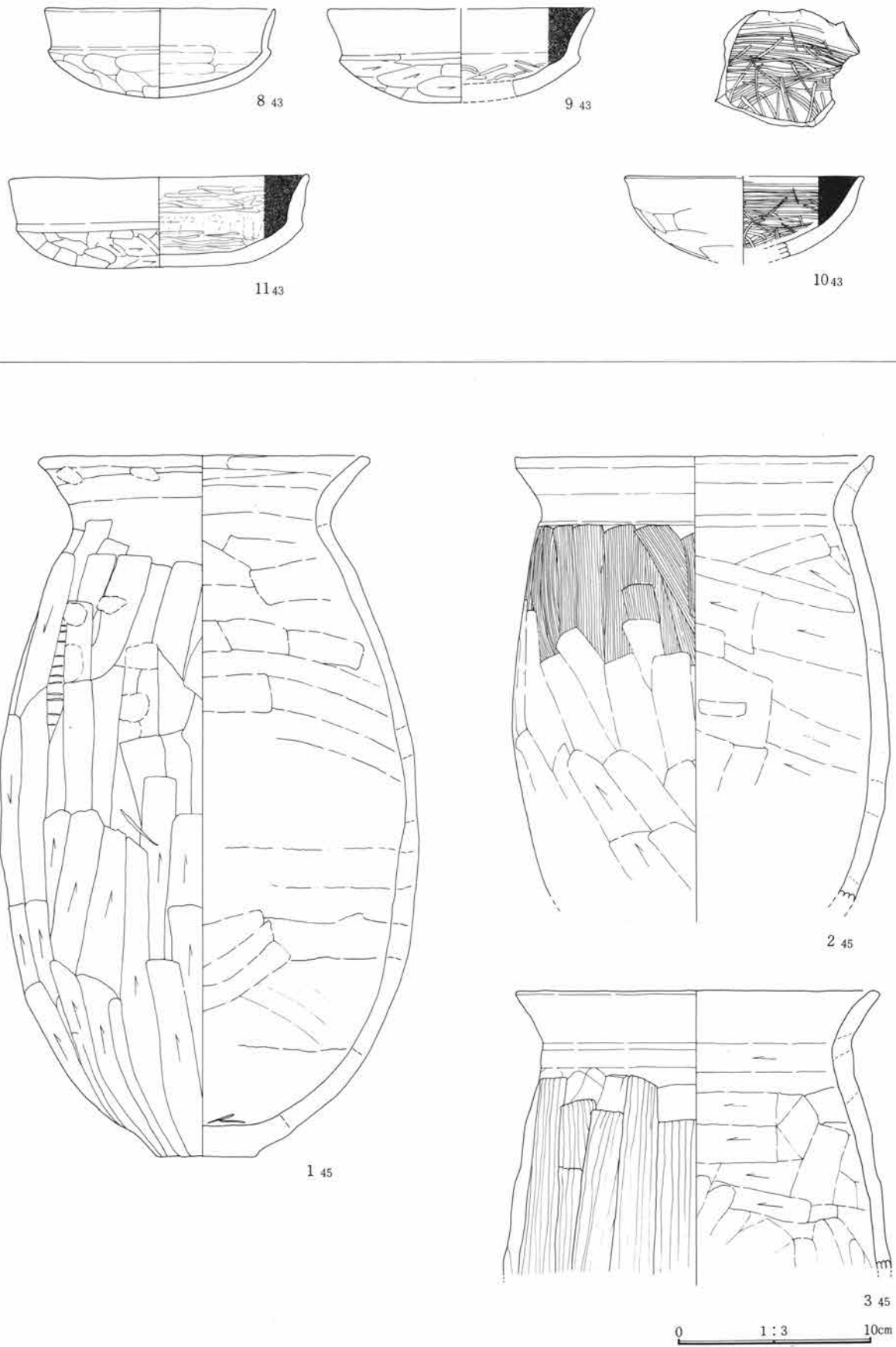
第98図 第42号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

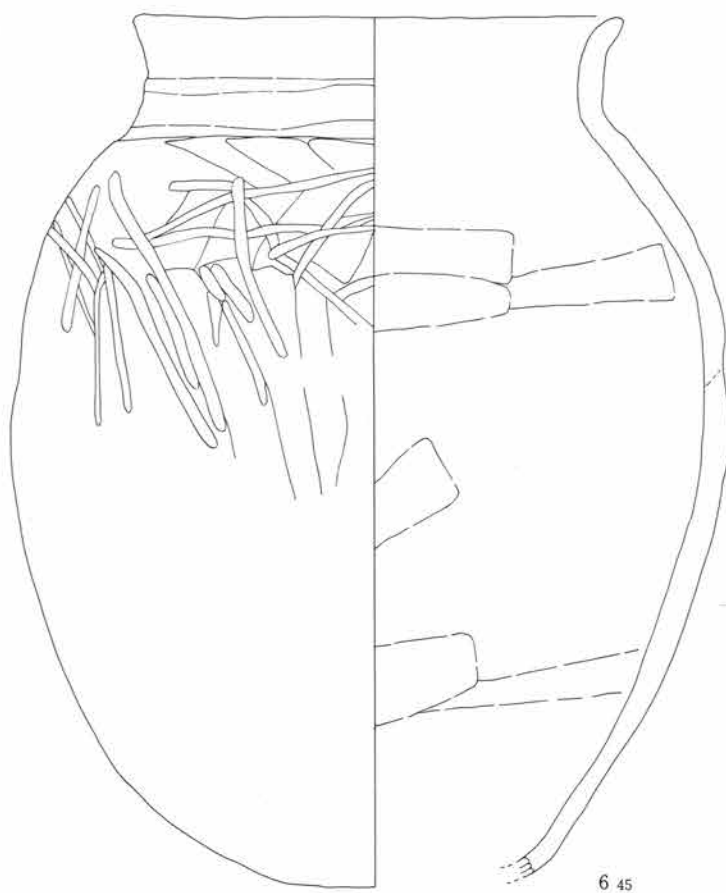
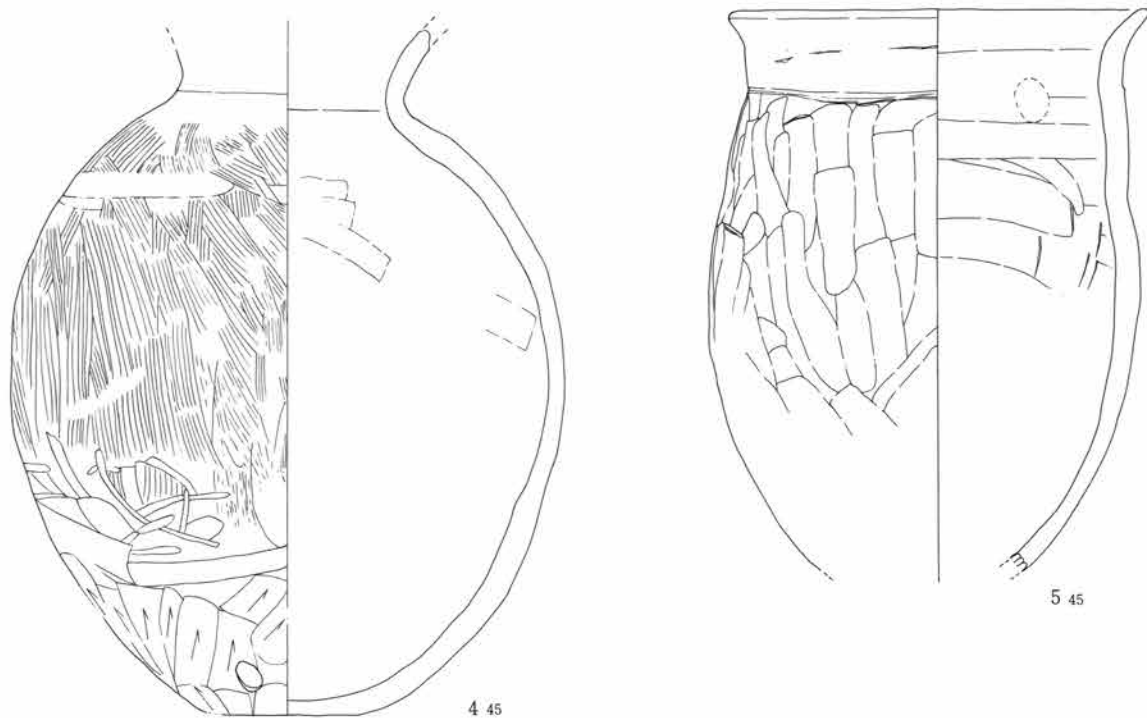


第99図 第43号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



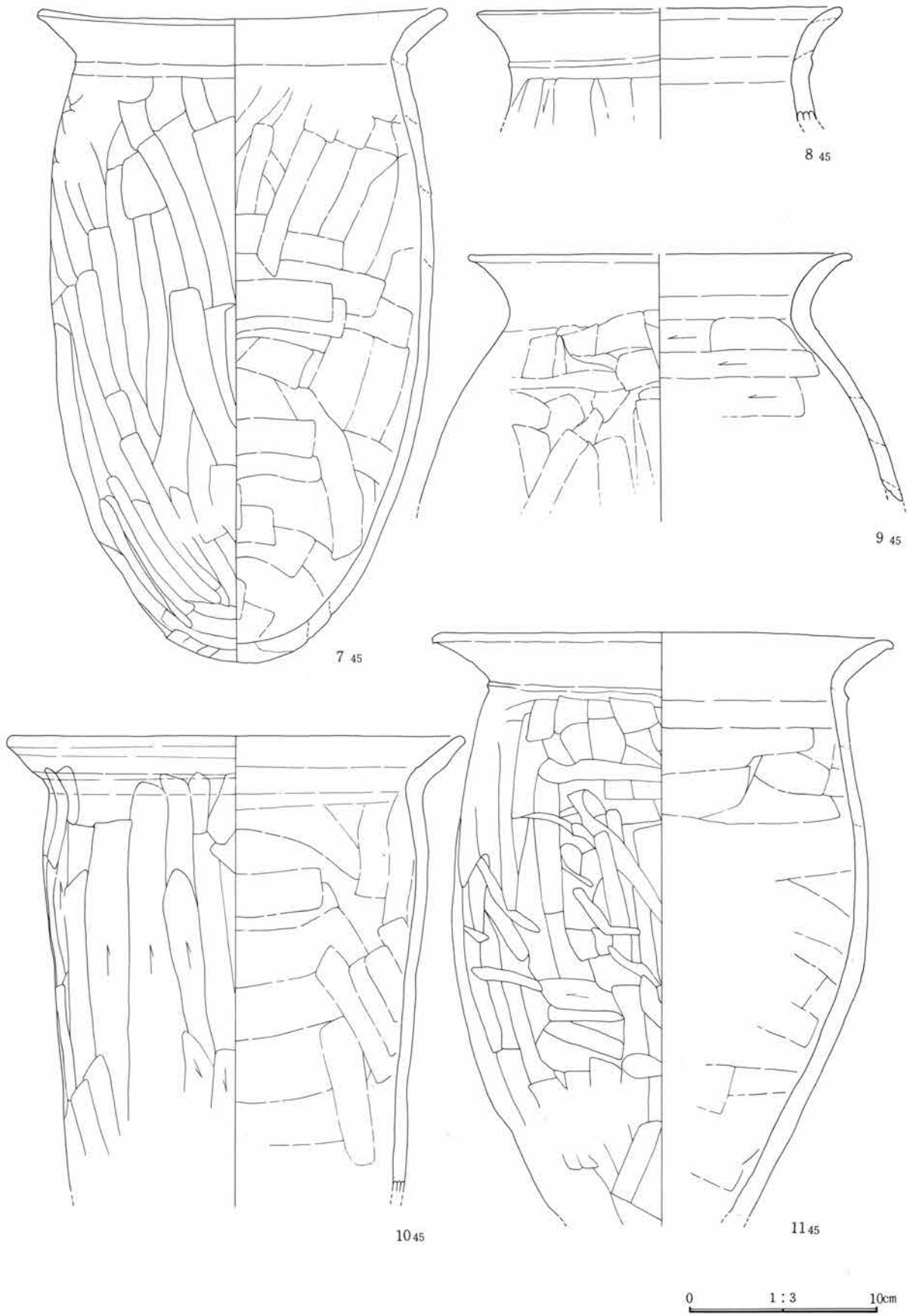
第100図 第43・45号住居址出土遺物



0 1:3 10cm

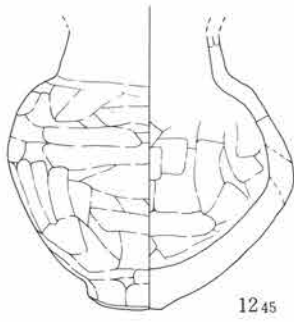
第101図 第45号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

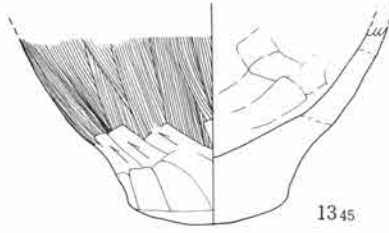


第102図 第45号住居址出土遺物

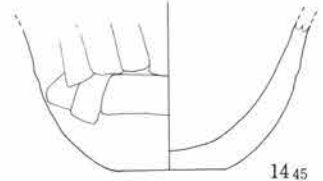
第III章 検出された遺構と遺物



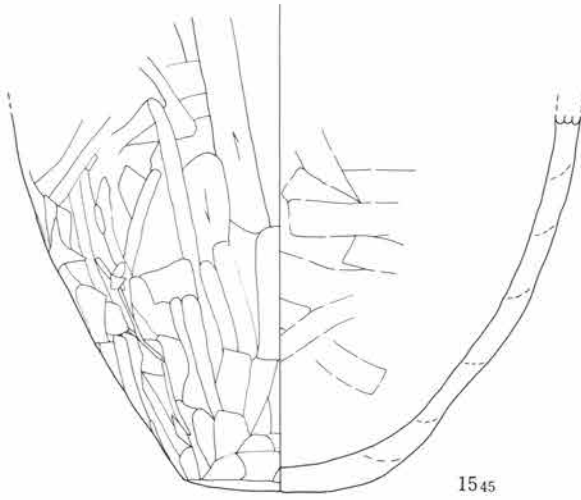
1245



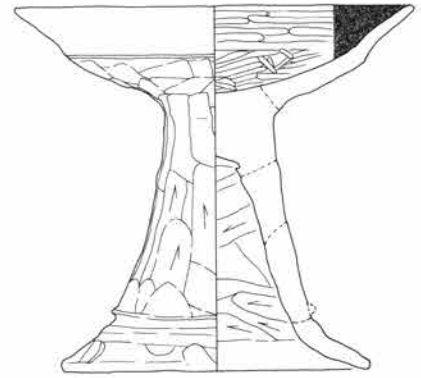
1345



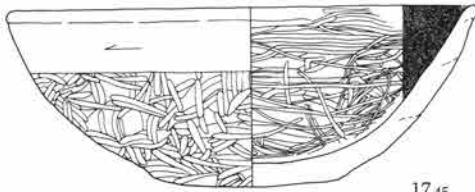
1445



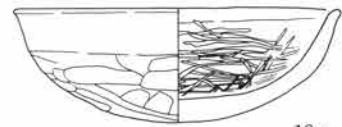
1545



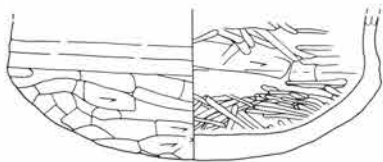
1645



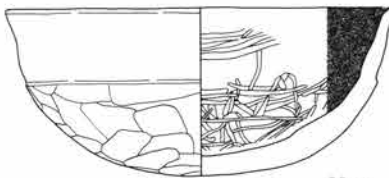
1745



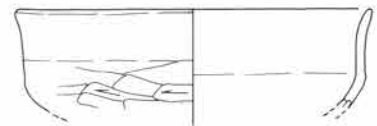
1845



1945



2045

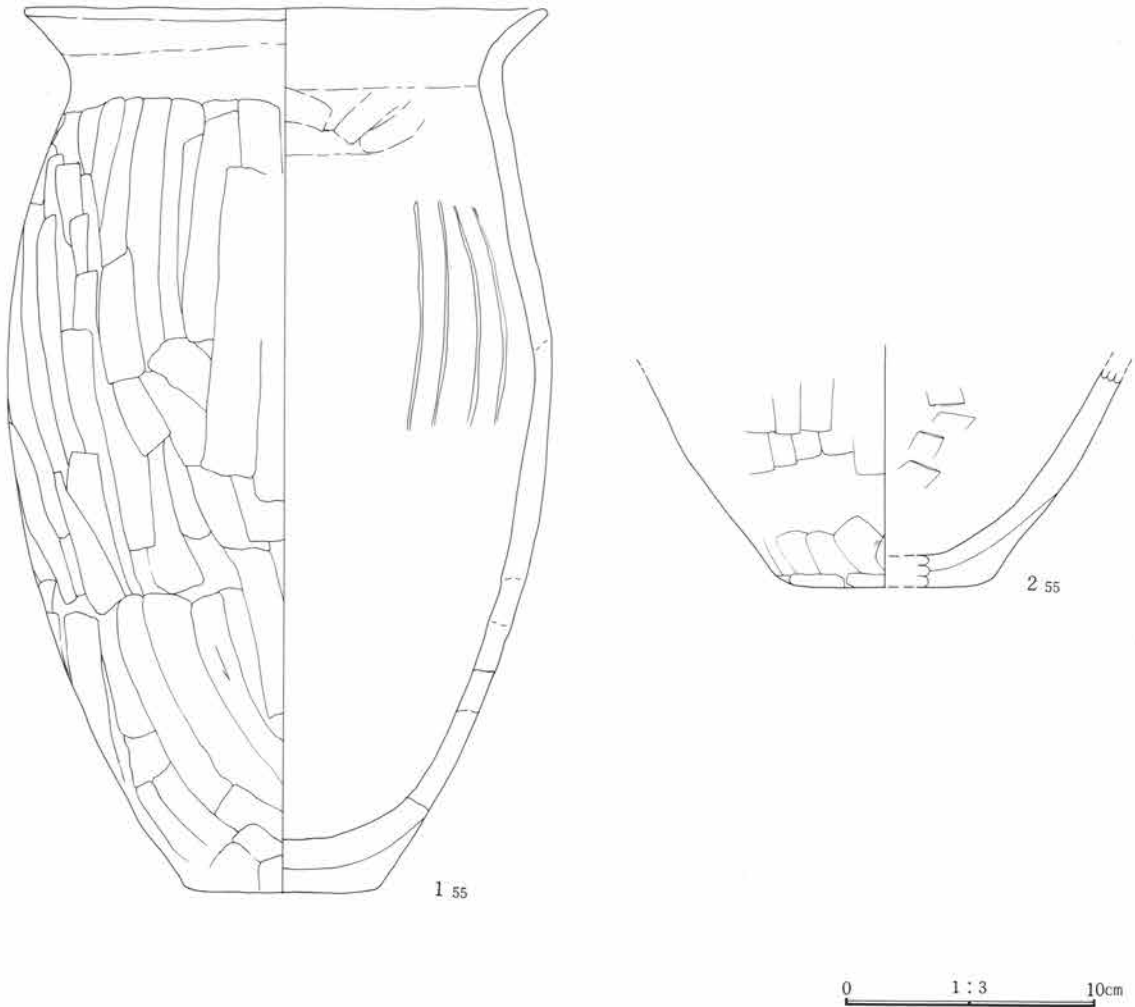
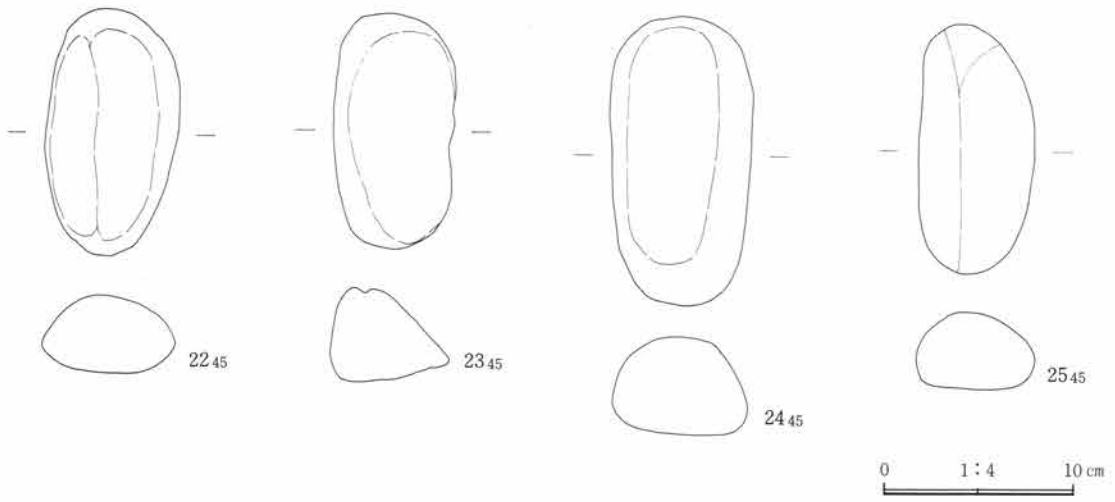


2145

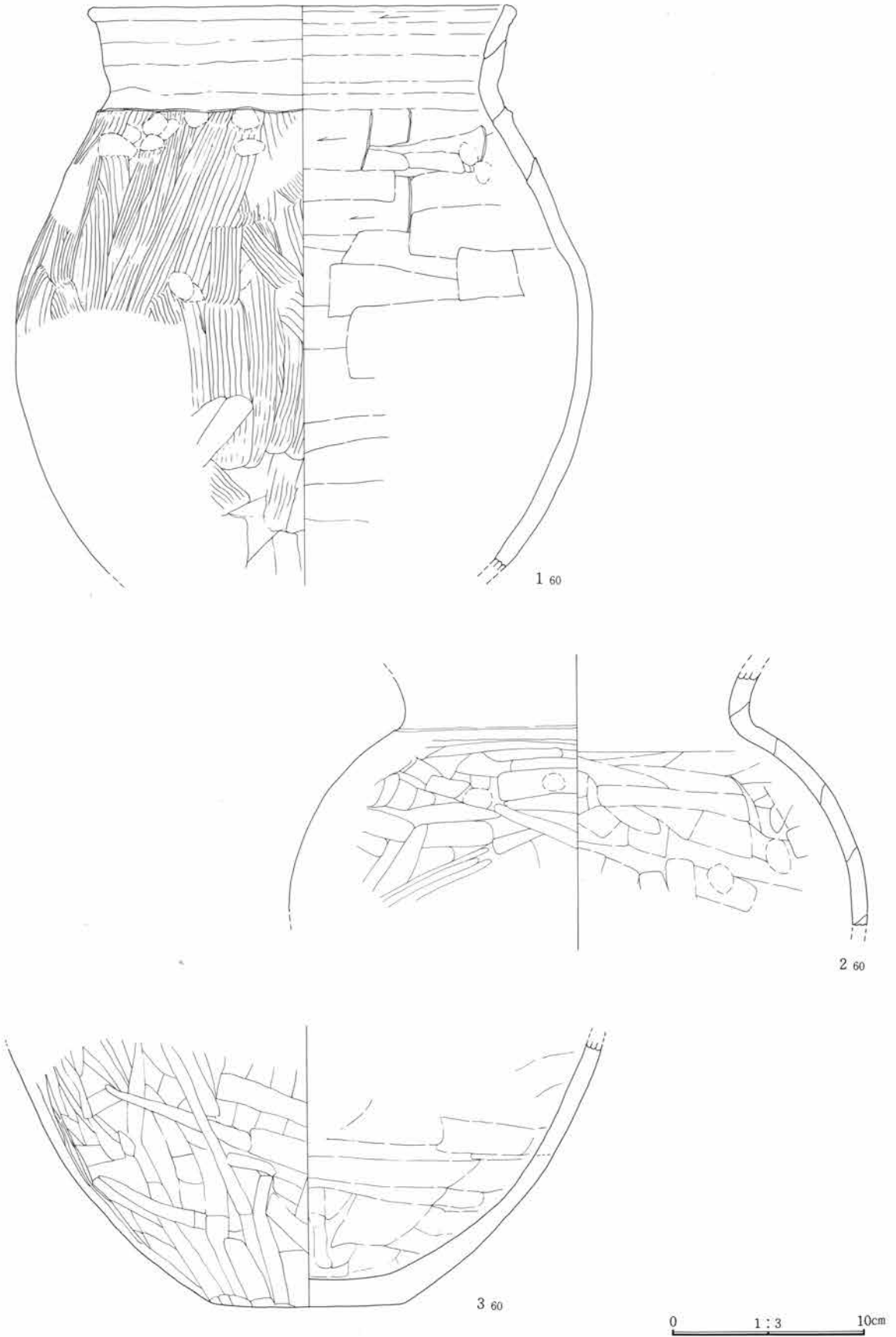
0 1:3 10cm

第103図 第45号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

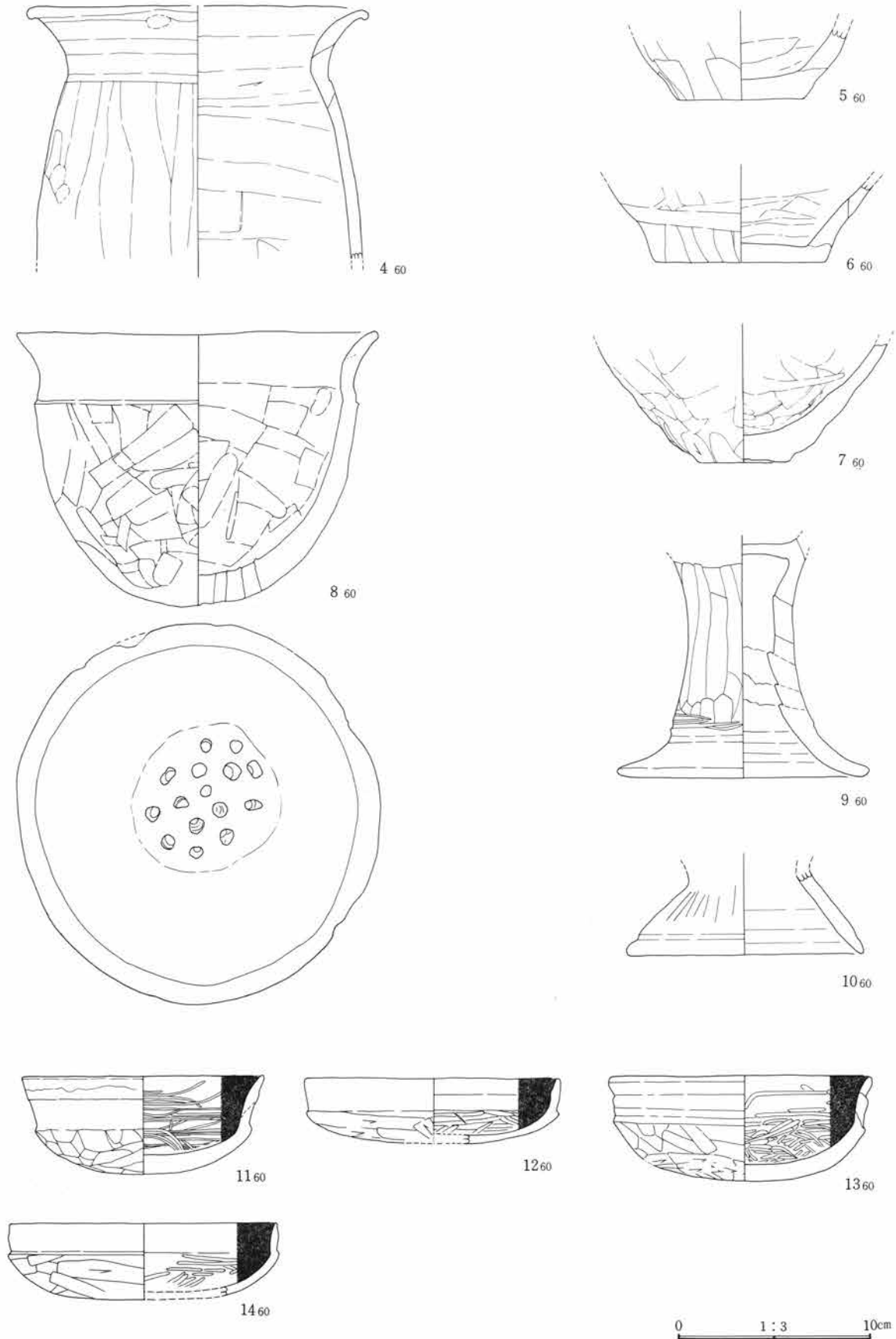


第104図 第45・55号住居址出土遺物



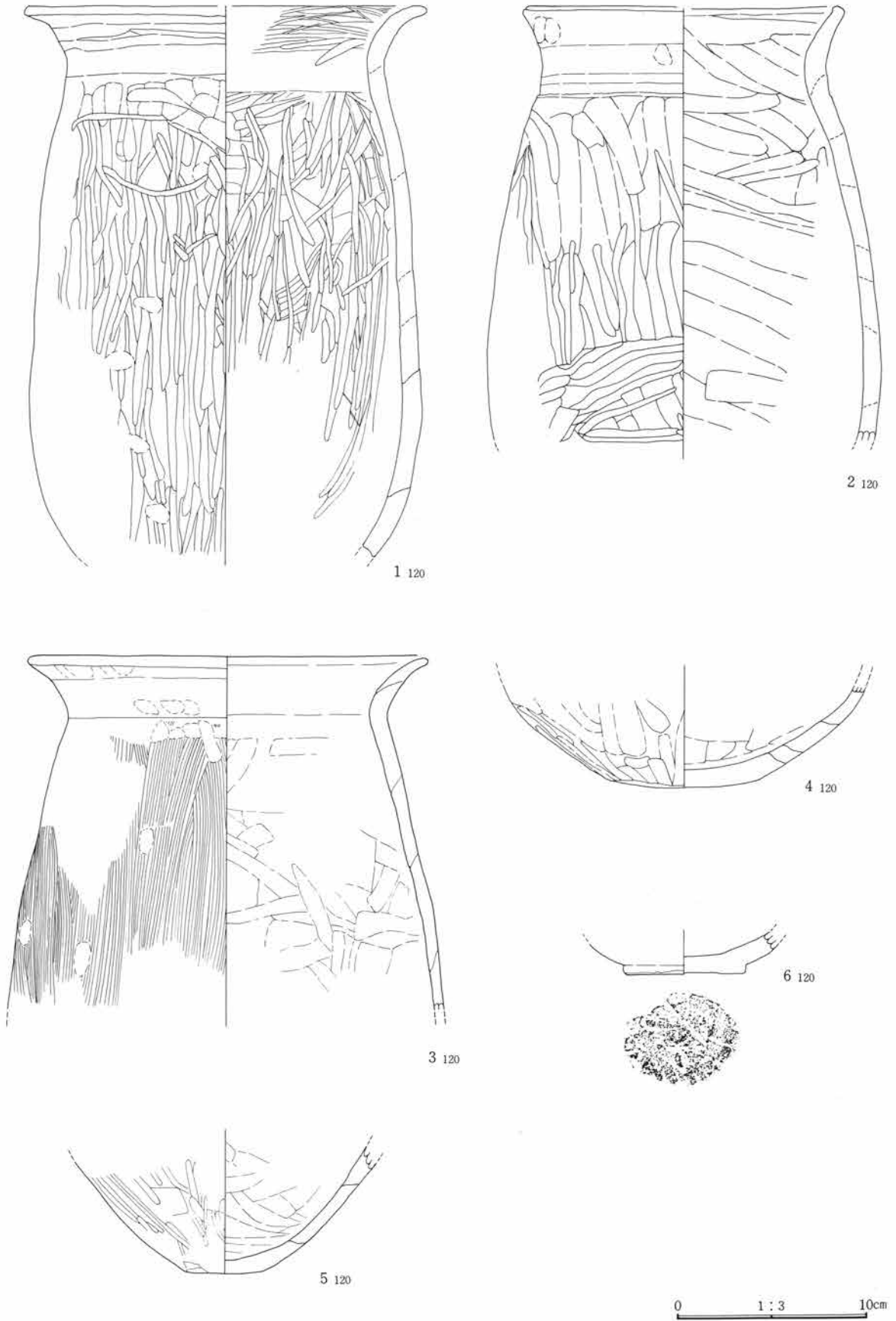
第105図 第60号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



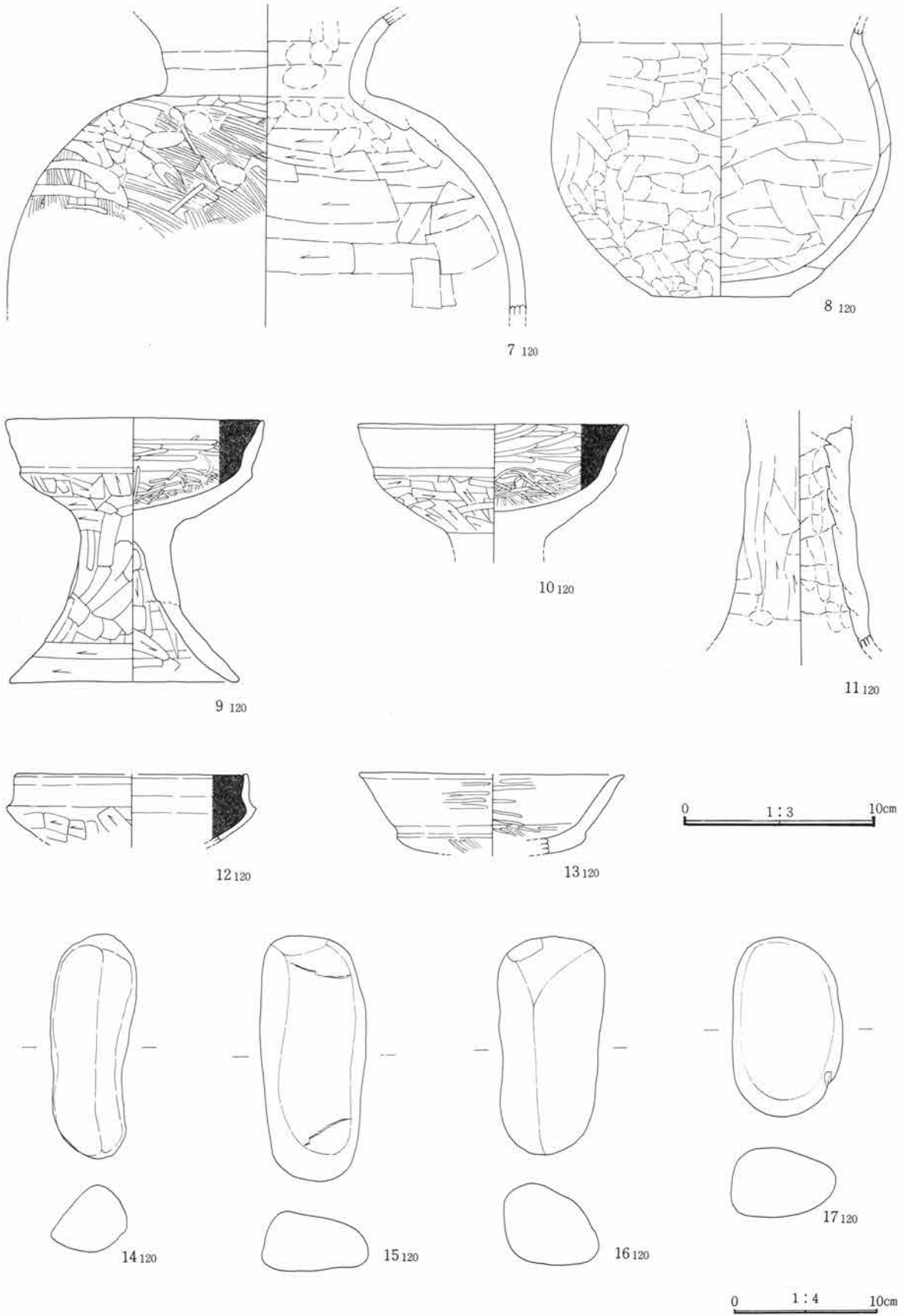
第106図 第60号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



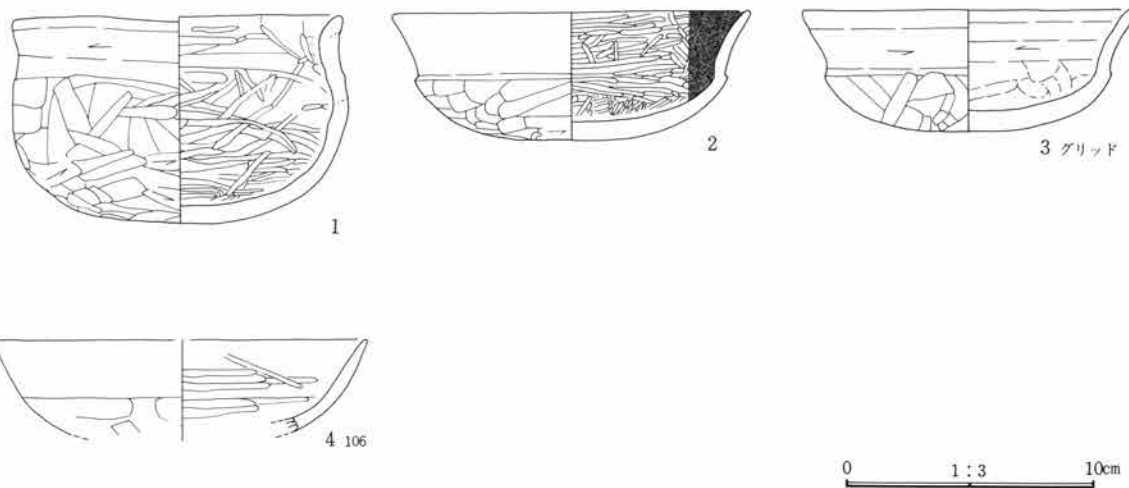
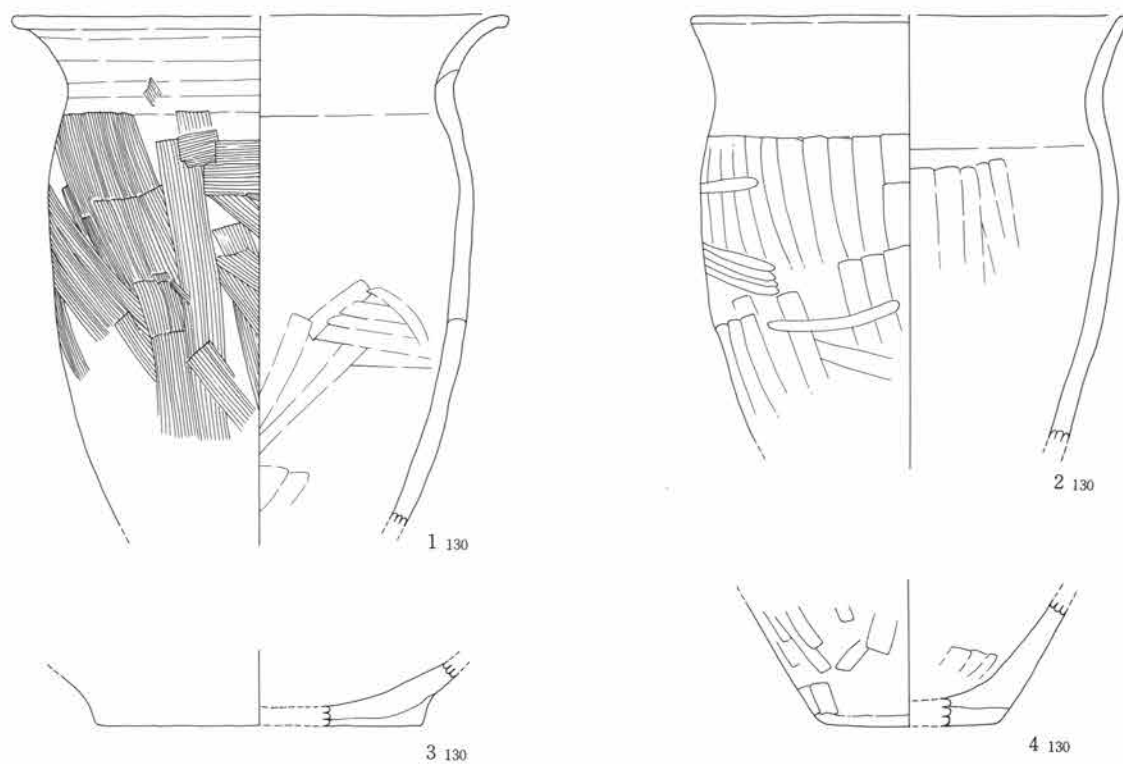
第107図 第120号住居址出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物



第108図 第120号住居址出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



第109図 第130A・B号住居址・遺構外・グリッド出土遺物

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

口径＝口； 数字の単位はすべて
底径＝底； cmで表した。
器高＝高； ()内は推定値であ
裾径＝裾； る。

古墳時代後半の出土遺物観察表

第28号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	長胴甕	口：19.0 底：5.6 高：33.8	カマド南側のソデ材。逆位で出土。	口縁部はほぼ垂直に立ちあがりながら外反する。胴部中央に最大径をもつ。底部は器肉厚く僅かに立ちあがる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。①石英・長石 ②橙色 ③良好	ほぼ完形 口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	長胴甕	口：(19.3) 底：6.0 高：32.3	カマド内覆土中	口縁部やや内湾気味に立ちあがりながら口唇部外反する。腰部～底部丸味を帯び底部は器肉厚く立ち上がる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。 内：口縁部ヨコナデ後部分によりナナメのヘラナデ。胴上半ヘラナデ。下半雑なミガキ。①長石 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
3	長胴甕	口：19.4 底：7.4 高：33.0	カマド北側のソデ材。逆位で出土。	口縁部外反する。胴部中央に最大径。底部はやや上げ底。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。底部ヘラケズリ。底面に木葉痕が残る。①長石・石英 ②橙色 ③良好	完形
4	小型甕	口：(14.5)	カマド埋土中、使用面	口縁部外反する。口唇部僅かに内湾。胴部中央に最大径をもつ。	外：口縁部ヨコ方向の指ナデ。指頭痕。 胴部タテ方向の指ナデ。胴部ケズリ後ヨコ方向のミガキ。腰部ナナメのヘラケズリ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存。底部欠損
5	甕	口：(16.6)	住居址覆土床面	口縁部外反する。肩部ナデによる外稜あり。胴上半の輪積み痕明瞭。	外：口縁部ヨコナデ。胴上半ナデ。 内：口縁部ヨコナデ。胴上半ナデ。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存 胴部以下欠損
6	杯	口：13.4 高：5.5	覆土	口縁部外反する。頸部に稜を有するがやや不明瞭。体部～底部丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：黒色処理。全体にミガキを施す。①長石 ②明褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
7	杯	口：13.1 高：5.8	覆土	口縁部やや内傾し立ち上がる。口唇部外反。頸部に明瞭な稜を残す。底部の中心が落ち込みその周囲が盛りあがる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：黒色処理。全体にミガキを施す。①長石 ②明褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存

第42号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	丸胴甕	口：(21.8) 底：7.0 高：31.8	カマド南側覆土中FP2次堆積層より横位で出土。	口縁部ほぼ垂直に立ちあがりながら口唇部外反する。胴部に丸味を帯び最大径を持つ。底部・底面は扁平で立ちあがる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ後部分的にタテ・ナナメ方向にミガキ。底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部～底部ヨコ方向を中心としたヘラナデ。①長石 ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
2	丸胴甕	口：21.5	住居西南隅部FP2次堆積層出土。	口縁部わずかに外傾し口唇部外反する。胴部は大きく張る丸胴。	外：口縁部ヨコナデ。胴部は主にタテ方向のヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後一部ヘラナデ。胴部タテ方向を中心とするヘラナデ。①少量の長石②橙色③良好	口縁部～胴上半部残存
3	丸胴甕	口：19.8 底：7.8 高：30.9	カマド南側FP2次堆積層より横位で出土。	口縁部外反する。胴部は大きく張る丸胴。最大径を持つ。底部わずかに上げ底を呈す。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半はタテ・ナナメ方向のヘラナデ。下半はナナメ底部に向かってヘラケズリ。一部ヨコ方向のヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後タテ方向のヘラナデ。胴部はヘラナデ。①長石 ②暗褐色 ③良好	完形

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
42住 4	丸 胴 甕	口：20.0 底：7.0 高：36.0	カマド南側 F P 2次堆 積層より横 位で出土。	口縁部外反する。胴部は大きく張る丸胴。最大径を持つ。底部はやや上げ底で器肉が厚い。	外：口縁部ヨコナデ後指ナデ。肩部上より体部にかけてタテ方向のヘラナデ。胴部ヘラナデ。下半部はヘラケズリ。底部ヘラ調整。内：口縁部ナデ。胴部はタテ方向のヘラナデ。底部ヨコ方向のヘラナデ。 ①石英・長石 ②にぶい黄橙色 ③良好	ほぼ完形 口唇部 $\frac{3}{4}$ 欠損
5	長 胴 甕	口：(20.4) 底：5.9 高：35.3	床直上 横位	口縁部外反する。胴部はなだらかに落ちる。底部わずかに上げ底で立ち上がる。	外：口縁部ヨコナデ後下半部はタテ方向のヘラナデ。胴部上半タテ・ナナメのヘラナデ。胴下半タテ・ナナメのミガキ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。胴部ナデ後不定方向のミガキ。①石英・長石 ②暗褐色 ③やや良好	$\frac{3}{4}$ 残存
6	小 型 甕	口：15.0	カマド北側 逆位で出土 床直	口縁部外反する。頸部「く」字状に屈曲し胴部に丸味をもたせる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部はタテ方向のハケ目。下半部ではヨコ・ナナメのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。指頭痕残る。胴部は輪積み痕明瞭でヨコ方向のヘラナデ。下半部にヘラケズリが認められる。 ①少量の長石。②暗褐色 ③良好	胴下半部より 欠損
7	甕	口：20.0 底：4.0 高：14.8	カマド北側 正位で出土 床直	底部より口縁部にかけて直線的に開く。胴部にやや丸味を帯びる。底部4～5cmの孔を1ヶ穿つ。	外：口縁部ヨコナデ。胴部はタテ方向のハケ目。底部は指押えの後ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。底部、穿孔部指押えの後ナデ。	完形
8	小 型 甕	口：14.8 底：4.0 高：11.2	床直	口縁部垂直に立ちあがりながら外反。頸部にナデによる外稜を持ち体部は丸味を持たせる。底部は平坦だがやや不安定。	外：口縁部ヨコナデ。体部不定方向のヘラナデ。底面に木葉痕を残し荒いヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラナデ後一部ミガキ。底部は不定方向のミガキを施す。①長石多い。②にぶい橙色③良好	$\frac{3}{4}$ 残存
9	高 杯	口：(14.8)	床直 逆位で出土	口縁部わずかに外反。頸部に稜を持つ。脚部は直線的に僅かに開き、裾部に広がる。	外：口縁部ヨコナデ。体部はヨコ方向のヘラナデ。脚部はタテ方向のヘラナデ。内：杯部は黒色処理後酸化。口縁部ヨコナデ後ミガキ。体部上半ヨコミガキ。下半はタテ方向主体のミガキ。脚部上位は指ナデ。下位はナデ。脚部輪積み痕。 ①長石・石英 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 、 裾部を欠損
10	杯	口：(13.2) 高：4.7	覆土	口縁部外傾。頸部明瞭な外稜を持つ。体部～底部に丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ後ナデ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ後ヨコ方向主体のミガキ。体部～底部ナデ後ミガキによる暗文を施す。 ①長石・少量の雲母②にぶい褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存
11	杯	口：12.4 高：4.5	覆土	口縁部外反。頸部明瞭な外稜を持つ。底部やや扁平。内面中央で若干肥厚する。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ後一部ナデ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ後ミガキによる放射状の暗文を施す。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	$\frac{3}{4}$ 残存
12	杯	口：12.6 高：5.3	床直	口縁部外反。頸部に外稜を持つ。体部丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ後一部ナデ。底部に木葉痕残りヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ。体部ナデ後ミガキによる放射状暗文を施す。①長石 ②橙色 ③良好	完形

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
42 13	杯	口：(14.4) 高： 5.2	覆土	口縁部垂直に立ちあがり上位で外反。頸部に外稜を持つ。体部は丸味を帯び底部は平坦。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。①やや粗、長石・石英 ②にぶい橙色 ③やや良好	1/4残存
14	杯	口：14.0 高： 6.2	貯蔵穴内覆土	口縁部垂直に立ちあがる。頸部の外稜はやや不明瞭。体部～底部にかけて丸味を帯びる。器肉は厚い。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリの後ナデ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ。体部～底部ヨコナデ。ナデの後不定方向のミガキ。①長石 ②明黄褐色 ③良好	3/4残存
15	杯	口：14.3 高： 4.4	カマド北ソデ上より出土	口縁部外反。頸部に幅のある外稜を持つ。体～底部は全体にやや扁平だが丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部～底部ナデ後ヨコ・ナナメのミガキ。①雲母・石英 ②橙色 ③良好	1/4残存
16	杯	口：13.8 高： 4.4	カマド北側床直、正位で出土	口縁部外反。頸部に外稜。体部～底部は全体にやや扁平だが丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ後一部ヨコミガキ。体部～底部ナデの後不定方向のミガキ。①長石 ②橙色 ③良好	3/4残存
17	杯	口：(12.0)	貯蔵穴内覆土より出土	口縁部外反。頸部の外稜はやや不明瞭。体部はやや丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部はナデ。①少量の石英 ②橙色 ③良好	1/4残存
18	杯	口：(12.3)	覆土	口縁部外反。頸部に外稜を持ち、体部～底部はやや扁平になるが丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部はヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部はナデ。①長石 ②橙色 ③良好	1/4残存
19	こも石	重量 1,030g	床直	安山岩製		
20	こも石	重量 1,310g	床直	花崗岩製		
21	こも石	重量 1,300g	床直	熔結凝灰岩製		
22	こも石	重量 910g	床直	凝灰岩製		

第43号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	甕	口：(23.0)	床直	口縁部中位より大きく外反する。胴部やや丸味を持ちゆるやかに落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラナデ。外器面は荒れている。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向の強いヘラナデ。①長石・石英 ②黄褐色 ③良好	1/4残存
2	甕	口：(19.2)	床直	口縁部中位より大きく外反する。口唇部には丸味を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。①石英 ②黄褐色 ③良好	口縁部1/4残存
3	小型甕		カマド内覆土	口縁部やや外反する。頸部にナデによる薄い外稜を持つ。胴中央に丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部ケズリのちヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。頸部ヨコ方向のヘラナデ。胴部ナナメ・タテ方向のヘラナデ。①長石多し。②褐色 ③良好	
4	台付甕	口：14.6 高：21.7 裾：12.8	床直	口縁部やや外反する。頸部に薄い外稜を持つ。胴部はふくらみを持たせ、脚部は垂直に立つ。裾部はやや短く「ハ」字状に広がる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ後ナデ。脚部タテのヘラケズリ。裾部ヨコナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ後タテのヘラナデ。底面タテのヘラナデ。裾部はヨコのヘラナデ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	ほぼ完形

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
43住5	甕底部	底：(8.0)	覆土	平底。内面は丸味を帯びる。	外：ヘラナデを主体に外縁を指調整している。底面に木葉痕を残す。内：ヘラナデ。①長石・石英 ②褐色 ③やや軟質	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	甕底部	底：(6.2)	カマド内覆土	平底。なだらかに立ちあがる。内面は丸味を帯びる。	外：胴下半部～底部タテ・ナナメのヘラナデ。底面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。①長石 ②暗褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存 外面煤付着
7	甕	口：16.6 高：11.3	床上。正位	口縁部外反気味に立ち上がる。頸部ナデによる稜を持つ。胴部～穿孔部にかけて丸味を帯びる。穿孔部、幅1.7、長さ3.1cmの孔を穿つ。	外：口縁部ヨコナデ。下半部に指頭痕を残す。体部上半タテ・ナナメのヘラケズリ。下半ヨコ・ナナメのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラナデ。穿孔部は焼成前のヘラによる削り出し。①砂粒多 ②黒色 ③良好	完形 内面黒色処理
8	杯	口：(12.0) 高：4.6	覆土	口縁部外反。頸部に外稜を持ち、体部はやや丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。体部はナデ。①少量の石英 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存 42住-18と同 一器体
9	杯	口：(13.8)	覆土	口縁部外反。頸部に外稜を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。外稜はヘラで調整。体部ヘラケズリ後ナデ。内：黒色処理。口縁～体部ナデ後ていねいなミガキ。①少量の長石 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
10	杯	口：(12.2)	覆土	口唇部やや外反。口縁～体部なだらかに丸味を帯びて落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。体部上半ヘラナデ。下半ヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部ナデ後暗文を施す。①長石 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
11	杯	口：(15.6) 高：4.6	覆土	口縁部やや垂直気味に立ちあがりながら外反。頸部に外稜を持ち体部～底部に丸味を帯びる。器肉やや薄い	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ナデ後ヨコミガキ。頸部指頭痕薄く残る。体部ナデ後ミガキ。①少量の長石 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存

第45号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	長胴甕	口：17.2 底：5.3 高：35.7	カマド東ソデ奥。逆位で出土。	口縁部外反。胴部上半に弱いふくらみを持ち、下半に丸味を持つ。やや下ぶくれの胴部。底部は平坦で立ちあがる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ後タテ方向のヘラナデ。下半はタテのヘラケズリ。底面はヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。輪積み痕明瞭。①石英・長石 ②赤褐色 ③やや良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	小型甕	口：18.2	カマド東ソデ材。正位	口縁部外反。口唇部垂直に立つ。頸部ナデによる稜を持ち、胴中央にややふくらみを持たせる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半タテ方向のハケ目状ナデ。下半ナナメのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ナナメのヘラナデ。下半ヨコ方向のヘラナデ。	胴下半～底部 欠損
3	小型甕	口：(18.6)	床直	口縁部外反。頸部にナデによる稜をもつ。胴部上半やや直線的。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半タテ方向のハケ目状ナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向の強いヘラナデ。①長石 ②黄褐色 ③良好	口縁～胴部上 半 $\frac{1}{2}$ 残存
4	丸胴甕	底：5.6	床直	口縁部外反。胴部にふくらみを持たせ、やや張る。底部直上に11×9mmの穿孔あり。底部平坦。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半はタテのハケ目状ナデ。下半ヨコのヘラナデ後タテのヘラナデ。底面ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコを主体とするヘラナデ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	口唇部欠損

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
45住5	小型甕	口：16.6	床直	口縁部垂直に立ち中位より外反。胴部中央にかけて丸味を持つ。	外：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後タテ方向のヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向の強いヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③やや不良	胴下半より欠損
6	丸胴甕	口：(19.7) 高：(34.5)	カマドソデ上	口縁部垂直に立ちながら口唇部外反。胴部上半に最大径を持ち、やや張り気味にふくらみを持つ。	外：胴下半を中心に磨滅。口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラナデ後不定方向のミガキ。内：剝離部分多し。口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	底部欠損
7	長胴甕	口：(21.8) 底：7.5 高：33.8	カマド内及びカマド南の床直	口縁部外反。頸部にナデによる不明瞭な稜を持つ。胴部上半はやや直線的に落ち下半部に丸味を帯びる。底部は丸味を持つが平底気味で立ち上がる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部はタテ方向のヘラナデ。底面はヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半タテ方向のヘラナデ。下半はヨコのヘラナデ。①長石・長石 ②橙色 ③やや良	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
8	甕 口縁部	口：19.5	覆土	口縁部中位より外反。ナデによる稜をもつ。	外：口縁部ヨコナデ。肩部タテ方向のヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。①長石多 ②にぶい黄褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
9	丸胴甕	口：(20.4)	覆土	口縁部外反。頸部～胴部上半ならかにふくらむ。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半不定方向ヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ後ヘラナデ。胴部上半ヨコ方向のヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい黄褐色 ③やや軟	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
10	長胴甕	口：24.4	床直	口縁部強く外反。胴部上半に僅かなふくらみをもたせほぼ直線的に落ちる。	外：全面磨滅部多し。口縁部ヨコナデ。下位は指頭による調整。胴部タテ方向のヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナメのヘラナデ。①長石・石英、やや粗 ②黄褐色 ③やや不良	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
11	長胴甕	口：24.4	カマド西ソデ材 逆位	口縁部強く外反。頸部にナデによる外稜を持つ。胴部全体にふくらみを持ち中央に丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半タテ方向のヘラナデ後ヨコの指ナデ。下半タテのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。①長石 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{4}$ 底部欠損
12	小型壺	底：4.0 高：10.0	床直	口縁部やや内傾する。頸部ナデによる稜を持つ。体部球形状を呈す。底部に台を付す。	外：口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコ方向のナデ。下半はタテのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部下半～底部ヘラナデ。①少量の石英 ②褐色 ③やや軟	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 欠損
13	甕 底部	底：6.8	床直	腰部～底部やや球形を呈する。底部は丸底。立ち上がり部を持つ。	外：腰部タテ方向のハケ目状ナデ。底部付近ヘラケズリ。底面ナデ。内：不定方向ナデ。①長石・石英 ②橙色 ③良好	底部のみ残存
14	甕 底部	底：4.5	覆土	腰部～底部丸味を帯びる。平底で立ち上がりを持たない。	外：全体的に磨滅。おそらくナデ。底面に木葉痕残る。内：全体的に磨滅。ナデか？ ①粗、長石多 ②橙色 ③やや軟	底部のみ残存
15	甕	底：7.4	覆土	腰部～底部ほぼ直線的に落ちる。底面はやや丸味を帯びる平底。	外：腰部タテ方向のヘラケズリ後一部に不定方向のミガキを施す。底部上はケズリ後ナデ。底面はヘラケズリ。内：腰部ヨコ方向のヘラナデ。底部ナデ。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	腰～底部残存

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
45住16	高杯	口：16.0 底：12.2 高：14.5	脚部はカマド内正位で杯部カマド覆土、住居覆土出土。	杯部は全体的に扁平。口縁部は外反し頸部に薄い外稜を持つ。体部は丸味を帯び直線的に脚部に落ちる。脚部はなだらかに開き、裾部との接合部に段を持つ。裾部は鋭角に開き端部は直に切られる。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。脚部タテ方向のヘラケズリ。下位ではナデ。裾部ヨコナデ。内：杯部は黒色処理だが底面は橙色を呈す。口縁部ナデ後ミガキ。体部はていねいなミガキ。脚部ヘラケズリ。裾部はヨコナデ。①長石多 ②橙色 ③良好	杯部 $\frac{1}{4}$ 残存
17	椀	口：18.9 底：7.5 高：7.1	カマド東床直 正位	口縁～体部丸味を帯びて落ちる。底部は平底で薄い立ち上がりを持つ。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラケズリ後不定方向のミガキ。底部ヘラケズリ。内：黒色処理。全体的にていねいなミガキを施す。①長石・石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
18	杯	口：(13.1) 高：4.5	カマド東床直 正位	口縁部外反する。口縁～体部丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部ていねいなヘラナデ。内：口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部不定方向のミガキ。①少量の長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
19	杯	口：(14.6)	床面で正位	口縁部僅かに内傾する。頸部の稜は不明瞭。体部は丸味を帯びやや扁平。大型である。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラナデ。内：口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部不定方向のミガキ。①長石・石英 ②橙色 ③やや軟	口唇部欠損
20	杯	口：15.6 高：6.6	床直カマド	口縁部外反。頸部の稜は不明瞭。体部は丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部不定方向のミガキ。①長石・石英 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存 カマド出土の破片は内面橙色。
21	杯	口：14.2	覆土	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり中位よりやや外反する。頸部の稜は無い。頸部～体部は丸味を帯びる。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラケズリ後ナデ。内：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。①長石・石英 ②にぶい黄褐色 ③やや軟	$\frac{1}{4}$ 残存
22	こも石	重量 580g	床直	安山岩製		
23	こも石	重量 530g	床直	安山岩製		
24	こも石	重量 890g	床直	花崗岩製		
25	こも石	重量 500g	床直	石英はん岩製		

第55号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	長胴甕	口：21.2 底：7.8 高：34.8	カマド	口縁部やや垂直に立ち上がり中位で外反する。胴部中央にふくらみをもたせ丸味を帯びながら底部に至る。平底の底部で立ちあがりを持たない。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラナデ。底部上ケズリ後タテのヘラナデ。底面ナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコのヘラナデ。下半ナデ。①長石・石英 ②明橙色 ③良好	胴部 $\frac{1}{3}$ 欠損
2	甕底部	底：(7.5)	覆土	腰部やや丸味を帯び直線的に底部に至る。底部丸味のある平底。	外：腰部タテ方向のヘラナデ。底部上タテ・ヨコのヘラケズリ後ナデ。底面ヘラケズリ。内：腰部～底部ヘラナデ。一部にヘラの当りが認められる。①長石・石英 ②暗褐色 ③良好	腰部～底部 $\frac{1}{2}$ 残存

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

第60号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	丸胴甕	口：(22.2)	カマド内覆土	口縁部やや外反。口唇部は外傾気味に平坦部を持つ。頸部にナデによる外稜を持つ。胴部中央にふくらみを持たせる。	外；口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のハケ目状ナデ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ。上半部にヘラの当て目残存。①細砂 ②橙色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	丸胴甕		覆土	口縁部外反。胴部上半ふくらみを持たせ胴部中央へ至る。	外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ方向のヘラナデ後雑なミガキ。①長石 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部中位～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	丸胴甕	底：9.8	床直	腰部～底部ふくらみを大きく持たせ丸味を帯びて底部に至る。平底で立ちあがりを持たない。	外；腰部タテ方向のヘラナデ後一部ヨコ・ナナメのナデ。底部ヘラケズリ。内；腰部～底部ヨコ方向を主体とするヘラナデ。①長石・石英 ②黄褐色 ③良好	腰部～底部残存
4	甕	口：(17.7)	覆土	口縁部外反。口唇部丸味を持つ。頸部ナデによる稜。胴部上半直線的に落ちる。	外；口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラナデ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①長石 ②橙色 ③良好	口縁～胴上半 $\frac{1}{2}$ 残存
5	甕 底部	底：6.8	覆土	平底。腰部にやや丸味を帯びて立ちあがる。	外；腰部タテ方向のヘラナデ。底面ナデ。内；腰～底部ヨコ方向のヘラナデ。①少量の長石 ②にぶい橙色 ③良好	腰～底部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	甕 底部	底：8.6	覆土	平底。腰部にかけて外反し立ちあがる。	外；腰部タテ方向のヘラナデ後ヨコナデ。底面ナデ。内；腰～底部ヘラナデ。①長石・石英・雲母 ②暗褐色 ③良好	底部完形
7	甕 底部	底：(4.8)	床直	平底。腰部～底部やや丸味を帯びて立ちあがる。	外；器面は荒れている。腰部ヘラナデ。底面ヘラケズリ。内；腰～底部ヨコ方向を中心としたナデ。①長石②褐色③良好	腰～底部 $\frac{1}{2}$ 残存
8	甕	口：18.8 高：14.0	床直	口縁部中位より外反。頸部にナデによる外稜あり。体部～穿孔部球形を呈す。穿孔部は径5～9mmの不定形な小孔が15ヶ穿たれる。	外；磨滅している。口縁部ヨコナデ。体部不定方向の弱いヘラナデ。底部ナデ後外面より穿孔。内；口縁部ヨコナデ。体部ヨコ・ナナメのヘラナデ。①長石・少量の石英 ②暗褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 欠損
9	高脚杯部	裾：13.2	床直	杯部底部やや丸味を持つ。脚部やや内傾し下位で丸味を帯びる。脚部と裾部の接合部に外稜を持つ。裾部は外反し端部で更に広がる。	外；磨滅している。脚部タテ方向のヘラケズリ。下位の外稜は沈線で描出される。裾部ヨコナデ。内；脚部巻き上げ痕を残す。裾部ヨコナデ。①少量の長石 ②にぶい橙色 ③やや軟	脚部のみ残存
10	須恵器 高脚杯部	裾：9.8	覆土	裾部「ハ」字状に開き、下位に沈線が1条廻る。欠損部に三方透しの痕跡が認められる。	外；裾部ヨコナデ後タテ方向のヘラミガキ。内；裾部ヨコナデ。ロクロは右回転。①長石 ②暗灰色 ③堅緻	裾部のみ残存
11	杯	口：(12.6) 高：5.0	床直	口縁部外反。頸部鋭い外稜。体部丸味を持つ。	外；口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内；黒色処理。口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部ナデ後不定方向のミガキ。①細砂 ②橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
12	杯	口：(13.2)	覆土	口縁部はやや短く直立気味に立つ。体部は丸味を持ちやや扁平である。	外；口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内；黒色処理。口縁部ナデ。体部ナデ後いねいなミガキ。①細砂 ②暗褐色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
60住13	杯	口：(13.2) 高：5.4	カマド内覆土	口縁部やや短く直立気味に立つ。頸部に明瞭な外稜を持つ。体部は丸味を帯びやや扁平。	外；口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内；黒色処理。口縁部ヨコナデ。体部ナデ後不定方向のミガキ。①長石 ②暗褐色 ③良好	1/2残存
14	杯	口：(14.0) 高：(3.9)	覆土	口縁部外反。上位・中位にナデによるくびれを有し、頸部に外稜を持つ。体部は丸味を帯びる。	外；口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部ヘラケズリ。内；黒色処理。口縁部ヨコナデ。体部ナデ後不定方向のミガキ。①長石多し ②にぶい橙色 ③良好	口唇部欠損 1/2残存

第120号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	長胴甕	口：(21.2)	カマド	口縁部下位より外反。口唇部内面に平坦面を持つ。胴部は直線的に落ち下半部でふくらみを持つ。	外；口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ナデ後タテ方向のミガキ。内；口縁部ヨコナデ後ミガキ。胴部タテナデ後タテのミガキ。①長石・石英・雲母 ②橙色 ③良好	口縁～腰部1/2残存
2	長胴甕	口：(17.1)	カマド	口縁部やや外反する。口唇部内側に肥厚する。胴部は直線的に落ち下半部でふくらみを持つと思われる。	外；口縁部ヨコナデ。胴部上半はタテ方向のヘラナデ後一部タテのミガキ。下半はタテのヘラナデ後ヨコのミガキ。内；口縁部上半ヨコナデ。下半ヨコ・ナナメのヘラナデ後ヨコナデ。胴部ヨコ主体のヘラナデ。①長石・雲母 ②暗褐色 ③良好	口縁～胴部1/2残存
3	長胴甕	口：(21.0)	床直	口縁部下位より外反。口唇部内面に平坦面を持つ。胴部直線的に落ち下半部でふくらみを持つと思われる。	外；口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のハケ目状ナデ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。①長石 ②浅黄橙色 ③良好	口縁～胴部1/2残存
4	丸胴甕 底部	底：7.8	カマド	腰部～底部ふくらみを持って落ちる。底部は平坦面。	外；腰部～底部タテ方向を主体としたヘラナデ。底部ナデ。内；不定方向のヘラナデ。①砂粒多し ②黄褐色 ③良好	腰部～底部まで残存
5	甕 底部	底：4.0	覆土	腰部～底部やや直線的に落ちる。底部は平坦。	外；腰部～底部ナナメのヘラケズリ後タテ方向を中心とするミガキ。底面ヘラケズリ。内；腰部～底部ヨコ主体のいねいなヘラナデ。①長石 ②暗褐色 ③良好	腰部～底部1/2残存
6	甕	底：6.3	覆土	平底で立ち上がり部を持つ。	外；おそらくナデ。底面に木葉痕。内；ヘラナデ。①長石 ②黄橙色 ③良好	底部1/2残存
7	丸胴甕		床直	口縁部外反する。頸部にナデによる平坦面を持ち、肩部以下大きくふくらむ。	外；口縁部ヨコナデ。胴部ナナメの強いヘラナデを主体とする。内；口縁部ヨコナデ。肩部指押えが廻る。胴部ヨコのヘラナデ。①長石 ②橙色 ③良好	口唇部欠損 口縁部～胴部残存
8	小型甕	底：(7.3)	覆土	頸部～底部ふくらみを持ち球形に近い。底部は平坦。	外；口縁部下端ヨコナデ。胴部ヨコ方向主体の弱いヘラナデ。腰部にタテのヘラナデ加わる。底部ヘラケズリ。内；口縁部下端ヨコナデ。胴部～底部不定方向のヘラナデ。①長石②にぶい橙色③良好	頸部～底部1/2弱残存
9	高杯	口：13.5 裾：11.0 高：13.5	床下土坑	口縁部やや外傾。頸部に外稜を持つ。体部は直線的に落ち、脚部は「ハ」字状に開く。脚部下位より裾部は直線的に開く。脚部はやや短い。	外；口縁部ヨコナデ。杯体部不定方向のヘラケズリ。脚部タテ方向のヘラケズリ。下位ではナデ。内；杯部黒色処理。口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部ヨコを主体とするミガキ。脚部は絞り目後ナデ。裾部ヘラケズリ。端部はヨコナデ。	完形 ①長石②にぶい橙色③良好

第2節 古墳時代後半の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
120住10	高杯部	口：14.0	カマド床直	口縁部やや外傾。頸部やや不明瞭な外稜あり。体部は直線的に落ちる。	外：口縁部ヨコナデ。体部上半はヨコ方向のヘラケズリ。下半はタテのヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部は不定方向のていねいなミガキ。①長石 ②橙色 ③良好	杯部のみ残存
11	高脚部		カマド	脚部は直線的に下方に向けて弱く開く。器面は凹凸が多い。	外：脚部タテ方向のヘラナデ。裾部との接合部にヨコナデが認められる。内：輪積み痕明瞭。タテ方向の指ナデ下端ヨコナデ。①細砂 ②黄橙色 ③良好	脚部のみ残存
12	杯	口：(12.2)	覆土	口縁部内傾気味に立つ。頸部に明瞭な外稜を持ち、体部は丸味を帯びると思われる。器肉は薄い。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラケズリ。内：黒色処理。口縁部～体部ヨコナデ。ミガキは施さない。①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 残存
13	杯	口：(13.8)	覆土	口縁部外傾する。頸部に外稜を持つ。体部は丸味を帯びやや扁平。	外：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ後ナナメのミガキ。内：口縁部ヨコナデ後ヨコミガキ。体部不定方向のミガキ。①やや粗。砂粒 ②黒褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 残存
14	こも石	重量 520g	石英安山岩製			
15	こも石	重量 830g	熔結凝灰岩製			
16	こも石	重量 950g	花崗岩製			
17	こも石	重量 630g	安山岩製			

第130A・B号住居址

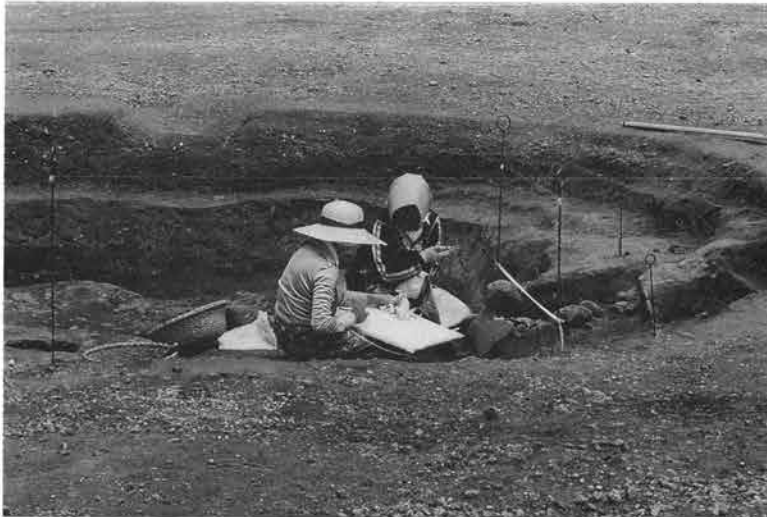
番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	長胴壺	口：(20.0)	覆土	口縁部下位より外反。口唇部丸味を帯び内面に平坦面を持つ。胴部上半にふくらみを持たせる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のハケ目状ナデ後一部ヨコのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコの弱いヘラナデ、下半不定方向の強いヘラナデ。①長石・石英 ②明橙色 ③良好	口縁～胴上半 $\frac{1}{3}$ 残存
2	長胴壺	口：17.5	覆土	口縁部外反する。胴部上半にふくらみを持たせる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラナデ。ナナメのミガキ。内：口縁部ヨコナデ。胴部剥落部多い。タテ方向のヘラナデ。①砂粒・長石 ②暗褐色 ③良好	口縁～胴上半 $\frac{1}{3}$ 残存
3	壺底部	底：(13.0)	覆土	平底。立ち上がり部を持つ内面は直線的。	内外面ともナデ。①長石多し。②黄褐色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{3}$ 残存
4	壺底部	底：(7.0)	覆土	平底。腰～底部直線的に落ちる。	外：腰部タテのヘラナデ。底面ナデ。内：腰～底部ヘラナデ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	腰～底部 $\frac{1}{3}$ 残存

遺構外及びグリッド出土遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
1	鉢	口：13.3 高：8.2	表採	口縁部垂直気味に立ち口唇部で外反する。頸部ナデによる稜線を持つ。胴部上半垂直に落ち下半丸味を帯びて丸底となる。	外：口縁部ヨコナデ。胴部上半不定方向のヘラケズリ。下半ヨコのヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内：口唇部ナデ。口縁部ヨコナデ後ミガキ。胴部上半ナデ後ミガキ。下半ナナメ・ヨコのミガキ。①長石・石英 ②にぶい橙色 ③良好	完形

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形の特徴	成・整形の特徴 ①胎土②色調③焼成	備考
2	杯	口：14.4 高：3.2	97住 52D15～20	口縁部外反する。頸部に鋭い外稜を持つ。体部やや丸味を帯び扁平。	外；口縁部ヨコナデ。体部ヨコ方向のヘラケズリ。内；黒色処理。口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部ていねいなミガキ。 ①長石 ②にぶい橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{6}$ 欠損
3	杯	口：4.8 高：13.2	52D15～21	口縁部外反。頸部にやや不明瞭な外稜を持つ。体部丸味を帯びる。	外；口縁部ヨコナデ。体部不定方向のヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。体部指によるナデ。①長石・石英 ②にぶい黄橙色 ③良好	$\frac{1}{3}$ 残存
4	杯	口：15.0	106住	口縁部外傾。頸部に稜を持たず口縁～体部下半まで丸味を帯びて落ちる。	外；口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内；口縁部ナデ後ヨコミガキ。体部ミガキ。①砂粒 ②橙色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{6}$ 残存



第3節 平安時代の遺構と遺物

遺構名	遺構実測図	遺物実測図	遺構図版	遺物図版
1号住居址	第111図	第153～154図	図版46	図版96
5号住居址	第112図	第154図	図版47	図版96
12号住居址	第113図		図版47	図版96
18号住居址	第114図	第155図	図版48	図版96
19号住居址	第115図	第155図	図版48	図版96
20号住居址	第116図	第155～156図	図版49	図版97
21号住居址	第117図	第157図	図版50	図版97
22号住居址	第118図	第157図	図版51	
23号住居址	第119図	第157～158図	図版52	図版97
24号住居址	第120図	第158図	図版50・53	
25号住居址	第121～123図	第158～160図	図版53・54	図版98
26号住居址	第124～126図	第160～161図	図版55	図版99
27号住居址	第127～128図	第162～164図	図版56	図版99・100

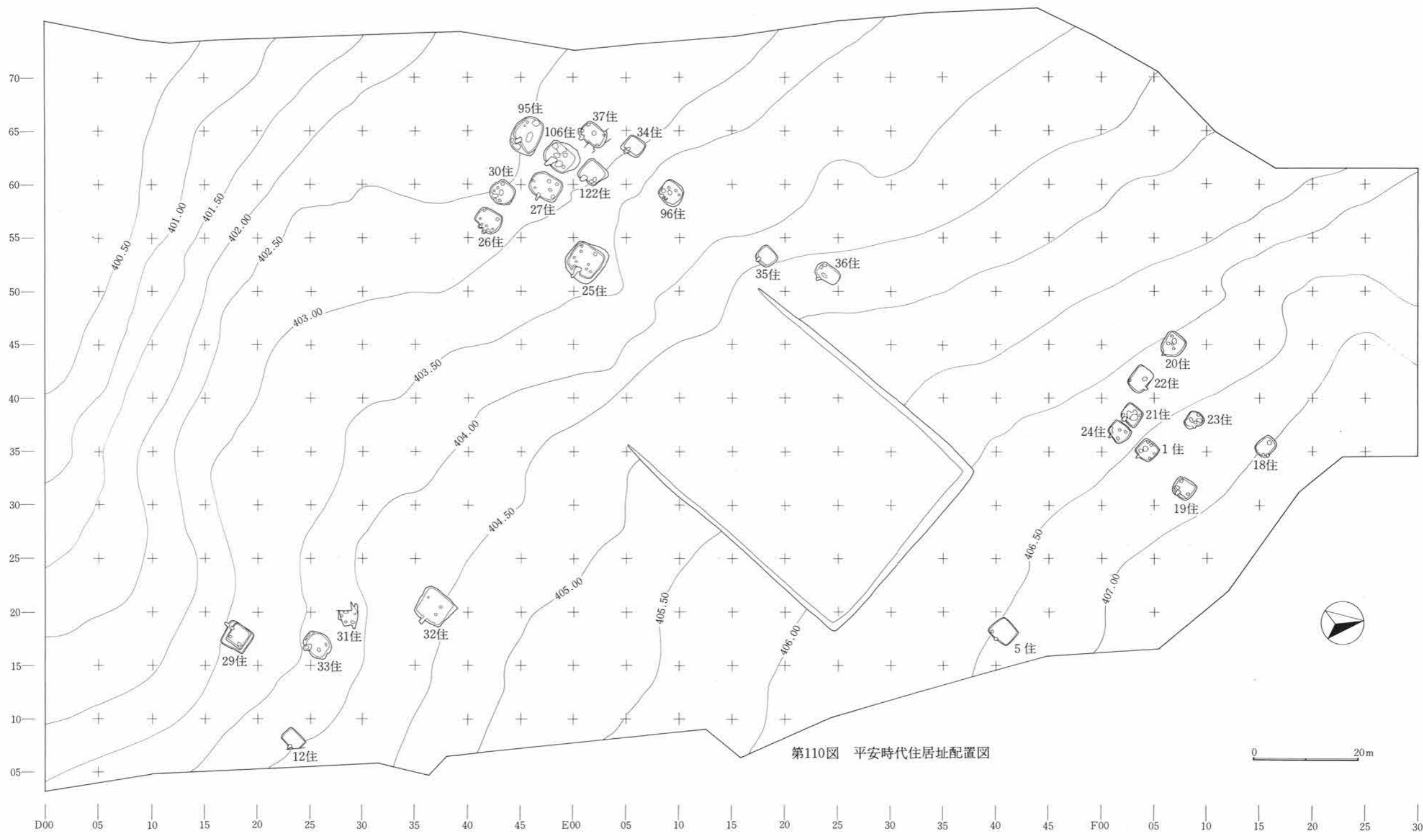
遺構名	遺構実測図	遺物実測図	遺構図版	遺物図版
29号住居址	第129～130図	第164図	図版57	図版100
30号住居址	第131図	第164～165図	図版58	図版100
31号住居址	第132～133図	第165図	図版59	図版101
32号住居址	第134～136図	第165～168図	図版60・61	図版101・102
33号住居址	第137図	第168～169図	図版62	図版102
34号住居址	第138図	第170図	図版63	図版102
35号住居址	第139～140図	第170～171図	図版64	図版102
36号住居址	第141～142図		図版65	
37号住居址	第143～144図	第171図	図版65・66	図版103
95号住居址	第145～146図	第171～172図	図版67	図版103
96号住居址	第147～148図	第172図	図版68	図版103
106号住居址	第149～150図	第173図	図版69	図版103
122号住居址	第151～152図	第174～175図	図版70	図版104

第三章 検出された遺構と遺物

住居址一覧表

遺構名	方位	形状	施設	その他
1 住	住居：N134°E カマド：N138°E	正方形	カマド・貯蔵穴	
5 住	住居：N142°E カマド：N138°E	隅丸正方形	カマド・貯蔵穴	
12 住	住居：N136°E カマド：N129°E	隅丸長方形	カマド	13住と重複
18 住	住居：N49°E カマド：N73°E	隅丸方形	カマド・貯蔵穴・床下土坑	
19 住	住居：N133°E カマド：N149°E	不整の隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	
20 住	住居：N126°E カマド：N125°E	不整形	カマド・柱穴 床下土坑	
21 住	住居：N137°E カマド：N152°E	不整形	カマド・貯蔵穴・床下土坑	
22 住	住居：N45°E カマド：N49°E	隅丸方形	カマド・床下土坑	
23 住	住居：N74°E カマド：N77°E	小型の不整形	カマド・貯蔵穴・床下土坑	
24 住	住居：N139°E カマド：N142°E	不整の隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	
25 住	住居：N129°E カマド：N135°E	大型の隅丸方形	テラス・カマド・柱穴 床下土坑	
26 住	住居：N132°E カマド：N132°E カマド：N133°E	隅丸方形	カマド2・柱穴・貯蔵穴2・床下土坑	
27 住	住居：N128°E カマド：N124°E	隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	
29 住	住居：N37°E カマド：N49°E	方形	テラス・カマド・柱穴 床下土坑	

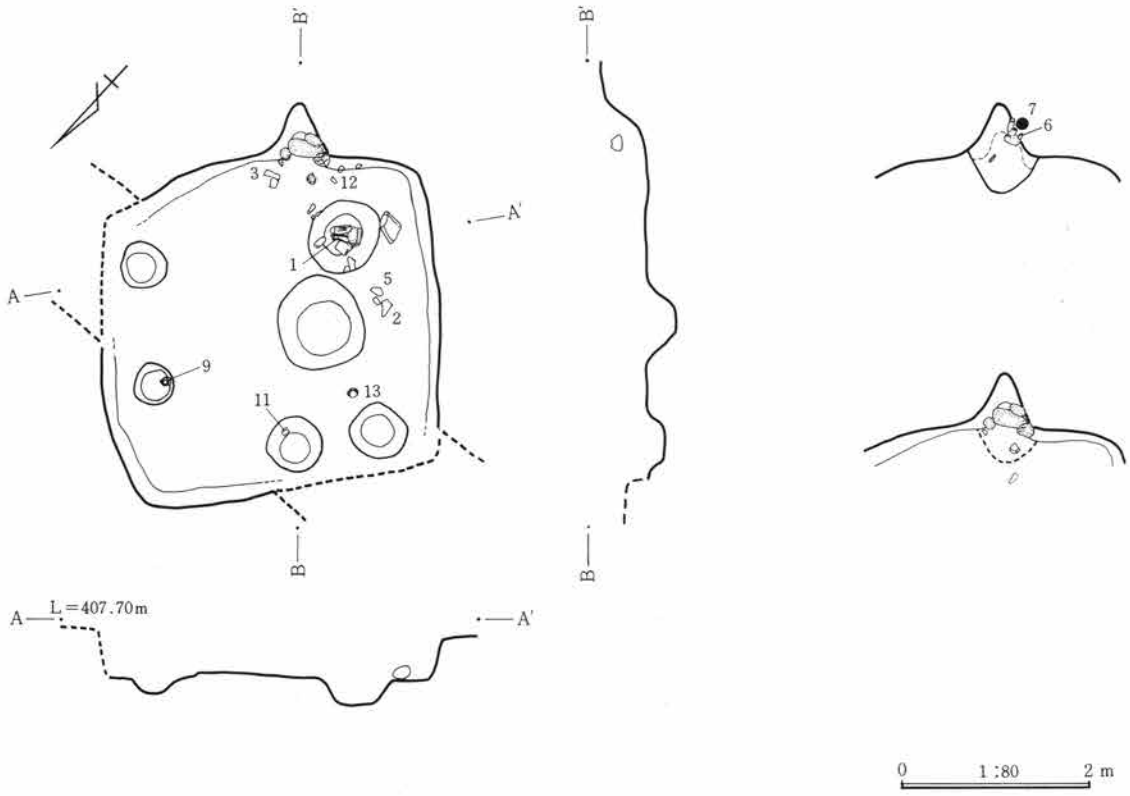
遺構名	方位	形状	施設	その他
30 住	住居：N139°E カマド：N166°E	不整の隅丸方形	カマド・貯蔵穴？柱穴	
31 住	住居：N86°E カマド：N97°E	正方形？	カマド・貯蔵穴・柱穴	攪乱著しい
32 住	住居：N129°E カマド：N132°E	隅丸方形	礎石・柱穴 カマド・床下土坑	
33 住	住居：N48°E カマド：N62°E	不整の隅丸方形	テラス・カマド・柱穴 床下土坑	
34 住	住居：N137°E カマド：N142°E	隅丸方形	テラス・カマド・柱穴 貯蔵穴・床下土坑	
35 住	住居：N59°E カマド：N57°E	隅丸方形	テラス・カマド・貯蔵穴・床下土坑	
36 住	住居：N136°E カマド：N144°E	隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	
37 住	住居：N134°E カマド：N141°E	隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	1号溝と重複
95 住	住居：N128°E カマド：N148°E	不整の隅丸方形	カマド・床下土坑	
96 住	住居：N136°E カマド：N140°E	隅丸方形	カマド・貯蔵穴・柱穴 床下土坑	
106 住	住居：N134°E カマド：N146°E	隅丸方形	テラス・カマド	
122 住	住居：N141°E カマド：N140°E	不整の隅丸方形	カマド・貯蔵穴・床下土坑	



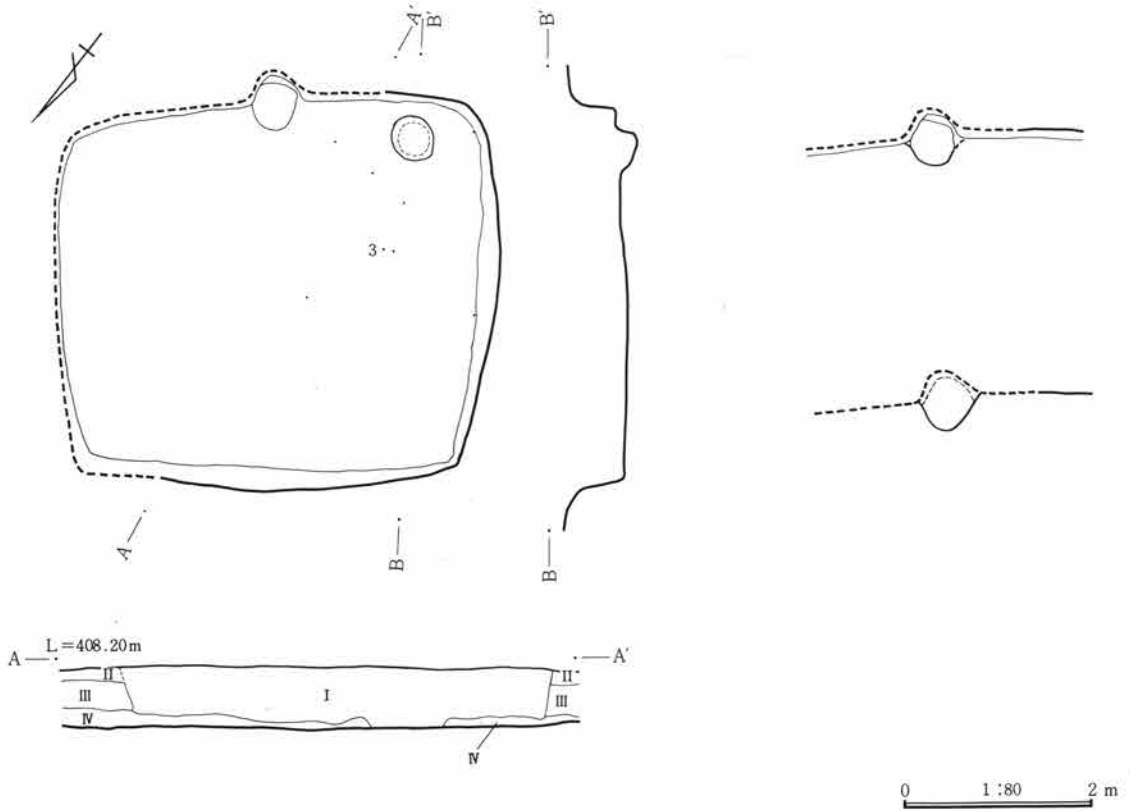
第110図 平安時代住居址配置図

0 20m

第3節 平安時代の遺構と遺物

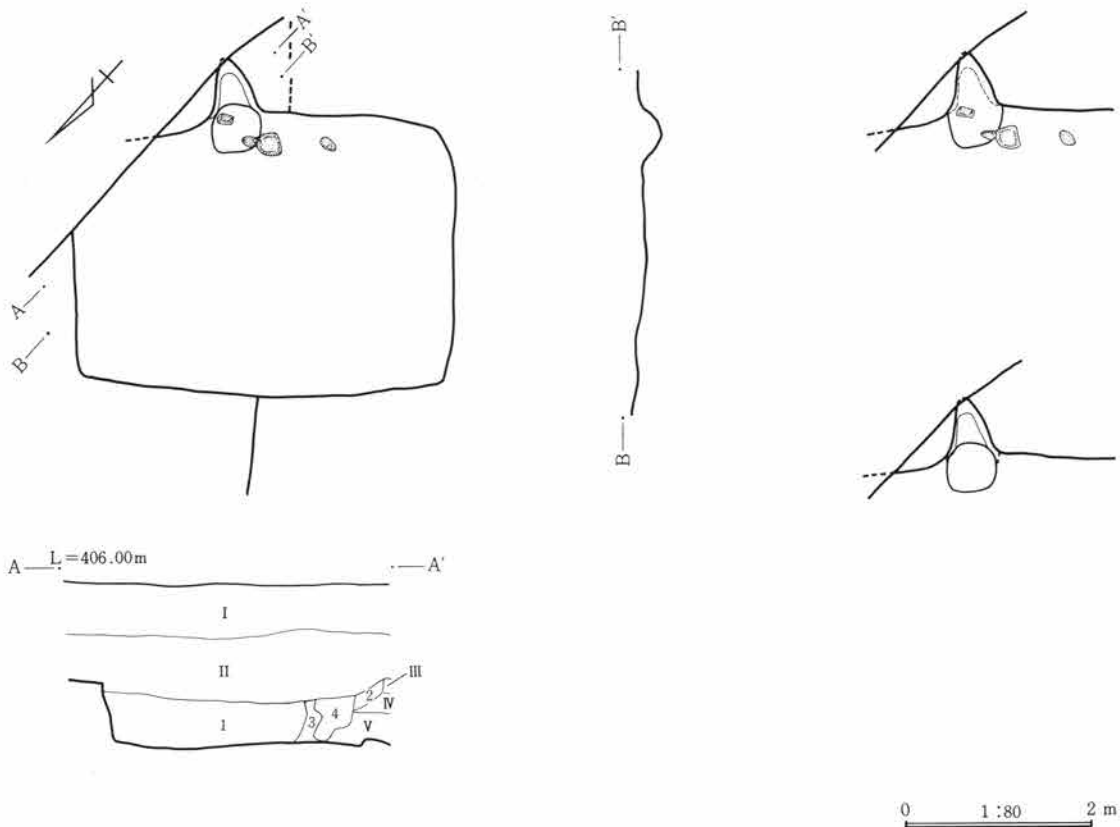


第111図 第1号住居址及びカマド



第112図 第5号住居址及びカマド

第三章 検出された遺構と遺物



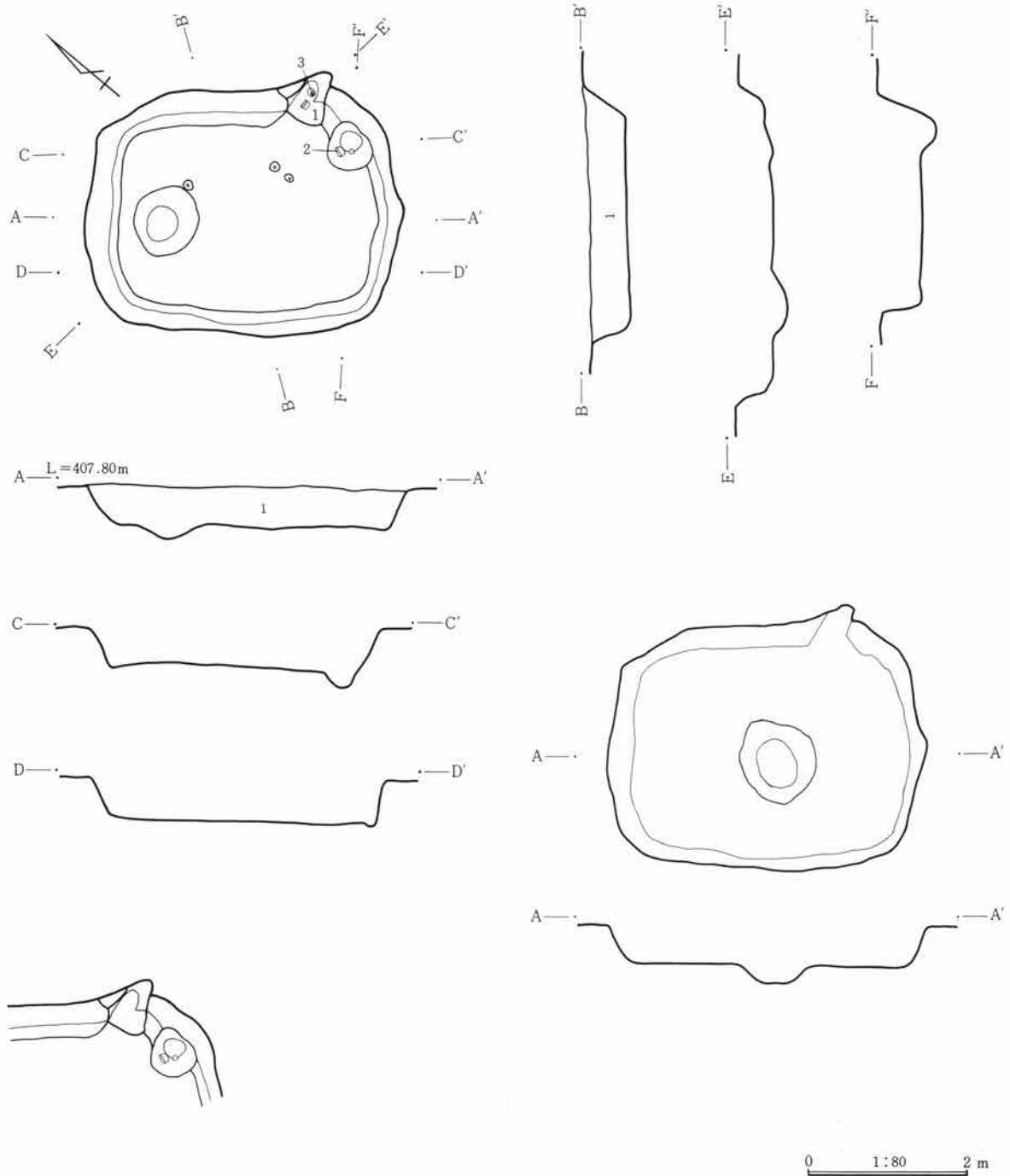
第113図 第12号住居址及びカマド

第1号住居址 位置 34～36 F 8～11。F区道路北側に位置し、試掘時にその存在が確認された。
方位 住居；東南。カマド；東南。 **形状** ほぼ正方形を呈し、規模は363×367cmを測る。 **覆土** F・Pを多く混入する埋土であり、明確な分層はできないが下層にはF・Pの混入が少ない部分がブロック状に見られた。 **床面** F・P、VIII層土ブロックを若干含んだ土による部分的な貼り床が見られ、やや凹凸がある。 **柱穴** 認められなかった。 **貯蔵穴** カマド南側に検出した。 **カマド** 東壁中央やや南寄りに設けられており、天井部が崩落していた。 **遺物** 床直より羽釜(1・5)が出土している。

第5号住居址 位置 17～20 E 44～47。 **方位** 住居；南南東、カマド；東南。 **形状** 隅丸正方形を呈す。 **覆土** F・Pを多く混入する。 **床面** 比較的堅く踏み固められた貼り床。 **柱穴** 認められない。 **貯蔵穴** カマド南側にあり、径47×43cmのほぼ円形を呈す。 **カマド** 試掘トレンチにより、上面を削平されている。僅かに火床面が確認されたのみである。東壁ほぼ中央に設けられている。 **掘り方** 床下土坑が3カ所検出された他、若干の凹凸がある。土坑内を埋めていた土は、F・Pを多く含む土であった。 **遺物** 覆土中のものが多い。床直では椀(3)が出土している。

第12号住居址 位置 7～9 D 27～30。13号住居址(古墳時代前半)の一部を切る。 **方位** 住居；東南。カマド；東南東。 **形状** 隅丸長方形を呈し、規模は406×298cmである。壁は残っておらず外形を確認したのみである。 **床面** カマド前面で一部痕跡を認めた。 **柱穴** 確認されなかった。 **貯蔵穴** カマド南側に確認された。 **カマド** 東壁中央に構築されている。ソデ部分の形状は不明だが、壁にかかった断面から煙道はかなりの角度で立ち上がるものと思われる。 **掘り方** 住居中央に径70～100cmの床下土坑が一部分重複して検出された。覆土はF・Pを多く含む黒色土である。 (小野)

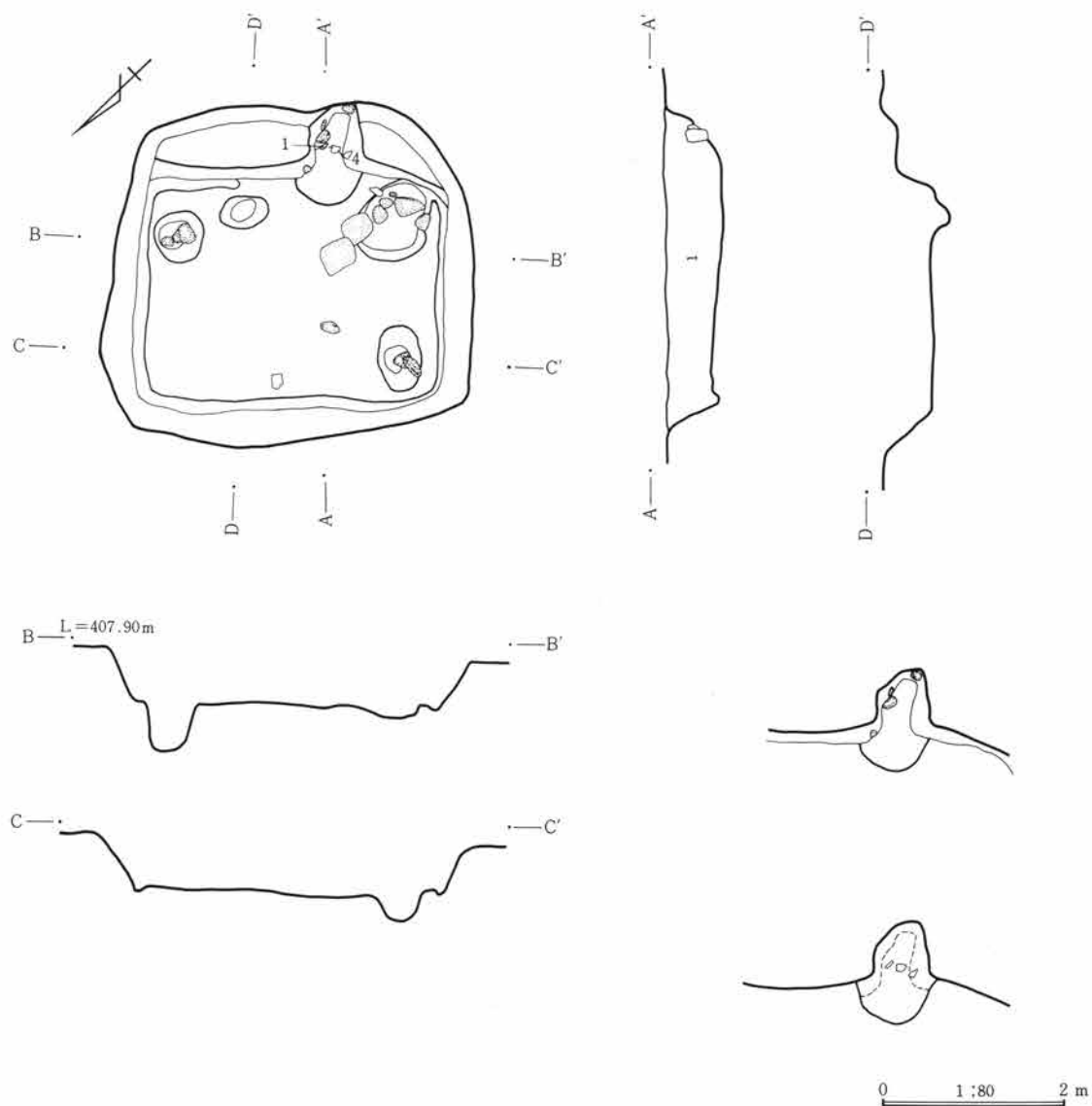
第3節 平安時代の遺構と遺物



第114図 第18号住居址・掘り方及びカマド

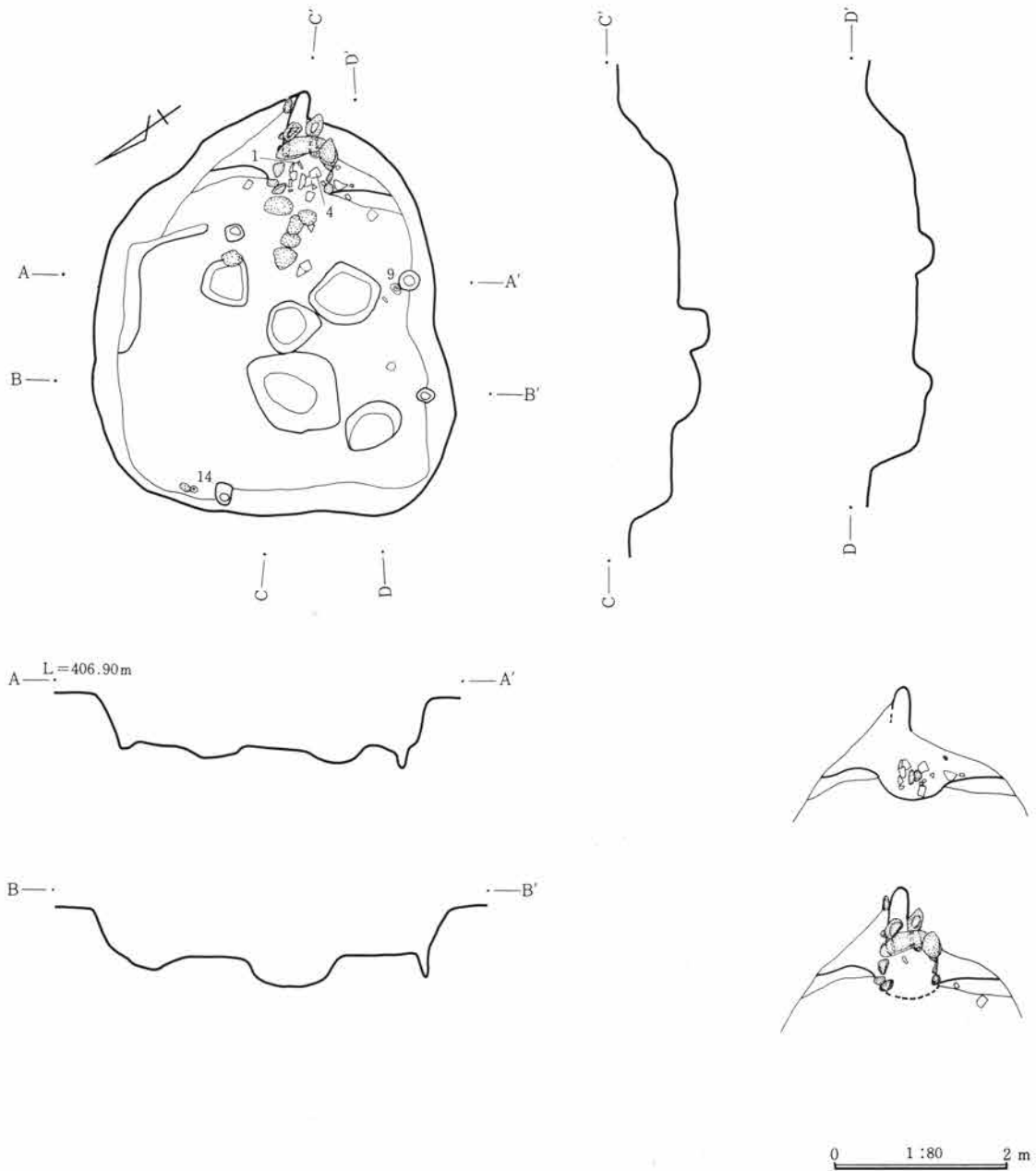
第18号住居址 位置 34~37F19~22。 方位 住居；東北。カマド；東北東。 形状 隅丸長方形を呈す。 覆土 F・Pを多く混入する黒色土である。 床面 ほぼ平坦な貼り床である。壁溝はほぼ全周する。 柱穴 検出されなかった。 貯蔵穴 カマド南側のコーナーに設けられており、径60×56cmで深さ約20cmを測る。 カマド 東壁の南コーナー寄りに若干住居外へ煙道を掘り出す形で構築されている。天井部・ソデ部はほとんど崩落しており、火床面・煙道部ともに多量の焼土の出土を見た。 掘り方 床下土坑が住居中央とその北側に検出された。それぞれの規模は、105×90cm、90×75cmで底面はともにナベ底状をしている。 遺物 カマド内より羽釜 (1) が出土している。 (小野)

第三章 検出された遺構と遺物



第115図 第19号住居址及びカマド

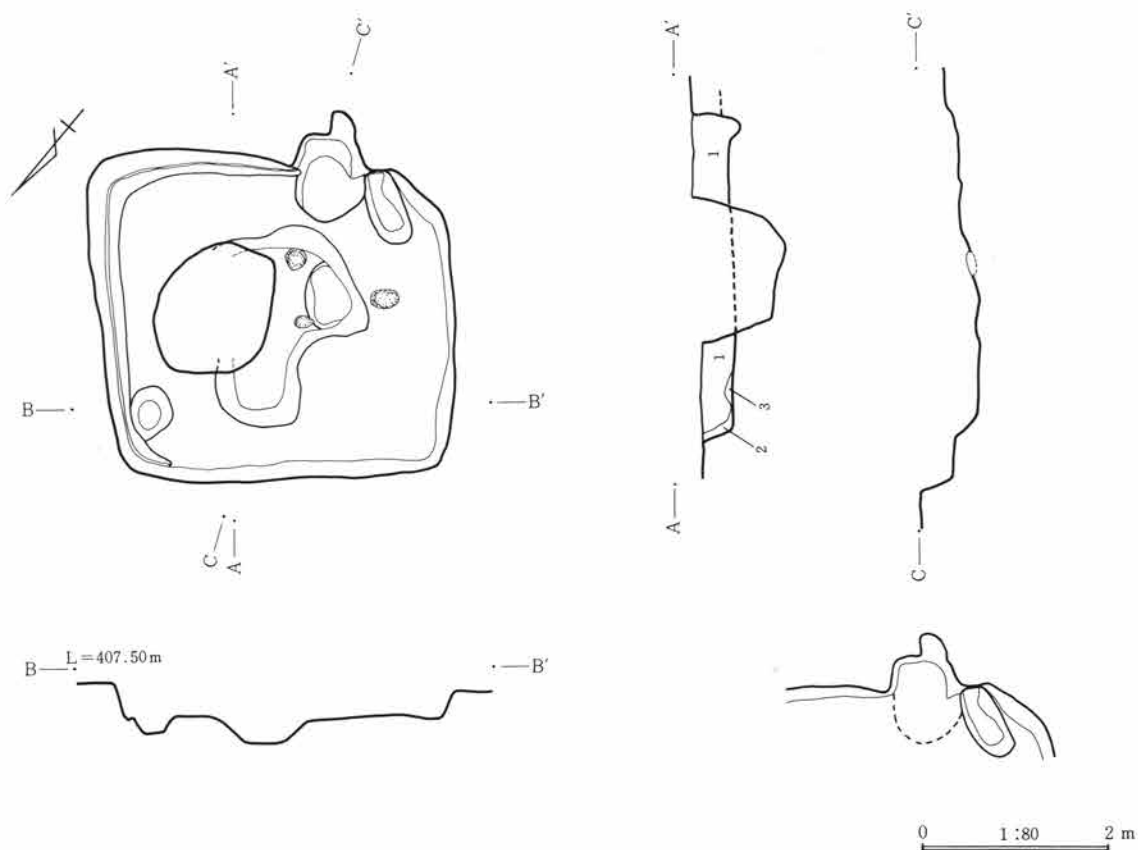
第19号住居址 位置 34～37F 19～22。 方位 住居；東南。カマド；南南東。 形状 やや不整な隅丸方形を呈し、規模は370×300cmである。 覆土 F・Pを多く混入する黒色土で1層として捉えられた。 床面 ほぼ平坦な貼り床であったが、カマド周辺および住居中央部がやや軟弱であった。壁溝が幅約10cm深さ約5cmでカマド部分を除いて掘られている。 柱穴 東及び西コーナーに、径約55cmのピットが検出されており、柱穴の可能性がある。内部より石が落ち込んだ状態で検出されている。 貯蔵穴 カマド南側に掘り込まれていた。規模は91×88cmである。貯蔵穴内及び付近よりカマドの構築材と思われる石が落ち込んだ状態で出土している。 カマド 南東壁の中央やや南寄りに構築されていた。ソデ等はほとんど崩落しており、火床面及び焚口部より、厚さ約3cmの焼土は見られたが、炭化物は少ない。 掘り方 床下土坑等は認められなかった。カマドの付された壁には幅約70cmのテラス状の張り出し部が作られていたが、その面からのピット等は検出されなかった。 遺物 カマド周辺より小破片が若干出土しているのみである(1・4)。カマドの崩落状況、遺物の少なさ等から人為的に廃棄されたものと見られる。(小野)



第116図 第20号住居址及びカマド

第20号住居址

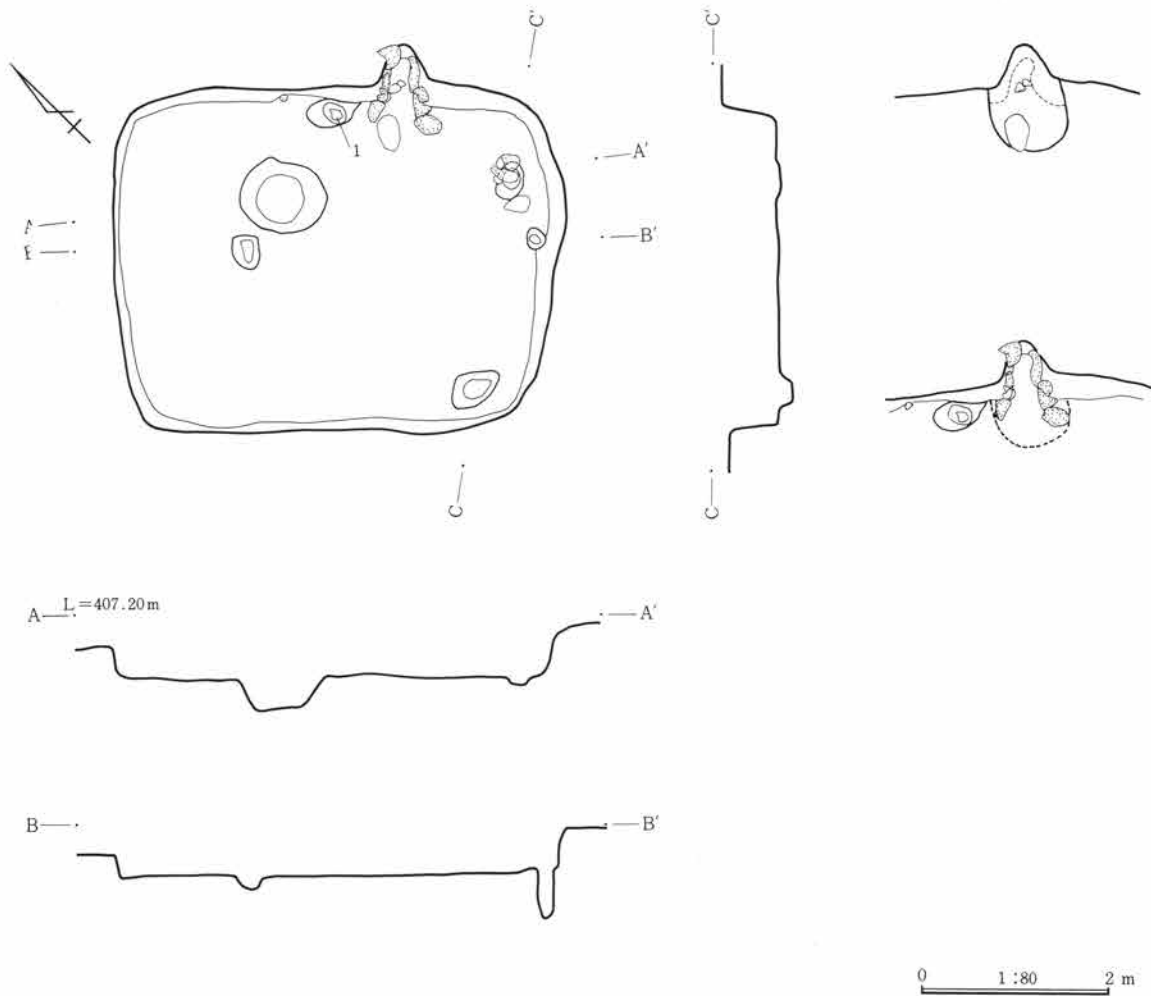
位置 43~46 F11~13。 **方位** 住居；東南東。カマド；南東。 **形状** カマドを設けた南東壁部に、テラス状の張り出し部を持つ不整形方を呈す。壁高は約30cmで、立ち上がりはややゆるやかである。 **覆土** F・Pを多く混入する黒色土である。 **床面** かなりの凹凸が見られ、貼り床された壁際に小ピットがあり、補助柱穴の可能性もある。 **カマド** 南東壁に構築されている。ソデの芯材に使用されたであろう石が前面に崩落した状況で出土し、天井部には長さ30cm程の石が鳥居状に残存していた。崩落した石と床面との間には間層が見られることから、カマドが崩れた時にはある程度住居の埋没が進んでいたと考えられる。 **掘り方** 床下土坑が4基検出されたが、形状、深さともにまちまちである。 **遺物** 覆土中からの出土が多い。羽釜（1・4）はカマドから出土した。 (小野)



第117図 第21号住居址及びカマド

第21号住居址

位置 37～40 F 7～9 グリッド。 **方位** 住居：東南。カマド：南南東。 **形状** 規模は380×353cmで、南コーナーがややこけた形の不整形方を呈す。壁高は30cmを測る。 **覆土** F・Pを多く混入する黒色土である。 **床面** VIII層土ブロック混じりの黒褐色土で踏み固められていたが、かなりの凹凸を呈す。壁溝が、幅約15cm、深さ約5cmで北東側を周る。南側に関しては存在していた痕跡はあるが不明瞭である。 **柱穴** 検出されなかった。 **貯蔵穴** カマド南側に径80×45cm深さ13cmの長円形を呈す掘り込みが検出されている。 **カマド** 南東壁の中央やや右寄りに構築されていた。煙道部は、第24号住居址を作る際に削平されたものと考えられる。第19号住居址と同様な、テラス状の張り出しが見られた。カマドの規模は幅40cm、長さ約30cm程度で、住居外へ掘り出されているが、構築材としての石や粘土等は検出されなかった。火床面は比較的平坦で、かなり多量の焼土が認められた。 **掘り方** 住居中央にかなり不整形な床下土坑が検出されているが近世以降と思われる攪乱のため、正確な規模などは把握できない。 **遺物** 覆土中より川原石数個が投げ込まれた状態で出土している。羽釜(1)・灰釉陶器(2)などは全て覆土からの出土遺物であり、床直、カマド内出土の土器は小破片のため図示し得なかった。(小野)

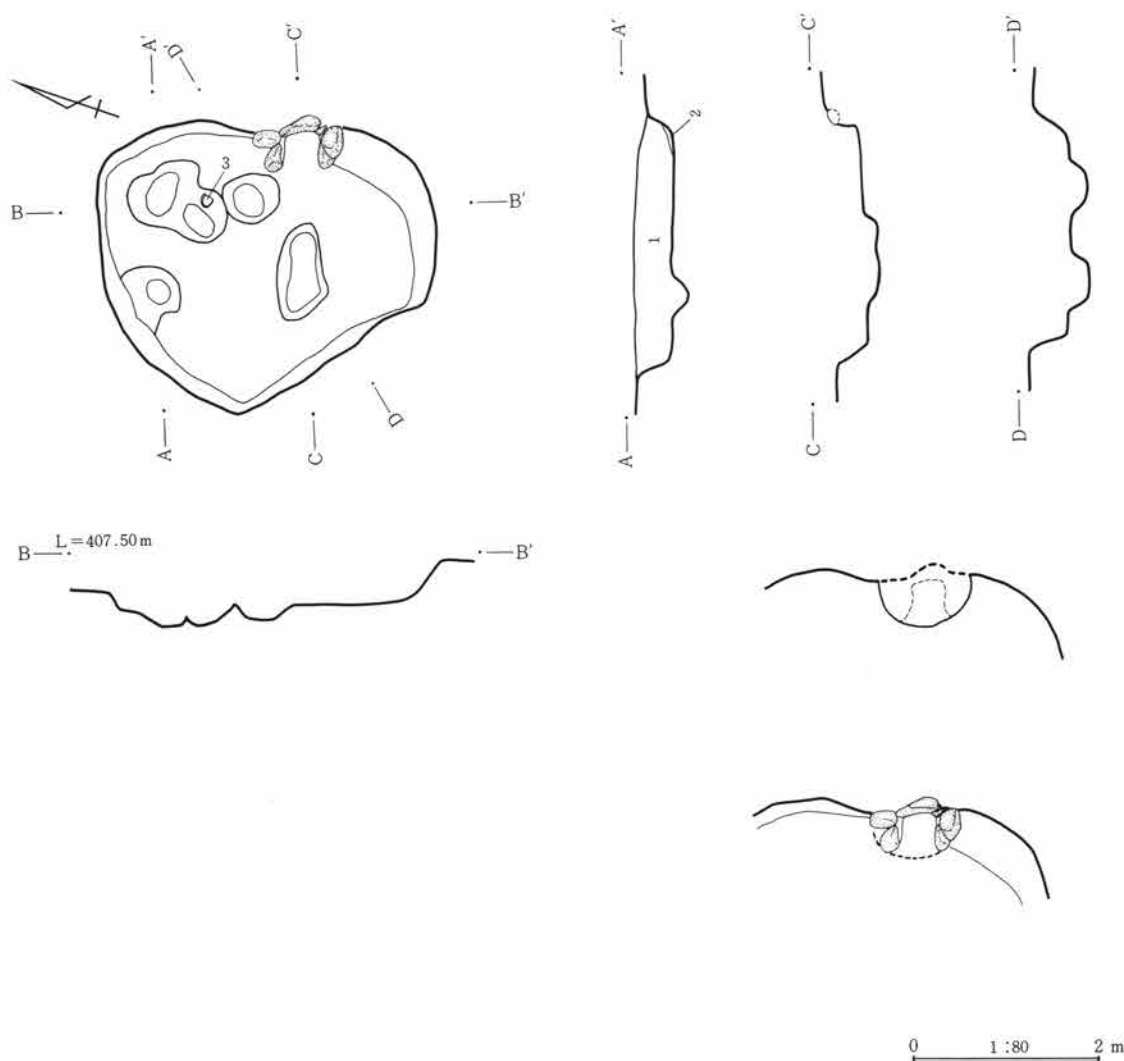


第118図 第22号住居址及びカマド

第22号住居址

位置 41～44 F 7～10グリッド。 **方位** 住居：北東。カマド：北東。 **形状** 隅丸方形を呈す。壁高は約25cmを測り、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。 **覆土** F・Pを多く含む黒色土。 **床面** 若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦な床である。VIII層土を含む黒褐色土で、比較的しっかりと踏み固められている。 **柱穴** 検出されなかった。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **カマド** 北東壁中央やや南よりに構築されている。焚口幅は約35cm程で、壁外へ約40cm掘り出し、川原石で組み上げられていたと思われる。天井部は崩落していたが、カマド内部の遺存状況は比較的良好で、火床面には石を利用した支脚が設けられていた。煙道はかなり直に立ち上がる。カマド火床面・用材はかなり焼けていたが、焼土等は余り多くは見られなかった。 **掘り方** 住居中央のやや北寄りに径93×75cm、深さ約30cm程の床下土坑が検出されている。埋土はF・Pを多く混入していた。 **遺物** 床直・覆土中からも多くは出土しなかった。僅かに、カマド北側の浅い掘り込みより出土した羽釜(1) 1点のみを図示し得たにすぎない。(小野)

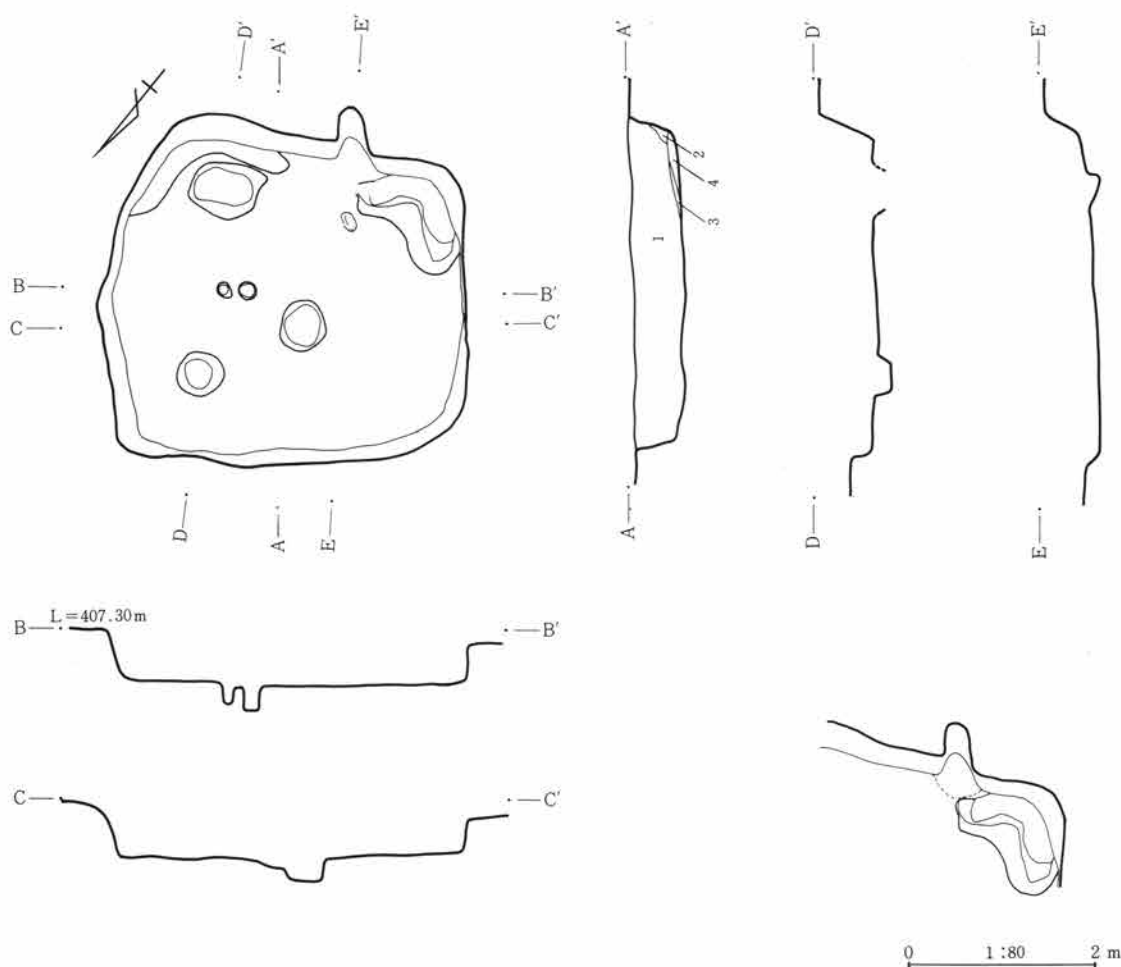
第三章 検出された遺構と遺物



第119図 第23号住居址及びカマド

第23号住居址

位置 37~39F13~15グリッド。 **方位** 住居；東北東。カマド；東。 **形状** 不整形を呈し、他の住居址と比較してやや規模が小型である。 **覆土** F・Pを多く混入する黒色土である。壁直下に少量のF・Pを混入しない粘質黒色土が認められた。 **床面** ほぼ平坦であったが、明確な面としては捉えられなかった。壁溝は認められなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **貯蔵穴** カマド前面、やや北寄りに径約50cmの浅く、すり鉢状を呈す掘り込みが検出されており、貯蔵穴の可能性はある。遺物の出土は認められなかった。 **カマド** 両ソデ部に川原石を使用した石組みのカマドである。ソデ部、天井部ともに、やや崩れてはいたが、かなり良好に遺存していた。また、ソデ部の石は2段組みとなっている。焚口部の幅は約35cm程であるが、構築の際の住居外の掘り出しはほとんど無く、煙道部も不明瞭であった。火床部に若干の焼土が認められた。 **掘り方** 不整形な床下土坑が、中央及び北寄りに3カ所検出された。埋土はF・Pを多く混入しており、底面はかなりの凹凸が見られた。 **遺物** 覆土中より杯・椀類(1~4)を出土した。鉄器(7・8)も覆土中からである。 (小野)

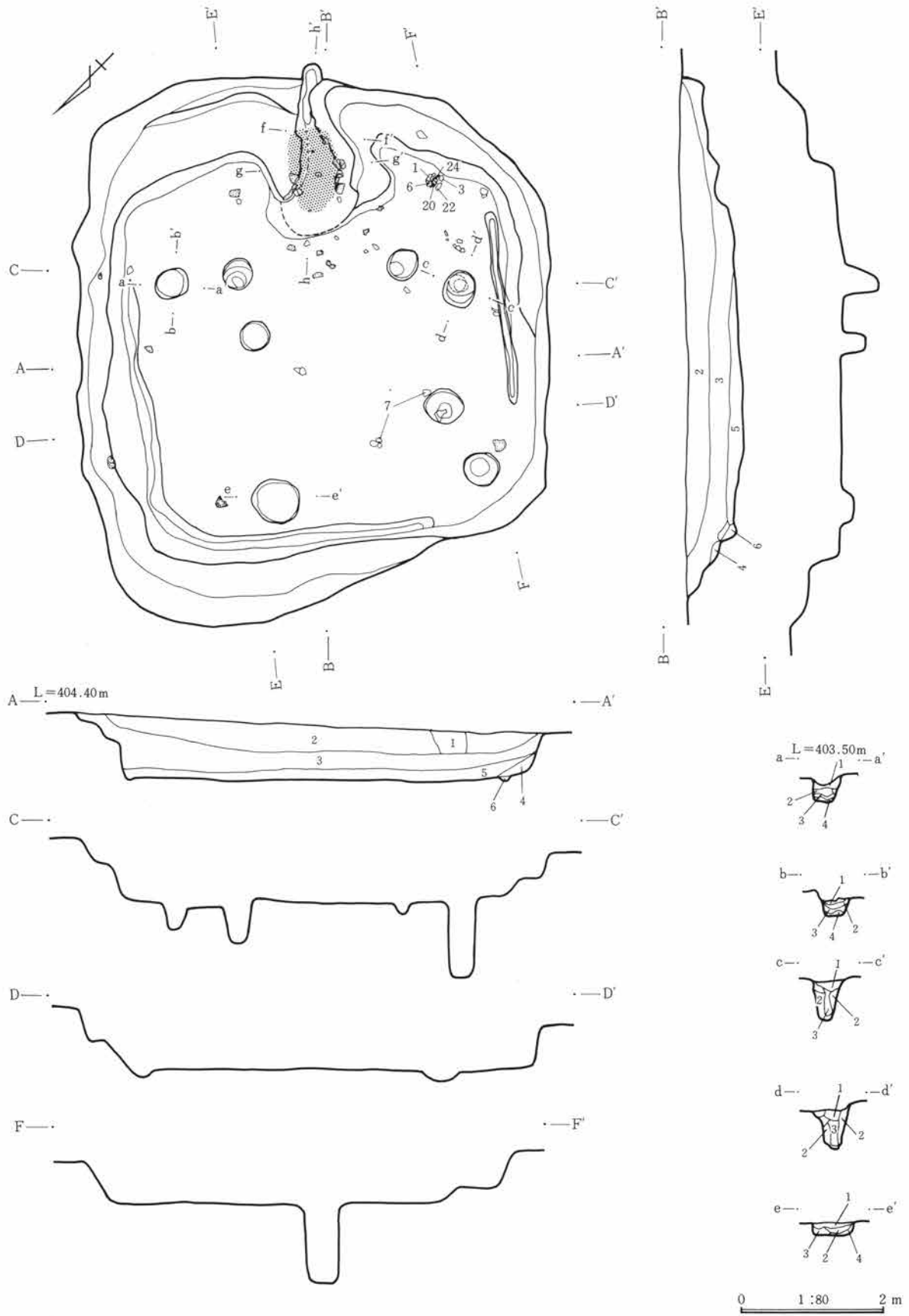


第120図 第24号住居址及びカマド

第24号住居址

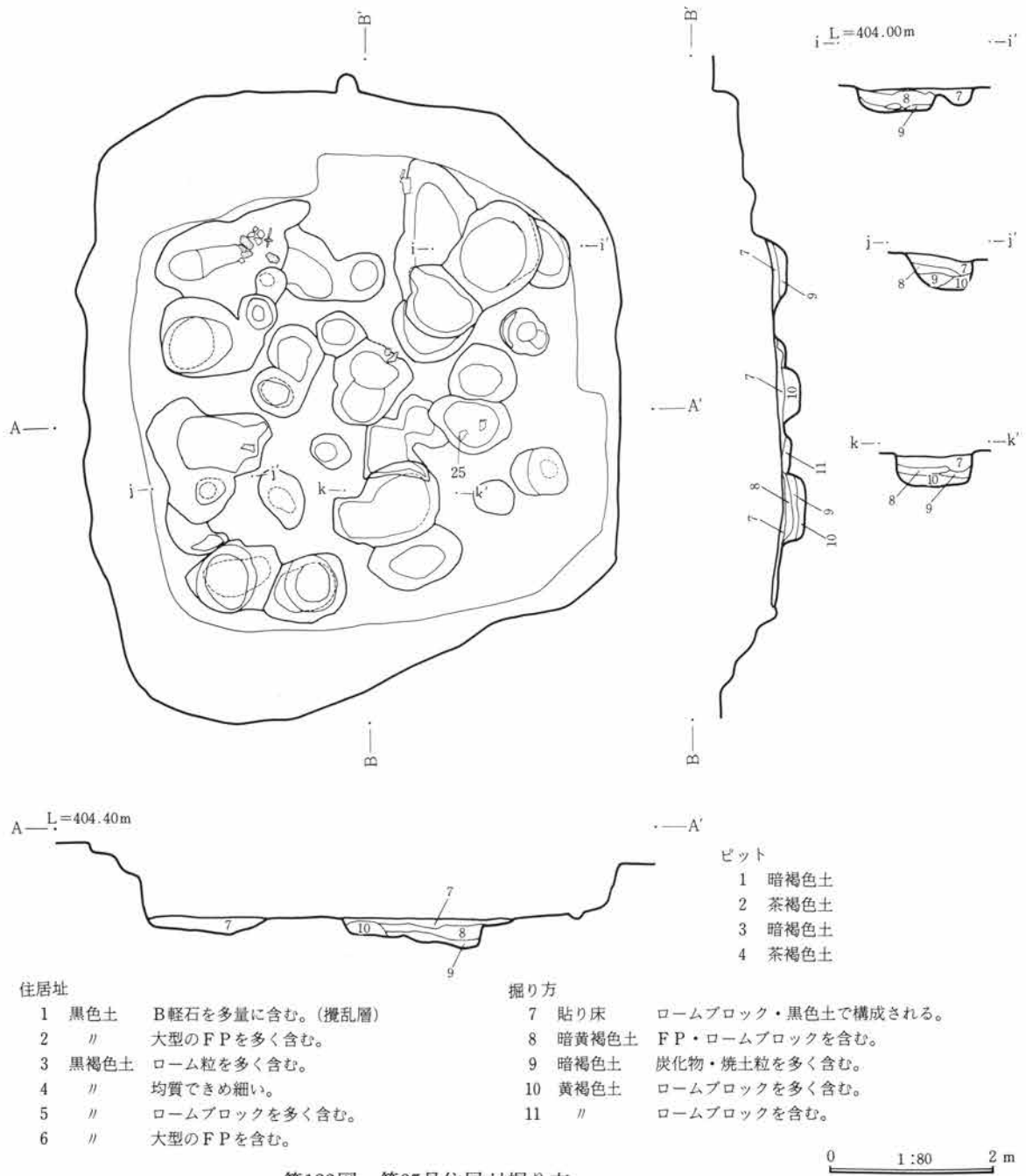
位置 36～38 F05～08グリッド。 **方位** 住居；南東。カマド；南東。 **形状** やや不整な隅丸方形を呈す。北側の壁はやや斜めに立ち上がるが、南壁の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。 **覆土** 大部分F・Pを混入する黒色土として把握されるが、床面近くには、F・Pを含まない黒色土及びⅧ層土・焼土を含む土がブロック状に認められた。 **床面** ゆるやかな凹凸を持ち、北側がやや高くなっていた。Ⅷ層土混じりの黒褐色土で、かなり堅く踏み固められていた。 **柱穴** 住居中央、やや北寄りに径15cm、深さ20～25cm程の小ピットが2カ所並ぶが、他には検出されなかった。 **貯蔵穴** カマド西側のコーナーに接する形で不整形な落ち込みがあり、またカマド東側には径約70cmのピットが検出されている。両者とも、積極的な所見はなかったが可能性はあろう。 **カマド** 東壁中央やや西よりに幅約30cm、長さ約40cmで構築されていた。カマド用材としての石・粘土の検出は見られなかったが、内部及び前面からは多量の焼土・灰・炭化物が認められた。本住居址のカマドは掘り方も小さく、ソデに石を使用していた痕跡も余り認められないことから、Ⅷ層土等による構築と推察される。 **掘り方** 径約50cmの床下土坑が2基検出されている。断面形状はともにスリ鉢状を呈し、覆土にはF・Pを多く混入していた。 **遺物** カマド内より杯(2)が出土している。(小野)

第三章 検出された遺構と遺物



第121図 第25号住居址

第3節 平安時代の遺構と遺物

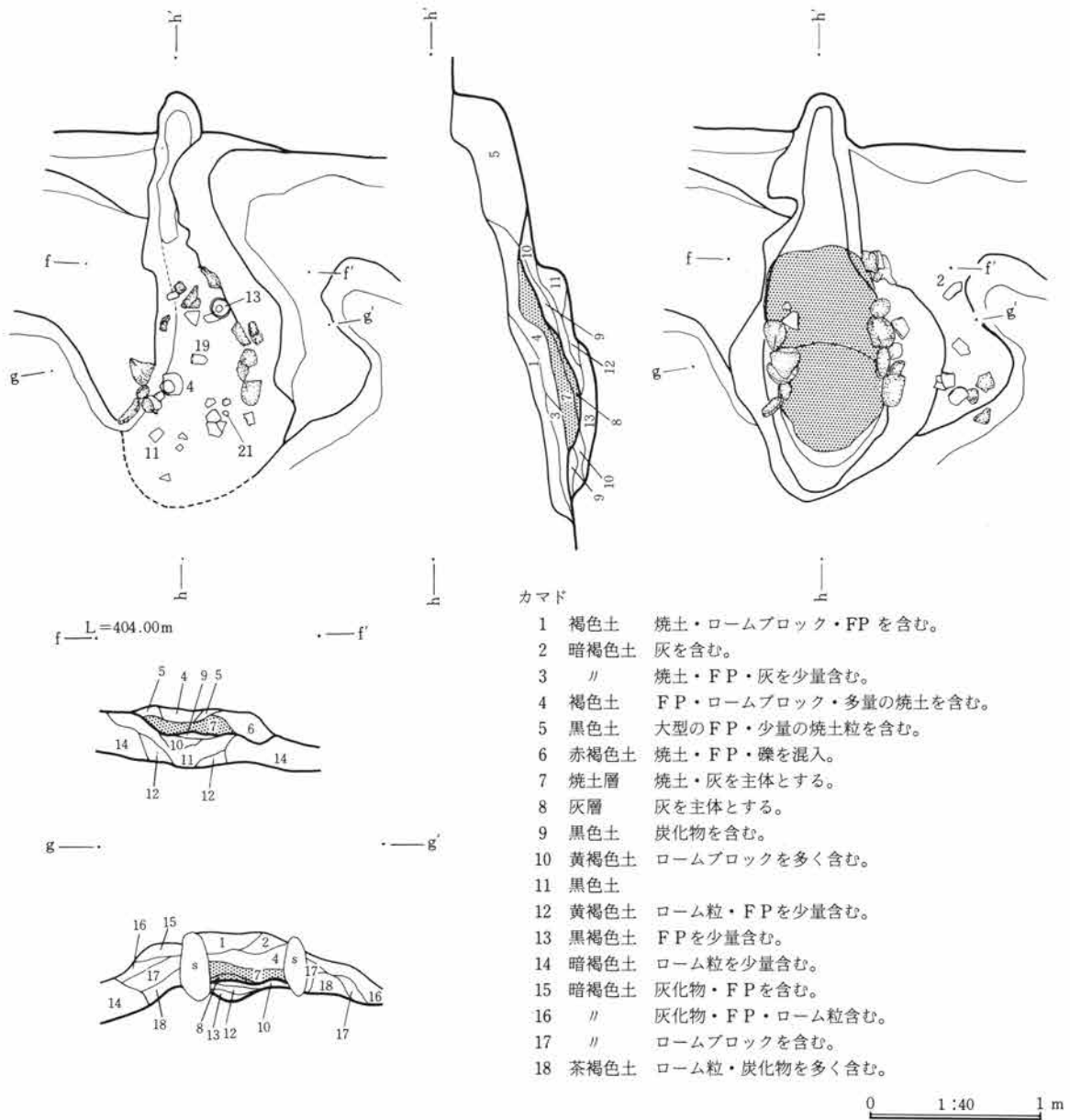


第122図 第25号住居址掘り方

第25号住居址

位置 51~55E04~08。調査地中央西寄りの住居址群の東端に位置する。 **方位** 住居：東南。カマド：東南。 **形状** 確認面において、約750×680cmを測る北東側の一辺が長い隅丸台形のプランを呈し、2軒以上の重複も考えられたが、調査の結果、床面が約570×550cmを測る隅丸方形の南東、北東、北西のそれぞれの壁にテラス状の突出部を持つ1軒の住居址であることが判明した。このテラス状の突出部は床面から40cm程の所に設けられ、その総面積は6.6㎡に及ぶ。用途としては棚と考えられよう。また本住居址は調査地内の同時期の住居址と比べ、その大きさは比較的大型のものである。 **覆土** 5層に分層され、前記のテラス状部分と住居中央部と同じ土がレンズ状に堆積しており、人為的様相を示さないことから、テラス状突出は

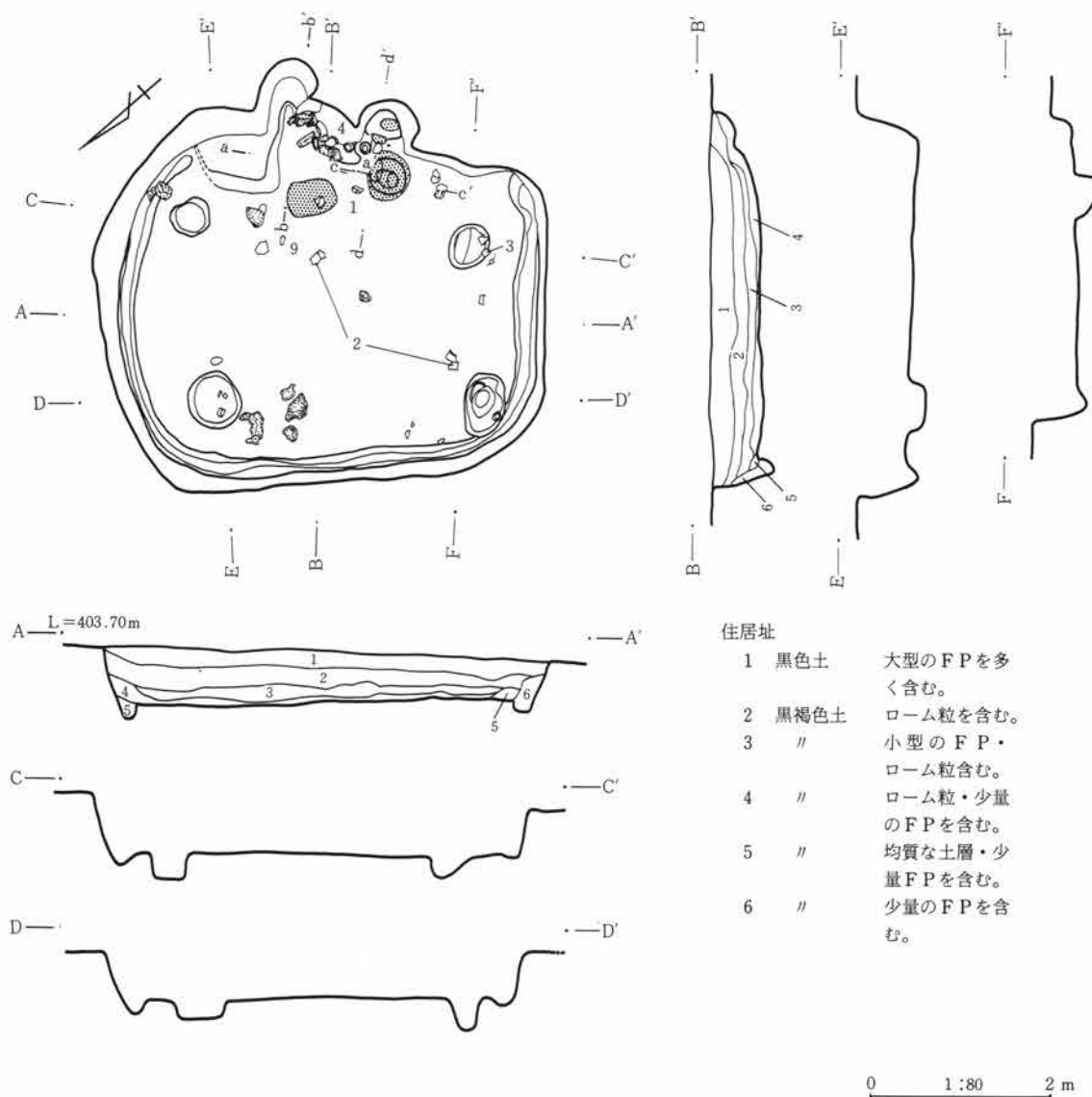
第III章 検出された遺構と遺物



第123図 第25号住居址カマド

拡張や重複によるものではないであろう。 床面 VI・VIII層土の混土による貼り床で堅くしまる。壁溝はほぼ全周するが、テラス状突出を持たない西コーナー部分では認められなかった。 柱穴 床面において3穴しか検出できなかったが、掘り方調査の結果4穴であることが判明した。柱穴間は、南東・北西間が約170~220cmに対し、北東・南西間が約330cmと長く、全体にやや南西壁側に寄る。柱痕は確認できなかった。 カマド 住居址南東壁のほぼ中央に設けられ、前述のテラス状部分を掘り込み、ソデ及び燃焼部よりゆるやかに立ち上がり、先端部で急に立ち上がる。また、壁外には僅かに15cm程出るだけである。 掘り方 床面に径15~70cmの土坑が30余基掘り込まれている。用途は不明である。 遺物 カマドからの出土遺物が目立つ。椀(1・4・6)、杯(11・13)等を検出した。床下遺物としては鉄製紡錘車(27)・鎌(26)が床下土坑から出土している。

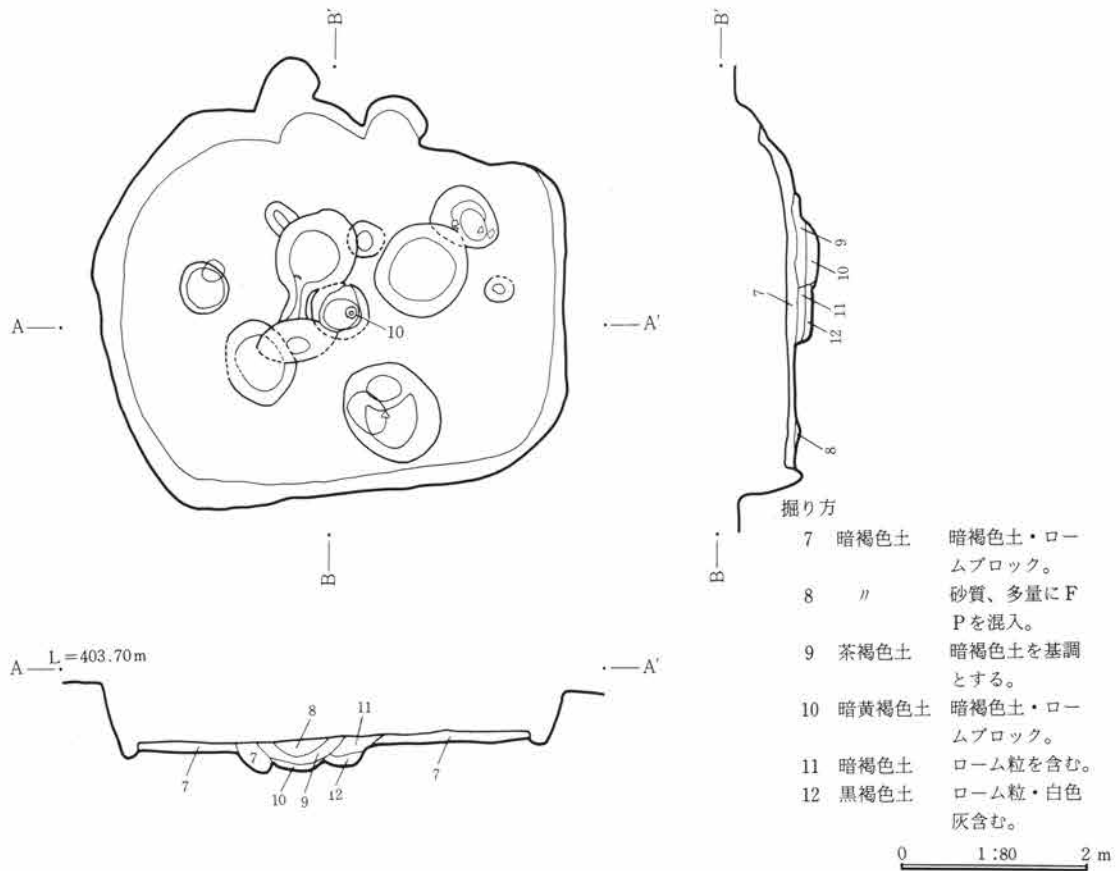
(新倉)



第124図 第26号住居址

第26号住居址

位置 55~58D45~48。調査地中央西寄りの住居址群の南端に位置する。周辺には、北西に第30号住居址が近接する。
方位 住居；東南東。カマド；2基とも東南東。
形状 約460×370cmの隅丸方形を呈す。南西側の壁が約300cmと短く、直線的であるのに対し、北東側の壁が約380cmと長くゆるやかな弧を描く。
覆土 第V層（F・P層）上面で確認された。覆土は6層に分層される。堆積は人為的様相を示さず、おそらく自然堆積による埋没であろう。
床面 VIII層土ブロックを多量に含むVII層土で作られているが、堅くしまりがあるとは言い難く、比較的軟弱である。壁溝はカマドがある東南壁を除き「コ」字形に周っている。
柱穴 4穴検出された。径は約50cm前後、深さは約30cm前後を測る。柱痕は検出されなかった。柱穴間は壁が長い北東壁に沿うP₁-P₂がP₃-P₄より長い。
貯蔵穴 床面では確認されなかったが、掘り方調査の結果、住居址中央ややカマド寄りに2基の土坑が検出された（P₅・P₆）。貯蔵穴とは断定できないが可能性は考えられよう。覆土はVI・VII層土を主体とする。
カマド 2基検出された。北東側のカマドには、右ソデ部分と天井部分の石が残存しており、燃烧部上から数個体分の羽釜片が集中して出土している。一方の南西



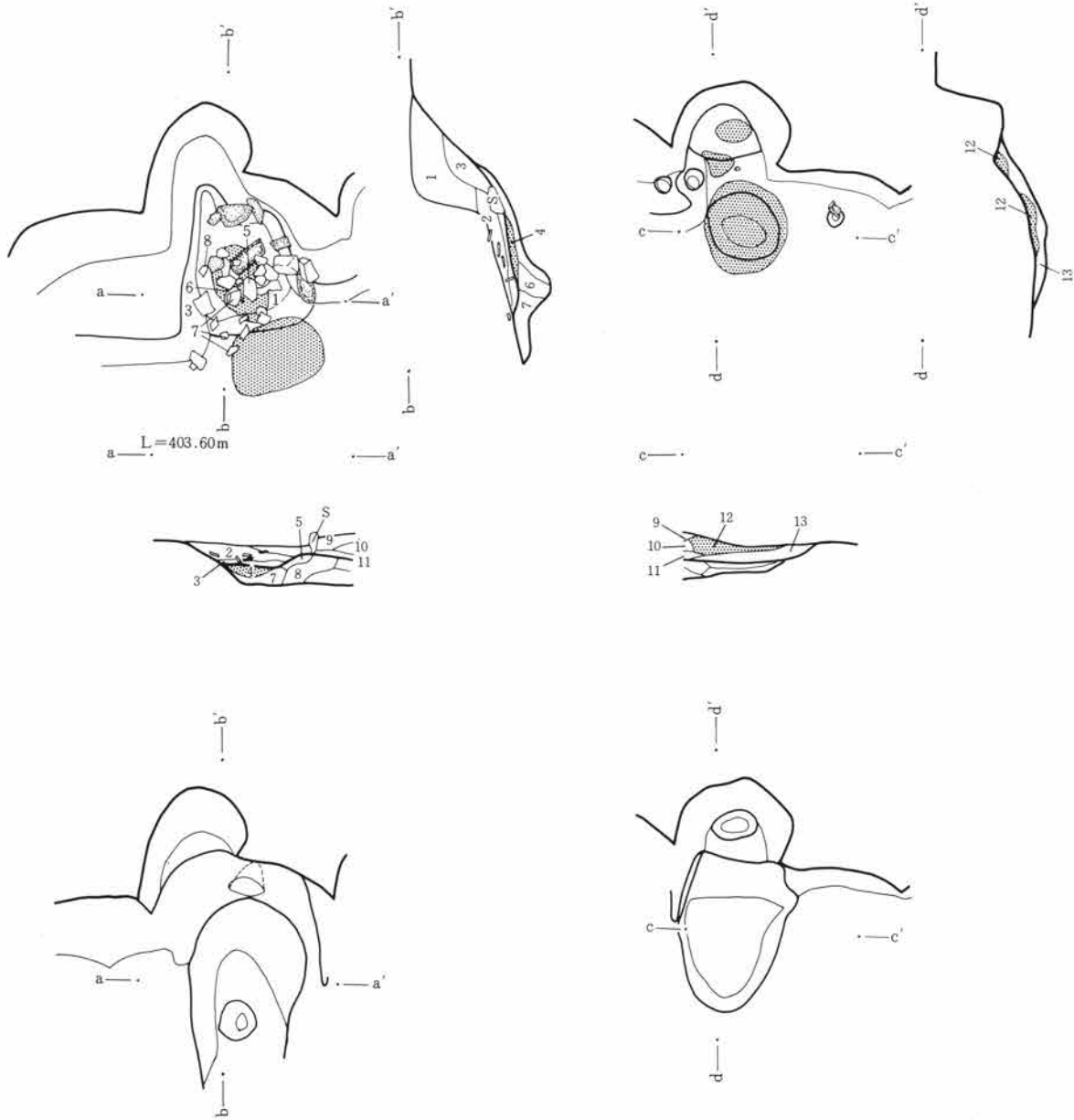
第125図 第26号住居址掘り方

側のカマドは、ソデ材としての石などの構築物がすべて抜き取られ、スラグの他、目立った遺物の出土もなく、明らかに廃棄された状態で検出された。この2基のカマドの新旧関係は、土層断面の観察から見ても、北東側のカマドに南西側のカマドの北ソデが切られており、北東側のカマドが新しいと考えられよう。おそらく、住居内のカマドの廃棄→新設と思われる。掘り方調査で検出された2基の貯蔵穴もそれに伴う移動と捉えられよう。 **掘り方** 床下からは前述の貯蔵穴を含め10基の土坑を検出した。用途は不明であり、現状では多くを把握できないが、住居内の施設の移動を考えると、今後の推察が必要であろう。 **遺物** カマドより羽釜(1・3・5・6・7)、椀(8)が出土している。床直より鉄製の鎌(9)の他、椀・杯の小破片が出土したが図示し得なかった。また覆土中より羽釜(2)が出土している。床下からは、床下土坑(P₇)より石製紡錘車(10)が出土した。(新倉)

第27号住居址

位置 58~61E00~04。調査地中央西寄りの住居址群のほぼ中央に位置する。北西に第106号住居址が近接する。 **方位** 住居；東南東。カマド；東南東。 **形状** 約580×460cmの隅丸方形を呈し、カマド北側にテラス状の突出段を持つ。他の壁が直線的に対し、南西壁のみは中央部がややふくらむ。 **覆土** 遺構は第V層で確認され、覆土は6層に分層される。VI・VII層土を主体として自然堆積の埋没状態を示す。 **床面** VI・VIII層土の混土による貼り床である。壁溝はカマド部分を除き全周する。 **柱穴** 4穴検出された(P₂・P₃・P₅・P₇)。南西壁側の柱穴(P₅・P₇)は北西側に寄り、P₅は西コーナー部の壁をえぐるように掘られている。 **貯蔵穴** P₁が貯蔵穴と考えられよう。 **カマド** ソデ・燃焼部壁・煙道部壁・天井部に

第3節 平安時代の遺構と遺物



カマド

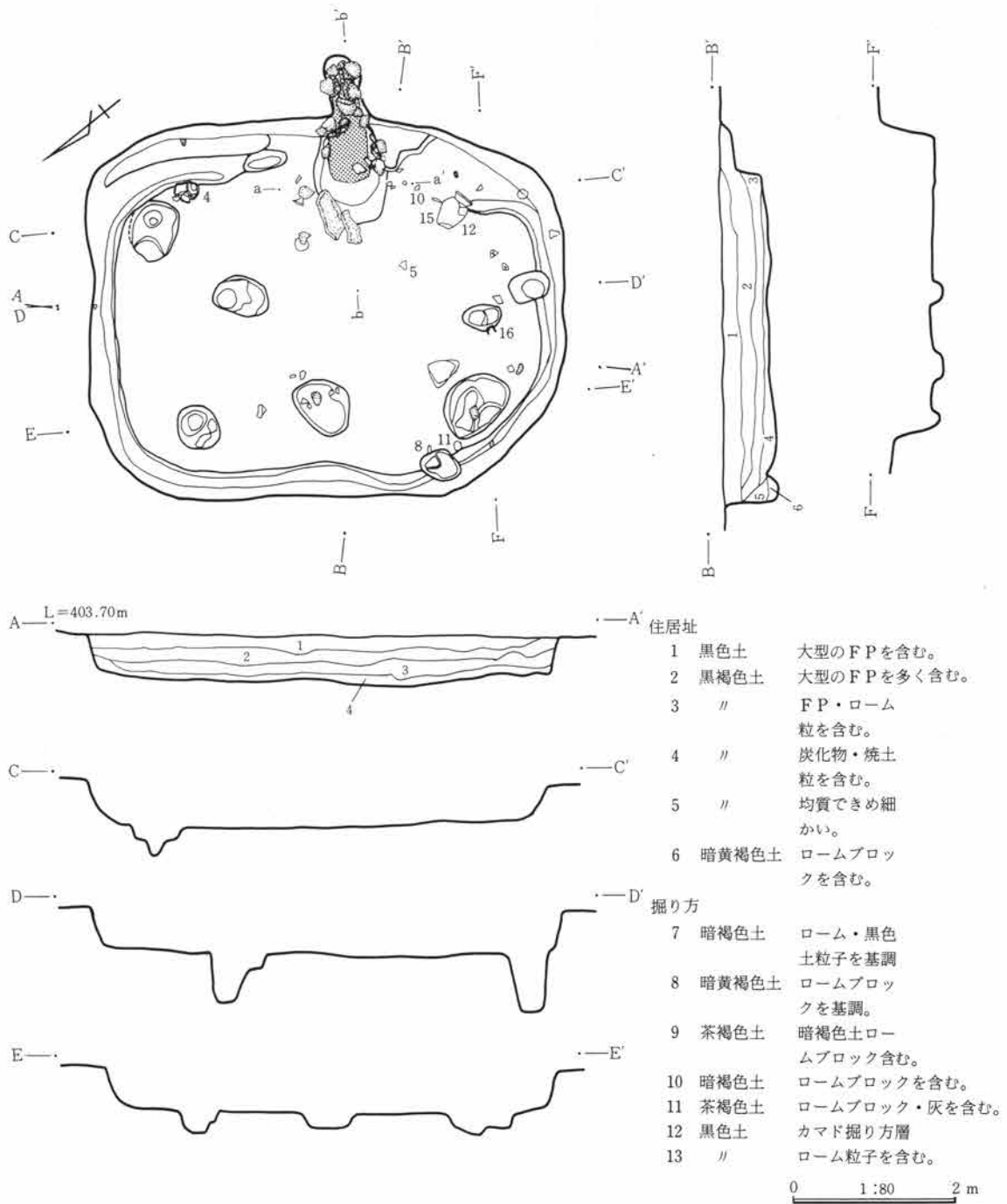
- 1 黒色土 住居覆土1に類似する。
- 2 // 焼土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 少量の焼土粒を含む。
- 4 焼土層
- 5 褐色土 焼土粒子を多量に含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。

- 8 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 9 褐色土 FP少量含む。
- 10 // 焼土粒・ローム粒を含む。
- 11 // 焼土粒・ローム粒を多量に含む。
- 12 焼土層
- 13 暗褐色土 ロームブロックを含む。

0 1:40 1 m

第126図 第26号住居址カマド・カマド掘り方

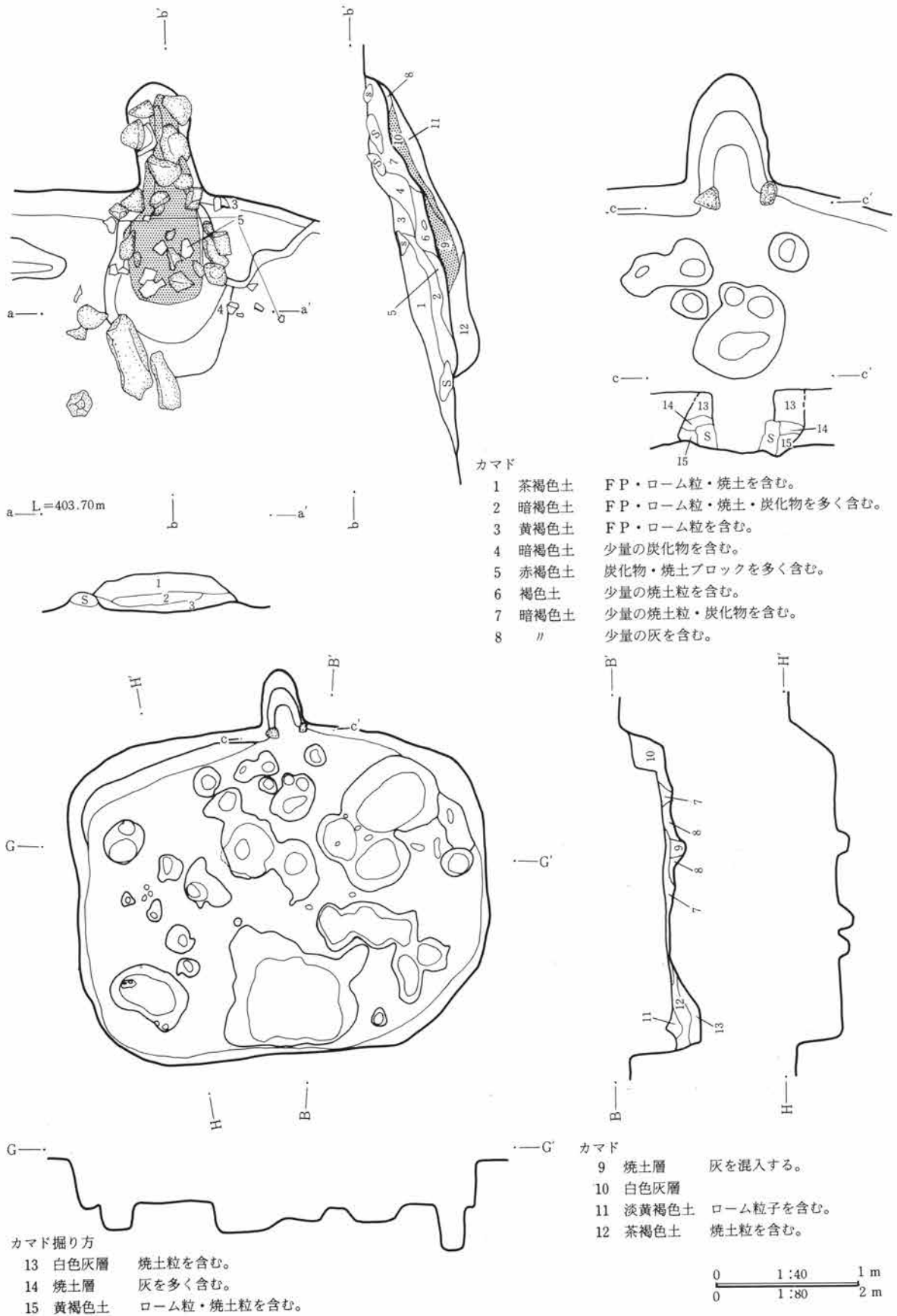
第三章 検出された遺構と遺物



第127図 第27号住居址

礫を積み、VIII層土を詰め固め作られている。残存状態は比較的良好であり、カマド付近には、構築に使用された礫が散布しており、礫を多用したカマドであることが判明する。掘り方 20余基の床下土坑が検出され、VIII層土ブロックを多く含む土で埋まっている。遺物 床直より須恵器大甕 (12) 刀子 (15) などが出土した。床上より、墨書を施した椀が南西コーナー部で出土している。カマドからは、須恵器甕 (3・5) が、床下からは、羽釜 (4)・土師器甕 (1・2) が出土している。 (新倉)

第3節 平安時代の遺構と遺物



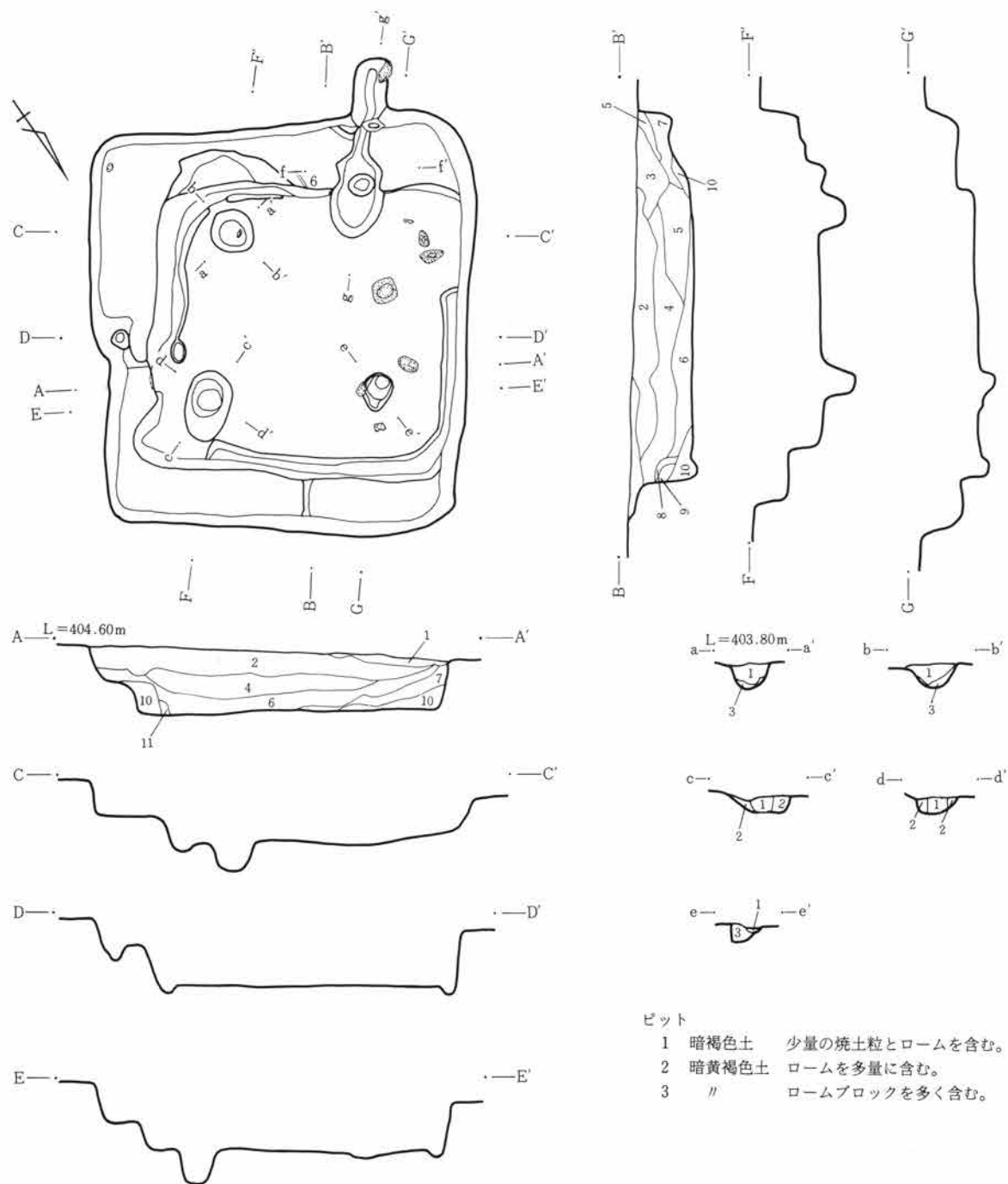
第128図 第27号住居址カマド・カマド掘り方及び掘り方

第三章 検出された遺構と遺物

第29号住居址

位置 16~19D21~24。調査地南東に位置し、北東約20mに第33号住居址が位置する。 方位 住居；南西。カマド；南西。本住居址は確認された同時期の住居址中唯一の西壁にカマドを設けた住居址である。

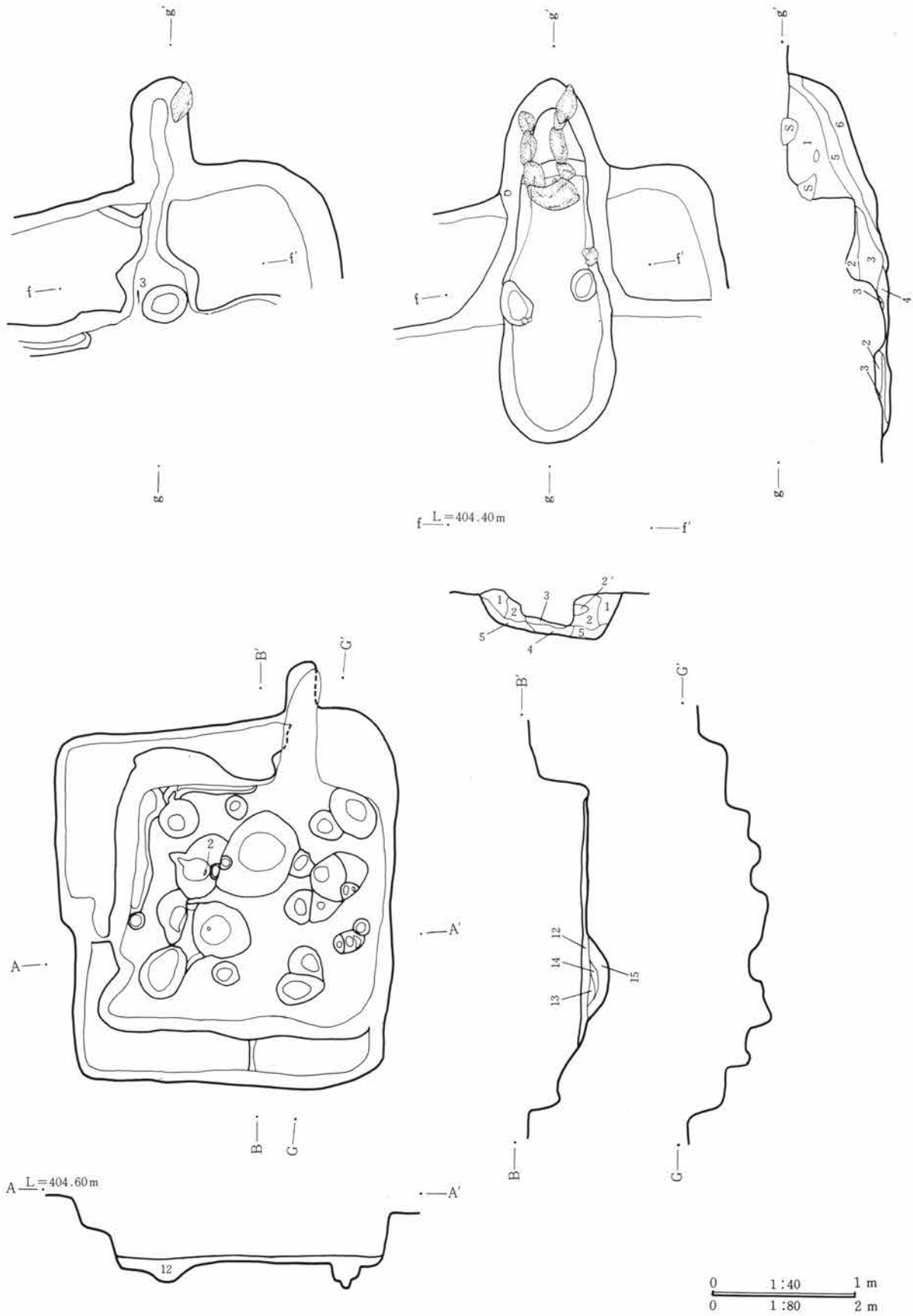
形状 400×360cmの方形を呈し、南西壁（カマド側）・南東壁・北東壁にテラス状突出段を「コ」字形に設け、テラス部と合わせたプランは、確認面において約500×480cmを測る。テラス部分は床面より30~40cm程の所に作られ、南東壁テラス部中央には補助柱穴と考えられるピットが設けられている。また、テラス部分には、



第129図 第29号住居址

0 1:80 2 m

第3節 平安時代の遺構と遺物



第130図 第29号住居址カマド及び掘り方

第三章 検出された遺構と遺物

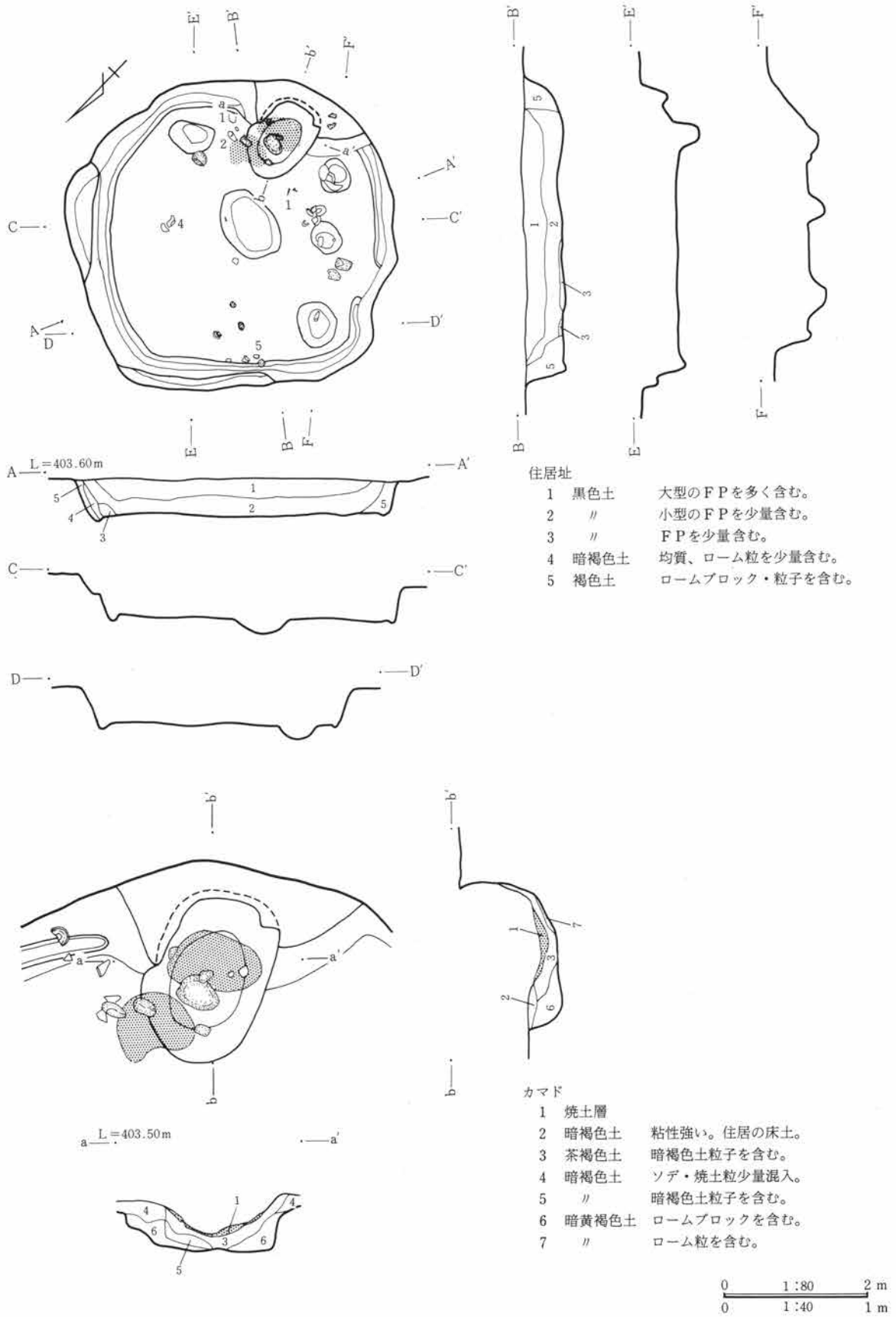
場所により段差が認められる。これは、棚としての用途によるものか、又は拡張等が行なわれたためかと思われる。 **覆土** 11層に分層され、VI～VIII層土を主体として自然堆積の埋没状態を示す。 **床面** VIII層土を基調とする貼り床でしまりがある。壁溝は西コーナー部、東コーナー部、カマド前部を除きほぼ全周する。 **柱穴** P₁～P₃、P₆が主柱穴であろう。補助柱穴はP₄・P₅と考えられる。 **貯蔵穴** 掘り方調査で検出されたP₇が位置的に貯蔵穴と思われる。 **カマド** 残存状態は良好で、煙道部は構築材としての石がそのまま残り、燃焼部も天井は崩落しているものの、燃焼面及びその壁は残っていた。構築方法は、掘り方に礫を並列して積み、煙道部と天井部にも横に礫を渡し、煙道部はF・Pを含むVI層土を詰め固め補強している。燃焼部はテラスの一部をえぐり込み、VIII層土と粘土を固め作られている。また、テラス部があるために、煙道は約110cmを測る長いものになっている。 **掘り方** 床下に14基余りの土坑が検出された。中でも住居址中央部の3基の床下土坑(P₈～P₁₀)は掘りも深く大きいしっかりしたものである。 **遺物** 本住居址からは遺物の出土が著しく少なく、覆土中出土の土器片も小片のため図示し得なかった。しかしながら、鉄製品の遺存度は非常に良好であり、(1・3・4)はカマド使用面より、鍵(5)は覆土中、刀子(6)はテラス上より出土している。 (新倉)

第29号住居址土層註		8 暗褐色土	ローム粒子を含む	カマド土層	
1	黒褐色土 砂質土	9 暗黄褐色土	ローム粒・黒色土含む	1	黒色土 大型のF・Pを含む
2	暗褐色土 砂質土・ローム粒子を少量含む	10 黄褐色土	ローム粒子を多く含む	2	黄褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
3	// 砂質土・ローム粒F Pを含む	11 //	ロームブロック	2'	// 2にF Pを混入する
4	黄褐色土 黒褐色土・ロームブロック	12 貼り床	ロームブロックを基調	3	// 焼土ブロックを多く含む
5	// F Pを多く含む	13 暗褐色土	ロームブロックF P含む	4	黒褐色土 若干粘質ロームブロック含む
6	// ロームブロックを多く含む	14 黒色土	ロームブロックを含む	5	// F Pを含む
7	暗褐色土 ロームブロックを多く含む	15 暗褐色土	多量のロームブロック含む	6	// 焼土ブロックを多く含む

第30号住居址

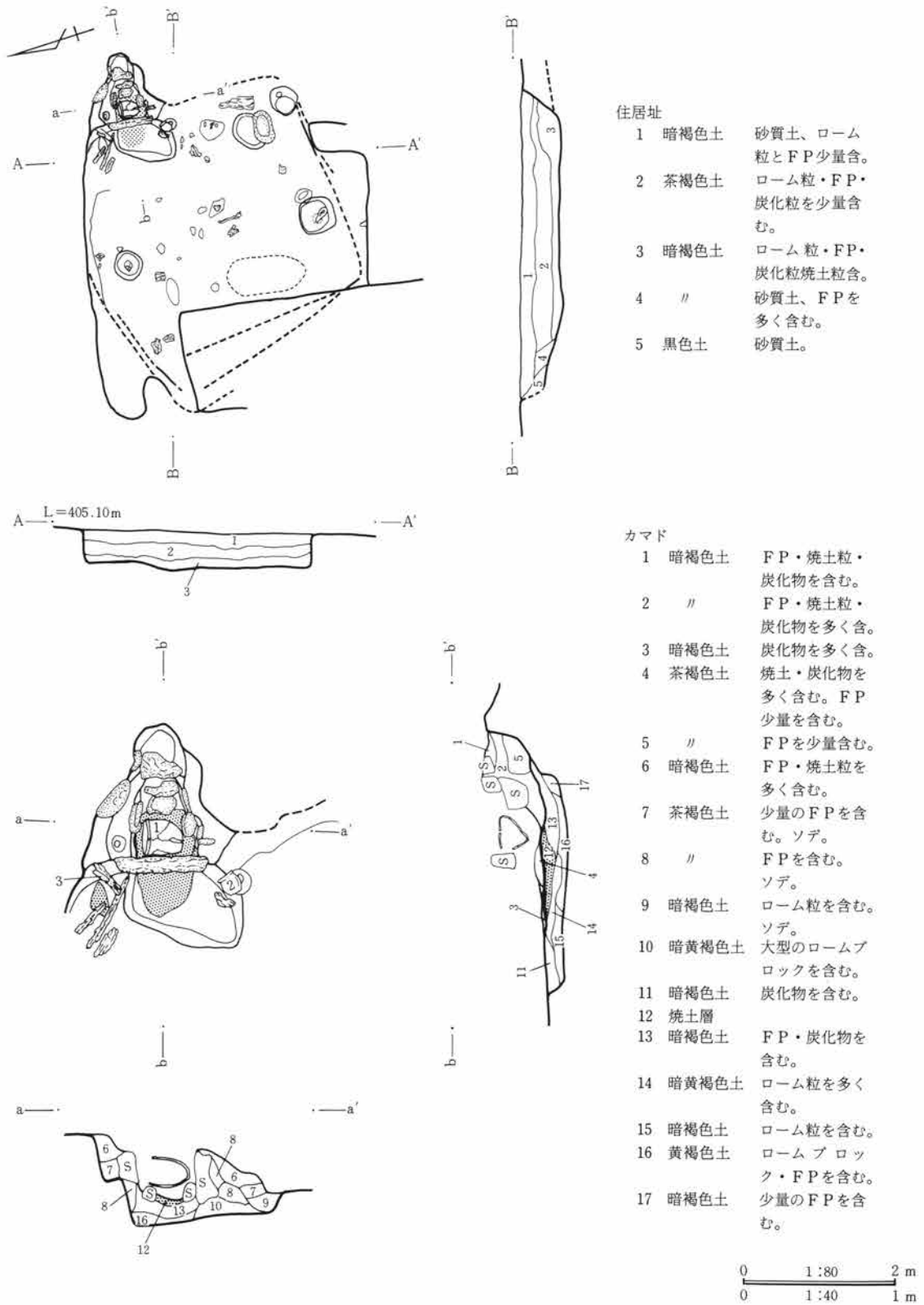
位置 58～61D47～50。調査地中央西寄りの住居址群の南端に位置し、南東に第26号住居址、北に第27号住居址が近接する。 **方位** 住居：南東。カマド：南東。 **形状** 約420×410cmの隅丸方形を呈する。西コーナー部が住居内側に入り込み、南東壁より南西壁までが弧状を描くため、平面プランは不定形に近いものとなる。 **覆土** 5層に分層される。自然堆積であろう。 **床面** 第VIII層(黄褐色ローム)の地床であり、貼り床を持たない。壁溝はカマドを除き、ほぼ全周する。 **柱穴** ピットは南西壁寄りに3基(P₂・P₃・P₄)、東コーナー付近に1基(P₁)が検出されたものの、いずれも浅く柱穴であるか明白ではない。 **貯蔵穴** 位置的にはP₁・P₂が該当するが前述したように、掘り込みが浅いため、断定できない。他に住居址中央のP₅が形状からも可能性は大きい。 **カマド** VIII層土及び粘土を固め構築される。煙道部は壁外には出ず、燃焼面がそのままゆるやかに立ち上がる。燃焼部から、おそらく構築材として使用されたと思われる自然石が出土した。ソデの芯材としてであろうか、掘り方調査の結果、ソデ石痕が検出された。 **掘り方** 掘り方調査は実施したが、床は地床であり、明確な床下遺構は検出されなかった。 **遺物** カマドより土釜ともとれる土師器甕(1)、灰釉陶器碗(6)が出土した。カマド周辺からは灰釉陶器碗(2)、皿(3)が出土している。また床直からは、灰釉陶器碗(4・5)が認められたように、本住居址は灰釉陶器の出土量が多く、特異な存在と考えられよう。このように遺物が片寄って出土する例は他の住居址にも見られる。第25号住居址の碗・杯類、第26号住居址の羽釜、第29号住居址の鉄器、第106号住居址の碗・杯類と1軒の住居址に残される遺物が良好なセット関係を示さない例がある。もちろん、遺物の残存率と我々が図示し得る個体の関係もあるが、1住居址に1器種の出土を多く見るということは、例えば、カマドへの羽釜片の再利用、当時の日常雑器のあり方など考えられる問題は多い。 (新倉)

第3節 平安時代の遺構と遺物

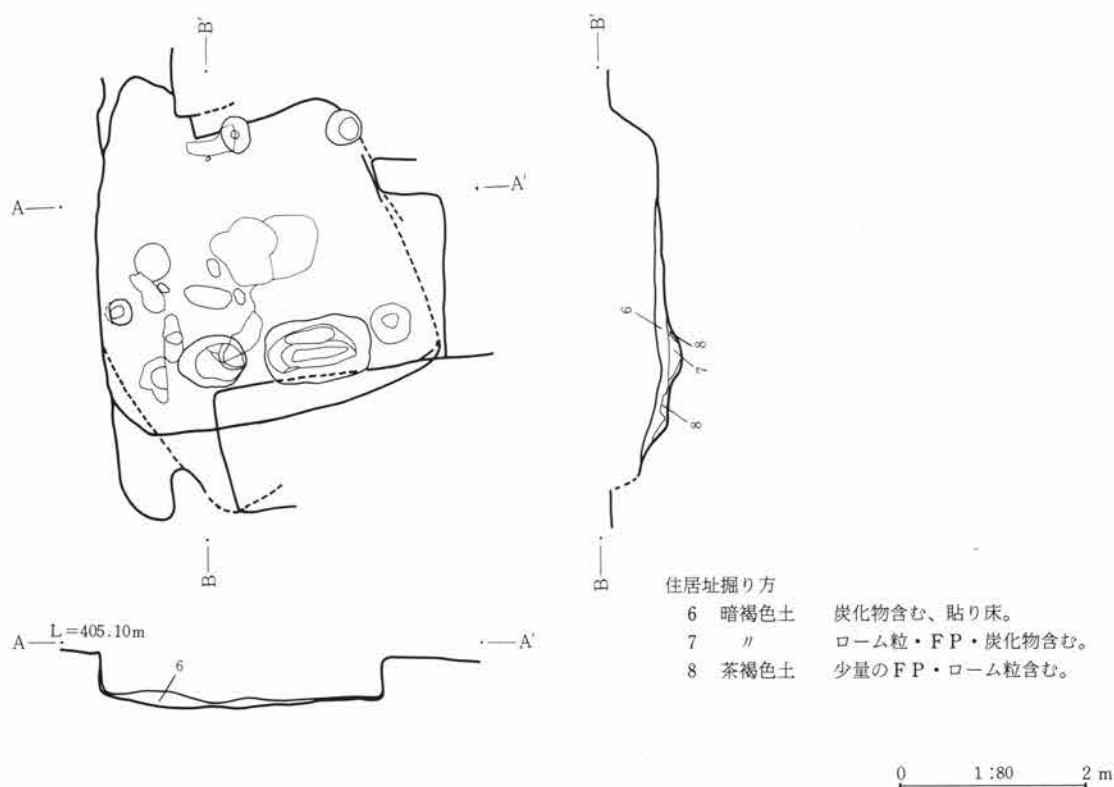


第131図 第30号住居址及びカマド

第三章 検出された遺構と遺物



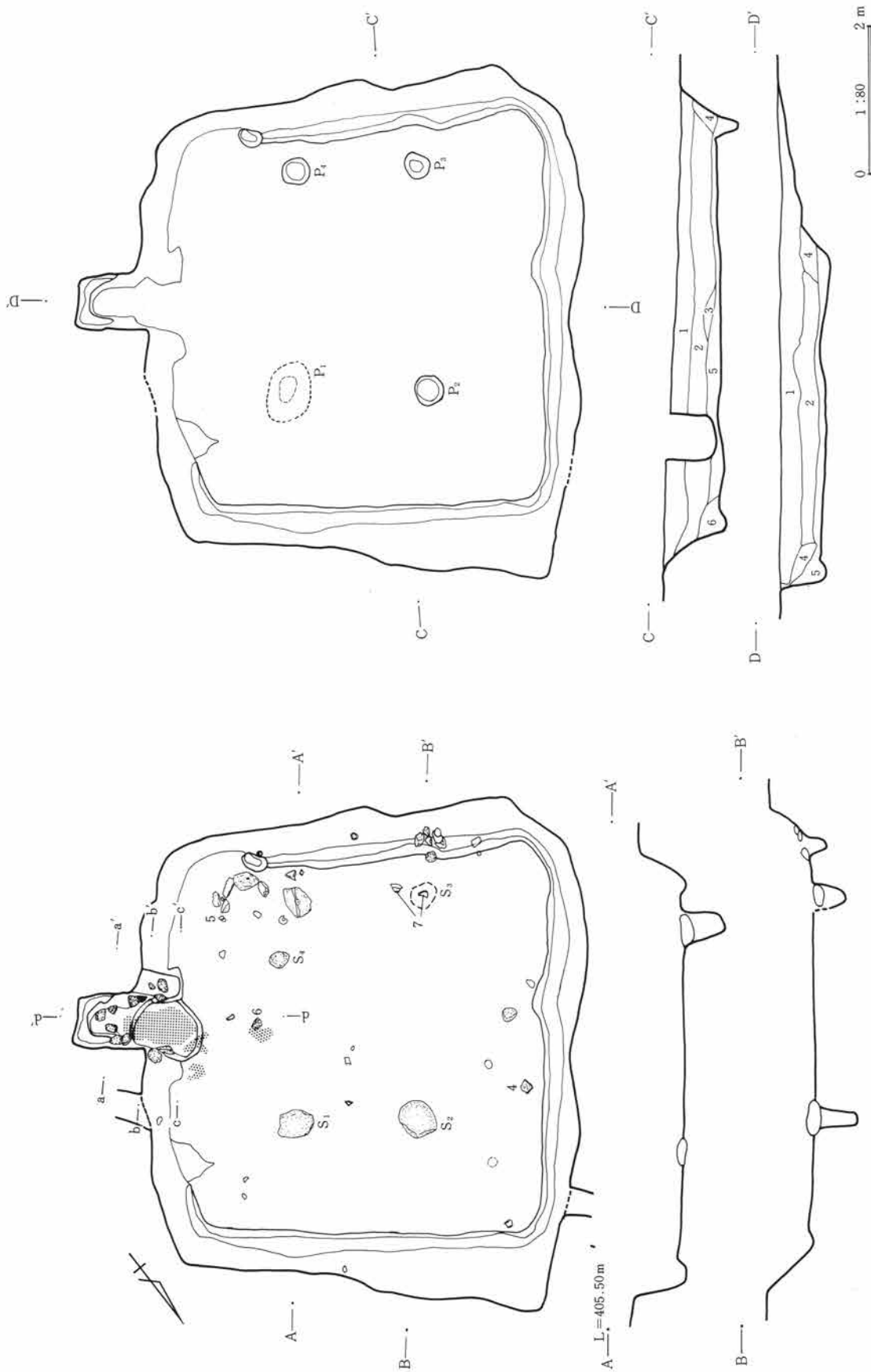
第132図 第31号住居址及びカマド



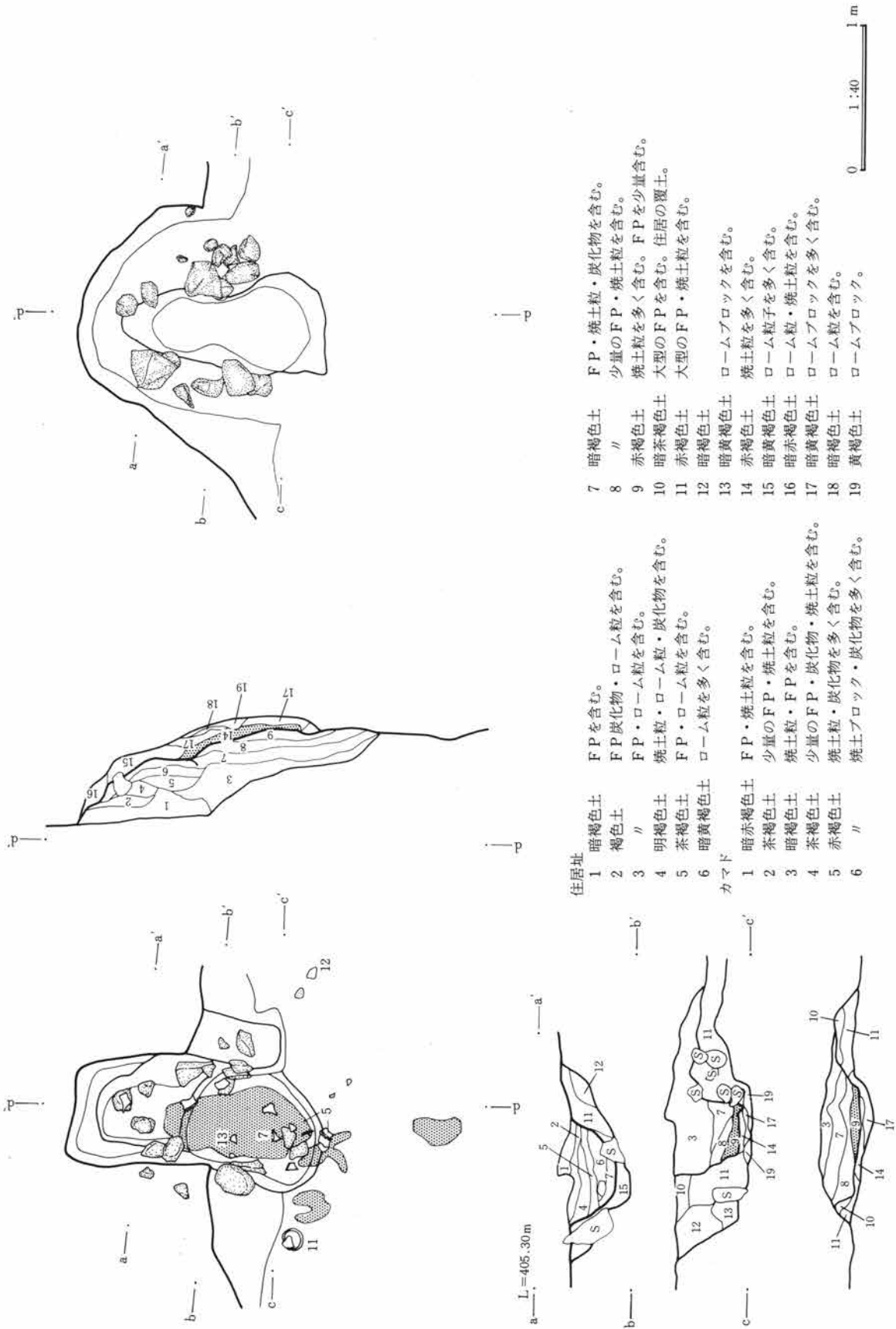
第133図 第31号住居址掘り方

第31号住居址

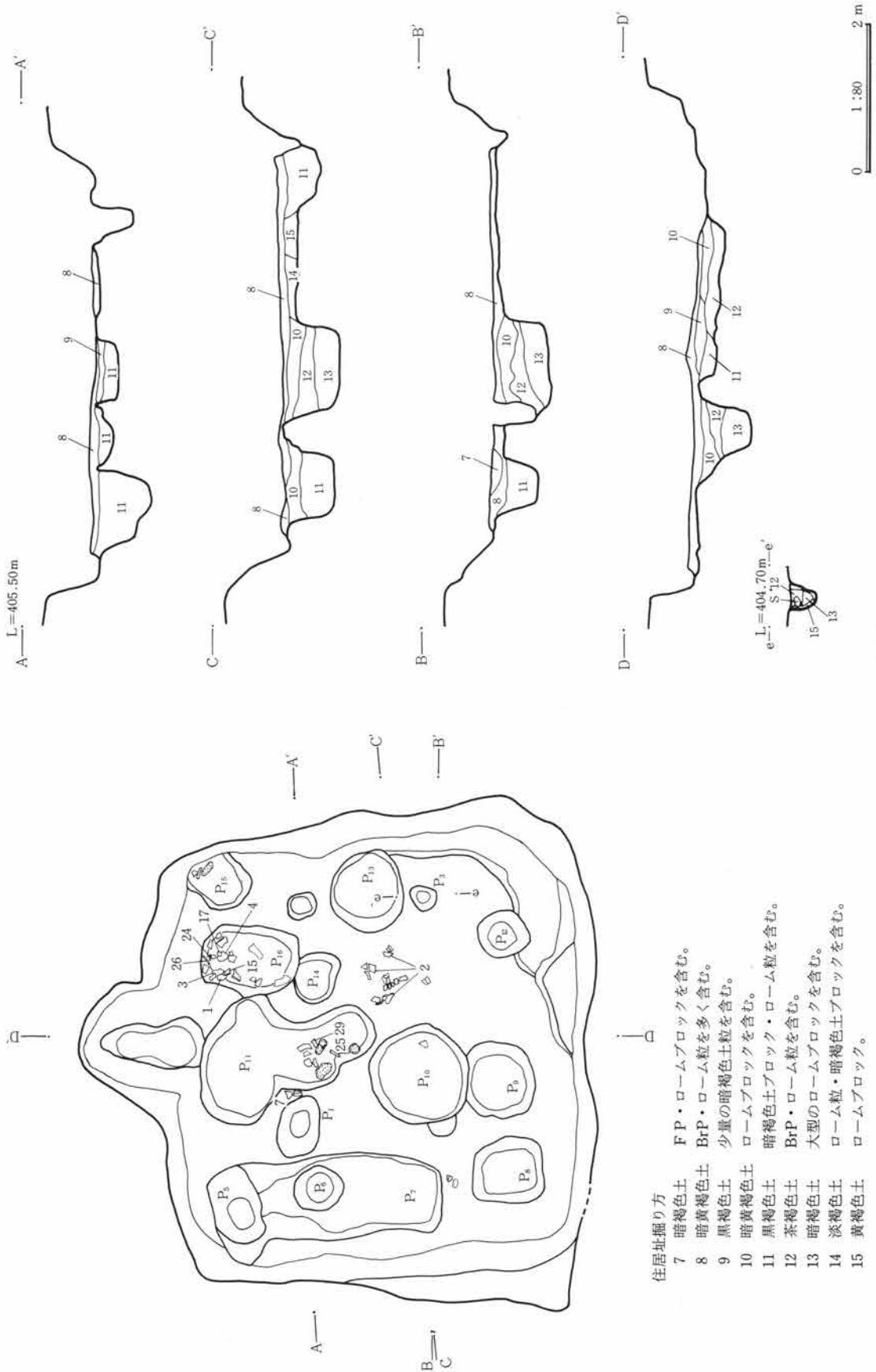
位置 17～21D31～33グリッド。調査地南東に位置し、南に第33号住居址が近接する。 **方位** 住居：東北東。カマド；東。 **形状** 西壁を試掘調査の時トレンチにより削平され、北・東・西壁とも調査時において不明瞭であったため、一部を除き削平される。セクション及び残存する壁の一部から推定すると、300×300cm程の正方形を呈するものと思われる。 **覆土** VI～VIII層土を主体に5層に分層できる。 **床面** 床面はVIII層土ブロックを含む暗褐色土による貼り床である。壁溝は検出できなかった。また、床面に少量ではあるが炭化材が残っていた。このことから焼失家屋である可能性もある。 **柱穴** P₁・P₃・P₄を床面において検出し、その後掘り方調査により、P₅・P₇を確認した。この5穴が柱穴であろう。 **貯蔵穴** 西壁中央部に位置するP₂が貯蔵穴と考えられる。径110×70cmの長方形を呈す。 **カマド** 東壁中央のやや北寄りに検出された。残存状態は良好であり、両ソデ・燃烧部・煙道部・天井部が残り、ほぼ完全な形で検出された。燃烧部には羽釜(1)が落ち込んだ形で横位にて出土した。燃烧部壁及び煙道部には礫を並列して積まれ、天井部及びソデ石には切石が用いられている。これらの礫をF・P混じりのVIII層土で詰め固めている。また、燃烧部の北に接して炭化材が出土しており、カマド内の羽釜の出土と合わせて、使用時のまま埋没したものと考えられる。 **掘り方** 床下遺構としては、西南壁下に床下土坑2基(P₆・P₈)を検出した。また、床面の焼土化が床下にまで及んでおり、やはり焼失家屋である可能性が強い。 **遺物** 前述の羽釜(1)の他に、カマド内から須恵器小型甕(2)、燃烧部北の炭化材の上に刀子(3)が出土している。(新倉)



第134図 第32号住居址



第135図 第32号住居址カマド及びカマド掘り方



第32号住居址

位置 18～22E39～43グリッド。 **方位** 住居；東南東。カマド；南東。 **形状** 655×605cmを測る方形のプランを呈し、壁高は56cmを測る。 **覆土** IV・VI・VII層土の混土により覆われている。 **床面** VI・VII層土ブロックをたたいた貼り床で、広さは510×505cmを測る。幅25cm深さ9cmを測る壁溝が南西壁を除き周っている。 **礎石** 4カ所に検出されている。S₁（径50×36cm厚さ12cm）とS₂（径50×45cm厚さ20cm）は自然礫である。S₃（径34cm厚さ16cm）は、当初たたかれた低い盛り土の下に隠されていたが、柱穴P₃の上部より出土した。S₄（径45×30cm厚さ18cm）には加工痕がある。S₁からS₂及びS₃からS₄の距離は168cm、S₁からS₄・S₂からS₃の距離は300cmを測る。これらは位置的に南西に片寄っている。 **柱穴** 3カ所あり、それぞれP₂径40cm深さ58cm、P₃径36×34cm深さ42cm、P₄径36×34cm深さ56cmを測る。このうち、P₂はS₂の下に開口した状態で検出され、P₄もS₄の下から一部が開口した状態で発見された。P₃はS₃に伴って検出された。S₁下の柱穴は確認されなかったが、位置的に掘り方調査時に確認されたP₁径45×30cm深さ床下で20cmが考えられる。断面の観察ではP₃・P₄の柱痕は径20cmを測る太いものである。 **カマド** 住居東南壁を、幅102cm奥行き100cmに掘り出し、径192×98cmの浅い掘り込みを埋め戻して作っている。ソデから掘り出し部にかけて北側に6個、南側に8個の礫を置き、これをVII層土を中心とした土で固めてカマドを作っている。ソデは床面で北側が幅40cm長さ8cm、南側で幅55cm長さ10cmが残存する。燃烧部は径45×40cm、煙道部は長さ73cmを測る。天井は陥没している。 **掘り方** 確認面より70cm以内に掘り込まれている。床下土坑は明瞭なもので13カ所あるが、P₉・P₁₀などは縄文時代の所産である可能性が大きい。住居にかかると考えられるものはP₁₁径130×240cm、深さ74cm、P₁₆径240×170cm、深さ27cmなどがある。住居の壁側へ傾斜する傾向がある。 **遺物** 床下からは甕（1・2・3・4）が出土した。床直・カマドより、羽釜（5・6・7）碗（11・12・13）などが検出されている。床下遺物と床直上の遺物の間には明確な時期差は捉えがたいが、出土量が片寄ることからも本住居址の居住期間に時間的な幅を持たせることも可能であろう。このことは礎石下の柱穴の存在から窺うこともできよう。 (石守)

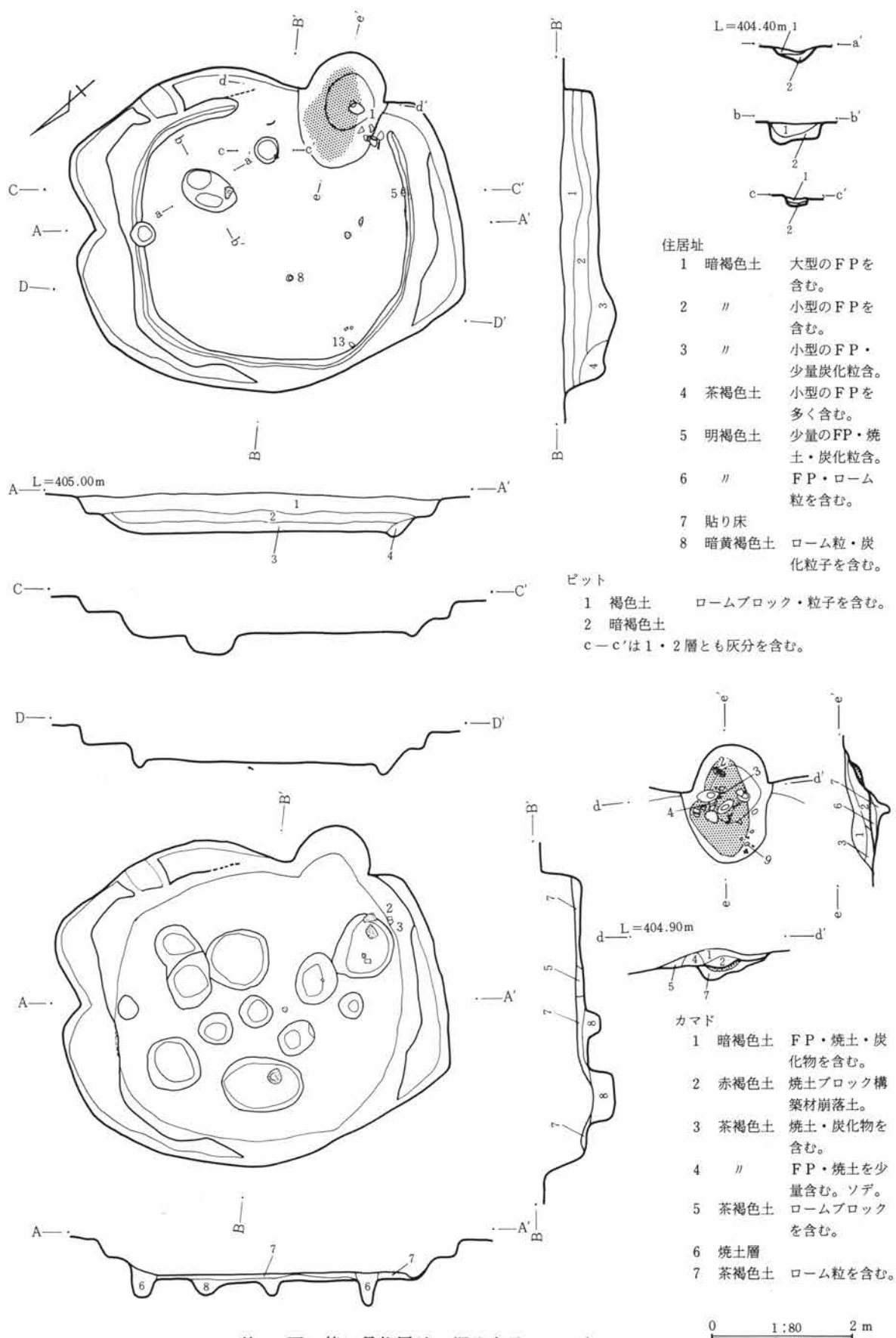
第33号住居址

位置 17～20D31～33。 **方位** 住居；北東。カマド；東北東。 **形状** 約410×410cmの隅丸方形を呈す。南東壁及び北東壁にテラス状の突出段を持つが他の住居と比べその面積は小さい。 **覆土** 4層に分層される。おそらく自然堆積であろう。 **床面** VIII層土を基調とした貼り床である。壁溝はカマド部分を除き全周する。 **柱穴** 床面で2穴確認された。P₁・P₃及び掘り方調査で検出したP₁₂が柱穴と思われる。柱痕は認められなかった。 **貯蔵穴** P₂が形状的に当てはまるが断定できない。 **カマド** 南西壁西寄りに設けられる。残りは悪く、ソデ石痕は残るものの石は抜かれている。煙道部は短く、燃烧面よりゆるやかに立ち上がる。 **掘り方** 土坑10基を検出した。いずれも掘りが深くしっかりしたものである。 **遺物** 覆土中からの出土が多い。床直から耳杯（5）杯（13）等が出土している。

第34号住居址

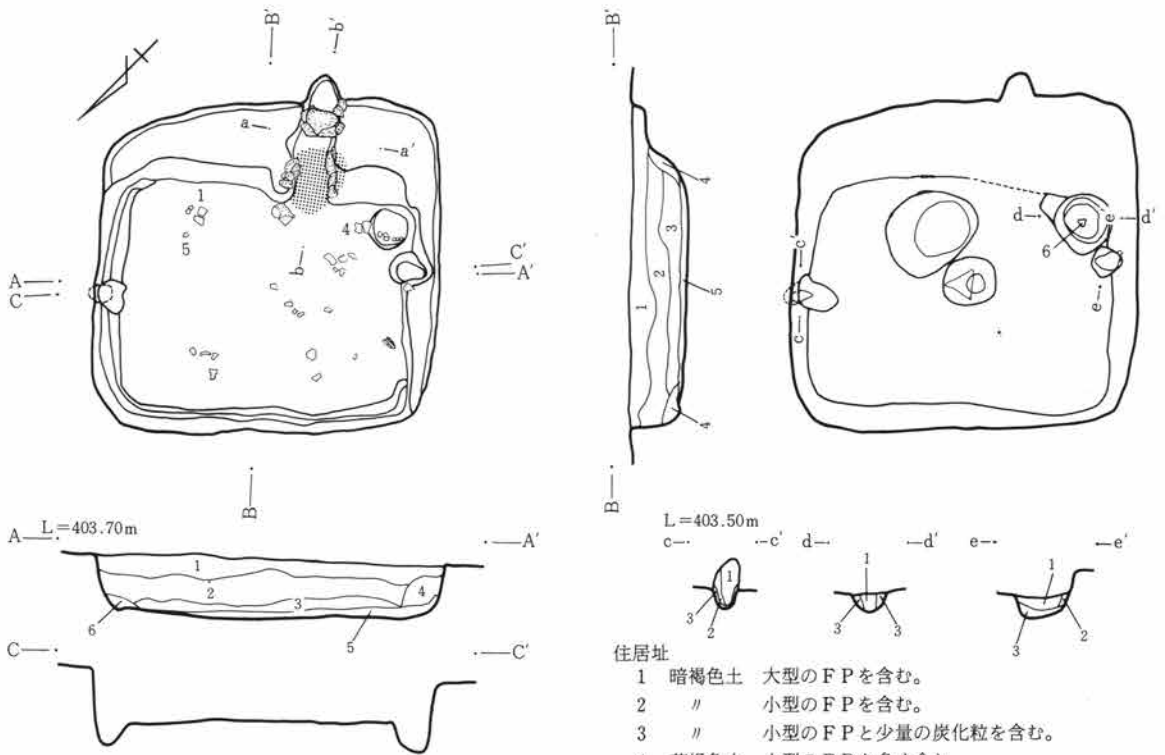
位置 62～65E9～12。 **方位** 住居；南東。カマド；南南東。 **形状** 床面で350×290cmの隅丸方形を呈し、南東壁のカマド両側にテラス状突出段を持つ。確認面では約360×350cmを測る。 **床面** 地床で、壁溝は南東壁を除き周る。 **柱穴** 北東・南東壁に2穴ある（P₁・P₂）。 **貯蔵穴** カマド西のP₃が貯蔵穴と考えられる。 **カマド** 残存状態は良好であり、ソデ・燃烧部壁・天井の礫が残る。煙道部の立ち上がりは比較的急である。 **掘り方** 2基の床下土坑（P₄・P₅）が検出された。 **遺物** 床直より羽釜（1）が出土している。他に壁外より皿（7）が出土している。 (新倉)

第III章 検出された遺構と遺物

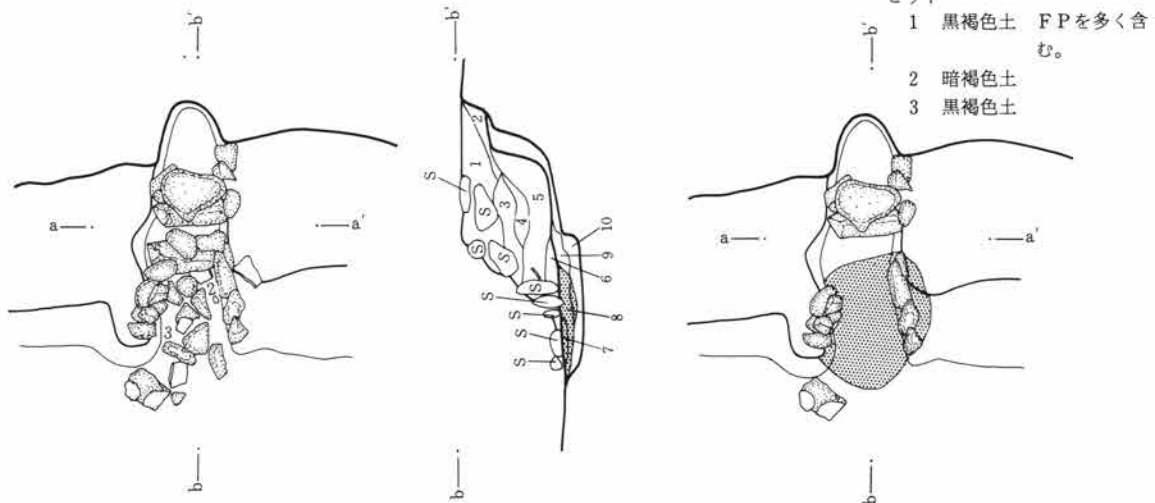


第137図 第33号住居址・掘り方及びカマド

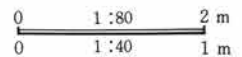
第3節 平安時代の遺構と遺物



- 住居址
- 1 暗褐色土 大型のFPを含む。
 2 // 小型のFPを含む。
 3 // 小型のFPと少量の炭化粒を含む。
 4 茶褐色土 小型のFPを多く含む。
 5 明褐色土 FP・炭化物・焼土を含む。
 6 黄褐色土 ローム粒含む。

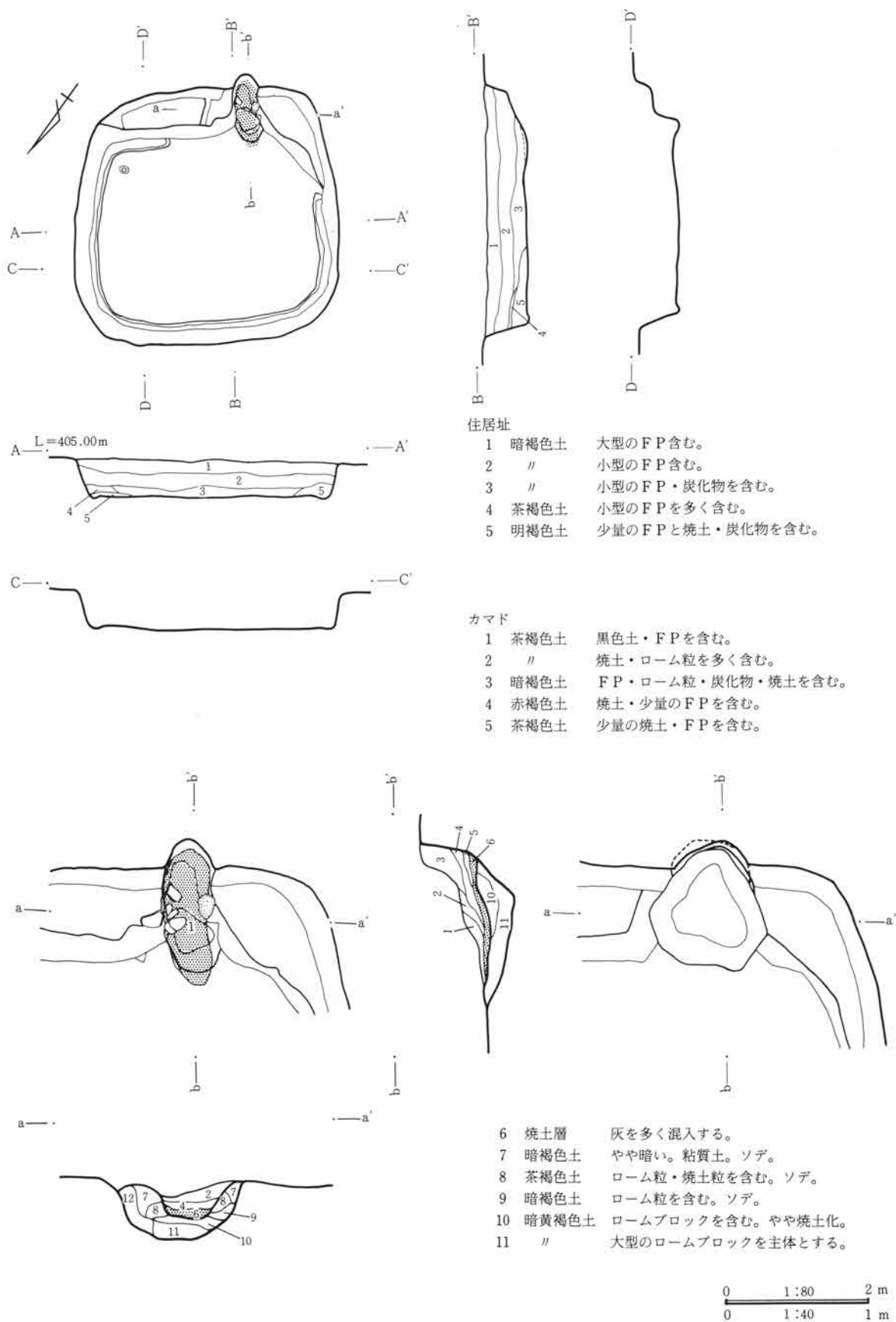


- ピット
- 1 黒褐色土 FPを多く含む。
 2 暗褐色土
 3 黒褐色土
- カマド
- 1 茶褐色土 FP・焼土粒を含む。
 2 暗黄褐色土 ローム粒・焼土粒を含む。
 3 赤褐色土 暗い色調。ローム・焼土ブロックを含む。
 4 暗褐色土 FPを多く含む。
 5 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
 6 暗褐色土 ローム粒・黒色灰を含む。
 7 赤褐色土 やや暗い。焼土・炭化物を含む。
 8 焼土層
 9 茶褐色土 焼土・炭化物を含む。
 10 黄褐色土 ロームブロック主体の層。

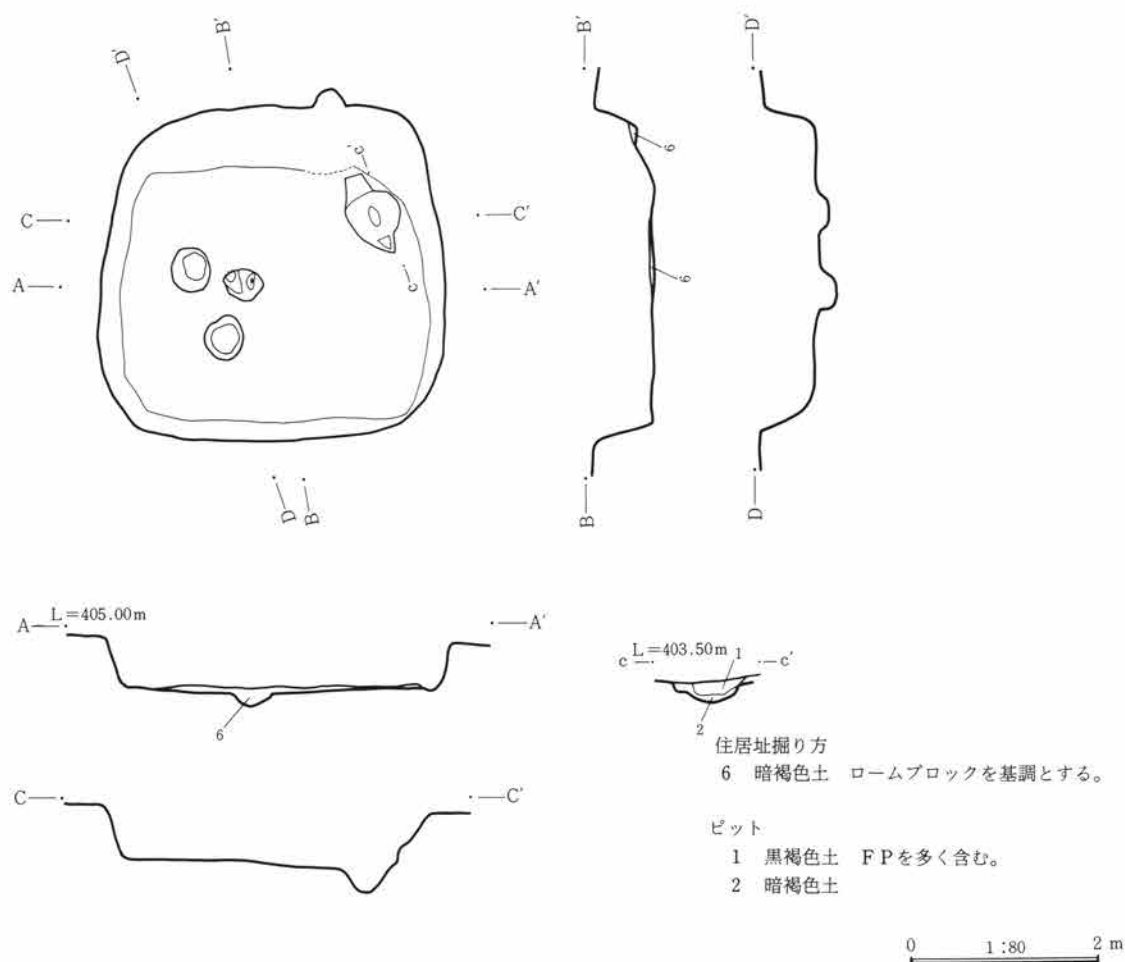


第138図 第34号住居址・掘り方及びカマド

第III章 検出された遺構と遺物



第139図 第35号住居址及びカマド



第140図 第35号住居址掘り方

第35号住居址

位置 52～54 E 23～26。調査地中央西寄りの住居址群の北方50mと離れており、北約12mに第36号住居址が位置する。

形状 床面で約320×270cmの隅丸方形を呈し、南西壁にテラス状突出段を持つ。確認面においては、約370×350cmを測る。また、テラス部分は床面より約30cm程の高さにある。

覆土 5層に分層され、最下層(3・5層)中に炭化物を混入する。

床面 第VIII層の地床であるが、住居址中央の一部にVIII層土を基調とする貼り床が検出された。壁溝は、カマドの周辺を除き周っている。

柱穴 P₁を確認したが、柱穴とは断定し難い。

貯蔵穴 掘り方調査で検出したP₄が貯蔵穴であろう。

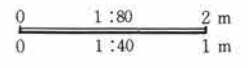
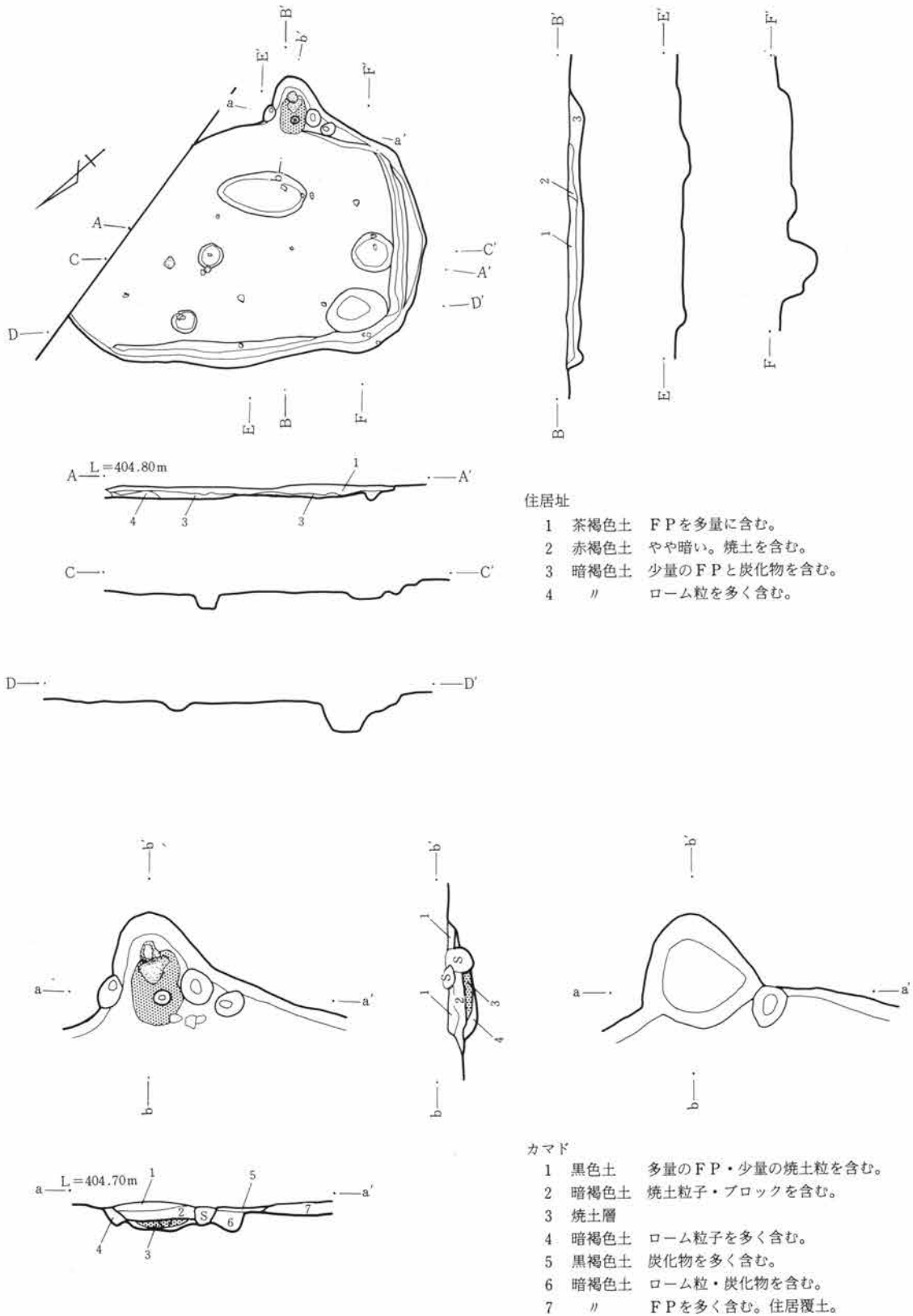
カマド 南西壁やや北西寄りに設けられ、テラス部を掘り込み、煙道は約25cmと短く、立ち上がりは急である。礫を使用したカマドであるらしく、燃烧部に礫が崩落した状態で残存していたが、全体的な遺存状態は悪い。ソデは確認できなかった。また、カマドの掘り方は大きく、不整形を呈する。

掘り方 住居址中央やや南東寄りに2基の床下土坑(P₂・P₃)が検出された。用途は不明である。

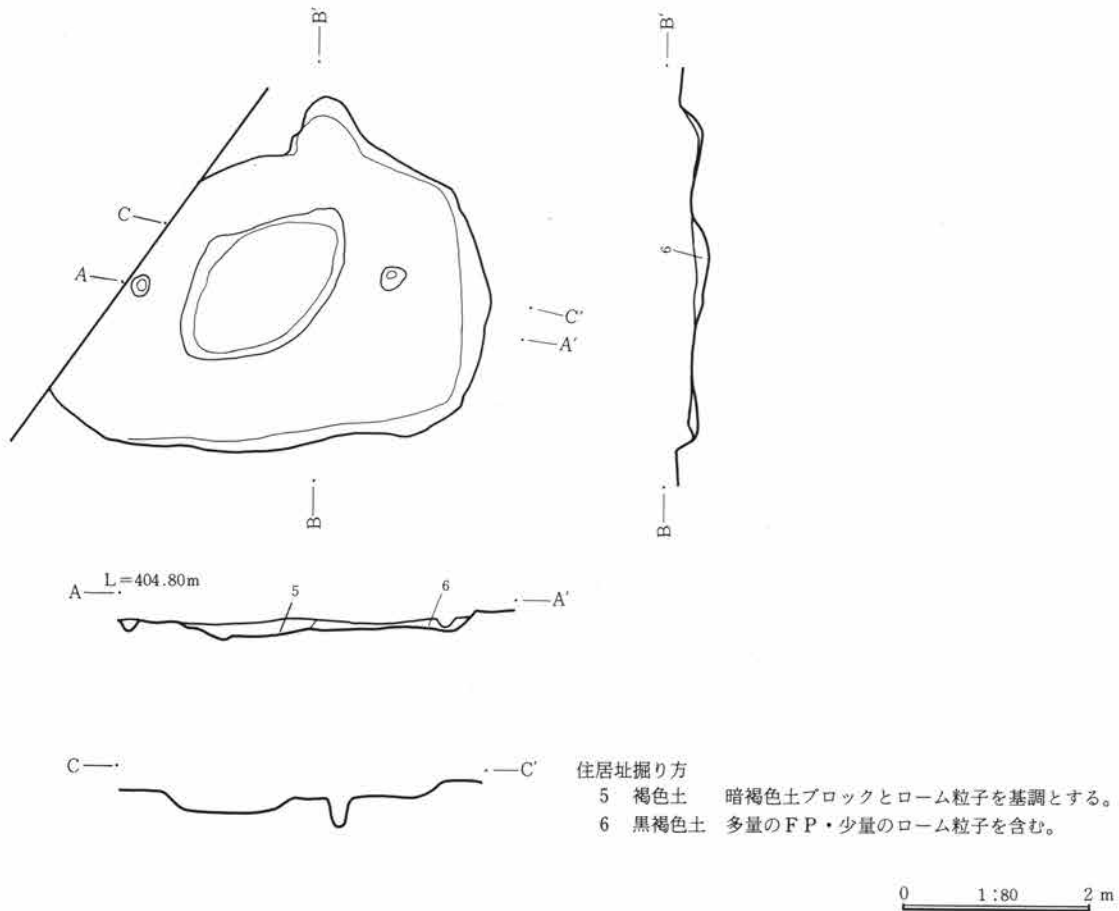
遺物 出土量は少なく、図示し得た遺物も覆土から出土したものが主である。

(新倉)

第三章 検出された遺構と遺物



第141図 第36号住居址・カマド及びカマド掘り方

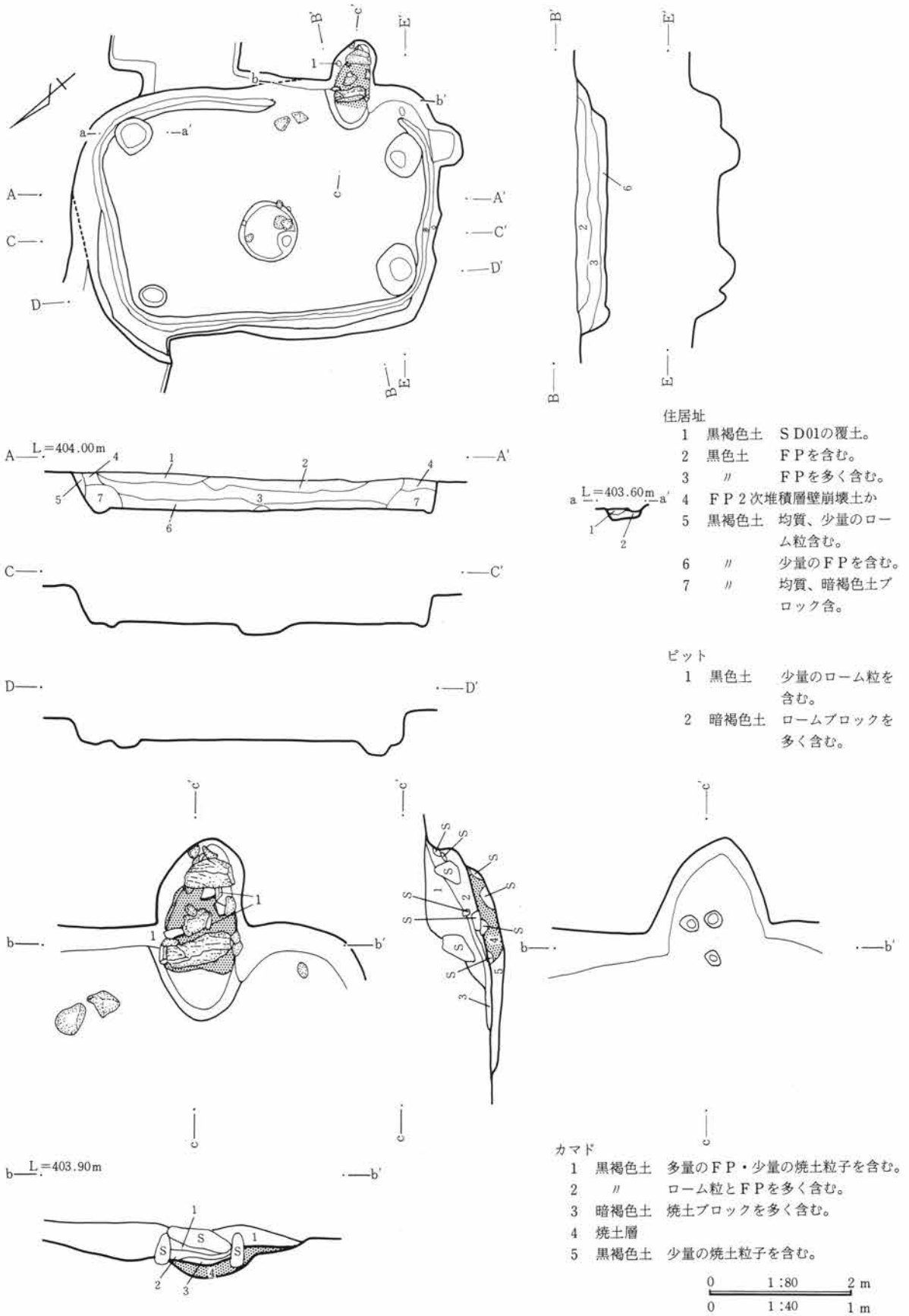


第142図 第36号住居址掘り方

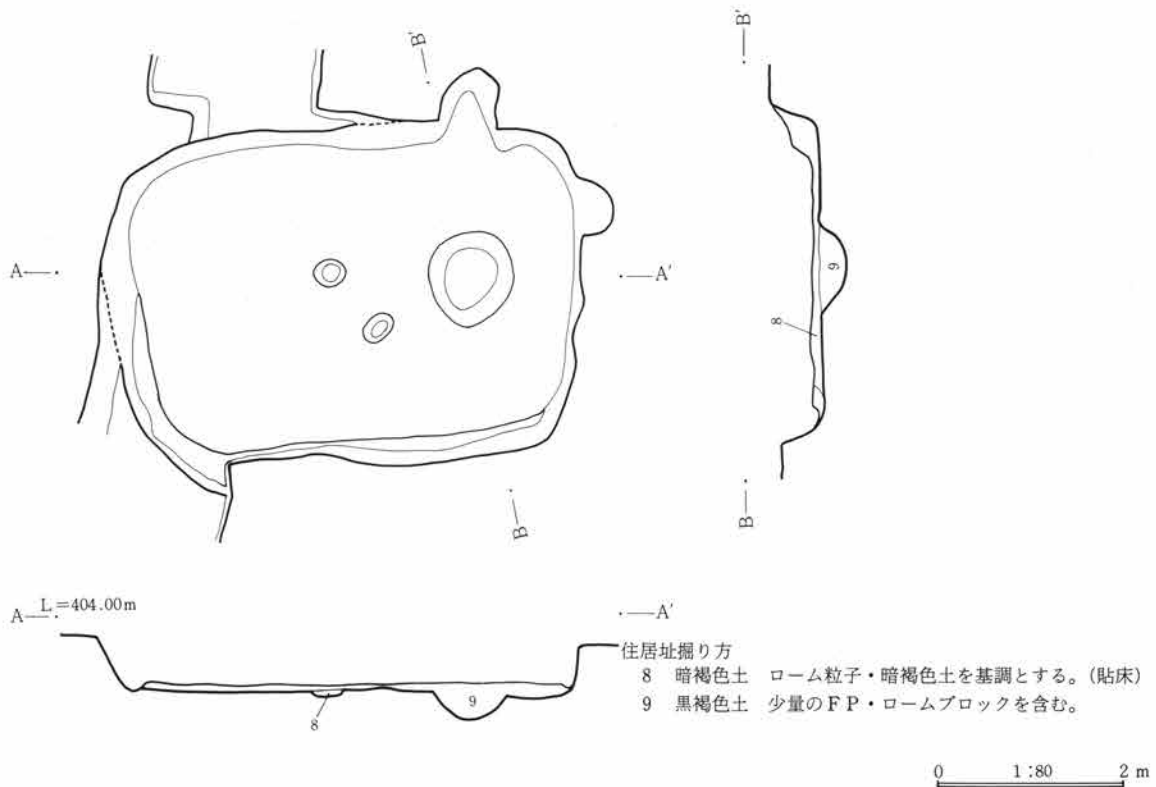
第36号住居址

位置 51～53E 48～50グリッド。第35号住居址の北方に位置する。 **方位** 住居；南東。カマド；南南東。
形状 住居址北東壁が表土耕作等により、攪乱をうけているため全体の形状は不明であるが、およそ440×320cm程の隅丸方形を呈するものと推定される。 **覆土** 4層に分層される。 **床面** VIII層土を基調とする貼り床で、一部F・Pを含む。壁溝は、北西壁と南西壁下で確認された。 **柱穴** P₂・P₃・P₄及び掘り方調査で検出したP₅・P₇が柱穴と思われる。 **貯蔵穴** P₁及びP₆が貯蔵穴と考えられる。特にP₆は掘り込みも深く、しっかりした作りのため、可能性は高い。 **カマド** 南東壁の南東寄りに設けられているが、残存状態は悪く、燃烧面・燃烧部壁の一部・煙道の一部を残すのみである。燃烧部には壁・天井の構築材として使用されたと思われる礫が、崩落した状態で検出された。また、支脚を設けたと思われる小ピットが燃烧部ほぼ中央に、ソデ石痕としてのピットがカマド両脇に確認された。いずれも、カマド廃絶後に壊されていることが判明する。 **掘り方** 浅い不整形の床下土坑 (P₈) 1基が住居址中央部で検出された。用途は不明である。 **遺物** 出土量は極めて少ない。カマド周辺も胴部の小破片が出土したのみで、図示し得ないものである。おそらく、住居址廃棄の際に全てを持ち去ったのであろう。(新倉)

第III章 検出された遺構と遺物



第143図 第37号住居址及びカマド

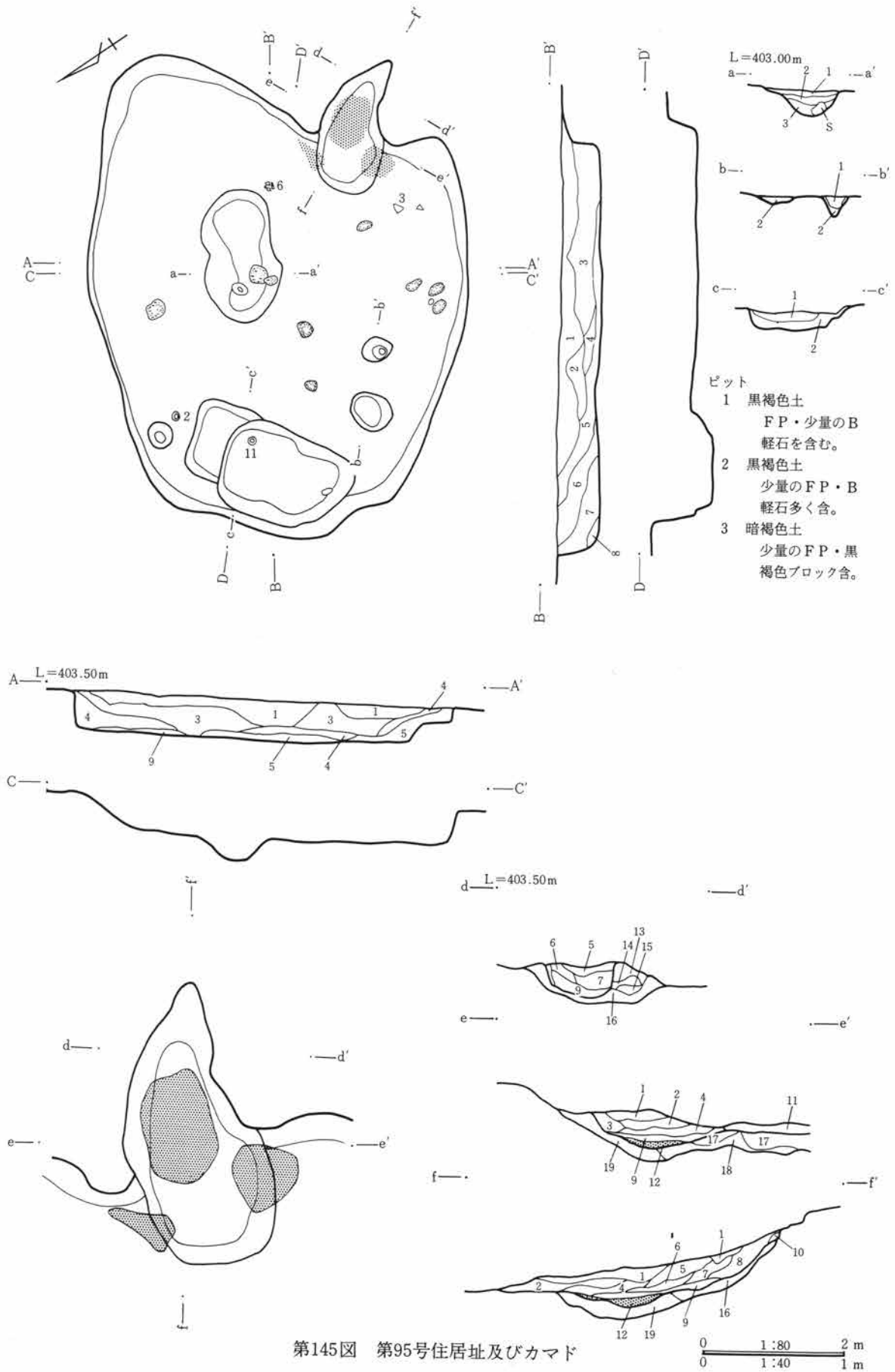


第144図 第37号住居址掘り方

第37号住居址 位置 63～66E 05～08。調査地中央西寄りの住居址群の西端に位置する。南東に第106号、第122号住居址が近接する。 **方位** 住居；南東。カマド；南南東。 **形状** 約510×360cmを測る隅丸方形を呈する。第1号溝と重複し、南東壁の一部と北コーナー部を切られているが、溝は浅く、床面にまでは及んでいない。 **覆土** 1層は1号溝の覆土である。住居址は6層に分層され、VI～VIII層土を中心に自然堆積の埋没状態を示す。 **床面** VIII層土ブロックと暗褐色土の混土による貼り床で固くしまりがある。壁溝は、カマド周辺を除きほぼ全周する。 **柱穴** P₁～P₄であろう。しかし、いずれも浅く、柱痕は確認できなかった。 **貯蔵穴** 住居址中央付近に1カ所、浅い土坑を床面において検出した。 **カマド** 南東壁の西コーナー寄りに設けられ、残存状態は良好である。ソデ石、燃烧部壁石、天井石を残す。特に、天井石はカマド前面のソデ石にかけられていたものと、煙道部にかけられていたものが検出された。燃烧部には使用されたと思われる礫が崩落した状態で出土した。 **掘り方** 床下には、床下土坑が1基(P₅)が検出された。 **遺物** 出土量は少なく、カマドから出土した土釜状の甕(1)がある。(新倉)

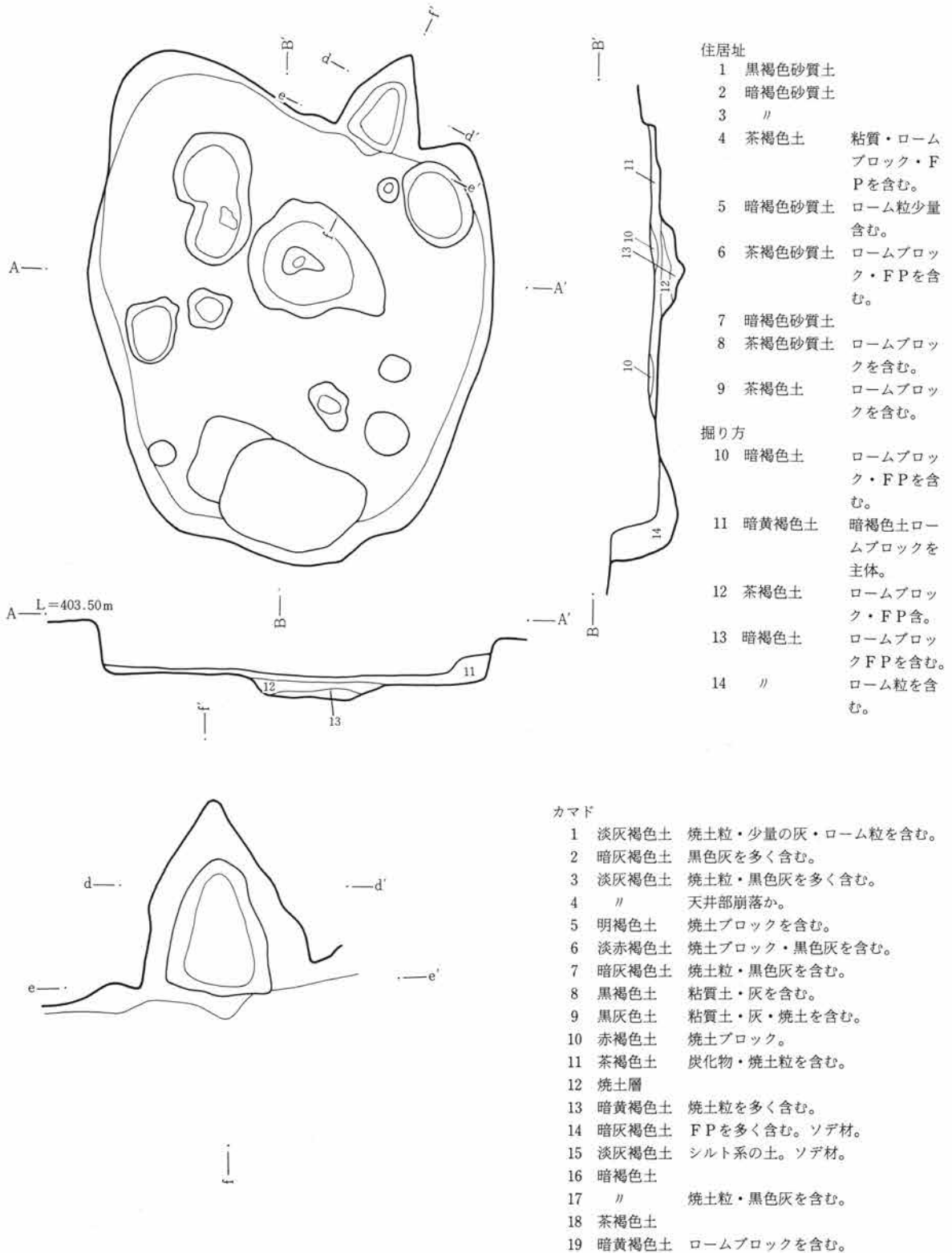
第95号住居址 位置 60～62D 49～52グリッド。 **方位** 住居；東南東。カマド；南南東。 **形状** 695×540cmを測る隅丸方形を呈し、壁高60cmを測る。 **覆土** IV・VI・VII層土により覆われる。 **床面** VII層土を中心とした土をたたいた貼り床で、壁溝は認められない。 **柱穴・土坑** 5カ所(P₁～P₅)があるが、支柱穴、貯蔵穴は特定できない。 **カマド** 住居東南壁の幅115cm奥行き120cmの掘り出しと、床の径92×70cmの浅い掘り込みを埋め戻して作っている。燃烧部は径140×63cmを測り、煙道は平面的に60cmを測る。ソデは残存しない。 **掘り方** 確認面より66cm以内に掘り下げている。住居中央に200×158cm深さ40cm、カマド右側に116×86cm深さ40cmの床下土坑があり、後者は貯蔵穴の可能性がある。 **遺物** 杯・碗類を中心に出土している。(石守)

第三章 検出された遺構と遺物



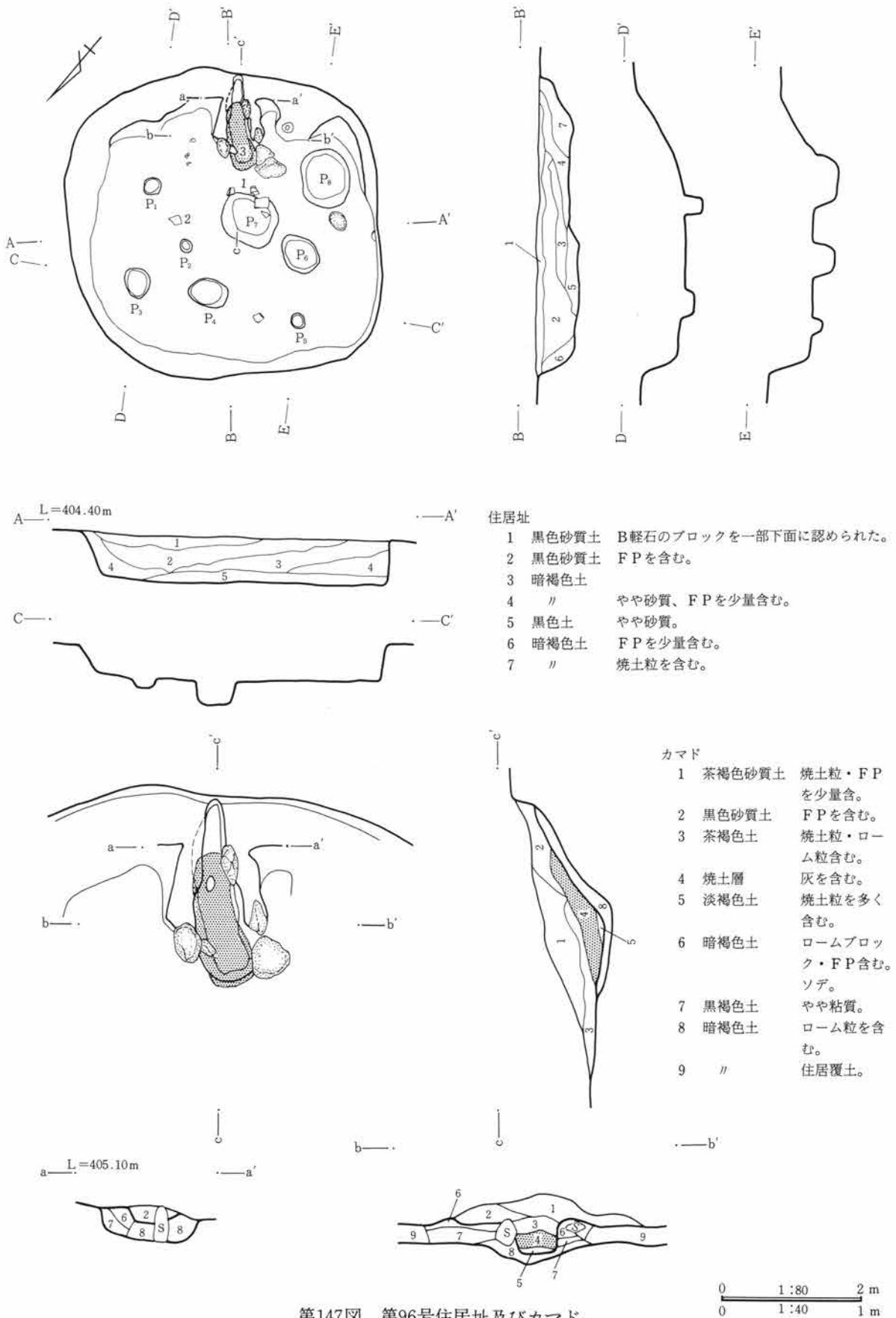
第145図 第95号住居址及びピカマド

第3節 平安時代の遺構と遺物

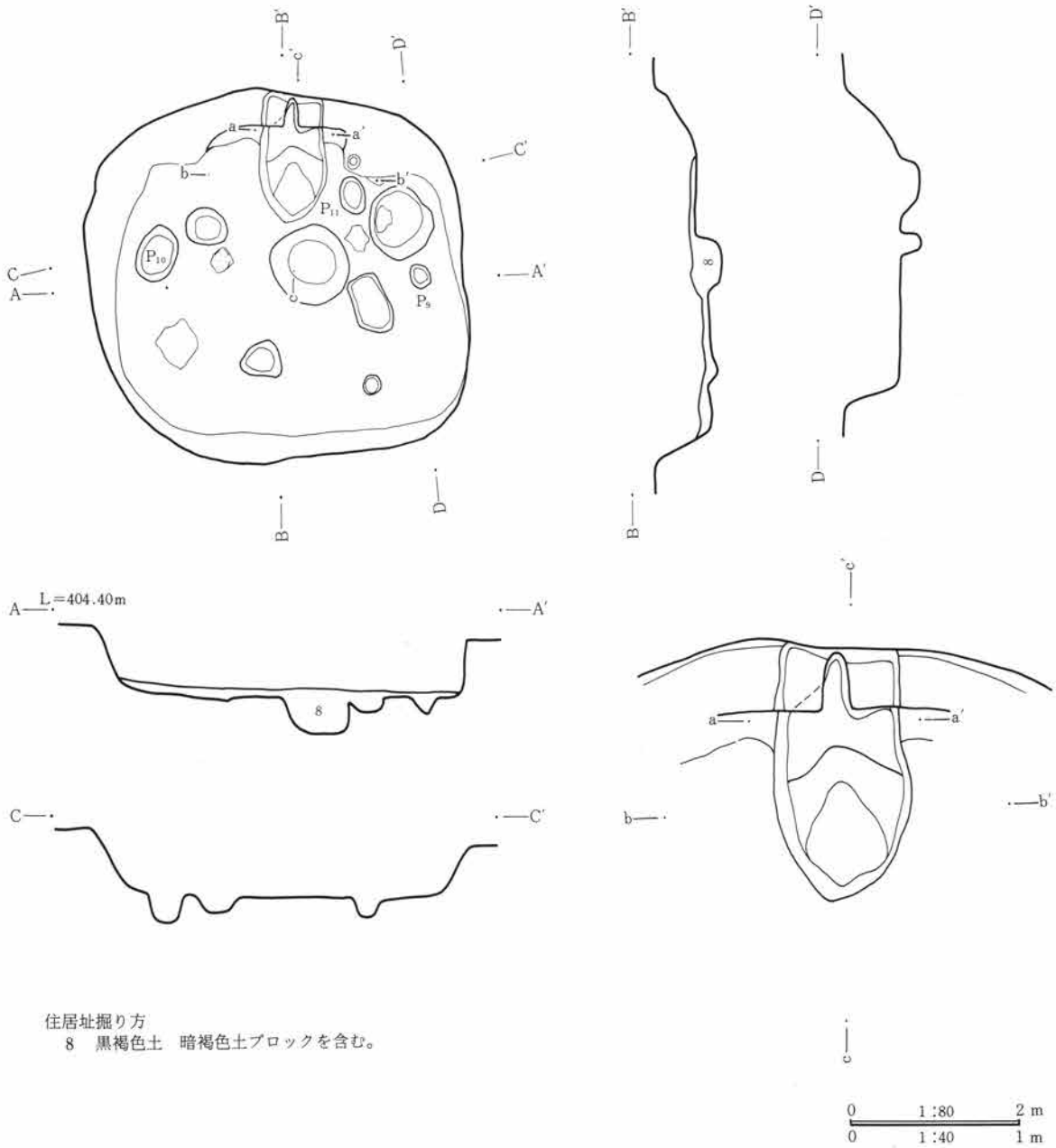


第146図 第95号住居址掘り方及びカマド

第三章 検出された遺構と遺物



0 1:80 2 m
0 1:40 1 m

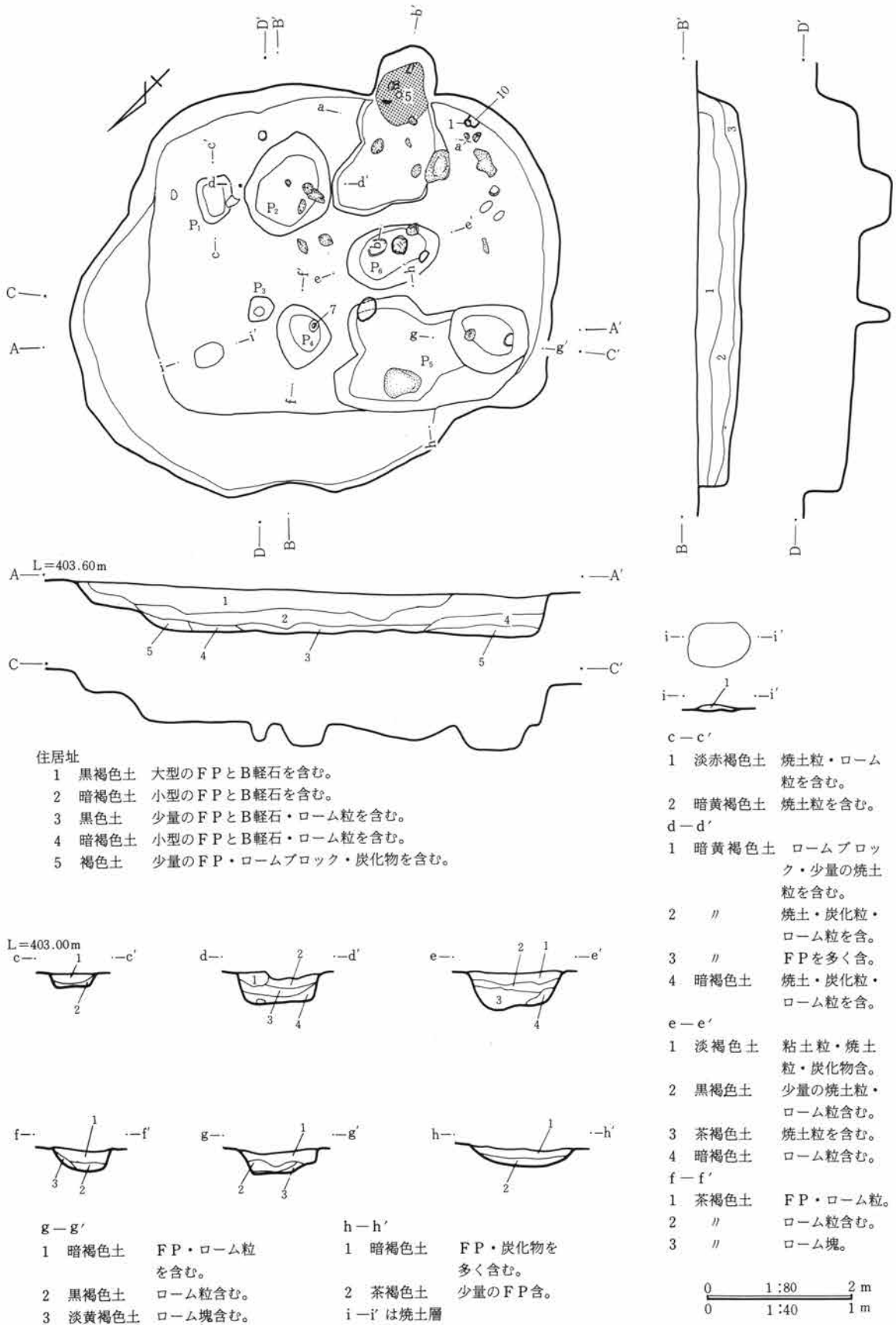


住居址掘り方
8 黒褐色土 暗褐色土ブロックを含む。

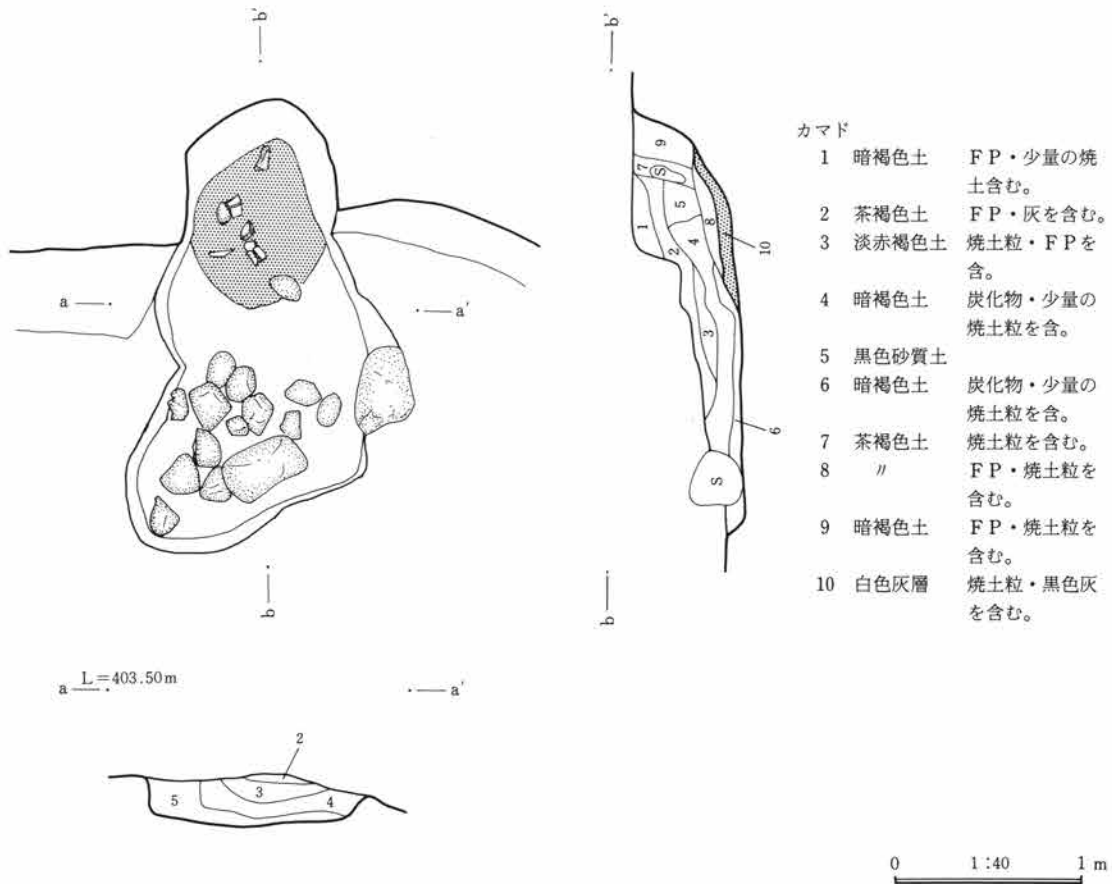
第148図 第96号住居址掘り方及びカマド掘り方

第96号住居址 位置 58～60E13～15グリッド。 方位 住居；南東。カマド；南南東。 形状 445×425cmを測る隅丸方形を呈し、壁高50cmを測る。 覆土 IV・VI・VII層土で覆われる。 床面 VII層土をたたいた貼り床で、壁溝は認められない。 柱穴・土坑 ピットは9カ所あるが、支柱穴は位置的にP₁・P₃・P₅及び掘り方調査で確認されたP₉が考えられる。貯蔵穴はP₇と思われる。 カマド 径89×82cmの浅い掘り込みを埋め戻して作っている。北側に1個、南側に3個の自然礫をソデ材とし、VI・VII層土を固めて作っている。ソデは北側で長さ66cm幅25cm、南側で長さ44cm幅18cmが残る。天井部は陥没し燃烧部は径82×33cmで高さ50cmが残る。煙道は長さ38cmを測る。 掘り方 確認面より74cm以内に掘り下げられ、住居北東部に径66×46cm、深さ34cmを測る床下土坑がある。 遺物 床直から羽釜(1)、カマドより(3)が出土している。(石守)

第三章 検出された遺構と遺物



第149図 第106号住居址及び焼土塊



第150図 第106号住居址カマド

第106号住居址

位置 61~64 E 03~05グリッド。本遺跡の同時期の住居中、調査区西部中央に集まる群の1軒であり、東北に第122号住居址、東南に第27号住居址、西南に第95号住居址、北西に第37号住居址が近接している。

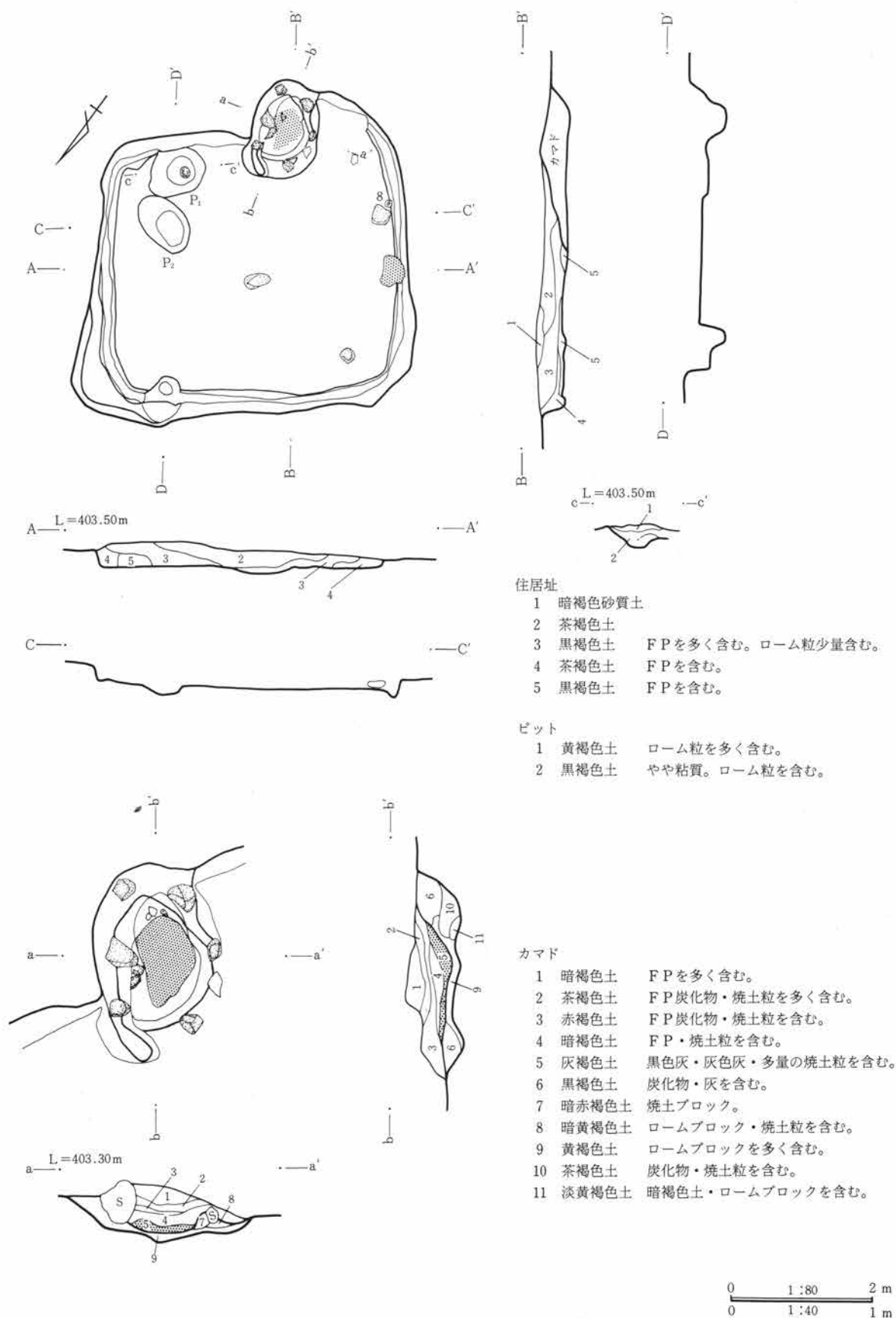
方位 住居：南東。カマド：南南東。 **形状** 660×565cmを測る隅丸方形を呈し、壁高は60cmを測る。住居址北西から北東部にかけて、壁外に幅110cmの範囲でV層（F・P層）が抜けており、不定形なテラス様の面を作り出している。

覆土 IV層土を中心とする土で覆われているが、群として大別することはできない。

床面 地床であり、床面の広さは395×338cmを測る。壁溝は確認されない。 **柱穴・土坑** 6カ所あり、P₁径62×46cm、深さ43cm、P₂径133×115cm、P₃径34×32cm、深さ44cm、P₄径86×74cm、深さ29cm、P₅径109×94cm、深さ34cm、P₆径131×80cm、深さ54cmを測る。主柱穴・貯蔵穴などは特定できない。 **カマド** 住居東南壁を幅80cm奥行き64cmを掘り出して作っている。カマドは住居廃棄時には完全に破壊されており、天井・北ソデは全く残存していない。南ソデも構築材は残らず、壁より85cmの地点に自然礫が立たされており、これがソデの芯材となる可能性が考えられる。燃焼部は径80×70cmを測る範囲で残存する。燃焼部の前面は径130×95cm、深さ10cmに掘り込まれ、この部分から径10~45cmの自然礫10個以上が出土している。これらの自然礫は、当初ソデ材あるいは煙道部側壁として置かれた可能性があり、従ってカマドの形態は第27・31号住居址のそれに近似するものであったと思われる。 **遺物** 杯・椀類を中心に主に覆土中より出土している。

(石守)

第三章 検出された遺構と遺物



住居址

- 1 暗褐色砂質土
- 2 茶褐色土
- 3 黒褐色土 F Pを多く含む。ローム粒少量含む。
- 4 茶褐色土 F Pを含む。
- 5 黒褐色土 F Pを含む。

ピット

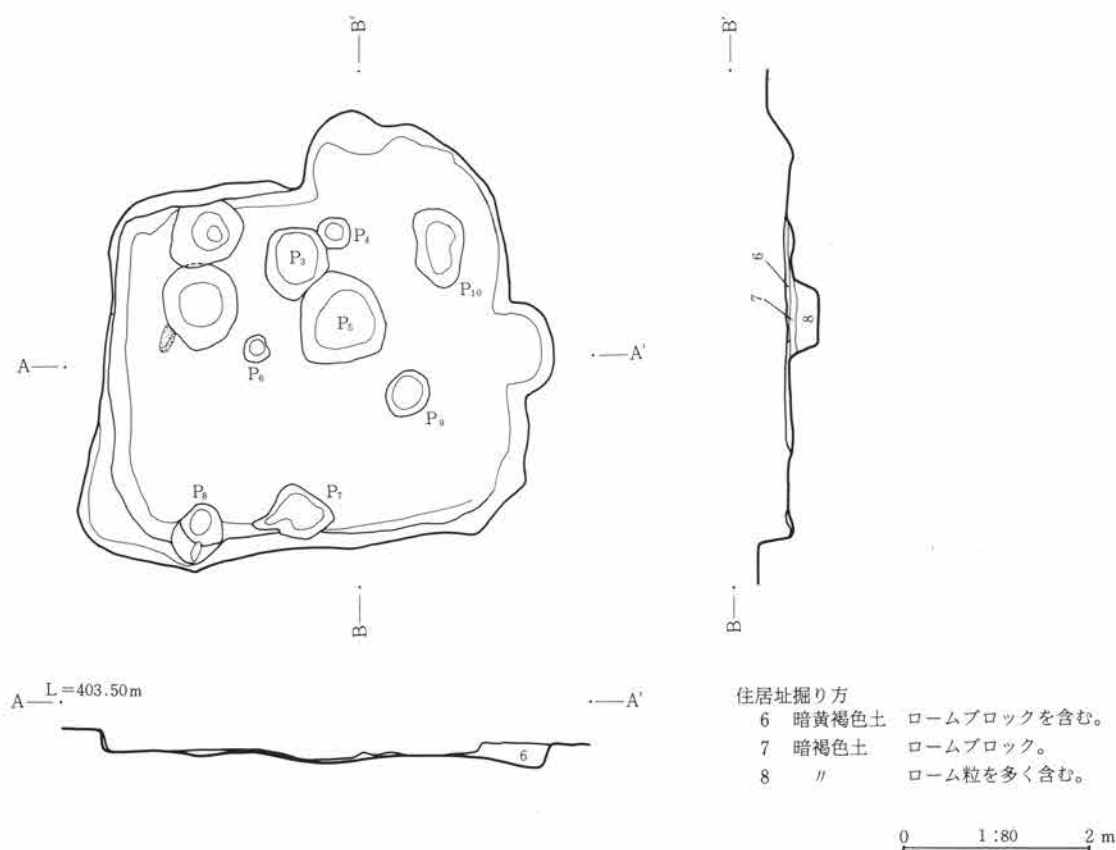
- 1 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 2 黒褐色土 やや粘質。ローム粒を含む。

カマド

- 1 暗褐色土 F Pを多く含む。
- 2 茶褐色土 F P炭化物・焼土粒を多く含む。
- 3 赤褐色土 F P炭化物・焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 F P・焼土粒を含む。
- 5 灰褐色土 黒色灰・灰色灰・多量の焼土粒を含む。
- 6 黒褐色土 炭化物・灰を含む。
- 7 暗赤褐色土 焼土ブロック。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック・焼土粒を含む。
- 9 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 10 茶褐色土 炭化物・焼土粒を含む。
- 11 淡黄褐色土 暗褐色土・ロームブロックを含む。

0 1:80 2 m
0 1:40 1 m

第151図 第122号住居址及びカマド

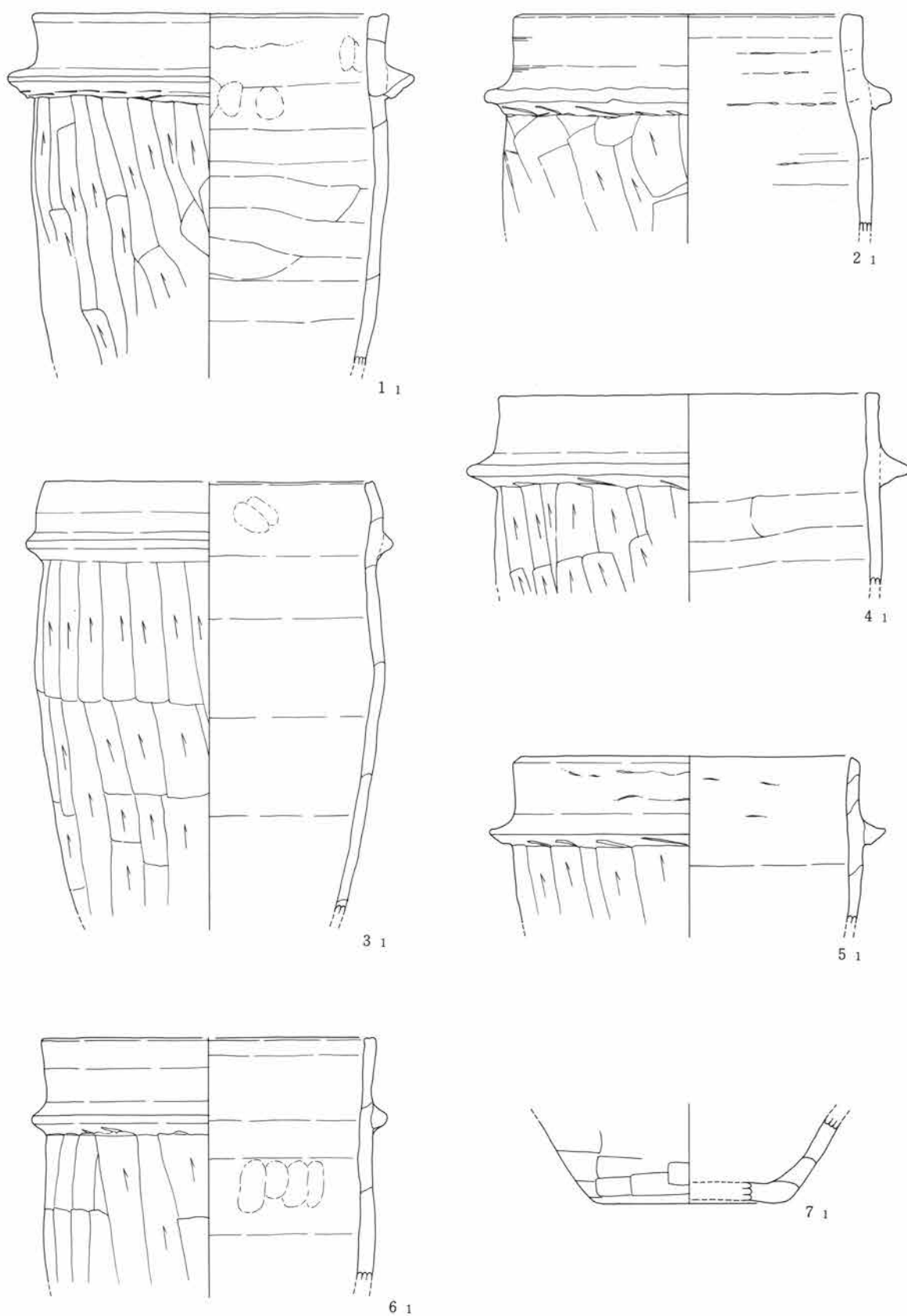


第152図 第122号住居址掘り方

第122号住居址

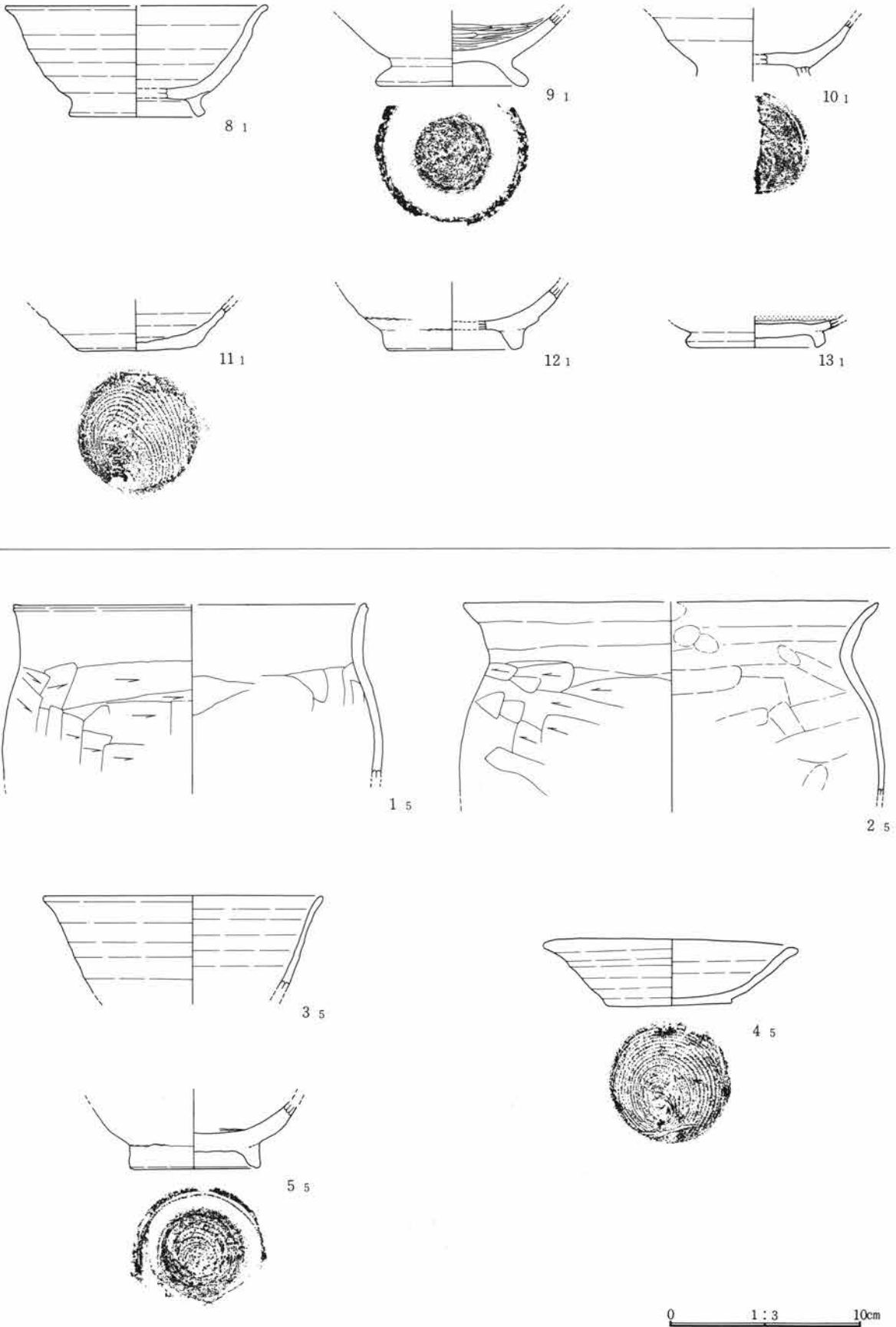
位置 59～62E 05～08グリッド。 **方位** 住居；南南東。カマド；南南東。 **形状** 第V層面では確認できず、VII層面での調査となった。435×390cmを測る隅丸方形を呈し、壁高は現状で24cmを測る。 **覆土** IV層～VII層の混土により覆われている。 **床面** VII・VIII層土をたたいた貼り床で、床面の広さは、395×340cmを測る。幅7cm深さ5cmの壁溝が東南壁を除き周っている。 **柱穴** 東北壁北寄りにP₂があり、径76×63cm、深さ30cmを測る。性格は特定できない。 **カマド** 東南壁南寄りを、幅115cm奥行き40cmに掘り出して作っている。北側ソデ壁端より煙道側、更に南側ソデにかけて約40cmの間隔をもって自然礫5個が置かれている。この自然礫をVII層土を中心とする土で固めてソデを作っている。ソデは、現状で北側が幅30cm長さ48cmで残存し、南側で幅13cm長さ52cmで僅かに残る。天井部は残存していない。燃焼部は69×60cmを測る。焚口部中央には自然礫が1個立っており、位置的には問題があるが、支脚と考えられよう。 **貯蔵穴** カマド南側の径76×63cm、深さ30cmを測るP₁が貯蔵穴と考えられる。P₁の北東に隣接して径92×56cmを測る落ち込みがある。 **掘り方** 確認面より28cm以内に掘り下げている。西南壁中央は幅100cm奥行き38cmに掘り出している。床下遺構は8カ所ある(P₃～P₁₀)。このうち、P₄とP₁₀はカマドの両側に対称し、カマドに関連するものと思われる。 **遺物** 床直・カマドからの出土遺物は小破片のため図示し得なかった。主に覆土中から出土が目立つ。(石守)

第III章 検出された遺構と遺物



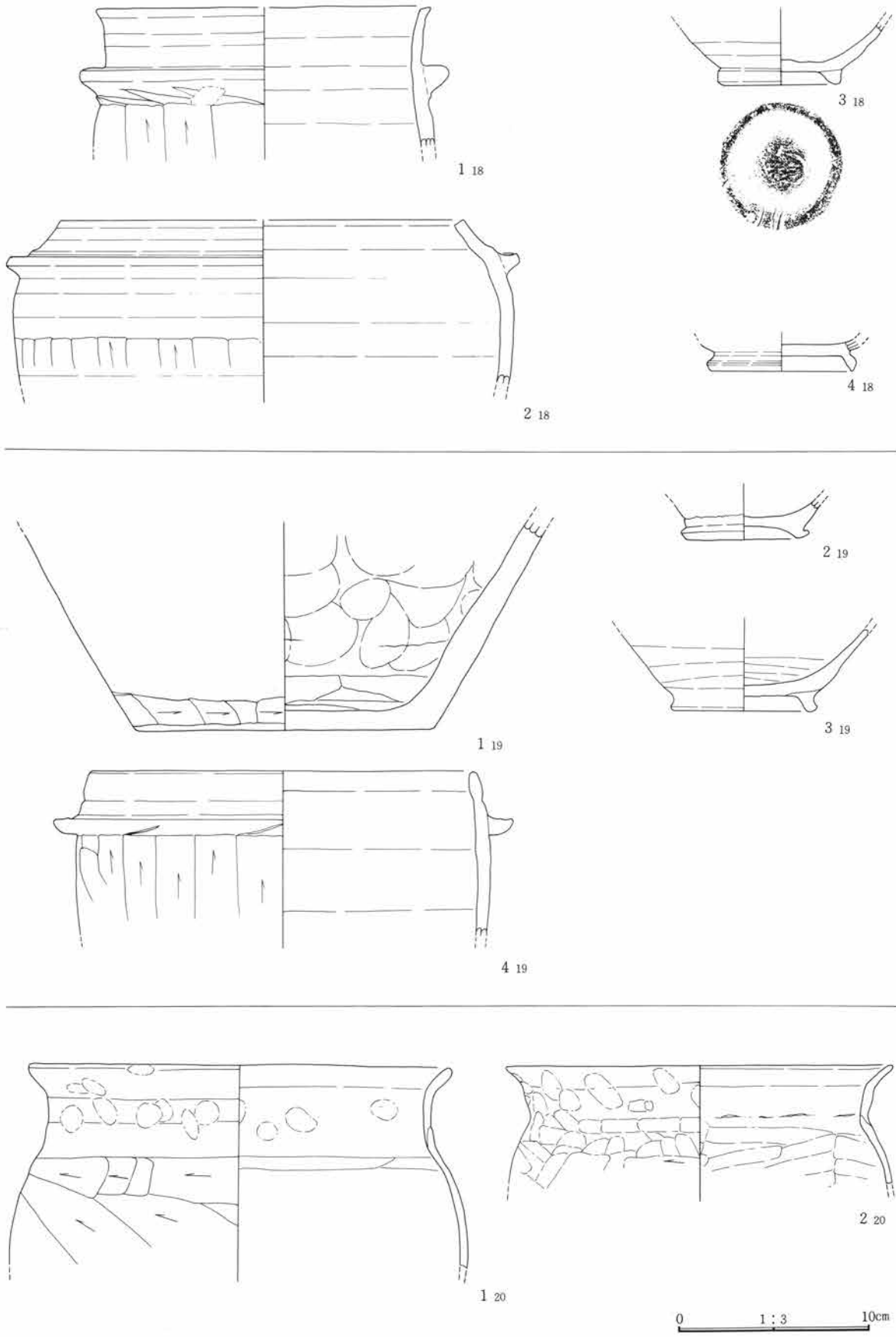
第153図 第1号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



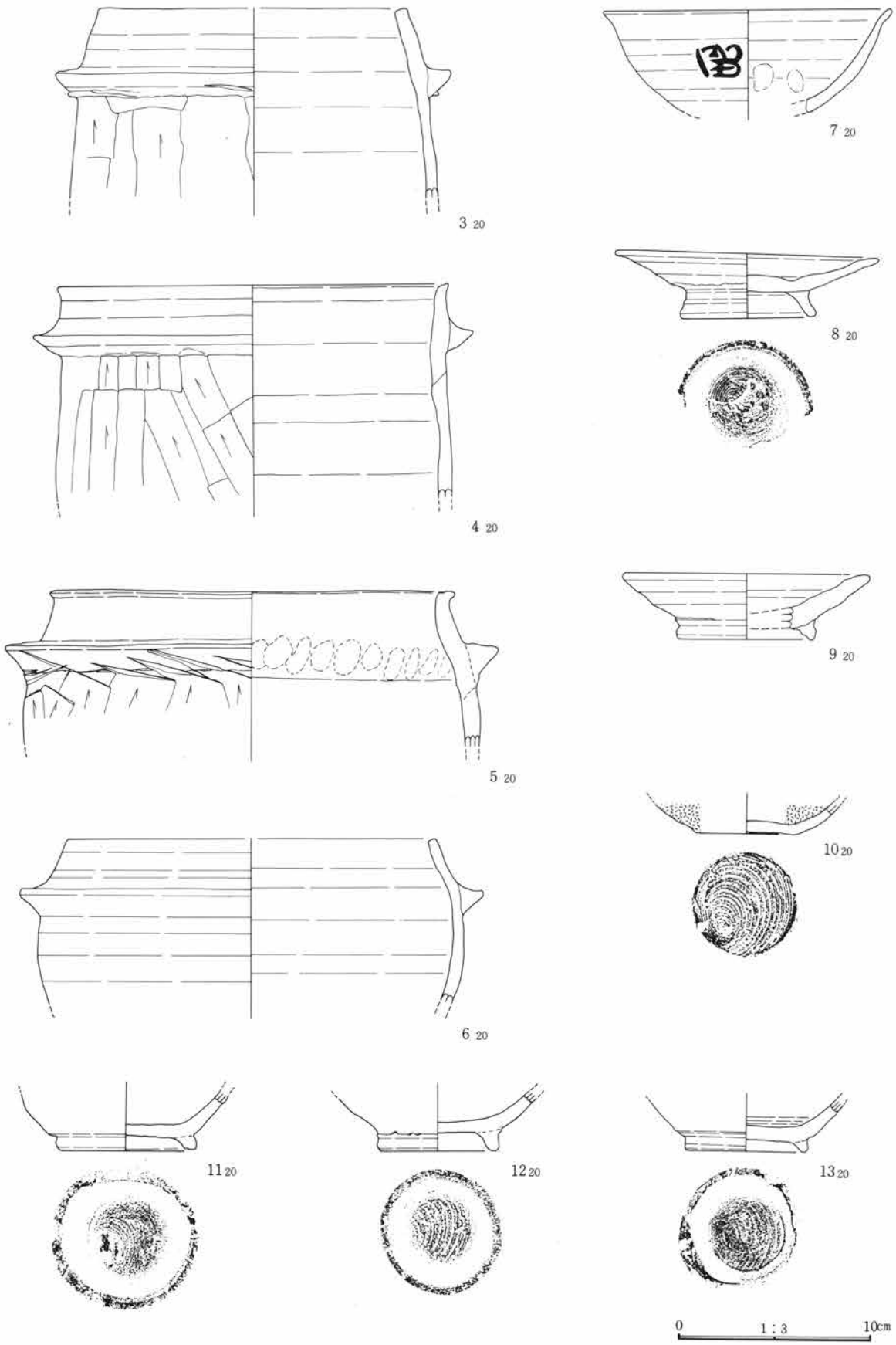
第154図 第1・5号住居址出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



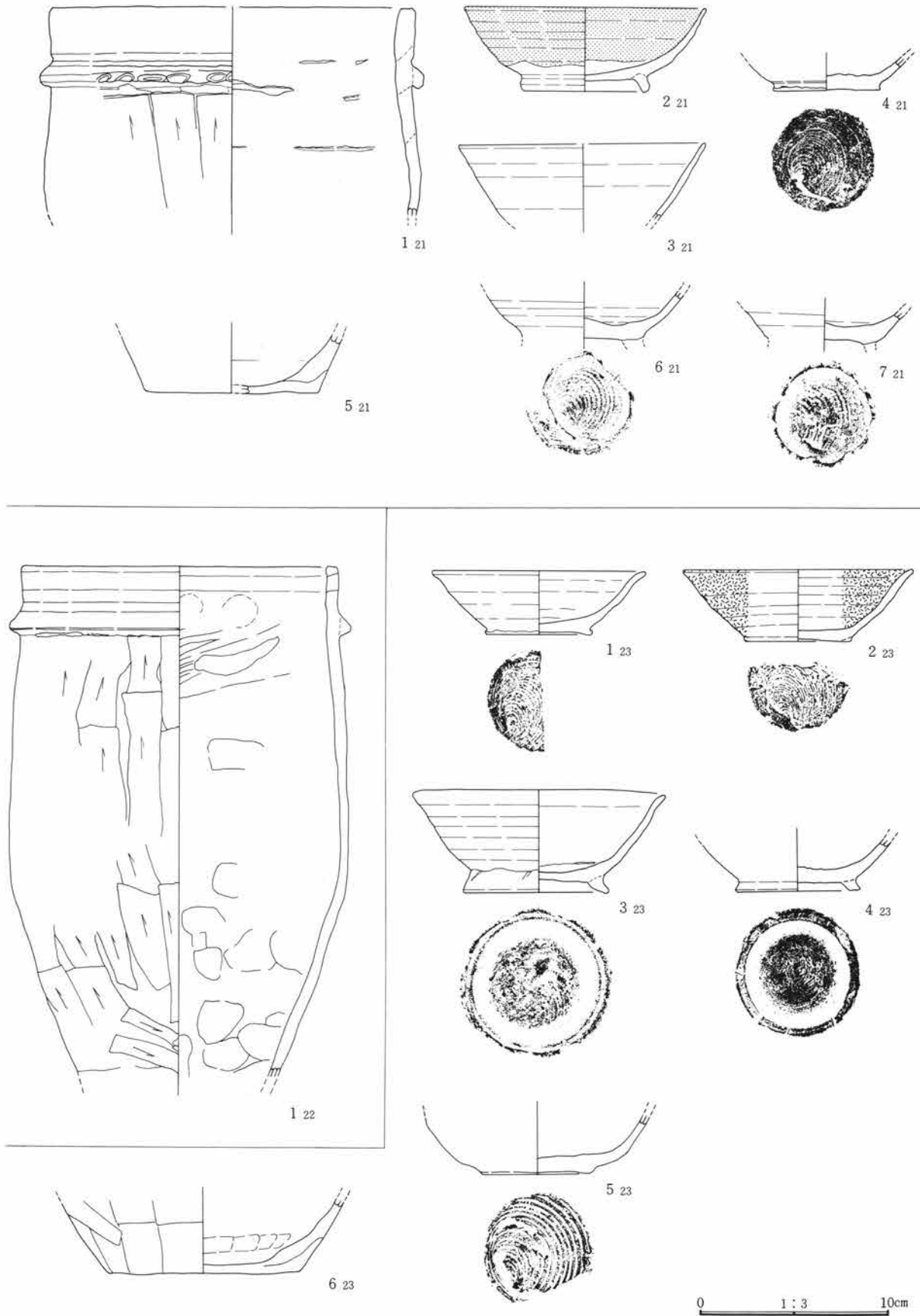
第155図 第18・19・20号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



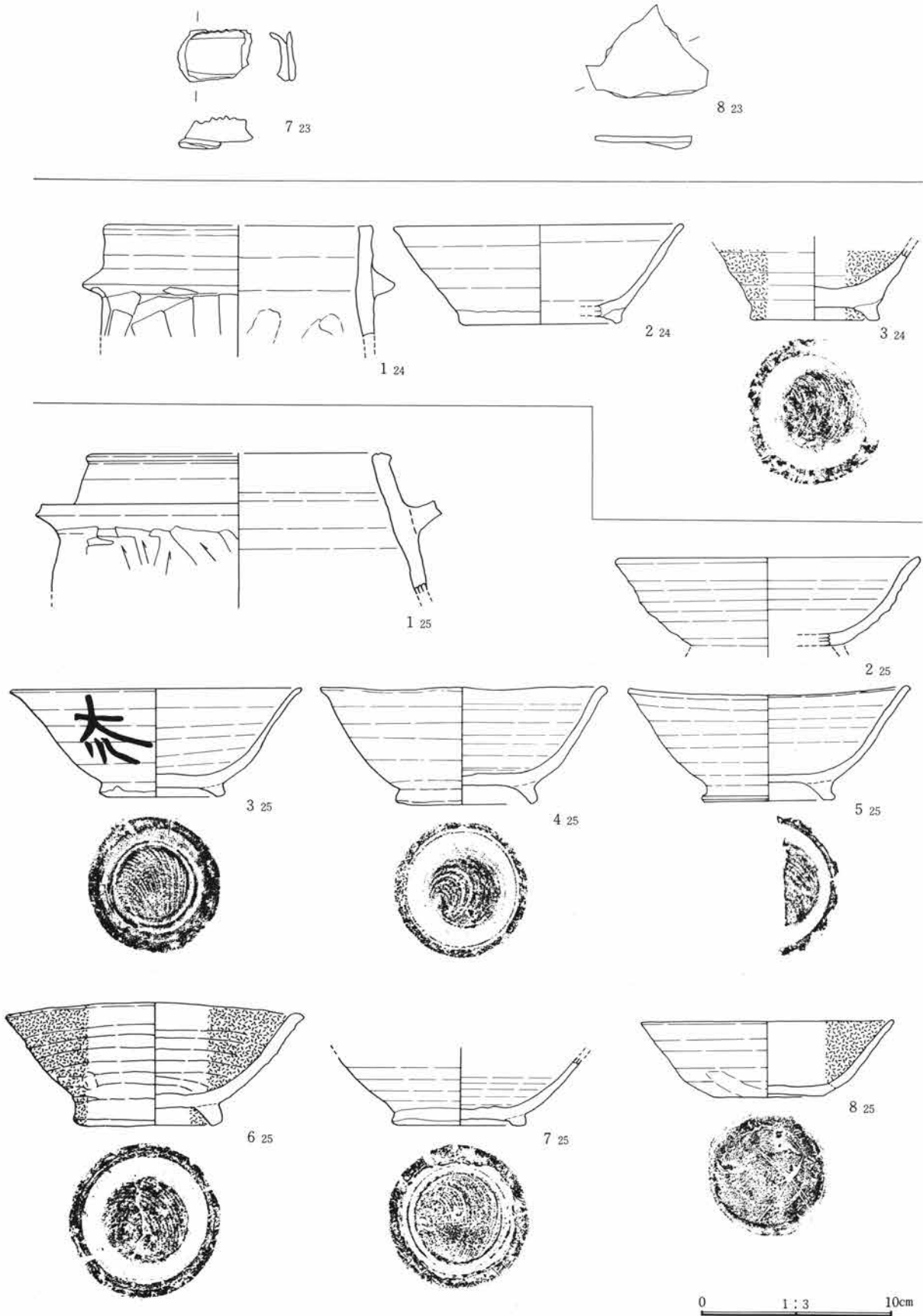
第156図 第20号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



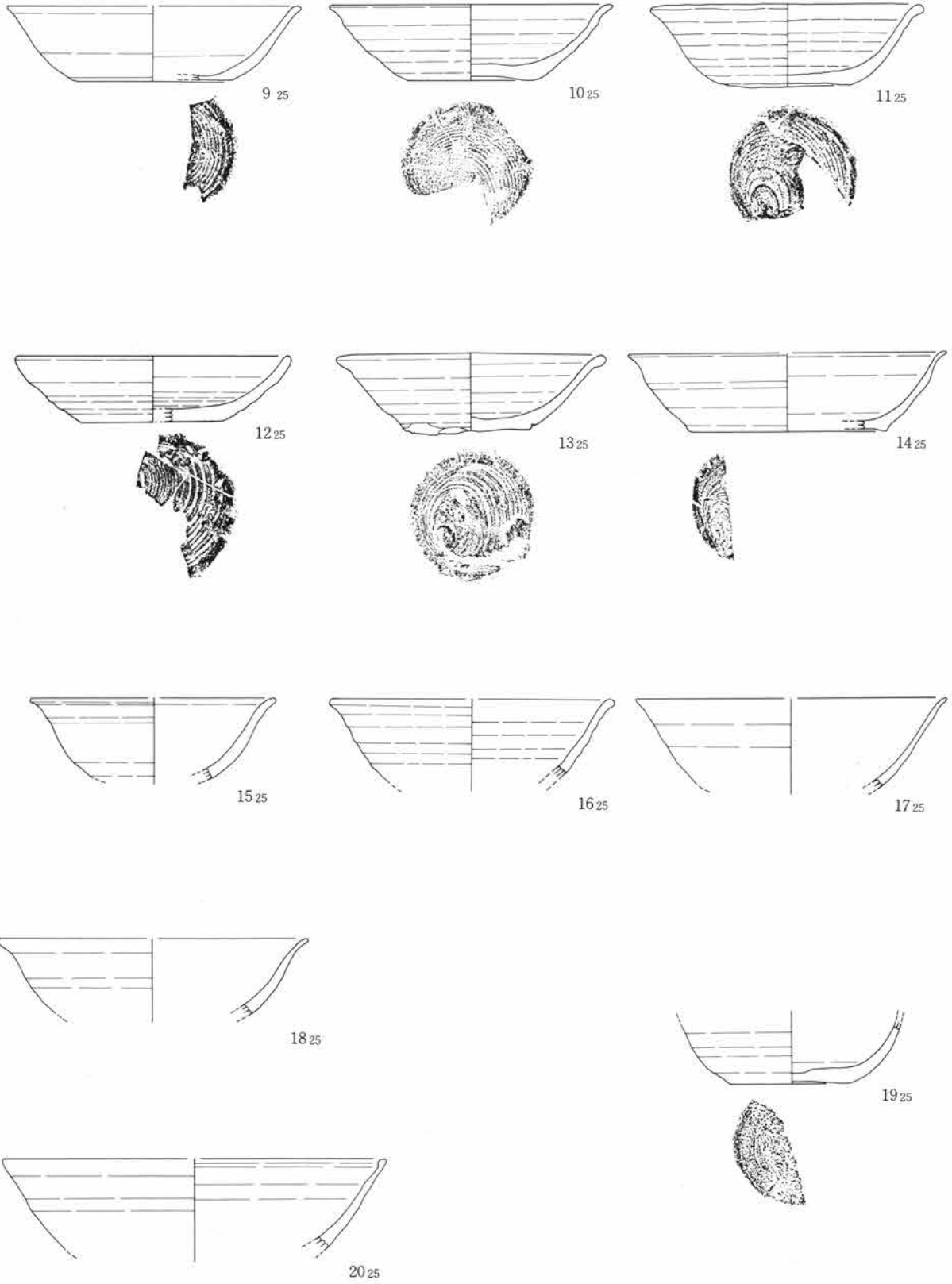
第157図 第21・22・23号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



第158図 第23・24・25号住居址出土遺物

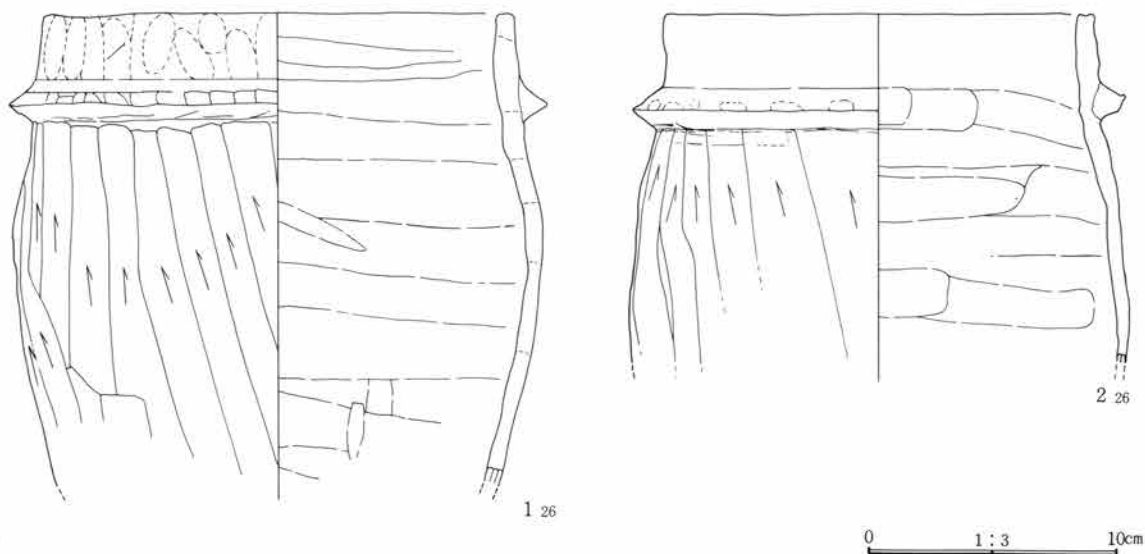
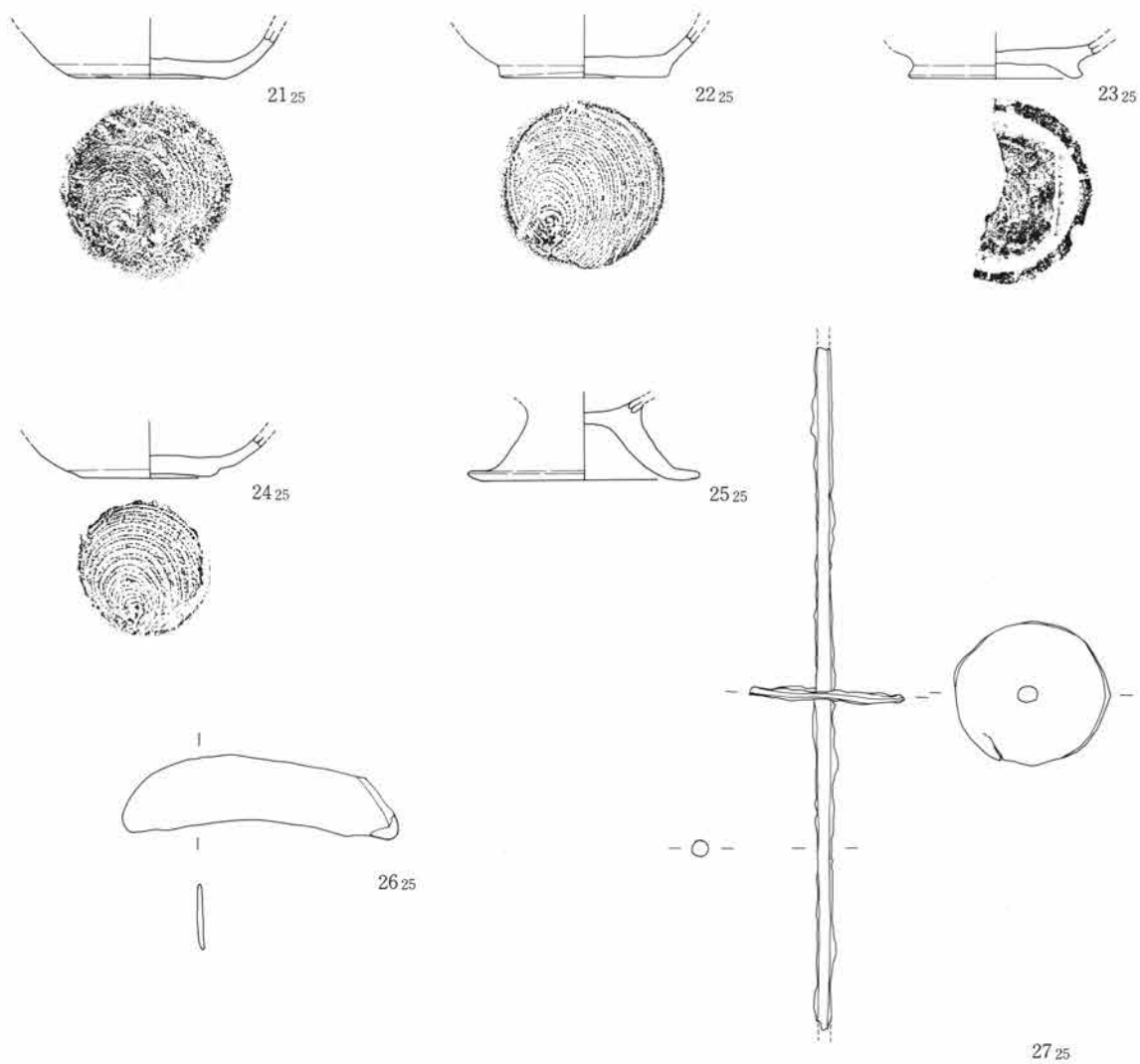
第三章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

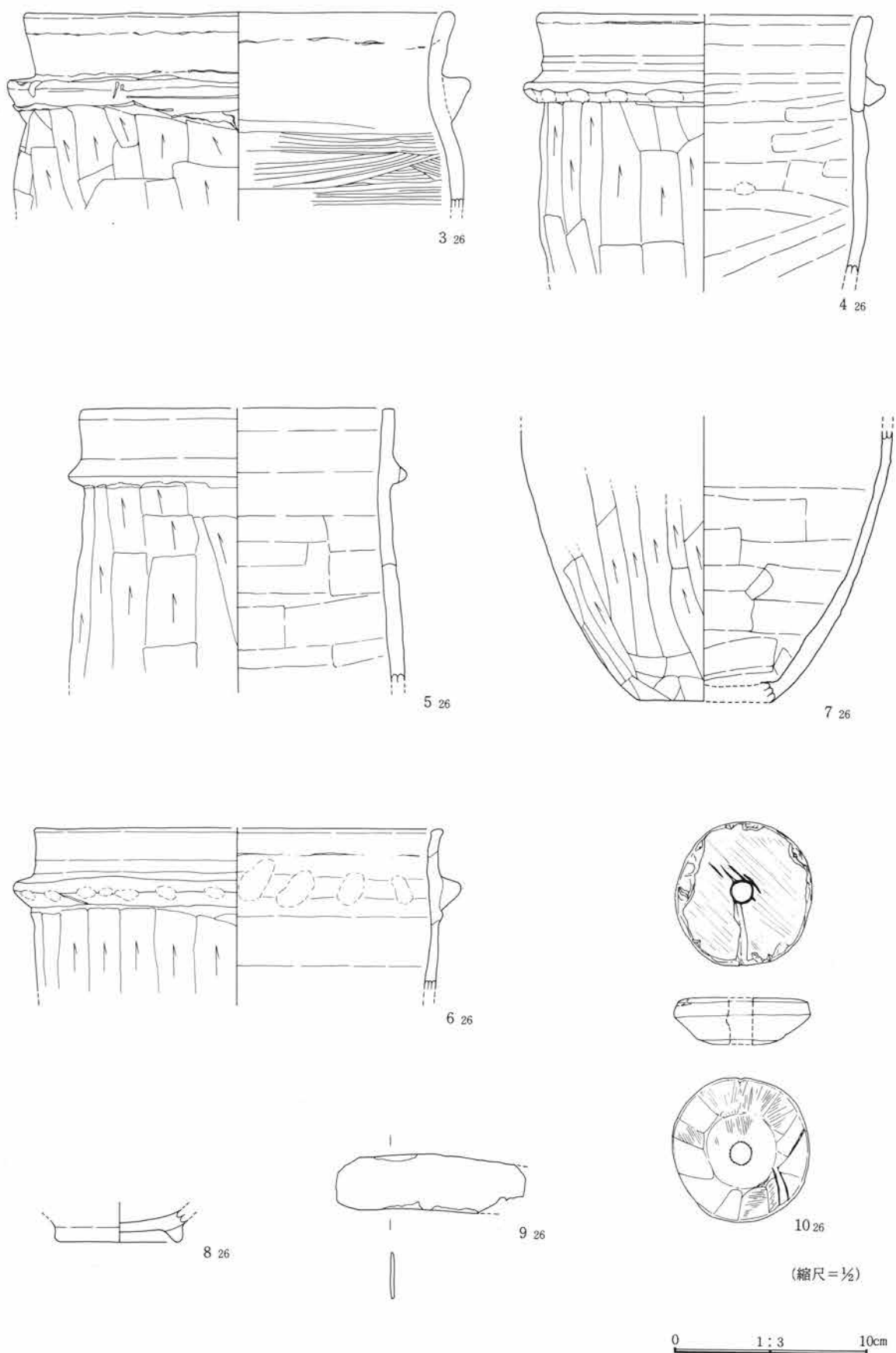
第159図 第25号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



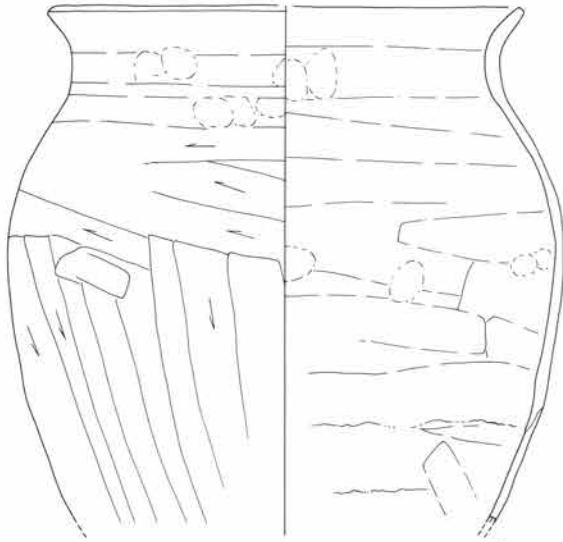
第160図 第25・26号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

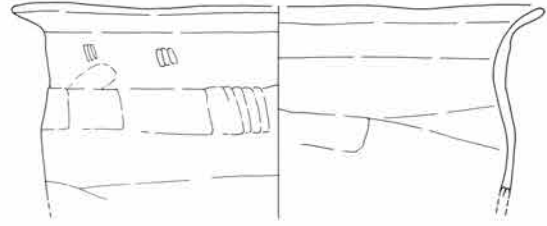


第161図 第26号住居址出土遺物

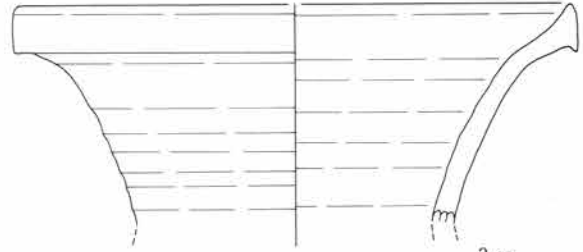
第3節 平安時代の遺構と遺物



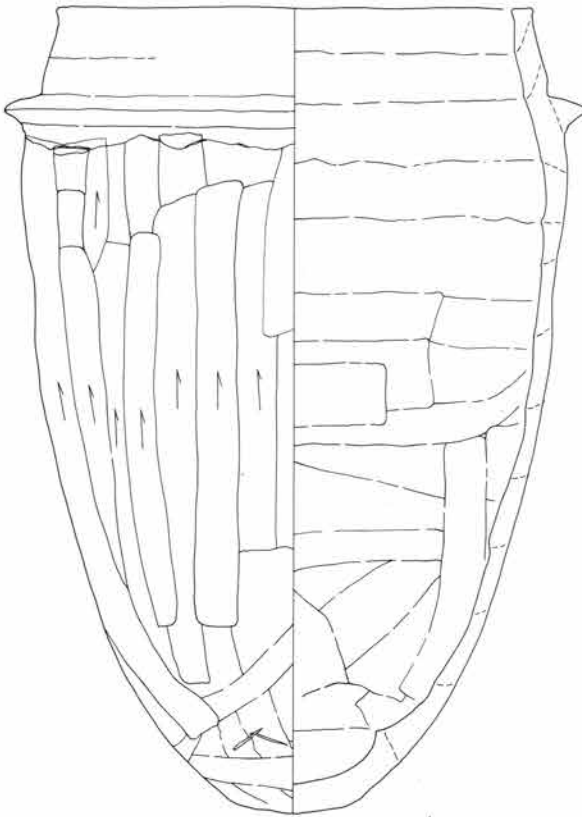
1 27



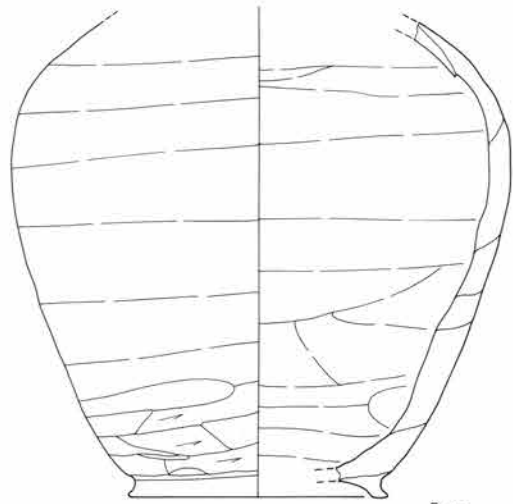
2 27



3 27



4 27

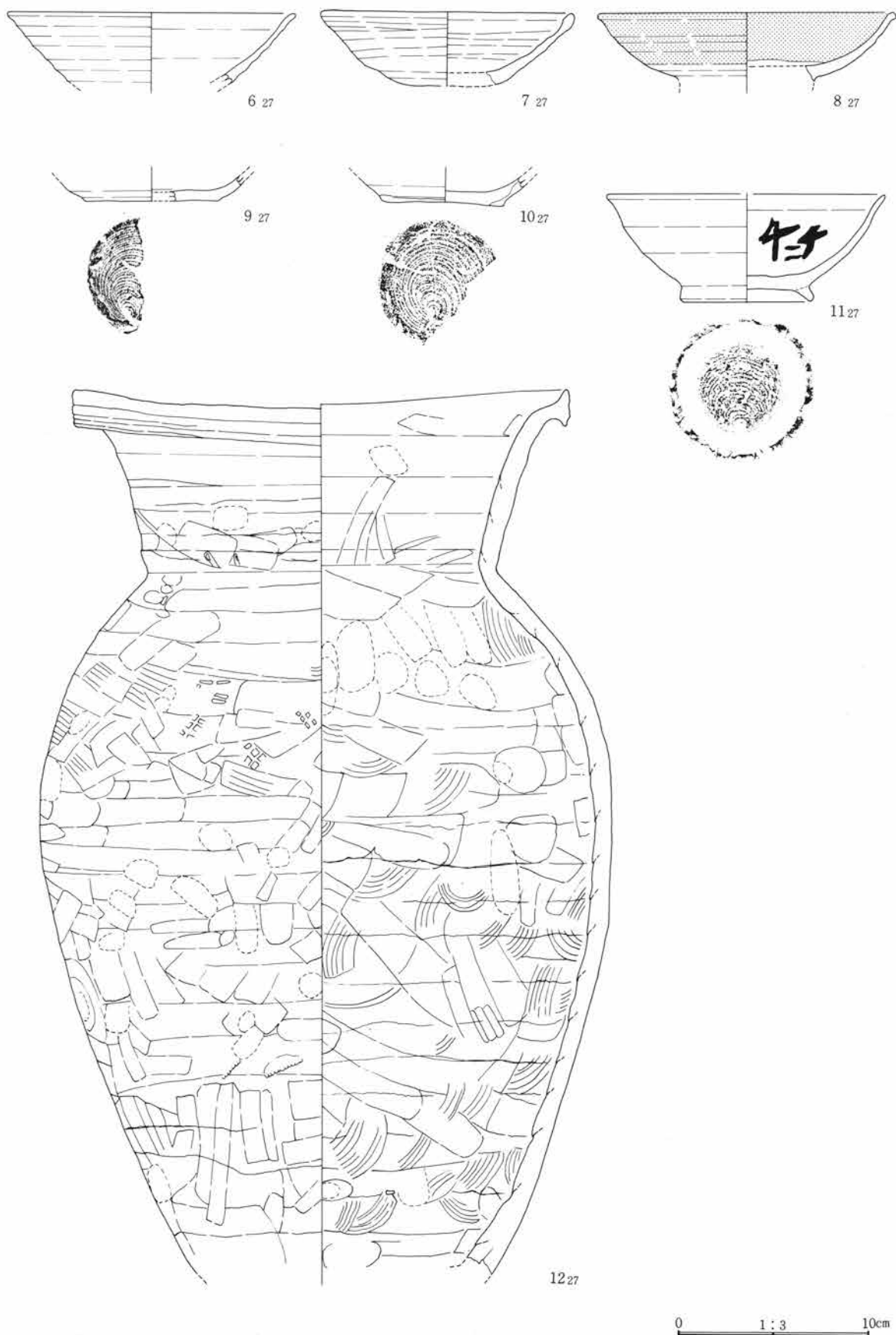


5 27

0 1:3 10cm

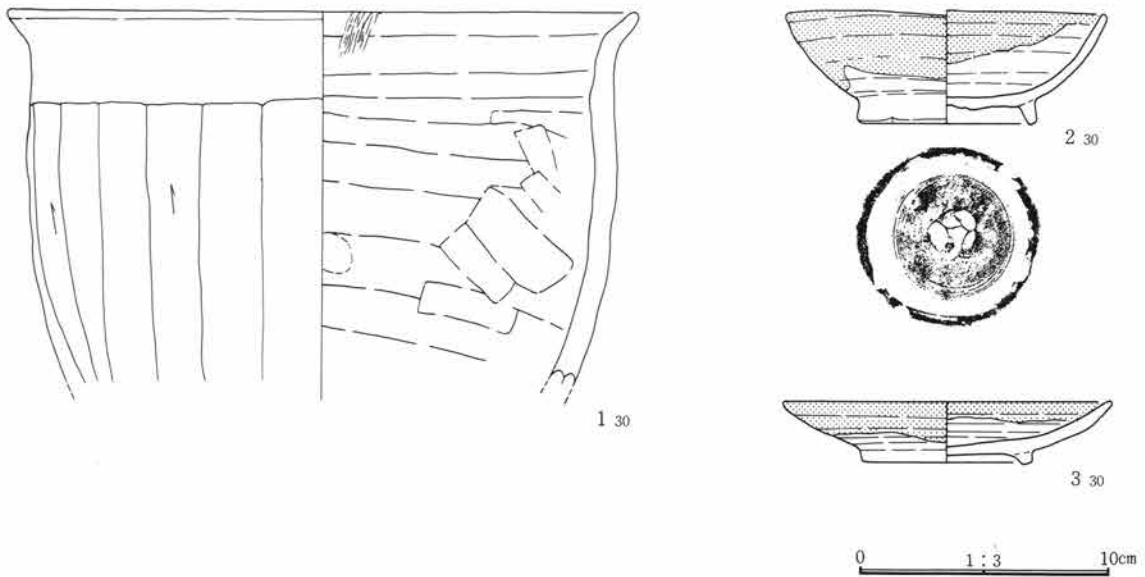
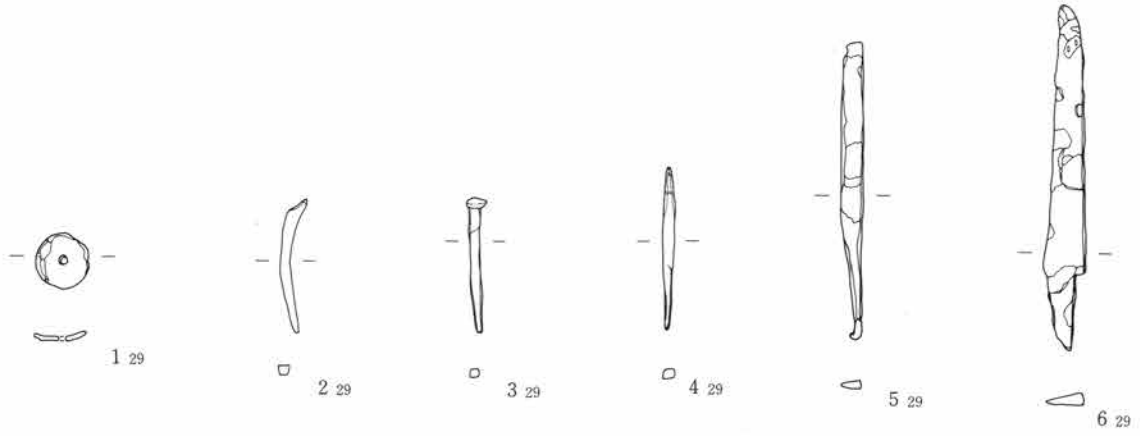
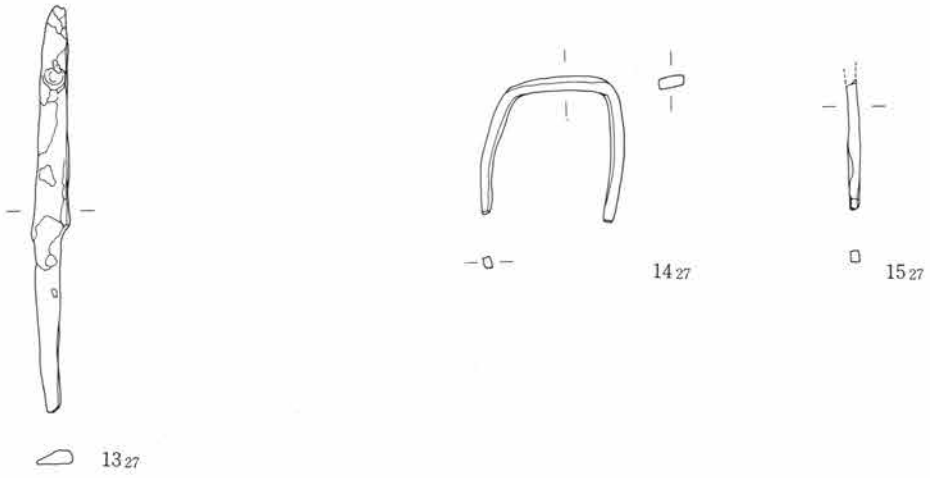
第162図 第27号住居址出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



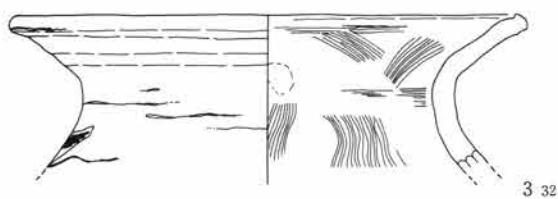
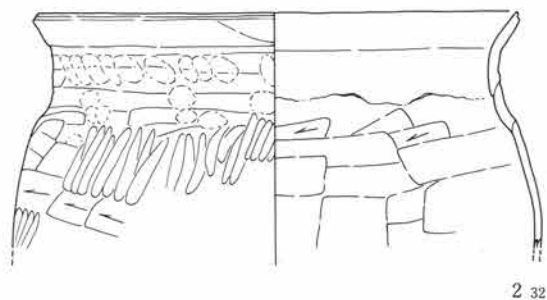
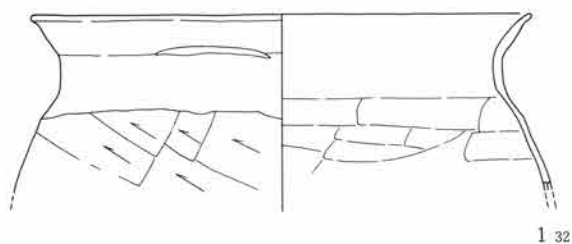
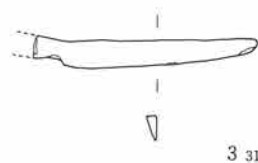
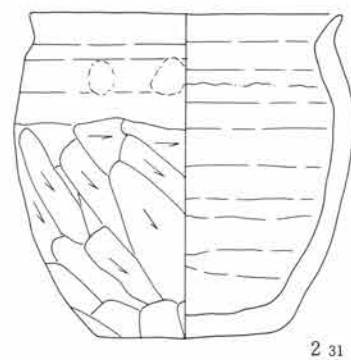
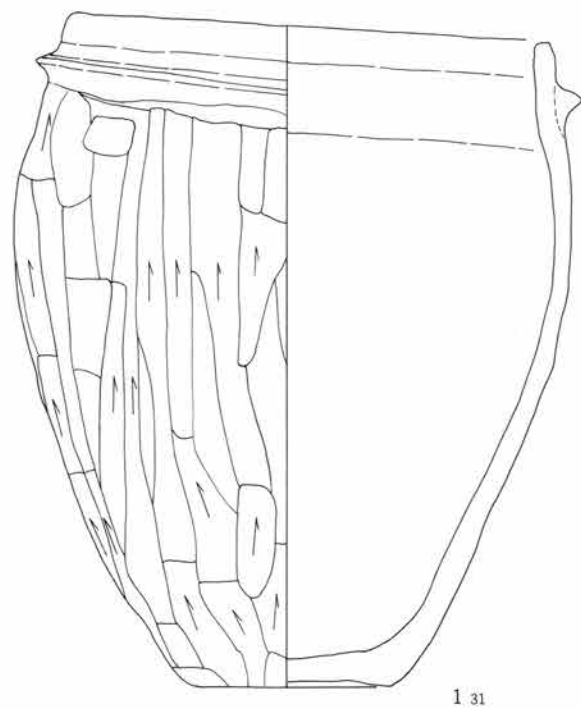
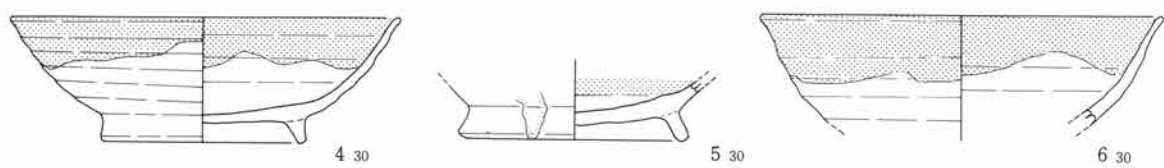
第163図 第27号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



第164図 第27・29・30号住居址出土遺物

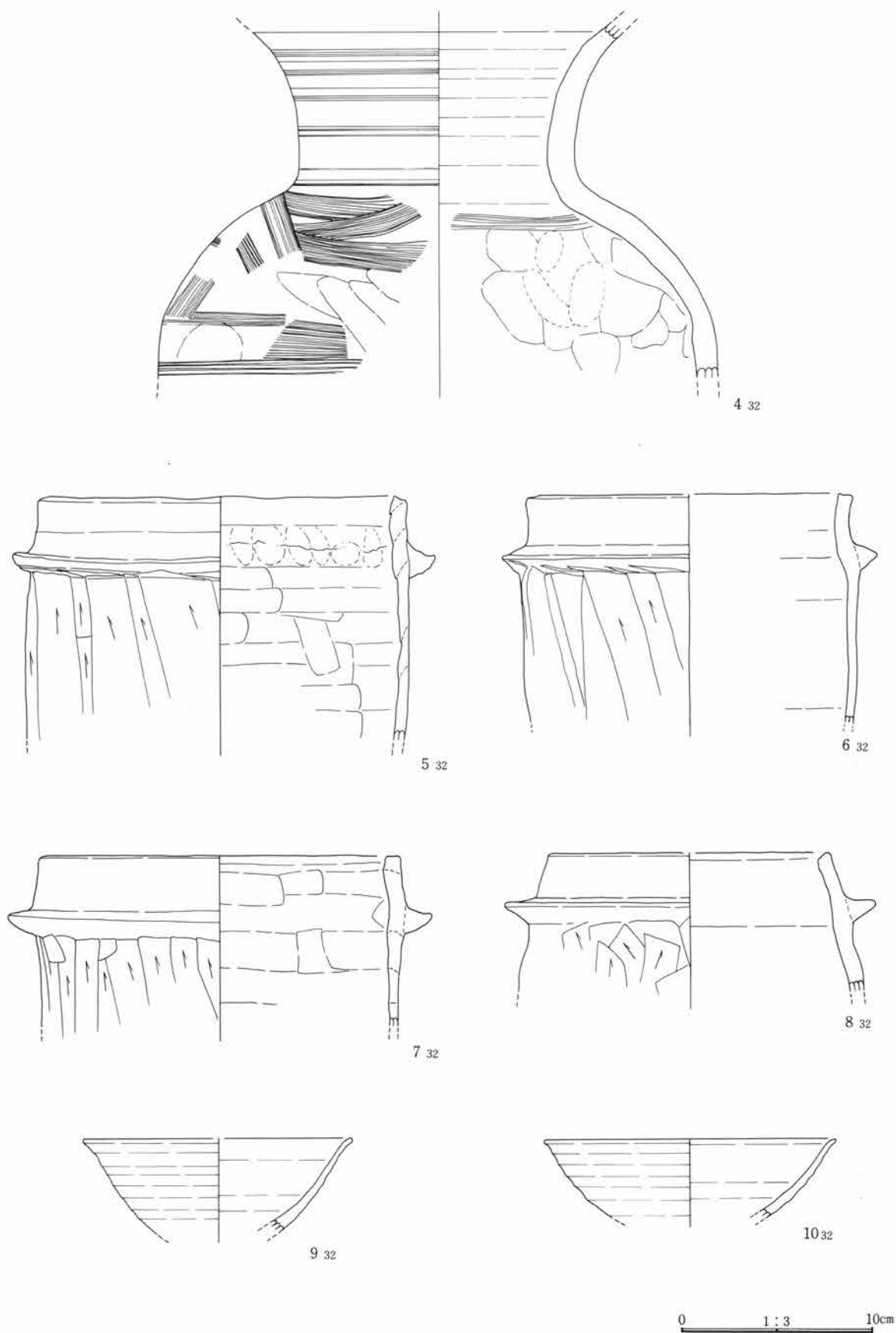
第三章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

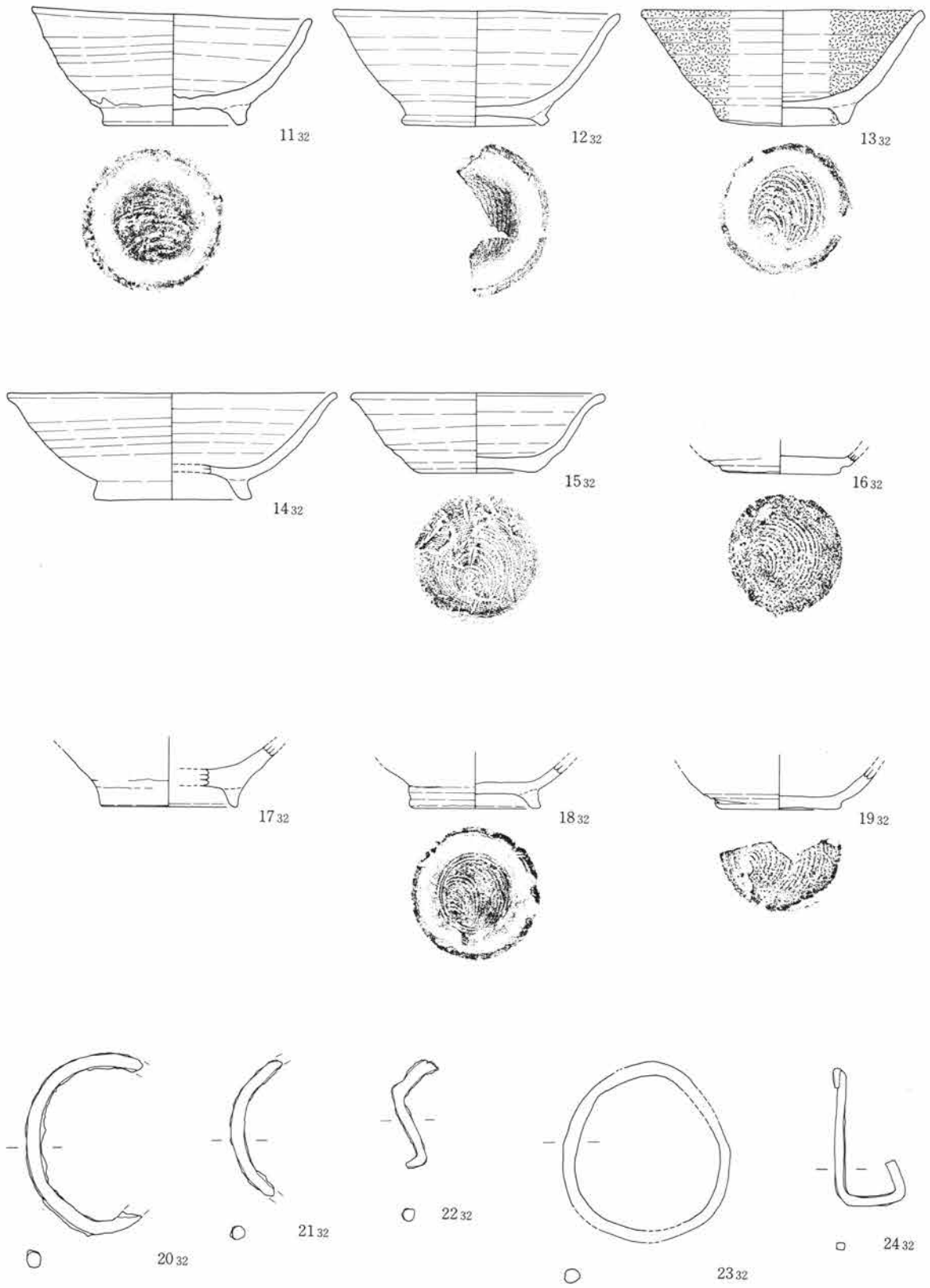
第165図 第30・31・32号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



第166図 第32号住居址出土遺物

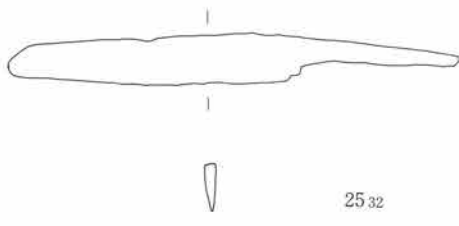
第III章 検出された遺構と遺物



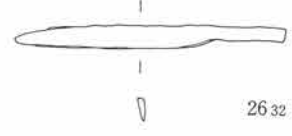
0 1:3 10cm

第167図 第32号住居址出土遺物

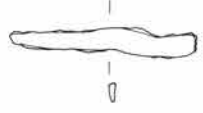
第3節 平安時代の遺構と遺物



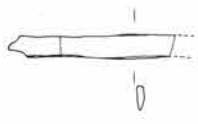
25 32



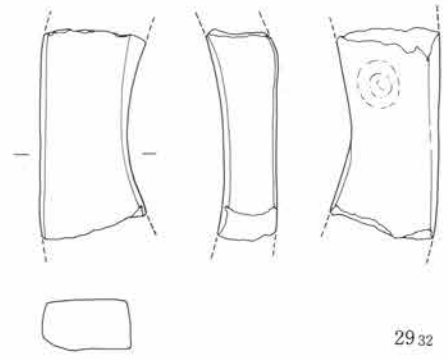
26 32



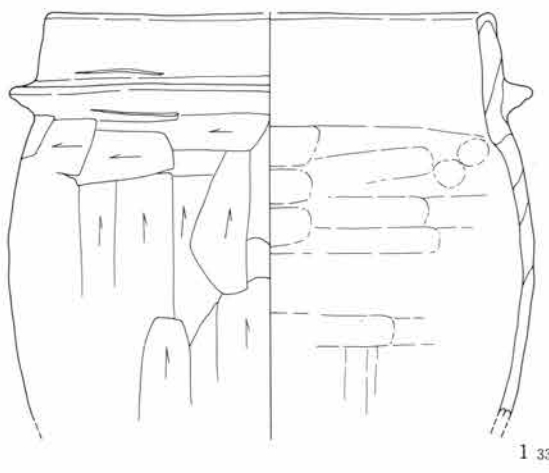
27 32



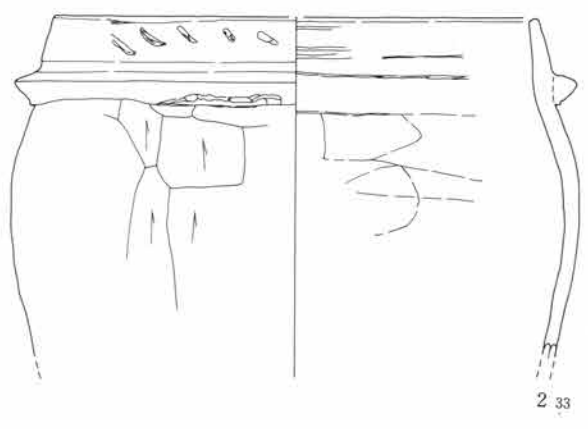
28 32



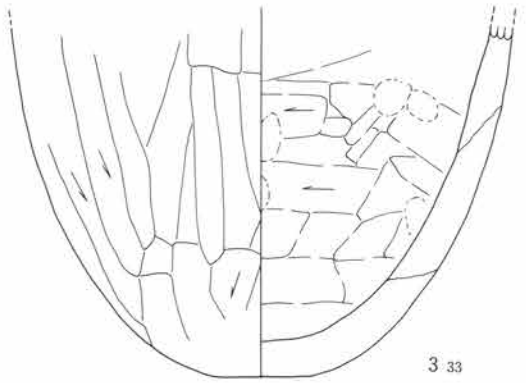
29 32



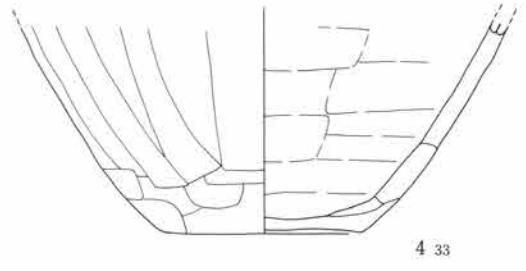
1 33



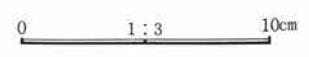
2 33



3 33

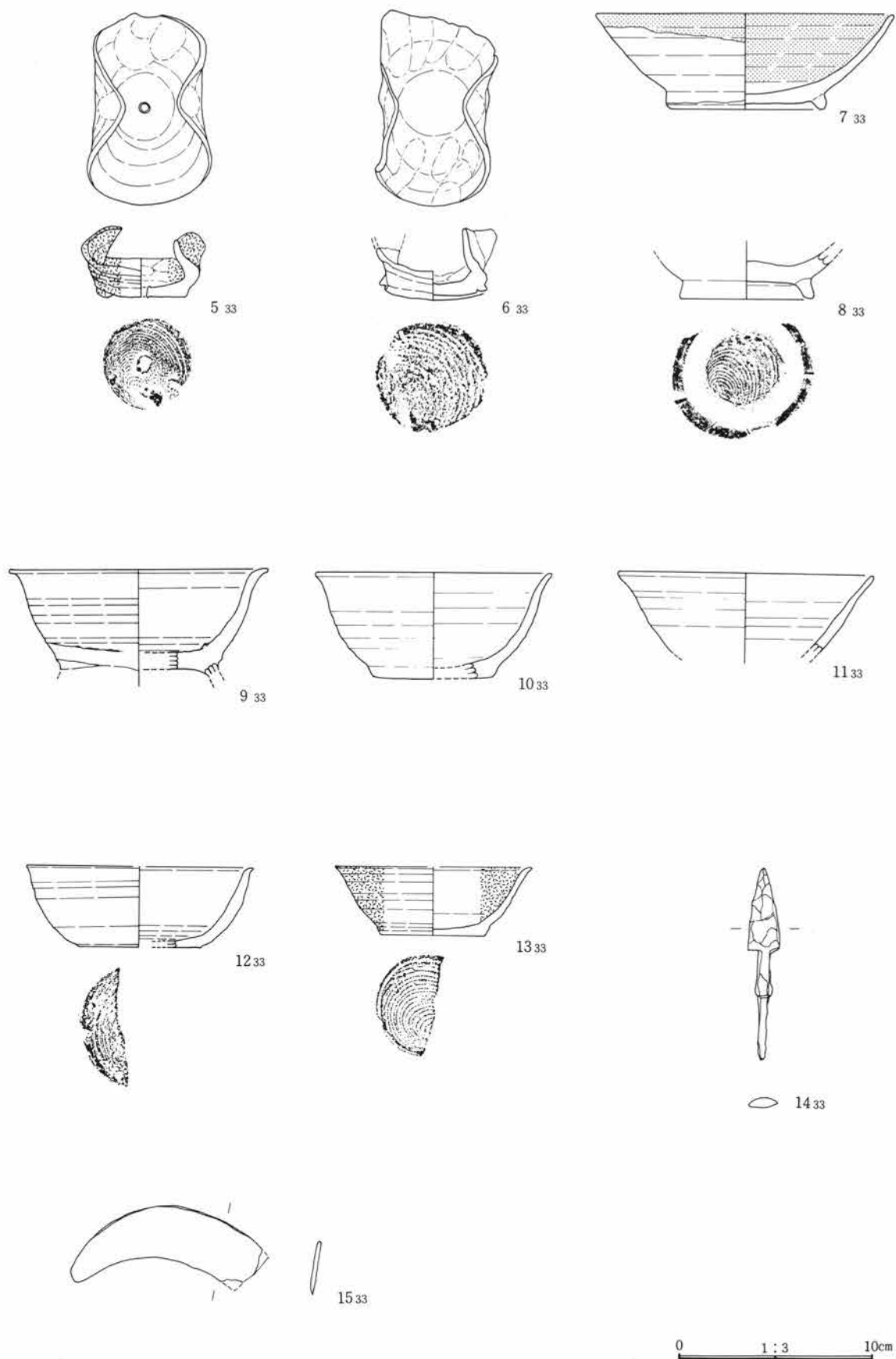


4 33



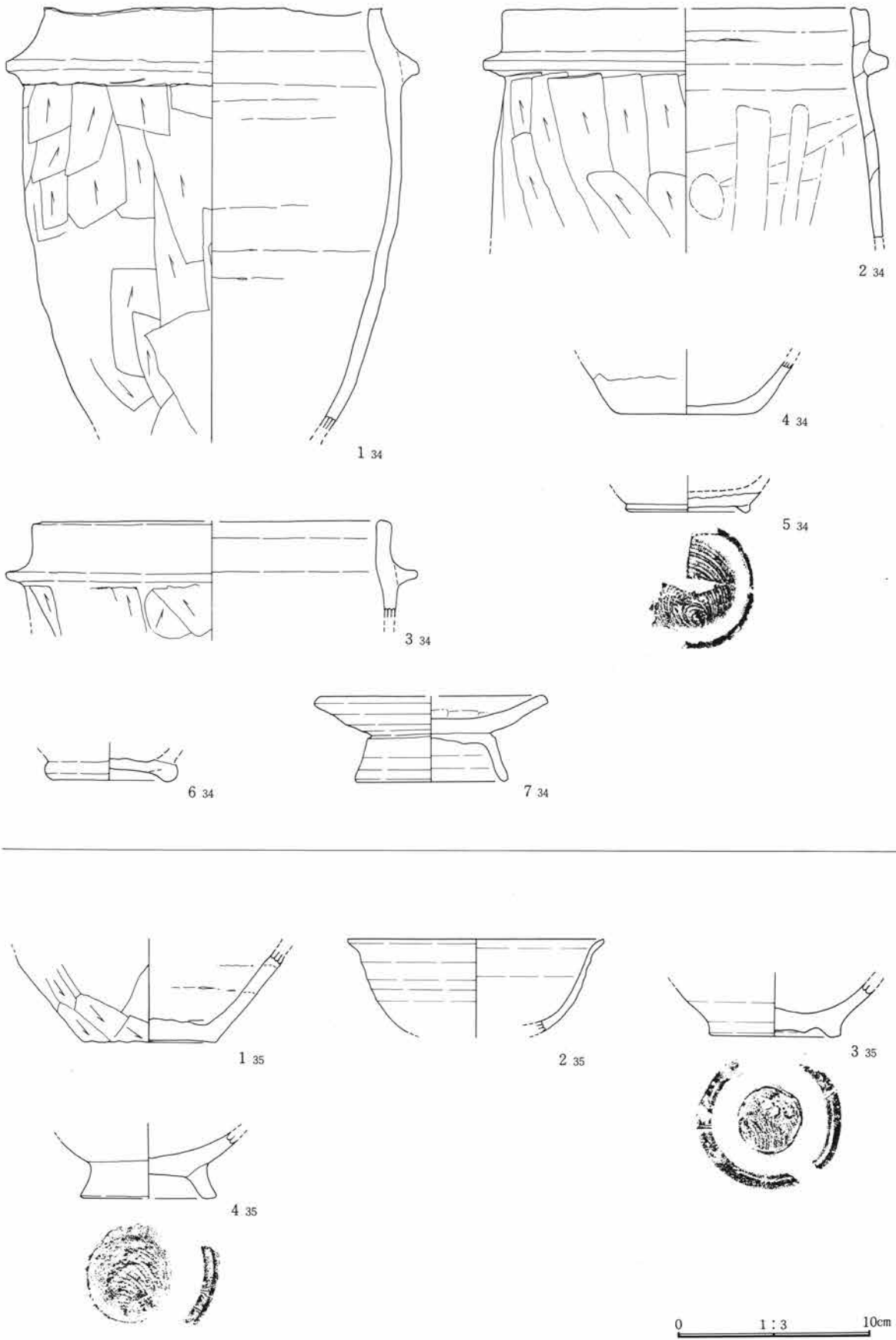
第168図 第32・33号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



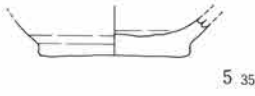
第169図 第33号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物

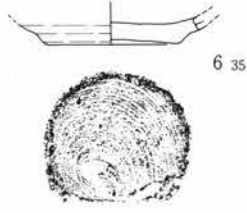


第170図 第34・35号住居址出土遺物

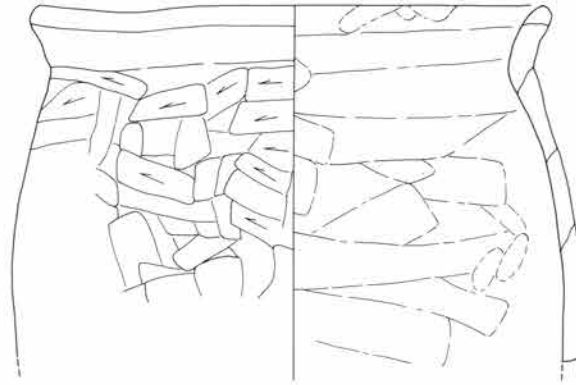
第三章 検出された遺構と遺物



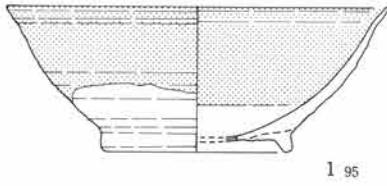
5 35



6 35



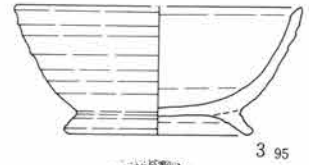
1 37



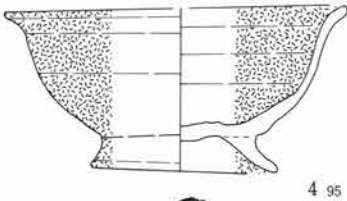
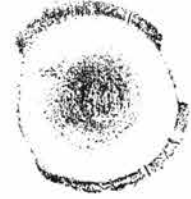
1 95



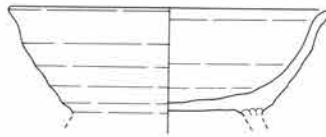
2 95



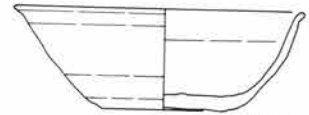
3 95



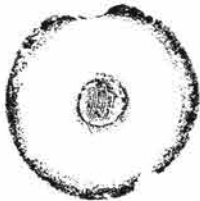
4 95



5 95



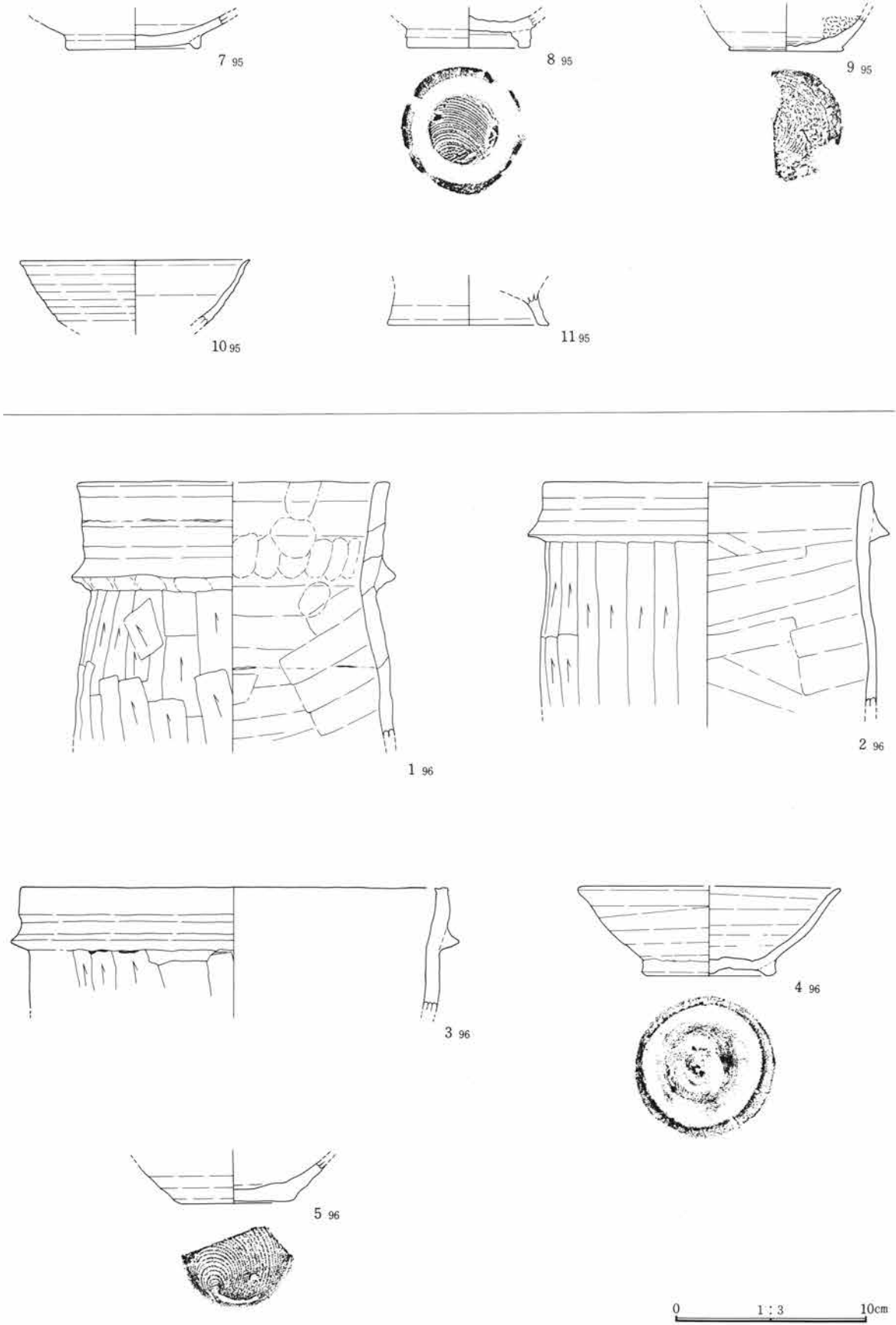
6 95



0 1:3 10cm

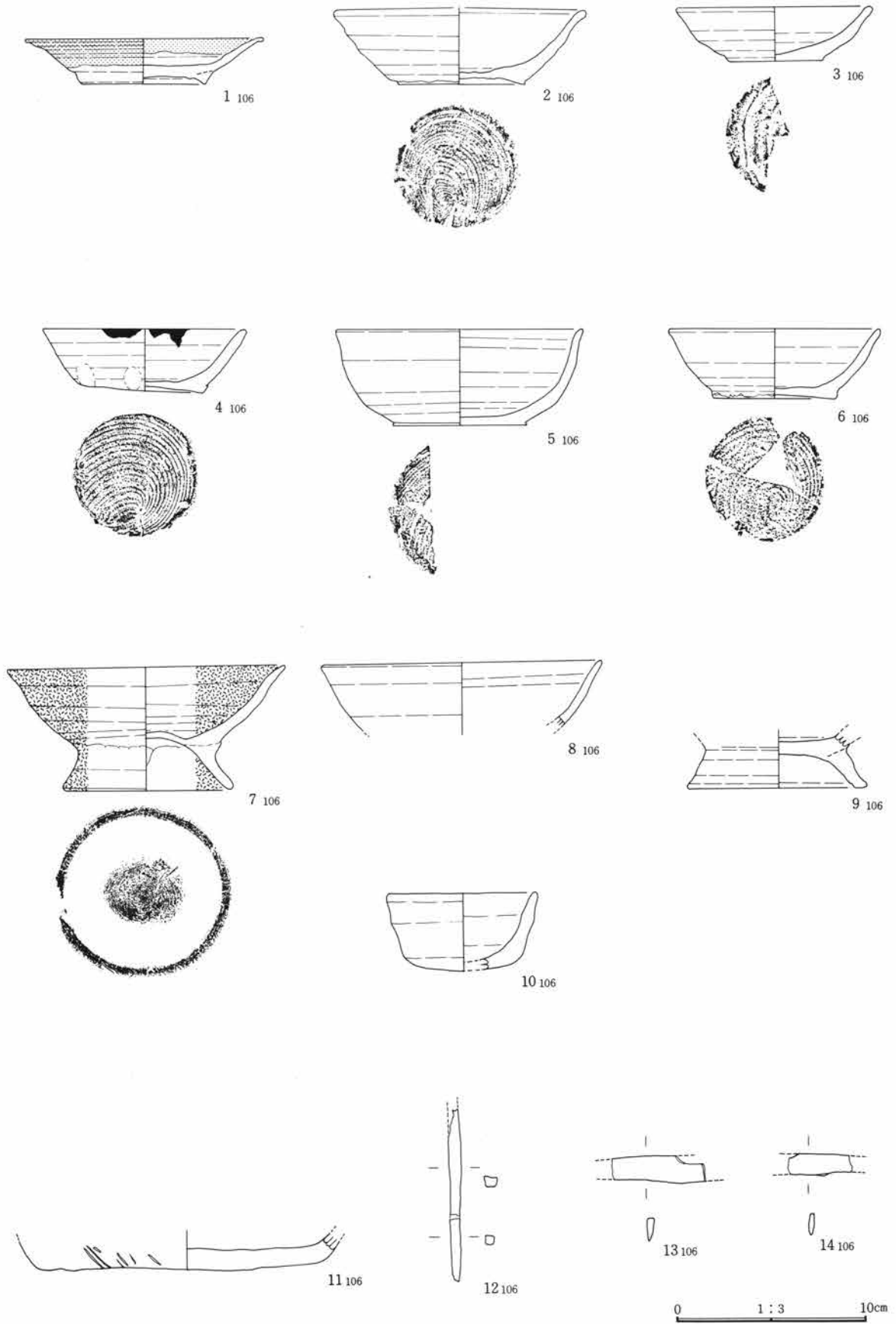
第171図 第35・37・95号住居址出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



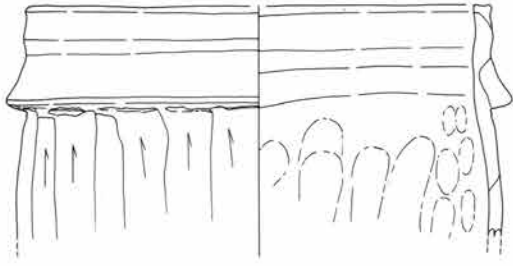
第172図 第95・96号住居址出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

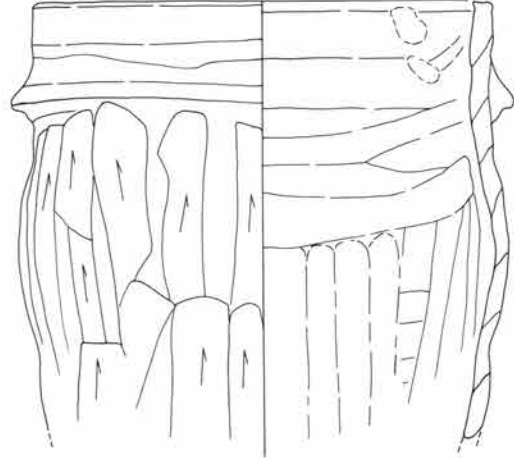


第173図 第106号住居址出土遺物

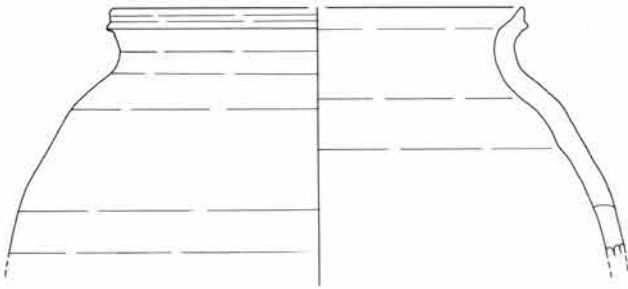
第3節 平安時代の遺構と遺物



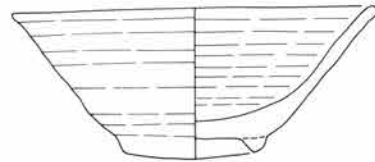
1 122



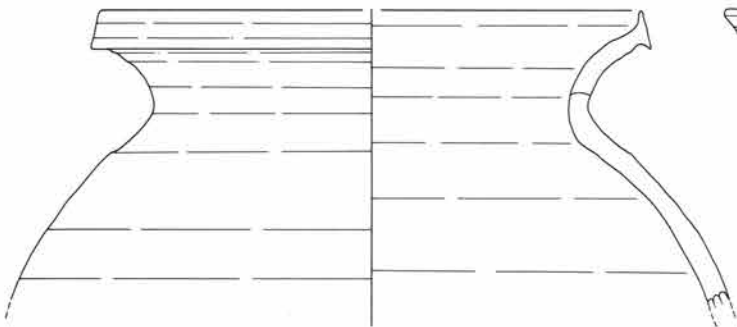
2 122



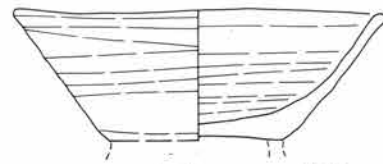
3 122



5 122



4 122



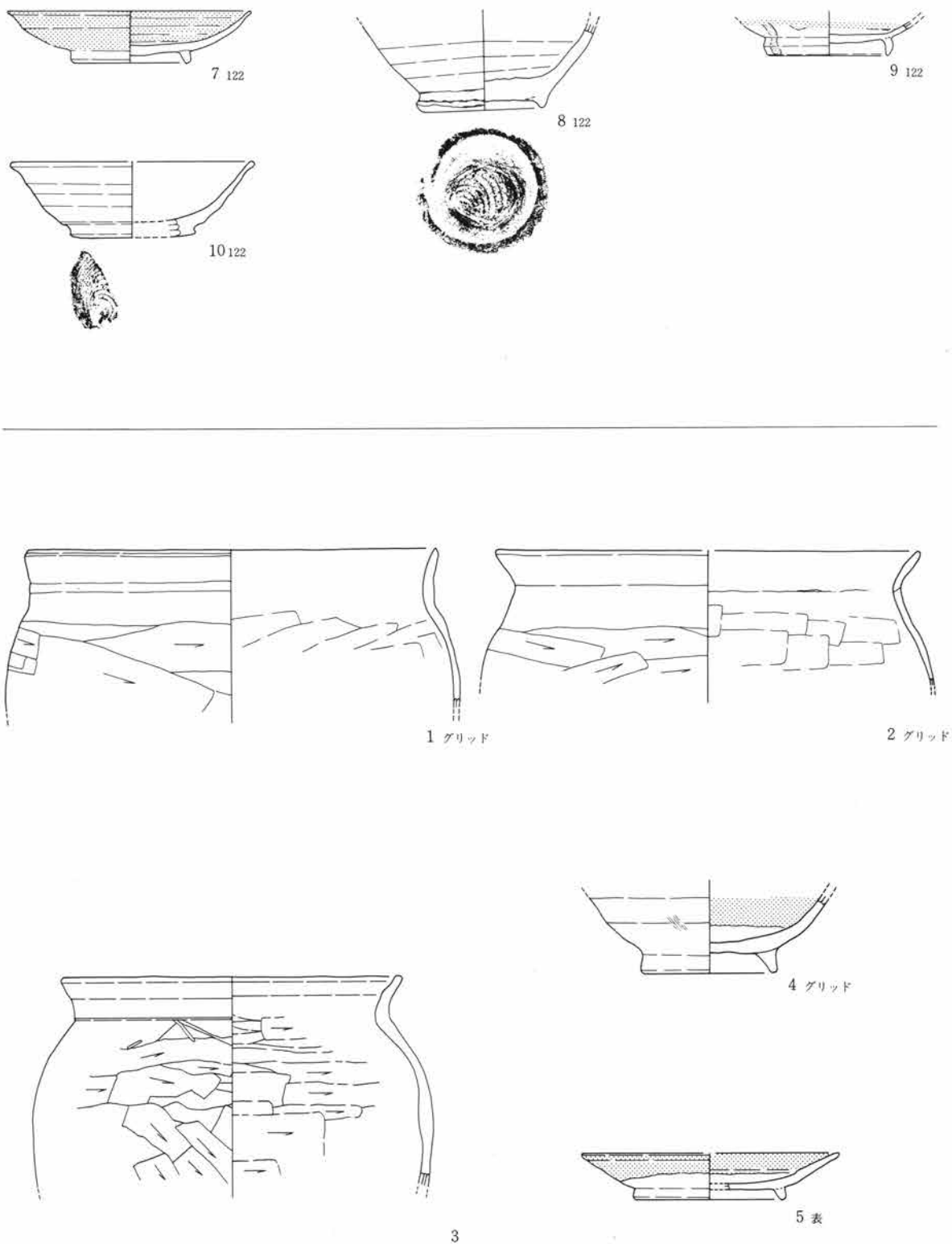
6 122



0 1 : 3 10cm

第174図 第122号住居址出土遺物

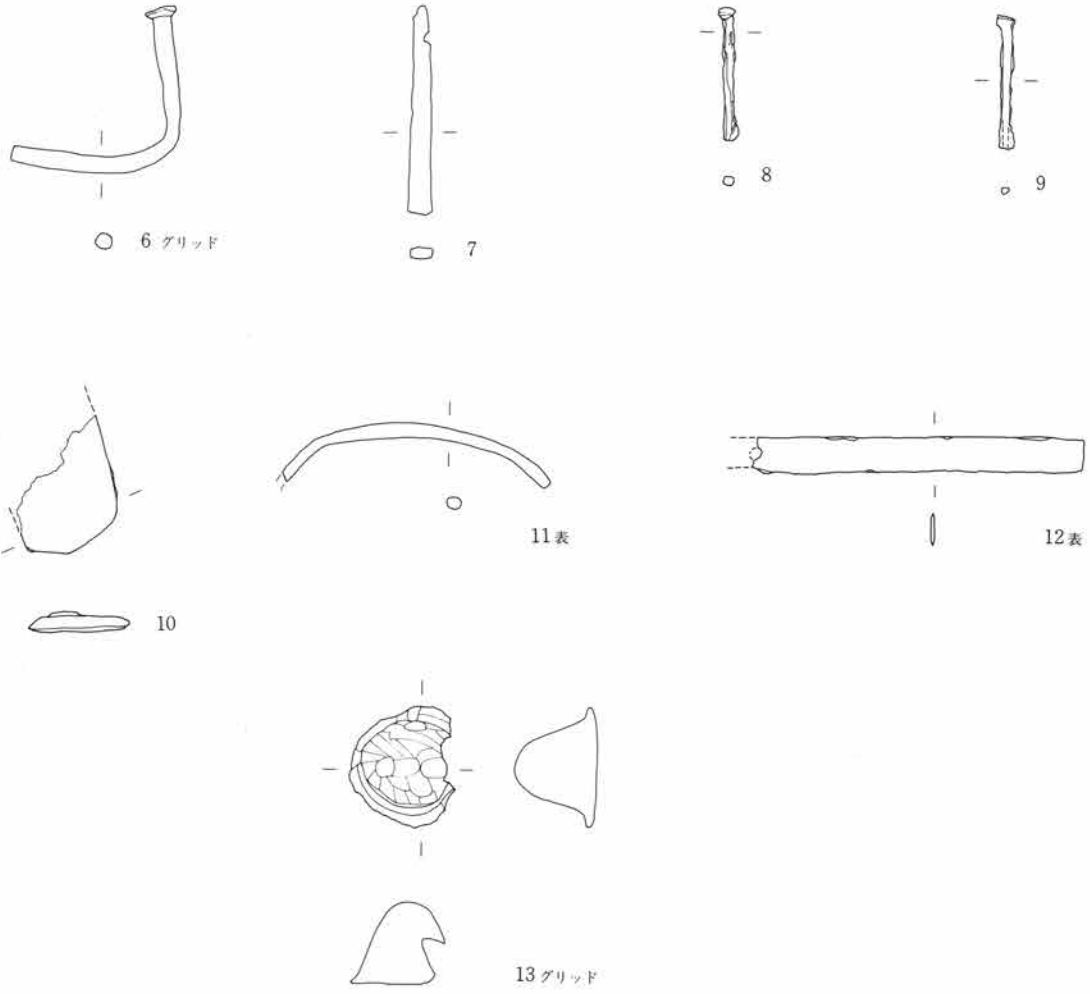
第三章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

第175図 第122号住居址・遺構外・グリッド出土遺物

第3節 平安時代の遺構と遺物



第176図 遺構外・グリッド出土遺物

0 1:3 10cm

第III章 検出された遺構と遺物

平安時代の出土遺物観察表

口径=口： 数字の単位はすべて
 底径=底； cmで表した。
 器高=高； ()内は推定値であ
 裾径=裾； る。

第1号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：(18.4)	覆土	鐔断面三角形を呈す。外；口縁部回転ヨコナデ。鐔上位回転ヨコナデ下位指押え。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部回転ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英多い ②にぶい褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	羽釜	口：(17.8)	覆土	鐔断面三角形。外；口縁部回転ヨコナデ。鐔指押え後上位回転ヨコナデ。下位ナデ後ヘラの当て目残る。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。①石英多い ②にぶい褐色 ③やや軟	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	羽釜	口：(16.8)	カマド	鐔やや小さく断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鐔上位ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ、指頭痕。胴部ヨコナデ。①石英多い ②にぶい褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	羽釜	口：(19.6)	床直	鐔断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英多い ②褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	羽釜	口：(17.8)	床直	鐔断面先端が鋭い三角形。口縁部に輪積み痕残る。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。下位にヘラの当て目。胴部タテのヘラケズリ。①石英・長石 ②褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	羽釜	口：(17.0)	カマド	鐔やや小さく丸味を帯びる。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。下位にヘラの当て目。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①砂粒 ②にぶい黄褐色 ③軟質	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
7	土師器甕(底部)	底：(9.8)	カマド	平底。外；ヨコのヘラナデ。底面ナデ。内；ヨコのヘラナデ。①石英・砂粒 ②にぶい黄褐色 ③良好	腰～底部 $\frac{1}{4}$ 残存
8	椀	口：(14.0) 底：(6.0) 高：5.5	貯蔵穴	外面やや磨滅。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①石英多い ②灰褐色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
9	土師質椀	底：7.6	ピット内	外；体部下位不明瞭なヘラナデ。高台部回転によるヨコナデ。内；直線的なミガキ。①細砂 ②橙色 ③良好	腰～底部のみ残存。
10	椀		覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①石英②灰褐色③やや軟	高台部欠損
11	杯	底：6.0	ピット内	底部回転糸切り無調整。右回転。①長石 ②褐灰色 ③良好	底部残存
12	椀	底：7.0	カマド	底部調整不明瞭。高台貼り付け。①長石・石英②にぶい褐色③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
13	灰釉陶器椀	底：6.8	覆土	底部回転によるナデ。①緻密で縞状 ②灰白色 ③良好	底部のみ残存

第5号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	土師器甕	口：(18.4)	覆土	「コ」字口縁。口唇部外面に薄い沈線を1条横走。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
2	土師器甕	口：(21.8)	覆土	「コ」字口縁。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存

第3節 平安時代の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
5住3	椀	口：14.6	覆土	右回転。①石英・長石 ②褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
4	杯	口：13.0 底：6.4 高：3.5	床直	やや歪む。底部回転糸切り無調整。右回転。 ①石英・長石・黒色粒 ②明褐色 ③やや軟	完形
5	椀	底：6.8	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英多い ②にぶい灰褐色 ③やや軟	腰～底部のみ 残存

第18号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：(17.4)	カマド	鐔断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位へらの当て目 胴部タテのへラケズリ。内：ヨコナデ。①石英 ②灰褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
2	羽釜	口：(21.0)	貯蔵穴	鐔外傾し断面方形。回転によるナデ。外：胴中位にへらナデ残る。 ①砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
3	椀	底：6.4	カマド	底部回転糸切り後高台貼り付け後ナデ調整。①雲母②褐色③やや軟	底部残存
4	灰釉陶器 椀	底：7.4	覆土	高台貼り付け。回転によるナデ。①緻密 ②灰白色 ③良好	底部残存

第19号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	甕 (底部)	底：(15.6)	カマド	大型の甕底部。外：底端部にへらナデ。底面へらナデ。内：当て目が 認められる。下位にヨコのへらナデ。①石英・砂粒②褐色③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	椀	底：6.2	土坑	内外面とも磨滅著しい。高台貼り付け。①石英②にぶい褐色③やや軟	底部残存
3	椀	底：(7.7)	土坑	底部回転糸切り後高台貼り付け。①石英 ②にぶい褐色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	羽釜	口：20.0	カマド	鐔先端部鋭く断面三角形。外：口縁部中位にナデによる沈線が横走す る。口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位へらの当て目。胴部タテの へラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのへらナデ。 ①石英 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴上半 部 $\frac{1}{2}$ 残存

第20号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	土師器 甕	口：22.0	カマド	「コ」字口縁。外：口縁部中位の輪積み痕を指押え後ヨコナデ。 胴部ヨコ・ナメのへラケズリ。内：口縁～胴部ヨコナデ。 ①少量の砂粒 ②褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	土師器 甕	口：20.4	床直 ピット内	「コ」字口縁。外：口縁部上位輪積み痕を指押え後ヨコナデ。胴部ヨ コのへラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのへらナデ。 ①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上 位 $\frac{1}{2}$ 残存
3	羽釜	口：16.0	覆土	鐔断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位にへら当て目。 胴部タテのへラケズリ。内：口縁～胴部ヨコナデ。 ①石英多い。②にぶい褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
4	羽釜	口：20.2	カマド	口縁部やや短い。鐔断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。 胴部タテ・ナメのへラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。 ①石英多い。②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
20 5	羽釜	口：(21.0)	ピット内	鐔やや長く断面三角形。外面やや磨滅。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位のへら当て目。胴部タテのへらケズリ。内：口縁部下位に指押え後ヨコナデ。胴部ヨコナデ。①石英 ②黄橙色 ③やや軟	口縁～胴上半部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	羽釜	口：(19.0)	ピット内	鐔断面台形状を呈す。器肉やや薄い。内外面とも回転によるヨコナデ。①砂粒 ②褐灰色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
7	椀	口：15.0	ピット内	体部回転によるナデ。右回転。外面体部上位に墨書。「留」か。①砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{3}{4}$ 残存
8	皿	口：13.5 底：7.0 高：3.4	床上	回転によるナデ調整。左回転。底部回転糸切り後高台貼り付け。底部に糸の圧痕残存。①石英・長石 ②灰白色 ③やや軟	口縁部一部欠損
9	皿	口：(12.8) 底：(7.2) 高：3.5	ピット内	回転によるナデ調整。左回転。底部回転糸切り後高台貼り付け。①砂粒 ②灰白色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
10	杯	底：5.2	覆土	器肉薄い。底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・砂粒 ②暗褐色 ③良好	底部残存
11	椀	底：7.2	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①石英多い ②橙色 ③やや軟	底部残存
12	椀	底：6.2	ピット内	底部回転糸切り後高台貼り付け。左回転。①石英多い ②にぶい褐色 ③良好	底部残存
13	椀	底：(6.4)	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①緻密 ②にぶい灰褐色 ③良好	底部残存

第21号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：(19.1)	覆土	鐔断面丸味を帯び内傾する。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ、先端部にはナデは及んでいない。胴部タテのへらケズリ。内：輪積み痕残存。口縁～胴部ヨコナデ。①石英多い ②暗褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
2	灰釉陶器 椀	口：(12.8) 底：(6.4) 高：(4.3)	覆土	底部回転によるナデ。施釉は内外面に漬け掛け。①緻密 ②灰白色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
3	杯	口：(13.0)	覆土	①石英・黒色粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
4	杯	底：5.4	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石 ②にぶい褐色 ③良好	底部残存
5	甕？ 底部	底：(9.0)	覆土	内外面とも回転によるナデ。①石英・砂粒 ②褐色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	椀		覆土	内底面中央肥厚。底部回転糸切り後高台貼り付け。左回転。①少量の石英・砂粒 ②灰黄褐色 ③やや軟	底部 $\frac{3}{4}$ 残存
7	椀		覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。雑な作り。右回転？①石英・長石 ②灰褐色 ③良好	底部残存

第22号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：16.6	カマド	鐔小型で断面丸味を帯びる。口縁部ヨコナデ。胴部タテのへらケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ナメのへらナデ。①石英②灰褐色③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存

第3節 平安時代の遺構と遺物

第23号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	杯	口：(11.2) 底：(5.6) 高： 3.3	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。内；底面に重ね焼き痕。 ①石英・長石 ②にぶい褐色 ③良好	1/2残存
2	杯	口：(12.2) 底：(3.7) 高： 5.6	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。 ①石英多い。長石 ②暗褐色 ③良好	1/2残存
3	椀	口：13.2 底： 4.8 高： 7.7	土坑内	底部回転糸切り後高台貼り付け時にナデ。右回転。高台部つまみによって先端部鋭く断面三角形。①石英・長石 ②褐色 ③良好	口縁部1/4欠損
4	椀	底： 6.5	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け時ナデ。左回転。 ①石英・砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	底部残存
5	杯	底： 5.8	カマド	底部回転糸切り後無調整。右回転。①砂粒・黒色粒②にぶい褐色③良好	底部1/2残存
6	甕？ 底部	底：(10.0)	カマド	平底。外；タテのヘラケズリ。底面ヘラケズリ。内；ヨコのヘラナデ ①石英・砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	底部1/2欠損
7	鉄製鋸	異形の鋸。目は7+α本。ループ状と思われる別金具が鋸留めされる。大半を欠損する。			
8	鉄製品	火打ち金。現状で重みがある。鋳鉄か。図の左端部が耳となり右半を欠損する。			

第24号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：(14.0)	覆土	鐙断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鐙ヨコナデ後下位のヘラ当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ナメのヘラナデ。①石英・長石 ②褐色 ③良好	口縁～胴部1/4残存
2	杯	口：(15.0)	カマド	高台貼り付け。右回転。①砂粒・黒色粒 ②灰褐色 ③良好	1/2残存
3	椀	底： 7.0	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①石英 ②暗褐色 ③良好	底部残存

第25号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：16.0	ピット内	鐙やや長く断面方形を呈す。外；口縁部ヨコナデ。鐙ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；ヨコナデ。①石英・長石 ②灰褐色 ③良好	1/4残存
2	椀	口：(16.0)	カマド 覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①砂粒 ②暗褐色 ③良好	体部1/2底部1/4残存
3	椀	口：15.4 底： 6.6 高： 5.6	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。墨書「大川」。 ①砂粒・黒色粒 ②灰褐色 ③良好	体部1/4欠損
4	椀	口：15.0 底： 6.9 高： 6.1	カマド	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・長石 ②にぶい褐色 ③良好	体部1/4欠損
5	椀	口：(14.8) 底：(7.0) 高： 5.9	カマド 床下	若干歪み有り。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英多い ②褐色 ③良好	1/2残存

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
25 6	椀	口：15.0 底：7.8 高：6.4	カマド	若干歪み有り。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・長石 ②暗褐色 ③良好	ほぼ完形
7	椀	底：7.0	覆土	高台やや小型。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①少量の石英・黒色粒 ②灰黄褐色 ③良好	底部残存
8	杯	口：13.2 底：5.6 高：3.9	覆土	底部回転糸切り後ヘラ書き。右回転。 内面黒色処理。①石英・黒色粒・砂粒 ②にぶい黄橙色 ③良好	体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
9	杯	口：(14.8) 底：(8.0) 高：(3.8)	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。底面器肉薄い。 ①石英・長石・黒色粒 ②明褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存
10	杯	口：(14.0) 底：6.2 高：3.8	床下	底部回転糸切り無調整。右回転。 ①少量の黒色粒・砂粒 ②褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 欠損
11	杯	口：13.8 底：6.4 高：4.2	カマド	底部回転糸切り無調整。右回転。 ①石英多い。長石・砂粒 ②暗褐色 ③良好	体部 $\frac{1}{2}$ 残存
12	杯	口：(13.8) 底：(7.0) 高：3.3	ピット内 覆土	器肉厚い。底部回転糸切り無調整。右回転。 ①黒色粒・砂粒 ②にぶい褐色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
13	杯	口：13.5 底：6.5 高：4.1	カマド	底部回転糸切り無調整。右回転。口縁部内面に煤付着。 ①石英・長石 ②暗褐色 ③良好	完形
14	杯	口：(16.1) 底：(10.0) 高：(3.9)	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。口唇部内外面に煤付着。 ①長石 ②褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存
15	杯	口：(12.5)	床下	①石英・長石 ②褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{4}$ 残存
16	杯	口：(14.2)	カマド	右回転。①石英・砂粒 ②黒褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
17	杯	口：(15.8)	覆土	右回転 ①黒色粒・砂粒 ②灰黄褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
18	杯	口：(15.8)	覆土	右回転 ①砂粒 ②灰白色 ③やや軟	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
19	杯	底：(6.0)	カマド	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石②にぶい黄橙色③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
20	杯?	口：(19.6)	カマド	右回転。①砂粒・黒色粒 ②褐色 ③良好	$\frac{1}{4}$ 残存
21	杯	底：6.5	カマド	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・砂粒②にぶい橙色③良好	底部残存
22	杯	底：6.7	カマド	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石 ②褐色 ③良好	底部残存
23	椀	底：(7.0)	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。①石英・長石②にぶい橙色③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
24	杯	底：5.4	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石 ②褐色 ③良好	底部残存
25	土師器 台付壺脚部	裾：9.4	床下	内外面ともヨコナデ。①長石・黒色粒 ②にぶい橙色 ③良好	裾部 $\frac{1}{2}$ 欠損
26	鉄製鎌	小形鎌。右きき用で右側に耳。研滅りは顕著でない。切先を僅かに欠くが原形をとどめる。			
27	鉄製紡錘車	軸断面は方形。軸両端部を欠損するが、形状遺存度は良い。			

第3節 平安時代の遺構と遺物

第26号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：19.3	カマド	鐔断面三角形。先端部鋭い。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位にヘラの当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂礫 ②灰褐色 ③良好	口縁～胴部残存
2	羽釜	口：17.2	覆土	鐔断面三角形。先端部鋭い。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位にヘラの当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂礫 ②暗灰褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
3	羽釜	口：(22.4)	カマド	全体的に歪みあり。鐔断面丸味を帯びる。外；口縁部輪積み痕を残しヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位にヘラの当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂礫 ②にぶい灰褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{3}{5}$ 残存
4	羽釜	口：(17.2)	カマド	鐔断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鐔指成形後ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。①石英・砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
5	羽釜	口：(16.0)	カマド	鐔やや小型。断面丸味を帯びる。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
6	羽釜	口：(21.0)	ピット内	鐔断面丸味を帯びる。外；口縁部ヨコナデ。鐔指成形後ヨコナデ。下位にヘラの当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデと指押え。①石英・砂礫 ②にぶい褐灰色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
7	釜 腰～底部	底：(7.0)	カマド	外；タテのヘラケズリ。底面ナデ。内；ヨコのヘラナデ。①石英・砂粒 ②褐灰色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
8	椀	底：6.5		外面やや磨滅。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。①石英・黒色粒・砂粒 ②にぶい橙色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
9	鉄製鎌	研滅りは少ないが耳部を欠損する。			
10	石製紡錘車	直径4.8cm。厚さ1.6cm。重さ55g。中央の孔の径8mm。上面端部・側面に磨滅が認められる。			

第27号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	土師器 甕	口：(19.1)	床下	「コ」字口縁。外；口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコのヘラケズリ。下半タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴下半 $\frac{1}{2}$ 残存
2	土師器 甕	口：(21.2)	床下	「コ」字口縁。やや歪み有り。外；口縁部ヨコナデ。中位にヘラの当て目。胴部上半ヨコのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコ・ナナメのヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	甕	口：(22.2)	カマド	大型の甕。回転によるナデ調整。右回転。①石英・砂粒 ②褐灰色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	羽釜	口：19.0 底：6.0 高：31.9	床下	口縁部内傾。鐔断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後ヘラの当て目が及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。底面ナデ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヘラのヨコナデ。底部強いヨコナデ。①石英・砂粒 ②灰褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	台付壺	底：10.0	カマド	体部上半にふくらみを持つ。外；体部回転によるナデ。左回転。下位ヨコのヘラケズリ。底部ナデ後高台貼り付け。内；ヨコナデ。中位に煤附着。①石英・長石・砂粒 ②にぶい灰褐色 ③良好	体部上半～底部 $\frac{1}{2}$ 残存

第III章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
27 6	杯	口：(15.0)	床下	回転によるナデ。右回転。①黒色粒 ②明褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
7	土師質杯	口：(13.4) 底：(4.5) 高：(3.8)	床下	底部回転糸切り無調整。右回転。①黒色粒 ②明褐色 ③軟質	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 底部 $\frac{1}{6}$ 残存
8	灰釉陶器碗	口：(15.6)	覆土	回転によるナデ。右回転。施釉内外面漬け掛け。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 残存
9	杯	底：7.0	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石②にぶい黄褐色③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
10	杯	底：6.0	床直	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・長石 ②黒褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{3}$ 残存
11	碗	口：14.8 底：7.0 高：5.6	床上	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。外：中位に墨書の痕跡。 内：体部中位に墨書「竺」か。①砂礫 ②にぶい灰褐色 ③やや軟	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 底部完
12	甕	口：27.0	床直 横位	大型の甕。外：口縁部回転によるヨコナデ。体部ヨコ・ナナメのナデ 平行叩き目残る。内：口縁部ヨコナデ。体部同心円文の叩き後ヘラナ デ。①石英・砂粒 ②灰白色 ③やや軟	底部欠損
13	鉄製刀子	切先と茎尻を僅かに欠損するがほぼ完存。刃区部は不明瞭であるが棟区あり。平棟平造り。			
14	鉄製品	引手金具か。角打ちで「コ」の字形状を呈する。先端部は欠損するが遺存端部は図に対し持ち上がる。			
15	鉄製品	棒状製品。両端部を欠損し、用途は不明。			

第29号住居址

1	鉄製品	座金物。中央に方形気味の孔を穿つ。周辺は錆化しているため、花卉の有無は不明。			
2	鉄製品	釘か。断面方形を呈し、頭部を欠損するが先端部は遺存する。			
3	鉄製釘	断面方形を呈し、先端部僅かに欠損。頭部は折り曲げて作り出す。			
4	鉄製品	錐か。断面方形を呈す。茎の一部を遺存し、身との間に区分有り。茎尻を失うが原形をほぼとどめる。			
5	鉄製鍵	海老状の鍵で、端部の遺存は不明瞭。鍵尻旧状をとどめる。身部鍵刻み2カ所あり。			
6	鉄製刀子	茎から切先まで完存。棟区有り。平棟平造り。			

第30号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	甕	口：(25.2)	カマド	口縁部外反。外：口縁部ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内：口縁 部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。 ①石英・長石・砂粒 ②明褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{3}$ 残存
2	灰釉陶器碗	口：12.8 底：7.2 高：4.5	カマド	高台貼り付け後回転によるナデ後底面中央を削り込む。施釉は内外面 漬け掛け。①緻密 ②灰白色 ③良好	口縁部一部欠 損
3	灰釉陶器杯	口：13.2 底：6.8 高：2.4	カマド	高台貼り付け後回転によるナデ。施釉は内外面漬け掛け。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
4	灰釉陶器碗	口：15.7 底：8.0 高：5.0	床直	高台貼り付け後回転によるナデ。施釉は外面やや少なく、漬け掛け。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存

第3節 平安時代の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
30住5	灰釉陶器 椀	底：9.2	床直	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け後回転によるナデ。施釉は見込み端部に認められる。①緻密 ②にぶい褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	灰釉陶器 椀	口：(16.2)	カマド	回転によるナデ調整。施釉は内外面漬け掛け。 ①緻密 ②灰褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存

第31号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考	
1	羽釜	口：18.3 底：8.0 高：26.2	カマド	鐔やや小型で断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位にヘラの当て目及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。底面ナデ。内：口縁～胴部ヨコナデ。①石英・砂粒 ②明褐色 ③やや軟	ほぼ完形	
2	甕	口：12.6 底：7.6 高：12.8	カマド	小型甕。口縁部短く外傾。外：口縁～胴部上半ヨコナデ。下半ナメのヘラケズリ。底面ケズリ後ナデ。内：口縁～胴部ヨコナデ。煤附着。 ①石英・砂粒 ②暗褐色 ③良好	ほぼ完形	
3	鉄製刀子	小型刀子。茎尻を失うが旧状をとどめる。刃区有り。重ねが著しく厚い。				

第32号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	土師器 甕	口：(20.0)	床下	「コ」字口縁。外：口縁部ヨコナデ。中位に輪積み痕。胴部上半ナメのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコのヘラナデ。 ①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
2	土師器 甕	口：(19.6)	床下	「コ」字口縁。口唇部と中位に沈線を横走。外：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコ・ナメの細かいヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコのヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	須恵器 甕	口：(20.8)	床下	大型の甕であろう。外：口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ。内：口縁部ヨコナデ後ナメのヘラナデ。胴部ヨコナデ後一部にタテのヘラナデ ①砂礫 ②明褐色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	須恵器 甕		床	大型の甕。外：口縁部ヨコナデ。胴部ナメのヘラナデ。内：口縁部ヨコナデ。胴部無文の当て具で調整。①砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
5	羽釜	口：19.2	カマド	鐔断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位ヘラの当て目残る。胴部タテのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。指頭痕。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂礫 ②暗褐色 ③やや軟	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
6	羽釜	口：(15.9)	床直	鐔断面三角形。先端部鋭い。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位ヘラの当て目及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂粒 ②灰褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 残存
7	羽釜	口：18.5	床直	鐔断面三角形。先端部鋭い。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ後下位ヘラの当て目及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①石英・砂粒 ②暗褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
8	羽釜	口：(14.6)	覆土	口縁部やや内傾。鐔断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鐔ヨコナデ。胴部タテ・ナメのヘラケズリ。内：口縁～胴部ヨコナデ。 ①石英・長石・砂粒 ②明灰褐色 ③やや軟	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
9	椀	口：(14.0)	覆土	右回転。①石英・黒色粒 ②明褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
10	椀	口：(15.6)	覆土	右回転。①少量の砂粒 ②暗褐色 ③やや軟	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存

第三章 検出された遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
32 11	椀	口：14.1 底：7.4 高：5.7	カマド	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。底部雑な作り。 ①砂粒 ②にぶい褐色 ③やや軟	ほぼ完形
12	椀	口：14.5 底：7.5 高：5.7	カマド	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。内面に煤付着。 ①石英・砂粒 ②明灰褐色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
13	椀	口：(14.2) 底：(6.5) 高：5.8	カマド	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・砂粒 ②にぶい褐色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
14	椀	口：(16.6) 底：(8.0) 高：(5.3)	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①少量の砂粒 ②にぶい橙色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
15	杯	口：12.9 底：6.0 高：4.0	床下	底部回転糸切り無調整。外縁磨滅。右回転。内面重ね焼き痕。 ①少量の砂粒・黒色粒 ②明褐灰色 ③良好	ほぼ完形
16	杯	底：6.0	覆土	底部回転糸切り後無調整。外縁磨滅。右回転。 ①石英・砂粒 ②灰褐色 ③良好	底部残存
17	椀	底：7.0	床下	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・長石・砂粒 ②暗褐灰色 ③良好	底部残存
18	椀	底：6.6	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。左回転。内面煤付着。 ①石英・長石・砂粒 ②灰褐色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
19	杯	底：(6.4)	覆土	底部回転糸切り無調整。外縁磨滅。右回転。 ①石英・砂粒 ②暗灰褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
20・21 23	鉄製品 輪形金具	輪形状を呈するが用途不明。錆化状態から鍛造状態を推察すれば、錆筋は短く精鍛造である。			
22	鉄製釘	断面方形で、頭部から端部まで完存。曲がり部が2カ所あり、おそらくは材料の厚みを示すと思われる板材とすれば、厚さ3cm。			
24	鉄製品	吊手・引手金具か。断面方形を呈し、曲がり部が2カ所あり、図左端がくい込み部となる。			
25	鉄製刀子	大型刀子。図の下が棟部。棟区あり。刃区は不明瞭。茎は完存。切先を含め欠損はなく遺存状態は良好。形態は平棟平造り。			
26	鉄製刀子	小型刀子。茎尻を欠損するが、ほぼ原形をとどめる。刃区は不明瞭であるが棟区を残す。平棟平造り。			
27・28	鉄製刀子	刀子の茎で刃部を欠く。			
29	砥石	凝灰岩製。4面使用しその内2面を多用している。図右上の凹み周辺は使用痕少い。細砥だが両端部は欠損する			

第3節 平安時代の遺構と遺物

第33号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：18.0	カマド	口縁部若干内傾。鋸断面三角形。胴部ややふくらみを持つ。外；口縁部ヨコナデ。鏝ヨコナデ。胴部上位ヨコのヘラケズリ。以下タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。 ①石英多い。砂礫 ②暗褐色 ③やや軟	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	羽釜	口：(19.6)	カマド	口縁部若干内傾。鋸断面三角形。胴部ややふくらみを持つ。外；口縁部ヨコナデ。ヘラ?の当て目残る。鏝ヨコナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。 ①石英・砂粒 ②にぶい褐色 ③やや軟	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	羽釜? 底部	底：4.0	カマド	器肉厚い。外；タテのヘラケズリ。底面ケズリ。内；ヨコのヘラナデ。底面不定方向のヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③軟質	腰部 $\frac{1}{2}$ 底部 $\frac{1}{2}$ 残存
4	羽釜 底部	底：(8.0)	カマド	外；タテのヘラケズリ。底面ナデ。内；ヨコのヘラナデ。 ①石英・砂粒 ②にぶい褐色 ③やや軟	腰～底部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	耳杯	口：9.5 底：4.5 高：3.6	床直	底部回転糸切り後中央に径6mm程の孔を穿つ。右回転。内面に指頭痕 ①細砂 ②内外面とも黒色 ③良好	口唇部一部欠損
6	耳杯	口：10.0 底：5.1	覆土	内外面とも磨滅著しい。底部回転糸切り後無調整。右回転。内面に指頭痕。①石英・砂粒 ②内外面ともにぶい黄褐色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損
7	灰釉陶器 椀	口：(15.0) 底：8.4 高：4.8	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付。右回転。施釉は内外面とも潰け掛け。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 残存
8	椀	底：7.0	床直	底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁をていねいにナデ。右回転。 ①少量の砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	底部残存
9	椀		カマド	器肉厚い。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・黒色粒 ②にぶい褐色 ③良好	高台欠損 体部 $\frac{1}{2}$ 残存
10	椀	口：(12.0) 底：(6.0) 高：5.6	覆土	高台は付かない。左回転。底部調整は不明。 ①少量の石英 ②にぶい灰褐色 ③良好	口縁部 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 残存
11	椀	口：(13.0)	覆土	右回転。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
12	椀	口：(11.6) 底：(6.0) 高：4.0	覆土	高台は付かない。底部回転糸切り無調整。右回転。 ①石英・砂粒 ②浅黄褐色 ③やや軟	口縁部 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 残存
13	椀	口：(10.0) 底：5.0 高：3.6	床直	器肉薄くていねいな作り。底部回転糸切り無調整。右回転。 ①長石 ②暗褐色 ③良好	口縁部僅か 底部 $\frac{1}{2}$ 残存
14	鉄製鎌	有柄尖根式。鎌先には鑄筋が立ち、鎌区有り。鎌区部・茎は断面方形を呈す。茎尻欠損するがほぼ原形。			
15	鉄製鎌	小型鎌。切先部側がやや研滅る。図右側に耳あり。右きき用。			

第III章 検出された遺構と遺物

第34号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	口：18.0	床直	口縁部若干内傾。鏝断面三角形。口縁部ヨコナデ。鏝ヨコナデ後下位にヘラの当て目及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。外面胴部上半煤付着。 ①石英・長石・黒色粒 ②にぶい橙色 ③やや軟	口縁～胴部下半 $\frac{1}{2}$ 残存
2	羽釜	口：19.0	カマド	鏝断面方形を呈す。口縁部ヨコナデ。鏝ヨコナデ。胴部タテ・ナナメのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後雑なタテのヘラナデ。①長石・砂粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
3	羽釜	口：(19.0)	カマド	鏝断面丸味を帯びる方形。口縁部ヨコナデ。鏝ヨコナデ後下位にヘラの当て目及ぶ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。①石英・長石 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存
4	杯	底：(8.0)	床直	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英・黒色粒 ②暗褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	杯?	底：6.4	床上	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・長石 ②暗褐色 ③やや軟	内器面欠損
6	椀?	底：7.0	ピット内	外面磨減。底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①長石・砂粒 ②明褐色 ③やや軟	底部残存
7	台付皿	口：12.0 底：8.0 高：4.4	住居外	底部回転によるナデ後高台貼り付け。右回転。 ①少量の黒色粒 ②浅黄褐色 ③軟質	口縁～体部 $\frac{3}{4}$ 欠損

第35号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽釜	底：7.0	カマド	外；タテ・ナナメのヘラケズリ。底面ナデ。内；ヨコのヘラナデ。 ①石英・長石 ②暗褐色 ③良好	腰部 $\frac{1}{2}$ 残存
2	椀	口：(13.0)	覆土	高台は付かない。右回転。①石英・砂粒 ②白灰色 ③やや軟	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
3	椀	底：7.0	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁でいぬいにナデ。左回転。 ①石英・長石 ②褐色 ③良好	底部残存
4	椀	底：(7.0)	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。左回転 ①石英・長石 ②褐色 ③良好	高台 $\frac{1}{2}$ 欠損
5	杯	底：6.0	覆土	外面磨減。底部回転糸切り後無調整。右回転 ①石英・長石 ②褐色 ③やや軟	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
6	杯	底：5.4	覆土	底部回転糸切り後無調整。右回転。①石英・長石②にぶい褐色③良好	底部残存

第37号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	甕	口：20.8	カマド	口縁部外傾。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。 ①石英・長石 ②明褐色 ③良好	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存

第3節 平安時代の遺構と遺物

第95号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	灰釉陶器 椀	口：15.0 底：7.4 高：6.0	カマド	高台貼り付け。施釉は内外面漬け掛け。 ①緻密 ②灰色 ③良好	1/3残存
2	椀	口：11.4 底：6.4 高：4.0	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。底部に焼成前の補修痕有り 燻焼成。①石英・長石・黒色粒 ②黒褐色 ③良好	口縁部1/4残存
3	椀	口：(11.4) 底：7.0 高：5.0	床直	底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁ていねいにナデ。右回転。高台 端部の一部歪み有り。①石英・黒色粒 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～体部3/4 欠損
4	椀	口：13.6 底：7.4 高：6.4	床下	底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁ていねいにナデ。右回転。 燻焼成。①細砂 ②暗褐色 ③良好	口縁部1/4欠損
5	椀	口：13.0	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①黒色粒・細砂 ②にぶい灰褐色 ③やや軟	高台部欠損 1/3残存
6	杯	口：11.6 底：5.0 高：4.0	床直	底部回転糸切り無調整。右回転。内面重ね焼き痕有り。 ①石英・長石・黒色粒 ②褐色 ③良好	口縁～体部1/2 残存
7	灰釉陶器椀	底：3.5	床下	高台貼り付け。施釉は不明。①緻密 ②灰白色 ③良好	底部残存
8	椀	底：6.4	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け時に外縁ていねいなナデ。右回転。 ①細砂 ②褐色 ③やや軟	底部残存
9	杯	底：(6.0)	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。①石英 ②褐色 ③良好	底部1/3残存
10	杯?	口：(12.0)	床下	器肉薄い。右回転。①細砂 ②褐色 ③良好	口縁1/3残存
11	椀 高台部	底：8.4	覆土	①石英・長石 ②明褐色 ③良好	高台部残存

第96号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	羽 釜	口：(16.4)	床直	口縁部やや長く鑄小さく断面三角形。外；口縁部ヨコナデ。鑄指成形 後ヨコナデ。下位に指頭痕残る。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部 ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラナデ。 ①石英・砂粒 ②にぶい橙色 ③やや軟	口縁～胴部上 半1/4残存
2	羽 釜	口：(17.2)	床上	口縁部短く鑄断面三角形先端部は鋭い。外；口縁部ヨコナデ。鑄ヨコ ナデ。胴部タテのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ナナメのヘ ラナデ。①石英・砂粒 ②黒褐色 ③良好	口縁～胴部上 半1/4残存
3	羽 釜	口：(22.4)	カマド	鑄断面三角形先端部鋭い。外；口縁部ヨコナデ。鑄ヨコナデ。胴部タ テのヘラケズリ。内ヨコナデ。①石英・長石 ②にぶい黄橙色 ③良好	
4	椀	口：(13.6) 底：7.0 高：4.6	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁ナデ。底部中央に補修孔有り。 右回転。①石英・黒色粒 ②暗灰褐色 ③やや軟	口縁～体部3/4 欠損
5	杯	底：(6.0)	覆土	底部回転糸切り無調整。左回転。内面に糸?の圧痕有り。 ①砂粒 ②灰黄褐色 ③良好	底部1/2残存

第III章 検出された遺構と遺物

第106号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	灰釉陶器 段皿	口：12.8 底：6.6 高：2.4	床下	底部回転糸切り後高台貼り付け時に外縁ナデ。右回転。施釉は内外面ともに潰け掛け。①長石・黒色粒 ②白灰色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
2	杯	口：13.4 底：7.0 高：4.0	覆土	底部回転糸切り無調整。全体的に雑な作り。右回転。①石英・砂粒 ②褐色 ③やや軟	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 欠損
3	土師質 杯	口：(10.6) 底：(5.0) 高：2.8	覆土	底部静止糸切り無調整。左回転。 ①石英・砂粒多い ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
4	土師質 杯	口：11.0 底：6.8 高：3.2	覆土	底部回転糸切り無調整。左回転。内外面口唇部に油煙付着。 ①石英・雲母 ②浅黄橙色 ③良好	完形
5	椀	口：(13.0) 底：(7.0) 高：5.0	床直	底部回転糸切り無調整。左回転。 ①石英・砂粒 ②にぶい橙色 ③良好	$\frac{1}{2}$ 残存
6	杯	口：11.0 底：6.4 高：3.8	覆土	底部回転糸切り無調整。左回転。 ①石英・砂粒 ②明褐色 ③良好	底部一部欠損
7	椀	口：14.8 底：9.0 高：6.4	床直	高台部長い。底部回転糸切り後高台貼り付け時にナデ。左回転。 燻焼成。①石英・砂粒 ②黒色 ③良好	口唇部 $\frac{1}{2}$ 欠損
8	椀	口：14.6	覆土	左回転。①石英・砂粒 ②灰褐色 ③やや軟	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
9	椀		覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け時に外縁をていねいにナデ。右回転。 ①石英・砂粒 ②褐色 ③良好	底部残存
10	土師質 杯	口：(8.0) 底：(5.0) 高：(4.0)	床下	小型の杯。底面磨滅。①細砂・雲母 ②にぶい橙色 ③やや軟	$\frac{1}{2}$ 残存
11	土師器 羽釜?	底：15.2	ピット内	外：ヘラケズリ。内：ヘラナデ。底面に煤付着。 ①石英多い ②暗褐色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
12	鉄製品	釘か。断面方形を呈す。頭と先端を欠損する。			
13	鉄製刀子	茎尻と半身を欠く。刀区は見られないが研減りのため小刀区が生じる。平棟平造り。			
14	鉄製刀子	茎から身部にかけての小片。棟区を欠く。平棟平造り。			

第122号住居址

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1・2	羽釜	1口：(18.6) 2口：(18.4)	覆土	鏝内傾し小さい。断面三角形。外：口縁部ヨコナデ。鏝ヨコナデ後下位にヘラの当て目。胴部タテのヘラケズリ。内：口縁部ヨコナデ。胴部上半ヨコのヘラナデ、下半タテの指ナデ。1・2とも同一個体か。 ①石英・砂粒 ②1、灰褐色 2、黒褐色 ③良好	1、口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存 2、口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 残存
3	甕	口：(16.6)	覆土	内・外面ともナデ。①黒色粒・砂粒 ②灰褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存
4	甕	口：(22.0)	覆土	内・外面ともナデ。①黒色粒・砂粒 ②褐色 ③良好	口縁 $\frac{1}{2}$ 残存

第3節 平安時代の遺構と遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
5	杯	口：14.6 底：5.4 高：6.0	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・黒色粒 ②にぶい橙色 ③やや軟	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 欠損
6	杯	口：14.8	覆土	底部回転糸切り後高台貼り付け。右回転。 ①石英・砂粒 ②褐灰色 ③良好	高台部欠損
7	灰釉陶器 皿	口：12.0 底：6.0 高：2.6	覆土	口縁部やや歪む。高台貼り付け。施釉は不明。 ①緻密 ②明褐灰色 ③良好	口縁～体部 $\frac{1}{3}$ 欠損
8	碗	底：6.4	壁	器肉厚い。底部回転糸切り後高台貼り付け時外縁雑なナデ。右回転。 ①石英・長石 ②にぶい褐色 ③良好	口縁部欠損
9	灰釉陶器 碗?底部	底：6.2	覆土	高台貼り付け。施釉は不明。釉だけ底面にまで及ぶ。 ①緻密 ②明褐灰色 ③良好	底部残存
10	杯	口：(12.0) 底：(6.4) 高：3.6	覆土	底部回転糸切り無調整。右回転。 ①石英・砂粒 ②暗褐色 ③良好	$\frac{1}{3}$ 残存

遺構外・及びグリッド出土遺物

番号	器種	大きさ	出土位置	器形・成・整形の特徴 ①胎土 ②色調 ③焼成	備考
1	土師器 甕	口：20.6	20E40	くずれた「コ」字口縁。口唇端部に沈線が横走る。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{3}$ 残存
2	土師器 甕	口：21.2	20E40	「コ」字口縁。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。頸～胴部ヨコのヘラナデ。 ①細砂 ②にぶい褐色 ③良好	口縁～胴部上半 $\frac{1}{3}$ 残存
3	土師器 甕	口：17.0	20E40 土坑	「コ」字口縁。口縁部上位大きく外反。胴部上半にふくらみを持つ。外；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコ・ナナメのヘラケズリ。内；口縁部ヨコナデ。胴部ヨコのヘラナデ。①少量の砂粒 ②褐色 ③良好	口縁～胴部下半 $\frac{1}{3}$ 残存
4	灰釉陶器 碗	底：6.8	E区表探	底部回転糸切り後高台貼り付け。施釉はハケ塗り。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	底部 $\frac{1}{2}$ 残存
5	灰釉陶器 皿	口：12.8 底：7.4 高：2.4	E区	高台貼り付け。施釉は潰け掛け。 ①緻密 ②灰白色 ③良好	$\frac{1}{3}$ 残存
6	鉄製釘	断面やや丸味を帯び、角釘と比しがたい。端部を欠き、全体に大きく屈曲する。			
7	鉄製品	工具か。茎片と思われるが刃部を欠くため、用途は不明。			
8	鉄製品	頭・身部の一部残存するが、先端部を欠くため、用途は不明。			
9	鉄製品	遺存不良のため用途不明。			
10	鉄製品	用途不明。折り返しの合わせ目がある。鍛鉄。			
11	鉄製品	棒状鉄製品。断面は円形を呈す。両端部を欠くため用途は不明。			
12	鉄製品	用途不明。端部を欠き、断面は薄く扁平。			
13	櫃の把手?		34-30E 05-10	先端部にかけてナデを施す。焼成は良好。にぶい褐色を呈す。	

第III章 検出された遺構と遺物

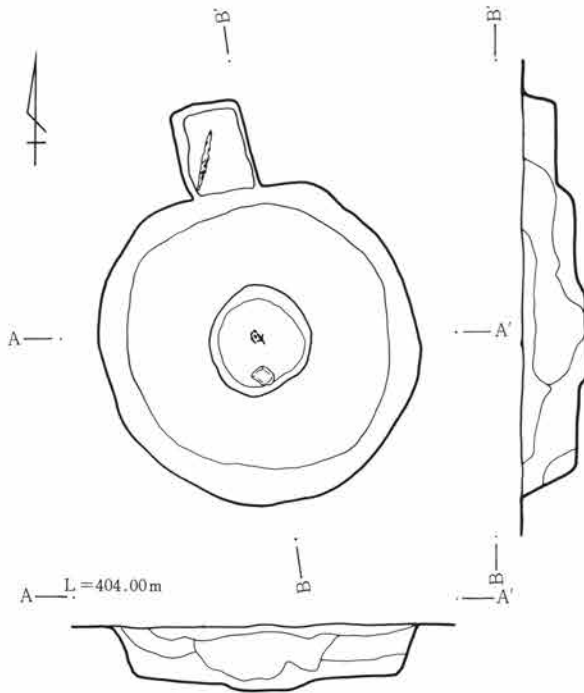
第4節 その他の遺構

遺構名	遺構実測図	遺構図版
第1号竪穴状遺構	第177図	図版71
第2号竪穴状遺構	第178図	図版71
第4号竪穴状遺構	第179図	図版71
第5号竪穴状遺構	第180図	図版72
第6号竪穴状遺構	第181図	図版72
第28A号竪穴状遺構	第182図	図版72
第2号土坑	第183図	
第21号土坑	第183図	
第22号土坑	第183図	図版73
第24号土坑	第184図	
第26号土坑	第184図	
第27号土坑	第184図	
第28号土坑	第184図	
第29号土坑	第185図	
第30号土坑	第185図	
第37号土坑	第185図	
第39号土坑	第185図	

遺構名	遺構実測図	遺構図版
第31号土坑	第186図	
第41号土坑	第186図	
第44号土坑	第186図	
第45号土坑	第187図	
第254号土坑	第187図	図版73
第50号土坑	第187図	図版73
第20号土坑	第187図	
V層(FP)面北西部の小型ピット群	第188図	図版75
VI層下面の特徴ピット群	第189図	
第1号井戸址	第190図	図版73
第1号溝状遺構	第191図	図版75
サク状遺構	第192図	図版76
陸軍糸之瀬廠舎跡	第193図	図版76
VI層下面のピット群	別図 1	図版74
FP層面の小ピット(1)	別図 2	図版74
FP層面の小ピット(2)	別図 3	図版74
FP層面の小ピット(3)	別図 4	図版74

第1号竖穴状遺構

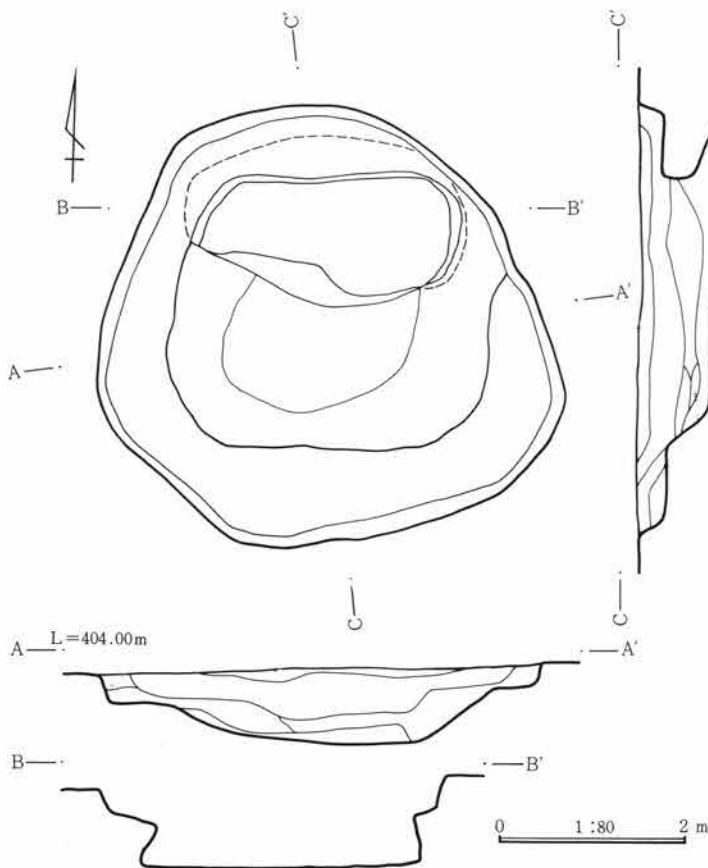
位置 43~45D-26~28グリッド。**形状** 本体は径345×335cmを測る円形のプランを呈し、深さ60cmを測る。底は地床であり、底面中央に径117×112cm、深さ7cmを測るやや不整な円形のプランを呈する浅い掘り込みがある。北壁には幅78cm奥行き98cmを測る方形の張り出しが、深さ34cmを以って壁外に延びている。**覆土** VI層土及びVII層土を中心とし、II層土・IV層土などの砂質土の混入する土で覆われている。土層の堆積は底面中央の掘り込みの中心に流入するものと、その側に堆積するものなどに分けられ、その状態は柱状のものが設置されたことを考えさせる。北壁の張り出し部には径7cm長さ65cmを測る腐蝕した木材が出土している。**その他** 本遺構は柱様の痕跡、当地が陸軍の廠舎跡であることなどから、国旗掲揚塔跡の可能性が考えられている。



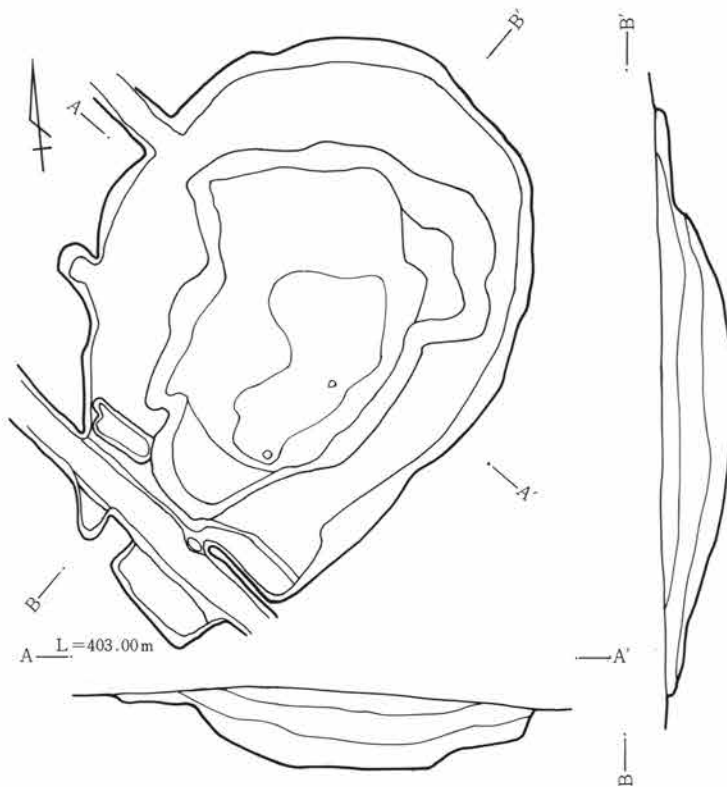
第177図 第1号竖穴状遺構

第2号竖穴状遺構

位置 44~45D-32~34グリッド。**形状** 径500×460cmを測る不定形のプランを呈し、深さ90cmを測る。幅92cm以内のテラス状の面が周っている。底面は径302×180cmを測り、西側に向けてオーバーハングしている。**覆土** VI層土とVI層・VII層・VIII層土の混土で覆われ、総体としてこれらは遺構全体を覆うものであり、下位層ではF・Pを多く含む層がある。**遺物** 底面部分から、鬼高期に比定される土師器杯が出土している。この杯は本遺構構築に伴うものと考えられる。**その他** 本遺構は鬼高期のうち、F・P降下後の所産であると思われる。形態的には一定の大きさであるが、不整形な掘り込みであり、竖穴住居構築途中廃棄せられたものとも考えられる。



第178図 第2号竖穴状遺構



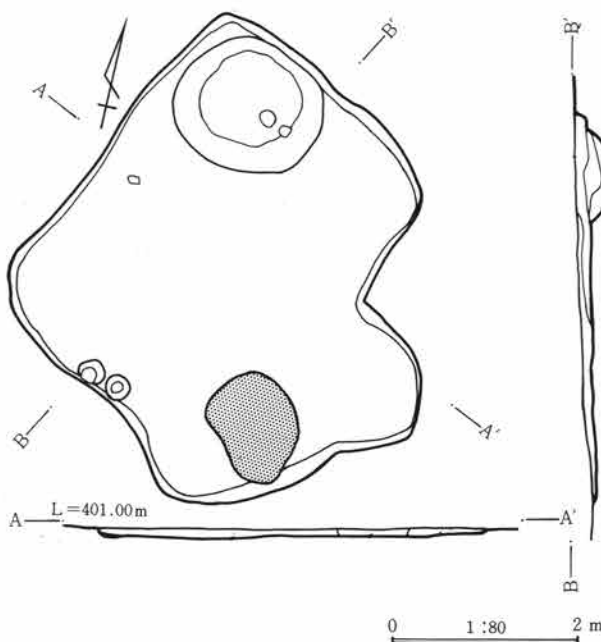
第179図 第4号竖穴状遺構

第4号竖穴状遺構

位置 64～67D-35～38グリッド。
形状 径640×455cmを測るやや不整な楕円形のプランを呈する。壁高は80cmを測る。V(F・P)層が抜けた部分に、幅108cm以内のテラス状の面が周っている。床面は径342×266cmを測る不定形なプランを呈し、中央部に向って落ち込んでいる。
覆土 VI層及びVII層土を中心として、IV層土の混入する土による土層群で覆われている。これらの土層群は遺構全体を覆っている。
その他 本遺構はF・P降下後、B軽石降下までに作られるが、時期は特定されない。その性格については、遺存の仕方が2号竖穴状遺構に似ることから、同様のものが考えられる。

第5号竖穴状遺構

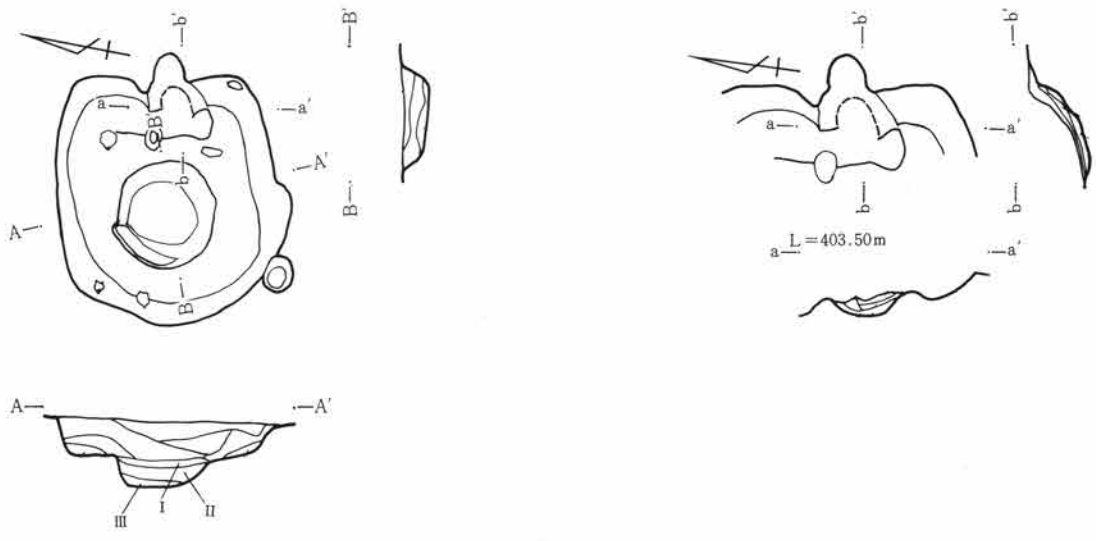
位置 28～30D-18～21グリッド。
形状 長径410cm短径320cmを測る隅丸方形の平面プランを呈し、北壁より幅305cm奥行き145cmを測る方形状の張り出しが作られている。壁高は18cmを測る。
覆土 VI層・VII層・VIII層土ブロックを中心に、部分的にF・Pを多く混入する土で覆われている。



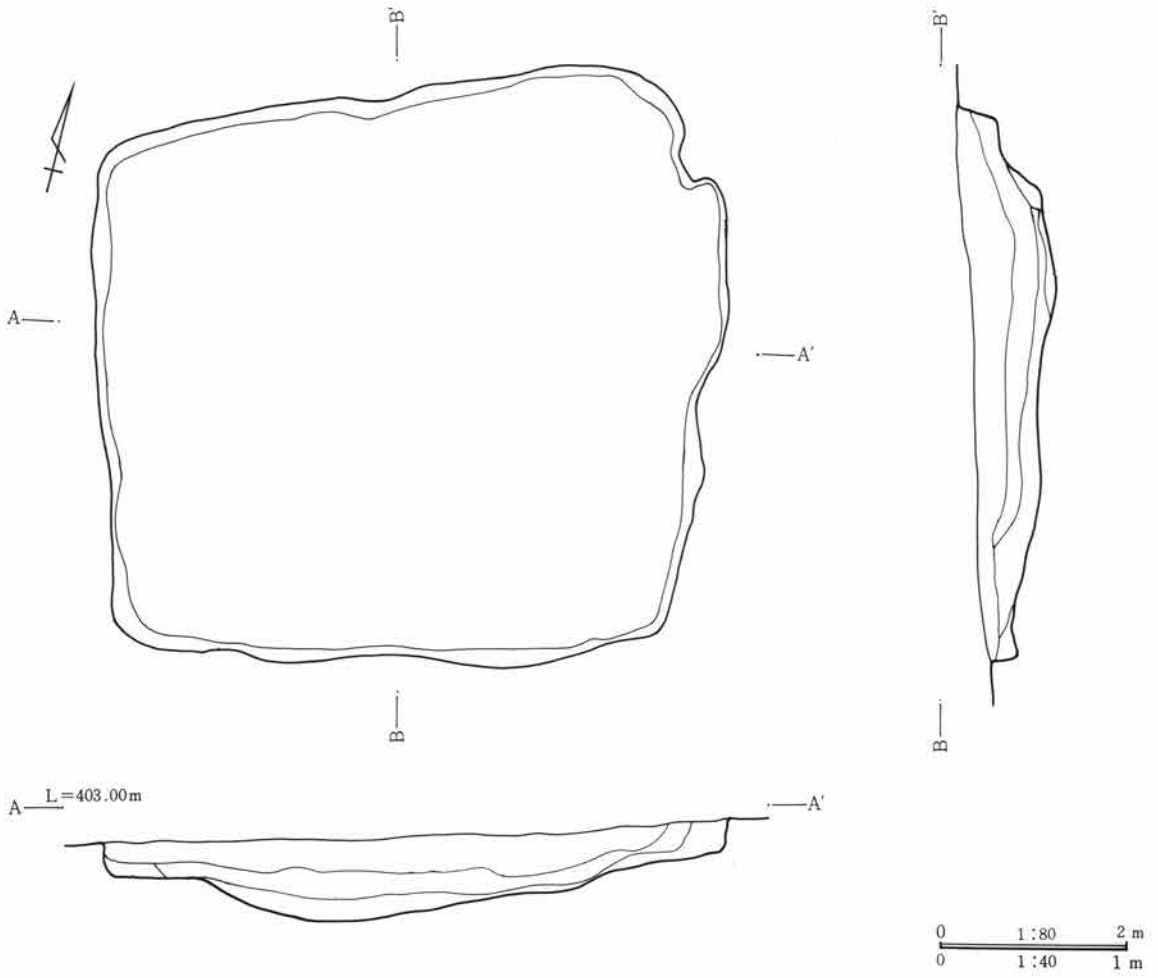
第180図 第5号竖穴状遺構

ピット・土坑 南壁端中央部に小型のピットP₁・P₂が並び、西北隅部に土坑P₃がある。P₁は径27×24cm、深さ40cmを測り、覆土の断面には径13cmの柱痕様の落ち込みが認められる。P₂は径17×16cm、深さ12cm、P₃は径156×139cm、深さ21cmを測る。
炉 炉または位置的にカマドと思われる焼土面が、張り出し部南半にある。炉床はVI層・VII層で作られ、径205×200cmを測る。
遺物 径5cm程度のスラッグ2点が出土している。
その他 V層面に於いて検出された本遺構は、この面で調査された住居址等の同規模以上の遺構に較べると掘り込みが浅く、スラッグの出土もあることから小鍛冶遺構として把握している。

第4節 その他の遺構



第181図 第6号竖穴状遺構



第182図 第28A号竖穴状遺構

第III章 検出された遺構と遺物

第6号竪穴状遺構

位置 30～32D—19～20グリッド。 **方位** 住居N60°E **形状** 長軸265cm短軸250cmを測る隅丸方形のプランを呈するが、南西部に丸く膨らみを有する。壁高は44cmを測る。 **覆土** 壁端に堆積する土層群と住居全体を覆う土層群とに大別される。両者とも、VI層・VII層土を中心とし、IV層土が混入する土で構成されている。概していえば、後者は前者に比べF・Pの含有量が多い。前者は遺存状況及び土量から周堤の存在が想定される。 **床面** 地床であり、床面の広さは長軸200cm短軸190cmを測る。壁溝は確認できない。

土坑・ピット 住居中央より若干西南寄りに土坑P₁と、南壁中央肩部に小型のピットP₂がある。なお、このP₂は本遺構に関連するとは特定できない。P₁は径113×113cmを測る円形のプランを呈し、深さ32cmが測られる。IV層・VI層・VII層・VIII層土ブロックの混土により覆われ、下層に向かって、F・Pの含有量が多くなる。この土坑は本遺構が廃棄される時点で既に埋め戻されており、床下土坑のような性格も考えられる。P₂は径36×29cmを測る方形状のプランを呈する小型ピットで、深さ17cmを測る。IV層・VII層土ブロックにF・Pの混入する土で覆われている。 **カマド** 遺構北東壁を幅46cm奥行き36cmに掘り出し、その左側を住居内に25cm掘り残して作っている。ソデは壁端部分に僅かに残るが、これはVI・VII層土で形作られ、左側で幅40cm、右側では45cmを測る。ソデ部分には、左側では壁から30cmの部分に径28×23cm、深さ10cmを測る楕円形のプランの小型ピットが、右側では壁端に径27×22cm、深さ11cmを測る楕円形プランを測る小型ピットがそれぞれあり、これらは自然礫様のソデ材を刺し込んだ跡と思われる。燃烧部は径43×28cmを測り、浅く掘られている。燃烧部から側壁、奥壁にかけて焼土化が認められる。また燃烧部々分には灰及び炭化物が堆積している。カマドは全体として遺構廃棄時に破壊されており、天井部などは全く残っていない。 **遺物** 本遺構を時期的に限定しうるようなしっかりした遺物は認められないが、国分期に比定される土師器片及び須恵器片が出土している。 **その他** 本遺構は、本遺跡の同時期の竪穴住居址に較べて平面的に極めて小型であり、カマドなどが著しく破壊されていたために、当初より、竪穴状遺構として調査、処理されてきた。しかし、遺構の基本的形態とカマドの（痕跡の）形態から、本遺構は竪穴住居として把握される可能性が高いと考えられる。

第28A号竪穴状遺構

位置 36～39D—13～16グリッド。28号住居址の上に乗っている。 **形状** 径340×310cmを測る方形のプランを呈し、深さ45cmを測る。底面は緩やかな曲面をもって、中央部に落ち込む傾向がある。ピット等の附属する遺構は認められない。 **覆土** IV層土を中心とする土で覆われている。覆土は遺構全体を覆うもので、土層群による大別はできない。 **床面** 床は28号住居址の覆土による地床状のもので、貼り床などは認められない。 **遺物** しっかりした出土品はないが、国分期に比定される土師器片、須恵器片が出土している。 **その他** 本遺構は28号住居址が埋没した跡に作られている。28号住居址はF・P降下前の所産であるが、こうしたF・P降下前の遺構がF・P降下後にあっても窪地としてその痕跡を残すケースが本遺跡の調査時に認められることから、本遺構がこのような窪地に作られ、従って28号住居址にほぼ正確に重なったものと考えられる。また、本遺構は埋没後の28号住居址の上に堆積したV（F・P）層を抜いて作られており、その底面はF・P降下直前の28号住居址の状況に一致することも推定される。しかし、28A号竪穴状遺構と28号住居址との時間的連続性は認められない。なお、本遺構の性格については特定しえない。

(石守)

第4節 その他の遺構

土坑

本遺跡においては、古墳時代以降に比定される土坑は多数あるが、本項に扱う土坑は、特にしっかりしたものを中心としている。本項に漏れた土坑は、小ピット一覧表に加えている。

2号土坑

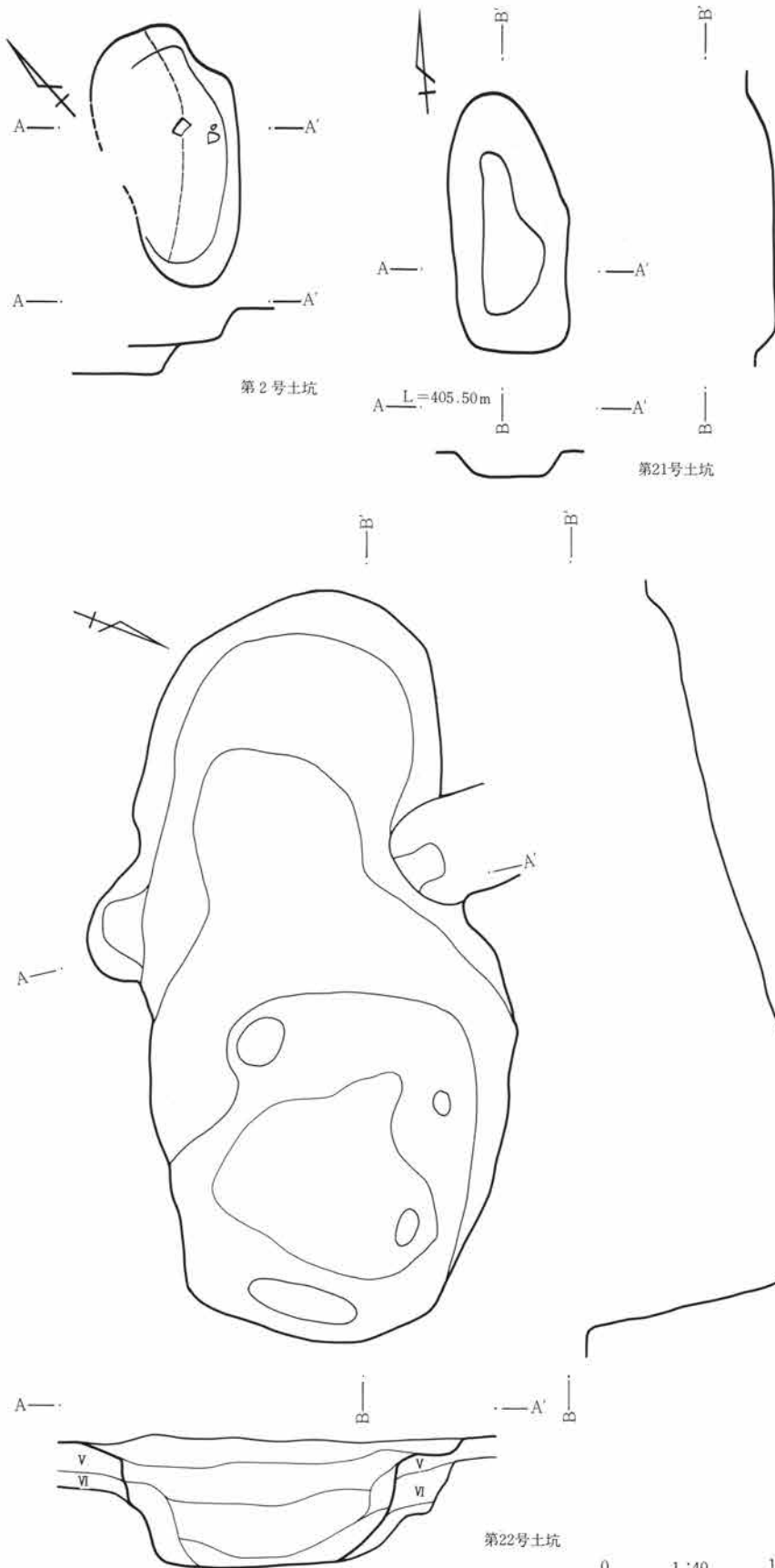
位置 59～60 E—26～27 グリッド。 **方位** N28° E
形状 径77×42cm、深さ11cmを測る長円様のプランを呈する。 **遺物** 須恵器片が出土している。

21号土坑

位置 29 D—47～48 グリッド。 **形状** 長径150cm短径73cmを測る砲弾状のプランを呈する。深さ16cmを計る。弱い印象の掘り込みみである。 **覆土** III層（浅間山B軽石）により覆われている。

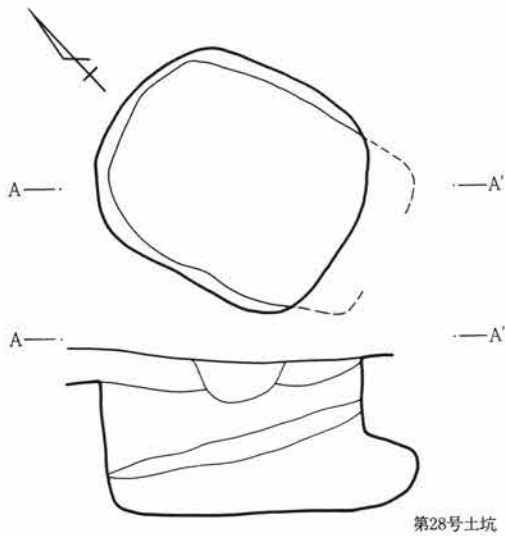
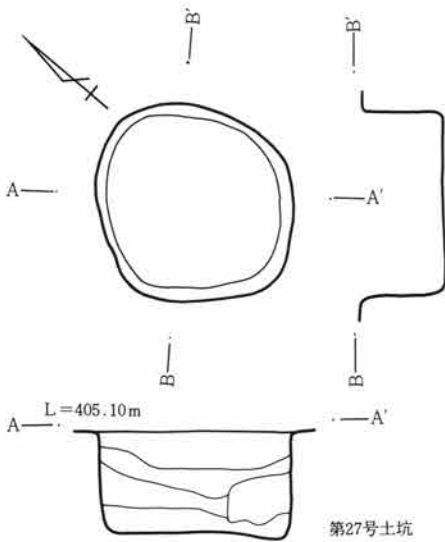
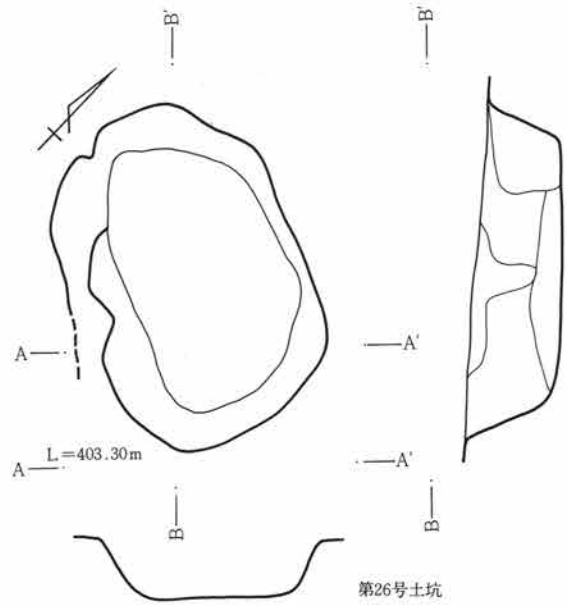
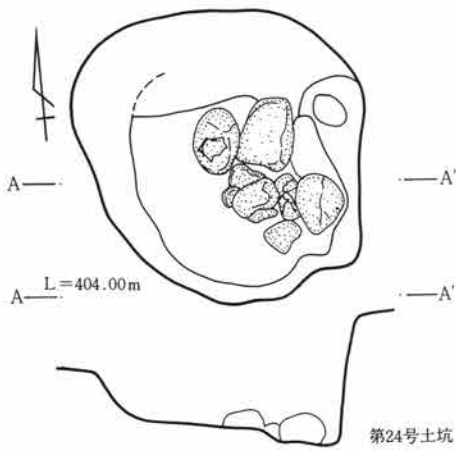
22号土坑

位置 26～28 D—42～43 グリッド。 **方位** N68° E
形状 437×223cmを測る隅丸方形のプランを呈する。深さは西南部で43cm、北東部で180cmを測る。 **覆土** II層・III層・IV層・V層・VI層・VII層土で覆われている。



第183図 第2・21・22号土坑

第III章 検出された遺構と遺物



24号土坑

位置 51~52D-48~49グリッド。 方位 N 5° E
形状 北側を試掘トレンチに切られ、現状で径158×118cm深さ70cmを測る。 その他 1号溝と同時に調査され、底面に径10~40cmの自然礫が残る。

26号土坑

位置 32D-43グリッド。 方位 W40° N 形状 径106×104cm、深さ55cmを測る隅丸方形のプランを呈する。 覆土 IV層土を中心とする土で覆われる。

27号土坑

位置 58~59D-40グリッド。 方位 W64° N 形状 径184×125cm、深さ48cmを測る不整な方形を呈する。 覆土 VI層土にF・Pが混入する。3層土が水平に堆積した後、2層土が数回にわたって流入している。

28号土坑

位置 56~57D-38~39グリッド。 方位 W18° N 形状 径140×118cmを測る方形様のプランを呈し、深さ81cmを測る。東部壁ではオーバーハングしている。 覆土 IV層土を中心とした土で覆われている。

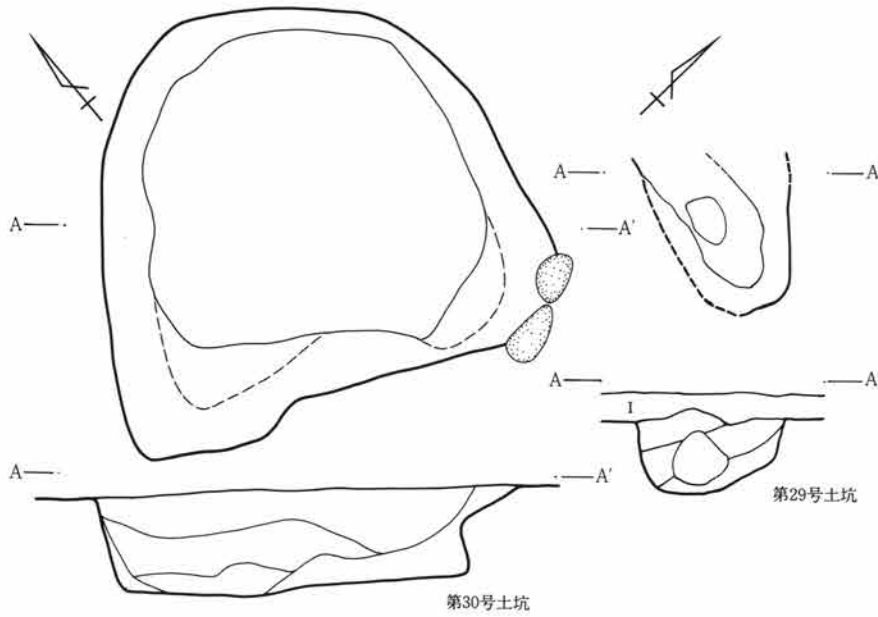
第184図 第24・26・27・28号土坑

0 1:40 1 m

第4節 その他の遺構

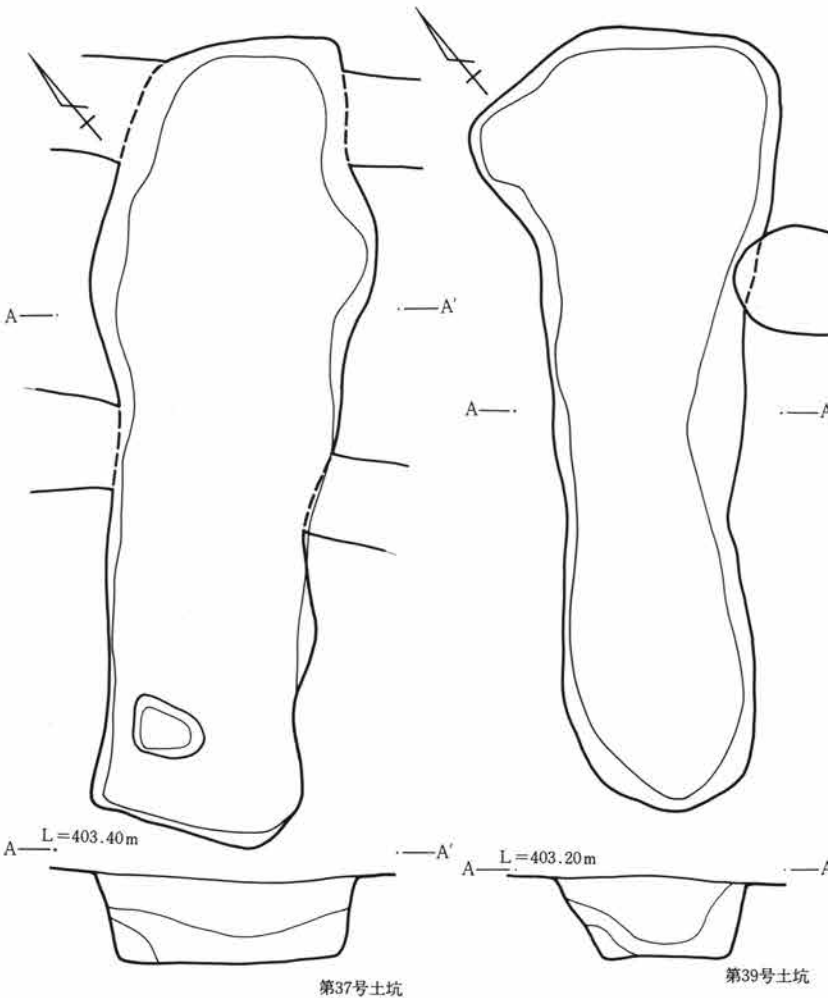
29号土坑

位置 58D-39グリッド。方位 N90°E
形状 現状で径80×40cm以上、深さ60cmを測る楕円形様のプランを呈する。覆土 IV層及びV層土を中心とする。



30号土坑

位置 67~68D-42~43グリッド。方位 W48°N 形状 径245×223cmを測る台形のプランを呈し、深さ50cmを測る。南壁はややえぐられる。覆土 IV層土を中心とする。



37号土坑

位置 53~55D-31~33グリッド。方位 N45°E 形状 長さ426cm幅152cm、深さ46cmを測る溝状のプランを呈する。覆土 上層はII層・IV層・V層土、下層はVI層またはVII層土が堆積。

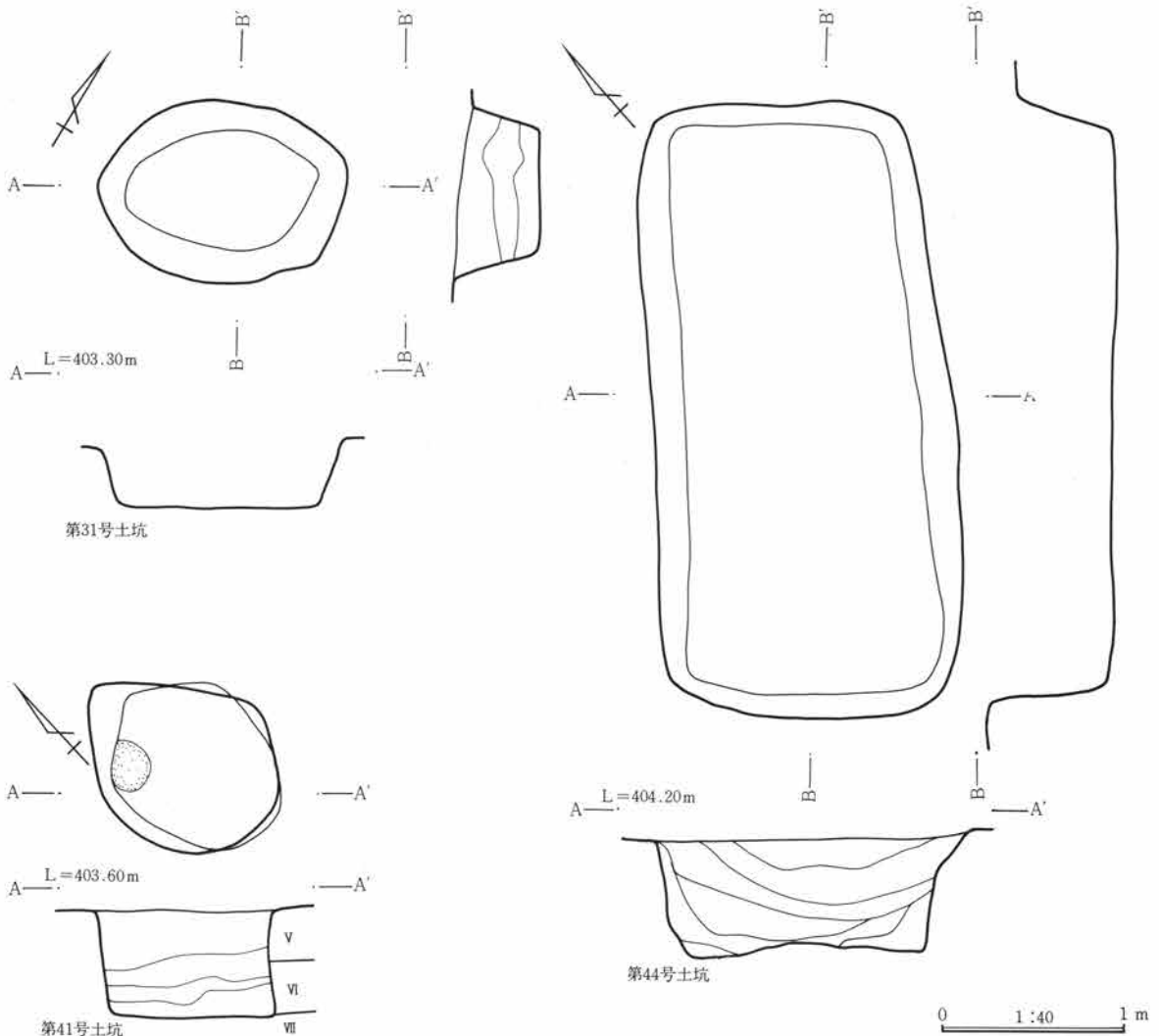
39号土坑

位置 57~58D-35~36グリッド。方位 N41°E 形状 長さ410cm幅153cm、深さ40cmを測る溝状のプランを呈する。覆土 II層・IV層・V層土で覆われ、壁端にVI層またはVII層土堆積。

第185図 第29・30・37・39号土坑

0 1:40 1 m

第III章 検出された遺構と遺物



第186図 第31・41・44号土坑

31号土坑

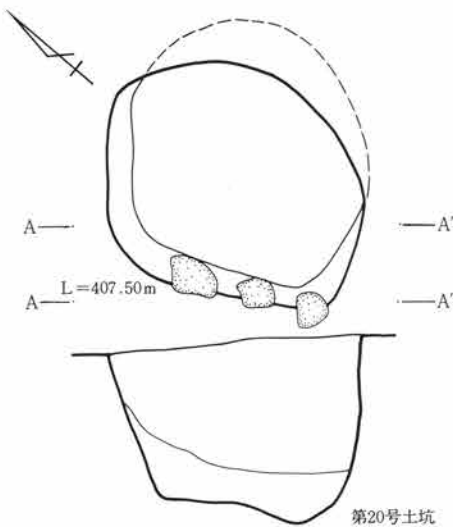
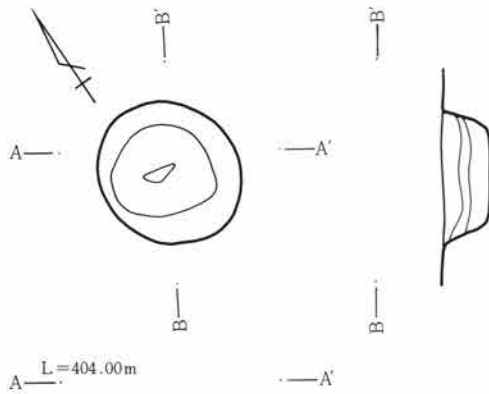
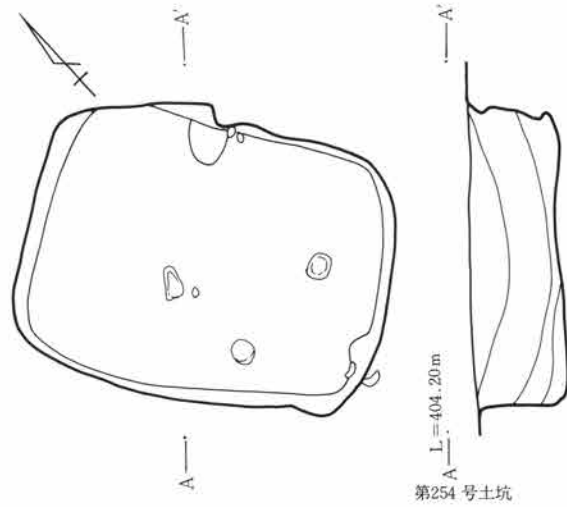
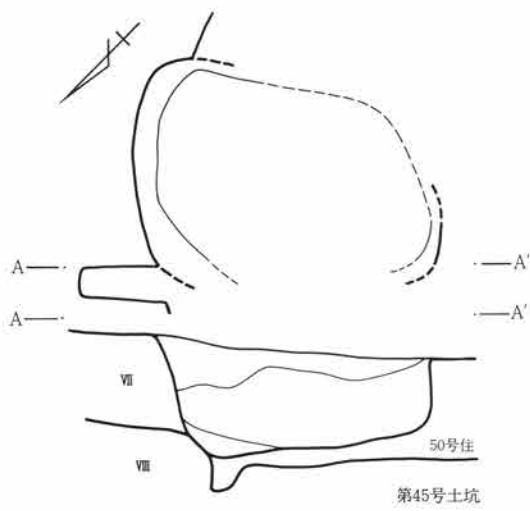
位置 51～52D—31～32グリッド。 **方位** E59°S **形状** 長径98cm短径80cmを測る楕円形に近い隅丸方形のプランを呈し、深さは61cmを測る。 **覆土** IV層土を中心とする土で覆われているが、最上層にはII層土が混入している。

41号土坑

位置 59～60D—39グリッド。 **方位** N55°E **形状** 長径135cm短径45cmを測る不整な楕円形の平面プランを呈する。深さ45cmを測る。しっかりした掘り方をしている。 **覆土** IV層土を中心とする土で覆われ、上層ではII層土も認められる。

44号土坑

位置 29～30D—35～37グリッド。 **方位** N40°E **形状** 長径330cm短径153cmを測る隅丸方形のプランを呈し、深さ60cmを測る。箱状のしっかりした掘り方である。 **覆土** VI層下面に検出された。覆土はVI層・VII層・VIII層土からなり、東壁方向から流入している。



0 1:40 1 m

第187図 第45・254・50・20号土坑

45号土坑

位置 34D-40グリッド。50号住居址北東部の覆土を切って作られている。方位 N52°E 形状 長径175cmを測る方形に近いプランを呈する。深さ55cmを測るが、50号住居址の床面には達していない。覆土 VI層・VII層・VIII層土によって覆われている。

254号土坑

位置 35~36D-38~39グリッド。50号住居址を切って作られている。方位 S51°W 形状 長径196cm短径156cmを測る方形の平面プランを呈し、深さ60cmを測る。50号住居址の床面を壊している。覆土 VII層土を中心とする土で覆われている。

50号土坑

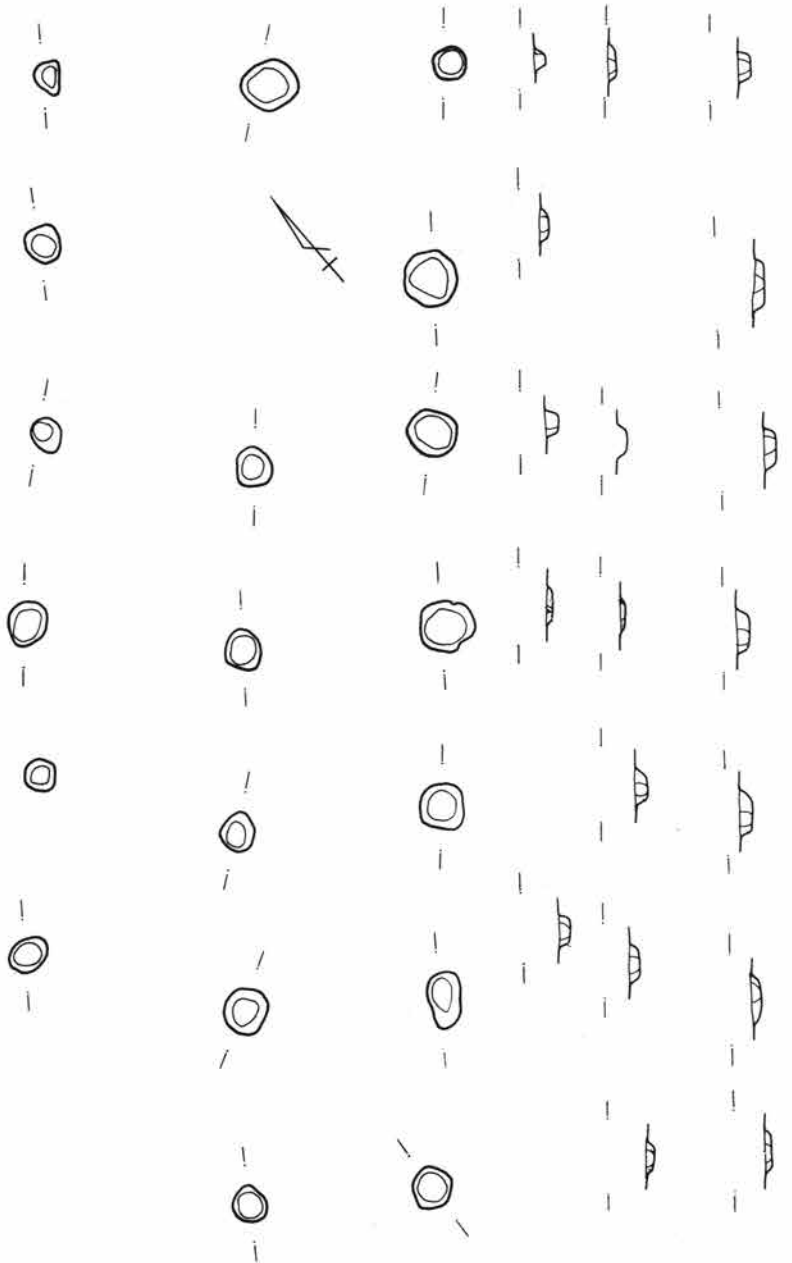
位置 46E-01グリッド。方位 S64°W 形状 径80×74cmを測る円形に近い平面プランを有し、深さ26cmを測る。覆土 VI層・VII層・VIII層土の混土である。

20号土坑

位置 37~38F-07~08グリッド。1号住居址を切って作られている。方位 W40°N 形状 径144×120cmを測る隅丸方形のプランを呈し、深さ100cmを測る。北壁がオーバーハングしている。(石守)

ピット (別図1)

本項に扱うピットは、基本的には径30cm以内の小型ピットであるが、一部に土坑状の中型の形態のものも含んでいる。本遺跡においては数百個の小型ピットが調査された。調査はV層(F・P)面とVI層下面を確認面として行なった。特にV層面においては、確認される小型ピットの底面がほぼV層中に留まることもあつて、浅いものが多い。当初の深さは、附近の自然地層の観察から50cm程度を中心に、50~150cm程であろうと考えられる。



これらのピットは、F・P降下以前のものとして以後のものとして大別され、更に後者は覆土の観察からB軽石降下前・降下の頃・降下後の3時期に分類して整理された。

ピットの形態は、平面形態及び土層断面の観察から、柱穴状のもの、土坑状のもの、その他のものが考えられ、第1者と第3者では柱穴址・杭址・栽培植物痕、第2者では土坑・自生植物痕の可能性が想定される。

栽培植物の痕跡では調査区北西部の304号などのピット群(第188図)が考えられる。これらはII層土に覆われ、近世の所産と考えられる。柱痕様のものが確認された。規則性をもって並ぶが、当該地のサク状遺構とは角度が異なる。

柱痕様のものが確認された。規則性をもって並ぶが、当該地のサク状遺構とは角度が異なる。

0 1:80 2 m

第188図 V層(FP)面北西部の小型ピット群

VI層下面の小ピット

F・P降下以前のものであり、確認面はVI層下面である。覆土はVI層土を中心としているが、時期は古墳時代を中心とすると思われるが特定できない。その分布は調査区の各所に分布し、特に群などとしての把握はできない。

第4節 その他の遺構

VI層下面のピット群一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
601	25E-11	41×36cm	17cm	VI・VII層土	円形
602	〃	27×26cm	14cm	〃	方形
603	25E-12	59×58cm	19cm	〃	円形
604	〃	36×32cm	24cm	〃	方形
605	24E-13	31×31cm	12cm	〃	〃
606	23E-13	26×25cm	22cm	〃	〃
607	24E-11	28×28cm	10cm	〃	円形
608	〃	32×26cm	11cm	〃	〃
609	22E-13	34×30cm	26cm	〃	〃
610	22E-11	29×27cm	13cm	〃	方形
611	〃	27×26cm	17cm	〃	〃
612	18E-10	29×25cm	24cm	〃	円形
613	18E-11	30×26cm	18cm	〃	〃
614	24E-15	39×38cm	25cm	〃	〃
615	18E-13	51×44cm	10cm	〃	〃
616	22E-18	46×42cm	18cm	〃	〃
617	28E-38	35×31cm	12cm	VII層土	〃
618	24E-15	38×32cm	11cm	VI・VII層土	〃
619	21E-30	38×30cm	12cm	VII層土	楕円形
620	29E-39	29×25cm	10cm	〃	〃
621	63D-44	74×45cm	14cm	VI・VII層土	〃
622	63D-43	33×32cm	6cm	〃	円形
623	65D-42	38×33cm	12cm	〃	方形
624	66D-43	35×34cm	13cm	VI層土	円形
625	66D-42	40×35cm	—cm	〃	〃
626	67D-43	33×30cm	—cm	〃	〃
627	47D-32	38×34cm	36cm	〃	〃
628	47D-31	38×36cm	35cm	〃	〃

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
629	40D-32	57×51cm	6cm	VI層土	方形
630	39D-32	46×44cm	8cm	〃	円形
631	34D-39	30×27cm	21cm	〃	方形
632	33D-39	28×28cm	15cm	〃	〃
633	36D-43	21×17cm	6cm	〃	円形
634	50E-15	40×30cm	13cm	VIII層土	楕円形
635	36D-43	45×44cm	23cm	VI層土	円形
636	35D-43	39×30cm	22cm	〃	楕円形
637	36D-42	32×28cm	34cm	〃	方形
638	34D-42	53×46cm	29cm	〃	〃
639	50D-31	71×36cm	31cm	〃	〃
640	39D-17	45×40cm	39cm	〃	円形
641	58D-47	35×32cm	12cm	VI・VII層土	方形
642	58D-46	52×54cm	20cm	VI層土など	〃
643	59D-47	28×27cm	6cm	〃	〃
644	60D-48	26×21cm	14cm	VI・VII層土	楕円形
645	52D-49	43×40cm	8cm	VI層土など	方形
646	17D-27	28×23cm	14cm	VI・VII層土	方形
647	40D-45	50×41cm	13cm	VI層土など	楕円形
648	40D-43	44×38cm	44cm	〃	〃
649	36D-46	26×24cm	21cm	〃	円形
650	36D-45	50×36cm	10cm	〃	楕円形
651	36D-35	47×45cm	18cm	〃	円形
652	21F-08	63×52cm	14cm	VI・VII層土	方形
653	24F-07	44×36cm	10cm	VI層土など	〃
654	24F-05	38×34cm	10cm	VI・VII層土	円形
655	23F-05	48×34cm	25cm	VI層土など	楕円形
656	24F-04	36×29cm	22cm	〃	方形

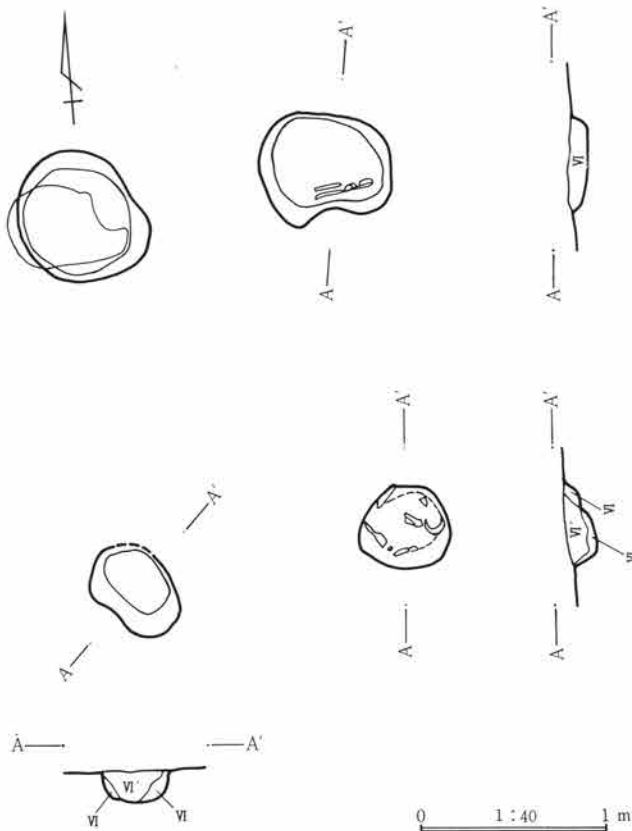
第三章 検出された遺構と遺物

VI層下面の特殊ピット群一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
657	23F-04	53×43cm	30cm	VI層土など	楕円形
658	20F-06	54×38cm	7cm	//	//
659	42E-06	71×62cm	10cm	VI層土	//

VI層下面のピット群一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
660	42E-05	50×44cm	16cm	VI層土	円形
661	42E-06	74×67cm	—cm	—	//
662	62E-05	55×38cm	17cm	—	楕円形



第189図 VI層下面の特殊ピット群

VI層下面の特殊ピット群

構成 659・660・661（・662）号ピット。**位置・形状** 一覧表参照。**659号ピット** 底面に径2cm程の炭化材が出土する。この炭化材は形状及び出土状況から柱様のものとは考えられない。**660号ピット** 底部附近から土師器片口が、正位に近い状態で出土している。小型ピットによる土器埋納が考えられる。**661号ピット** 深い掘り込みはないが、ピット中程の覆土中位から遺構外にかけて焼土面が遺存している。炭化材・灰等は特に確認されなかった。

その他 これらのピットの遺存は他のピットとは異なっている。数次にわたる確認作業からも、これらを含むような遺構は認められず、ピット群の性格は不明である。

F・P層面の小ピット (1) 別図2

F・P (V) 層面で確認されたもののうち、覆土がIV層土の小ピットである。IV層は6世紀後葉 (F・P降下時) から1108年 (B軽石降下時) にかけての土層であり、これらの小ピットも同時期に比定される。その分布はV層の厚さが部分により異なるので特定できないが、調査区の中央東寄りに集中する傾向がある。

F・P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
1	32E-01	36×30cm	10cm	IV層土	楕円形
3	33E-04	50×52cm	7cm	//	円形

VI層下面の特殊ピット群一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
4	32E-00	36×34cm	13cm	IV・V層土	円形
5	//	36×32cm	12cm	//	楕円形

第4節 その他の遺構

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
6	30E-01	50×46cm	17cm	IV層土	方形状
7	//	44×42cm	16cm	//	円形
8	//	50×46cm	11cm	IV層土など	三角形状
10	28E-04	52×30cm	17cm	//	楕円形
11	26E-00	48×40cm	28cm	//	//
12	25E-00	44×36cm	32cm	//	//
13	26E-03	42×38cm	17cm	//	方形状
14	25E-03	40×38cm	27cm	IV層土	三角形状
16	27E-03	42×38cm	20cm	IV層土など	方形状
17	//	60×58cm	8cm	//	不定形
21	28D-48	44×38cm	11cm	IV層土	方形状
22	28D-47	68×58cm	21cm	//	楕円形
24	36E-00	32×30cm	10cm	//	方形状
25	35E-00	26×24cm	8cm	//	//
26	25E-03	62×46cm	19cm	IV・VI層土	三角形状
28	31E-06	30×22cm	2cm	IV層土など	方形状
30	29E-09	28×26cm	10cm	//	円形
31	//	30×30cm	17cm	//	方形状
32	//	50×50cm	21cm	//	//
34	28E-09	32×26cm	8cm	//	三角形状
35	//	36×16cm	7cm	//	//
36	29E-09	46×46cm	25cm	//	方形状
37	28E-09	26×18cm	6cm	//	//
38	28E-08	36×34cm	13cm	//	//
39	28E-07	56×44cm	14cm	//	//
40	29E-07	30×28cm	9cm	//	円形
41	29E-06	40×32cm	12cm	//	//
42	//	40×30cm	10cm	//	方形状
43	28E-10	44×42cm	28cm	IV・V層土	//

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
44	29E-10	34×26cm	14cm	IV層土など	円形
45	29E-10	38×36cm	14cm	//	//
47	26E-09	46×44cm	14cm	IV・V層土	方形状
48	25E-09	40×40cm	11cm	//	円形
49	//	34×34cm	12cm	//	//
51	25E-09	44×30cm	9cm	IV層土	楕円形
52	//	32×30cm	13cm	//	//
53	26E-09	36×30cm	25cm	IV・V層土	円形
54	27E-09	38×28cm	14cm	IV層土	方形状
55	26E-09	32×28cm	22cm	IV層土など	//
56	27E-08	36×32cm	20cm	IV層土	//
58	27E-07	26×24cm	8cm	//	円形
59	25E-06	60×54cm	21cm	IV層土など	方形状
60	26E-06	54×39cm	20cm	//	//
61	26E-06	38×34cm	18cm	IV層土など	方形状
62	25E-06	44×36cm	10cm	//	//
63	26E-14	66×52cm	13cm	IV層土	楕円形
64	25E-14	42×40cm	9cm	//	円形
65	25E-13	40×38cm	9cm	//	//
66	25E-14	44×42cm	9cm	IV層土など	//
67	//	36×36cm	7cm	IV層土	//
68	26E-13	46×42cm	11cm	IV・V層土	//
69	25E-13	44×42cm	14cm	IV層土	方形状
70	//	36×34cm	16cm	IV層土など	円形
71	25E-12	62×50cm	10cm	//	楕円形
72	//	32×30cm	13cm	//	//
73	//	43×40cm	11cm	IV層土	方形状
74	//	40×36cm	18cm	//	//
76	27E-12	40×38cm	40cm	IV・V層土	円形

第III章 検出された遺構と遺物

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
77	26E-11	34×34cm	7cm	IV・V層土	方形状
78	〃	38×32cm	10cm	〃	楕円形
81	26E-11	32×26cm	47cm	IV層土など	方 形
83	26E-10	28×28cm	7cm	IV・V層土	円 形
85	25E-10	36×35cm	10cm	IV層土など	〃
86	25E-13	62×56cm	12cm	〃	三角形状
87	22E-04	62×44cm	12cm	IV層土	楕円形
88	〃	46×44cm	12cm	〃	方 形
90	22E-03	38×31cm	24cm	IV層土など	円 形
92	27E-00	70×50cm	21cm	IV層土	三角形状
94	24E-09	38×31cm	24cm	IV・V層土	楕円形
95	〃	32×30cm	5cm	〃	円 形
97	24E-07	32×28cm	16cm	IV層土	方形状
98	23E-07	28×24cm	3cm	〃	〃
100	23E-06	30×30cm	8cm	IV層土	楕円形
102	24E-14	70×64cm	34cm	〃	瓢箪形
103	〃	46×36cm	14cm	〃	楕円形
104	24E-13	58×50cm	20cm	〃	〃
105	22E-14	44×36cm	14cm	〃	〃
106	〃	40×24cm	20cm	〃	円 形
107	〃	32×31cm	15cm	〃	三角形状
108	23E-13	32×30cm	27cm	〃	円 形
116	24E-11	38×36cm	14cm	〃	〃
117	〃	44×42cm	18cm	〃	方形状
118	22E-11	60×42cm	14cm	〃	〃
122	23E-17	38×32cm	11cm	〃	円 形
123	〃	64×42cm	13cm	〃	楕円形
124	22E-17	50×48cm	19cm	IV・V層土	方形状
128	21E-03	45×42cm	13cm	IV層土	〃

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
133	21E-00	42×35cm	6cm	IV層土	方形状
134	〃	44×42cm	14cm	〃	楕円形
135	21E-13	44×42cm	12cm	〃	方形状
137	21E-10	48×48cm	9cm	〃	円 形
138	21E-19	36×34cm	18cm	〃	〃
141	21E-16	32×26cm	10cm	〃	方形状
142	〃	36×28cm	13cm	〃	〃
145	21E-15	72×52cm	13cm	〃	不定形
148	17E-14	43×38cm	15cm	〃	方形状
151	16E-13	32×30cm	8cm	〃	円 形
156	18E-19	44×37cm	9cm	〃	〃
157	18E-18	42×40cm	10cm	〃	〃
158	15E-19	30×28cm	5cm	〃	〃
159	15E-18	42×34cm	6cm	〃	〃
160	15E-18	40×36cm	13cm	IV層土	円 形
161	15E-17	60×52cm	2cm	〃	方形状
164	15E-16	38×32cm	12cm	〃	〃
166	39D-07	42×40cm	6cm	〃	楕円形
176	35D-11	38×36cm	10cm	IV・VII層土	〃
177	35D-38	54×48cm	14cm	IV層土	方形状
184	33D-14	38×37cm	14cm	〃	方 形
185	32D-13	38×34cm	17cm	〃	円 形
186	32D-12	38×38cm	9cm	〃	〃
188	31D-15	41×38cm	11cm	〃	〃
191	33D-34	42×40cm	9cm	〃	〃
193	33D-36	64×58cm		〃	楕円形
194	31D-36	74×62cm	40cm	IV・V層土	方形状
203	29D-44	40×32cm	13cm	IV層土	楕円形
205	〃	44×43cm	13cm	〃	円 形

第4節 その他の遺構

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
213	25D-33	32×30cm	10cm	VI層土	円形
216	26D-49	46×42cm	29cm	〃	楕円形
217	〃	38×32cm	13cm	〃	〃
219	25D-48	66×48cm	25cm	〃	〃
220	26D-48	44×40cm	19cm	〃	〃
223	25D-47	46×32cm	16cm	〃	〃
224	26D-47	30×22cm	16cm	〃	〃
225	〃	36×42cm	15cm	〃	方形状
226	25D-47	36×32cm	14cm	〃	〃
227	〃	30×26cm	39cm	〃	円形
228	〃	42×40cm	18cm	〃	方形状
229	〃	36×28cm	10cm	〃	〃
232	25D-46	38×24cm	23cm	〃	楕円形
233	27D-45	34×34cm	11cm	〃	〃
234	27D-45	46×42cm	10cm	VI層土	円形
236	27D-46	26×24cm	16cm	〃	楕円形
243	23D-34	36×38cm	14cm	〃	円形
245	22D-35	32×30cm	18cm	〃	〃
246	〃	66×44cm	16cm	〃	楕円形
247	24D-47	48×46cm	14cm	〃	円形
248	21D-21	34×32cm	7cm	〃	〃
253	21D-35	40×40cm	15cm	〃	〃
254	18D-19	40×33cm	18cm	〃	〃
255	16D-19	38×34cm	12cm	〃	〃
256	16D-12	38×38cm	13cm	〃	〃
257	16D-20	40×38cm	12cm	〃	〃
258	17D-20	40×40cm	14cm	〃	〃
259	18D-25	50×48cm	11cm	〃	〃
260	16D-48	40×46cm	13cm	〃	〃

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
263	44E-01	30×28cm	5cm	VI層土	円形
270	58E-23	32×30cm	15cm	〃	〃
273	59E-43	53×46cm	15cm	〃	〃
274	60E-46	38×33cm	9cm	〃	〃
279	62E-17	46×44cm	15cm	〃	方形状
280	62E-19	45×30cm	15cm	〃	〃
281	63E-19	46×34cm	12cm	〃	楕円形
290	61E-32	48×46cm	10cm	〃	円形
293	65E-21	36×25cm	15cm	〃	不定形
295	66E-23	37×37cm	17cm	〃	円形
296	66E-31	54×38cm	7cm	〃	楕円形
312	41D-06	45×38cm	18cm	〃	方形状
332	44D-05	26×24cm	9cm	〃	円形
334	45D-06	34×32cm	19cm	〃	〃
345	43D-47	46×24cm	12cm	IV・V層土	楕円形
349	46D-05	30×24cm	14cm	IV層土	円形
350	46D-05	35×34cm	7cm	〃	〃
352	46D-07	30×30cm	4cm	〃	方形状
353	〃	38×38cm	6cm	〃	円形
354	47D-06	45×42cm	11cm	〃	方形状
356	47D-08	40×38cm	10cm	〃	円形
357	48D-06	44×38cm	12cm	〃	〃
358	〃	28×26cm	10cm	〃	〃
360	48D-08	38×37cm	12cm	〃	〃
361	46D-12	38×36cm	7cm	〃	〃
362	〃	42×40cm	13cm	〃	〃
363	48D-20	34×30cm	9cm	〃	〃
368	46D-46	30×24cm	8cm	〃	方形状
371	46D-47	32×28cm	11cm	IV・VI層土	〃

第三章 検出された遺構と遺物

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
372	46D-48	38×30cm	13cm	VI・VII層土	楕円形
374	47D-46	38×34cm	4cm	〃	〃
375	47D-49	37×36cm	9cm	IV層土	円形
376	48D-46	35×28cm	10cm	IV・V層土	楕円形
377	48D-48	46×36cm	6cm	IV層土	〃
378	48D-49	44×—cm	14cm	〃	〃
383	49D-07	37×36cm	18cm	〃	円形
384	49D-08	42×40cm	12cm	〃	〃
385	49D-09	38×35cm	12cm	IV層土	〃
386	50D-05	49×48cm	8cm	〃	〃
387	50D-05	26×25cm	7cm	〃	〃
388	50D-06	40×38cm	7cm	〃	〃
389	50D-08	36×34cm	15cm	〃	〃
391	49D-48	34×32cm	15cm	〃	〃
393	49D-49	48×40cm	12cm	IV層土	楕円形
394	50D-48	51×50cm	17cm	IV・V層土	方形状
395	50D-32	41×36cm	11cm	IV層土	〃
396	52D-35	47×—cm	12cm	〃	円形
397	52D-41	37×32cm	10cm	〃	楕円形
403	56D-37	52×46cm	9cm	〃	円形
405	57D-37	59×55cm	7cm	〃	〃
406	58D-38	58×53cm	21cm	IV・V層土	〃
407	58D-39	41×39cm	6cm	IV層土	〃
410	60D-41	90×86cm	14cm	〃	〃
412	61D-36	92×57cm	29cm	IV・V層土	方形
414	64D-40	114×80cm		IV層土	楕円形
416	65D-40	93×81cm	19cm	IV・V層土	円形
418	67D-33	78×60cm	22cm	IV層土	方形状
442	31D-38	39×35cm	7cm	〃	円形

F P層面の小ピット (1) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
443	31E-39	29×28cm	7cm	VI層土	円形
444	〃	31×23cm	8cm	〃	楕円形
445	〃	34×33cm	9cm	〃	円形
448	29E-39	48×50cm	10cm	〃	〃
450	30E-38	34×35cm		〃	〃
452	27E-35	37×31cm	9cm	〃	〃
453	〃	46×30cm	9cm	〃	〃
454	24E-05	48×32cm	30cm	IV層土など	方形状
455	22E-31	28×19cm	8cm	IV層土	三角形状
456	23E-32	42×32cm	9cm	〃	方形状
458	21E-00	78×49cm	9cm	〃	〃
460	19E-09	81×52cm	13cm	〃	楕円形
464	21E-30	34×29cm	11cm	〃	方形
467	16E-13	80×77cm	5cm	〃	円形
468	18E-12	75×51cm	7cm	IV層土	楕円形
469	15E-17	124×115cm	13cm	〃	方形状
477	28D-40	92×87cm	6cm	〃	不定形
479	28D-45	146×104cm	9cm	〃	瓢箪形
483	27D-44	53×37cm	cm	〃	楕円形
484	26D-45	79×72cm	10cm	〃	方形状
485	24D-44	64×51cm	8cm	〃	〃
486	17D-27	84×78cm	14cm	〃	円形
487	18D-26	87×79cm	16cm	〃	三角形状
496	26E-13	156×100cm	15cm	〃	楕円形
499	26E-08	61×61cm		〃	方形状
500	26E-07	145×85cm	16cm	〃	楕円形
505	24E-07	35×26cm	19cm	〃	〃
533	29E-00	72×66cm	13cm	〃	円形

F・P層面の小ピット (2) 別図3

F・P層面で確認されるもののうち、覆土にB軽石(III層)の純層が入る小ピットである。B軽石は天仁元年(1108年)に降下したといわれることから、これらの小ピットは同時期頃に比定される。この時期のものは、定形のピットは多くなく、やや大きなものが多い。分布は調査区全体に及んでいる。

F P層面の小ピット (2) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
27	31E-07	82×48cm	16cm	III層など	楕円形
84	25E-10	48×48cm	7cm	〃	円形
89	22E-03	36×30cm	12cm	III層	方形
91	〃	70×56cm	15cm	〃	不正形
93	22E-01	50×48cm	15cm	〃	方形
120	22E-10	54×34cm	8cm	〃	楕円形
146	15E-08	52×48cm	8cm	〃	円形
155	16E-10	60×49cm	20cm	〃	方形状
163	13E-15	68×53cm	18cm	〃	楕円形
173	37D-40	60×50cm	10cm	〃	方形状
174	36D-07	82×70cm	16cm	III・IV層土	方形
180	36D-38	48×48cm	9cm	III層	円形
181	34D-35	48×42cm	8cm	〃	〃
192	33D-32	86×76cm	17cm	〃	〃
196	28D-29	36×32cm	19cm	〃	〃
197	29D-28	48×46cm	14cm	III・IV層土	〃
199	28D-26	60×52cm	12cm	III層	楕円形
200	28D-25	48×46cm	12cm	III・IV層土	円形
204	29D-44	40×40cm	5cm	III層	方形状
206	28D-46	30×27cm	26cm	〃	円形
212	25D-26	46×40cm	7cm	〃	〃
214	27D-30	36×36cm	7cm	III・IV層土	〃
215	25D-38	56×62cm	10cm	III層	方形状
222	27D-47	48×42cm	21cm	III・IV層土	円形状
238	22D-24	50×46cm	10cm	III層	楕円形

F P層面の小ピット (2) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
244	22D-35	32×26cm	11cm	III層	楕円形
249	19D-26	66×58cm	12cm	〃	〃
262	43E-01	52×42cm	15cm	〃	〃
265	18E-21	52×46cm	13cm	〃	〃
266	57E-34	34×30cm	12cm	〃	円形
275	61E-16	46×38cm	19cm	〃	〃
278	62E-16	56×48cm	15cm	〃	楕円形
283	61E-24	29×28cm	16cm	〃	円形
284	62E-20	46×44cm	9cm	〃	楕円形
285	〃	32×30cm	12cm	〃	〃
286	62E-20	28×25cm	16cm	III層	円形
313	41D-06	44×40cm	23cm	III・IV層土	〃
335	45D-07	43×40cm	5cm	〃	〃
347	45D-48	80×55cm	12cm	III層	楕円形
364	47D-36	36×36cm	14cm	〃	円形
398	53D-40	91×78cm	13cm	III・IV層	楕円形
401	56D-32	40×39cm	5cm	III層	円形
415	64D-40	104×69cm	13cm	〃	楕円形
421	41D-45	53×39cm	—cm	〃	〃
446	28E-11	78×69cm	10cm	〃	不定形
459	19E-22	90×41cm	12cm	〃	方形状
462	21E-08	76×55cm	17cm	〃	〃
465	17E-71	81×74cm	13cm	〃	〃
466	16E-73	146×57cm	20cm	〃	楕円形
473	36D-35	87×56cm	8cm	〃	不定形

第三章 検出された遺構と遺物

F P層面の小ピット (2) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
481	29D-48	152×69cm	13cm	III層	楕円形
482	27D-19	51×43cm	5cm	〃	〃
493	28D-19	67×52cm	12cm	〃	方形状
494	29D-20	144×68cm	11cm	〃	不定形

F P層面の小ピット (2) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
501	64D-46	67×40cm	1cm	III層	楕円形
502	49E-01	102×56cm	16cm	〃	瓢箪形
507	31D-45	144×40cm	12cm	〃	溝形状

F・P層面の小ピット (3) 別図4

別図4に掲載した小ピットは、V (F・P) 層面に確認されたピットのうち、覆土がII層土のものと、時期が特定できないピットである。II層は中近世の層として把握している。分布は調査区全体に及び、特に分布に特徴は認められない。(石守)

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
2	32E-01	30×28cm	10cm	II層土	方形状
9	28E-01	40×24cm	23cm	〃	長円形
15	32E-03	30×26cm	8cm	〃	円形
18	27E-01	60×48cm	38cm	II層土	方形状
19	28D-49	33×25cm	31cm	〃	〃
20	〃	50×50cm	15cm	〃	〃
29	32E-05	26×24cm	5cm	II層土など	楕円形
33	28E-09	32×26cm	19cm	〃	方形状
46	27E-09	38×34cm	6cm	II層土	円形
50	27E-09	30×28cm	8cm	IかII層土	〃
75	27E-12	56×50cm	10cm	II・IV層土	〃
79	26E-11	38×32cm	6cm	II層土など	〃
80	〃	35×1cm	8cm	〃	〃
82	25E-10	48×46cm	11cm	II層土	〃
96	22E-09	54×32cm	11cm	〃	楕円形
99	22E-07	38×34cm	21cm	〃	円形
110	〃	34×26cm		〃	〃

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
113	24E-13	64×44cm	22cm	II・IV層土	方形
114	24E-12	56×48cm	12cm	〃	円形
115	23E-12	78×64cm	12cm	II層土	〃
162	15E-16	54×52cm	6cm	II層土	円形
165	15E-15	40×32cm	11cm	〃	楕円形
170	38D-37	52×40cm	18cm	II・III層土	〃
171	〃	44×40cm	8cm	〃	円形
178	35D-37	58×40cm	6cm	II層土	楕円形
179	〃	48×46cm	13cm	〃	円形
187	31D-16	48×48cm	16cm	〃	方形
207	25D-17	56×46cm	5cm	〃	〃
208	26D-17	50×48cm	16cm	〃	〃
209	26D-24	54×52cm	7cm	II・III層土	〃
210	25D-23	48×42cm	10cm	〃	楕円形
211	25D-22	54×40cm	9cm	〃	〃
218	25D-48	56×38cm	19cm	II・IV層土	〃
221	26D-48	44×36cm	18cm	II層土	〃

第4節 その他の遺構

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
235	27D-47	48×46cm	12cm	II層土	楕円形
239	23D-24	42×28cm	18cm	II・III層土	円形
240	23D-21	38×34cm	15cm	〃	〃
241	23D-27	38×38cm	11cm	〃	〃
242	23D-26	64×56cm	9cm	〃	〃
250	21D-36	32×32cm	11cm	II層土	〃
251	〃	34×30cm	11cm	〃	〃
252	20D-35	40×38cm	13cm	〃	〃
261	45E-04	54×52cm	17cm	II・III層土	〃
268	56E-42	56×40cm	22cm	〃	楕円形
269	56E-41	40×42cm	10cm	〃	円形
271	59E-32	62×50cm	10cm	〃	楕円形
272	59E-43	42×36cm	12cm	〃	〃
277	61E-19	45×36cm	22cm	IIかIII層土	〃
282	63E-19	39×36cm	14cm	〃	円形
287	62E-24	61×56cm	16cm	II・IV層土	〃
288	63E-22	42×41cm	11cm	〃	〃
289	63E-22	52×42cm	12cm	〃	楕円形
291	62E-41	46×38cm	10cm	II・III層土	円形
294	66E-22	41×40cm	12cm	II層土	方形
299	68E-29	46×42cm	7cm	〃	〃
300	67E-30	54×42cm	10cm	〃	〃
302	68E-31	56×55cm	4cm	〃	円形
303	68E-33	58×52cm	12cm	〃	〃
304	68E-34	54×47cm	12cm	〃	〃
305	69E-30	52×46cm	5cm	〃	〃
306	69E-32	46×34cm	8cm	〃	方形
307	〃	48×47cm	9cm	〃	円形
308	69E-34	42×38cm	6cm	〃	〃

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
309	66E-36	34×34cm	12cm	II層土	円形
310	66E-35	58×54cm	11cm	〃	〃
316	〃	34×24cm	14cm	〃	〃
318	41D-31	42×42cm	11cm	〃	〃
319	〃	56×36cm	10cm	〃	瓢箪形
320	42D-31	37×36cm	12cm	〃	円形
321	〃	44×38cm	20cm	〃	〃
326	41D-41	84×72cm	14cm	II・III層土	方形状
327	42D-41	90×59cm	12cm	〃	〃
328	44D-04	23×22cm	6cm	〃	円形
329	43D-05	26×26cm	10cm	II層土	〃
330	43D-05	30×30cm	10cm	〃	〃
331	43D-07	28×28cm	8cm	〃	〃
333	44D-05	36×36cm	11cm	II・III層土	〃
344	44D-41	48×44cm	12cm	II層土	方形状
346	45D-48	40×38cm	11cm	II層土	円形
348	47D-03	42×40cm	21cm	II・III層土	〃
351	46D-07	76×43cm	7cm	II層土など	楕円形
355	47D-08	31×23cm	13cm	II層土	〃
359	48D-07	57×46cm	12cm	II・III層土	円形
369	46D-47	43×32cm	8cm	II層土	楕円形
379	49D-03	30×28cm	7cm	II・III層土	円形
380	49D-05	26×24cm	6cm	〃	〃
381	49D-04	81×61cm	11cm	〃	楕円形
382	49D-07	34×32cm	12cm	〃	円形
390	50D-39	48×42cm	17cm	II層土	〃
399	53D-43	37×33cm	8cm	〃	楕円形
400	53D-45	46×37cm	9cm	〃	〃
402	55D-39	95×73cm	8cm	II・III層土	方形状

第三章 検出された遺構と遺物

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
404	57D-37	53×50cm	8cm	II・III層土	円形
411	63D-31	36×30cm	9cm	II層土	〃
413	64D-28	43×36cm	7cm	〃	楕円形
417	66D-41	78×61cm	23cm	II・IV層土	〃
430	67E-36	63×52cm	7cm	II層土	〃
431	68E-35	39×38cm	5cm	〃	〃
432	68E-37	47×20cm	9cm	〃	円形
433	69E-35	40×20cm	13cm	〃	楕円形
434	69E-36	39×36cm	15cm	〃	〃
435	70E-31	45×43cm	6cm	〃	〃
436	70E-32	52×46cm	11cm	〃	円形
437	71E-31	35×34cm	5cm	〃	楕円形
438	70E-33	39×28cm	14cm	〃	円形
439	71E-33	43×34cm	11cm	〃	楕円形
440	70E-34	35×34cm		〃	円形

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
441	70E-35	47×42cm	4cm	II層土	円形
447	28E-37	37×35cm	9cm	〃	〃
449	30E-37	32×28cm	10cm	〃	〃
457	24E-32	43×34cm	7cm	〃	楕円形
461	20E-09	55×21cm		IかII層土	方形状
463	21E-18	102×68cm	13cm	II層土	楕円形
478	29D-40	109×81cm	4cm	IかII層土	方形状
488	53D-10	38×36cm	6cm	II・IV層土	円形
489	55D-10	58×49cm	10cm	〃	楕円形
490	56D-10	41×40cm	12cm	II層土	円形
491	30D-18	60×50cm	14cm	II・III層土	楕円形
492	30D-19	46×40cm	9cm	II層土など	方形状
531	31E-00	72×40cm	22cm	II層土	楕円形
532	〃	50×44cm	30cm	〃	〃

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
23	29D-47	34×34cm	12cm	—	楕円形
101	22E-05	36×30cm	15cm	—	〃
109	23E-13	28×26cm	4cm	—	〃
111	22E-13	25×24cm	5cm	—	円形
112	〃	30×28cm	22cm	—	〃
119	23E-10	42×39cm	12cm	砂質土	〃
121	22E-18	40×36cm	12cm	—	〃
125	23E-16	32×24cm	9cm	—	〃
126	24E-16	52×46cm	12cm	—	方形状
127	24E-15	44×42cm	12cm	—	円形
129	21E-03	55×50cm	11cm	—	楕円形

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
130	21E-01	34×34cm	11cm	—	円形
131	21E-00	36×34cm	10cm	—	三角形状
132	〃	44×38cm	12cm	—	円形
136	21E-11	45×38cm	10cm	—	〃
139	20E-17	46×42cm	11cm	—	方形状
140	21E-16	42×38cm	14cm	—	〃
143	20E-15	42×54cm	8cm	—	方形
144	21E-15	28×26cm	12cm	—	円形
147	17E-05	29×16cm	5cm	—	方形状
149	18E-14	62×42cm	15cm	—	楕円形
150	16E-13	56×48cm	12cm	—	方形

F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
152	16E-12	52×50cm	11cm	—	円形
153	//	38×28cm	14cm	—	楕円形
154	18E-11	40×36cm	5cm	—	円形
167	38E-34	33×32cm	30cm	—	//
168	//	44×38cm	29cm	—	方形状
169	37D-33	40×30cm	13cm	—	//
172	39D-35	44×36cm	23cm	—	楕円形
175	35D-11	42×34cm	11cm	—	円形
183	36D-48	33×28cm	15cm	VII・VIII層土	//
180	32D-27	46×40cm	39cm	—	//
190	33D-26	44×44cm	31cm	—	//
195	31D-35	28×24cm	10cm	—	//
198	30D-27	52×48cm	8cm	—	方形状
201	28D-32	40×32cm	11cm	—	楕円形
202	//	30×28cm	9cm	—	円形
230	25D-46	52×42cm	17cm	—	円形
231	//	34×34cm	23cm	—	方形状
264	48E-00	46×42cm	—cm	—	//
276	61E-18	98×64cm	23cm	—	//
297	64E-41	69×50cm	21cm	—	円形
298	65E-41	52×46cm	11cm	—	//
311	40D-07	40×36cm	21cm	砂質土	//
314	42D-05	44×41cm	9cm	—	//
315	42D-06	24×22cm	9cm	—	//
317	42D-07	34×32cm	27cm	—	方形
323	40D-36	39×36cm	11cm	—	//
324	41D-35	41×40cm	17cm	—	//
325	//	47×44cm	18cm	—	//
336	45D-20	46×41cm	10cm	—	//

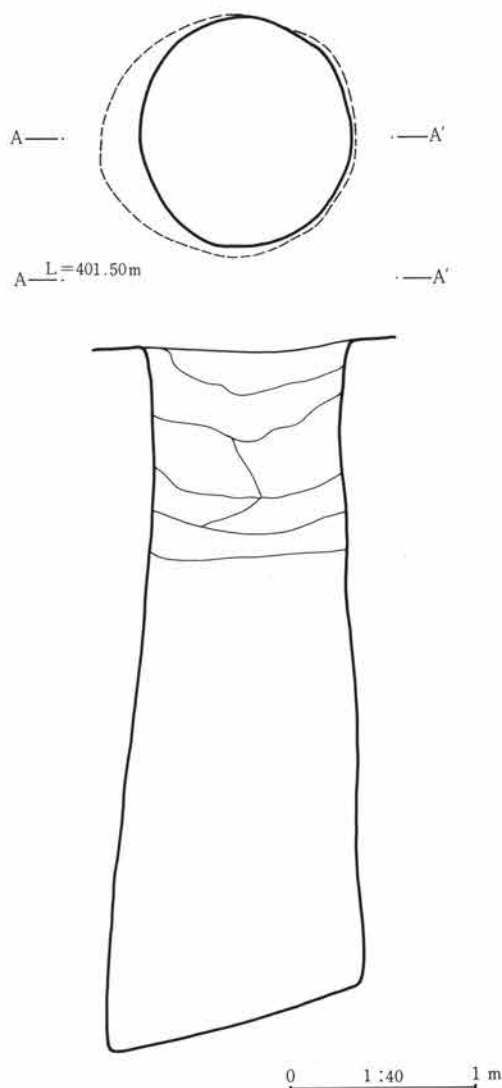
F P層面の小ピット (3) 一覧表

No	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
337	43D-37	21×18cm	6cm	—	方形
338	//	36×28cm	13cm	—	方形状
339	//	34×24cm	11cm	—	//
340	44D-38	34×14cm	10cm	—	瓢箪形
341	//	62×38cm	9cm	—	楕円形
342	//	30×25cm	22cm	—	//
343	//	41×24cm	12cm	—	//
365	46D-40	36×20cm	16cm	—	//
366	//	18×18cm	11cm	—	三角形状
367	46D-41	24×16cm	16cm	—	楕円形
370	//	40×36cm	14cm	—	方形状
373	46D-48	42×30cm	14cm	—	楕円形
409	58D-39	24×11cm	59cm	—	//
419	67D-35	80×80cm	17cm	—	円形
420	40D-39	102×90cm	6cm	—	不定形
422	46D-30	51×47cm	12cm	—	円形
423	//	79×68cm	17cm	—	方形状
424	47D-42	93×43cm	9cm	—	楕円形
425	52D-37	63×—cm	19cm	—	円形
427	59D-37	94×91cm	64cm	—	方形
451	25E-15	82×51cm	6cm	—	方形状
470	16E-27	43×24cm	10cm	—	//
471	17E-27	37×32cm	9cm	—	//
472	18E-27	35×31cm	6cm	—	//
474	36D-50	20×16cm	7cm	—	//
475	//	25×19cm	7cm	—	楕円形
476	30D-37	34×32cm	8cm	—	円形
480	28D-45	92×66cm	17cm	—	三角形状
497	26E-12	105×32cm		—	溝形状

第三章 検出された遺構と遺物

F P層面の小ピット (3) 一覧表

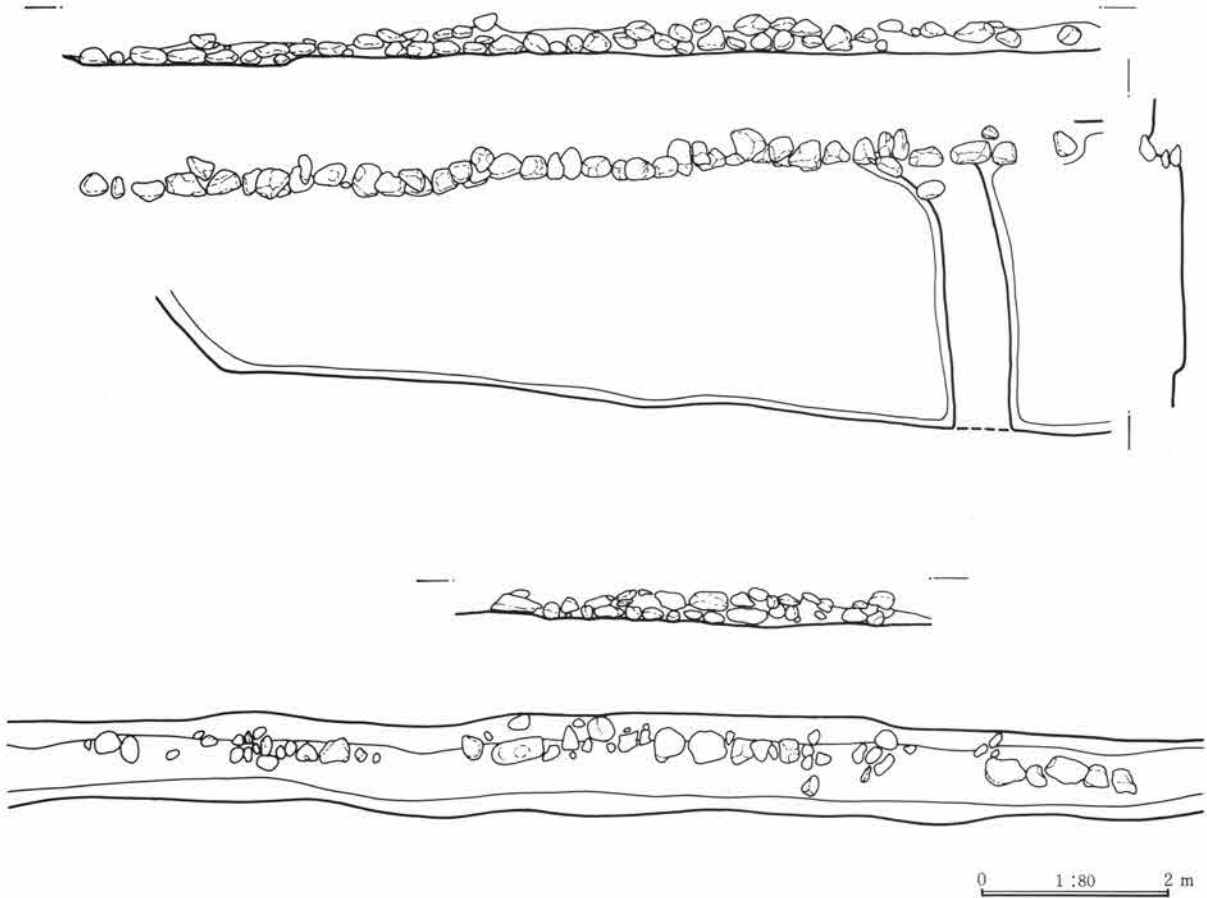
No.	グリッド	大きさ	深さ	覆土	形状
498	26 E-12	106× 46cm	15cm	—	瓢箪形
504	66 D-36	72× 70cm	10cm	—	楕円形
506	29 D-46	120× —cm	22cm	—	//
508	25 D-46	150× 44cm	7cm	—	溝形状
509	26 D-45	158× 72cm	14cm	—	不定形
510	44 E-33	60× 56cm	8cm	—	円形
511	46 E-29	84× 76cm	10cm	—	//
512	47 E-29	52× 48cm	6cm	—	//
513	//	57× 52cm	23cm	—	//
514	//	48× 38cm	17cm	—	//
515	47 E-25	56× 55cm	8cm	—	//
516	50 E-27	94× 92cm	10cm	—	方形状
517	52 E-24	88× 69cm	11cm	—	//
518	52 E-22	24× 21cm	6cm	—	円形
519	//	58× 52cm	7cm	—	//
520	50 E-20	138× 52cm	9cm	—	瓢箪形
521	52 E-20	48× 41cm	7cm	—	円形
522	54 E-20	58× 58cm	15cm	—	//
523	54 E-18	45× 43cm	22cm	—	//
524	54 E-17	55× 49cm	20cm	—	//
525	56 E-10	53× 50cm	25cm	—	//
526	56 E-09	44× 42cm	18cm	—	//
527	58 E-09	49× 42cm	26cm	—	楕円形
528	59 E-09	48× 44cm	23cm	—	円形
529	58 E-08	60× 57cm	22cm	—	//
530	//	30× 33cm	21cm	—	//



第190図 第1号井戸址

1号井戸址

位置 39D-08~09グリッド。調査区南部の谷地形の部分に位置している。**形状** 径120×114cmを測る円形のプランを呈し、深さ483cmを測る。底部に向って広がっている。底面は南西側に傾斜している。**覆土** II層土を中心とした土で覆われており、中・近世の所産と考えられるが、井戸枠・遺物等は出土していない。**透水層** 井戸址壁下半の白色シルト層であり、この下部が、透水層である。調査時も若干の湧水が認められた。(石守)

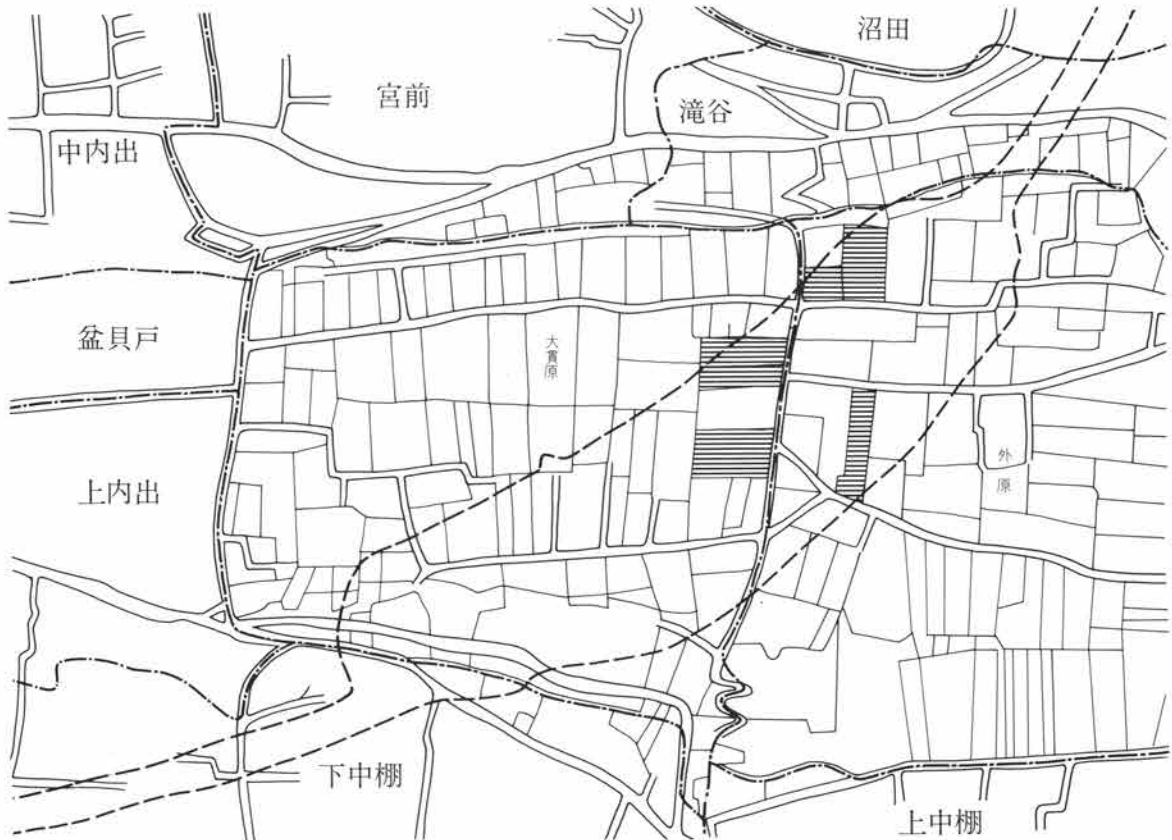


第191図 第1号溝石組部分側面図・平面図

第1号溝状遺構

位置 24D-19グリッドから74E-20グリッドにかけて、調査区を南東から北西にかけて斜めに区切るように遺存している。この遺構の南側に隣接して3～4単位のサク状遺構が並んでいる。北西部では現道にほぼ重なっている。現道は、本遺跡の調査区内にあって、唯一戦前までの位置を残す道路である。 **覆土II** 層土を中心とする土で覆われている。 **形状** 幅は50cm～320cmを測り、深さは現状で25cm以内を測る。その北西部は調査区外に延びているが、現状でその長さは135mを測る。掘り方の形態はあまり明瞭ではなく、流水の痕跡などは認められない。 **石組** 本遺構の東南部と北西部においては、その北壁に径20～50cmを中心とした自然礫を、2～3段に積んだ石組が出土している。この石組は北西部の調査区の隣接部には認められない。また、本遺構はV層面に確認されているため、当初の石組の積まれた高さなどは不明である。しかし、これらの石組は本遺構が掘り込まれるのに伴って組まれ、組まれた石組の背面はほぼ壁面に沿い、石組と壁の間には僅かにII層土が入れられる程度で、しっかりした裏込めなどの構造が認められないことから、石組は余り高く積まれたものでないことが推定される。 **その他** 本遺構は近世の所産と考えられる。そこで、近世の耕作状況が近代までほぼ伝えられている可能性が強いことから、戦前の地籍図を用いて、本遺構の位置などの検討を行ったところ、位置的には字大貫原^{おおぬきはら}と外原^{そとはら}の境をなす道路に一致することが考えられた。レベル的には異なるが、上述の現道がこれに相当すると考えられることから、道路として使用されたことも推測される。少なくとも土地の区画に関連するものであることは、本遺構を境としてV層面で10cm以上の比高差があることから確認される。

(石守)



第192図 昭和前期の区画(横線部分はサク址の確認された地割) 縮尺1/5,000

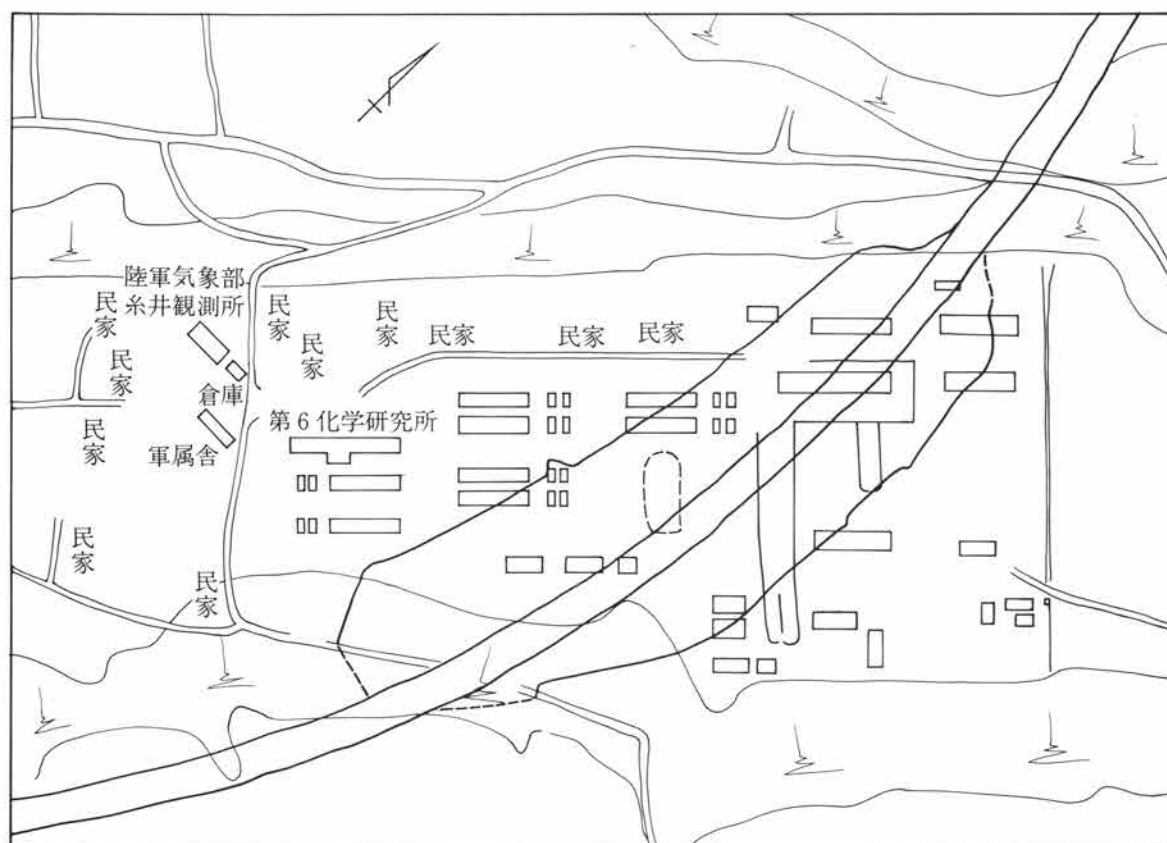
サク状遺構

概要 本遺跡においては9グループほどの、近世・近代の所産と考えられるサク状遺構が発見されている。これらのサク状遺構と今日の畠とを較べたとき認められる差としては、当該地区の現代の畠のサクの長さが25~30m以上あるのに対し、近世のものが長さ15m以下であることが挙げられる。 **形状** 6号サク状遺構群が最もよく近世的な形態を残すが、その構成は60cm以下の一定間隔をもって並ぶ溝状遺構群と、その両側

サク状遺構群一覧表

群番号	グリッド	サクの長さ	サクの幅	サクの間隔	覆土
1	26~36D-17~27	670cm以下	50cm以下	350cm以下	II層土など
2	38~37D-18~26	1,380cm以下	60cm以下	200cm以下	I・II層土
3	36~41D-16~21	1,080cm以下	50cm以下	230cm以下	II層土など
4	28~34D-38~44	165cm以上	45cm以下	150cm前後	〃
5	47~68D-24~43	1,320cm以下	80cm以下	200cm以下	〃
6	50~71D-31~41	1,730cm以下	60cm以下	180cm以下	〃
7	62~65E-25~27	350cm以下	40cm以下	250cm以下	〃
8	62~70E-26~38	1,670cm以下	60cm以下	150cm以下	〃
9	67~70E-23~25	670cm以下	70cm以下	200cm以下	I・II層土

を画する各一条の溝からなり、全体として梯子形の形態を呈している。 **その他** これらのサク状遺構を戦前の耕地図と照合すると、1号・2号・3号群は大貫原1613番地、4号群は外原1593番地、5号群は大貫原1815番地、6号群は大貫原1816番地、7号群は外原1498番地、8号・9号群は外原1497番地に比定される。これらのサク状遺構群の上限は、覆土の状態から近世まで遡ると思われるが、こうしたサク状遺構を基とした耕作は、近・現代まで続けられた。(石守)



第193図 糸之瀬廠舎等の建物配置図

縮尺 1/5,000

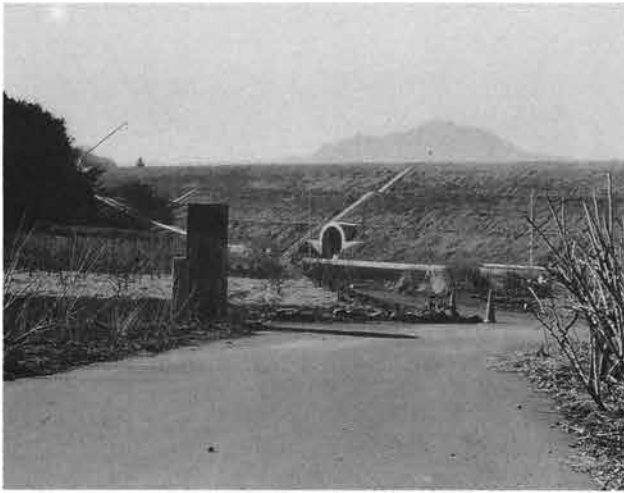
陸軍糸之瀬廠舎跡

糸之瀬廠舎跡 当遺跡ではE区の幅40cm長さ55mの削平面、第1号竪穴状遺構、第42号住居址北壁を壊すコンクリート製基礎、第51号住居址等を切る一辺1m程の方形のピット、または砂利を用いた地形など、糸之瀬廠舎のものと思われる構造物が多く確認された。これに伴ってD区南部からは、終戦近くに使われた磁器製の碗や皿（第194図、「めんこ」と称す）数点が出土した。これらには体部内面に星印、底面には「名陶」のマークがペロ藍による染付プリントで施されている。E区北部からは陸軍用地を示す大理石製の境界杭（258ページ）が出土している。

迫撃第一連隊 迫撃第一連隊は、昭和16年4月歩兵第48部隊（島根県松江）に設立され、部隊編成は連隊本部・第一大隊（迫撃隊）・第二大隊（戦車隊—ガスの研究）・材料廠である。同年の12月糸之瀬廠舎などに移駐し、翌17年2月竣工した沼田営舎（沼田市）に入って、車部軍管区直轄部隊となった。当地ではこの時以来の通称番号、東部四一部隊で呼ばれている。昭和20年2月、大本営は内地防衛軍の改組編成を行ない、これに伴って迫撃第一連隊の2個大隊は宇都宮へ移駐した。連隊は後方部隊として、第一総軍第一二方面軍下の第三六軍などの隷下に入る迫撃第七大隊等の迫撃部隊の編成を行なった。なお、迫撃第一連隊の補充部隊は北支那特別制毒隊、迫撃砲第八大隊（富士36376部隊）などである。

関連施設と糸之瀬廠舎 関連施設は練兵場、蜚舎、赤城演習場（昭和村）、糸之瀬廠舎及び陸軍気象部糸井観測所であり、総面積は約1,200haに及ぶ。用地買収は昭和15年頃から陸軍宇都宮師団司令部などにより、ほぼ強制的に進められた。糸之瀬廠舎は昭和16年に建設され、昭和22年の航空写真によれば、38棟ほどの建造物が認められる。これらの建物は全て木造平家建であったという。当初は営舎に代用されたが、沼田営舎竣工により、第六化学研究所として使用された。廠舎と隣接する民家の間には、塀などの仕切りはなかったという。

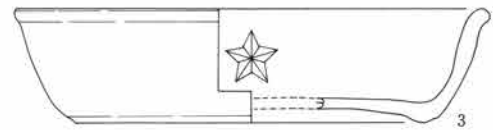
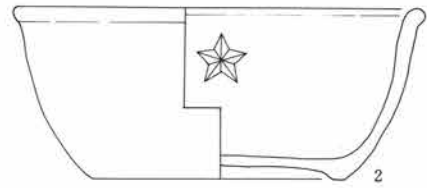
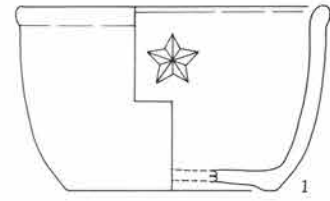
(石守)



北側門柱と調査終了後の遺跡



赤城原の射撃場跡



0 1:3 10cm

第194図 軍用食器



陸軍用地石標

戦後の糸井宮前遺跡（廠舎から農地へ）

終戦に伴い、迫撃第一連隊とその関連部隊は、基本的に昭和20年9月末までに復員を完了した。その後には米軍200~300人が進駐しているが、昭和21年11月末までに引きあげている。その後営舎は学校に演習地等は農地として返還され、今日当時の状況を残すのは射撃場(258ページ)などごく僅かである。

糸之瀬廠舎は昭和23年に、新学令施行に伴って糸之瀬中学校（現村立東中学校）の校舎に転用される南部の一群の建物を除き、農地として返還された。農地として返還された本遺跡付近では、廠舎の建物は取り壊され、整地が行なわれた。現在残るのは畑脇に積まれたコンクリート破片や、路線の北側の門柱跡（左写真）である。農地返還後の土地区画が、戦前の状態に復されることなく、土地区画及び道路の配置は廠舎の区画に合わせて造られている。耕地は畑または桑畑として使用され、その耕作は当時事業団で試掘調査に入る昭和56年まで続けた。（石守）

第IV章 成果と問題点

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物について

1. はじめに

糸井宮前遺跡からは、古墳時代前半期の住居址が35軒検出された。これらの遺構は、重複がなく段丘上の平坦面に構築されている。住居址平面形態には、長方形、正方形を呈する2種類がある。これらは、住居址内出土遺物から見た住居址形態の時期差や、住居址形態の違いによる土器の形態差というものが顕著ではなかった。また各住居址内から出土した土器も少なく、セット関係をとらえられる住居址が少ないため、本稿では、出土土器を住居址単位ではなく、出土遺物全体から土器組成をとらえ、さらに住居の形態差や、出土土器の形態差を考え毛野における、一地域の社会構成を見出したい。

2. 土器分類

甕形土器 口縁部の形態によって大別した。A類は、口縁部が単口縁で緩やかに外反し、胴部の張りの少ないものである。これらは、器面に縄文を有するものAⅠ類、櫛描波状文を有するものをAⅡ類、無文のものをAⅢ類と、3細分した。48住6は、口縁部から胴上半部にLRの縄文を施し、口唇部、胴上半部は撫でにより縄文を消している。76住7は、地文に刷毛目を持ち口縁部から肩部にRLの縄文を施している。また胴下半部は、篋磨きが行なわれ、内外面にも刷毛目が行なわれている。50住1・2は、櫛描波状文を持ち、頸部に簾状文を施している。54住1は、器面表裏に刷毛目を持ち、口縁部から肩部にかけて櫛描波状文、胴下半部に、磨きが行なわれている。これは、AⅠ類の48住6と同様の施文順序で行なわれており、縄文と櫛描波状文の系統を考える上で重要なものであろう。B類は、口縁部に粘土紐の輪積み痕をもつものである。体部に刷毛目を持つものをBⅠ類、刷毛目を持たずに、篋削り、磨き等を行なっているものをBⅡ類とした。器形は、口縁部が「く」の字状に外反するものと、ゆるやかに外反するものがあり、胴部は、球形をするものとゆるやかに張り出すものがある。また、口縁部の輪積み部分は、指頭による圧痕を持つものが多い。輪積みは、2～5段を有する。BⅠ類は、口縁部内面と、口頸部から胴部にかけて刷毛目を持つが胴部内外面に篋削り、篋磨きが行なわれるものがある。BⅡ類は、器面全部に篋削り、篋磨きが行なわれているものである。C類は輪積み痕の認められないものか、口縁部の一部に残るものとした。さらに刷毛目を持つものをCⅠ類、刷毛目のないものをCⅡ類とした。器形は、B類と同様に口縁部が「く」の字状に外反するものと、ゆるやかに外反するものがある。CⅠ類は、口縁部外面に指頭による圧痕が見られるものがある(46住1、57住3、125住6)。これらは、B類土器に共通した整形方法である。46住1、57住3などは、口縁部の一部に輪積みの痕跡を見ることができる。胴部は、球形に近いものが多い。刷毛目は、口縁部から胴部にかけて施されるが、BⅠ類同様胴部に篋削りや篋磨きを持つものもある。CⅡ類は、胴部がCⅠ類よりやや縦長の球形を呈する傾向がある。全面に篋削りが行なわれている。D類は、口縁部がS字状を呈するもので、DⅠ類を口頸部に横方向より刷毛目があるもの、DⅡ類を斜位方向の刷毛目のものに分類した。器形は、土器の小さい破片のため、推定の域を出ないが、肩部が張り最大径が胴上半部にくるもの(51住1)と、最大径が胴中央部にくるもの(グリッド、9)がある。口縁部内面に沈線を持つもの(51住1)と、持たないもの(38住1)がある。E類は、台付甕の脚部である。内面に折り返しの段を持つ。これらも刷毛目を持つものと、持たないものがある。

第IV章 成果と問題点

壺形土器 口縁部の形態から分類した。A類は、口縁部が単口縁で「く」の字状に外反するもの。A I類は、口頸部に刷毛目を持つもので、胴部は球形を呈し、最大径は胴中央部にある。胴下半部は、篋削りや磨きが行なわれている。A II類は刷毛目がなく、篋削りと磨きが行なわれている。篋削りを先に行ない、その後、磨きを行っていると考えられる。B類は、折り返し口縁を持つものである。器形は、A類に似て口縁部が「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈する。B I類としたものは、口頸部に刷毛目があり、胴部に磨きが行なわれ、底部近くに篋削りを持つものである。B II類は、器面全体に篋削りと磨きが行なわれ、刷毛目はない。C類は、複合口縁を有するものである。C類は、口縁部のみ出土したもので、胴部形態等不明である。C I類は、刷毛目を持つもので、棒状附文(108住2)を持つものがある。II類は、刷毛目を持たず全面に篋磨きを行なっているものである。

鉢形土器 小形の浅鉢形のもの、片口のものに分類した。A類は小形の浅鉢である。底部が平底又はやや上げ底のものである。器面は、全面に磨きが行なわれる。また篋削りだけのものもある。B類は、片口で底部は、平底で内彎する胴部を呈する。B類は、刷毛目を持つものである。

高杯形土器 杯部と脚部の径で、脚部の方が小さいものをA類、脚部の径が大きいものをB類とした。A類は、器面全体に磨きが行なわれ、脚部には、四つの孔を穿つ。B類は、脚部に刷毛目を持つもの(54住16)と磨きのみのも(54住15)がある。脚部には、2段に3対の孔が穿たれている。

器台形土器 外反する口縁部と脚部の接合部に凸帯を持つものをA類、杯部より脚部が大きく開くものをB類とした。A類は、(148住4)1点のみの出土である。器台脚部には、三角の孔が穿たれている。杯部にも三角形の孔の一辺が見られる。体部全体に磨きが行なわれる。B類としたものは、脚部の孔が三つあるものと、孔のないものがあり、器面は、良く磨きが行なわれている。

罎形土器 小形丸底罎のことである。口縁部の長さによって、3種類に分けた。A類は、口縁部が長く口径が器高を上まわるものである。器面に篋磨きが施されるものをA I類、篋削りが行なわれるものをA II類とした。底部は、丸底が多いが、平底や上げ底もある。B類は、口縁部が短く、口径と器高がほぼ同じくらいのものである。B類の罎形土器も、篋磨きのみをB I類、篋削りのものをB II類とした。底部は、A類同様丸底、平底、上げ底がある。C類は、口縁部が緩やかなS字状を呈する罎形土器である。

椀形土器 口縁部の形態から4種類に大別した。A類は、口縁部がS字状になるものである。器面は刷毛目を持つものと、篋磨きが行なわれるものがある。底部は、上げ底を呈する。B類は、口縁部が外反し、頸部内側に稜をつくる。篋磨き、篋削りが行なわれる。底部は、平底と丸底を呈する。C類は、口縁部が内彎するもので、器面全体に篋磨きが行なわれる。底部は丸底を呈する。D類は、頸部は屈曲しその部分に接合痕を持つものである。器面は篋磨きが行なわれ、底部は平底である。

甑形土器 甑形土器は、折り返し口縁のもの、単口縁のものがある。器面は全体に篋削りが行なわれており、底部には孔が一つ穿たれている。

手捏形土器 手捏形土器の器種には、甕形、壺形、椀形、罎形土器がある。甕形土器は、台付甕で、口縁部のくびれ部に指頭痕を明瞭にのこす。壺形土器は、複合口縁の壺形を呈し、内面に刷毛目を持ち頸部には、指頭痕をのこす。椀形、罎形土器は、平底の底部から丸味を持つ胴部に続き口縁部が僅かに外反している。口縁部は、折り返し痕がのこる。内面には篋削り痕があり、外面頸部には、指頭圧痕をのこす。

3. 住居分類

以上、糸井宮前遺跡出土の土器を分類した。この中で、甕形土器や壺形土器は、比較的多種類に分類された。それに比べ、鉢形土器、器台形土器、罎形土器などは、分類される数が少なかった。これは、同一器形¹⁾

第1節 古墳時代前半の遺構と遺物について

における細分の種類が多いのは、その使用方法が一定ではなく、変化の度合いが強いものである。これに対して多種類に分類されないものは、伝統的使用や、その土器の機能が強く規制されているものと考え。そして、前者の土器では、在地の伝統的土器が使用される一方、外来系の土器使用も行なわれ、共存する形をとり、時間の推移とともに形式変化をするが、後者の土器では、その土器の機能に強い規制が見られるため器種そのものが時間の移行とともに消滅してしまう。言い換えれば、土器の機能、使用形態が一定でないものは、形式の種類が多いが、機能、使用形態に強い規制のあるものは、その用途によって形式が決定されてしまい、その用途がなくなると土器の形式そのものがなくなると考える。

このような事から、器形の種類の多い土器と、器形の比較的安定した土器とのセット関係を把握することで当時の社会構成を具体化できると考え、前項で分類した土器を、器種別に在地の度合いの強いものと、外来的な土器に分け、また、住居形態を長方形、正方形に分け、さらに大形、中形の大・小、小形に分類し、全体を8群に分け、住居址と出土土器の関係を考えた。(別図5、図1、表1)

1群 56、58号住居址。面積は、58号住居址が70㎡、56号住居址が38㎡ある大形の長方形を呈する。56号住居は、面積を考えると、大形住居址とは言いがたいが、2群住居址よりは大きいので、とりあえず1群に分類した。形態的特徴は、柱穴と炉を有し、それが、規格的であるといえる。出土遺物は、住居の規模が大きい割に少なく、甕A、B、C類と、椀類などの在地的な強い土器である。

2群 40、46、51、52号住居址、面積は、31～33㎡の中形大に分類される長方形住居址群。形態的特徴は、掘り込みが浅く、柱穴がはっきりしておらず炉の位置も不規則であるという共通点が見られる。住居址の出土遺物は、甕B、C類と、壺A、B類、鉢などの在地的な強い土器を多く持ち、甕D、埴Aは、少数である。また器種の種類も少ないものである。

3群 41、44、50、57、112、125号住居址。面積は、18～25㎡の中形小に分類される長方形住居址群。形態的特徴は、2群と同様に、柱穴、炉などが不規則なことである。これらの住居址出土遺物は、甕A、B、C類、鉢などの在地的な土器とともに、器台、高杯、埴、台付甕などの外来的な器種も少数ではあるが1群より多く出土している。

4群 47号住居址。面積は11㎡の小形に分類される長方形住居址。形態的特徴は、2、3群同様、柱穴、炉が不規則である。出土遺物は確認されなかった。

5群 61、76、87、93、105号住居址。面積は、9～20㎡の小形に分類される正方形住居址群。住居址の形態的特徴は、柱穴が2本あるものと、柱穴が不明のものがある。また、炉に礫を使用するなど、長方形の住居址群との違いがある。出土遺物は、甕C、D、E類、壺B、鉢A、B類、埴A、B類、甗、手捏土器などが出土している。遺物は、住居址によって出土遺物の器種にかたよりがある。61号住居址からは、貯蔵穴から埴や椀類が出土し、87号住居址からは、手捏土器が壁よりに2個並べられて置かれるなど、祭祀性の強い土器を出土する。

6群 39、71、101、108、148号住居址。面積は、28～32㎡で中形小に分類される正方形住居址。住居址の形態的特徴は、掘り込みがしっかりしており、柱穴も4本そろったものが多く炉に礫を使用するものや、貯蔵穴が住居址コーナー寄りに作られるものが多い。住居址からの出土遺物は、甕B類、壺B類、鉢などの在地的な土器も出土しているが、器台、埴、壺C類、甕D類、手捏土器などの外来土器が多くなる。

7群 3、38、48、54、119、123号住居址。面積は、34～43㎡で中形大に分類される正方形住居址。掘り込みが深く形の整っているもので、4本柱穴を持ち炉に礫を使用し、炉の位置を柱穴間にとるなど、最も規格的な住居である。住居址からの出土遺物は、甕A、B、C類、壺A、B類、鉢などの在地的な土器と、手

第IV章 成果と問題点

捏、高杯、器台、坩、壺C類、甕D、E類などの外来的土器が多く見られる。遺物の出土状況は、住居址コーナー近くに置かれたような形で出土するものがある。

8群 49号住居址。面積は、50㎡の大形に分類される正方形住居址。住居址の形態的特徴は、4本柱で、柱穴間に炉を持つものである。また、住居址の壁から1mの幅で、炉側の一部と東壁の一部を除いて5cm程の高まりを持つベッド状遺構がある。出土遺物は、坩B類、壺C類、甕E類が出土している。

4. 編年的位置

前項では、住居址形態の分類と、出土遺物について概観した。これらの住居址群の形態と、出土遺物の組成等から、糸井宮前遺跡の古墳時代前半期を二時期にわけ、各時期の特色を記しておきたい。

I期は、1群から4群の住居址からなる。在地的特色を強く持つ弥生時代からの系統を強く残した土器が多く存在し、外来系の土器がまだ客体的な時期である。在地性の強い土器としては、縄文や櫛描波状文のA類、赤井戸式土器に盛行する輪積み痕を持つB類の甕が中心である。壺は、これも赤井戸式土器にある。折り返し口縁を持つB類が多い。また鉢などの弥生時代から続く器種がある。住居址形態は、長方形を呈するが、柱穴や炉などは、大型住居を除いて規則性がない。

II期は、5群から8群の住居址からなる。I期の在地性の強い土器は少数になる。他方では器台形土器、坩形土器、S字状口縁台付甕形土器などの外来的な器種が多くなり、I期では、客体的存在であった坩形土器や、器台形土器が主体的存在になる。また手捏土器による住居址内祭祀が行なわれるようになる。住居址形態は、正方形を呈し柱穴や炉の配置に強い規則性が見い出せる。

I期、II期の時期区分を考えたが、実際の年代、土器の編年的位置はどうであろうか。現在県内においてS字状口縁台付甕が石田川式土器として型式設定され、編年案がいくつか発表されている²⁾。また、輪積み痕を持つ甕を赤井戸式土器として、編年案が発表されている³⁾。そこで、糸井宮前遺跡出土土器の編年的位置を、両者の編年案によって考えようと思う。

赤井戸式土器の編年案には、小島純一氏の編年案がある(小島1982)。これによると赤井戸式土器は、3時期に細分されその最終段階の赤井戸III期は、「縄文の消失と、異系の土器の台頭した時期」として、題頭25号住居、上川久保遺跡第1号方形周溝墓、などの例を上げている。これらの土器を見ると糸井宮前I期とした土器群は、この赤井戸III期とほぼ同じ土器組成、特徴をする。ただ、赤井戸III期とした土器の型式組成に坩形土器が含ま

甕形土器	A I類	48住6、56住2、76住2
	A II類	50住1・2、54住1
	A III類	50住3、56住1
	B I類	39住1、59住5、125住1・3・8・9
	B II類	44住3、125住5
	C I類	46住1、57住3、62住1、125住6
	C II類	44住1、62住2、125住10
	D I類	87住1
	D II類	48住1、51住1、59住1、71住1・2、148住1
	E 類	44住7、48住10、49住4~7、52住2、61住8 76住2、101住3
壺形土器	A I類	46住4、119住2、グリッド14・15
	A II類	46住3、48住5、グリッド12・13
	B I類	39住3、57住1・2
	B II類	54住2
	C 類	48住2、49住1・2、148住2、グリッド4
鉢形土器	A 類	44住4・5、54住1・8、62住3、71住3。87 住2・6、108住5、125住16
	B 類	105住1、グリッド22
器台形土器	A 類	148住4
	B 類	54住14、119住5、125住19
坩形土器	A I類	3住1、46住5、48住12、119住6、123住3
	A II類	108住1、123住1・2
	B I類	44住6、54住9、61住4・5、148住2・3
	B II類	49住3、61住6
	C 類	112住2
椀形土器	A 類	61住2、125住18
	B 類	108住3、119住7、58住4
	C 類	58住3
	D 類	44住6、57住5
甕形土器		46住6、105住2
手づくね型土器		3住2、38住5、59住7、87住4・5、101住1

表1 土器分類別出土一覧

れていない点で、糸井宮前I期との相違点が見られる。これを、時間差としてとらえるのかは、今後の課題としたい。

次に石田川式土器の編年であるが、これについては、何人かの人によって編年案が行なわれているが、ここでは、田口一郎氏の編年案(1981)によって考えることにする。田口氏の分類によって糸井宮前出土のS字状口縁台付甕を分類すると、III-b、IV-b、c類に当り、III-b類と、IV-b類は、田口氏の編年のIV期に、IV-c類はV期である。そして、IV期、V期の実年代は、IV期が4世紀後半、V期を4世紀末葉から5世紀初頭としている。糸井宮前I期からは、IV-b類が出土し、II期からは、IV-c類が多く出土している事を考えると、それぞれ田口氏の編年のIV期、V期に相当し、赤井戸式土器のIII期と矛盾しない。

ま と め

糸井宮前遺跡古墳時代前半期の住居址、出土遺物について、住居址の形態、土器の分類、年代的位置、等を概略的に述べてきた。ここでは、それらのことについて、若干の私考を述べてまとめとしたい。

まず第一に、糸井宮前遺跡の住居を8群に分け、長方形住居址と、正方形住居址間に時間差を見いだした。そこで、両者を集落単位でとらえた場合の構成を考えてみたい。調査範囲に限界があるため、集落全部を調査したとは言えないが、I期、II期とも大型住居を中心に中型、小型住居址という構成をとるのは、事実である。大型住居址は、I期、II期とも他の住居址に比べ出土遺物が少なく、埴形土器や、台付甕の脚部が多く出土するという点で注意すべきであろう。そしてこの大型住居址の役割は、集落共同体の長に関係するか、その集落の中核的機能を持つものであろう。また、小型住居址に関しては、I期については、出土遺物がないため、なんとも言えないが、II期の小型住居址については、埴形土器、器台形土器、手捏土器などの祭祀性の強い遺物を多く出土する特徴がある。これらの事から、小型住居址は「祭祀の場」、もしくは、それに係わりのある住居址と考えられる。

第二に、土器組成についてI期とII期の相違点を述べたが、これをまとめるとI期では、在地の土器である赤井戸式土器を持つ集団に、S字状口縁台付甕や埴形土器を搬入し、使用したがまだこれらの土器は、客体的なものであったと考えられる。II期になると、赤井戸式土器が少数となり、外来系土器のS字状口縁台付甕や埴形土器、手捏土器、器台形土器が主体となり、I期で客体的存在であった外来系土器が、土着化されていく過程にあると考える。

第三に、祭祀遺物についてであるが、これには手捏土器があげられる。また、埴形土器や、器台形土器、台付甕形土器の脚部、高坏形土器なども、すべてがそうではないが、祭祀遺物に含まれるものがある。そして、これらは、II期になると多くなる。手捏土器については、I期の住居址からは出土していない。また、石製模造品の出土が確認されず、手捏土器の形態が、甕形土器や壺形土器、埴形土器のミニチュア化されたものである。これらの事から、糸

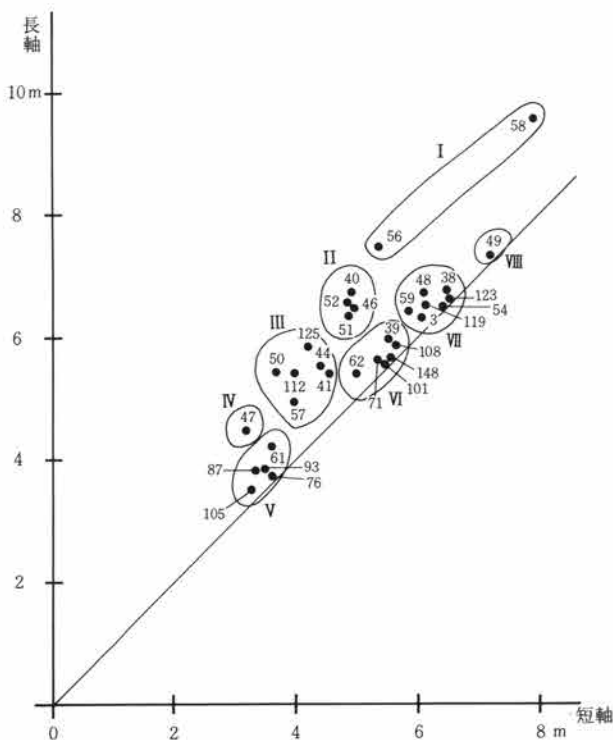


図1 住居址群分類

第IV章 成果と問題点

井宮前遺跡の祭祀遺物は、「家屋内祭祀」の古い形態を示すものとする⁵⁾。

これらを総合すると、糸井宮前I期では、弥生文化の伝統を強く残しながらも、畿内における大和政権の古墳文化の影響を受け始めた時期と言えるが、その支配体制が確立していない時期である。糸井宮前II期になると、大和政権が、東国経営を具体的に進める時期で、その際に祭祀を、中央から地方へ、地方から地域⁶⁾へと押し進めていった時期であり、祭祀とともにその支配体制が確立した時期である。

この事は、梅沢重昭氏が指摘⁷⁾しているように、群馬県における東毛地域の平野部での、政治的、社会的変容は、北毛地域の山間部にまで進出していったと言える。

以上糸井宮前遺跡の資料から、古墳時代前期の社会復元を試みた。ただこれらは、北毛地域の集落についての私考にすぎず、これ以外の同時期の集落や、古墳について、調査報告が増加するとともに、さらに精査な分析を行ない、北毛地域の社会構造を明らかにしていきたい。

なお、本稿をまとめるにあたり、梅沢重昭・平野進一・石塚久則・相京建史の各氏より、御教示、御意見を賜った。記して感謝する次第である。 (関根)

註1 梅沢重昭氏の文献による(1978)

2 巾隆之(1980)、田口一郎(1981)、梅沢・橋本博文(1981)、佐藤明人(1982)各氏の研究がある。

3 小島純一氏の文献(1983)がある。

4 埴形土器や、器台形土器、台付甕形土器脚部が祭祀的性格を持つことは、梅沢(1978)、鈴木敏弘(1978)両氏などが報告している。糸井宮前遺跡では、これらの土器が、祭祀用の土器と、日常使用する土器の分離は明確ではなかった。

5 佐藤政則氏(1982)によると、茨城県内での家屋内出土の祭祀遺物からは、五領併行期では、石製模造品が出土せず、手捏土器が椀形土器や、壺形土器のミニチュア化されたものが多く、盤状化するものは古墳時代後期であるとしている。これは、群馬県内においても同様であるとする。

6 この場合、地方というのは、毛野であり、地域というのは、北毛の事をいう。毛野は統括する長の下に北毛を統括する長があり、その一集落が糸井宮前遺跡であると理解している。

7 梅沢(1978)氏によると、「古式土師器が発達する過程で東国、特に群馬県地方では、平野部の主要地を中心に大規模古墳を成立させる大きな社会、政治的変容があった。」として、「壺形土器・甕形土器・埴形土器の発展の様相に反映している。」とした。

〈引用・参考文献〉

梅沢重昭 1971 「太田市米沢二ツ山古墳—および墳丘下発見の住居址」 群馬県教育委員会

梅沢重昭 1978 「群馬県太田市五反田・諏訪下遺跡」 太田市教育委員会

梅沢重昭・橋本博文 1981 「日本考古学協会昭和56年度大会資料」

小島純一 1983 「赤井戸式土器について」 『人間・遺跡・遺物』 文献出版

佐藤明人 1982 「八幡原A・B、上滝、元島名A」 群馬県教育委員会

佐藤政則 1982 「家屋内出土の祭祀遺物」 『紀要2』 日立市郷土博物館

周東隆一 1967 「北関東の後期弥生式土器」 『考古学ジャーナル5号』 ニューサイエンス社

鈴木敏弘 1978 「南伊豆下賀茂日誌遺跡」 南伊豆町教育委員会

鈴木敏弘 1983 「成増一丁目遺跡について」 『板橋区立郷土資料館紀要第2号』 板橋区教育委員会

田口一郎 1981 「元島名將軍塚古墳—前方後方墳の外部施設確認調査—」 高崎市教育委員会

巾隆之 1981 「下郷遺跡」 群馬県教育委員会

橋本博文・加部二生 1984 「VII 群馬県 編年略史と現状」 『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会

松島栄治 1968 「石田川」

横川好富 1982 「埼玉県の古式土師器」 『埼玉県史研究10号』 埼玉県史編纂室

第2節 古墳時代後半の出土土器について

糸井宮前遺跡で検出された古墳時代後半の住居址は8軒である。調査地南域に集中する傾向を示している。集落の構成、規模は周辺の地形から推定すると、おそらく散在すると思われる。出土遺物量は住居址によって片寄りがあり、明確なセット関係を呈示できる住居址は少ない。このような資料を扱って、分類・変遷観を構成することは不確定な要素が多出するため、好ましくはないが、当遺跡の分析を今後行なうについて、土器変遷の序列を現時点で構成することは必要であり、さらに、地域における利根川上流域では、近年の開発に伴ない多くの該期の遺跡が調査され¹⁾、群馬県北部の古墳時代後半の文化が注目されるのは必須である。その中で利根川の一支流である片品川流域に立地する糸井宮前遺跡においても多くの問題を提起するのは確実である。そこで本項では概略的にはあるが、古墳時代後半の住居址出土土器の分析を行ない²⁾、各住居址の変遷を捉え、本遺跡の該期の特徴を導き出すことを目的とする。分析は比較的残存率の高い住居址出土土器を主に扱い長胴甕の形態変化を器形変遷の骨子とし、さらに各器種（丸胴甕・杯）の消長を加えた。また当地域における火山灰の降下も直接的に関連するので、区分の指標的存在として扱った。そこから各住居址の変遷を追ったところ、第1段階第120号住居址—第2段階第45（古）号住居址；第42・43・28・55号住居址—第3段階第60号住居址—第4段階第45（新）号住居址と4段階に区分できた。（2図）なお第130号住居址は出土量も少なく、図示した遺物も口縁部の残存率が低いため除外する。以下各段階の説明も行なう。

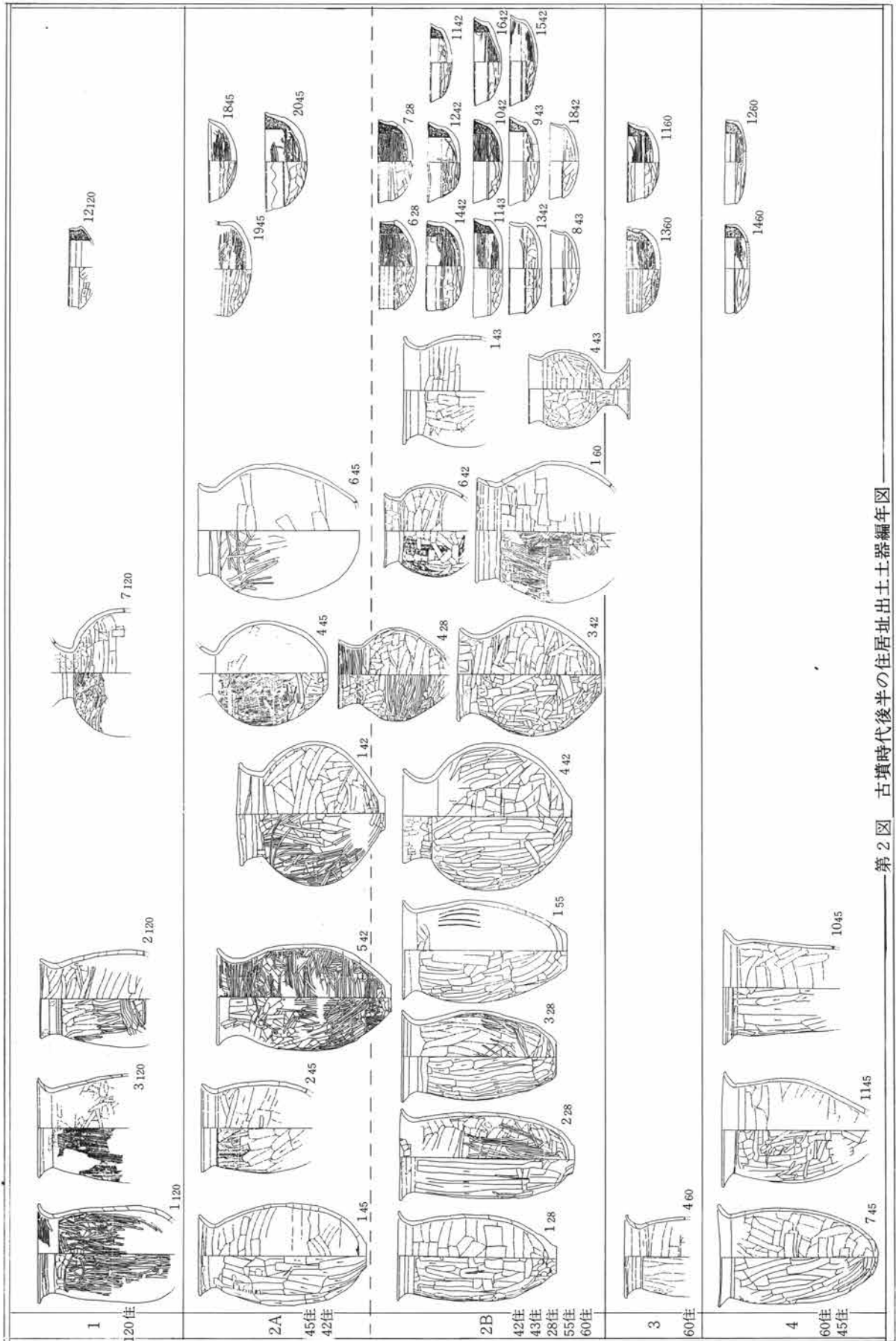
第1段階 本遺跡の古墳時代後半の住居址・土器の出現期である。長胴甕は口縁部が外反、外傾し、胴部下半にふくらみを持つ。丸胴甕は頸部が狭く、肩部は大きく張る。杯は須恵器模倣杯が見られる。

第2段階 住居址、遺物共に増加が著しい段階である。第2段階は、長胴甕のあり方から、図ではA・Bの小段階を設けたが、区分理由も概して強調すべきものはなく、説明は一括して行なう。長胴甕の胴部のふくらみの位置は、中位にあるもの45住1・2、42住5、やや上半にもたせる55住1、ふくらみを多くもたせずにより長胴化を思わせる28住2などがある。丸胴甕はなで肩のもの45住4、42住3、28住4、ややずんぐりした印象を与える45住6、60住1、胴の張りが著しい42住1・4がある。また、43住1のように長胴化のきざしを見せる例があり、このことは丸胴甕の衰退を意味すると受けとられる。またその他に43住からは台付甕も出土している。やはり新しい様相を持った土器であろう。杯の器形は変化に富み、分類検査ひいては時間差を捉え難い。28住7のように古い形態を踏襲した例、42住11・15・16のように体部が浅く、後出する傾向を持つものがある。主体をなすものは口縁部が外傾、外反し、外稜が明瞭なものが量的に多い。

第3段階 F・P層上面で確認された第60号住居址出土遺物を主体にした。長胴甕は口縁部が胴部に比べやや広くなり、外反する。丸胴甕は検出されているが（105図）、第2段階のものと思われる。杯も口縁部が外傾し、体部が深い第2段階の性格が残っている。このことから、F・P降下直後も、いわゆる鬼高Ⅱ的な様相は色濃く残るのであろう。

第4段階 本来ならば古墳時代後半の範疇に入らない土器であるがF・P降下後揺動的な様相があるためあえてのせた。長胴甕の口径は著しく広がる。口縁部と頸部との境には外稜を持ち、胴部もより長胴化が進む。杯は外稜を持つが、体部が浅くなり扁平である。

以上のように、出土土器を大まかに分析し、住居址の段階的な流れを追ってみた。その結果、住居址は第45号住居址以外は近接した時期に居住されており、住居址間には有機的な繋がりがあった事も考えられる。このことは、住居址が調査地南域に立地する偏在性からも推察されよう。次に整形技法から特徴を拾うと長胴甕・丸胴甕とも、前代の技法であるハケ目・ミガキを第2段階まで残す。また杯・高杯のほとんどは器肉



第2図 古墳時代後半の住居址出土土器編年図

が厚く、ミガキ・黒色処理を施す。北関東に位置する本県でも、平野部の該期の土器には上記のような手法は多くは認められず、北毛地域の土器文化圏の特徴と考えてよいだろう³⁾。

今回の出土土器の観察で得られた問題点を簡単にまとめてみる。

F・P降下時期について 本遺跡では、F・P（榛名山ニツ岳起源の降下軽石）層が良好な状況で確認された。降下時期は6世紀後半とされる⁴⁾。本遺跡の古墳時代後半・平安時代の住居址のほとんどがF・P混土層を覆土としていた。先に試した住居址の流れの中でF・Pの降下時期を想定すると、第2段階42号住のカマド覆土中のF・P層、第3段階の60号住がF・P上面で確認された事実から、第2段階の間と捉えられよう。確証はなく、他の遺跡との比較を行なっていないが、本遺跡の場合、丸胴甕消滅の過程の一時期にF・Pが降下したのではないだろうか。今後の問題点としたい。またF・P降下直後の第3段階と第4段階の間は時間的な隔たりが考えられ、居住者の断絶した空白期があったのではないだろうか。

第45号住居址について 45号住は第III章で述べたように、拡張の行なわれた住居址である。出土土器をみると、第2段階に属する1・2の長胴甕と第4段階の11の長胴甕が同一のカマドのソデ芯材として使用されていた出土を示す。また第2段階の45号住の遺物は床直からも出土しており、新住居址の時期決定に問題が生じる。推定ではあるが、本住居址は拡張と考えられているが重複住居とも捉えられ、カマド、遺物の再利用と受けとるのが妥当であろう。この際、F・Pの降下を考えると、45号住旧一新の居住者の関係は想定できないが、災害後（F・P降下後）の対応として、旧遺物の再利用が想起され、興味深い事象である。45号住新の後、本遺跡では次につづく平安時代の住居址が営まれるまで大きな空白期間がある。その原因は、F・Pの降下による環境の悪化であろうか、筆者の推察ではすまされない問題であろう。

黒色処理焼き戻りの土器について 同じく45号住出土の土器だが、16の高杯、20の杯に焼き戻りの現象が見られた（図版92参照）。出土位置は、16の高杯の脚部がカマド内支脚として再利用され、杯部はカマド内覆土より出土している。20は口縁部破片がカマド内より、その他は床直より出土している。焼き戻りは16の脚部に残存する杯部内面に、20の口縁部破片に認められる。おそらく、カマド内で熱を受けた際、黒色処理された土器の吸着された炭素が失なわれ、処理前の橙色に戻ったのであろう。本県では、月夜野町諏訪遺跡⁵⁾に類例があり、黒色処理を施す土器の多い北毛を中心として認められる現象であろう。

群馬県北域は、南部の平野部に比らば該期の資料が整っておらず、論考の余地が山積みしている。例えば、周辺の群集墳、包蔵地、また在地における生産形態、習俗などにも視点を向けなければならないだろう。今回の不十分な分析からは、本遺跡の提起する問題を語りつくせるとは言い難いがいくつかの手がかりは得られたのではないだろうか。今後の資料の増加に伴い検討を重ねなければならないだろう。（山口）

註1 石墨遺跡：後田遺跡、諏訪遺跡、師B遺跡などがある。

2 井上唯雄：「歌舞伎遺跡における土器の編年」『歌舞伎遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982

井上 太：「古墳時代から平安時代の土器について」『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会 1981

志村 哲：「堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年」『堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会 1982

真下高幸：「温井遺跡出土土器の推移（土師器を中心として）」『温井遺跡』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団

茂木由行：「群馬県における鬼高式土器の編年」『群馬県考古通信9』群馬県考古学談話会 1984

山下歳信：「編年試案」『天神風呂遺跡』勢多郡大胡町教育委員会 1981

を参考にした。しかし、上記の論考には北域の土器についてはくわしい記述はされていない。

3 岩崎泰一：「古墳時代の遺構と遺物について」『城平遺跡・諏訪遺跡』群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団では、氏は黒色土器のあり方に「平野部の土師器とは大きな相違が見られる」としている。筆者も同意したい。

4 石川正之助、井上唯雄、梅沢重昭、松本浩一：「火山堆積物と遺跡I—関東地方北西部」『考古学ジャーナル』No157 1979

5 註3に同じ

第3節 出土古瓦について

遺跡地南東隅に平安時代前期の第12号住居址が存在し、その周辺から1片の丸瓦が出土している。当遺跡出土の瓦片は本例、1点の出土であるが、利根・沼田地域における古瓦の出土例は極めて少ないこと、古瓦の存在は、周辺に瓦使用の枢要建築物の存在が示唆されることなどから、その存在に意義を認め若干の検討を加えたい。

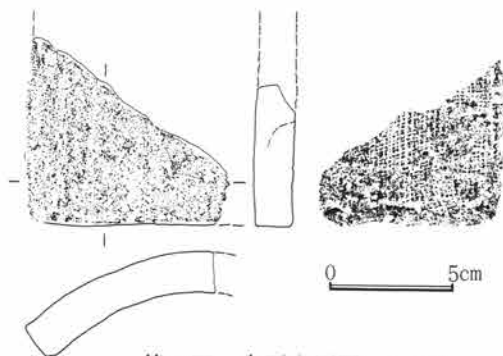
瓦片は丸瓦で、表面は撫でによる擦痕があり、裏面には、粗な布目痕がある。小口面は篋で成形後撫でが加えられ、側端部も同様である。面取りは、小口・側端部に、それぞれ2回の面取りがある。胎土は白色の鉍物粒を多く認め、素地自体も荒く、ざんぐりしている。割れ口には紐作りと見られる粘土走行と継ぎ目らしき痕跡が裏面にある。胎土の白色鉍物粒を多くまじえ、素地の荒い特色は利根郡月夜野町月夜野古窯跡群藪田支群の胎土傾向に共通するため、同支群の製品と考えられ、近接する昭和村森下所在の森下古瓦散布地出土古瓦の一部とも共通する。利根・沼田地区の古瓦出土地は下記のとおりである。

- 月夜野古窯跡群¹⁾ 月夜野町橋下、橋上、深沢、水沼、真沢に7支群からなる窯跡があり、洞、藪田、深沢、水沼支群に瓦の存在が知られている。8世紀前半から9世紀の古瓦がある。
- 後田遺跡⁴⁾ 月夜野師、関越自動車道の建設に伴って昭和56・57年度に調査が実施され、遺跡地の一端から8世紀前半の古瓦が出土している。
- 森下遺跡³⁾ 昭和村森下、利根川に面した河岸段丘端に1,000㎡ほどの古瓦散布地があり、8～9世紀前半の古瓦が知られ、瓦塔片も採集されているため小堂宇を構えた小寺院址が推測されている。

以上の3遺跡が知られるに過ぎない。このうち、当遺跡に近接しているのは森下遺跡であるが距離として約4kmのへだたりがあり、当遺跡出土の古瓦とは距離上直接的な関連にあるとは考え難く、また作瓦技法からしても森下例は、平行叩きと丸瓦裏面の布目痕の擦り消しの手法を特徴としており、本例はそれとも異った後出の技法であるため、別瓦葺建築物が周辺にあったと推測される。

本例の製作年代は、月夜野窯跡群の検討から、8世紀前半は平・丸瓦に格子を全面施し、紐作りを行う。8世紀後半から9世紀初頭にかけては平行叩きと素文の瓦類が存在し、9世紀代はおよそ素文になるとの変遷観³⁾が出されており、それに当てはめれば9世紀代の製作が考えられる。

本例は、利根・沼田地域において4例目の古瓦出土遺跡として新例を加え、さらには周辺に瓦葺建築物が示唆された点に存在の意義が認められる。 (大江正行)



第3図 古瓦実測図 1:3

<註>

- 1) 群馬歴史考古同人会 『土器部会研究資料No2』 1983
- 2) 大江正行・神谷佳明・麻生敏隆 『後田遺跡』 『年報』(群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1983
- 3) 大江正行 『藪田遺跡出土瓦の考古学的位置』 として藪田遺跡調査報告に掲載予定 1984、3 脱稿。目下整理中
- 4) 群馬歴史考古同人会 『関東古瓦研究会研究資料No3』 1982

第4節 平安時代の土器について

糸井宮前遺跡では、平安時代に属する住居址が27軒検出されている。これはまだ調査例の少ない県北地域¹⁾においてはまとまった資料といえる。近年、県内における歴史時代の土器研究は、調査例の増加に伴い盛んにおこなわれているが、その中心は、県南地域の平野部に立地する集落遺跡に集中しており、本遺跡の位置する県北域においては、県南地域に比べてまだまだ解明されなければならない点が多々あるのが現状である。本遺跡の住居址出土の土器は、必ずしも良好な状態を呈していないが、県北地域における土器の地域性、また本遺跡の平安時代の集落の様相を究明するため、出土土器の分類・変遷をおこなった。

本遺跡の平安時代の各住居址の土器出土状況は、全体的に出土量が少なく、良好なセット関係をもつものは数少なく、煮沸器だけであったり、盛器だけの出土といった片寄った状態のものが多い。また覆土中からの出土のものを除き、住居址に供伴するものに限定すると使用できる遺物量が少なくなってしまう点などの問題点はあるものの、大枠で2分類、さらにその内を2および3分類化することが可能であった。

分類に使用した土器は、いちおう煮沸器・盛器を出土した住居址のものを原則とした。

I期は、「コの字」口縁をもつ土師器甕と羽釜とが供伴する時期で、杯・椀類を比較すると内を2分類することが可能であった。I期は、本遺跡のなかでも遺物量が多く良好なセット関係を呈示している住居址が多い。また本遺跡においては古墳時代後期に消滅した集落が平安時代に再び定住化がなされ、構成される時期である。

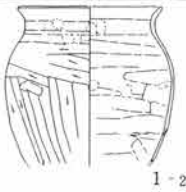


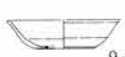





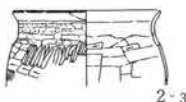
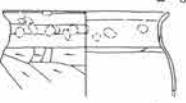







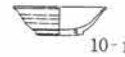
















I a期は、1・25・27号住の各住居址が相当する。土師器では杯・椀類の盛器がみられず、甕だけがみられる。甕は「コの字」口縁を呈している。須恵器では杯・椀・甕・長頸瓶がみられる。杯・椀類は、底径：口径の比が0.5以下で口縁部が外反し、体部は割合と直線的で丸味は僅かである。なお、25号住一6は煨焼成によるものである。羽釜は、県北地域の特徴とされている²⁾ 鏝下までのへら削りが施されているが胴部においては2回～3回に分けて施され、底部付近ではヨコ方向やナナメ方向に施されているものがある。またその形態は、口縁部がやや内傾し、胴部にゆるいカーブをもつものや、口縁部がやや内傾し、そのままの傾斜で胴部へ移行し、鏝がやや上を向くものや、口縁部が直立し、そのまま直線的に胴部へ移行するものの3点がみられる。須恵器甕は、貯蔵用とみられる大型のものがみられる。灰釉陶器は、1・27号住で出土がみられ、共に漬け掛けによる施釉である。

I b期は、20・32号住が相当し、I a期とはあまり大きな変化はみられないが、須恵器椀において大型化が認められる。土師器甕は、「コの字」口縁を呈するが、「コの字」の状態にくずれがみられる。須恵器杯・椀類において大型化が認められる。土師器甕は、「コの字」口縁を呈するが、「コの字」の状態にくずれがみられる。須恵器杯・椀類は、大型化とともに体部下位の張りが強くなり丸味をもち、口縁部の外反が大きくなる。また高台付皿がみられる。羽釜もI a期と同様であるが、20号住一6のような口縁部から胴部にかけて丸味をもち、鏝下までのへら削りが施されないものが存在する。

II期は、I期で煮沸用具として存在していた土師器甕が消滅し、須恵器杯・椀類の萎少化がみられ、ロクロ使用酸化焰焼成による土師質土器の出現がみられる。II期は、全体的に遺物量が少なく器種にばらつきがみられる。

II a期は、122号住が相当する。須恵器杯・椀類では、体部があまり開かず下位に張り丸味をもち、口縁部が外反し、ベタ高台を有するものと、体部から口縁にかけて直線的に開くものがみられる。II a期よりみられる土師質土器は、須恵器椀同様に体部から口縁部にかけて直線的に開き、底径：口径の比が0.37と小さい

平安時代土器変遷図

	土師器 甕	須恵器 杯 碗 皿	土師質土器 杯・碗
I a	 1-27	 11-25  10-25  9-25  11-27  4-25  5-25  8-1  25-6	
I b	 2-32  1-20	 15-32  12-32  13-32  8-20  11-32  7-20  9-20	
II a		 10-122  6-122	 5-122
II b		 12-33  10-33  13-33  2-95  4-75  5-33	 9-33  5-95  3-75
II c		 7-106	 3-106  6-106  4-106  5-106

平安時代土器変遷図

羽 釜	須 恵 器 甕 ・ 壺	灰 釉 陶 器

第IV章 成果と問題点

ものがみられる。羽釜の、整形等はI期と同様であるが、口縁部が直立し、胴部上位にふくらみをもつものになる。須恵器甕においては、短い口縁部で、胴部が球状のふくらみをもつようになり、II a期以後においては大型のものはみられなくなる。灰釉陶器は、椀・皿がみられ、大原2窯期である。

II b期は、33・95号住が相当する。土器のなかにおける盛器は、須恵器から土師質土器への移行する傾向がみられる。須恵器においては、II a期よりさらに体部に丸味をもち、口縁部外反が大きくなる。また煨焼成によるものが多くなり、やや大型の高足高台をもつものやベタ高台をもつ耳皿がみられる。土師質土器は、須恵器と同様の形態を呈している。羽釜は、II a期と同様の形態を呈しているが、胴部のふくらみは、II a期より強い。灰釉陶器は、33・95号住ともに椀が出土しており、虎溪山1号窯期である。なお、II期においては、土師器甕の存在はみられないが、31号住-2にみられる小型甕は環元煨焼成によるものであるが、その整形等は土師器と同様のものである。なお、31号住は、羽釜と小型甕だけであるが、羽釜の形態からほぼII b期に属すると考えられる。

II c期は、106号住が相当するが、106号住においては煮沸用具の出土がみられず、盛器のみでセット関係は不明である。土器のなかにおける盛器は、完全に須恵器から土師質土器へと主体は移行している。II c期の須恵器は、煨焼成による高足高台をもつ椀のみがみられる。これはII b期と比べ、口縁部の外反、体部の開きが大きい。土師質土器においては、II b期と同様の形態を呈するものと器高が浅く、体部から口縁部にかけて直線的に開くものがみられる。灰釉陶器は、段皿がみられ、丸石2窯期である。

以上糸井宮前遺跡における平安時代の土器の変遷を追い、その概要をみたが、本遺跡では前述のような出土土器の片寄り、ばらつきなどがあり、多くの問題点を残しているが、大まかな土器の流れとして理解したい。年代観については、本遺跡において実年代を明確に提示するものはないが、県南地域の編年と対比し、I期は9世紀後半、II期は10世紀代という年代観は与えられる³⁾。これらをもとに、本遺跡の平安時代の集落の概要をみると9世紀後半に発生し、その後の一世紀半ぐらいの間、散村的様相をみせながら存続していたと考えられる。

(神谷佳明)

〈註〉

- 1) 近年、上越新幹線・関越自動車道に伴い調査例は、増加しているが、平安時代の住居址は、藪田東遺跡で8軒、十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡で各1軒ずつ、大釜遺跡で25軒、梨ノ木平遺跡で8軒が報告されている。
- 2) 中沢 悟 「月夜野型羽釜について」 埋文月報No40 1984年
- 3) 年代観については、清里、陣場遺跡の中沢氏の編年に準拠した。

第5節 古墳時代前半の竪穴住居の掘り方について

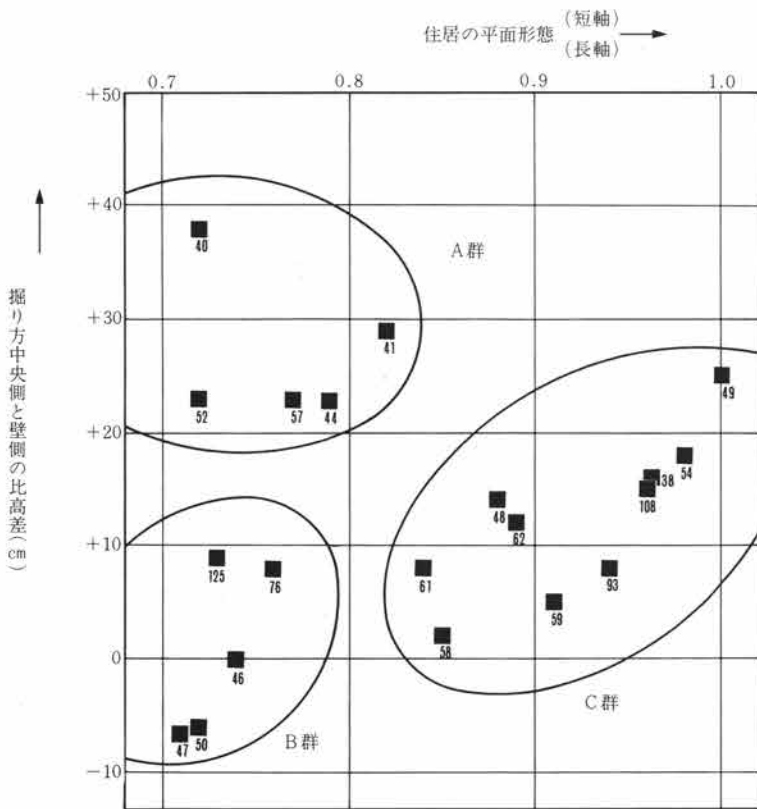
本遺跡では竪穴住居の調査にあたって、いわゆる掘り方の存在を想定し、確認しうる限りにおいて、調査並びに記録を心掛けた。掘り方は住居構築法の一つとして、一旦地山を掘り下げたものを埋め戻して床を貼る方法で作られたもののうち、「貼り床……下部の埋土部分」をいう。加えて本稿では、掘り方は住居全体に及ぶものとし、掘り方に掘り込まれたピットを床下土坑と称したい。こうした掘り方の調査は床面の二重構造として昭和40年代後葉頃から行なわれるようになるが²⁾、群馬県下でも昭和50年中葉頃から一般化するようになって、荒砥島原遺跡³⁾、諏訪遺跡⁴⁾、雨壺遺跡⁵⁾などで報告されている。本項に扱う古墳時代前期の調査例では、堀ノ内遺跡群⁶⁾の報告例がある。本遺跡でも34軒中21軒に確認されている。

掘り方に関する考察は柿沼(1979)⁷⁾、植松(1981)¹⁾、小島(1981)⁸⁾、中田(1982)⁹⁾らのものがある。この中で植松・中田はそれぞれ3種類に形態分類している。(4図参照)本遺跡における調査では、その形態

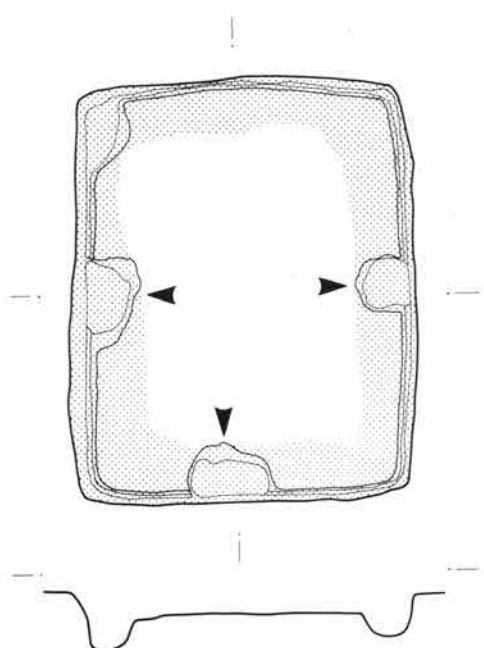
形態						
分類	1類			2類	3類	
比高差	+			0	-	
植松	A類		B類	C類		
中田	c ₂ 類	c ₁ 類		a類	b ₁ 類	b ₂ 類

第4図 竪穴住居掘り方の形態分類

は、1類：周溝状の掘り込みを有するもの(植松のA・B型、中田のC型に相当する)、2類：平底のもの(植松のC類、中田のa類に相当する)、3類：中央部が広く落ち込むもの(中田のb類に相当する)の3種類に大別分類されると思われる。当遺跡の古墳時代前半の竪穴住居の掘り方の形態は、上記の3類型に対して特徴的なものもあるが、1類と2類、2類と3類の間では中間的形態を呈するものもあってその分類は容易ではない。そこで形態上の把握を壁寄りの低位部分を基準とし、住居中央付近との比高差によって行なうこととした。その表示は中央部の高さから壁寄り部分の高さを引いた値で行ない、従ってその値を形態の類型にあてはめると1類は+の値、2類は±0、3類は-の値で表わされる。この値と、住居のプラン(短軸/長軸で値を表示)との関係を見ると(5図)、長方形のプランを呈するものは比高差+20cm以上のグループ(A群)と0±10cmの範囲のグループ(B群)に大別され、正方形に近いプランを呈するものは1グループ



第5図 住居形態と掘り方の関係



第6図 4号住居床下土坑
(トーン部分は周溝状の掘り方)

(C群)として把握される。こうしたグループの存在は、掘り方の構築の目的を含むグループ毎の同一または近似する設計思想に基づくものであることが推察される。掘り方構築の理由を当遺跡の掘り方の観察から見るとその断面形態が弱い傾斜を持つ Δ またはV字型を呈すること、掘り方の埋土がブロックであることから、住居への水の流入を壁溝などから傾斜を伝い掘り方底部にプールし、漸次壁外へ浸透させる効果を持つことが考えられる¹⁰⁾。

床下土坑において特徴的な41号住居址は掘り方を埋め戻した後、北・西・南壁端中央に、幅平均100.3cm厚さ平均71.3cm、深さ平均39.0cmのものを作っている。この床下土坑の存在はA群の掘り方が住居壁の構造に係ることを否定するがその性格は位置的なことからも住居建築儀礼的⁹⁾様相が考えられる。

この他93号住居址中央の床下土坑には儀礼以外に建築途中の仮の柱という性格も推察される。(石守)

<註>

- 1) 植松章八：「月の輪遺跡群」 富士宮市教育委員会 1981
- 2) 「鶴ヶ丘遺跡」 埼玉県教育委員会 1981 「子ノ神」 厚木市教育委員会 1978
- 3) 「荒砥島原遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1978
- 4) 「城平・諏訪遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 5) 「熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 6) 「A1堀ノ内遺跡群」 藤岡市教育委員会 1983
- 7) 柿沼幹夫：「下田・諏訪」 埼玉県教育委員会 1979
- 8) 小島弘義：「中原上宿」 中原上宿遺跡調査団 1981 ただし、この論考は奈良・平安期のものを対象としている。
- 9) 中田 英：「向原遺跡」 神奈川県教育委員会 1982
- 10) 柿沼氏 (1979) は床面の除湿と乾燥による床面の崩壊防止。植松氏 (1981) は雨水の透水性に関連するものと考察している。

第6節 第32号住居址の礎石について

32号住居址は礎石を伴った平安期の特異な住居址であるが、礎石の下にはそれぞれ柱穴が認められることから住居の上屋構造が大きく変化したとは考えにくい。しかし、同時期の大型住居址の基礎構造が地下式(柱穴)から地上式(礎石)への移行を示すもので、同時期の住居での31号住居址の炭化材に可能性を求めよう。またS₄に残る加工痕は、石工との関連を想起させる。(石守)

礎石S₄の加工痕

S₄と称する本資料は、輝石安山岩質でその平面プランは径42cm前後の方形を意識させる多角形で、横断面プランはややつぶれた長方形を呈している。石の上面は比較的平坦な面を成し、側の一辺に平行するように流理構造¹¹⁾が一見縞文様状に現われ、あたかも木材という柱目を思わせる。この縞模様でも中央を走る一筋は幅約2.5cmと他の筋より幅広く多孔質化が認められる。この多孔質化した幅2.5cmほどの筋の中を棒状のノミで溝状にし、さらに約6cm間隔ごとにやや深く列状に窪みが付けられる。これは、ある時期本資料の最も弱い縞目部分に溝を付け分割を試み、途中でその目的を放棄した加工痕とみることができる。この他に、本資料では側面に数カ所平ノミ状工具痕と推定される痕跡も存在するが、先のそれほど顕著なものではない。本資料の古代の石造物には間々石材加工具痕の残るものがあり、時間的開きはやや大きい、古墳時代末期

第7節 小型ピットについて



礎石S₄ (①) と加工痕 (②)

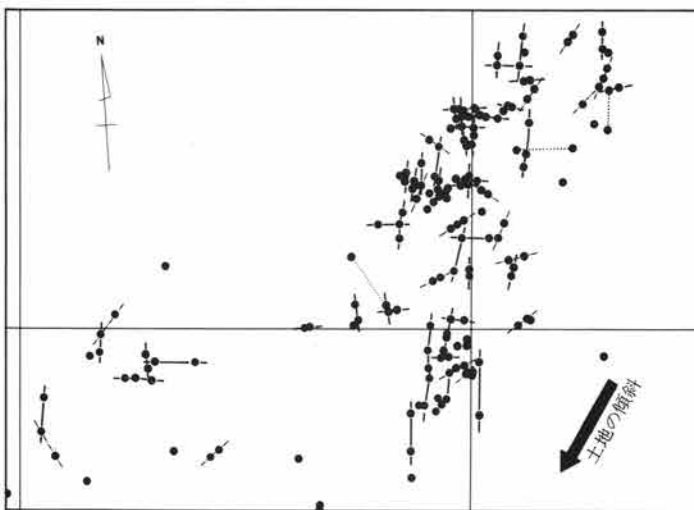
截石切組積古墳の石材や古代寺院の鴟尾や根巻石などの石製品などが良く知られている。しかし、このように一つの石材を分割しようとしたことの窺える資料は少なく、知る限りでは奈良県室生村所在向坊1号墳石室壁材に残る矢痕のみで、一枚の板状節理する石材を分割して左右壁に使用した²⁾もののみである。本資料の場合は矢による分割法でなく、石の目に沿って溝を掘りある程度の溝の深さに達した段階で加撃し分割を行なう方法と推測されるが、その目的の途中で加工が中止されたものとみなされる。分割は何らかの原因で実施されなかったものの、石の目を巧みに読取って硬質の石材を加工しようとしていることから、石材加工にある程度専門知識を有した人間の存在を窺わせるとともに、県内の古代石材加工について考えるうえでも極めて重要な資料と云える。(津金沢)

〈註〉

- 1) 石室に関しては県立歴史博物館 田中宏之学芸員の教示による。
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所「向坊古墳」 1979

第7節 小型ピットについて

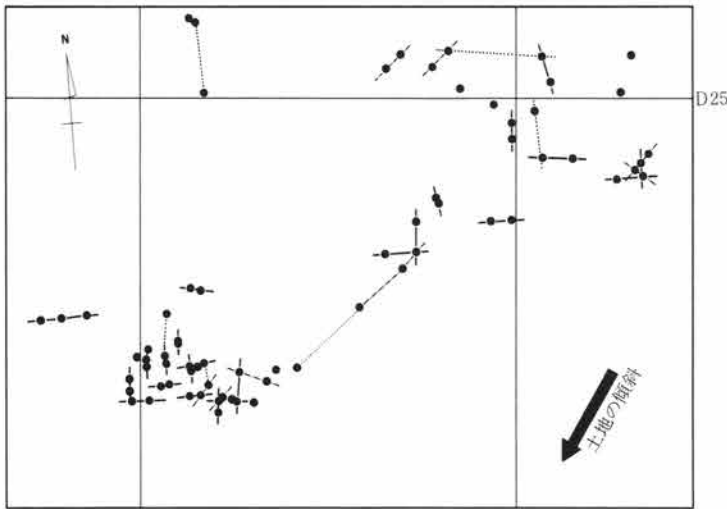
小型ピットおよび形状のしっかりしない一部の土坑状ピット (以下これらを「小ピット」と呼ぶ) に関し



第7図 IV層土を覆土とする小ピット群北東部配置図 (形態的・位置的に近似するピットを結んでいる)

て、およそ600を数えるものの調査を行なった。これらの小ピットの遺存は一見煩雑な配置を示しているが、これらの配置の規則性を把握するため、配列および方位性の検討を行なった。

V層面においてIV層土を覆土とする小ピット群のうち、比較的遺存が良好な北東部 (図7) 及び・南西部 (図8) のものについては、その配列は南一北および東一西方向に並ぶ方位軸を基準とするものと、北東一西南に並ぶ土地の傾斜の方向に重なる2つのケースが認められる。これらの方位を例え



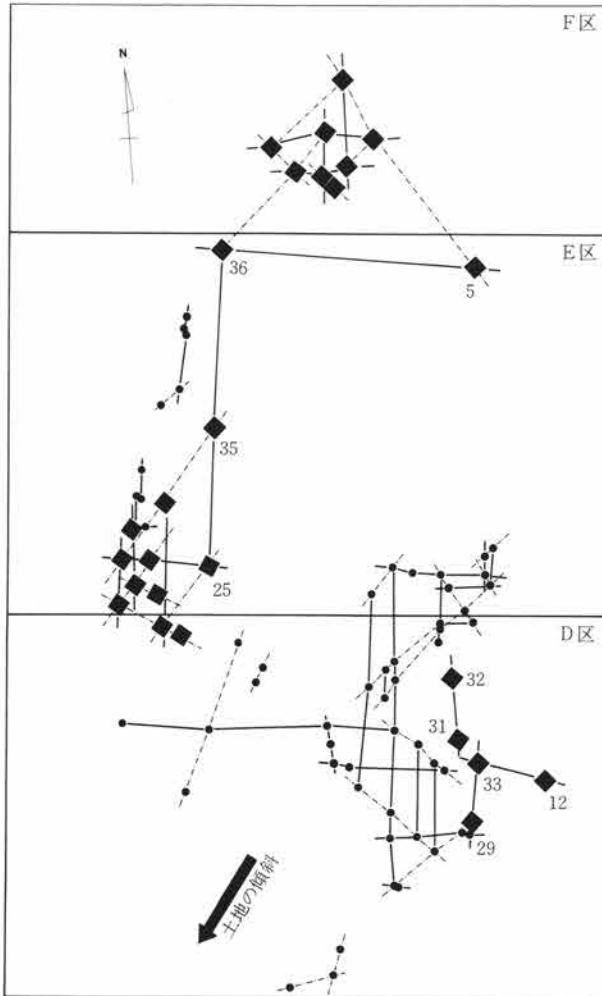
第8図 IV層土を覆土とする小ピット群南部中央付近配置図
(図中左側下部に集中するピット群には規則が見られる)

ば東西方向のものは直交する線に置き換えてN-E方向に表示すると各々N-5°-E±5°、N-58°E±17°を測る。前者の方位の幅は10°以内であるのに対し、後者は南東部で方位が一定のものが集まる傾向もあるがその幅は35°と比較的大きい。また、前者に伴なう小ピットが多いことから、IV層土を覆土とする小ピット群は、前者の方位軸に基づいて配置されている傾向にあると思われる。一方これらの配列は、一部において極めて連続的であり、全体

として杭列とするには距離が短く、並列になりすぎるといふ点などから、連続した栽培植物痕(例えば根菜類・桑)、つまり畝跡ではないかと思われる。

B(1108年降下)を覆土とする小ピット群に対しても同様の操作を行なったが、IV層土を覆土とする小ピット群と同様の結果を得た。また国分期の竪穴住居址に関する検討では、住居址の方向性、並びにD・E区西部とF区の住居址群は土地の傾斜に沿った配列の傾を示すが、双方を結ぶ25号-35号-36号住居址の配置、D区東部の31号-32号住居址、12号-33号住居址、29号-33号住居址の配置は北方向の方位性に基づいた配置を示している。

小ピットの配置の検討を他の方法で行なえば、また違った成果が得られることも考えられるが、方向性を基本とした今回の検討結果についての推察が許されるなら、古代の小ピット(住居址の一部)の配置は地形に合わせたとも考えられるが、仮にN-5°-Eを基準とするならばこれを南北基線とする条里区画によることが想定される。このことは、本遺跡が係った利根郡笠科郷での畝地に対する阡陌区画が古代に行なわれたことを示唆すると考える。(石守)



第9図 平安期竪穴住居址とB軽石(Ⅲ層)を覆土とする小ピット配置

(F区およびD・E区の住居址群は傾斜に沿った配置がされているように見られるが、はっきりした規則性は認められない)

小 結

糸井宮前遺跡での分布調査から発掘調査に至る一連の作業によって、多くの埋蔵文化財が発見され、調査し記録された。文化財は本来活用がなされるという使命を持つが、当該地が関越自動車道という半永久的な巨大な土構造物に埋もれば、その使命を果せなかったかも知れない。しかし日本道路公団をはじめ、群馬県教育委員会など関係機関の理解と協力によって、当事業団による調査が実現した。それによって出土し、記録された文化財は整理作業を経て、県民・国民に資するため活用されることになったのである。

ここに発見された埋蔵文化財は縄文時代・古墳時代・平安時代のものを中心としているが、今回はこのうち古墳時代以降のものについて調査報告を行なったのである。さて、本書に係る調査、整理作業は充分に行なえる状態になかった。それは筆者の能力のなさによるところを多としており、貴重な文化財を報告するに際しながら良好な状況を設定しえなかったことは慙愧の念に耐えない。ところで、本遺跡に関する総合的所見は縄文時代の出土文化財の報告を待たねばならないが、以下本書に係る若干のところを述べたいと思う。

昭和40年代以来、群馬県北部の利根・沼田地方でも新幹線敷設などに伴う埋蔵文化財の調査が行なわれ、古墳時代の集落址も幾つか調査されてきた。しかし、本遺跡の発掘調査時で石田川期に比定される集落の調査例はなく、その確認は利根地方への石田川式土器を伴う文化の流入を示すものであった。その後戸神諏訪遺跡など調査例も加わるが、当遺跡の文化財は利根地方のこの時期の研究の基礎資料となるものと思われる。この他この時期に特徴的だったのは多くの竪穴住居址が焼失家屋であった点である。これらの住居址は出土遺物が少ないため火災によるとは考えにくく、意図的なものを感じさせる。良好な遺存を示す炭化材は住居構造を検討する好資料となろう。第38号住居址出土の炭化材は三野紀雄氏によって樹種同定がなされたが、それによると出土炭化材は冷温帯林の構成要素となるコナラ、イヌエンジュなどであるという。本遺跡附近が、当時こうした冷温帯林に囲まれて立地したことが想定される。また、氏が指摘するように山火再生林の要素が考えられるとすれば、前時代の土地開発（耕作）の様相も考慮する必要がある。

利根郡は四囲に2,000m級の山々がそびえ、特に南部は赤城山・子持山によって群馬県の他地域から、ある意味で独立している。こうした地理的特性は、県の平野部の遺跡と違った様相を生じることが考えられるが、鬼高期の土器は平野部のものと比べ総じて肉厚であるなど、そうした傾向を見せている。またF・Pの降下前後に分けられる土器群は、利根地方の土器研究の基礎資料となるものである。

遺構の遺存状況は種々の理由から総じて良好であり、掘り方などの調査・記録も行なうことができた。特に国分期の竪穴住居址は他地域のものに比べ遺存は良好で、カマドなども形態の検討が可能な状態にある。こうした住居址に関する分析は今回行なわなかったが、今後の研究に資する記録はなされたと考える。

以上各章に述べてきたように、本遺跡の調査によって少なからぬ出土文化財を得、それに伴う記録を得ることができた。こうした文化財や記録は一般県民の当該地における文化や歴史の理解に欠くことのできなないものとして、併わせて歴史学や考古学などの学術研究に利用されるといった、活用という使命をはたしてゆくことであろう。さて、この調査には関係機関（者）の援助や協力、また酷暑あるいは酷暑の中調査に参加して頂いた作業員諸氏の働きなど、多くの方々の力があり、また事業団事務局の一致した協力体制により、本書の刊行となった。最後に、関係各位に心からの謝意を申し上げたい。

(石守)

第IV章 成果と問題点

本書作成に参考にした報告書

- 「有馬条里遺跡」 渋川市教育委員会 1983
「荒砥島原遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
「赤羽」 財団法人 栃木県文化振興事業団 栃木県教育委員会 1984
「井出村東遺跡」 群馬町井出村東遺跡調査会 1983
「石田川」 「石田川」刊行会 1968
「池田村史」 池田村史編纂委員会 1964
「大釜遺跡・金山古墳群」 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
「大釜漏1号墳」 沼田市教育委員会 1982
「大山」 埼玉県教育委員会 1979
「尾ヶ崎遺跡」 庄和町教育委員会 1983
「鏡石古墳発掘調査報告」 群馬県教育委員会 1974
「歌舞伎遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
「賀茂遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
「株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書」 日進町教育委員会 1984
「北岡古窯跡群・古墳発掘調査報告書」 多治見市教育委員会 1981
「清里陣場」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
「熊野堂遺跡(1)」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
「熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
「群馬県史」古墳編 1981
「群馬県復員援護誌」 群馬県 1974
「古墳時代土器の研究」[VII 群馬県 編年略史と現状] 古墳時代土器研究会 1984
「後張」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心にして」 瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III 1984
「下郷遺跡」 群馬県教育委員会 1981
「城平・諏訪遺跡」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
「白澤村誌」 白澤村誌編纂委員会 1964
「シンポジウム『平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—』の記録」 愛知県陶磁資料館 研究紀要2 1983
「村誌久呂保」 久呂保村誌編纂委員会 1961
「寺ヶ谷遺跡—図版編」 白沢村教育委員会 1980
「寺内遺跡」 群馬県勢多郡赤城村教育委員会 1975
「天神風呂遺跡」 大胡町教育委員会
「利南村史」 利南村編纂委員会 1981
「利根郡史」 群馬県利根教育会 1970
「中棚遺跡—平安時代の集落」 1983
「梨の木平遺跡」 群馬県教育委員会 1977
「温井遺跡」 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
「沼田町誌」 沼田町史編纂委員会 1952
「年報1・2・3」 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982~1984
「伯仲遺跡」 財団法人 栃木県文化振興事業団 栃木県教育委員会 1984
「A₁堀之内遺跡群」 藤岡市教育委員会 1982
「武蔵国分寺跡の土師質土器について」 東京考古 2 1984
「武蔵国府関連遺跡調査報告IV」 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1981
「向原遺跡1~4」 神奈川県教育委員会 1982・1983
「元島名将軍塚古墳—前方後方墳の外部施設確認調査—」 高崎市教育委員会 1981
「八幡原A・B・上滝・元島名A」 群馬県教育委員会 1982
「藪田東遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
「六反田」 大里郡岡部町六反田遺跡調査会 埼玉県歴史資料館 1981

第V章 化学分析

1 糸井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 山口 逸弘

はじめに

1979年にはじめての胎土分析の試験数は約180点を越え、過去8回¹⁻⁸⁾にわたる報告がある。その結果、県内10個所に存在する窯跡群のうち秋間、金山、中之条、月夜野、吉井、乗附古窯跡群について一傾向を知るとともに製作地の同定も可能となってきた。

今回の分析は糸井宮前遺跡を扱い、製作地の同定を目的としている。

なお、本稿の化学的な記述は花岡が、考古学的な記述は山口が担当した。

1. 分析目的と試料の選択

今回の分析試料は、糸井宮前遺跡から出土した。糸井宮前遺跡は縄文時代にはじまり、平安時代～中・近世にまでおよんでいた。報告の作成は、縄文時代について一分冊、弥生時代～中・近世について一分冊、刊行される予定にある。本年度は、後者の作成について整理が実施された。整理の過程で当遺跡の平安時代集落は、北毛地域における数少ない調査例で、そこから抽出される文化史的内容は、地域史を構成するための不可欠な存在であることが判ってきた。

近年、当事業団が実施した月夜野窯跡群関連遺跡の調査は、月夜野窯跡群の存在を注目させた一方、その供給は、どのように広がっているのかが内・外で問われるようになり、当遺跡にあっても、須恵器の供給がどこからなされたのかという問題は関心事の一つでもあった。この二者からなる設問は、北毛地域の文化史上に極めて重要な意味を持つものであり、今回は、胎土分析という化学分析の回答を通じて北毛地域における文化史究明の一助とすることを目的とした。

糸井宮前遺跡の平安時代集落は、10世紀代が主体となっているため、おのずと試料も限定されてしまった。今回の試料選択は10世紀の前半を代表する例と後半を代表する例を選定し、前者が32号住居址出土須恵器で後者が34号住居址出土須恵器である。それらの試料実測図と肉眼観察所見は第1図、第1表のとおりである。

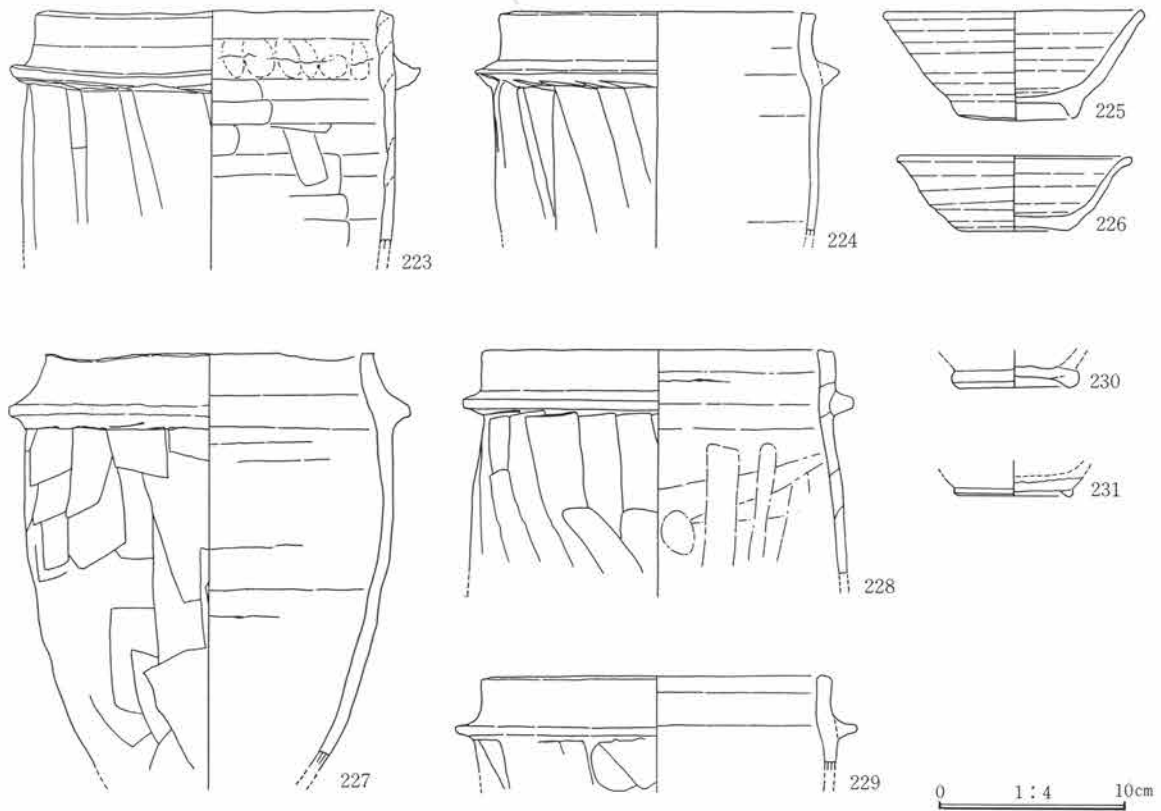
目的の具体的な内容に関しては次のとおりである。

- (1) 今回の試料9点は、月夜野窯跡群製によるものか、既分析結果と比較し、さらに月夜野窯跡群のどの支群で生産されたものかを知りたい。
- (2) 10世紀の前半と後半では、月夜野窯跡群とのかかわりの中でどのような変化があったのかを知りたい。

2. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を10 μ m以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

第V章 化学分析



第1図 胎土分析試料実測図

第1表 分析試料の肉眼観察表

試料 No.	推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
223	10世紀前半 32 住	羽釜	半透明な鈳物粒・白色鈳物粒多く含む。白色鈳物は大型のものもある。素地は粗く、色調は内外面ともにぶい褐色。断面にぶい黄褐色。焼成はやや軟質。酸化焰。	月夜野窯跡群製か
224	〃	〃	半透明な鈳物粒・大型白色鈳物粒含む。素地は粗く、色調は口縁部灰褐色、胴部暗褐色～黒褐色、内面暗灰褐色～淡黄褐色。断面は褐色を呈す。焼成は軟質。還元焰。	〃
225	〃	須恵器 高台杯	半透明な鈳物粒・白色鈳物粒・少量の黒色微鈳物粒を含む。素地は粗い。色調は内外面ともにぶい黄褐色・灰褐色・黒褐色、断面は淡黄褐色・褐色。焼成は軟質。還元焰。	〃
226	〃	須恵器 杯	白色鈳物粒・黒色微鈳物粒を含む。粗地は緻密。色調は灰白色～灰色を呈す。内面は重ね焼きによる焼きむらのため黒色を呈す。断面は灰色。焼成は硬質。還元焰。	〃
227	10世紀後半 34 住	羽釜	半透明な鈳物粒・白色鈳物粒を多く含む。黒色微鈳物粒少量含む。素地はやや粗い。煤付着。色調は黒色・ぶい褐色、内面黒色・灰色、断面暗灰色。焼成は軟質。還元焰。	〃
228	〃	〃	半透明な鈳物粒・白色鈳物粒を多く含む。素地は比較的密である。色調は内外面とも黒褐色・褐色、断面も褐色を呈す。焼成は硬質。還元焰。	〃
229	〃	〃	半透明鈳物粒・大型白色鈳物粒を含む。黒色微鈳物粒も僅かに含む。素地は粗い。色調は外面黒色・灰白色。内面は黒色・暗灰色。断面は灰色・灰褐色を呈す。焼成軟質。還元焰。	〃
230	〃	高台椀 高台部	半透明鈳物粒・白色鈳物粒を多く含む。黒色微鈳物粒も少量含む。粗地は粗い。色調は外面にぶい橙色、内面暗褐色。断面暗褐色。焼成は軟質、酸化焰焼成であろう。	〃
231	〃	須恵器 杯	白色鈳物粒・黒色鈳物粒を含む。素地は比較的密である。色調は外面灰白色、断面灰色を呈す。焼成は硬質。還元焰。	〃

1 糸井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析

蛍光X線分析装置：理学電機(株)製KG-4型

X線管球：銀対陰極 50KV、20mA

分光結晶：Fe、Sr、Rb には LiF ($2d = 4.028\text{\AA}$)

Ca、K、Ti、Si、Al には EDDT ($2d = 8.8808\text{\AA}$)

Mg には ADP ($2d = 10.648\text{\AA}$)

検出器：LiF を使用したとき、S、C、EDDT、ADP を使用したとき、P、C

時定数：1

計数法：Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rb はチャートにより、Si、Al Mg は定時計数法によった。

なお、チャートは、 $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器：積分方式

測定線：FeK β 、CaK α 、KK α 、TiK α 、SiK α 、AlK α 、SrK α 、RbK α の各1次線を使用した。

X線照射面積：20mm ϕ

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査団から依頼を受けた土器5点(203、205、210、213、215)を化学分析し標準試料とした。

3. 分析結果

分析値に関しては表1・第2図に示したとおりであるが、秋間、太田、金山、吉井、乗附の各窯跡群と距離差が著しいため除外し検討した。比較上必要な既成果として月夜野窯跡群、藪田東遺跡試料⁶⁾を加え、表1、第3・4図とした。

月夜野窯跡群には、深沢、沢入、水沼、真沢、藪田、洞の6支群があり、第3図に示した深沢C、沢入A、洞Aはそれぞれの支群における小窯跡群単位の名称である。粘土採掘坑は藪田支群に伴う採掘坑である。藪田東遺跡試料は、工人集落である住居址出土の須恵器であるが、No11のみが土師器であり、検討上から除外される。

- (1) 糸井宮前遺跡試料のうちNo223、224、225、227、228、229、230はCa/KとSr/Rbの割合が1：3の中におさまるか接近し、月夜野窯跡群の領域内にほぼ入り、第4図に示した藪田東遺跡に接し、領域では藪田、沢入A、洞に含まれるか近接する。

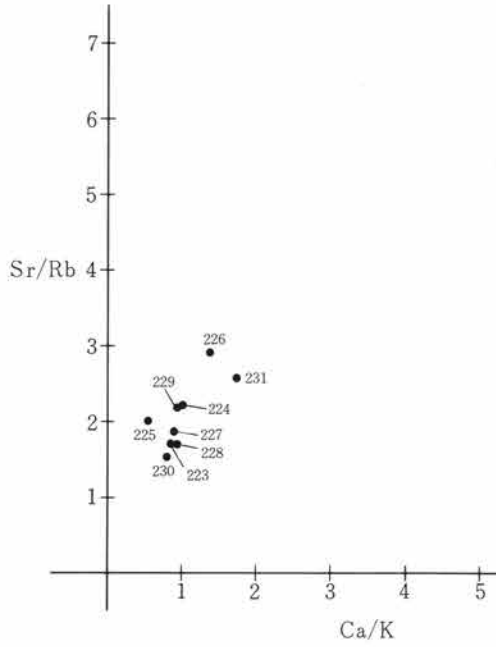
No226、231は第5図に示した月夜野窯跡群領域から外れる。

- (2) 10世紀の前・後半の試料を分析したが、両者の間に著しい差異は認められなかった。

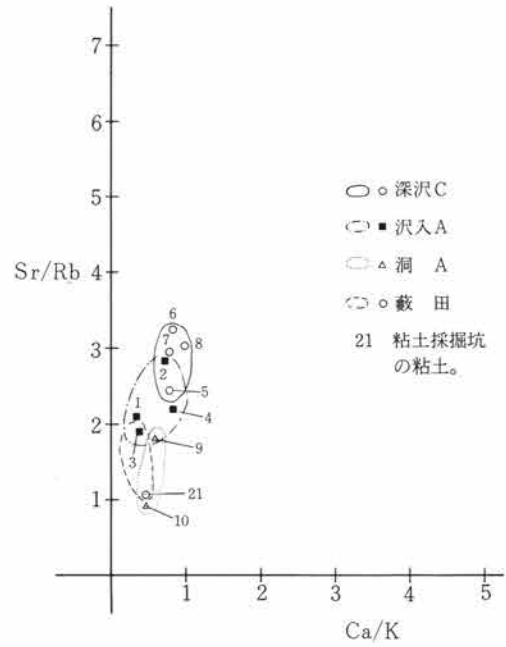
〈註〉

- 1) 「土器の胎土分析」 『塚廻古墳群』(群馬県教育委員会)1980年
- 2) 「瓦の胎土分析」 『天代瓦窯遺跡』(中之条町教育委員会)1982年
- 3) 「温井遺跡出土須恵器の胎土分析」 『温井遺跡』(群馬県教育委員会)1981年
- 4) 「瓦の胎土分析について」 『山王庵寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会)1982年
- 5) 「土器の胎土分析について」 『清里・陣場遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年
- 6) 「藪田東遺跡出土土器の胎土分析」 『藪田東遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年
- 7) 「大釜遺跡・金山古墳群出土土器の胎土分析」 『大釜遺跡・金山古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年
- 8) 「奥原・古墳群出土須恵器の胎土分析」 『奥原古墳群』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年

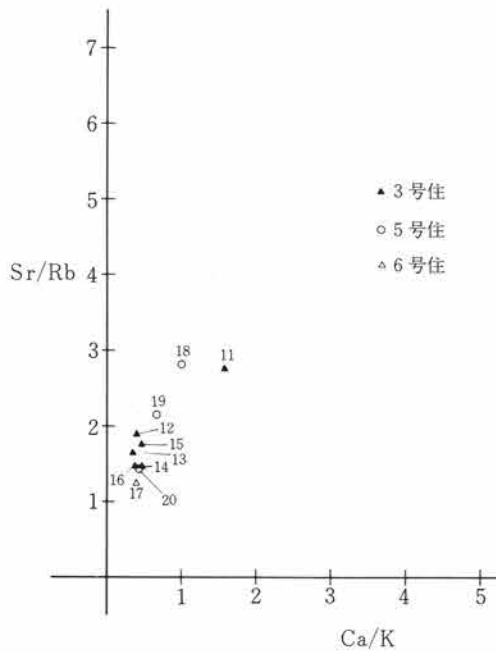
第V章 化学分析



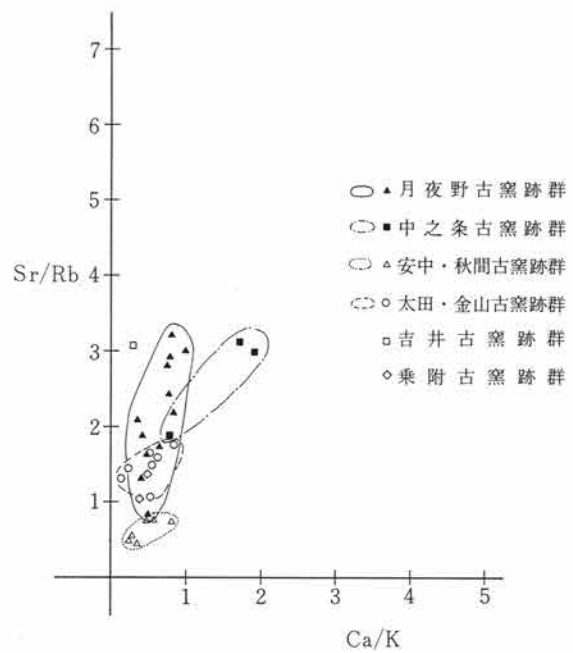
第2図 糸井宮前遺跡試料 Sr/Rb Ca/K



第3図 月夜野窯跡群試料 Sr/Rb Ca/K



第4図 藪田東遺跡試料 Sr/Rb Ca/K



第5図 県内窯跡群の領域 Sr/Rb Ca/K

第2表 分析値一覧表

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
223	68.8	23.0	3.00	0.83	1.27	0.60	1.87	0.86	1.71
224	67.9	22.2	3.20	0.82	1.25	0.48	1.59	1.00	2.23
225	70.8	23.0	3.45	0.71	0.99	0.88	2.32	0.55	2.02
226	66.7	20.7	5.70	0.96	1.88	2.82	1.76	1.36	2.94
227	70.6	23.7	2.65	0.74	1.26	0.62	1.81	0.89	1.88
228	69.4	22.2	3.00	0.61	1.27	0.58	1.74	0.93	1.71
229	70.5	21.9	3.16	0.69	1.47	0.58	1.97	0.95	2.17
230	68.9	22.2	2.86	0.81	1.42	0.69	2.28	0.79	1.55
231	63.7	21.4	7.30	1.31	1.99	2.57	1.46	1.73	2.60

糸井宮前遺跡試料

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
1	68.2	18.5	2.42	0.64	0.50	0.46	1.96	0.36	2.10
2	66.0	21.0	5.19	0.66	0.78	0.45	1.45	0.76	2.84
3	70.6	18.4	2.96	0.67	0.57	0.76	1.75	0.43	1.92
4	66.5	20.5	5.14	0.73	0.83	0.75	1.32	0.83	2.21
5	65.2	21.0	2.94	0.67	0.78	0.38	1.38	0.79	2.43
6	66.1	23.0	2.41	0.66	0.90	0.43	1.46	0.84	3.24
7	64.2	20.4	3.04	0.64	0.77	0.30	1.38	0.77	2.97
8	66.0	20.3	2.23	0.62	1.05	0.40	1.46	0.99	3.04
9	68.6	18.4	4.29	0.82	0.70	1.12	1.49	0.62	1.79
10	65.7	18.7	5.51	1.02	0.48	0.77	1.36	0.47	0.86

月夜野窯跡群試料

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca / K	Sr / Rb
11	63.7	19.2	5.73	0.80	1.70	0.67	1.49	1.59	2.74
12	66.3	20.0	4.20	0.68	0.48	0.50	1.76	0.36	1.63
13	66.0	19.2	3.36	0.70	0.48	0.44	1.46	0.44	1.42
14	67.0	18.0	4.56	0.65	0.41	0.45	1.51	0.38	1.90
15	66.4	21.4	4.39	0.74	0.45	0.51	1.36	0.46	1.75
16	66.2	22.8	3.60	0.76	0.40	0.50	1.43	0.39	1.45
17	67.1	18.5	5.53	0.66	0.46	0.43	1.60	0.39	1.27
18	65.0	24.0	3.30	0.66	0.98	0.45	1.31	1.01	2.83
19	63.1	21.0	4.36	0.74	0.77	0.40	1.61	0.65	2.14
20	66.2	21.5	3.65	0.75	0.68	0.56	2.15	0.43	1.41
21	65.2	20.2	4.40	0.75	0.59	0.49	1.62	0.50	1.08

藪田東遺跡試料

2 炭化した木材片の樹種同定

北海道開拓記念館 三野紀雄

近年、各地での遺跡発掘に際し、古環境あるいは植物と人間との関わりなどを推定する手段として、自然遺物のひとつである木材片をとりあげ、その樹種名を検討する試みが行われるようになった。今回の糸井宮前遺跡の発掘調査でも、古墳時代と平安時代の焼失家屋と思われる竪穴住居址から住居の垂木あるいは貫材などの炭化した木材片が出土した。検出された69軒の住居址のうち古墳時代の20軒、平安時代の3軒あわせて23軒の住居址に炭化木材片が見つかり、採集した木材片の総数は300点を越えた。ここでは、古墳時代の第38号住居址の木材片についての検討結果を報告するが、他の住居址については稿をあらためて報告したい。この調査の機会を与えて下さった(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査研究部の方々に感謝申し上げます。

試料と方法

試料は遺構番号S J-38(第38号住居址)である古墳時代の住居址から採集した木材片で、すべて炭化していた。第38号住居址では、小さな炭化木材片を含めると数百点が検出されたが、比較的大きなそして代表的なもの103点を採集し試料とした。

持ち帰った試料は、3個の5×5×5 m/mの小ブロックに切断し、おのおの木口、板目、柾目の三断面を観察できるようにカッターで調整し、JEOL-JEE-48型蒸着装置で金蒸着した後、JEOL-JSM-S1型走査電子顕微鏡で観察して樹種同定をおこなった。樹種の同定は文献および現生木材の組織プレパラートを対照することによりおこなった。

結 果

試料の樹種同定結果を第3表に、また住居址内の樹種別木材の分布状態を第6図に示した。各樹種を同定した根拠は次のとおりである。

1) コナラ属 (*Quercus* sp)

道管は孔圏では1ないし2列に環状に配列する。孔圏外では円形のやや小さい道管が放射方向にむかって配列し、柔細胞とともに火焰状あるいは扇状などの模様をつくる。孔圏では道管は大きく100~400 μ 、孔圏外では30~50 μ である。射出線には単細胞幅のものと10~30細胞幅のもの2種類がある。高さは単細胞幅で70~120 μ 、多細胞幅のもので1 cmを越える。

2) ニレ属 (*Ulmus* sp)

道管は孔圏では2列に環孔状に配列している。孔圏外では円形のやや小さい道管が散在するが、その数は少ない。年輪界にむかって小道管は多角形となり群状に複合し切線状、斜状に長く帯状に配列する。道管は円形で直径では孔圏で170~320 μ である。小道管に螺旋肥厚が見られる。矛細胞は顕著でない。射出線は1~8細胞幅(15~70 μ)であるが、5~6細胞幅のものが多い。高さは450~1,200 μ である。

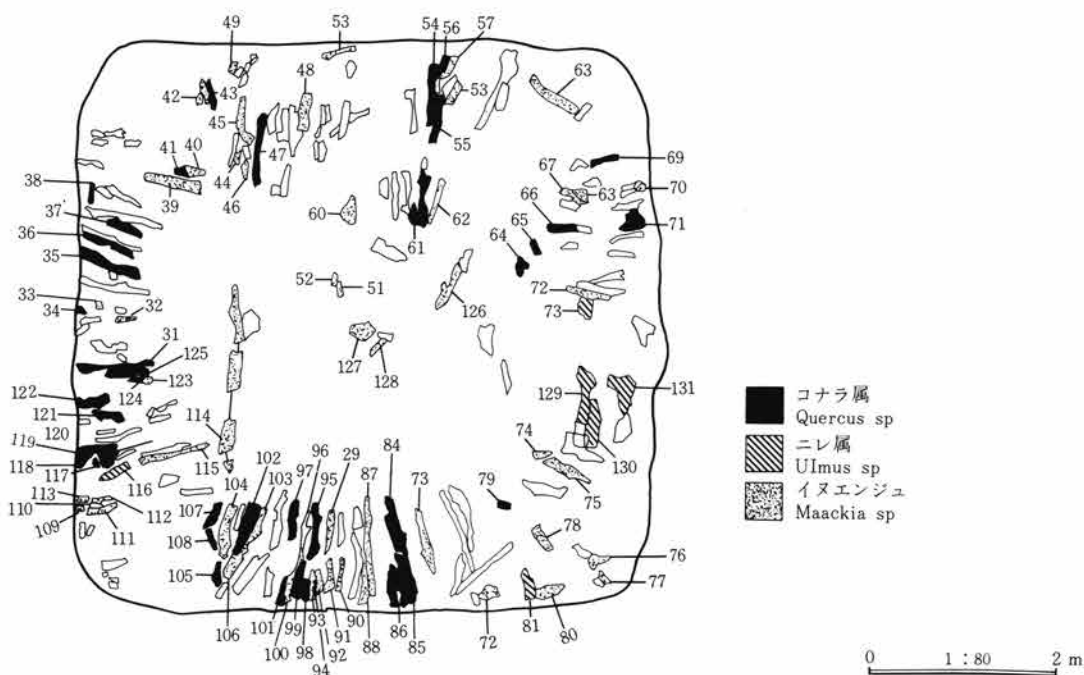
3) イヌエンジュ属 (*Maackia* sp)

道管は孔圏では2~3列に環孔状に配列している。孔圏外では円形のやや小さい道管が単独あるいは2~3個集合して散在し、年輪界に近づくとき小道管は群状に複合し切線状あるいは斜状に短く配列している。孔圏の道管は円形あるいは楕円形で、直径150~300 μ である。小道管に螺旋肥厚が見られる。柔細胞は鞘状に道管をとりかこむ、さらに年輪界では複合小道管とともに長く帯状となる。射出線は1~8細胞幅

第V章 化学分析

第3表 第38号住居址炭化材の樹種同定結果

資料 No	樹 種	資料 No	樹 種	資料 No	樹 種	資料 No	樹 種	資料 No	樹 種
31	コナラ属 Quercus sp	52	イヌエンジュ属 Maackia sp	73	イヌエンジュ属 Maackia sp	95	コナラ属 Quercus sp	117	コナラ属 Quercus sp
32	イヌエンジュ属 Maackia sp	53	〃	74	〃	96	〃	118	〃
33	〃	54	コナラ属 Quercus sp	75	〃	97	〃	119	〃
34	コナラ属 Quercus sp	55	〃	76	〃	98	〃	120	〃
35	〃	56	〃	77	〃	99	〃	121	〃
36	〃	57	イヌエンジュ属 Maackia sp	78	〃	100	イヌエンジュ属 Maackia sp	122	〃
37	〃	58	〃	79	コナラ属 Quercus sp	101	コナラ属 Quercus sp	123	イヌエンジュ属 Maackia sp
38	〃	59	〃	80	イヌエンジュ属 Maackia sp	102	〃	124	コナラ属 Quercus sp
39	イヌエンジュ属 Maackia sp	60	〃	81	ニレ属 Ulmus sp	103	イヌエンジュ属 Maackia sp	125	〃
40	〃	61	コナラ属 Quercus sp	82	イヌエンジュ属 Maackia sp	104	〃	126	イヌエンジュ属 Maackia sp
41	コナラ属 Quercus sp	62	イヌエンジュ属 Maackia sp	83	〃	105	コナラ属 Quercus sp	127	〃
42	イヌエンジュ属 Maackia sp	63	〃	84	コナラ属 Quercus sp	106	イヌエンジュ属 Maackia sp	128	〃
43	コナラ属 Quercus sp	64	コナラ属 Quercus sp	85	〃	107	コナラ属 Quercus sp	129	ニレ属 Ulmus sp
44	イヌエンジュ属 Maackia sp	65	〃	86	〃	108	〃	130	〃
45	〃	66	イヌエンジュ属 Maackia sp	87	イヌエンジュ属 Maackia sp	109	〃	131	〃
46	〃	67	〃	88	〃	110	イヌエンジュ属 Maackia sp	132	イヌエンジュ属 Maackia sp
47	コナラ属 Quercus sp	68	〃	89	〃	111	〃	133	〃
48	イヌエンジュ属 Maackia sp	69	コナラ属 Quercus sp	90	〃	112	〃		
49	〃	70	イヌエンジュ属 Maackia sp	91	〃	113	〃		
50	〃	71	コナラ属 Quercus sp	92	〃	114	〃		
51	〃	72	ニレ属 Ulmus sp	93	〃	115	〃		
				94	コナラ属 Quercus sp	116	ニレ属 Ulmus sp		



第6図 第38号住居址における構造材の樹種別分布

(20~60 μ)であるが、4~5細胞幅のものが最も多い。高さは400~800 μ である。

なお、コナラ属の樹木としてコナラ、ミズナラ、カシワ。ニレ属としてハルニレ、オヒョウニレ。イヌエンジュ属としてイヌエンジュ、ハネミイヌエンジュがそれぞれ考えられるが、ここでは種までの同定はおこなわなかった。

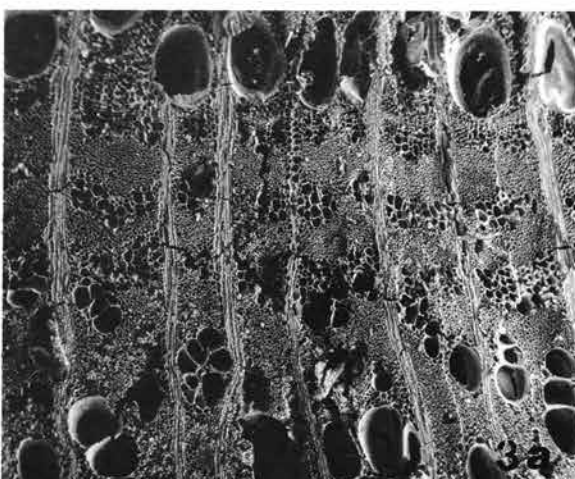
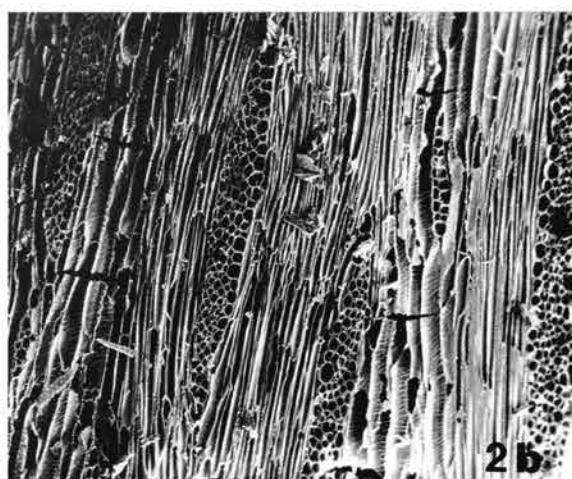
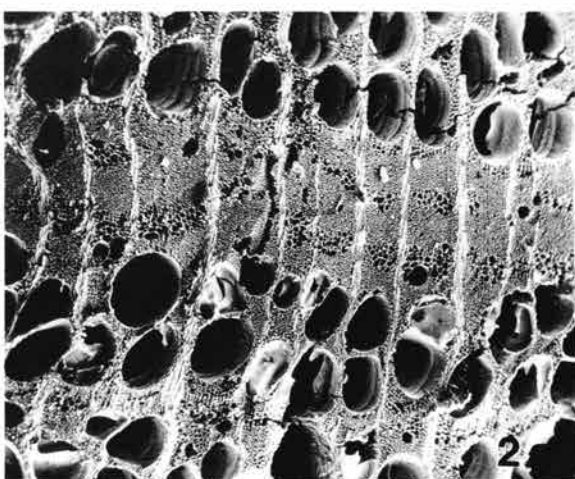
考 察

第3表に示したように、第38号住居址の構造材の樹種構成は、大部分がコナラ属、イヌエンジュ属と単純であった。住居を建造する際、人は樹木の形状と木材の性質から遺跡周辺の林の中の樹木を選び伐採し使用したであろう。したがって、構造材の樹種構成は遺跡周辺の植生と深い関係がある。筆者がこれまでに調査した北海道での縄文、擦文時代などの住居においては、加工特に割裂が容易な針葉樹それにクリ、ヤチダモなどの広葉樹を使用する例が多かった。また、一方、河畔など植生が単純な立地条件をもつ場合に、構造材の樹種構成も単純になる傾向があった。

第38号住居址では切削や割裂など加工が比較的困難なコナラ属、イヌエンジュ属、ニレ属の木材だけが使用されていた。この理由については今のところ花粉分析結果などを参照しなければ、結論的なことは言えない。ただ、それらの樹木がやや冷涼な冷温帯林の構成要素で、一般にやや乾燥する原野、尾根筋またはそれに接する斜面に多く生育すること、そして、それらが陽樹で時に山火再生林の要素になることも留意する必要がある。なお、第6図に示されるように、垂木、貫材などに特に樹種を選んで使用した様子はなかった。

<参考文献>

- 須藤彰司：「本邦産広葉樹林の識別」（識別カードを適用して）『林業試験場研究報告』 第118号 1959
 島地 謙：『木材解剖図説』 地球社 1973
 佐伯 浩：『木材の構造』 日本林業技術協会 1982
 三野紀雄：『炭化した木質遺物の樹種同定』 『ポロナイボ遺跡』 枝幸町教育委員会 1980
 同 上：『炭化した木質遺物の樹種同定』 『おびらたかさご』 小平町教育委員会 1983



1 a, 2 a, 3 a 300 μ

1 b, 2 b, 3 b 100 μ

1 a コナラ属 (Quercus sp) 木口面

1 b コナラ属 (Quercus sp) 板目面

2 a ニレ属 (Ulmus sp) "

2 b ニレ属 (Ulmus sp) "

3 a イヌエンジュ属 (Maackia sp) "

3 b イヌエンジュ属 (Maackia sp) "

写 真 图 版



中棚遺跡より望む ▲発掘調査前 ▼発掘調査中





遺跡空撮 ▲FP上面 ▼FP下面





第 3 号住居址



第 3 号住居址炉址



第 3 号住居址遺物出土狀態



第 3 号住居址遺物出土狀態

图版 4



第38号住居址



第38号住居址炭化材出土状态



第39号住居址

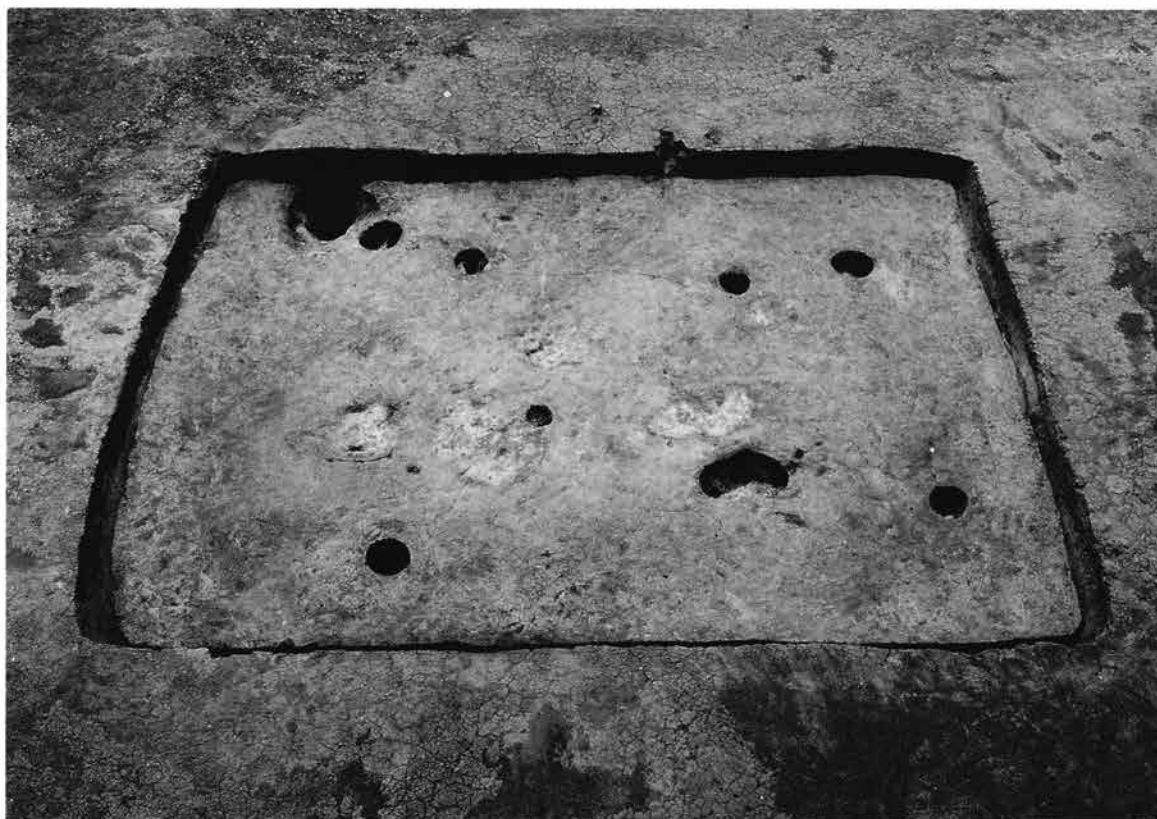


第39号住居址遺物出土状態



第39号住居址遺物出土状態

図版 6



第40号住居址



第40号住居址遺物出土状態



第40号住居址掘り方



第41号住居址

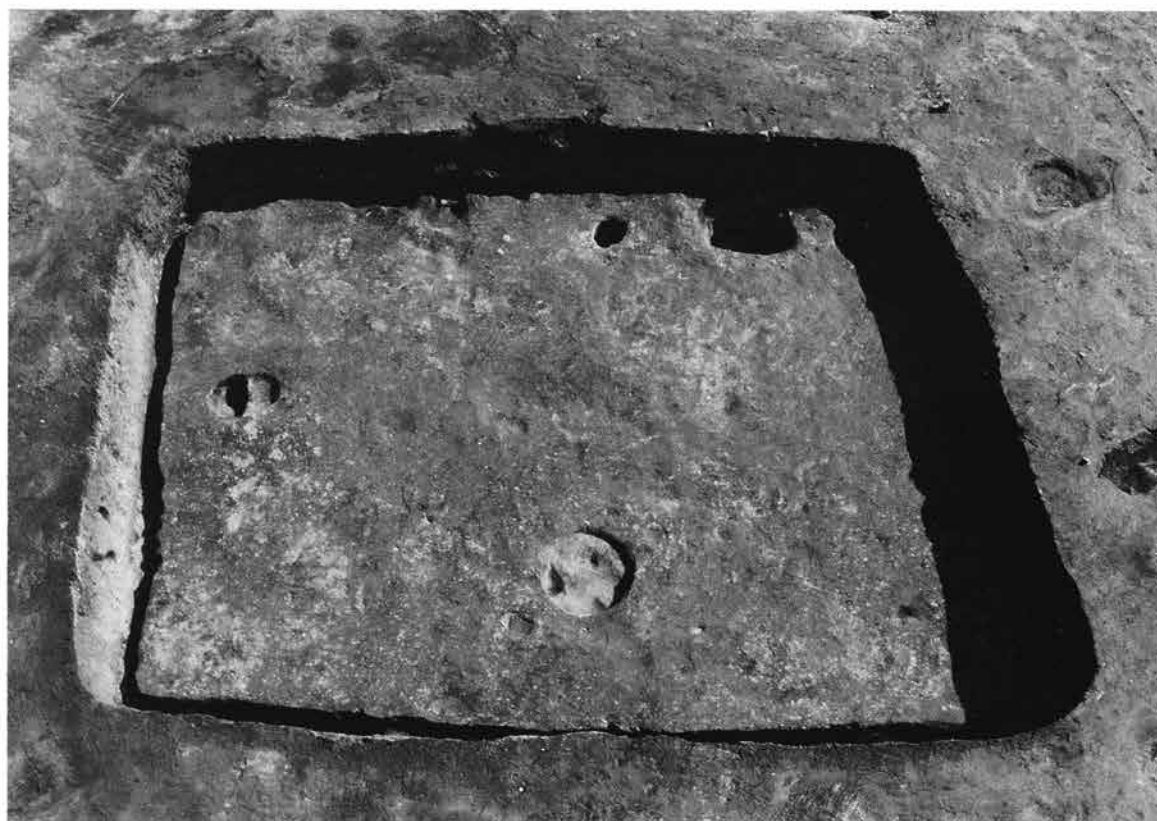


第41号住居址遺物出土状態



第41号住居址掘り方

図版 8



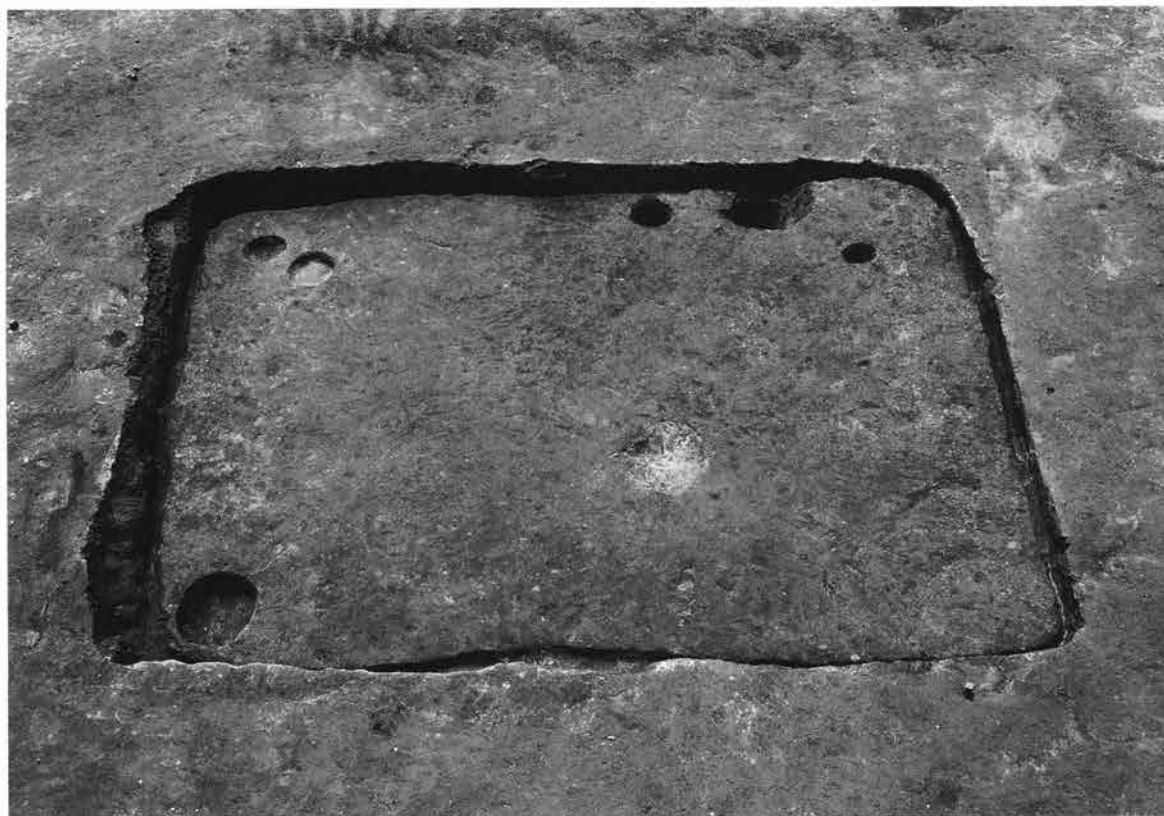
第44号住居址



第44号住居址遺物出土状態



第44号住居址掘り方



第46号住居址



第46号住居址遺物出土状態



第46号住居址掘り方



第47号住居址



第48号住居址



第48号住居址遺物出土状態



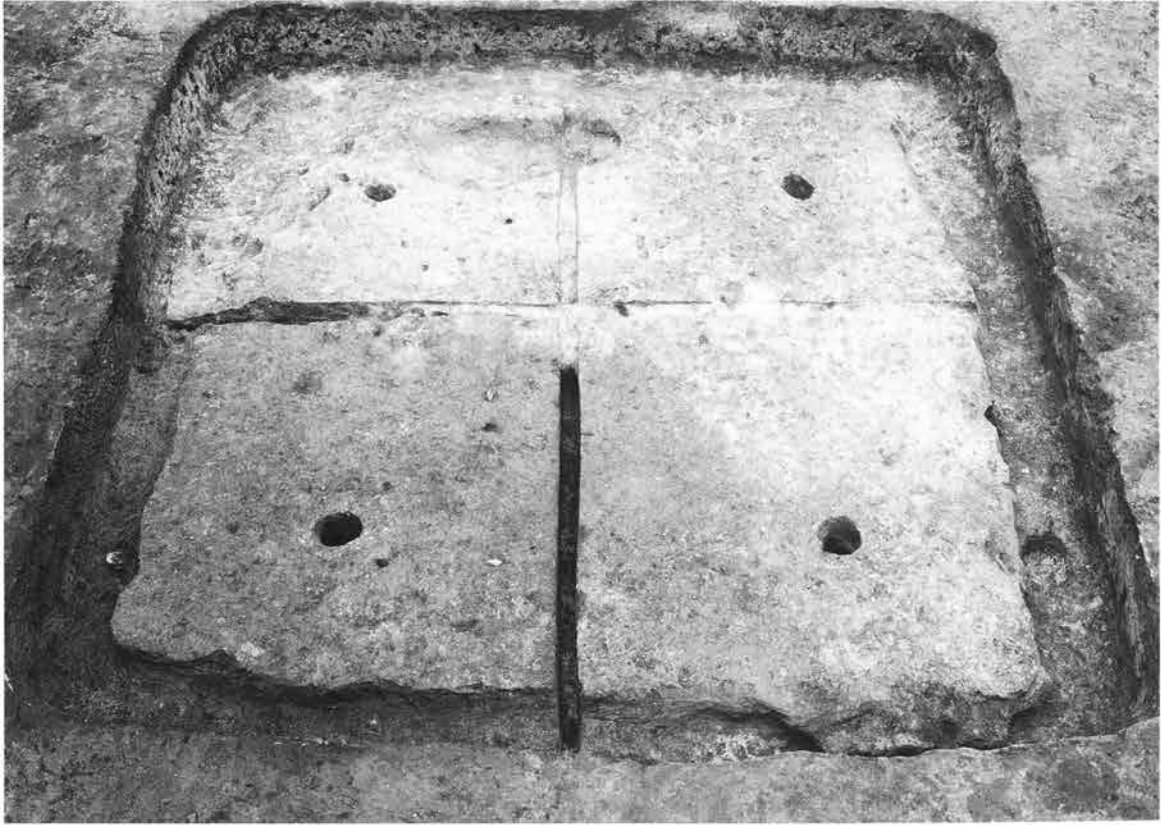
第48号住居址掘り方



第49号住居址



第49号住居址遺物・炭化材出土状態



第49号住居址掘り方



第49号住居址遺物出土状態

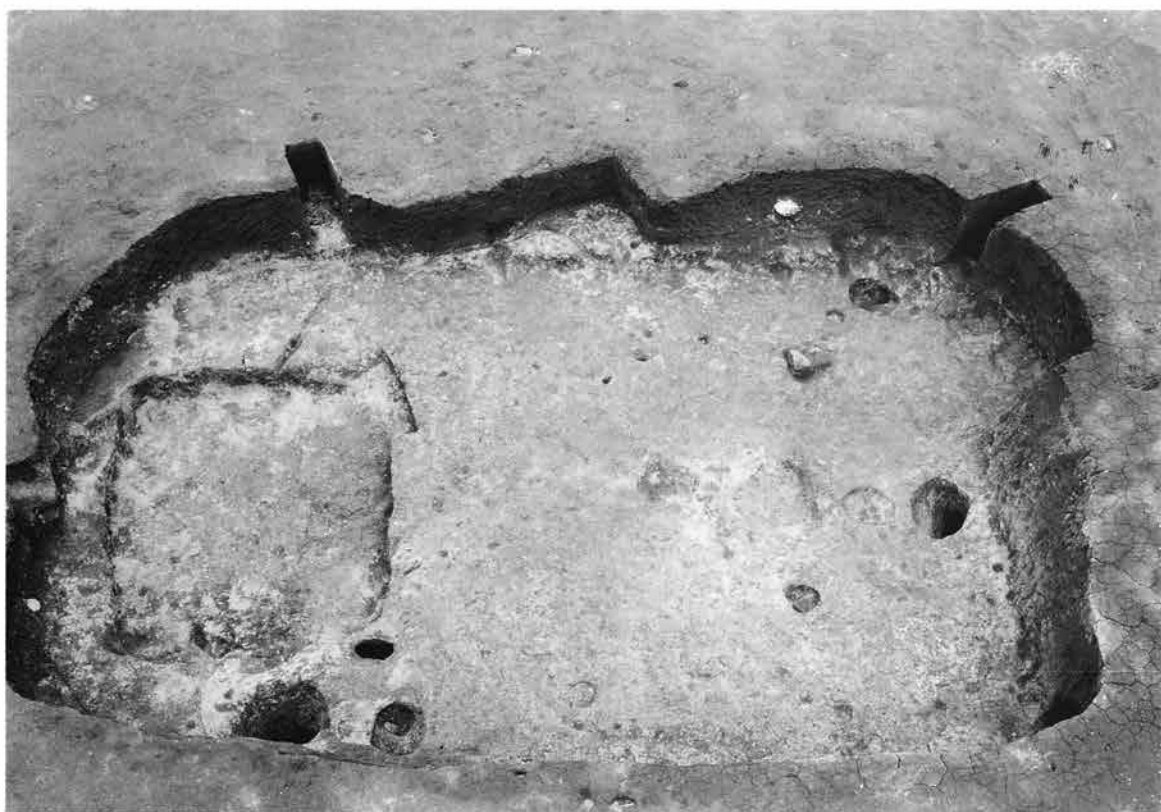


第49号住居址遺物出土状態



第49号住居址遺物出土状態

图版14



第50号住居址



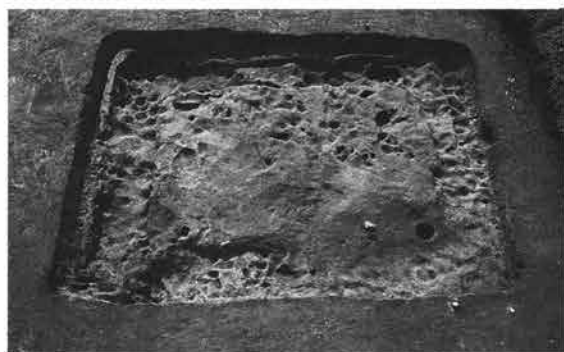
第51号住居址



第52号住居址



第52号住居址遺物出土状態



第52号住居址掘り方



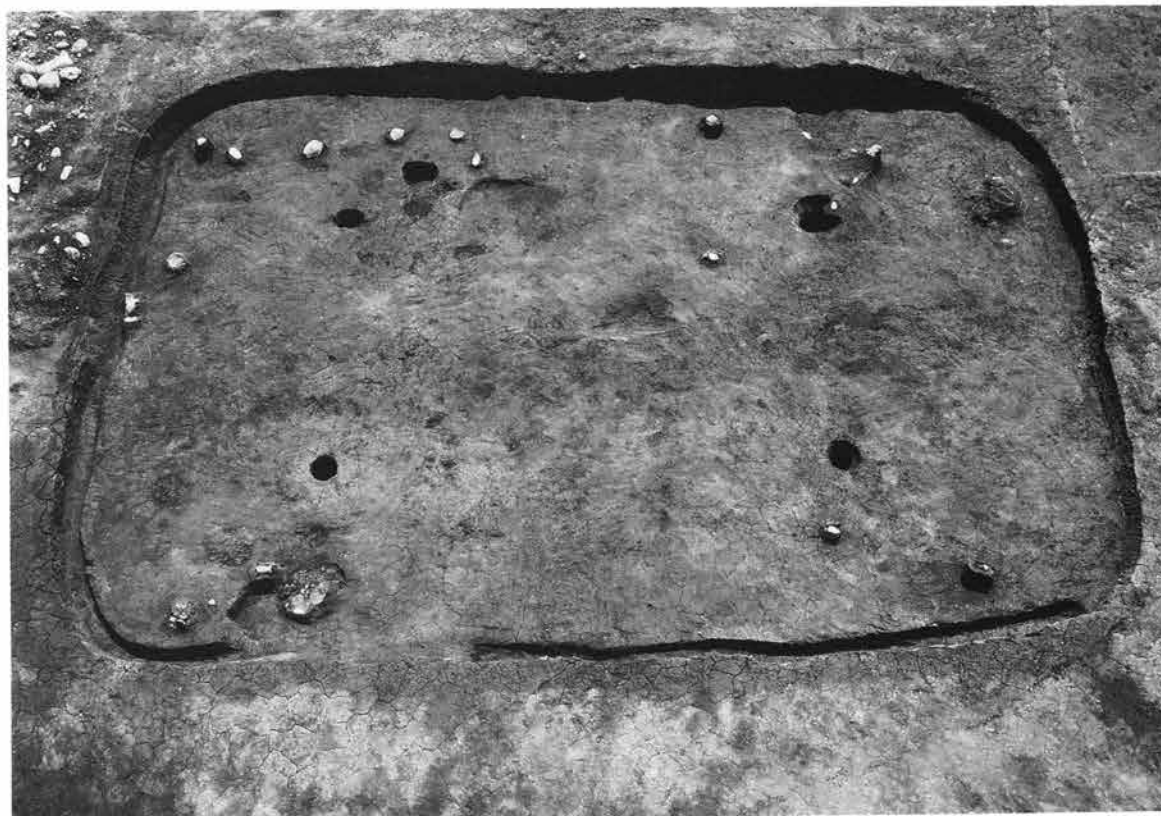
第54号住居址



第54号住居址掘り方



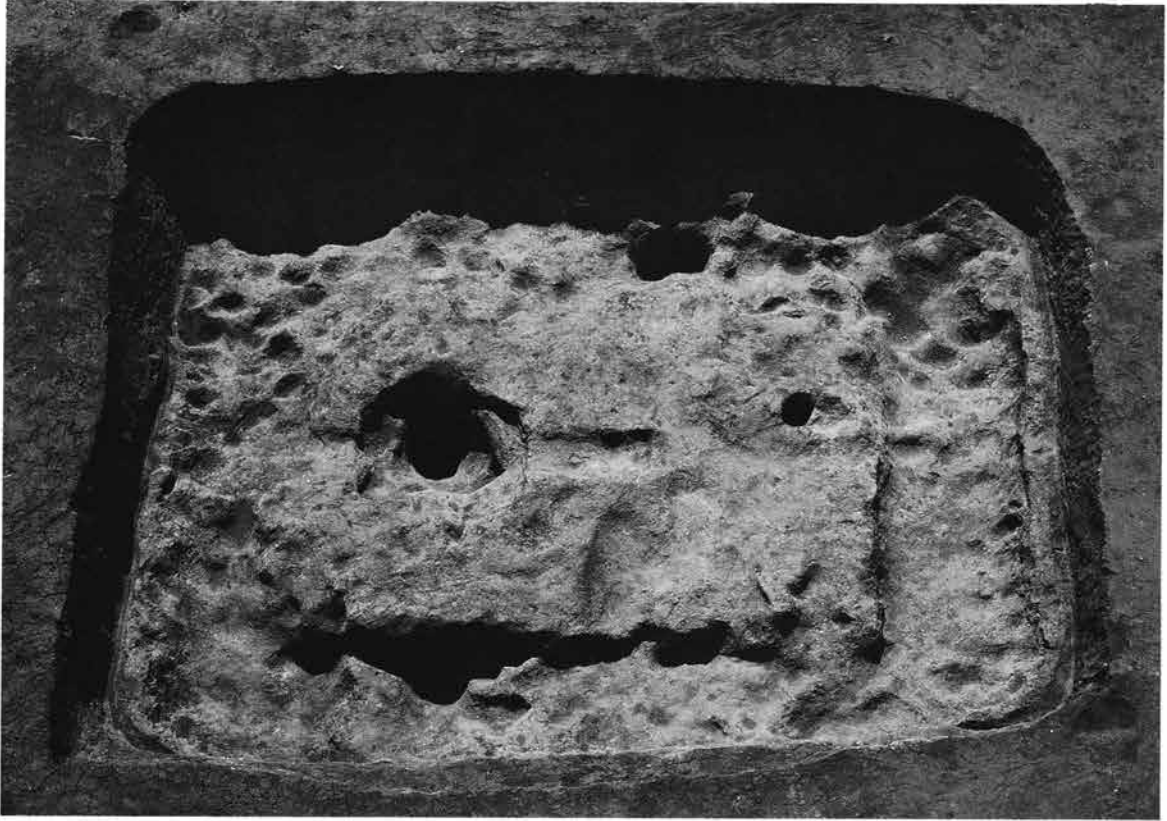
第54号住居址遺物出土状態



第56号住居址



第57号住居址



第57号住居址掘り方



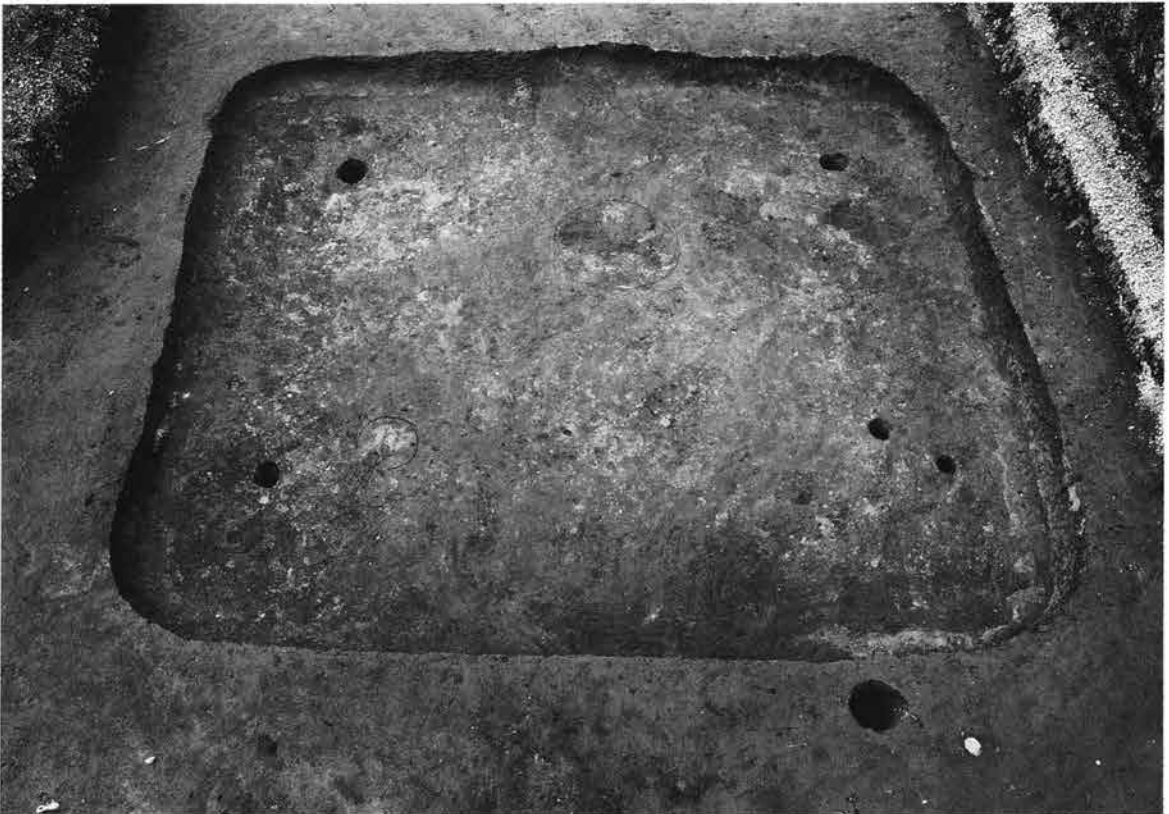
第57号住居址遺物出土状態



第57号住居址遺物出土状態



第58号住居址



第59号住居址



第59号住居址、遺物・炭化材出土状態



第59号住居址掘り方



第59号住居址炉址



第59号住居址遺物出土状態



第59号住居址遺物出土状態



第61号住居址



第61号住居址遺物・炭化材出土状態



第61号住居址掘り方



第61号住居址遺物出土状態



第61号住居址貯蔵穴



第61号住居址遺物出土状態



第62号住居址



第62号住居址遺物・炭化材出土状態



第62号住居址掘り方



第62号住居址遺物出土状態



第62号住居址遺物出土状態



第71号住居址

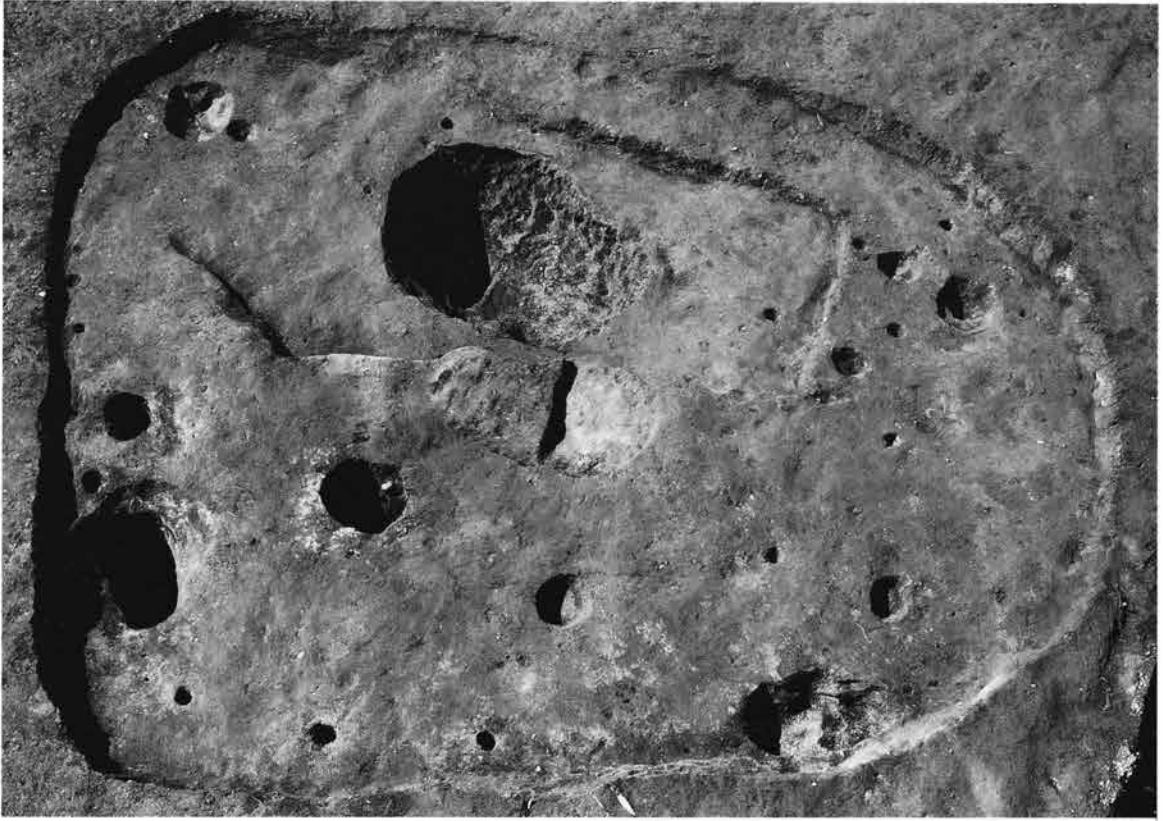


第71号住居址掘り方



第71号住居址遺物出土状態

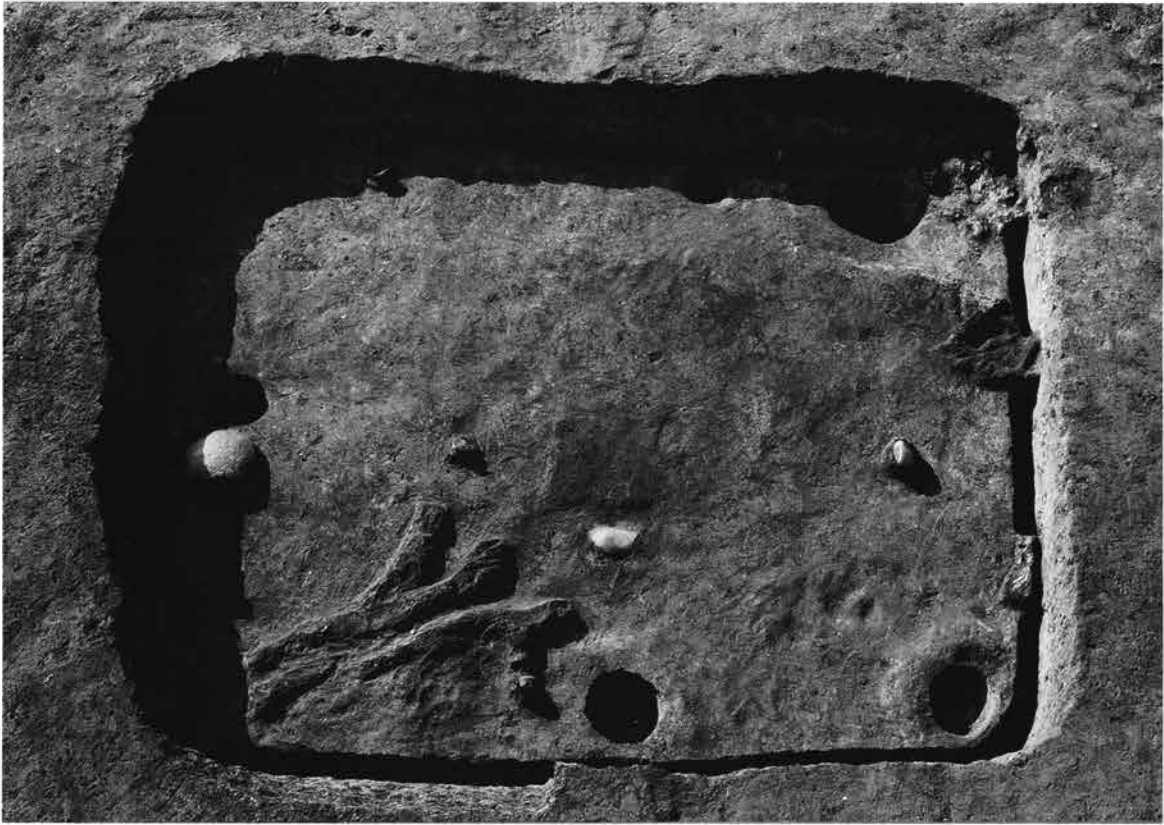
図版26



第76号住居址



第76号住居址掘り方



第87号住居址



第87号住居址掘り方



第87号住居址遺物出土状態



第93号住居址



第101号住居址



第105号住居址



第108号住居址



第112号住居址



第112号住居址炭化材出土状态



第112号住居址炭化材出土状态



第112号住居址炭化材出土状态



第119号住居址



第119号住居址炉址



第119号住居址遺物出土狀態



第123号住居址



第123号住居址炭化材出土状态



第123号住居址炭化材出土状态



第123号住居址遺物出土状态



第123号住居址遺物出土状态



第125号住居址



第125号住居址遺物出土狀態



第125号住居址遺物出土狀態



第125号住居址遺物出土狀態



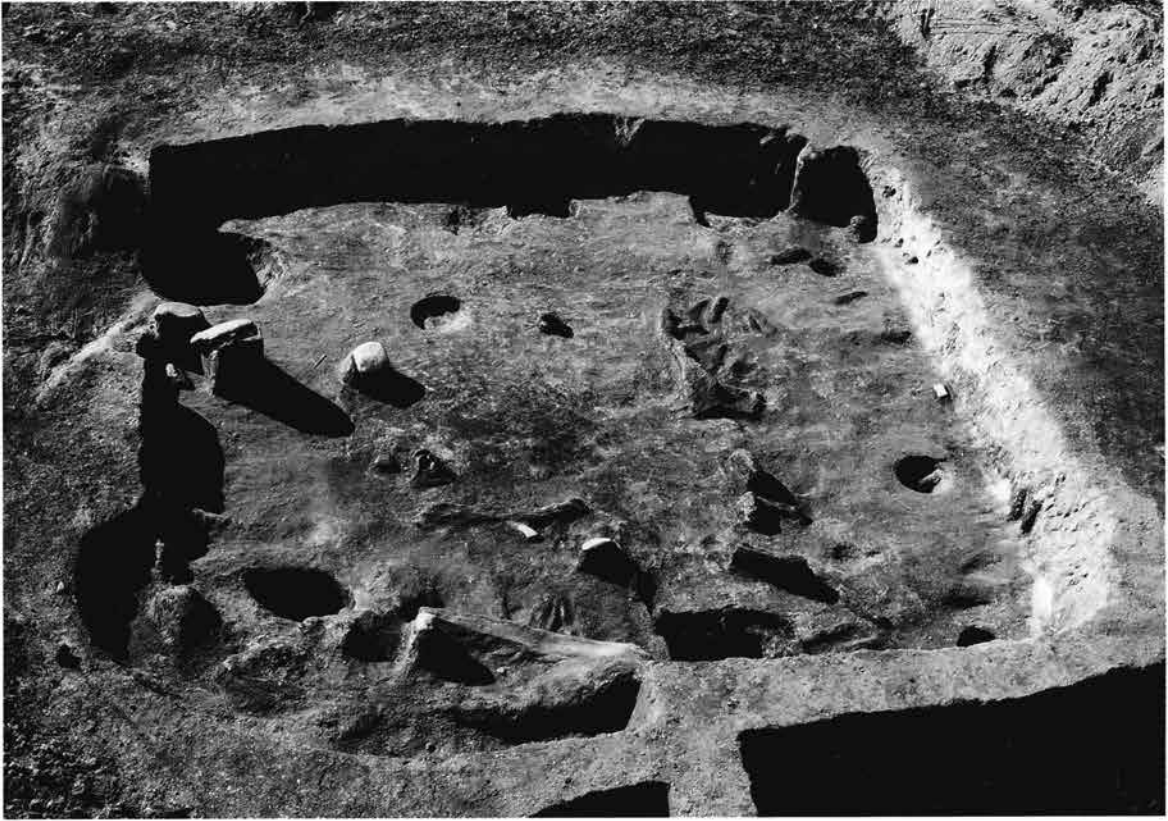
第125号住居址遺物出土狀態



第138号住居址



第148号住居址



第148号住居址炭化材出土状态



第148号住居址炭化材出土状态



第148号住居址炭化材出土状态



第28号住居址



第28号住居址遺物出土状態



第28号住居址掘り方



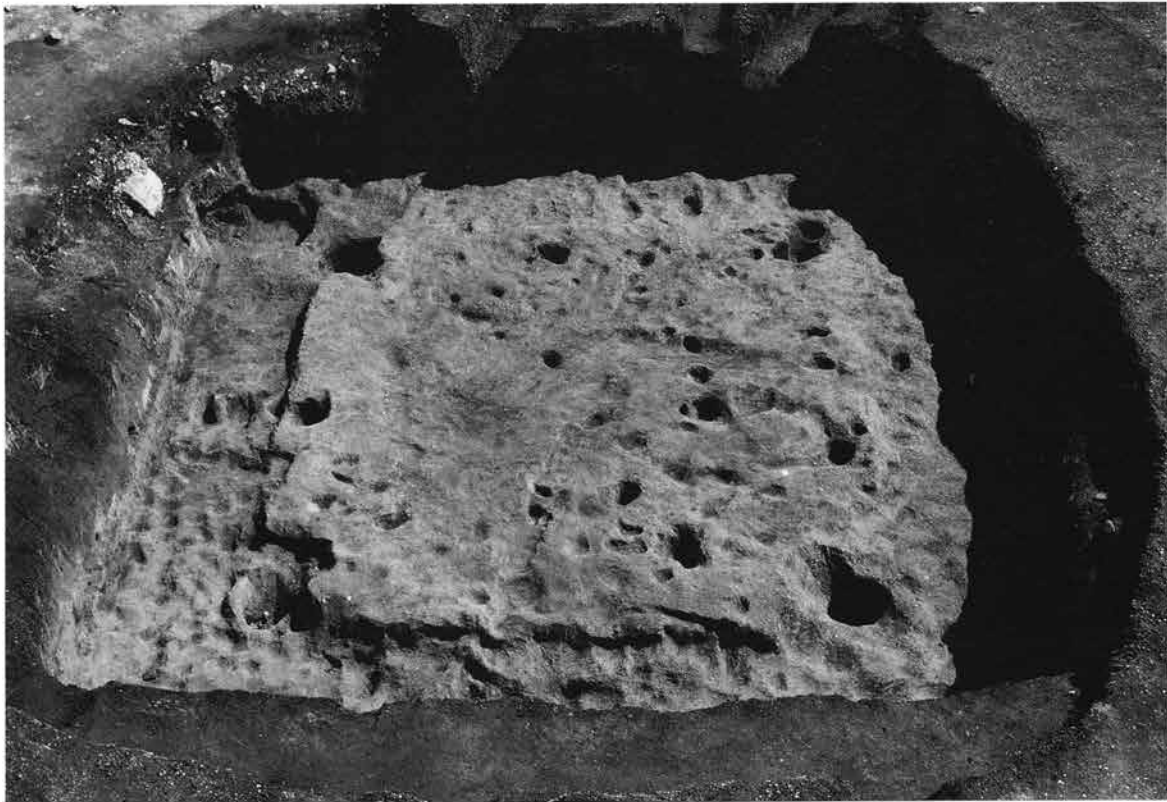
第28号住居址カマド



第28号住居址カマド



第42号住居址



第42号住居址掘り方



第42号住居址カマド掘り方



第42号住居址カマド掘り方



第42号住居址カマド遺物出土状態



第42号住居址遺物出土状態



第43号住居址



第43号住居址掘り方



第43号住居址カマド



第45号住居址



第45号住居址掘り方



第45号住居址カマド



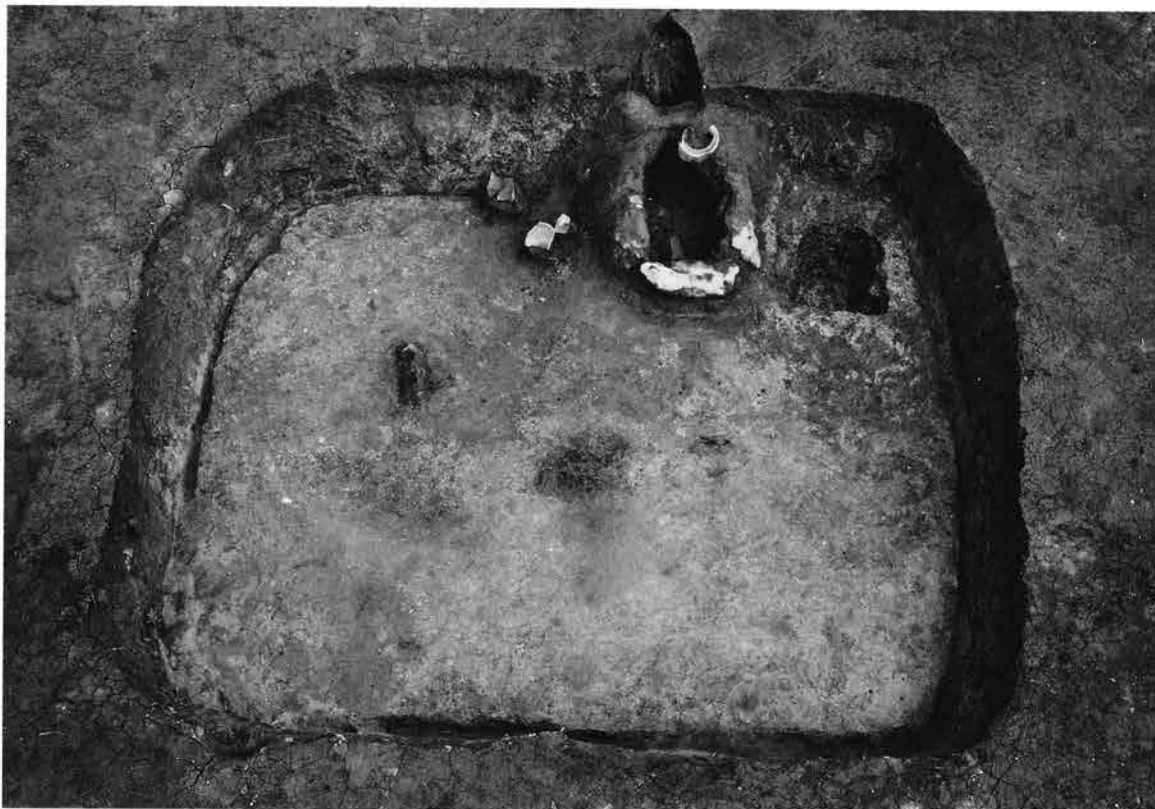
第45号住居址遺物出土状態



第45号住居址遺物出土状態



第45号住居址遺物出土状態



第55号住居址



第55号住居址掘り方



第55号住居址カマド



第60号住居址



第60号住居址掘り方



第60号住居址カマド



第120号住居址



第120号住居址掘り方



第120号住居址カマド



第120号住居址遺物出土状態



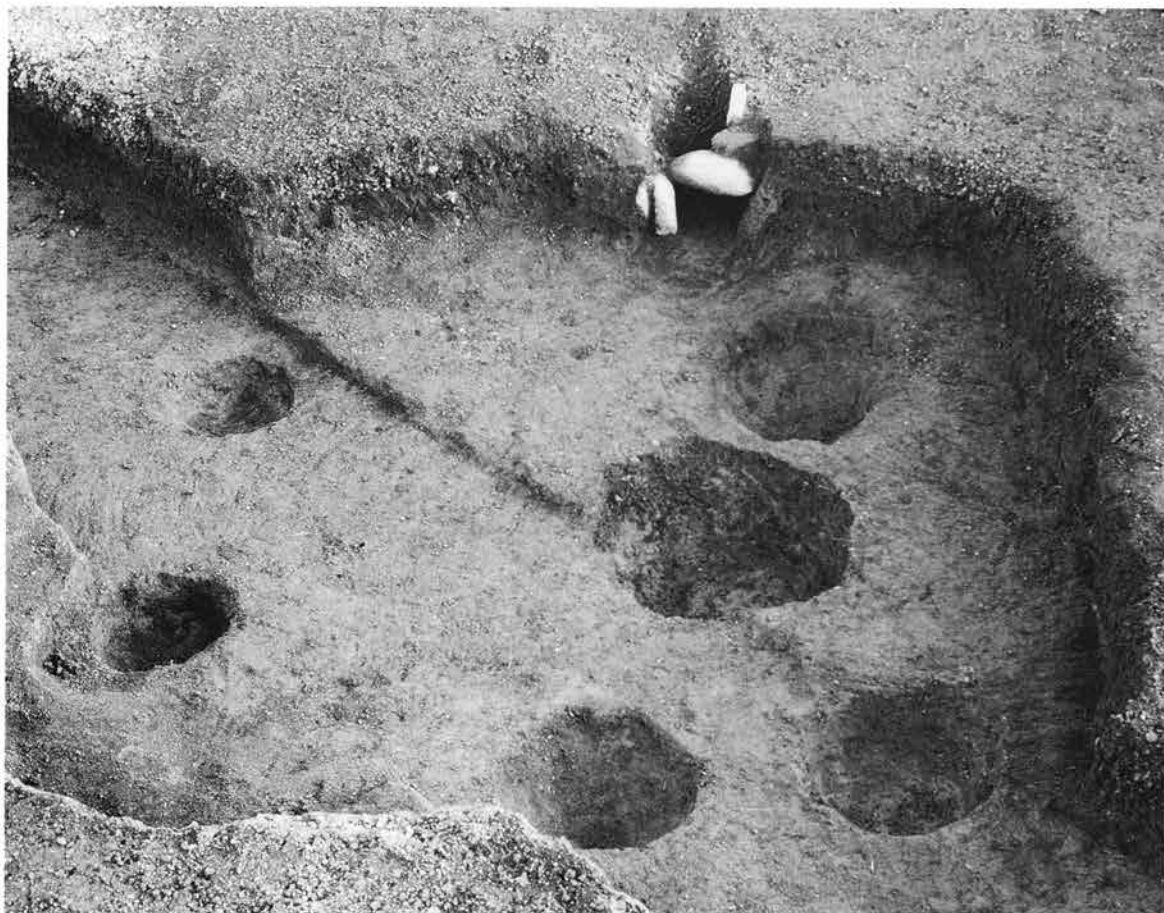
第120号住居址床下遺物出土状態



第130号住居址



第130号住居址カマド



第1号住居址



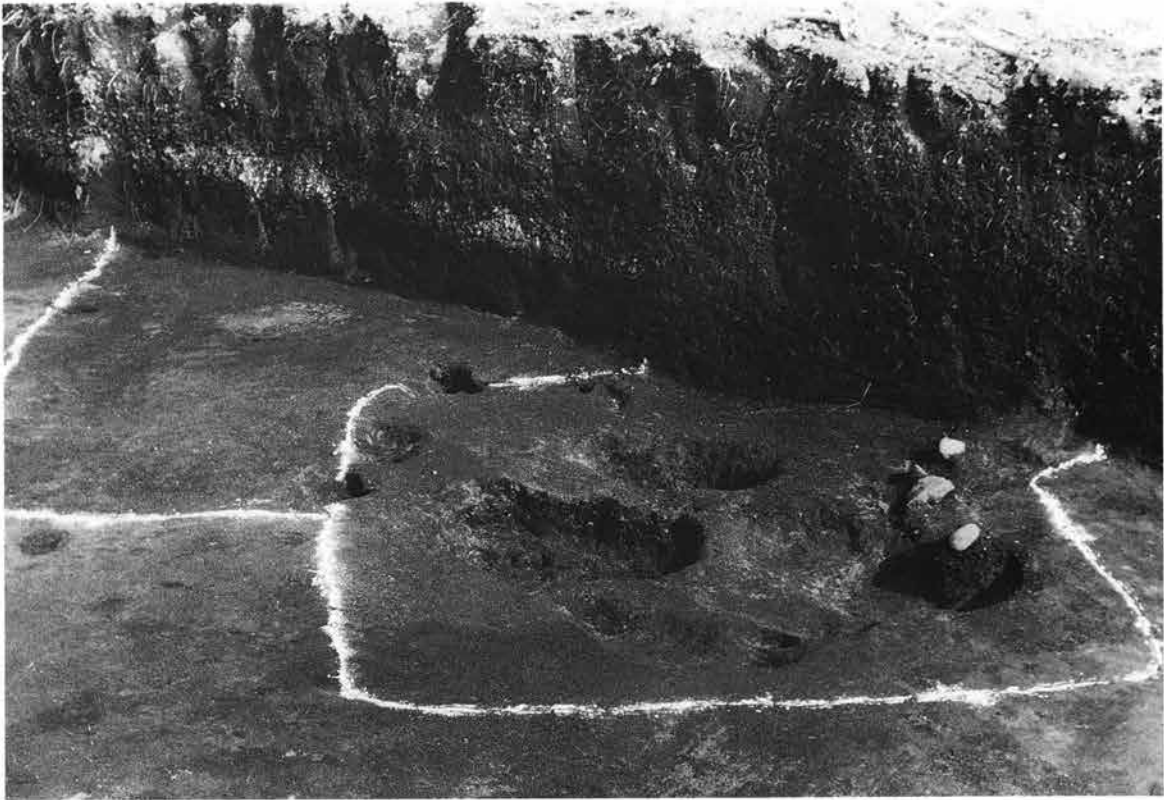
第1号住居址遺物出土状態



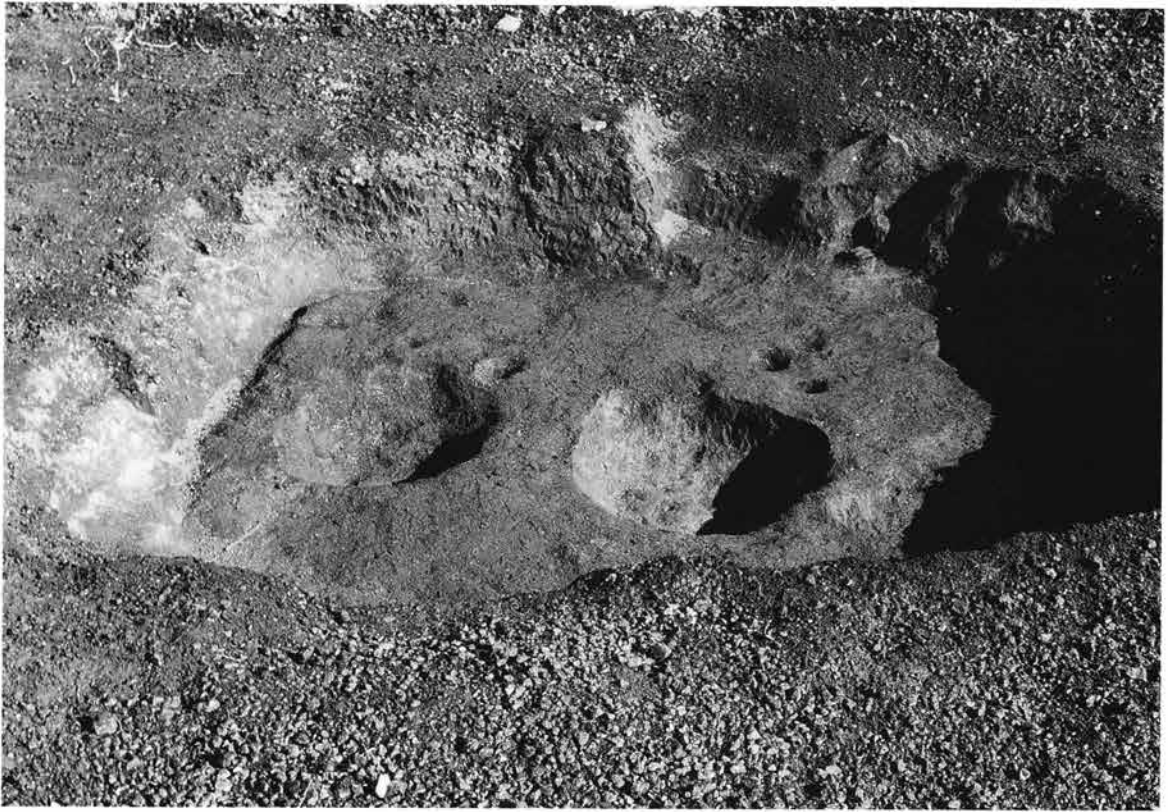
第1号住居址カマド



第5号住居址



第12号住居址



第18号住居址



第19号住居址



第20号住居址



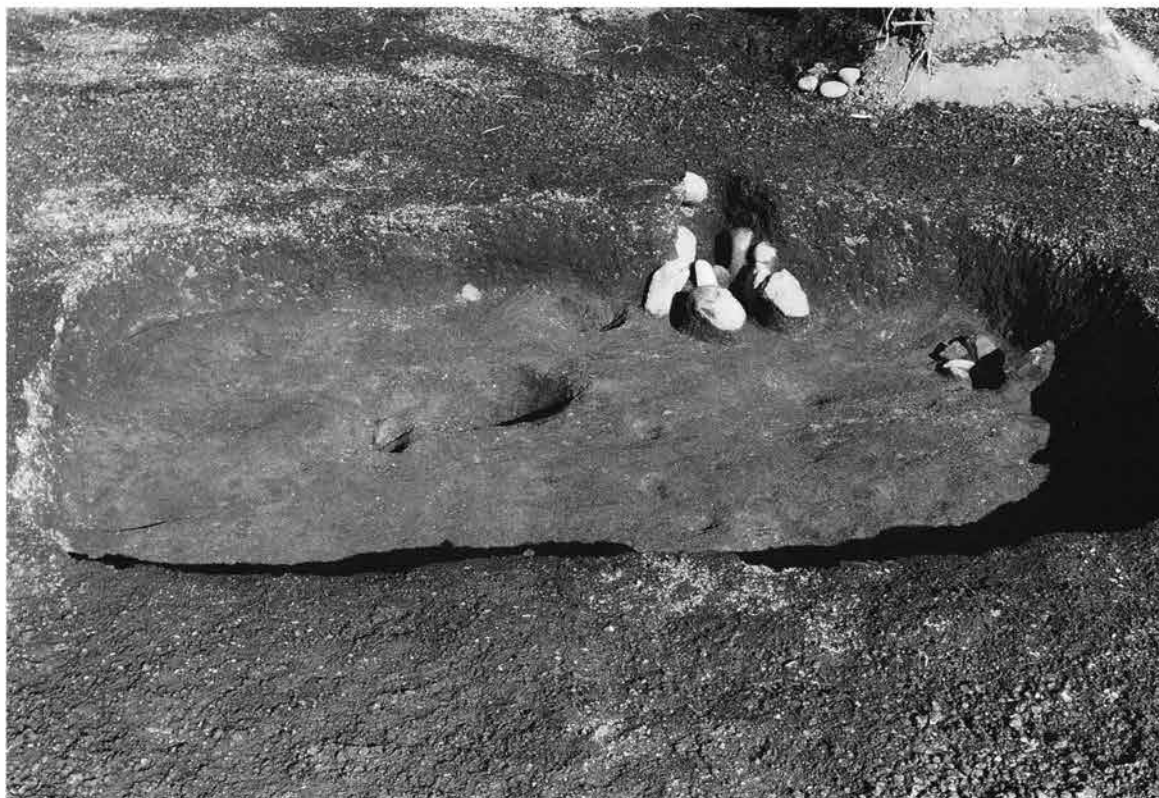
第20号住居址カマド



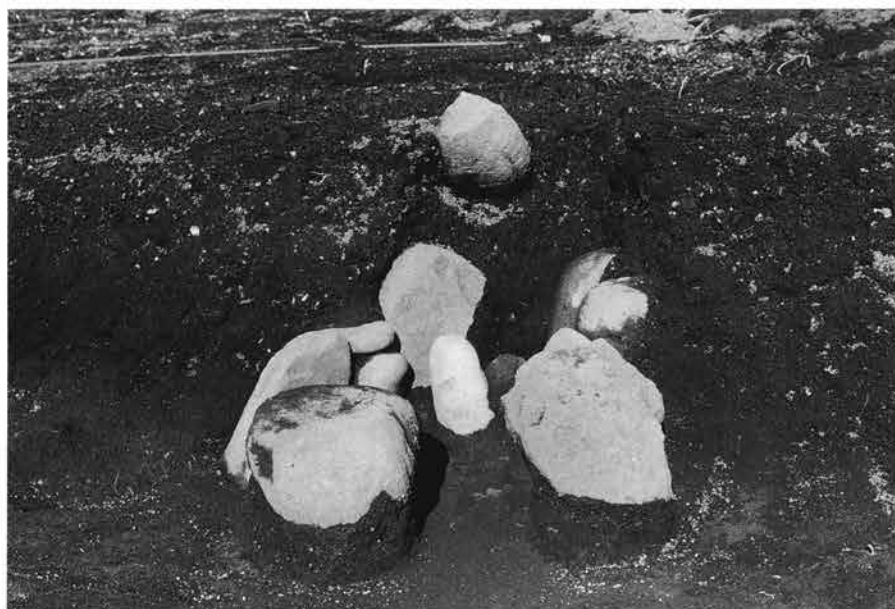
第21号住居址



第21号・24号住居址重複状況



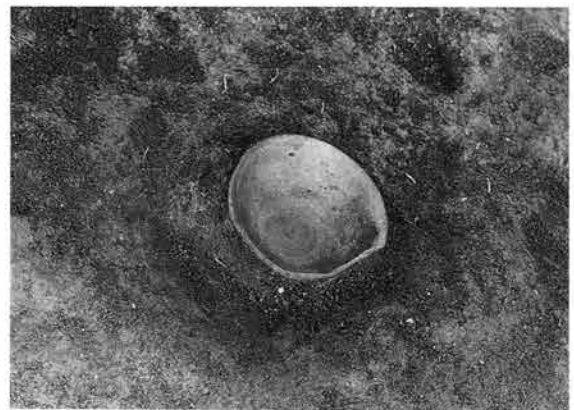
第22号住居址



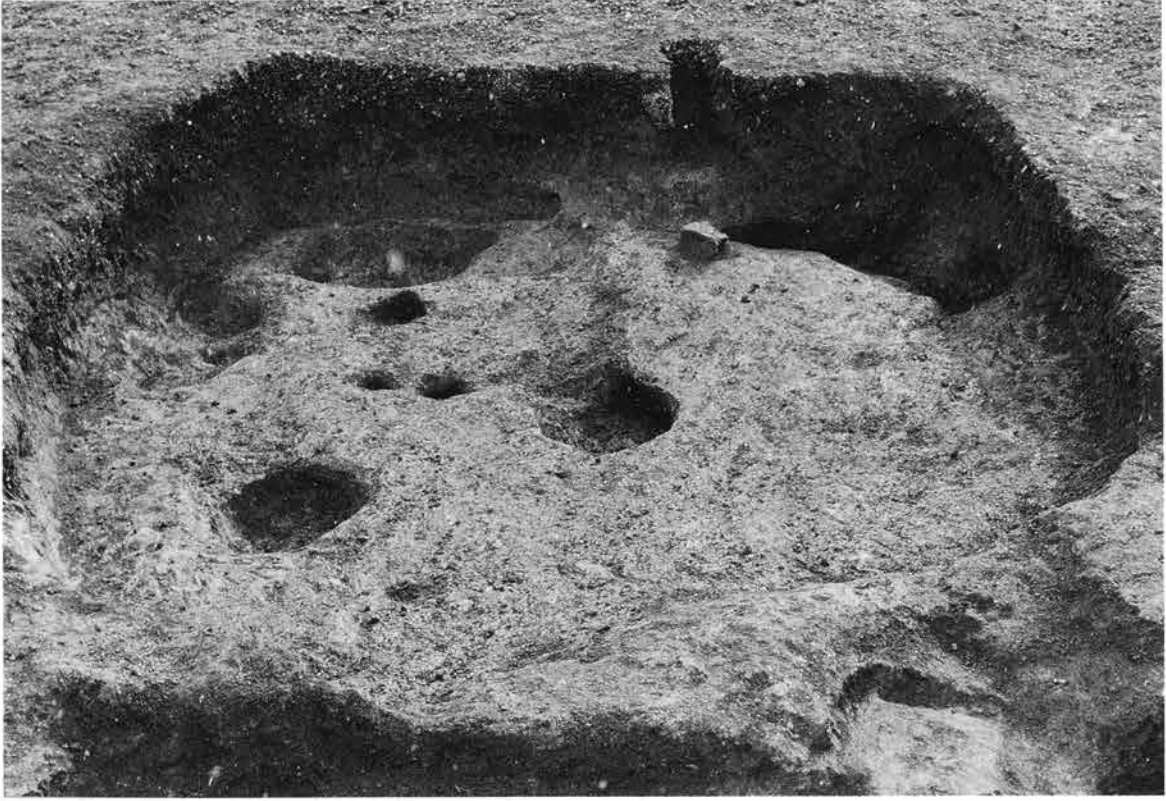
第22号住居址カマド



第23号住居址



第23号住居址遺物出土状態



第24号住居址



第25号住居址



第25号住居址遺物出土状態



第25号住居址掘り方



第25号住居址カマド



第25号住居址カマド遺物出土状態



第25号住居址カマド掘り方



第26号住居址



第26号住居址遺物出土状態



第26号住居址掘り方



第26号住居址カマド



第26号住居址カマド掘り方



第27号住居址



第27号住居址遺物出土状態



第27号住居址掘り方



第27号住居址カマド



第27号住居址カマド掘り方



第29号住居址



第29号住居址掘り方



第29号住居址カマド



第29号住居址



第30号住居址



第30号住居址遺物出土状態



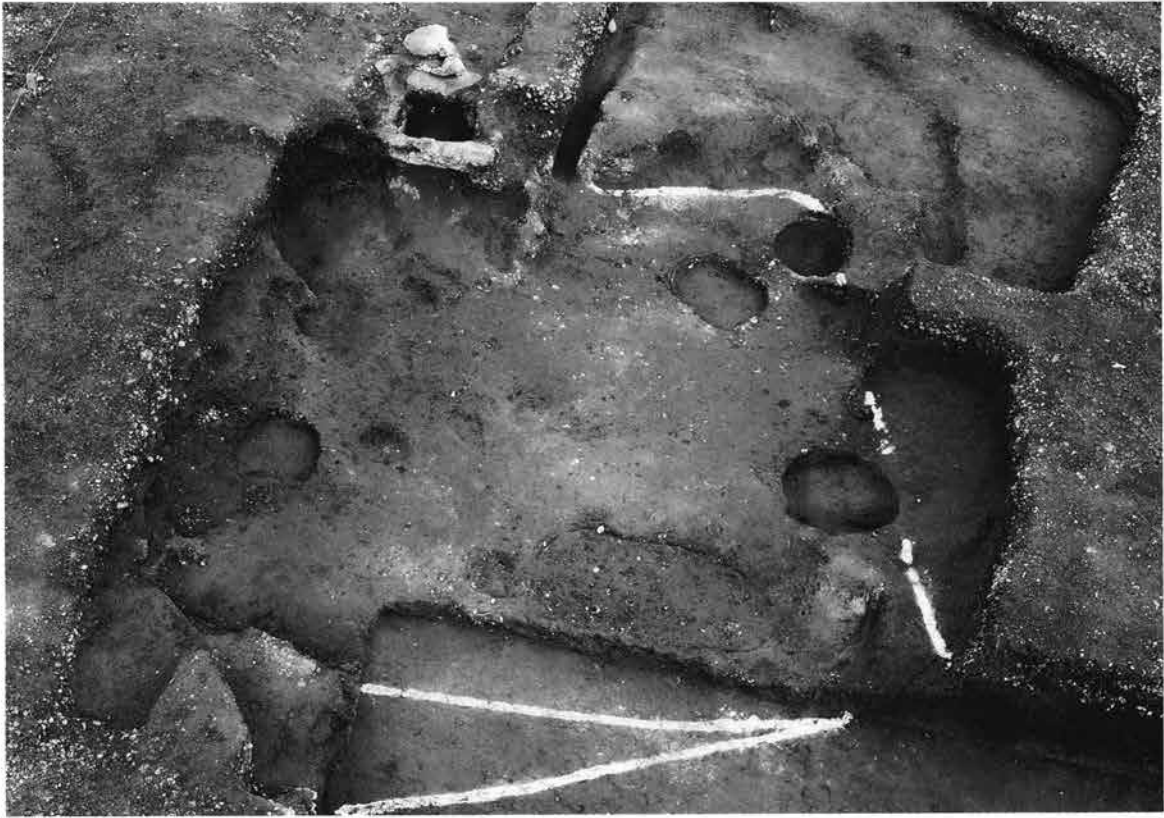
第30号住居址カマド



第30号住居址カマド掘り方



第30号住居址遺物出土状態



第31号住居址



第31号住居址掘り方



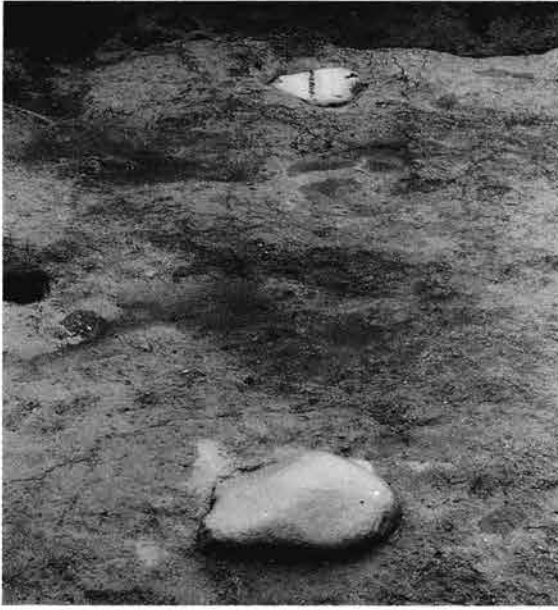
第31号住居址カマド



第31号住居址カマドソデ石組状態



第31号住居址カマド内遺物



第32号住居址礎石



第32号住居址礎石



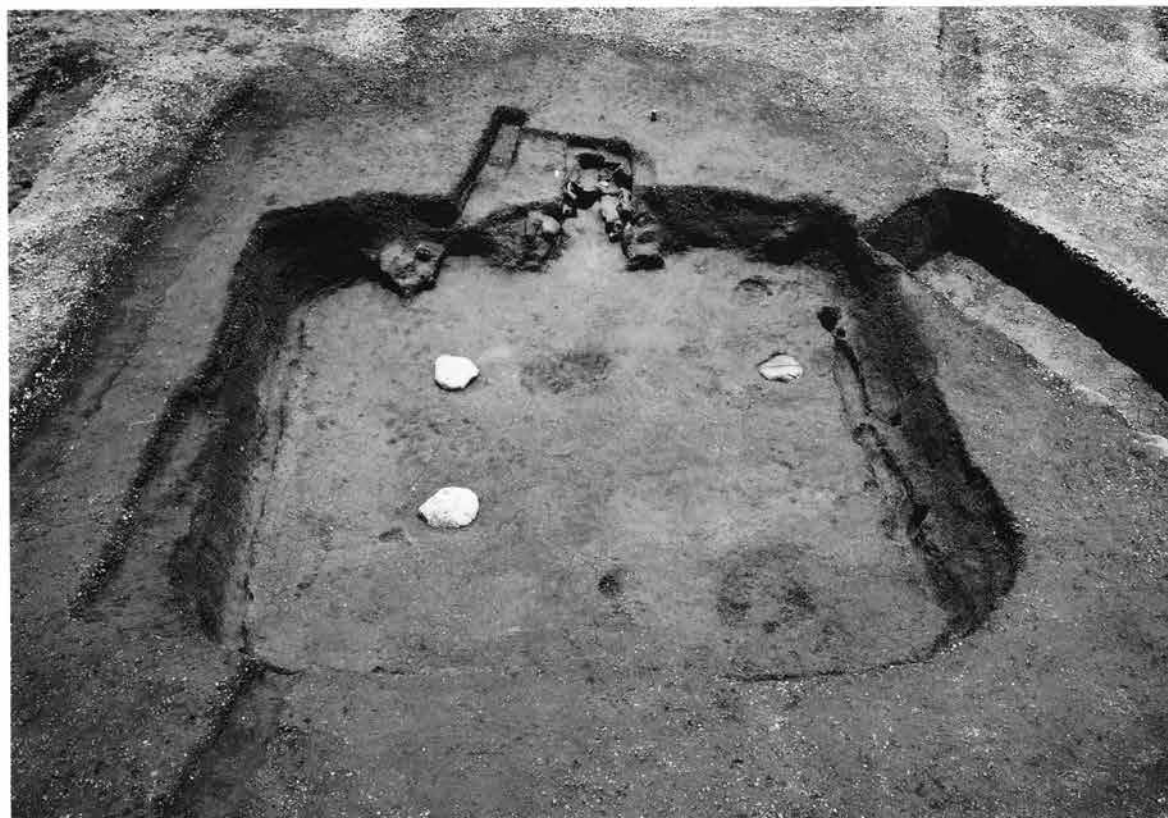
第32号住居址カマド



第32号住居址遺物出土状態



第32号住居址遺物出土状態



第32号住居址



第32号住居址掘り方



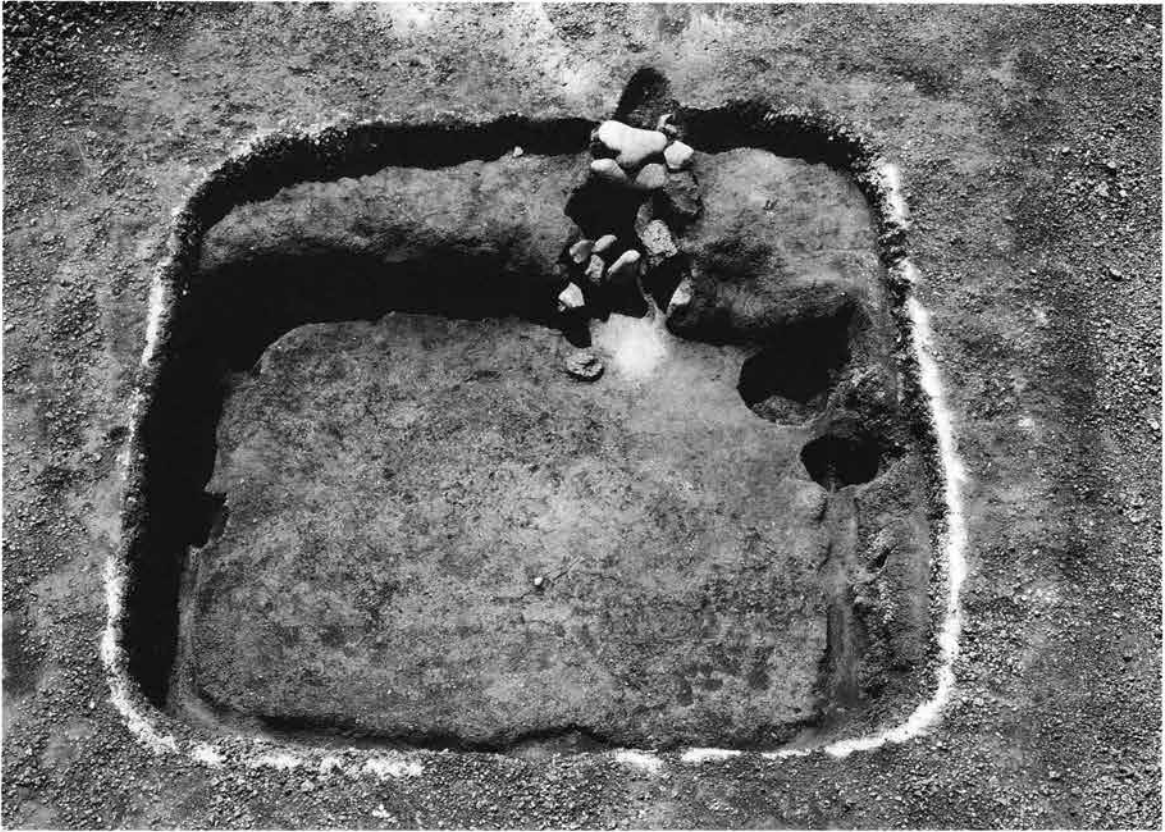
第33号住居址



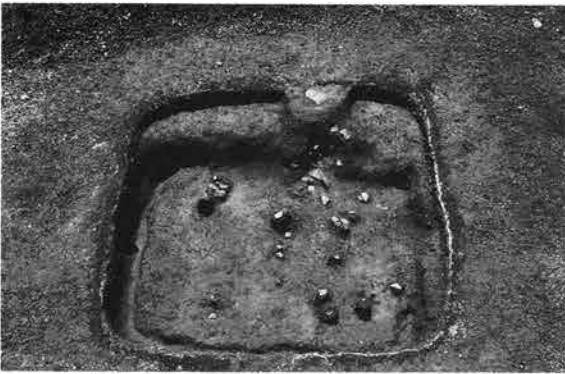
第33号住居址掘り方



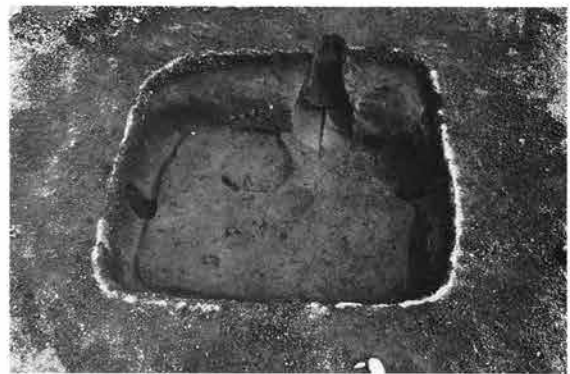
第33号住居址遺物出土状態



第34号住居址



第34号住居址遺物出土状態



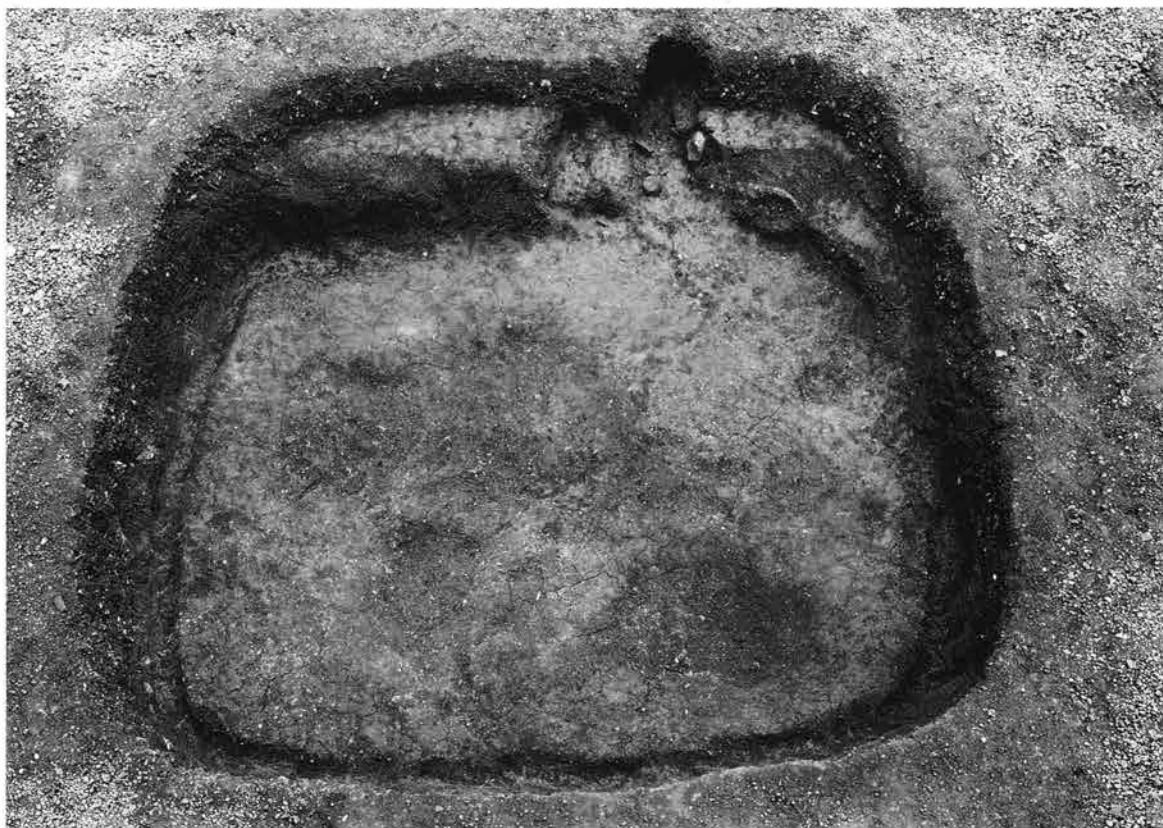
第34号住居址掘り方



第34号住居址カマド



第34号住居址カマド



第35号住居址



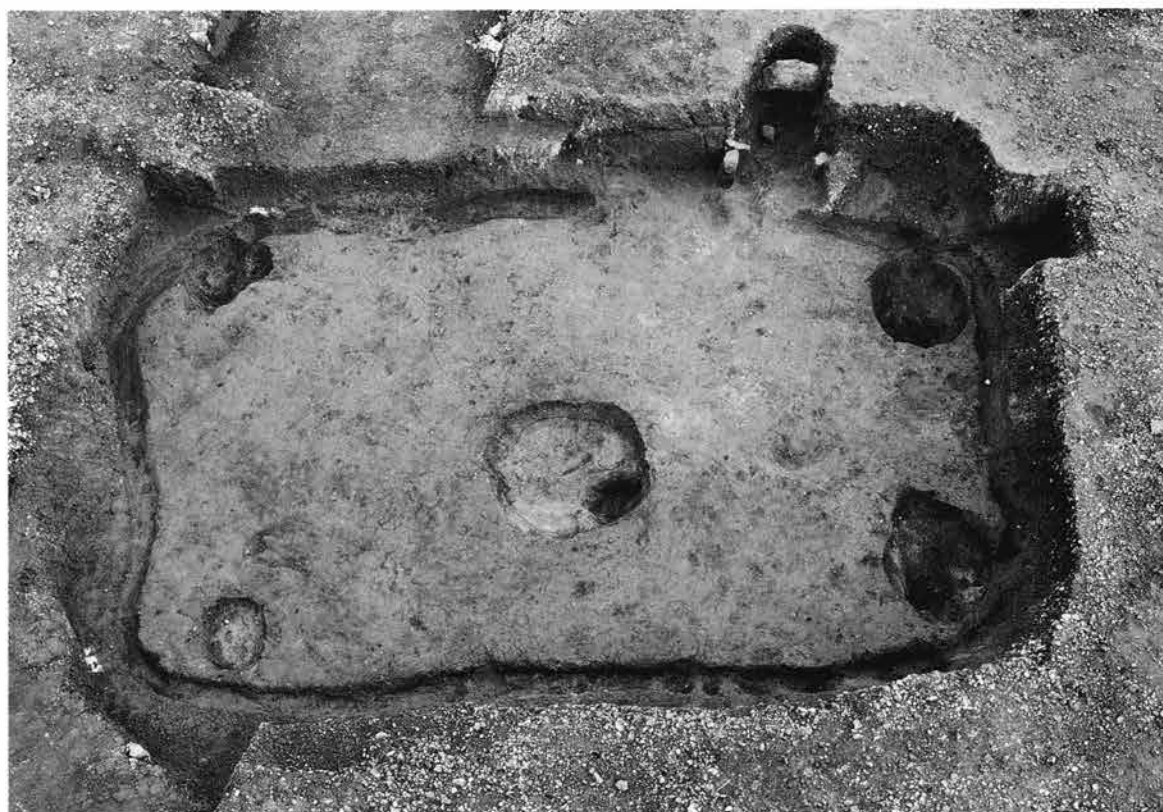
第35号住居址掘り方



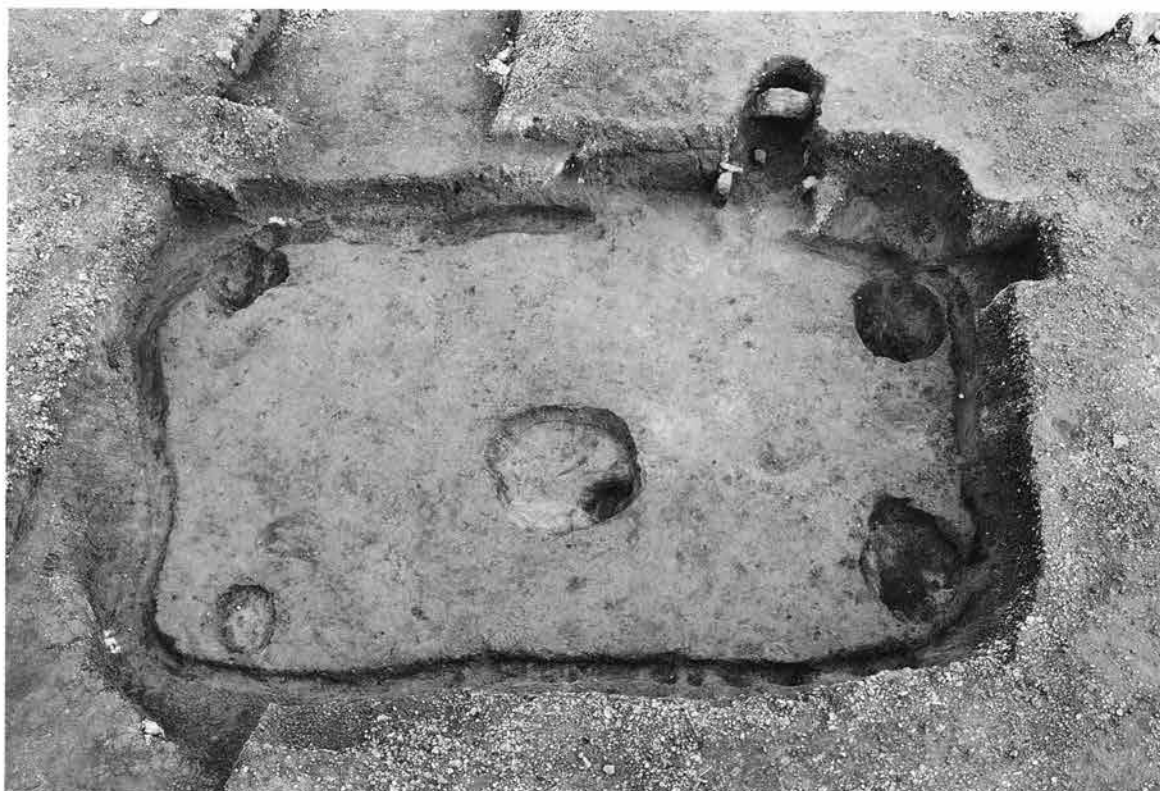
第35号住居址カマド



第36号住居址



第37号住居址



第37号住居址



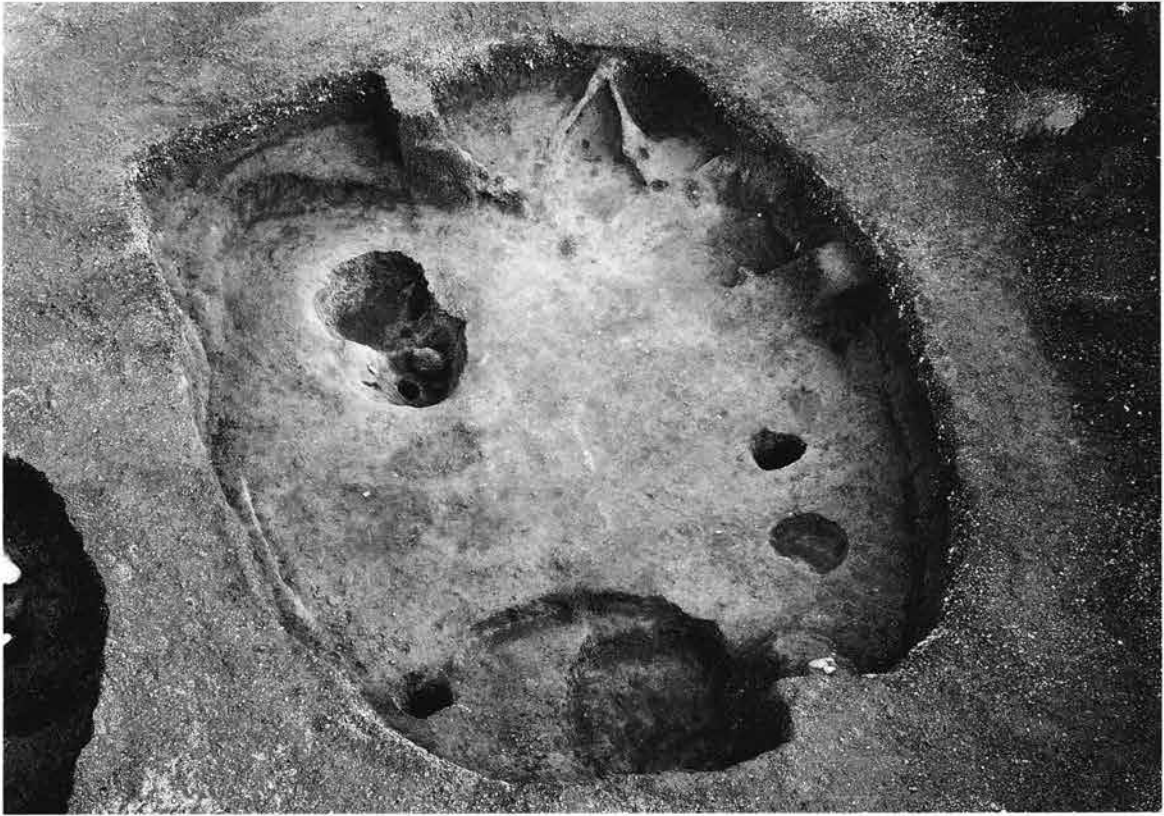
第37号住居址カマド遺物出土状態



第37号住居址カマド



第37号住居址掘り方



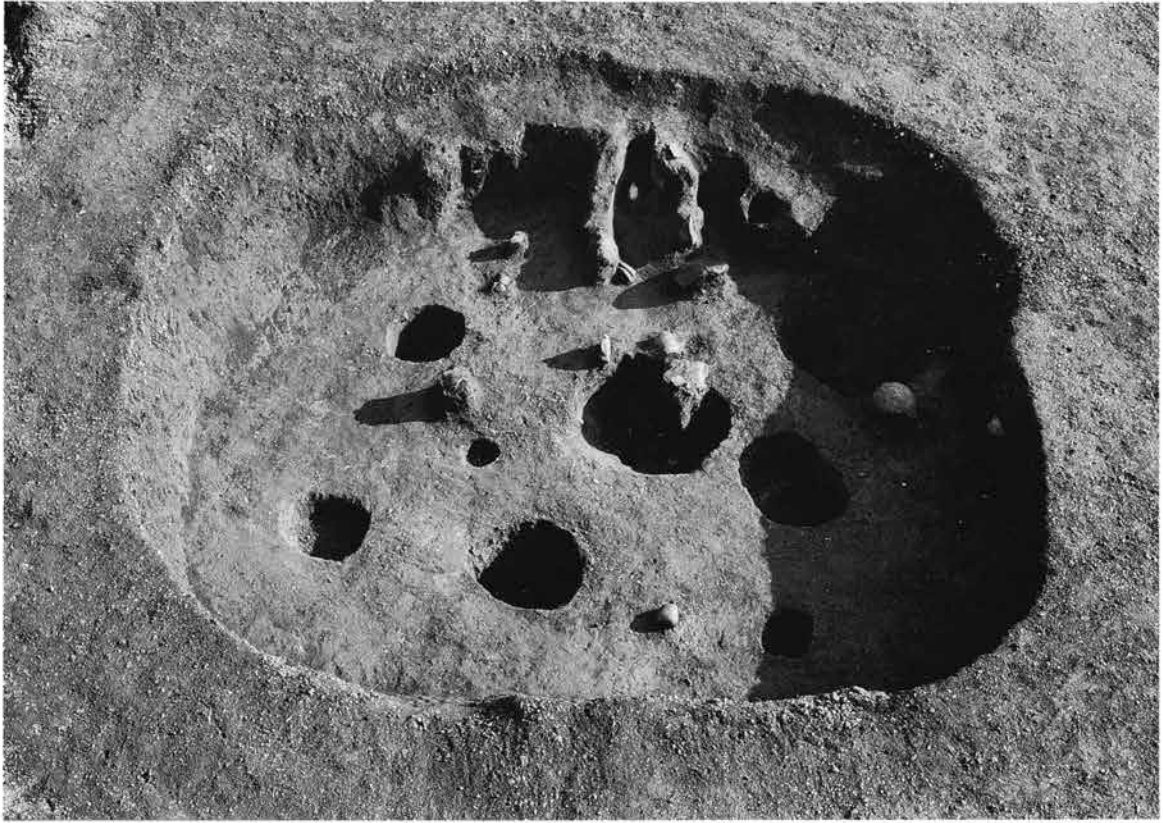
第95号住居址



第95号住居址掘り方



第95号住居址カマド



第96号住居址



第96号住居址掘り方



第96号住居址カマド掘り方



第96号住居址カマド



第106号住居址



第106号住居址カマド



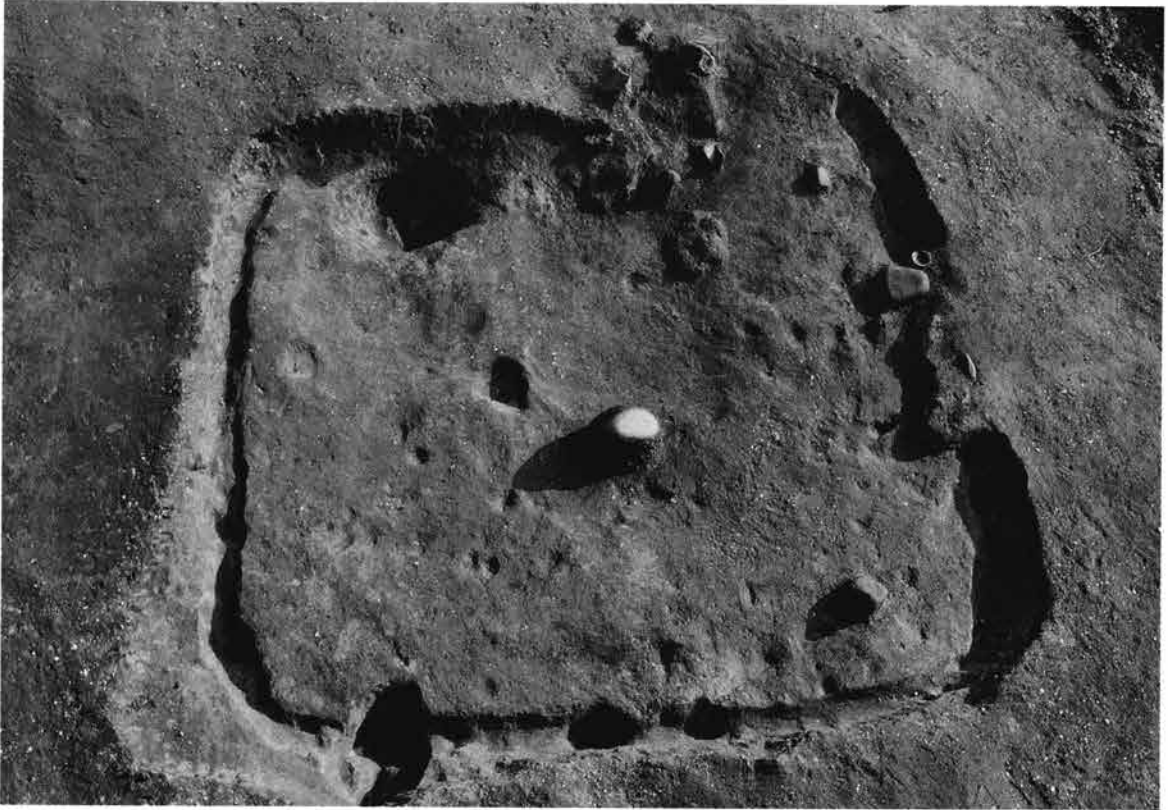
第106号住居址遺物出土状態



第106号住居址カマド



第106号住居址遺物出土状態



第122号住居址



第122号住居址掘り方



第122号住居址カマド



第1号竖穴状遺構全景



第2号竖穴状遺構全景



第4号竖穴状遺構全景



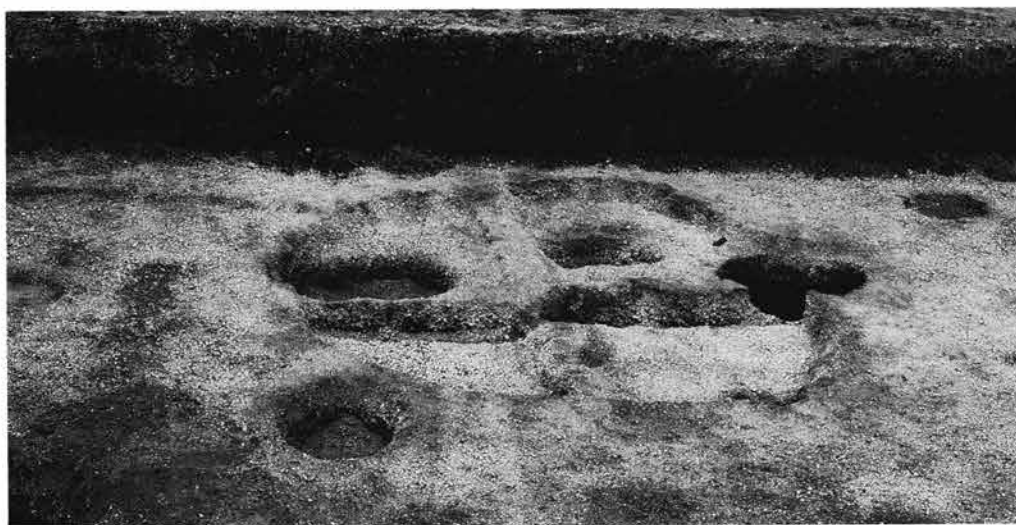
第5号竖穴状遺構全景



第6号竖穴状遺構全景



第28A号竖穴状遺構全景



DE土抗



第22号土抗



第50号土抗



第254号土抗

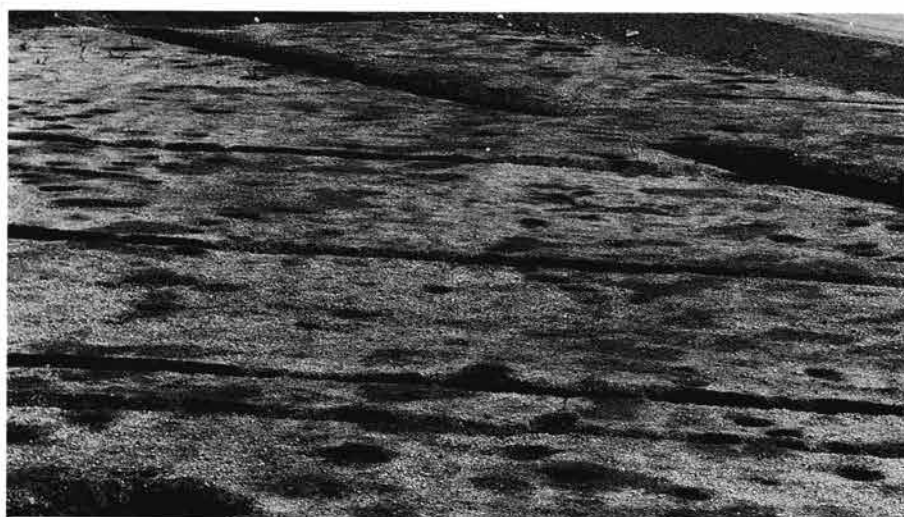


第1号井戸址
(上全景・下床面透水層付近)

図版74



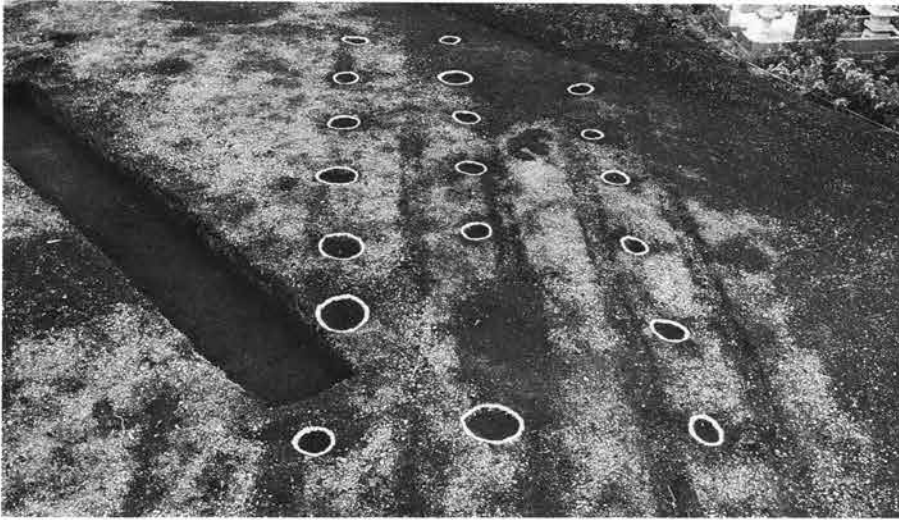
VI層下面D区北西部小型ピット群



V層上面E区東部小型ピット群



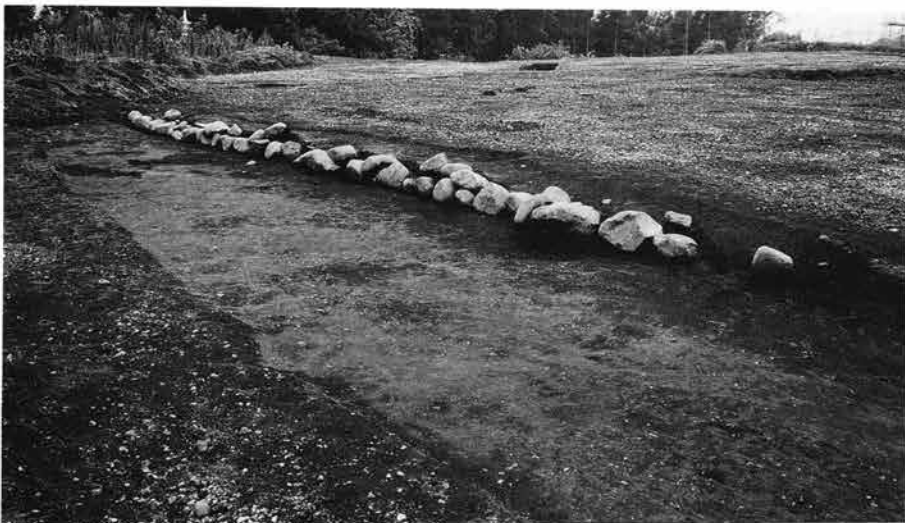
V層上面D区東南部小型ピット群



E区北西部小型ピット群



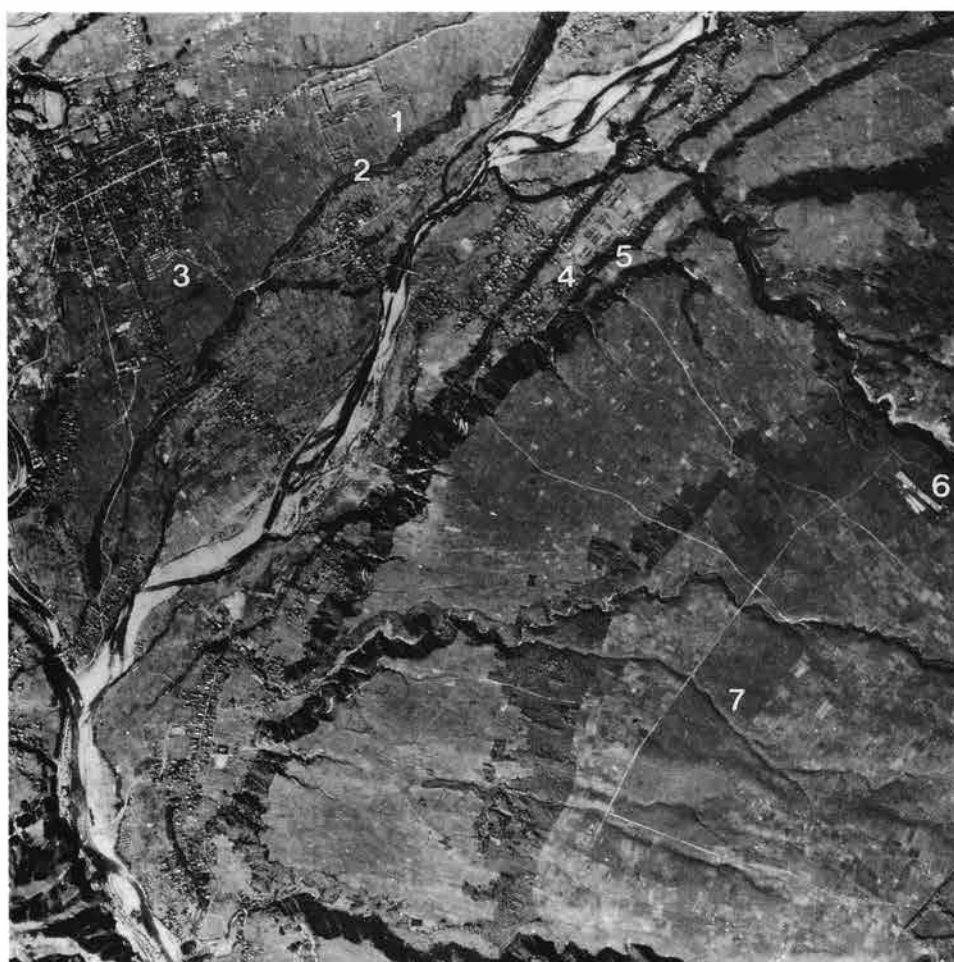
第1号溝南東部石組(手前は第1号サク状遺構群)



第1号溝北西部



第5号サク状遺構群(左手の長い溝は現代のサク)



沼田周辺の軍事施設(昭和22年11月6日撮影、この空中写真は国土地理院発行の「沼田」を使用したものである。)1 沼田営舎 2 沼田陸軍病院 3 将校住宅 4 糸井観測所 5 糸之瀬廠舎 6 射撃場 7 赤城演習場



3住1



3住2



3住3



3住4



38住2



38住3



38住5



38住6



39住1



39住3



40住3



44住1



44住2



44住4



44住3



44住5



44住6

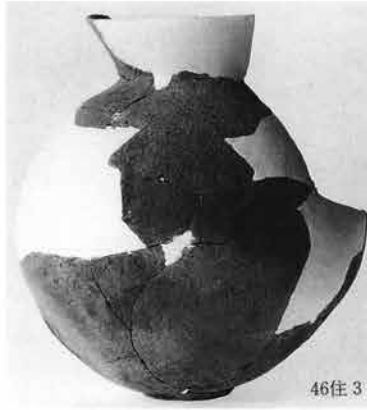


44住7

図版78



46住1



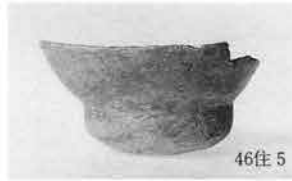
46住3



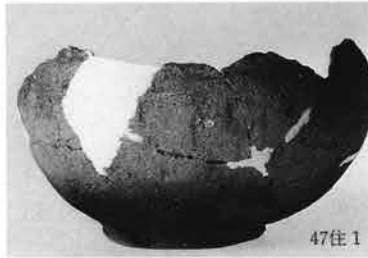
46住6



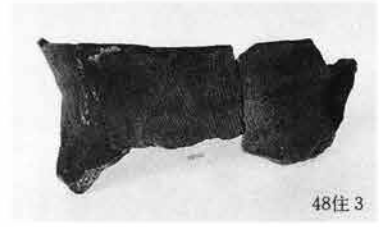
46住4



46住5



47住1



48住3



48住5



48住6



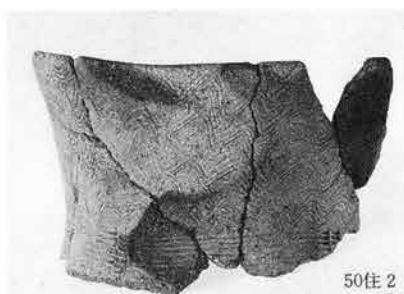
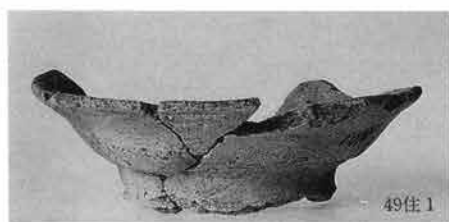
48住10



48住8



48住11



図版80



51住 1



52住 1



52住 2



52住 3



54住 1



54住 2



54住 5



54住 6



54住 7



54住 8



54住 9



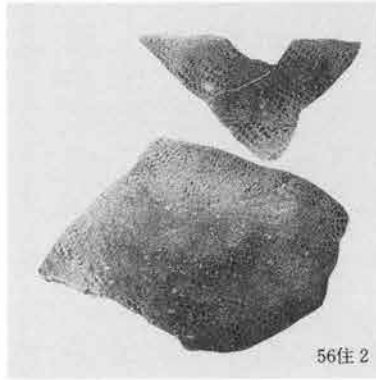
54住 10



54住 13



54住 14



図版82



58住 2



58住 3



58住 6



59住 1



59住 5



59住 6



59住 8



61住 2



61住 3



61住 4



61住 5



61住 6



61住 7



61住 8



62住 1



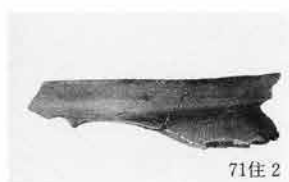
62住 2



62住 3



71住1



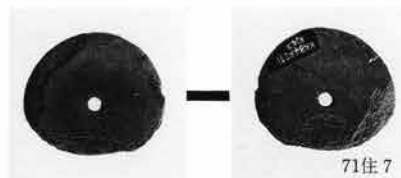
71住2



71住3



71住5



71住7



76住4

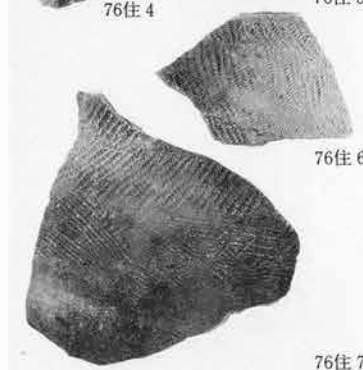
76住5



76住1



76住2



76住6

76住7



87住1



87住2



87住3



87住4



87住5



87住6



101住1



101住3



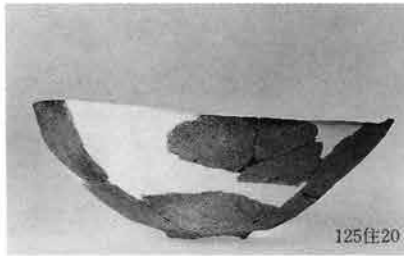
105住2



105住1

図版84





図版86



1



2



3



4



6 グリッド



8 グリッド



9 グリッド



12 グリッド



13 グリッド



14 グリッド



15 グリッド



18 グリッド



19 グリッド



21 グリッド



22 グリッド

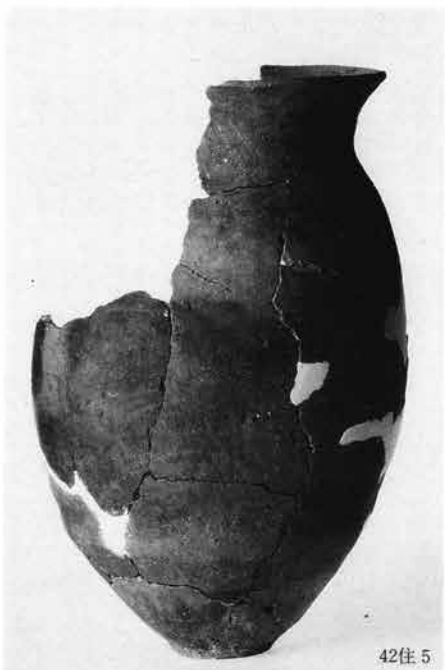


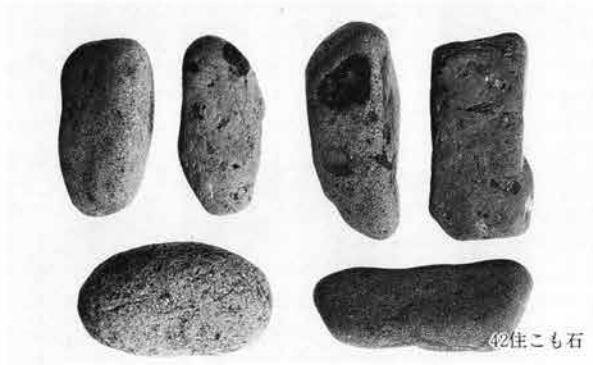
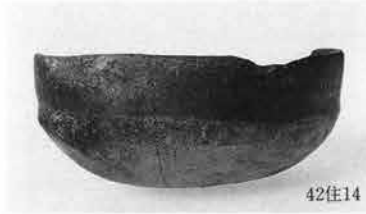
23 グリッド



24 グリッド







図版90





45住10



45住11



45住12



45住13



45住14



45住15



45住17



45住18



45住19

図版92





55住 1



60住 1



60住 2



60住 3



60住 4



60住 5



60住 6



60住 7



60住 8



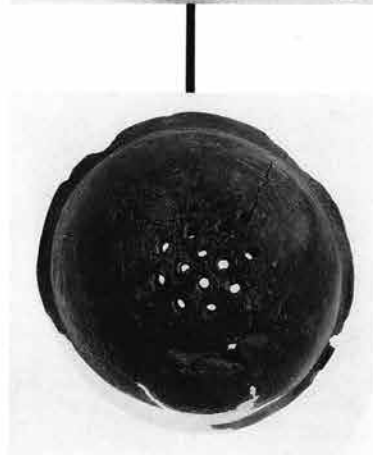
60住 9



60住 10



60住 11



60住 8

図版94



120住1



120住2



120住3



120住4



120住5



120住8



120住7



120住10



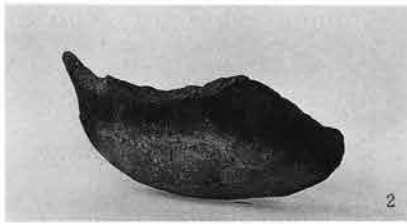
120住11



120住9



120住こも石



図版96



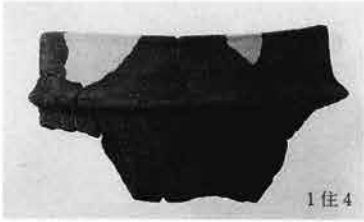
1住1



1住2



1住3



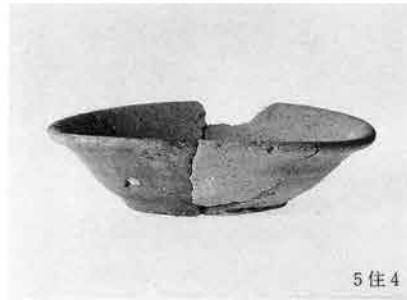
1住4



1住8



5住2



5住4



12住付近



18住1



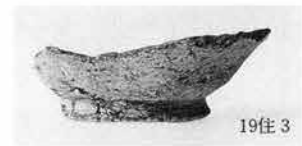
18住2



19住2



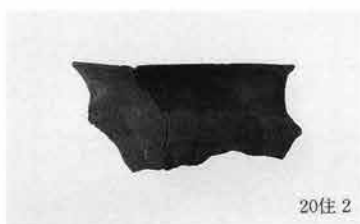
19住1



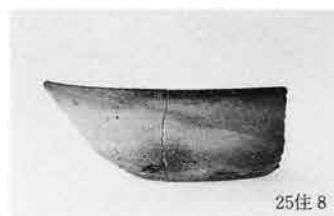
19住3



19住4



図版98





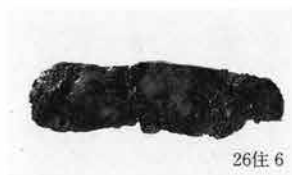
26住1



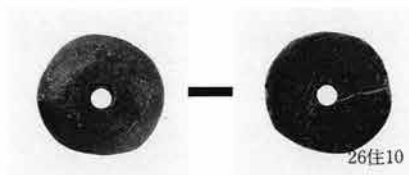
26住2



26住7



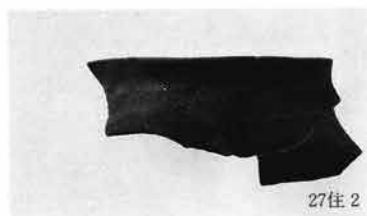
26住6



26住10



27住1



27住2



27住4



27住5



27住11

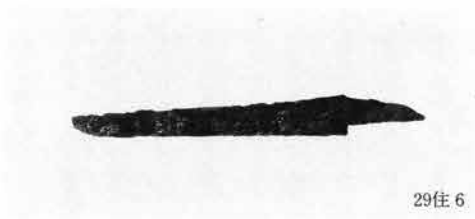
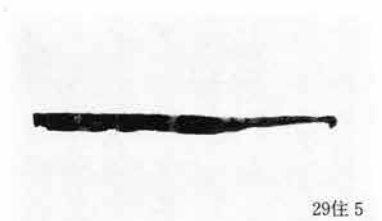
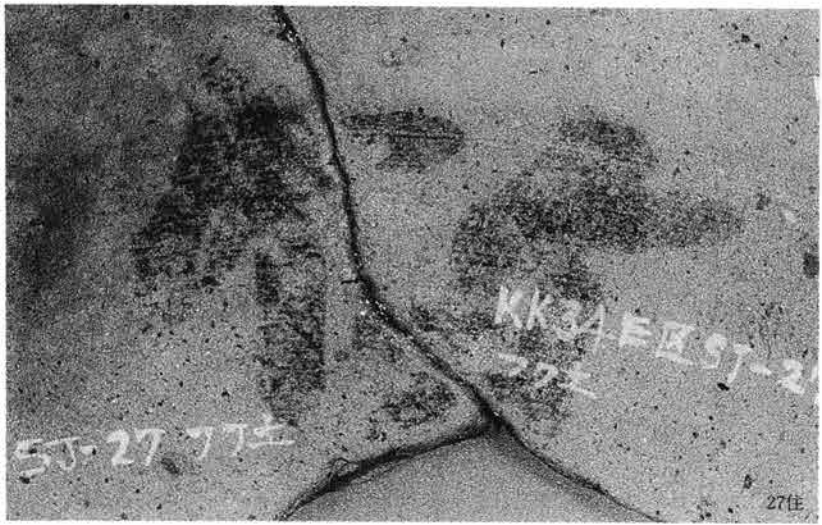


27住7



27住12

図版100





31住 1



31住 2



31住 3



32住 1



32住 2



32住 4



32住 5



32住 7



32住 11



32住 12



32住 13



32住 14



32住 15

図版102



32住22



32住23



32住24



32住25



32住26



32住27



32住28



32住29



33住1



33住3



33住5



33住6



33住7



33住15



33住14



34住1



34住2



34住7



35住4



35住3



図版104



122住1



122住2



122住3



122住4



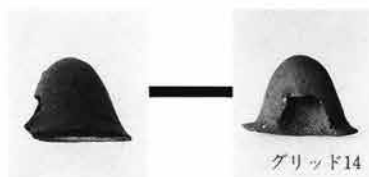
122住5



122住6



122住7



グリッド14



糸井宮前遺跡Ⅰ — 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第8集 —

印刷 昭和60年3月26日

発行 昭和60年3月31日

編集・発行

群馬県教育委員会

群馬県前橋市大手町1丁目1番1号

(0272) 23-1111

群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784の2

(0279) 52-2511

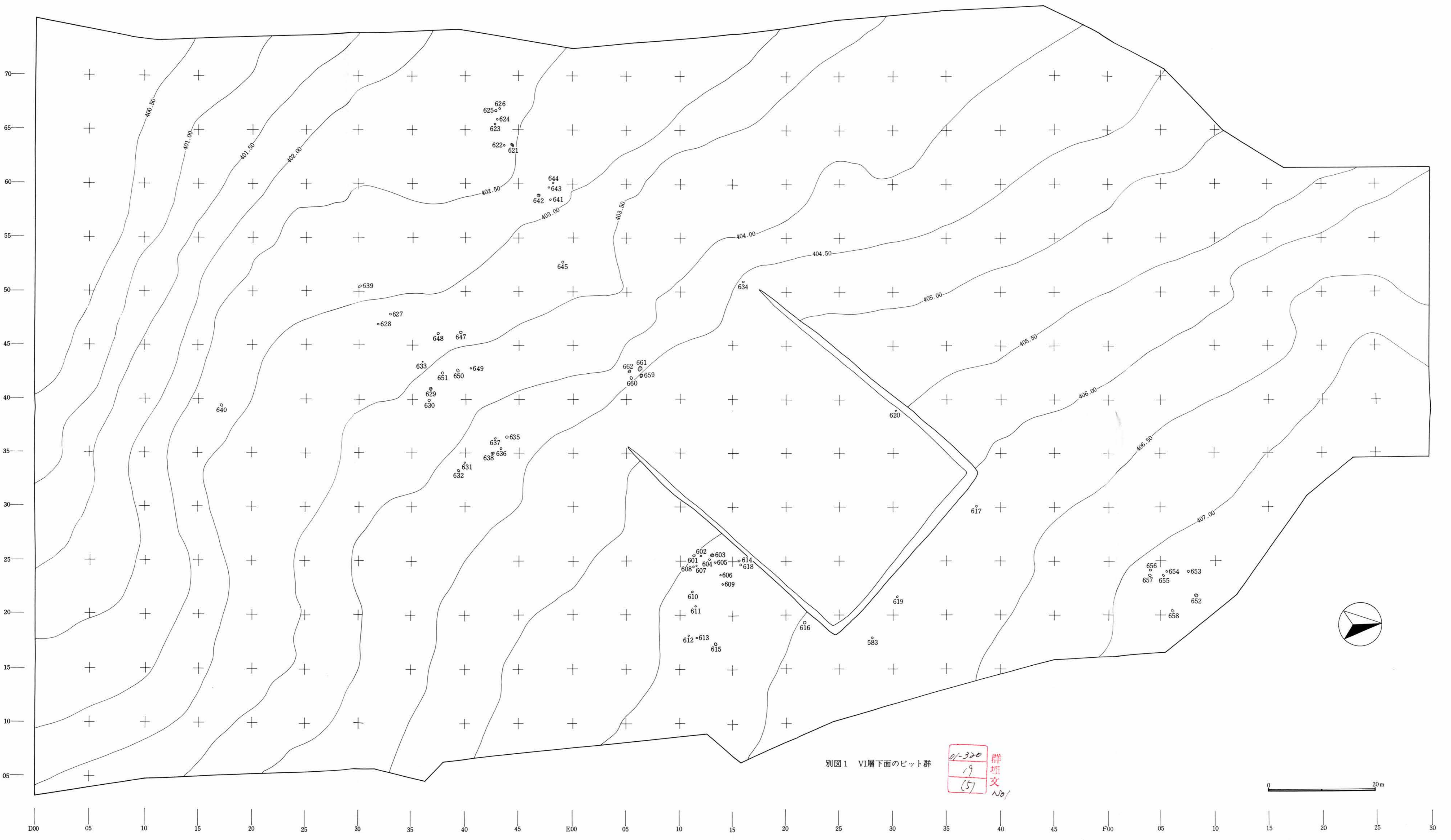
印刷

朝日印刷工業株式会社

河図と板

糸井宮前遺跡 I 正誤表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

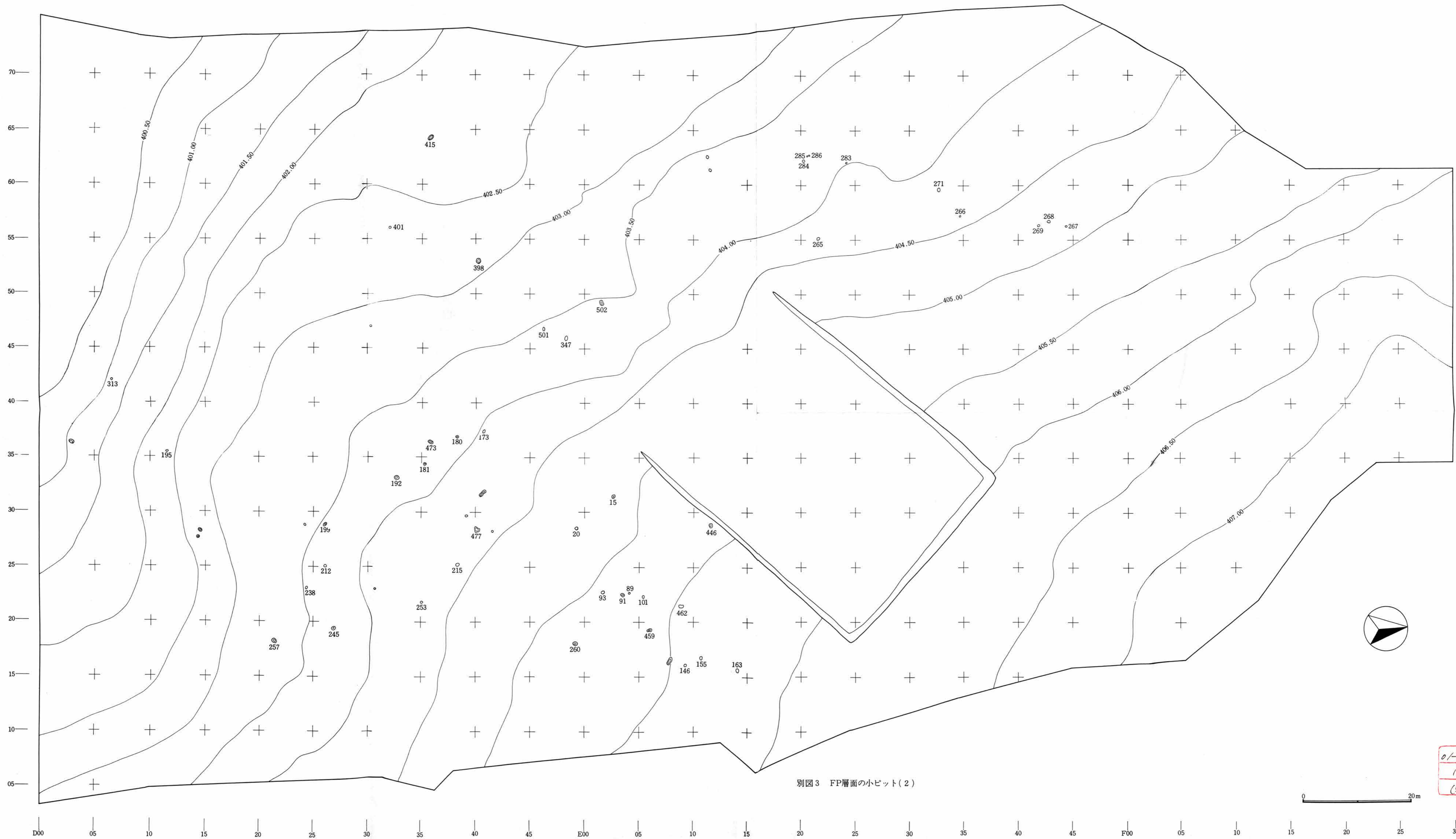
ページ	行	誤	正
P 35	16行目	小量	少量
P 39	15行目	(14)	(13)
P 40	16行目	登(1)	【削 除】
P 53	3行目	10.5cm	10.5m
P 66	20行目	床直より	覆土中より
P 95	71住-1	床下	床上
P141	43住-4	床直	覆土
P223	26住-6	ピット内	カマド
P274	第6 団	4号住	41号住
P278	32行目	委員会	委員会 1981



別図1 VI層下面のピット群

01-320
19
(5)
群埋文
No1

0 20m

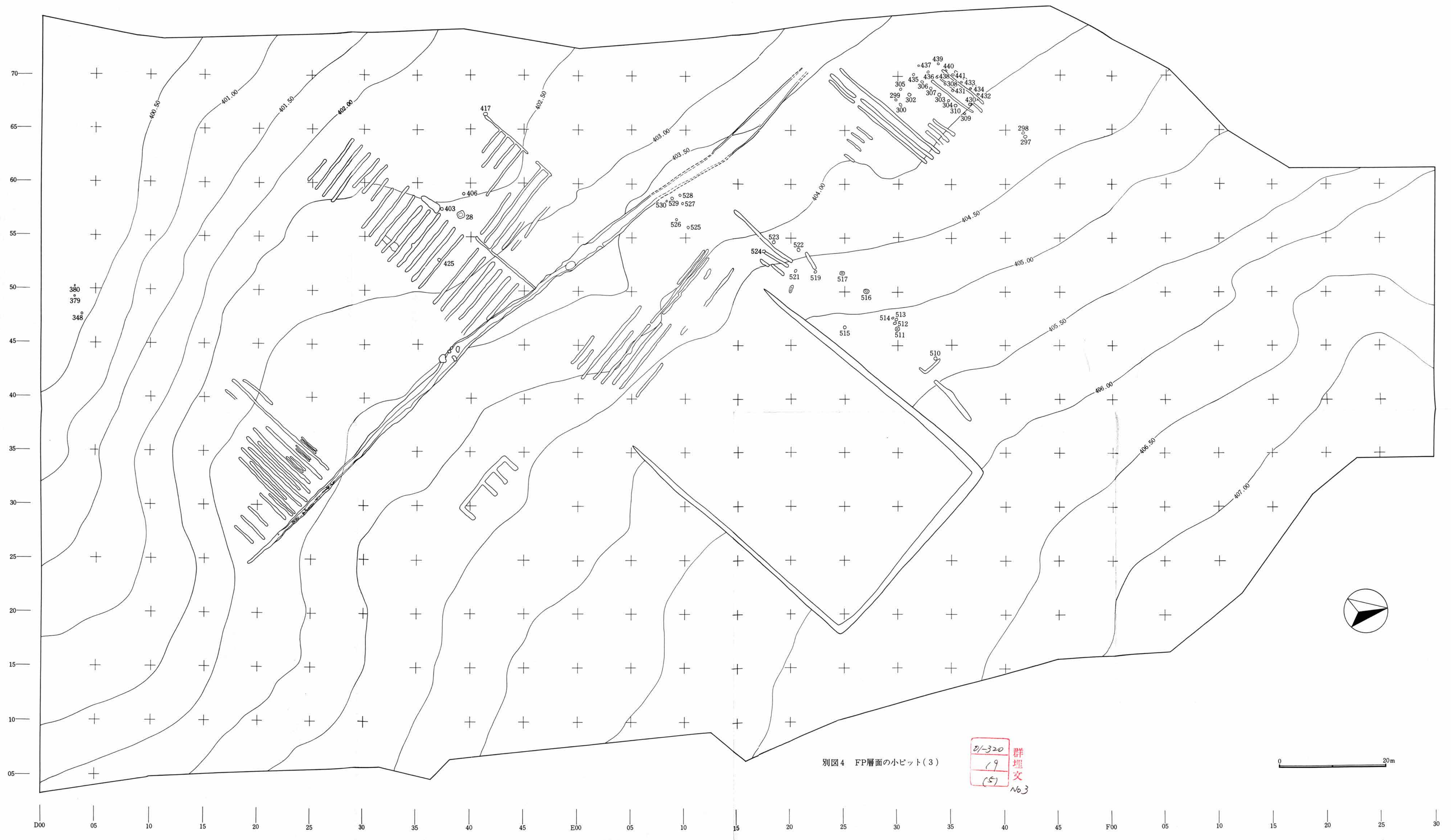


別図3 FP層面の小ビット(2)

0 20m

01-320
19
(5)

群埋文
W04



別図4 FP層面の小ビット(3)

21-320
 19
 (5)
 群埋文
 No.3

0 20m

住居 No.	面積 (㎡)	甕 A	甕 B	甕 C	壺 A	壺 B	鉢 A	鉢 B	甑	椀 C・D	手捏	高杯 A	高杯 B	器台 A	器台 B	椀 A	椀 B	坩 A	坩 B	壺 C	甕 E・甕 D	
56	38.1																					
58	70.4																					
40	32.6																					
46	31.3																					
51	30.1																					
52	30.1																					
41	24.9																					
44	22.8																					
50	18.6																					
57	18.3																					
112	18.0																					
125	22.0																					
47	11.0																					
61	14.6																					
76	13.4																					
87	11.5																					
93	12.5																					
105	9.5																					
39	28.3																					
71	30.5																					
101	28.8																					
108	31.0																					
148	31.2																					
3	34.6																					
38	42.8																					
48	37.8																					
54	39.3																					
119	37.9																					
123	40.2																					
49	49.6																					

01-320
19
(5) 群埋文 no5

別図5 住居址群別土器分類表